大正二年一月三日發行（每月一回一日發行）

中央公論

大正二年一月

新年臨時號

（第廿八年第二號第二百八十七號）

讀者に謹告す

「中央公論」新年號は當局者の忌諱に觸れて其發賣及び頒布を禁止せられたり。依て其忌諱に觸れたる一文——高例有美氏の「斯くあるべき女」——のみを拔き、他は總て新年號と同一の內容を持つて改めて讀者に見ゆることゝなれり、言論及び文藝の取締に關する當局者の意見の當否は今茲には言はず。只廿頁（一三三——一五二）を除くも尙平常の二倍以上にして例年の新年號よりも頁數多く且つ雄篇大作に滿てる本號を闇より闇に葬るに忍びず。茲に此臨時號を發行す。右讀者に謹告す。

大正二年正月　　反省社



中央公論臨時號目次



本號定價金五拾錢　郵稅金四錢

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　京橋元數寄屋町　北隆館
仝　京橋西紺屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢　但淸國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但　新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本鄕西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京市東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし
一郵券代用必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし
一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料）
一受領證請求は必ず返信料金を要す

大正元年十二月卅一日印刷納本
大正二年一月三日發行
（禁轉載）

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

發行所　反省社
振替口座東京三十四番
電話下谷九一九
電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

FRITZ BOEHLE



EUROPA

年頭の辭

年の新たなると共に、明治の時代は去つて大正の新時代は來れり、時と倶に人も新たならざる可らず、否、新時代に處すべき新精神なかる可らず

新精神といふも舊物を破する所以に非ず、我が萬世一系の皇室を戴ける金甌無缺の國體は、其の歴史と共に世界に煌耀せり、之を支持し繼承する國民の血液と精神とは、綿々として萬世に流れて涸れず、唯だ新時代に適應して、能く之を活かしむる、之を新精神といふのみ

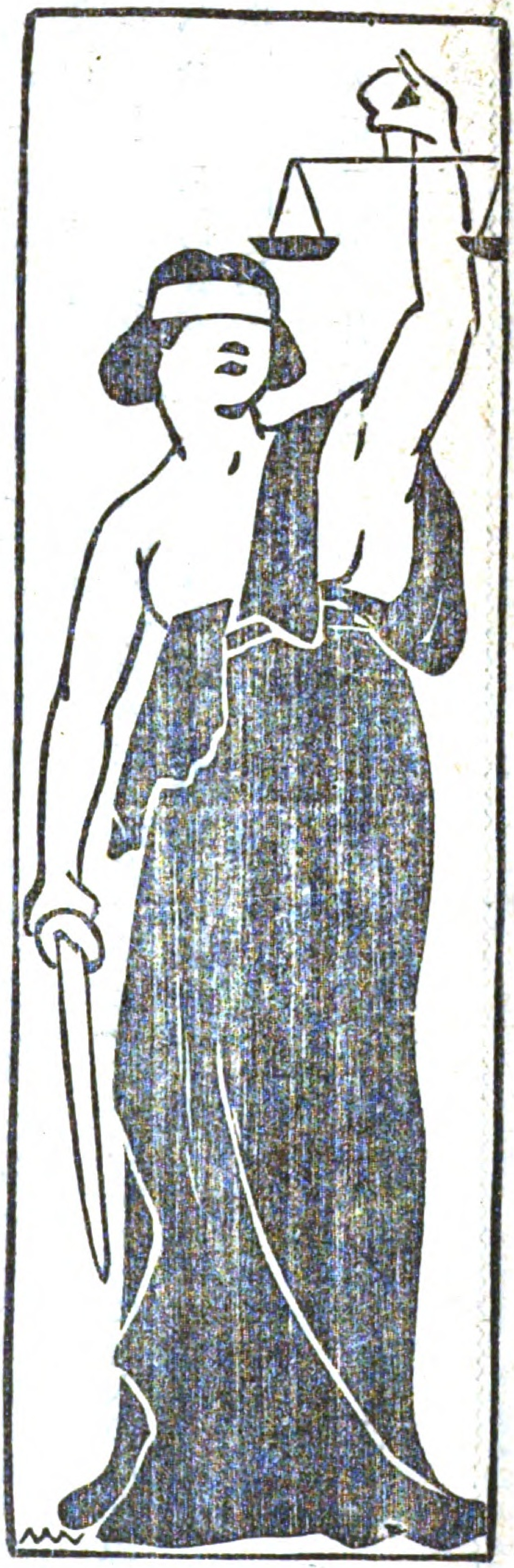
吾人の文壇に立つ二十有八年、顧みて世の徑路を査するに、論調實に幾變遷す、昨是今非、昨非今是、必らずしも律す可らざる也、然れども綸綸の志は毫も變ずるなし、而して一片耿々の心また渝るなし、至誠以て事を視、最も穩健正中を主とするに於て毫も人後に墜ちず、獨立の地歩、また寸時も之を失はず

新春の文壇に登るに方りて、聊か疇昔の志を述ぶ、世上の君子が年と共に吾人の心を諒とし、益々多大の眷顧を與へらるゝは、吾人が君國の宏恩と共に銘して忘るゝ能はざる所、玆に謹みて頌辭を呈す

大正二年正月元旦

反省社諸同人敬誌

中央公論



臨時號

武力無き外交

(一)

外交家は手品師に非ず、如何に巧妙を極むるも、到底無より有を生ずる能はず、換言すれば、武力なき外交は一毛の力だもなし、蓋し武力は本也、外交の妙は此の武力を利用し妙用して、苟くも之を謬まらざるにあり、能ふ可くんば十の武力を利用して十五、二十、三十の効果を收むるに在り。

支那は實に古來外交の妙を極めし國也、巧みに他を爭はしめて己れ獨り其の利を占めんとし、官吏は勿論、其の人民と雖も實に辭令に巧妙なる、他國民の容易に及ばざる所たり、今や其の領土の廣さと世界の第三位に居り、人口の多きと第一位に居り、土地豐沃にして地の利太だ多く、巨然として世界の大

國たるに拘らず、其の外交の何等實効を收むるを能はざるは何ぞや。

露國政府外蒙古の自治を承認するや、支那の官民は擧げて火の如く憤激し、排露會、非買同盟を設け、或は征蒙討露の決議又は勸告を爲し、而して外交當局の爲めに更迭せんとし、大總統亦抗議を提出し、且つ列國に愁訴せるも、一として其の効果なきは何ぞや、露國は支那の抗議又は開戰論を感ずると、耳邊に鳴く蚊虻の聲とも做さゞるは何ぞや、支那には一の武力なければ也、否、有効なる武力なければ也。

支那は大國也、世界有數の大市場也、列國が商工上の大競爭を試むべしと做す國也、然かも如何なる國も、來りて支那の歡心を求め、支那政府と協約又は同盟を締せんと欲するものなきは何ぞや、支那に武力なければ也、支那に有効なる武力を視んと望みがたければ也。

革命以來、南北の兵を合すれば幾んど百萬に餘るべし、其の衆百萬、如何に弱兵と雖も豈其の力なしとす可けんや、然れども多くは是れ苦力の武装せしものゝみ、其の將校中、假令新式練の形式に通ぜるあるも、其の身體を活動するを欲せずして、野外勤務の勞に堪へず、且つ大官以下、文武を通じて役儉を貪ぼり、官給物民物を分ち取るに慣れて、其の習性牢として拔く可らざるものあり、故に支那兵を同盟軍とするも、以て後方勤務をすら托するに足らず、之を托せんとせば、例の役德盜竊を防ぐがため嚴密なる監督を附せざる可らず、是れ列國軍人の以て耐えざる所とす、强ひて之を同盟軍とすれば、一方面を擧げて之を擔當するの外なきも、其の怯弱する、到底獨力を以てしては一方面を擔當する力なし、故に獨逸武官は支那兵を目して『軍裝せる苦力』といひ、英國士官は綽名して『木偶軍隊』とす、是れ

列國中一の進みて支那と協約し同盟するものなき所以とす。

故に支那には眞の外交なし、若しあれば事毎に屈辱し失敗する外交のみ、曾て支那外交の巧妙なるに乘ぜられて、屢々栗を火中より取れる國は勿論、之を傍觀せる他の國々と雖も、今や全く支那の情僞を看破し得たり、是れ外交上全然支那を相手とせざる所以にして、而して其の原由を尋ぬれば、畢竟其の武力なきにあるのみ。

（二）

バルカン半島問題のため、今や墺露の兩國互ひに動員し、互ひに軍隊を國境に集中しつゝあるは他なし、武力なき外交は何の效だも擧ぐるを得ざれば也、抑も墺匈國は露と較して小弱いふに足らず、唯だ其の背後に獨逸あり、伊太利あり、露能く佛國と協力するも、未だ俄かに之を壓すると能はず、蓋し戰時の露國兵四百五十萬、佛國兵二百十萬なるも、露の東亞にある軍隊は俄かに移して歐洲に用ゆ可らず而して戰時の墺匈國兵百八十萬、獨逸兵四百萬、伊太利兵の百萬を合すれば、露未だ確たる勝算を有すると能はず、是れ露墺兩國が屢々發せんと欲して發する能はざる所以にして、而して外交の妙また茲に存する所以ならずや、若し單に外交のみを以て決するを得ば、露墺兩國豈動員集兵を敢てす可けんや。

吾人は此の見地よりして、我が國も亦大に武力を具備するの必要を感知せざる能はず、支那問題の解決に際して、我が外交をして全然其の主たらしめ、我が一語一句をして九鼎大呂より重からしめんと欲せば、素より大なる武力を有せざる可らざれば也。

（三）

近時國防を論ずるもの、露國と對應するに、我れ一壘を築けば彼れ亦二壘を築きて、到底相較するを能はずといひ、且つ我が武力增進を以て、彼我の親善關係を阻害する所以なりと爲すに似たり、然れども露國の大を以てするも、東方亞細亞に於ける武力には、自から制限なきを能はず、第一は其の輸送力也、第二は其の用兵の地域也、黑龍江鐵道完成せば、露國は能く九十個師團の兵を東亞に輸送し得べしといへり、然れども其の東亞地方の貧寒なる、到底九十個師團の大兵を給養する物資なき也、乃ち之をも歐露に仰がざるを得ざるが故に、九十個師團全部を出兵し得るや否やは疑問ならざる可らず、然り、少くも若干の割引を爲さゞる可らず、且つ地勢よりいふも、其の用兵の區域に制限あり、物資輸送の能力にも亦制限あり、一時に七八十個師團の兵をして戰線に就かしむるとは不可能ならん、果して然らば戰時四百萬以上の大兵を擁する露國も、東亞に於て、長鞭殆んど馬腹に及ばざるを奈何ともす可らず、强弩の末竟に魯縞を穿たざるの憾あるを奈何ともす可らざるのみ、即ち我が武力到底彼れと相較する能はずとするは、實際に迂なる机上論に過ぎず、且つ現今の外交關係は、武力あるものに非ざれば敬重せらるゝこと能はず、露國が我れと協約して手を握れるは、我が武力實に輕侮す可らざるものあるが故ならずや、苦し我れにして現在の狀態に恬然し、彼の黑龍江鐵道成るも、別に備ふる所なくして、彼我の勢力に著るしき懸隔を生ぜんか、彼れ豈我れを敬重すること今日の如くならんや、支那に對しても、彼れは唯だ彼れの欲するがまゝにして、毫も我と協商せざるべし、我れを侮るの極は、我れに冠するに幾

多の難題を以てし、聽かれずんば則ち武力を以て我が勢力を蹂躙し、我れを大陸以外に驅逐せざれば已まざるべし。

故に我れは露國との平和を永久に持續し、且つ進んで協約より同盟に移らんとせば、少くも露國と同等の武力を有せざる可らず、然り、東方亞細亞の方面に於て、彼れと對應して相下らざる武力を備へざる可らず、我が國防の方針は正さしく玆にあらん、吾人の武力擴張を主張する所以、また唯だ玆に存す。

（四）

我れは好むも好まざるも、既に朝鮮を併合して純たる我が領土と爲し、南滿州に拔く可らざる利權を立てしに止まらず、内蒙古を我が勢力範圍たらしめんとす、是れ我が國の地位をして、半ば大陸國たらしめたるもの也、且つ支那の形勢をして、我が國の自衞に便ならしめて、以て我が地位の安全堅實を支持し、更らに進んで我が利權を喪亡せざらんとせば、支那問題解決に際しても、我れは必らず其の主人公たる大抱負なかる可らず、是れ我が國家の方針主義ならずや。

然るに世の軍事を談ずるもの、露國の南侵を滿韓に防禦するには、間嶋若くば北韓に防禦線を張らば、十個師團若くば六七個師團にして綽々餘裕ありといへり、玆に滿韓防禦といふも、是れ純乎たる朝鮮のみの防備也、彼等は果して南滿州に於ける我が利權を放棄する乎、内蒙古を惜むに足らずとする乎、抑もまた支那問題の解決の如きは、擧げて露國に一任せんと欲する乎、是れ國家の方針主義に於て、

根本的に相異なるもの也、且つ我れ徇に朝鮮のみに退嬰せんとするも、支那滿州悉く折れて露國の勢力に屈せば、朝鮮また全きを望む可らず、事大思想の容易に拔けざる朝鮮人は露國の勢力に慴伏して内より露國に響應すること、素より防ぐ可らざれば也、攻守の勢ひ徇に異也、守禦して難攻する能はずんば朝鮮人の内より叛應すること、到底止む可らざれば也、故に彼の論者の主張は、また併せて朝鮮をも喪ふを辭せざるものと解せざる可らず、少くも我が半ば大陸國たる現在の地位を一擲すべしとするもの也、思ふに是れ亦一家言也、唯だ十萬の生靈を損じ、十餘萬の巨費を糜したりし我が國民の多數は、果して之に同意すべきや否や、今日武力の擴張資を惜むが爲めに、結局十萬の生靈を殞じ、十餘億の巨資を糜したりし大事業をして、一浮漚に歸せしめんとする乎、屍を大陸に埋め、魂を滿州に彷徨せしめし先人をして、空しく不祀の鬼たらしめんとする乎。

（五）

英國が進んで我れと同盟せし所以は何ぞや、此の同盟が我が外交の樞軸たる所以は何ぞや、我が武力實に大に恃むに足るものあるが故ならずや、我が武力の恃む可らざる、幾んど支那と大差なくんば、英國豈進んで我れと同盟せんや、武力なき外交の恃む可らざる明らかなるのみ。

更に想へ、日露媾和の頗ぶる我が國民の豫期に反したりしは、我が外交の拙なりしが故に非ず、露は敗戰に屈せずして、更らに歐露より新鋭を送るの餘力あり、而して我れは既に四十歲を超えし兵士をして戰線に就かしめざるを得ざらんとし、且つ物資永く給するを得ず、奉天以北、長春を屠り、哈爾賓を

擒くには、實に大なる努力を要するものありたれば也、更に平たくいへば、我が武力殆んど其の極點まで竭きて、已に大なる餘力なかりしが故ならずや。

外交の背後には必らず武力なかる可らず、武力なき外交は書生の空論と等し、支那今日の外交の全く價なきを看るものは、我が外交をして大外交たらしめ、以て樽俎の間に能く國威國權を發揚せしめんと欲せば、素より大なる武力を缺く可らざる也、幸ひにして我が國の地位亞細亞の東方に偏在し、列强の兵を受くること多からず、之と拳應すべき武力を備ふること、我が國民の負擔力に於て、斷じて不可能に非ず。

我が財政及び對外經濟

(一)

近時我が租税の賦課過重にして、民力必らず休養せざるを得ずと做すもの多し、是れ果して事實なるべきや否や、吾人は彼の身に錦繡を纏ひ、一族共に宏屋に住み、祖父先の思議する能はざりし程の華美を爲しながら、口にのみ國民の生計難を唱ふるが如き僞君子の語談に重きを置く能はず、先づ自から進みて我が國民負擔の實際と、我が經濟、殊に對外關係の經濟狀況一班を窺はんと欲す。

日本政府の現に有する所の國債を、其の償還すべき年期と共に其の額を左に擧示せん。

償還滿期年次	償額
大正元年	三一九、四五四半（円）
仝 三年	二一九、四五四半
仝 五年	二一九、四五四半
仝 七年	二一九、四五四半
仝 九年	二一九、四五四半
仝 十一年	一、〇〇〇、〇〇〇
仝 十五年	九、七六三、〇〇〇
仝 十九年	二四四、〇七三、〇四七
仝 卅五年	二二四、五四六、〇七一
仝 四十八年	二、一八五、六六五〇
仝 五十年	五六、二七六、七〇〇
仝 五十二年	二九、九七六、四〇〇
仝 五十七年	二七六、一三五、二〇〇
合計	二、五五五、四一八、七七二

償還滿期年次	償額
仝 二年	二九、七三四、五〇四半（円）
仝 四年	二一九、四五四半
仝 六年	二一九、四五四半
仝 八年	二一九、四五四半
仝 十年	四、一二四、六五四半
仝 十四年	五七五、九八九、〇七八
仝 十七年	一一六、八二五
仝 二十三年	二五九、九六五、六〇〇
仝 四十一年	九七、六三〇、〇〇〇
仝 四十九年	三〇、五九七、七〇〇
仝 五十一年	四二六、三〇〇、一〇〇
仝 五十三年	三、六〇五、八〇〇
仝 五十八年	二八一、五四二、八〇六

二十五億五千五百四十一萬八千七百七十二圓にして、之を五十八ヶ年間に分割すれば、一年平均大約四千四百〇五萬圓に當る、故に國債還償基五千圓を間違なく積立て行かば、遲くも大正四十五六年頃に償還し得べし。我が日本の國力よりいへば、斯の如き公債は毫も恐るゝに足らざるなり。

（二）

我が日本政府の所有する財産額は何程なりや、之を正當に算出せんと欲せば、中央及び地方に於ける各官衙の敷地建物を始め、其の所有諸物件を擧げざる可らず、然れども官衙の敷地建物は到底金錢に換

ゆる能はず、而して其の額の莫大なる想像に餘りあり、例せば司法省の所有する全國裁判所及び附屬廳署、監獄の地所建物を首め、陸軍の所有する兵舍敷地、建物、練兵場、海軍の有する軍港の敷地建物、遞信省の全國に有する地所建物等のみを合算するも、裕に數十億を算すべければ也。

然れども之なければ政務軍事一日も擧ぐる能はず、故に之を計數の外に措きて、左に見積り得べき國有林野を左に擧示せん。

保安林	三五八、五六六町四反
供用林	一〇、四三一、八八四町四反
部分林	七一、一二七町八反
計	一〇、八六一、五七八町六反
原野	二四六、五六九町七反

（原野には北海道を除き、林野とも臺灣朝鮮樺太を除く）

右の森林一町歩を平均二百圓とするも、此の價格二十一億七千二百三十一萬圓にして、三百圓とすれば三十二億五千八百四十七萬餘圓となるべく、優に國債を償還して餘りあり。若し原野を一町歩百圓とすれば、此の價亦二千四百六十五萬餘圓となるべし。

更に朝鮮及び豐富なる臺灣の森野並に鑛山等を合算せば、其の價殆んど測る可らざる也。

（三）

更に轉じて國庫所屬の特別資金及び資本の現在高を一瞥すべし、是れ四十三年度現計によれるものなり。

資金之部

帝國鐵道積立金	一、一〇九、三一〇円
大藏省預金利子仕拂元金	二七、八四六、二四五
艦艇補充基金	四六、八二二、九三二
教育基金	一〇、七五九、二五五
海軍工廠資金	九、五〇〇、〇〇〇
森林資金	一一、九〇四、九〇八
臺灣鐵道用品資金	四五〇、四八九円
貨幣整理資金	一五、八四六、二八二
災害準備基金	一二、五〇九、〇六二
陸軍營繕費補充資金	三九〇、一二八
大學及學校圖書館資金	一四、七八九、五九四
合計	一五一、八八六、二〇四

資本之部

造幣局	三、三五二、五四七円
專賣局	一九、四一四、八六八
大阪砲兵工廠	二二、五九〇、七五九
海軍採炭所	六八五、八〇七
帝國鐵道	八二三、一九六、五〇七
韓國森林	一、一六二、五〇六
電信燈臺用品製造所	二四二、五七三
印刷局	三、九四五、〇四二円
東京砲兵工廠	一八、二七四、一二九
千住製絨所	二、八二〇、六六〇
製鐵所	三三、二五二、六六〇
韓國鐵道	九五、八三六、〇七二
郵便爲換貯金及取立金据置運轉資本	三一一、五〇〇
合計	一、〇二五、〇八五、六二八
資金資本總計	一、一七六、九七一、八三一

即ち政府事業の資本と目すべきものゝみも十一億餘萬圓に上り、之に臺灣鐵道、南滿州鐵道等の政府資本を加算すれば、裕に十二三億に達すべし、況んや電信、電話を始め、郵便に對する資金並に森林經營資金等全く之に加算せられざるものあるをや、之をも合算して、政府所有の資本を嚴密に計算すれば必らず二十億を超ゆること言を俟たず。

(四)

更に日本政府の歳入を一瞥せよ、明治四十五年度（大正元年度）に於ける租税收入と他との收入とを分別するに左の如し。

租税

田租	四六、八一八、二一七円	畑租	一〇、五五八、四七五円
宅地租	一六、一三三、六六四	雜地租	一、八五八、九一九
其他地租	三八、七一九	所得税	三二、七二五、二八二
營業税	二四、五九五、三六五	相續税	一、九四九、〇八七
通行税	三、五七八、九三三	鑛業税	一、九七八、一三九
兌換銀行券發行税	八六〇、二八四	酒造税	八五、六七二、三一〇
麥酒税	一、五六四、二七〇	酒精及酒精含有飲料税	一、一七四、七二二
沖繩縣酒類出港税	七〇、二八〇	醤油税	四、六三四、八四五
砂糖消費税	一三、七八九、七九〇	織物消費税	一八、六四三、七九一
石油消費税	一、九九八、六二八	賣藥營業税	二二五、九七〇
取引所税	三、六二五、〇〇三	關税	四九、八九二、二〇七
噸税	五七七、三三九	煙草專賣收入	五一、三〇〇、〇四三
鹽專賣收入	一〇、六七一、三一八	樟腦專賣收入	一、六一一、〇五一
印紙收入	二七、一七三、九六二	計	四一二、二七〇、六一三

即ち租税收入と目すべきは、四億一千二百二十七萬餘圓のみ、更に此の租税以外の收入を視るに左の如し。

租税以外の收入

印刷局益金	四九五、三九〇円	東京砲兵工廠	一、一五五、三五五円

大阪砲兵工廠	一、〇二八、一一二	千住製絨所	四五二、二〇二
海軍採炭所	四三、一〇〇	製鐵所	四、九七六、五六〇
雜收入	三、〇五二、五二九	預金特別會計ヨリ編入金	一二、一七〇、六六七
大藏省預金利子	三、一三二、一六五	朝鮮總督府特別會計ヨリ繰入	二、三八七、三六四
朝鮮總督府	二五、五五八、三〇五	臺灣總督府特別會計ヨリ繰入	三、四七九、七九六
臺灣總督府	三九、二六〇、七一三	淸國事件費資金受入	二、六一一、五八九
官有物拂下代	四、五七九、六三一	雜收入	四、八〇一、九〇七
港灣設備納付金	二〇〇、〇〇〇	公債募集金	一五、一八一、五四〇
森林資金	二、八二九、三八〇	陸軍營繕費補充資金繰入	三七三、〇〇〇
艦艇補充資金繰入	一二、〇〇四、八四七	貨幣整理資金繰入	四〇、〇〇一
治水資金繰入	一五、一六二、三一六	獻納金	九四、〇〇〇
前年度繰入金	一七、〇五二、一一七	在外專管居留地收入	三六一、四九五
教育基金	一〇、三一一	鐵道資本勘定	八四、五四〇、四五七
鐵道收益勘定	一〇〇、〇九二、六五八	鐵道積立勘定	一、六〇九、三一〇
朝鮮鐵道用品資金	一六、八二一	朝鮮森林資本勘定	九三九、四〇六
仝收益勘定	一、一一三、九六二	朝鮮電信及濟生院	四八二、〇七六
臺灣鐵道用品資金	一〇〇	關東都督府	二、一二三、三八七
樺太廳	一、六〇八、五二六	學士院獎勵金	八、〇八三
東京帝國大學	六五一、〇六一	仝資金部	一〇一、四二〇
京都帝國大學	二七一、三二七	仝資金部	二、二三二
東北帝國大學	一五五、〇二五	仝資金部	五、五八六
九州帝國大學	二五四、一八九	仝資金部	三八、一二四
學校及圖書館	一、〇四〇、八四七	仝資金部	四六、七九〇
造幣局	二一九、一〇九	計	四八一、三〇〇、五三八

即ち政府の純歳入總計八億九千三百五十餘萬圓の內、租稅收入は四億一千二百二十餘萬圓のみ、他の

四億八千百三十萬餘圓は營業其の他の收入にして、過半は全く租稅以外の收入なりとす。

（五）

我が同盟國たる英國政府の歲入は、一億六千二百八十四萬磅にして、此の內租稅收入は下の如し。

關稅	二九、九四〇、〇〇〇磅	營業稅	三五、六一〇、〇〇〇磅
動產不動產稅等	二二、七五〇、〇〇〇	證印稅	八、五〇〇、〇〇〇
地租	八〇〇、〇〇〇	家屋稅	一、九五〇、〇〇〇
所得稅財產稅	三七、六〇〇、〇〇〇	計	一三七、一五〇、〇〇〇

外に郵便電信電話及び官有地利子雜收入等の合計は二千五百六十九萬磅（二億五千六百九十萬圓）にして、全歲入一億六千二百八十四萬磅（十六億二千八百四十萬圓）に比すれば、實に其の五分の一に過ぎず。

佛國政府の歲入總額四十億六千二百十二萬二千五百法（十六億二千四百八十四萬九千圓）の內租稅收入は左の如し。

直稅	五九三、三五〇、七五〇法	登錄稅	六八〇、三六八、三〇〇法
證印稅	二〇一、七〇六、三〇〇	取引所稅	一〇、三六七、八〇〇
所得稅	一〇〇、四八一、〇〇〇	關稅	五〇五、九一九、〇〇〇
間接收入	六二二、一一三、〇二五	砂糖稅	一五九、一八三、九〇〇
煙草專賣	四七六、八一一、六〇〇	燐寸火藥	五八、三九二、一〇〇
計	三、四〇八、五九三、七七五		

即ち郵便、電信、電話、鐵道、官有地、山林、雜收入、領地收入等の租稅以外のものは六億四千三百

五十二萬八千七百二十五法（我が二億五千七百一萬一千四百九十圓）にして、全歳入の十分の一に過ぎず。

露國政府の全歳入二十五億九千一百六十八萬七千八百八十留（一留は我が約一圓に當る）の內、純租税收入は左表の如し。

地租山林税	六七、八〇四、三八九留	營業税	一〇七、三三七、一〇〇留
資本税	二三、一〇五、〇〇〇	酒造税	四〇、二二三、四〇〇
煙草税	六二、〇七六、五〇〇	砂糖税	一二四、九〇〇、〇〇〇
石油燐寸税	五九、〇六〇、九五〇	關税	二八四、〇[illegible]
證印税	七四、六〇〇、一〇〇	讓與税	三四、六七五、〇〇〇
通行税	四三、三三七、八九八	計	九二一、一三〇、九二七

租税以外の收入は左の如し。

官業收入	八〇九、六二二、二五〇留	官有財產收入	七〇三、三八〇、三八八留
官有地拂下代	一、四八〇、八二〇	領地農民上納金	七二二、七〇〇
雜收入	一〇一、二二三、二〇六	諸收入	一五、五〇三、一九三
露西亞銀行貸付金	二、〇〇〇、〇〇〇	臨時諸收入	九、六二四、三八三
計	一、六七〇、五五六、九四三		

獨逸政府の全歳入は二十八億五千一萬四千馬克（十四億二千五百萬七千圓）にして、此の內純租税と看るべきものは左の如し。

關税及消費税	一、一五七、八〇三、〇〇〇馬克	證印税	一〇〇、一二九、〇〇〇馬克
計	一、二五七、九三二、〇〇〇		

即ち租税は十二億五千七百九十三萬二千圓（我が六億二千八百九十六萬六千圓）にして全歳入の七分の三に當る。

伊太利政府の全歳入は、二十三億二千五百四十三萬五千百四十九リラ（我が約九億三千十七萬四千六十圓）にして、此の內租税は下の如し。

地租	八三、一一六、〇〇〇リラ	所得税	二六六、八七五、七〇〇リラ
家屋税	九七、〇〇〇、〇〇〇	相續税	三九、〇〇〇、〇〇〇
登錄税	七九、〇〇〇、〇〇〇	證印税	七〇、〇〇〇、〇〇〇
其他印税	八八、二〇〇、〇〇〇	消費税	一五一、〇〇〇、〇〇〇
關税	三〇六、五〇〇、〇〇〇	入市税	五一、六六五、二五九
煙草專賣收入	二七三、〇五〇、〇〇〇	鹽專賣收入	八〇、〇〇〇、〇〇〇
計	一、五八五、四〇六、九五九		

鐵道郵便電信其の他の收入は七億四千二萬八千一百九十リラ（約二億九千六百一萬一千二百四十六圓）にして、租税は實に全歳入の三分の二に當れり。

米國中央政府の全歳入は八億八千三百五十萬七千百二十一弗（約十七億六千七百一萬四千二百四十二圓）にして、內租税收入は左の如し。

關税	三〇〇、七一一、九三四弗	內國税	二四六、二一二、六四四弗
計	五四六、九二四、五七八		

即ち五億四千六百九十二萬四千五百七十八弗（我が十億九千三百八十四萬九千百五十六圓）にして、全歳入の六割に當れり。

右諸國と我が日本とを比較して、試みに左の一表を作らん、讀者願くば精視せよ。

	租税	租税外收入
露國	九二一、一三〇、九三七円	一、六七〇、五五六、九〇三円
獨逸	九二八、九六六、〇〇〇	七九六、〇四一、〇〇〇
日本	四一二、二七〇、六一三	四八一、三〇〇、五三八
米國	一、〇九三、八四九、一五六	六七三、一六五、〇八六
伊國	六三四、一六二、七八四	二九六、〇一一、二七六
佛國	一、三六七、四三七、五一〇	二五七、四一一、四九〇
英國	一、三七一、五〇〇、〇〇〇	二五六、九〇〇、〇〇〇

我が日本政府の財政形式は、租税の官業收入其の他より少き點に於て、頗ぶる露獨兩國に近しと謂べし、而して此の事實は租税の比較的に少き一證ならずんばあらず。

更に前記六ヶ國の現に所有する國債額を一瞥すれば左の如し。

佛國	一二、一五五、八六三、〇九〇円
露國	八、八三五、八八四、一九一
英國	七、五四一、二一三、〇九〇
米國	五、二七九、〇九二、四八二
	(外に州債四六九、八一八、〇〇〇圓を始め地方債三、七二九、九五六、〇〇〇圓の多額を有す)
伊國	五、二二二、九八四、六〇〇
獨逸	二、七七六、七五〇、〇〇〇
日本	二、五五五、四一八、七七二

我が日本の國債は尙ほ甚だ多からずと稱して可也、此の事實を眼中に措かずして、徒らに我が財政の

前途を悲觀するは愚に近からずや。

(六)

吾人は更に轉じて外國關係上の我が經濟狀態を一見せんと欲す、即ち先づ我が國に於て、外國より吸集すべき正貨額を査するに左の如し。

外國より收入すべき分

(一) 明治四十四年輸出貿易額　四四七、四三三、八八八円

(二) 滊船會社收入　一五、七〇二、七一六

此の項は各滊船會社が外國より收得する乘客貨物の運賃等より雇員たる外國人に支拂ふ給與及び外國より購買する所のものを差引きたる收入なり其の内譯左の如し。

日本郵船會社	六、六五九、五七九円	
東洋滊船會社	一、五四三、一三七	
大阪商船會社	二、〇〇〇、〇〇〇	(推定)
日淸滊船會社	三〇〇、〇〇〇	
社外船	五、二〇〇、〇〇〇	(推定)

(三) 貿易業純益　八、六五一、七三七

同十四年貿易九億六千百廿三萬九千五百九十三圓の六割を本邦人取扱と看做し其の純益一分五厘とす。

(四) 國外事業及び貸付收入　二、六六〇、〇〇〇

我が海外投資及び貸付額は左の如し。

滿州	一五、〇〇〇、〇〇〇	北支那	四、〇〇〇、〇〇〇
漢口	二、〇〇〇、〇〇〇	上海	五、〇〇〇、〇〇〇
南支那	四、〇〇〇、〇〇〇	南洋	三、五〇〇、〇〇〇

布哇　二、〇〇〇、〇〇〇　米國　五、〇〇〇、〇〇〇

計　四〇、五〇〇、〇〇〇

右の五分利並びに外國に於ける賣買による利益を六十三萬五千圓として加算す。

(五) 國債及有價證券利子　一、五五〇、〇〇〇

清國債券を始め各種借款外國公債總計三千百萬圓の五分利。

(六) 銀行收入　六、〇〇〇、〇〇〇

正金銀行外國爲換益金五百六十八萬圓(明治四十三年度)及び臺灣、住友、第百銀行等の外國爲換益を合計す。

(七) 保險收入　一、一七五、〇〇〇

內地會社の輸出品保險及び海外に於ける各種保險の差引純收入

(八) 南滿州鐵道收入　一、九三七、〇〇〇

政府及び株主に配當百十二萬圓並びに社員給料の內內地消費額を加算す。

(九) 移民及出稼人收入　二〇、二六五、〇〇〇

遞信省外國爲換課扱海外より送金一三、四五〇、〇〇〇　八千圓の七割七分卽ち　一〇、〇九四、〇〇〇

正金銀行海外定期預金爲換信用狀年額　三、五〇〇、〇〇〇　仝銀行送金爲換(布哇米國より)　五、二八二、〇〇〇

仝(秘露より)　一八九、〇〇〇　仝(其他より)　二〇〇、〇〇〇

移民携帶金兩替　二、〇〇〇、〇〇〇

(十) 外國艦船の內地消費額　一三、五八二、七九五

內譯

石炭購入　九、五七三、一七九

石炭百三十七萬九百七十九噸代

需要品購入　一、三二六、六一六

糧食其他　(明治四十三年分稅關報告)

修繕入費料　二、〇〇〇、〇〇〇　支店經費　三〇〇、〇〇〇

噸稅及び雜收入　三八六、〇〇〇

(十一) 外人の內地消費額　一六、三八五、〇〇〇

內譯

來遊及び寄港　一〇、四七〇、〇〇〇

來遊外人口(明治四十三年)英米七千四十五人、一人消費高一千圓。　歐大陸人三千三百六十六人、一人五百圓。

印度人支那人五千九百四十五人、一人二百五十圓。　合計　一〇、二一五、〇〇〇

寄港者一萬七千人、一人十五圓として此消費額　二五五、〇〇〇　外國艦船乘組員消費額　九八二、〇〇〇

外國郵船入港六百隻、貨物船二千九百十七隻、軍艦碇泊延隻六百十隻とす。

留學生消費額　二、二九三、〇〇〇

支那人其の他二千二百九十三人、一人一千圓。

布教費　二、六四〇、〇〇〇

(十二)政府筋收入　六、一四四、二五八

內譯

日本政府海外收入　一、五〇〇、〇〇〇

郵便局及專管居留地領事館等の收入

支那政府償還金　二、一四四、二五八　外國大公使館費及外國政府支出金　二、五〇〇、〇〇〇

(十三)日本金銀產出額　一〇、〇〇〇、〇〇〇

內地臺灣朝鮮の金銀產出額の一千百五十萬圓の內貨幣鑄造額

合計　五五一、三八七、一三六

外國へ支拂ふ分

(一)　輸入貿易額　五一三、八〇五、七〇五

(二)　兵器軍艦御料品等特別輸入品　一〇、一五四、八六〇

(三)　外人貿易業利益　五七、六七四、三七六

貿易額四割を外國人取扱とし其の利益一分五厘

(四)　國債利子　六二、九四一、〇七五

（五）市債利子　九、二八〇、三四三

（六）銀行會社々債　五、五五〇、二五〇

（七）內地事業投資額　一、七五〇、〇〇〇

大阪瓦斯其の他投資額三千五百萬圓の年利五分

（八）公債株式利子　一、五〇〇、〇〇〇

內國債及株劵三千萬圓の五分

（九）銀行利子　一、五〇〇、〇〇〇

外國銀行の融通資金三千萬圓の五分

（十）保險收入　三、四九九、〇〇〇

在日本外國保險會社保險料收入及保險金支拂の差額

（十一）在住支那人收益　六〇〇、〇〇〇

在住支那人中約六千人、一人百圓づゝ其の本國へ送ると見做す

（十二）日本人の海外支出　一〇、八四七、五〇〇

內譯

外遊及渡航者旅費　八、七四七、五〇〇　遊歷三十一人、內六人五千圓、二十五人、五百圓宛。

▲留學生二百五十九人渡航旅費各五百圓。▲商用歐米行四百九十九人、各五千圓。其他諸國行一千三百六十五人、各一千五百圓宛。▲農漁及出稼渡航者旅費諸領及び支那領行五千五百三十六人、各百圓。米國其他行三千五百二十五人、各二百圓。▲職工百十七人各二百圓。▲其他歐米行二百人、各二千圓、各國行三千六百七十五人、各三百圓。▲滿州渡航旅費二萬五千人、各五十圓。（以上人員は外務省旅行劵下附數及關東都督府報告に據る）

留學生　二、一〇〇、〇〇〇

私費留學生千五百人、一人二千圓宛。

（十三）政府筋支拂金　七、九八二、三四三

內譯

在外大公館費及支出金　三、四八八、〇〇三　滿州駐屯部隊費　四、〇〇六、五九八

支那駐屯隊費　四八七、七八二

合計	六八七、六五五、四五二
差引輸出額	一三六、二六八、三一六

右の内、貿易に於て六千萬圓以上の輸入超過あり、若し輸出入の平衡を得るに於ては、約七千萬圓の不足とするべく、更らに輸出超過とならば、其れ丈け益々此の不足を減じ得べし。

今過ぐる十ヶ年間の我が製品輸出額を視るに左表の如し。

	輸出額	前年より増加額
明治卅五年	二五八、三〇三、〇六五	五、九五四、一二二
仝卅六年	二八五、九七一、六二三	二七、六六八、五五八
仝卅七年	三一五、七二九、五九二	二九、七五七、九六九
仝卅八年	三一八、二八八、六二三	二、五五九、〇三一
仝卅九年	四一九、一八四、八七七	一〇〇、八九六、二五四
仝四十年	四二八、五〇三、九四二	九、三一九、〇六五
仝四十一年	三七五、四〇三、三六一	(減)五三、一〇〇、五八九
仝四十二年	四〇九、九七三、三二〇	三四、五六九、九五九
仝四十三年	四六九、二二〇、八九五	五九、二四七、五七五
仝四十四年	四八三、七八六、三四九	一四、五六五、四五四

斯く漸次に増加するは悦ぶべし、然れども輸入増加の趨勢も亦頗ぶる痛心すべし、試みに左の一表を視よ。

	輸入額	前年より増加額
明治卅六年	三一七、一三五、五一七	四五、四〇四、二五七
仝三十七年	三七一、三六〇、七三九	五四、二二五、二二二

仝 三十八年	四八八、五三八、〇一七		一一七、一七七、二七八
仝 四十年	四九四、四六七、三四六		五、九二九、三二九
仝 四十一年	四三六、二五七、四六二	(減)	五六、二〇九、八八四
仝 四十二年	三九四、一九八、八四三	(減)	四二、〇五八、六一九
仝 四十三年	四六四、二三三、八〇八		七〇、〇三四、九六五
仝 四十四年	五一三、八〇五、七〇五		四五、五七一、八九八

其の増加に於て、輸入の方著るしきは殊に注目すべし、四十四年に於ては、棉花のみも約五千萬圓の輸入増加を看たり、然る所以は他なし、畢竟米價騰貴のため、農民の購買力増加したれば也、但し棉絲棉布の輸出増加額一千五百萬圓を差引くときは、其の純輸入超過は三千五百萬圓なるも、是れ丈けは確かに農家に餘裕ありし結果と推定せざる可らず。

我が重要輸出品中に在て、生絲及び其の加工品は、全部我が國産にして、彼の棉絲棉布の如く其の原料（棉絲）を外國に仰ぐものに非ず、最も推重すべきもの也、棉絲棉花の如き原料を他國に仰ぐものと雖も、支那てふ大市場を近く控ゆるに於て、最も有望なる工業品たるを失はず、然かも此の二者及び其の附屬製品が、輸出品中の要位を占むるは、最も注目に値す、試みに左の一表を視よ。

	明治四十年輸出品	四十四年輸出額	増加額
生糸屑糸（繭眞綿を含む）	一二三、一九二、八四〇	一三九、〇〇五、八二九	一五、八一二、九八九
紡績絹織糸	九九、四一九	一、一六〇、七八三	一、〇六一、三六四
絹布類	三七、一五一、五四五	三八、一八二、二四七	一、〇三〇、七〇二
絹衣類	六九四、五九七	一、一七一、五六七	四七六、九七〇
計	一六一、一三八、四〇一	一七九、五二〇、四二六	一八、三八二、〇二五

綿糸（打綿屑綿を含む）	三一、〇九八、八六五	四四、七九二、四九三	一三、六九三、六二八
綿布類	一九、一三三、〇二四	三〇、六四六、九二四	一一、五一三、九〇〇
綿肌衣	四、〇二一、〇六四	五、九八七、八二二	一、九六六、七五八
計	五四、二五二、九五三	八一、四二七、二三九	二七、一七四、二八六

水産物の輸出もまた頗ぶる注目すべきもの也、試みに左の一表を視るべし。

	明治四十年輸出	仝四十四年輸出	増加額
乾魚其他食料品	八、九七八、八四八	九、二二五、二七八	二四六、四三〇
水産食料品罐詰類	四一五、〇一六	一、四二九、九五八	一、〇一四、九四二
貝製品	五四五、三〇九	一、二一四、二四四	六六八、九三五

故に養蠶及び紡績並に絹綿機業を奬勵し、且つ水産物の輸出増加を圖ることは、識者の殊に心を用ゆべき所とす。

若し國民にして奢侈を戒飭せば、多少は輸入を減ずることを得べし、素より重要輸入品にはあらざれども、贅澤品と看做すべきものの輸入は實に左の如き也。

象牙其他獸牙	二一六、〇二三	鼈甲	九一、四四二
懷中時計及附屬品	五〇八、三二九	樂器及其附屬品	二三、七九四
寫眞器及附屬品	二三、七九四	蓄音器及附屬品	一〇六、一八五
玩具	一二九、八二八	酒類	八八五、九八〇
菓子及ジャム類	一〇七、八八八	菓實及核子	八四、八七五
煙草	二四六、七〇五	茶	一一七、九一二
珈琲	四〇、六八五	麝香及人造麝香	六、六五九
香油石鹸原料油	五七三、四四三	鉛粉及白色亞鉛粉	三五、〇〇七

化粧用石鹸	三五一、八五二	香水香油類	五四二、三六六
顏料及塗料	三、三三六、四〇二	計	七、四六四、三七六

外國より輸入する布帛の三千六十二萬圓の如きも、結局內國製造を以て之を驅逐すべきもの也、石油の一千四百餘萬圓亦然り。

（七）

我が國民の租稅負擔額は、事實に於て決して過重ならざる也、若し能く稅制を整理し、負擔の不公平を更改せば、尙ほ若干の增收を得るや必然なり、國債の現在額また甚だ多からざることは、事實之を證明す、我が財政及び經濟に悲觀を懷くは、決して識慮ある者の與みせざる所也。

今や大正元年を終れり、故に吾人乃ち諸種の統計によりて、我が財政及び經濟の計數を試み、聊か世上識者の參考に供すると云爾。

公論

經國の大本＝國民精神の問題

須崎默堂

明治天皇の崩御が我國の歴史に一新紀元を開くべきことは、既に識者の確認する所なり。陛下五十年の統治は専ら力を外界に注がれ、幕府を倒して統治權を統一するに始まり、立憲制度を確立して四民平等の實擧り、新政の綱要は略ぼ其緒に就きたり。文物典章は眞に燦然を極むと謂ふべく、國家の體制備はれるは、前古未だ今日の如く盛なるはあらず。而して西洋に行はるゝ文明の利器は、概ね取りて之を我國に應用し、海陸の軍備より殖産興業の術に至るまで、殆んど盡さゞるなく、其發達は世界最文明國の壘を摩するに至れり。之れを僅々五十年の事業として考ふれば、誠に驚歎に堪へたりと爲すべく、西人の目して有史以來の奇蹟と云ふ、敢て溢美とすべからざるなり。我國民は過去五十年の事跡を以て世界に誇るの理由を有し、之を指導して寸毫の誤算なかりし先帝に對して、衷心の感謝を捧げざる能はず。

然れども此等は皆外界の隆昌に属し、國民生活の半面を充すに過ぎず、國家をして完全なる盛運に立たしめんとならば、之に伴ふ國民精神なかるべからず。先帝の叡智は此點にも注がれ、有司をして拮据經營せしめられたる所少なからざれど、其結果は必らずしも外界の經營と成功を競ふに足らず。此缺點は既に先帝の

晩年に於て廣く認識せられ、先覺の士は夙に帝國の將來の爲に深憂を懷きたり。然るに至文至武を以て國民崇敬の中心となり、國民道德の儀表となられたる先帝の崩御は、更に此缺陷を大ならしめ、國民道德は帝國將來の問題にあらずして、直に眼前喫緊の問題となりたるにはあらずや。而して余をして一層切實に之を感ぜしめたるは乃木大將の自殺にして、大將の自殺は帝國の有識界を震動せしめ、國民道德の根本を確立することの、一日を緩ふすべからざるを感ぜしめたるは、余の信じて疑はざる所なり。唯國民の信念を左右することは、鐵道電信を建築するが如き單純のものにあらず、匹夫も其志を奪ふべからざるは、古人既に之を云へり。從來の施設多くは功を奏せず、世の思潮滔々として經營者の豫期以外に走るは之が爲にして、本問題の解決困難なる所以は實に茲に存す。

此等の事情は我國の有識者夙に之を稔和し、爲に頭腦を惱ましむること一日の謂にあらざるが、我國情に通ずる外人の眼光に映ずる所、亦大同小異なるに似たり。倫敦タイムスの東京通信員が本社に寄せたる一文の如きは、則ち能く此消息を語るものにして、之を熟讀せば我國民の參考に資するもの尠なからず。余は左に全文を譯出して世人と共に他山の石と爲さんとす。文は八月八日―先帝崩御の後間もなく草せられたるものにして、題して『日本の精神的問題』と云ふものに係る。

明治天皇崩御の意味が十分に領解せらるゝは、數年の後なるべし。陛下の統治を回顧し、其間に實行されたる驚くべき變化を記するは容易なり。陛下登極の始一の鐵道なく、一の電信電話なく、一の學校或は郵便制度なく、一の憲法或は議會なく、一の外交團なく、其名に價する一の陸軍或は海軍なく、一の新聞紙なく、一の電燈なく、一の水道なく、一の近世的文明なかりしことを追憶するは容易なり。日本が西洋の物質的文明に追及せんと決心し、逐次に各般の方術を採用したることを記するは容易なり。過去に於ける此種の進化は、將來に繼續すべし。然れ

ども舊日本を新日本に轉化せしめたる物質的進化に伴ふ他の進化は如何。日本人の精神の進化は如何。記者にして過まることなくは、大正の新時代に於て問題たるべきものは是れにして、其は明治時代に勇斷果決されたるものより、一層困難にして且つ危險なるべし。

傳說の價値

國民としての日本の結局の成功と失敗とは、歐米より輸入したる各種の新制度の裡面に、日本固有の傳說の最も可なるものを、變化なしに保有する能力如何に由りて計量せらるべし、とは從來數々唱說せられたる所なり。他の語を以て云へば、日本の道德性は武士の典章に於て最も完成せしが、日本は其儘——則ち愛國の精神、協同の精神、天皇國家家族に對する犧牲の精神を保有せざるべからず。今日まで日本は紀律に於て勝る國民として世界に例示せられたり。日本の老政治家は之を基礎として之を新型に改鑄することを得たり、而して之を其儘に保存するは、久しき間同國の治者の目的なりしなり。此思想を以て教育制度は制定せられ、ハーバート大學のエリヲット博士が近日觀察せし如く、各人の能力如何に關せず、凡て同一型の學生を作り出すものとなれり。此思想を以て神道教は大に政府より獎勵せられしが、同教の頭には天皇あり、唯一の教旨は忠君と云ふに外ならざるなり。此思想を以て　天皇の列車が或過誤によりて遲引したる時、驛長の責を引きて自殺したるに對し、政府は公然と云ふ能はずんば暗に之を稱賛したり。此思想を以て御眞影は各學校に交付せられ、燃え盛る教室に身を投して之を救はんとして燒死したる教員は、官場に於て稱揚せられたり。最後に此思想を以て、戰勝と平和とは崇嚴に天皇及皇祖の德に歸せられたり。

然るにも拘はらず凡て此等の努力を以てして、具眼者は常に日本國民性の基礎より或物の拔け去りつゝあるを認識し、其れより以下なる者にても社會主義者の暴發及時々特に學生社會に起る法律蹂躪の潮風

にて、危難の甚だ切迫せるを知れり。往年日本に於て始めて西洋の學問に對する熱衷起りし時、危險は分明となり、有名なる教育勅語を發して忠孝を基礎とすべきを命ずる事となれり。爾來二十餘年、勅語は全國の學校にて大祝日其他機會ある每に捧讀せられ、書生は概ね之を暗記するに至れり。其れでも勅語は起草者が望みし如く國民道德の堅壘となるには至らざること、凡ての虛心なる觀察者が認許せざるを得ざる所なり。

本年の始、此重要問題に關して懷かるゝ憂慮は、顯著なる表明を見る事となれり。內務次官床次君は歐米漫遊より歸りしが、氏は坦懷の人にて、痛く西洋にて宗教の勢力あるに刺激せられ、而して日本の國民生活には全く之を缺如するに感じて、何等か救濟の策を得んと考慮し、遂に神佛耶三教の代表者を會合せしめて、與に俱に國民の道德的觀念を興起するに協力せしめんと策せり。代表者は豫期の如く會合し、而して會合の目的に稱ふ決議は通過し、共に帝室の威嚴の爲に努力すべきを附記し、委員を選任すべく決して散會せり。其後同會議に關しては何の聞く所なく、風說にては陸軍當局と稍々反動的なる文部省との掣肘にて沈默に歸せるなりと云ふ。然れども日本の精神的問題とも云ふべき本件に關して、此の如く新なる解釋法の試みられたる著明の事實は其後に殘存す。

過去との分離

往時青年武士は道德及身體の鍛錬を同時に同一の教師に就きて始めたるものにて、一人にて擊劍の教師と道德學の教師とを兼ね、青年武士が受くべき道德上の訓練に對しては、其父母も亦之に與かれり。其教へらるゝ所は勇敢なるべき事、國家、家、朋友に忠實なるべき事なり。此教育に於て缺くものは智的修養にして、學問は僧侶、學者、著述家に委任せられたりしが、王政復古と共に、國民は俄然として智の威力偉大なるを覺知して、二本差の戰士は節を折りて兵式訓練の初步及商業の階梯を學び、一二年前

までは羞辱の極と考へし所を、今は自から喜びて之を慕ふに至れり。然れども舊時の修練消滅すると共に、舊時の道德的修養も亦從つて消滅し、武士は道德學を劍士に學ばずしてスペンサーに學ぶ事となり、其心は思想の狂濤に投せられて、舊時の武士的行狀を形れる思想は、其根本を洗ひ去られたり。此間に於て僅に舊時の面影を存し、此狂濤に抗したるは忠君の一事にして、當局は直に之を認知して、天皇崇拜は乃ち國民制度の上に於ける中心となり、神道は佛教が最盛を極めたる時にも得ざりし重要のものとなれり。

近世日本には尙ほ二三舊日本の特色としたる訓練を保維せるもの丶如く、明治の世に於ては天皇之が中軸となれり。然るに今は其中軸さへ取去られ、新帝は全く異なれる型の人に屬す。新帝陛下は西洋學の敎育を受け給ひ、外國語を語られ、他の兒童と共に學校へ出て、微行にて外出せられ、多數の人は龍顏を熟知し、佛式の一大宮殿――縱令未だ住居せられざるも――は建築せられ、其日常生活は歐洲標準に則られたり。先帝のお寫眞は二十年以前に撮影せられたりと思はる丶もの一を求め得るに過ぎざるに、新帝のは數個あつて且美事なるもの、是れ時代變化の特徵とすべく、而して將來の變化は新帝陛下が宮廷の儀禮に加へられたる第一の革新にて豫報せられたりと見るを得ん。何となれば新帝は宮城よりの日常行幸還幸に於て皇后陛下と同乘し給ひ、舊來の慣例を打破せられたればなり。簡明に云へば、舊日本と新日本との聯繫を保つは、先帝が人民の崇敬上に特異の位置を占め給へる秘訣の一にして、縱し暗默にせよ廣く國民に承認せられたる事實なれども、新帝陛下は此聯繫に當らせられず。故に陛下は半神として行動するを欲せらる丶場合ありとも、能く之を爲し得給ふべきや疑問なり。此の如くして明治天皇の崩御と共に、一時代は名實共に過ぎ去り、今は最早明治の時代にあらずして大正の時代となれり。

新時代

日本は既に物質的變形に於て、世界を驚かしたり。來るべき時代に於ては、同様に迅速に同様に完全なる精神上の變形を以て世界を驚かす事ならん。併しながら其は今日までに試みられたる何よりも大事業なること、及如何にしても之を避くる道なきことは、別に證明を要せざるべし。大正の時代は明治の時代より一層英邁なる政治家を要す。何となれば其爲すべき事は、政治の範圍を越へて不案内なる領域に廣かればなり。問題は元老政治家が用ふる方法にて解釋せらるゝものにあらず、必らずや新思想に鍊へられたる新人物を要せん。

タイムス通信員の記する所は、能く我國民精神の現狀を描寫して遺憾なきものにして、中には外國人にあらざれば直言し難き節もあり。余は上文を一讀して愈々先帝崩御の際に得たる感を切にし、邦家の前途に深憂なくんばあらず。問題は無論國民道徳は將來如何に變遷すべきかと云ふに在りて、其内容は略ぼ上記タイムスの通信文に盡きたり。日露戰爭以後、武士道或は大和魂なる聲は既に高唱せられ、我國民の古精神は復興したる如くなれど、戰爭に由りて此精神の貴重なるに氣付き、恰も大發見を爲したる如く之を絶叫するは、實に是れ武士道或は大和魂が、國民の日夕に忘れられ居る確證にして、日本の道徳敎は今回新なるものを採用したると同一の努力を以てするにあらざれば、國民の頭腦に親み難き程薄弱のものとはなりたるなり。

タイムス通信員も云へる如く、我國民精神は物質的變化に伴ひて變遷し、明治廿三年に敎育勅語を發せらるゝ前に、一たび危機に瀕したり。此時に當りて物質的變化は稍々顯著となり、其影響漸く社會組織に及びて、國民道徳は其の基礎を掘鑿せられ始めたるさへあるに、從來の和漢學は捨てゝ顧みる者なく、讀書人の手にする所は盡く西洋の書なりしを以て、思想の源泉も亦西洋に移りたり。此くて儒敎、佛敎乃至國學より發する思想は、固陋頑瞑を以て排斥せられ、スペンサー、ベンタム等の説一時の流行を極めたるは、當然の傾向と謂ふべし。明治政府が物質界の經營を出でゝ、

指を思想界の施設に染めたるは此時にして、其結果は教育勅語となりて現はれ、國民道德の基礎は依然として仁義忠孝の道に在ることを指示されたり。是に於て國論大に決し、西洋崇拜の風潮は影を潜めて、表面上には何處までも我國固有の思想を維持する事となり、爾來二十餘年、今に至つて改むる所あらず。

然れども教育勅語は決して起草者が豫期したる効果を收めつゝありと云ふを得ず、其國民道德の中堅となりて、國民日夕の行動を支配する活力なきは、遺憾ながらタイムス通信員の云ふ所の如しと是認せざる能はず。忠君愛國は蓋し之れあらん、父母に孝なるもの何れに在りや、兄弟に友なるもの何れに在りや、夫婦相和するもの何れに在りや、朋友相信ずるもの何れに在りや、恭儉己れを持するもの何れに在りや。國憲を重じ國法に遵ふもの何れに在りや。今日倫常の觀念を挾みて新聞の社會的記事に對する者は、何人と雖頽風亂倫の甚しきに驚きて、顰蹙して面を背けざるを得ざるべし。勿論新聞記事は異常の事を蒐集すると共に、往昔は裏面に隱れて社會に現はれざりしもの、探聞の精を極め密を盡すに至りて、其等は悉く表面の事實となるものなれば、之を以て直に社會變遷の反映と爲すは當らざるべしと雖、大體に於て國民道德の變遷は、新聞紙の三面記事の變遷に徵せらるべきこと、大多數の承認する所たるを疑はず。

此間に於て獨り中流の砥柱となり、毅然として舊時の國民思想を保維するのみならず、寧ろ舊時に比して其勢を増したるべしとも思はるゝは、矢張タイムス通信員が指摘したる如く、忠君の一事なり。蓋し忠君愛國は我國體の精華にして、諸般德操の淵源なれば、萬一此點に動搖を生ずる事もあらば、其は我國民道德の根本を發掘せらるゝ秋なりと覺悟せざるべからず。明治の政治家が茲に見る所あり、全力を盡して皇室の尊嚴を高うし、國民の尊敬を保つべく施設したるは、誠に當然と謂ふべし。然れども彼等は畢竟舊時の人なり。其思想は封建制度の下に構成せられ、立憲自由の制度と根本に於て一致し難きものあり。故に其施設經營動

もすれば專制獨斷に出て、新時代の人を脫服せしめ能はざるものあり。其普通の政務に屬するものは、憲政の賜彼等の自由裁斷の範圍を限局し、法律を以て其大綱を定めあるを以て、未だ甚しく民心に背馳する擧措に出づる能はず。縱令時に此事あるも、人民は之と抗爭して忌憚なきことを得。唯皇室に關する事は、法律の規定少なくして彼等自由裁量の境域大に、其固陋の心を縱にする機會多きのみならず、國民が平生皇室に有する尊敬は、有司方向を誤りて人心に背く場合にも、明白に之を指摘論難するに憚るもの、十の八九に居る。是に於て宮內省及元老政治家等は、皇室の事に於て立憲政治の治外法權に立つ事となり、施設經營の時代思潮と相容れざるもの比々續出す。タイムス通信員が擧示せる燃え盛る教室に燒死せる教員、龍駕の故障に對する關係者の責任自殺等は、蓋し其一班を示すものなるべし。而して此類の出來事に對しては、國民は自由の評論權を奪はれ居るものにして、九州大學總長山川君が、門司驛員の自殺に對して表明せる意見が、有力の老人間に如何に解せられたるかは、世人の皆能知する所なり。此くて皇室に關する當局の施設は、大小共に時代思潮に背馳するもの多く、而して國民は之に對して自信を發表することを禁じられ、皇室を笠に壓服せらる。此の如き事情に於て面從腹誹の風起るは免れざる結果にして、今日表面には忠君の念の熾なるは前古比なきが如き觀あるも、實際の如何は余の知り能はざる所なり。唯一事の明瞭なるは、此の如き手段の決して皇室の尊嚴を大ならしむる所以にあらずして、寧ろ健全なる尊皇心を毀傷し、累を皇室に及ぼすものなることと是れなりとす。

タイムス通信員は、當局が忠君の念を涵養せんとして爲したる事は、悉く失敗に歸したることを指摘せり。是亦大體に於て余の承認せざるを得ざる所にして、當局が一方に時代思潮に背戾する施設を以て忠君を國民に强ひ、而して他方には皇室を笠にして、人をして謂はんと欲する所を謂ふ能はざらしめたる一事は、甚しく眞摯公平なる良民の感情を傷害し、今の忠君論を厭

忌する暗流を作りたり。此關係に於て明白に指摘して諸氏の猛省を請はざるべからざるは、山縣公を堂奥に置き、土方、香川等の諸氏に由りて鼓吹せられ居る忠君論にして、其主張の固陋當世に容るべからざるは論なく、其裏面には自家の便益を謀る意味も加はるありて、多少の識見ある者は、何人も其後に追隨するを屑しとすることとなし。而して此一派が政治上及宮內省に有する勢力を濫用し、不純潔なる忠君論を高唱する結果は、一面に面從腹誹の俗を助長し、他面には眞誠なる忠君論の價値を減殺するは免れざる數なり。今日社會に向つて忠君敎の宣傳に從事し居る者は、概ね鷄鳴狗盜の屬にして、一般が目して此の神聖なる事業に當るに足る人物とする者、果して幾人ありや。此くて我國德敎の大本たる忠君は狗鼠の玩弄に供せられ、一般に其價値を減じ、心ある者は顰蹙して彼等の横行跋扈を見るは現下の實狀とはなれり。

然らば忠君は外面に於て如何に旺盛の容貌ありとも、其は當局及彼一派に假裝せられたる街相に過ぎずして、內實は諸般古道德の變遷と略ぼ同一の道途を辿りつゝある者と推定し得べし。幸德一派の陰謀は我國民思想の基礎に於ける爆彈の破裂にして、彼一派の心膽を寒からしめしが、國民の忠君思想が如何に變遷しつゝあるかは、必らずしも此の如き極端の例を借りて而して後說明せらるべき事にはあらざるべしと思考す。先帝陛下は如何なる場合にも吾人に愉快なる回顧を與へ給ふ如く、本件に關しても陛下を回顧するは吾人の幸福なり。陛下は叡聖文武に在しまし、其絶大の功業を以て常に國民崇敬の中心たりしのみならず、日夕の御起居に於ても完全なる德操を表示せられ、匹夫匹婦も亦仰ぎて儀表とするを得べかりき。功業に於ては世界の帝王或は盛を先帝と競ふ者あらんも、公私生活を通じて一點の批議なきもの、誰か我先帝陛下に比すべき。此の如くにして陛下は臣民の崇敬と愛慕とを受け給へり、則ち陛下の御治世に於ては、國民の思想に何樣の變遷ありたりとも、皇室に對する臣民の崇敬と愛慕とは決して變動するの理なく、陛下は御一身

の上に此等を集むべき偉力を備へ給へり。英國の女帝ビクトーリアは一身の誤りなき行動を以て、將に廢せられんとする王朝の運命を恢復し、今は英帝國の缺くべからざる核子となりたるに見て、帝王の個人的行動が國民の忠君心と如何なる關係あるかを知るべし。故に我國民の忠君思想は他の德操と同樣の打擊を西洋思想に受けたるは疑なきも、之を支持して今日に至りたるは、專ら先帝陛下の盛德鴻業の力なりと想像すべき理由あり。當局有司の施設の如きは、其效果極めて微々たりしは少しも疑ふの餘地なく、夫の宮內省一派の爲す所の如きは、寧ろ之を傷害することありとも、決して之を裨補するものにあらざるは一層明白なり。

然るに先帝は登遐せられて、國民崇敬の中心は失はれたり。今後何人か能く大和民族の德操を支配するや。今上英明、綿々の皇統を繼がせ給ひ、皇祖皇考の遺業を恢弘せられんは何人も疑ふことなからんが、然かも陛下は西洋式の敎育を受け給ひ、西洋の儀禮を習はれ、先帝とは其素養を異にし給ふこと、亦略ぼタイムス通信員の指摘する所の如し。是に於て帝國の古道德に對する最後の屛障は撤去せられたるもの丶如く、國民は各其好む所に走つて、中心なく統一なく、我思想界は無主の荒野と化することなきや。

叙して玆に至り、正面より我國民道德の現狀如何と問ひ來らば、天下何人も之に對して滿足なりと答ふる者はあらざるべく、苟も日常生活以上に一隻眼を放ち、帝國の將來を顧念するの餘裕ある人士は、皆忡々の憂なき能はざるべし。道學上の語を以て云へば、目今の弊は廉耻心の衰頽、誠實の缺乏、人倫の破壞等數事に歸納すべけんも、我道德の大綱武士道は義の一字に歸納し得べきを知らば、此數事の缺乏が社會國家に及ぼす影響の容易ならざるを知るに足るべし。

試に少しく之を說明せんか、廉耻は人たる名譽を回護する屛障にして、其衰頽は直に人の品位を其れだけ下降するものなりと云ふも大過なし。目今の通弊たる腐敗は主として廉耻心の衰頽より生ずるものにして、人として耻なくんば何事をか爲すべからざらん。而し

て腐敗は年々其範圍を擴張し、一般人民より推して大小の官公吏に及び、僅に殘存して一時は我國の誇りと見做されたる稅關吏、警官さへも、今は甚だ怪しきものとなりたり。此等の結果政府、府、縣、郡、村の經營する事業は、一割乃至二三割の冗費を要するのみならず、事業其物に缺點多し。國家、府、縣、郡、村の吏員が、不正工事に坐して拘引せらるゝは連日の事にして、此等は皆官公吏が請負師と結托して私腹を肥し、反面に於ては工事費を不當に高價に見積り、或は工事に手拔を看過する事實を告白するものなり。何ぞ啻に工事とのみ謂はんや、官公廳の買入品、拂下等も亦同一の弊あらざることなく、時として收稅、伺、指令等の細事に至りても免るゝ能はず。概括して官公吏の腐敗と云へば、既に國民に公知せられたる事實にして、實に現下の一巨弊を爲し、國民廉耻心の衰頽を說明する一要項なりとす。

更に何人も首肯せらるべき一事を擧ぐれば、如今憲政は如何の狀を爲すかと顧みれば足れり。人民は候補者の主義政見に投票せずして、其運動費に投票するが故に、議會に於ける多數は固より國論を代表するものにあらず。代議士は之を國民に買ふて國家に賣るものなるが故に、彼等の向背は唯自己眼前の利害に決して、國政の善惡とは少しも相亘る所なきなり。此の如くして代議士は一種の政商に過ぎずして、憲政は有名無實に歸す。語を換へて言へば、國民の廉耻心喪失されたる結果は、國家の良制をも無効ならしめて、天下其弊に苦むは粗惡なる工事の國家、府、縣、郡、村を蠹害すると異なることなし。

國民誠實心の衰頽に至りては、其關係する所一層廣く、弊の實際に現はるゝもの亦決して前者に讓らざれども、之が描寫は廉耻心の缺乏より生ずる弊の如く明快なる能はず。然れども今日管鮑の交を見んことは期待すべき所にあらざるべく、朋友間にも常に多少の警戒なき能はず。夫の商工品に粗製濫造多く、殆んど用に堪へざるもの比々皆是れなるは、一に廉價を以て顧客を欺き、之を購買する者の利害得失を思はざる輕薄心

より發するものにして、能く當世の人心を說明する材料ならずんばあらず。試に布帛より日用の器具に至るまで、其一を取りて明治年間の作と其以前に於ける作とを比較し見よ、當に製作者の心懸に雲泥の差あるのみならず、購買者の意向も亦同一の變遷を經たるを發見するは容易ならん。

誠實の反面は虛僞なり、誠實衰へたりと云ふは虛僞跋扈すと云ふに同じ。若し商工業者が虛僞の商工品を以て顧客を欺くの心を以て、之を政治に施さば如何、之を朋友の交遊に施さば如何、之を社會の萬事に施さば如何。余は不幸にして政治界、交遊界、社會の萬事が商工業者より眞摯なりと認むべき理由なきを悲しむ。今日に於て誠心誠意國家を以て衷心の憂と爲し、身を以て之に殉ずるを辭せざる政治家何れに在りや。朋友間の慶弔は形式日に華美を加ふれども、其間に幾何の誠意籠れるや疑ふべく、表面に親切を裝ふて內實に其立脚地を發掘し居るも少なからざるが如し。而して會社、銀行員に至りては、忠實に其事業に努力するよりは、一面重役に追從しつゝ、他面會社銀行を假りて、自己の私利を營むが多し。此の如くして虛僞天下に滿ち、上は廟堂の大官より下は市井の匹夫匹婦に至るまで、精力を盡し身心を盡くして表面の華麗を競へども、是れ皆人を欺くの術にして、一も信用するに足るものなし。

最後に人倫の破壞は近時の社會に於て最も顯著なる事實にして、五倫五常の事に至りては、世復た之を顧みる者なし。老幼の序を失せる、親子の相愛せざる、兄弟の相和せざる、比々皆然らざるなく、夫婦の關係に於て特に乖戾の甚しきを見る。從つて追遠愼終の大禮は遺忘せられ、葬儀は形式に於て益々華美に赴けども、其は寧ろ己れの位置を社會に誇る意味に於てせらるゝが多く、長兄に仕ふる誠意を表示するにはあらず。乃ち家の觀念は次第に淡く、百行の基本とせられたる孝の如き、漸く世間の活道德より忘れらんとす。

此他奢侈日に增長して、儉素の風地を拂ひ、人々自家廣告に急にして、謙讓の德は背後に放棄せられ、禮

法泥土に委して人は野獸に近づく等、擧げ來れば纍纍すべきもの多し。余は此等を指示して、悉く近世の事は往時の事に如かずと謂ふにあらず、唯近世の人は往時の德敎を見て甚だ尊信せず、動もすれば則ち之を無視し、若くは之を排擊する風あるを證せんと欲す。善か惡かは見る人の判斷に任すとし、我德敎は變遷の岐に到着したるは、何人も異論なき觀察なるべし。

余は此狀態を必然の結果と見る、何となれば國民道德の基礎たる社會の狀態は變遷したればなり。道德學者は何を云ふかを知らず、余は國民道德は社會の變遷に伴ふて變遷すべきものなりと觀ず。然らば貨殖を賤しみ商賈を賤しみたる時代の德敎は、商工立國を叫ぶ時代に活力を失ふは當然なるべし。武士は食はねど高揚子は往時の道德の凡てにあらずとも、少なくとも其精神を喝破せる格言たる時代と、相場師も一朝萬金を握れば、揚々自働車を驅りて士君子を睥睨し去る時代とは、社會狀態の變遷も亦甚しからずや。從つて國民の理想も一變し、國民を刺激する慾望も亦一變するは當然の數にして、此時に當りて依然たる舊時の德敎を提げて國民に臨むあらば、其國民の心理に接觸せず、事實上の活力を失ふは必至の結果ならざるべからず。

故に帝國が東方君子國の體制を棄て丶、物質的文明に進むの方針を定めたる時は、則ち我國民の理想に一大變の來るべきを豫期し、國民の道德に一大變化の生ずべきを期待すべかりしなり。明治の初年には略ぼ此見解を持せられたるもの丶如く、文物制度の革新と共に、國民思想の革新をも促せしが、中ころ反動の時代來り、德敎上には純然たる古思想を取り、之を以て國民を强壓するに至りたり。其結果は現時の社會に見る如く、表面の德敎は盡く形式に流れて實社會に活力なく、敎理は敎理として表面に敬重せらるれども、實際に之を遵行する者なく、道德問題は益々喧しうして、實際の道德は愈々墮落しつ丶あるなり。乃ち

一　我國民道德は日に陵夷しつ丶ある事。

一　之を防止せんとしたる過去の努力は盡く失敗に歸したる事。

の二事は、誠意國を憂ふる者の何人も正直に確認せざるべからざる所にして、是れ則ち現下に於て我國に横はる最大最重要の問題なり。余は世の識者に於て既に之を覺知し、之が解決に向ひて歩武を進めつゝある諸氏多かるべきを信ずれども、不幸にして未だ問題の重大さに相應する大運動の起りたるを認むる能はず。此の如きは實に憂慮すべき事相にして、國家盛衰の眞原因は財政の豐否にあらず、陸海軍備の如何にあらずして、則ち國民精神の健全と否とに在ることを忘れ居るなり。余は素と道德問題に深き修養を有する者にあらず、率先して此難問題の解決に當るは固より其任にあらざるを知れども、我國民道德の傾向に就きては、夙に深憂を懷く一人にして、政治家は日々の政務に追はれ、實業家は目前の金錢に追はれ、社會の有力者多くは此重要問題を遺忘し居る事態に對しては、心竊に絶大の憂慮なき能はず。則ち僭越の嫌を犯して敢て本問題を提げて天下に呼號する所以にして、若し此一文能く有識者の注意を喚起し、問題討究の端緒を開き得ば余の本懐とする所なり。

余は本問題に對して多少の卑見を陳ぶるに先ち、再び西洋人が如何なる見解を有するかを見んと欲す。倫敦タイムスは前記の通信文に對して一篇の社説を草したり、左に全文を譯出す。

日本の魂

我東京通信員は別欄に採錄したる驚くべき文章に於て、大正の新時代に日本の前途に横はる問題を説明せんと欲し、島帝國の將來に關して多くの人が懷抱する不安を道破したり。蓋し日本は過去五十年間に多くの表面的問題を解決し、一新國として生れしが、果して自己の魂を發見せりや否や。我が通信者は明に日本未だ之を發見せずと爲し、日本國民の先導者は明治時代の元老政治家を遮りたる諸問題より、一層大なる仕事（タスク）を持つと思考するなり。元老政治家は非常に實際的なる建設的政治家なりしが、將來の日本は政治（ポリチックス）と行政的（エキスクユーチーブ）支配（アドミニストレション）とに於て道德上（モラル）の救濟（サルベーション）を發見し難かるべく、日本民族の運

命を掌中に握る人々は、深き憂慮を懷くや疑を容れず。彼等は國民の從來の德操は日々に曇り行きつゝあるを目擊するなり、從來の素朴と摯實とは光る繁榮の誘惑の下に弱はり、克己犧牲の舊理想は富貴安逸に對する飽くなき競爭裡に消滅す。而して新傾向を遮止せんとする努力は、一も効を奏せずして、寧ろ新憂を加ふるのみ。吾人は道德を奬勵し、他の民族の信仰に就きて冷靜沈着なる研鑽を加へ、或は新宗教を編み出して國民に强壓する方法の會議等に關する勅命を聞くこと多きも、日本の治者はアクバルが之を前に試みて功なかりし方法にて成功することなかるべし。精神上の新覺醒を喚起する事は、官僚(ビユロ)政治(クラシイ)の技術の企及すべからざる所なり。日本を向上の道途に保つには、更に偉大なる勢力を要す、而して其は日本自身の魂より發生するものならざるべからず。岡倉氏は論ぜり『內部よりの勝利、否らざれば外部に於ける雄大なる死』と

然りと雖吾人は日本の前に橫はる問題の重大なるを承認すれども、決して之を悲觀する意なし。數十年にして鐵甲より超ドレッドノートに躍進したる國民は、霎時新にして不慣なる思想の壓迫に惱むなり。心理的齊整は外界の變化より遙に徐々にして、其間に信仰は弱り、尊敬すべき傳說は解體す。吾人西洋人が東洋を觀察するに於て常に陷る誤謬は、餘り多く眼を外形に膠着するに在り。吾人は表面を見る、然れども內部に於て精神上如何なる發酵あるかを十分に察する能はざるなり。特に吾人が數世紀を費したる距離を、一躍にして進み去りたる大國民を見るときは、心は强く其偉觀に吸收せられて、殆んど人間の內部心理は、此の如く速に變形するものにあらずとの常理を忘るゝに至る。吾人は日本の將來を確信す、吾人は此の如く多くを爲し、其强さを彼が如く尊ぶべき過去より得たる人民が、一朝にして下向(ダウンズ)道(ワス)に就くことを信ぜず。然れども其外觀を一轉して、新に一層高尙なる眺望に導くべき運命を有する高手は、其政治家其軍人等の內に發見すべからざるやも

知れず。本文中には許多の外交的辭令を含み、文章甚だ婉曲なれども、大要通信者の論旨を確認し、我國の前途に重大なる危險横はることを諷示せんとするに在るは疑ふべからず。特に『政治と行政的支配とに於て道德上の救濟を發見するは難かるべし』と云ひ、「アクバルが之を前に試みて功なかりし方法にて成功することなかるべし」と斷じ、終に『精神上の新覺醒を喚起するは、官僚政治の技術の企及すべからざる所なり』と喝破し、『日本を向上の道途に保つには、更に偉大なる勢力を要す、而して其は日本自身の魂より發生するものならざるべからず』と論斷するに至りて、眞に邦人を驚起せしむるに足らずや。若し夫れ『其外觀を一轉して、一層高尚なる眺望に導くべき運命を有する高手は、其政治家共軍人等の内に發見すべからざるやも知れず』との數語の如き、一結鏘爾として聲あり、人をして凄然襟を正さしむ。

タイムス記者は我國にて從來取られたる道德維持の方法は、盡く誤謬なりとするもの丶如く、國民道德は勅語や行政的手段にて維持し得らるべきものにあらずとするに似たり。余は大體に於て此見解に一致する者にして、前段に記述したる幾多の失敗は、直に取りて其證左と爲すべし。然れども從來の失敗は、單に其手段の誤れるのみに歸すべからず、其れより大なる誤謬は寧ろ行はんとする思想其物の無理なるに在るべし。何となれば今日までの道德敎は依然たる舊思想にして、時代の變遷、社會の變化を少しも打算に加へ居らざればなり。所謂『新日本は生れたれども、日本は未だ其魂を發見せず』とは蓋し之を謂ふなるべく、時代の變遷に伴ふ思想の變遷に就きては、今日までの研鑽を甚だ不充分なりとせざるべからず。西洋人は我國民を甚しく實際的（プラクチカル）なりと觀察する如く、我國は宗敎の國、哲學の國にてはあらざりき。されば歴代の政治家に大なる哲學者なかりしは謂ふまでもなく、國民全體としても傑出せる思想家は寥々晨星の如し。此系統を受け、然かも物質的改革に匆忙せられたる明治の政治

家が、深く國民思想を研究することなかりしは、大に怨すべき事ならんも、其餘勢今に更新せず、國民道德は日に陵夷に就き、健全なる國民たるべき基礎は刻々に發掘せられ居る今日にても、『尙ほ其何事を意味するかを領解せず、單に目前の些事に沒頭して大局を顧慮する者なく、遂にタイムスをして此危險を『一轉して一層高尙なる眺望に導くべき高手は、現時の政治家軍人中に發見すべからざるやも知れず』と曰はしむるに至つては、一語凄愴、帝國の前途を深憂せざるを得ず。

然れどもモーニング、ポーストの觀察は多少タイムスと趣を異にせり。同紙は先帝の大喪儀と乃木大將の殉死とを論じて、末段に左の如く云へり、

日本の進步は過去五十年に於て驚くべきものなりき、將來に於ても此向上運動の停遏さるべきを想像すべき一の理由なし、國民の各階級に充盈し、戰爭に對すると同樣に平和の事業にも發揮せられたる愛國心は、容易に其强味を失ふものにあらざるなり。勿論日本をして今日あらしめたる時代は、諸種の好都合なる事情の綜合より生ぜる生產物にして、封建時代に養成されたる武德の上に、西洋の智識學問に接觸して生ぜる敏活と發明的精神とを附加したる如き、島帝國の特有なる民族自負心は家族制度によつて强められたる上に、敎育にて開明せられて美事なる愛國心となれる如き、日本國の强大と幸福とに對して燃ゆるが如き渴望は、何等の智識的能力の缺乏も之を妨ぐること能はざりし如き、則ち其一二の例なり。伊藤公は曾て曰く、維新前に於て日本國民に缺けたるものは、心理道德の事にあらずして、科學的、專門的、物質的文明なりきと。近世の世界が進步と爲す各方面に於て、日本國民の爲せる事業を見れば、彼等は國際の競爭場裡に於て、決して甚しく對手の背後に落つることなかるべきを示す。無論同民族の性格は之を刺激する新勢力の結果として、歲月と共に變化するに相違なきも、尙ほ世界の敬愛を起したる同國民の性質は、將來長年月間生存するなるべし。特に外來文明の外形的裝飾は必然の結果と

して人民の魂に大影響を及すものにあらざるが爲に然りとす。日本の青年は西洋の學問を學び、西洋の機械を使用して、其生活觀及處世の標準は、則を彼等が崇拜する祖先の精神に取ることを得べし。彼等の父祖が日本の爲に努力開拓したる有利の位置を保維し、之を發展せしむるは來るべき時代の責任なり。國民の氣象は露國との長き爭鬪に於て試驗され證明されたり、人民は過去の成功より生じたる確信を以て將來に臨むことを得べし。變化しつゝある東洋の形勢に於て、日本の如き强大にして自力に富む國は重要なる働きを爲すべきものなり。過ぎし時代に於て爲せる日本の赫奕たる功業を敬愛する人は、其將來の進歩に對しても、亦嚴密にして同情ある興味を以て之に注意するなるべし。

余は大體に於て寧ろモーニング、ポーストと同一の見解を取る、二千餘年來養成されたる大和民族の固有精神は、容易に洗ひ去らるゝものにあらざるべし。惟ふに我國民は哲學的人種にあらざること前に述べたる如く、國民中に大哲者なかりし代りに、外國の哲學は頗る虛心坦懷に之を受納したり。佛教然り、儒教然り、近世の耶蘇教亦然るにあらずや。されば此等の始めて輸入せられ、其旺盛を極むるに當りては、日本は佛教の國、儒教の國たるべき危險甚だ大なりけんも、結局に於て儒佛二教は日本國民を征服せず、日本國民却つて儒佛二教を征服し、儒教は日本の儒教、佛教は日本の佛教として存在を許さるゝことゝなりたり。余は此の如き事實に據りて、我國民性の根本に强大奪ふべからざる或物の存在することを確認し、其同化力の偉大なるを知つて、西洋思想の浸潤に對しても、極端には悲觀せず、ポースト記者の『日本の青年は西洋の學問を學び、西洋の機械を使用して、其生活觀及處世の標準は、則を彼等が崇拜する祖先に取ることを得べし』と云ふを以て、可能の圈内に在りと思考する者なり。

乃木將軍の殉死はタイムスの記者にも意見綴相の機會を供へたる如し、同紙の大喪儀に際して草せる論文の末段は左の如し、

式は始より終に至るまて、日本固有の精神を表示し、明治天皇の御宇を凡ての歷史中に最も驚くべきものと爲したる、奇蹟的變化にも生殘りたる崇敬を以て行はれたり。此精神は我東京通信員が過日の日本の精神的問題と題する著大なる文章に指摘せる如く、此等の變化に由りて全然影響せられずとは爲すべからざるも、少なくも老人社會の多數間には依然として活力あること、葬儀の報が悲しむべき新事實に件はれたるにて證明せらる。旅順の勇者乃木伯爵は夫人と共に自裁せり。此勇敢なる將軍の二子は、日露戰爭に於て生命を天皇に捧げ、將軍は其勇氣と國家に致せる大功とにも讓らず、謙讓と品性の高潔とによりて深く國民に敬愛せられしが、近世的戰爭の技術に於ては、西洋が敎へ能ふ凡てを學びし人なり。然るに將軍は心に於ては依然たる過去時代の日本武士にして、西人或は尊敬せんも殆んど領解し能はざる方法を以て、天皇に對する忠誠を證明する用意ありしこと、其最後の一擧によりて發揮せられたり。

則ち日本の古道德は未だ必らずしも新事物の爲に一掃せられず、縱令其影響なしとせざるも、少なくとも社會の或部面には、强烈なる日本精神の尙ほ存することを認むるものなり。是亦肯綮に中るものなるべく、古道德に慣れたる眼を以て現世を見れは、忌むべきもの、恐るべきものは如何に多くとも、其等は多く些末の事に屬し、國民道德の根幹は未だ大に腐蝕せられたりとすべからざる理由もなきにあらず。

然れども病膏盲に入れば治術なく、根幹の腐蝕したる樹木は到底舊時の繁茂を再現し難し。經世濟民の要は天の未だ雨ふらざるに牖戶を綢繆するに在り、況んや事既に起りて勢甚だ急なる我國民道德問題に於てをや。乃木將軍の一死は邦人をして意を强うせしめたるものあり、又其敎訓の國民を感化すること絕大なるものあるは疑なけれど、將軍の如き傑出せる人の行爲を以て、一般人民の思想をトすべからざるのみならず、將軍の如き壯烈の敎訓を以てするも、其感化の幾年に

將軍の死に對して公然非議の聲を揚げたる者は、因より三四に止まらずして、面從腹誹の徒に至りては勝げて數ふべからず。余は此一事に徴しても國民思想の變遷は、其範圍既に頗る廣く、且つ稍深きを斷ぜざるを得ず。概して云へば、明治元年を以て國民思想上の一區劃と爲すべく、其れより以前に生れたる者は古道德の下に教養されたりとし、其れより以後に生れたる者は、新舊兩思想の感化を受けたりとし、年を經るに從ひ、舊思想の感化は次第に淡く、新思想の浸染漸く濃厚なりと云ひ得べし。然らば現社會は古人今人の雜居にして、國民道德に古精神の色あらしむるは、主として古人の存するに由るとすべく、彼等の年と共に凋落するは、我國民道德の年と共に變遷すべきを語るものと見ざるべからず。而して先帝の崩御は古人凋落上の大段落にして、我國民道德は是れより急激に變遷すべしと觀するは道理ある事なるべく、今後の二三十年が我國民を如何なる道德狀態に導くべきかを思へば、殷憂に堪へざる者何ぞ二三子のみと謂はんや。

若し新思想に一定せる形式あり、取りて舊思想に代はらんとするものならしめば、其比較的價値は暫く問はず、之を實際に試むるも敢て妨げずとせんも、今の所謂新思想には確乎たる意味なく、唯社會狀態の變遷に伴ひて發生したる漠然たるものあるのみ。表面より云へば、我國民道德は今も尚ほ舊時の忠孝の道なりと云ふべく、其骨子は二十三年の教育勅語として、炳として日星の如し。然れども學校の德育は徒らに形式を存するのみにして、實際に活力なきことは、苟も一隻眼を有する者の看取するに難からざる所にして、タイムスの通信者は慘酷なる程適功に之を描寫したり。乃ち現時に於て正面より鼓吹せらるゝ道德思想は、實際に於て青年を支配する活力たる能はずして、青年は形式上に學校の德育に叩頭しつゝ、事實に於ては現在の社會に一層適當なる或物を慾求しつゝあり。故に現時の青年は實行的道德の上より謂へば全く無教育なりとすべく、其教育として授けらるゝものは、實際に行ふ

べからざる假面の具に過ぎずして、則ち僞善の奨勵なり。

我國民は或意味に於て久しく無宗教の民たりきと謂ひ得んが、無宗教尙ほ可なりとせんも、此狀態にして繼續せんか、終に無道德の民たる日なきを得るや。

余は今日の靑年を甚だ氣の毒なるものと思ふ、彼等は倫理若くは修身の名の下に、實際に行ふべからざる思想を強壓せられ、而して實際に行ふべきものに就きては、彼等の智識に於て發見すべき方法なし。是に於て其敎へらるゝものには何等の尊信を有せず、尊信すべきものは如何に思索するも到底獲得するに由なくして、結局人生の理想を失ひ、四顧茫洋の境遇に陷らざるを得ず。夫の巖頭の感を書して瀑布に投ぜる昔の如きは、斯る時代の產物として有り得べき事にして、余は眞摯なる靑年の歸趨に迷ひ、如何に此世に處すべきかに煩悶する者に遭遇すること少なからず。然れども此等は靑年の上乘なるものにして、其多くは學校の德育を馬耳東風に附し、唯現世の惡風潮に弄れて、或は虛榮の夢を追ひ、或は野性の驅使に任せて、放縱無殘に日一日を送る者なり。所謂不良少年は此間に醞釀せらるゝものにして、若し世に羈束あらしめば、彼等は寧ろ凡俗に一頭地を拔くの資質を有する者なるべきか。

此の如き靑年が社會の中堅を形つくるに至りたる時、國家は果して如何なる狀態を呈すべきか、思へは寒心の至りなり。故に永久の觀念に於ては、余は寧ろ樂觀を取り、二千餘年を經て幾變遷に生殘りたる大和民族の精神は、今回の動搖にも生殘るべきを確信する者なれども、現代若くは將來數十年間の問題としては、我精神界の荒蕪に深憂なき能はず。特に現狀に恐るゝ所以は、儒敎若くは佛敎の輸入は、單純に精神上の動搖なりしに反し、今回のは直接に精神上の問題として來らずして、精神問題の基礎たる社會の狀態を一變し去るに在り。儒敎若くは佛敎よりする精神上の動搖は、敎理の浸染に基づけども、今回のは日々に目睹耳聞する所に胚胎し、最も無智なる人と雖、實物敎訓的に之

を歸納せざるべからざるに在り。されば大和民族の固有精神に對する襲撃は、未だ曾て今回のより强烈なりしはあらざるを覺知すべく、之を一個重大の精神界の危機と云ふ、決して誇張の言なりとすべからず。

而して余は更に一觀念の本件の等閑視し難きを示すべきものを有す。他なし、國際競爭が前古未曾有の激烈を極むるは是れにして、今や列國は全力を盡して對抗の形勢を張らざることなく、苟も缺陷あれば、其物質的と精神的と論なく、忽ち他の乘ずる所となるを免れず。今茲に一國ありて精神上の混亂に陷り、國民の思想統一を缺くか、若くは甚しく國民の元氣を喪失したりとせんか、其空虚は直に對抗國に占領せられて、其れだけ國家の勢威利權を縮小し、極端の場合には其獨立を危うするにも至るべし。是れ我國の如く新進に屬し、其實力位置尙ほ未確定の國に取りて最も適切なる注意にして、若し此際我精神界に大なる弛緩を生じたりとせば、其國威の消張に關すること甚しきは、何人も首肯すべき所なり。されば現時の精神界の動搖は、之を放置すれば自から歸すべき所に歸し、結局大なる憂患を爲すことなしとしても、國際の現狀は決して此の如き悠々たる處置を許さゞることを領知せざるべからず。况んや精神界の混亂は施きて社會國家の混亂を惹起し、之を陵夷に陷らしむる危險頗る大なるものあるに於てをや。

是に於て我精神界の現狀は、結局の結果に對する樂觀者も悲觀者も、等しく共に憂慮する所なるは余の確信する所にして、如何に之に處すべきかは當世の最大問題ならざるべからず。而して之に對する明治時代の施設は盡く失敗に終りたること前段に陳ぶる所の如しとすれば、此は既に試驗濟の事とすべし。是亦一大重要の事實にして、今後の研究は正直に此失敗を承認し、政府人民共に潔く之を放棄して、別方面に眞理を求むるより始まる。余は此新研究に對して一段階を設けんと欲する者にして、其一は新社會に適切なる國民道德の研究、其二は之を實行する方法なるべしと思ふ。エリオット博士は米友協會の晩餐會の席上に於て、日本

國民の現時の心理狀態は、四十年以來の米國人の心理狀態に酷するものあるを說き「日本及支那に於ける信仰問題は、獨り東洋に限れるにあらず、世界隨所皆然り」と述られたり。蓋し近世の如く進步の急激なる時代に在りては、社會の狀態日々に改新するを以て、舊時代に適應したる信仰に動搖を生ずるは、何れの國と雖免れざるの數にして、大小の程度に於て各國皆之れあるべし。故に各國の之を處する所以を研究すれば、取りて以て我國の參考とすべきもの多かるべしと思はるれども、我國及支那の事は、各國と其性質を異にするものあり。何となれば列國の變遷は如何に急激なりとも、大體同一軌道の進行なるに反し、我國及支那に於ては東洋思想と西洋思想との衝突なればなり。然らば西洋に於ける本問題の處理法は、必らずしも我國に適用すべからずして、我國に於ては一層急激にして一層强烈なる手段なかるべからず。此點 於て余はタイムスが記せるアクバルの事例に興味を感じ、詳に彼が成敗の跡を案じて其得失を考量せんことを欲すれども、未だ其機を得ざるを遺憾とす。案ずるにアクバルは印度西部の大帝にして、千五百六十年年十八にして統治の權を握り、今の新都デリー及アグラを中心として西征東伐し、最盛の時に於ては北はカシミアより南アーメドアバドに至り、西はカブールより東はダッカに及べり。是れ既に明治天皇の功業に髣髴たるものさへあるに、其れよりも一層大に相似たる點は、彼の統治が從來の頑固なる政治に引き換へ、極めて開明的なりし一事にして、宗教の迫害を除き、殖產興業を勸め、敎育を奬勵し、社會的弊風を洗滌せる等、明君の爲す所古今東西切に其揆を一にするものあり。而して此等の改革よりして社會狀態に一大變遷を生じ、社會狀態の變遷は從來の弊風を改むると同時に、其可なるもの、保存すべきものにも動搖を生じ、終に國民道德を混亂に陷らしむるは、免れざる數とすべきに似たり。アクバルも此難問に接したるなるべし、コーランを基礎とする從來の道德に安んずる能はず、マホメット敎、ヒンヅー敎、波斯敎、猶太敎、基督敎の各派と公然會商

したる上、ゾロアスターの形式に則りて一新教を編成し、之を國民の前に公布したり。然れども本教は國民の信仰と實際何等の交渉なく、結局之を遵奉する者は宮廷の外に出でずして、帝の崩御と共に教も亦死滅したり。タイムスがアクバル之を前に試みて成功せざりし方法とは、蓋し之を謂ふなるべし。

惟ふに信仰上の事は獨斷的方法にて成功するは困難ならん。アクバルの新宗教は余未だ其内容を知らざれども、其苦心の跡より考ふれば、教理の純潔と新時代の事情に適應する點とに於ては、大に意を用ゐたるものなるべけれど、其結果の良好ならざりしこと此の如きものありとせば、我明治政府の努力が失敗に終りしは、當然と云ふべし。

現代の要求は新孔丘の出現に在り、新釋迦の出現に在り、新基督の出現に在り、偉大なる個人的感化を以て直に國民の肺腑を突き、之をして衷心より新教に傾倒せしむる外、他に有効の方法あるべしとは思はれず。然れども孔丘や釋迦や基督やは俊傑の士、千百年にして一たび出づるもの、之を現世に求めて俄に得べからず、止むなくんば其れ血誠有志の團體乎。若し本問題に興味を有する有志相結びて團體を組織し、大に我新國民道德を研鑽して、一面之を躬行實踐すると共に、他面之を社會に呼號し、以て烈々たる國民的運動を喚起する核子たらば、固より現世に小補なしと謂ふべからず。而して他日英傑の士の出づるを待つ、亦可なるにあらずや。

是に於て余は本問題中に於て、最も困難なる部分に到着したり、我新國民道德は何ぞ、團體は何を行ひ何を叫はんとするかと是れなり。之に答ふるは余の能くする所にあらず、須らく博雅の教を待つべし。然れども前段述べ來りたる所に據りて、我舊思想の到底今後に實行すべからざるは略ぼ分明なりとすれば、餘す所は純然たる西洋思想を基礎とするか、或は東西の折衷によりて一新道德教を編出するかの二點に歸すべし。而して二者の撰擇も亦事物變遷の通則に鑑み、更に千歳銷磨せざる國民性の存在に徴して、甚だ困難なるも

のにはあらざるべしと考ふ。蓋し萬物の推移には皆順序あり、突發的變化は決して推移を圓滑ならしむるものにあらずして、動もすれば弊害の多きに堪へざればなり。否我國に對して純然たる西洋思想を扶殖するは、殆んど不可能の圏内に在るべし。其は耶蘇教の現狀を見れば思半ばに過ぐる事にて、我國民思想の混亂今日の如きを以てして、然かも同宗の大に我國に發展し得ざるは、幾分人爲的の障害あるにもせよ、寧ろ意外とせざるべからず。余は一切の障害を去り、思想界を純然たる自由競爭に開放するとも、耶蘇教が其主裁者となることなきを確信する者にして、然る所以は其根本に於て我國民性と相容れざる或物あるを見ればなり。

學者は國民性なる語を甚だ漠然なりと云ふなるべし、然り甚だ漠然なり、余は如何に他の語を以て之を說明すべきかを知らず。唯建國以來生存して今日に至り、常に日本をして日本的ならしめたるものは是れにして、佛教如何に旺盛なる時代に於ても、儒教如何に其威を振へる時にも、日本には印度や支那と異なれる或精神ありたるに相違なく、此精神は佛教にも儒教にも征服せられず、却つて佛教は日本の佛教、儒教は日本の儒教と爲したり。余は此精神は今回の動搖にも生殘るものと信じ、又生殘らしめざるべからざるものと信ずる者にして、耶蘇教にして大に我國に發展するの機會ありとせば、其は此精神に同化したる後なるべし。タイムスの新日本の魂なるものは、余未だ十分に其意味を領解せざれども、余は一國の魂は寧ろ千秋萬古易らざらんことを欲す。余の知る所を以てすれば、我國民性は決して外國に對して耻づべきものにあらず、是れ二千五百年萬邦に冠絶する國體を樹立したる所以にして、又萬邦に冠絶する國體の涵養に成る所なり。政治學上には如何なる說あるにせよ、余は將來如何なる國にも我に勝る美制の成立することを豫想し能はず。然らば此絶無にして僅有なる制度と表裏する我國民性は、將來幾萬斯年に亘りて變易する要なきのみか、之を砥礪し、之を研磨して、益々其光を發揮せしむるを以て立國上の上策とす。故に余は日本の魂を以て西洋

の學問藝術を驅使せんと欲する者にして、此點に於てはモーニング、ポースト記者と同一の見解を取る。而して其不可能にあらざることは、乃木將軍に由りて證據立てられたり。將軍は其戰略戰術に於て西洋の最善を學びしかとも、其精神は最も完全なる程度に於て日本の國民性を保有し得たるにあらずや。勿論將軍の如き俊傑の爲す所を以て萬人に臨むべきにあらざれども、之を以て理想とするは妨げなかるべし。

然れども我國にも立憲制度は既に施行せられたり、商工立國は國是となれり。此二事は社會の組織に根本的の變革を生すべきものにして、之を新日本は生れたりと云ふ、必らずしも過當にあらず。タイムスが云ふ新日本の魂にして、單に此等の變革に伴ふ日常生活の異同を意味せしめは、之を確認して之に副ふ德義の改良を促進するは重要の事なり。而して明治政治家は未だ十分に之を覺知せず、依然として舊社會に處したると同一の觀念を以て、新社會に臨みたるは事實なり、之を稱して日本人は未だ新日本の魂を發見せずと曰はど、亦當れり。余は我國の上下官民が深く此點に反省し、將來に改善せんことを希はずんばあらず。

國民道德上より見れば、此過失は頗る重大なる結果を生ず。實社會は既に殆んど金錢萬能の狀あるに拘はらず、道德の條規は尙ほ金錢賤視の推定の上に立つ。實社會は既に自由競爭の世なるに、道德の條規は尙ほ階級制度の推定の上に立つ。實社會は既に婦人開放の世なるに、道德の條規は尙ほ男女席を同うせざる推定の上に立つ。實社會は既に思想の自由を認むるに、官憲は尙ほ其權威を以て之を左右し得べしとの推定を有す。此他列擧し來れは尙ほ多きは勿論なるが、實社會と推定と納鑿相容れざること此の如くば、誤れる推定に立つ道德條規の實行せられざるは勿論にして、之に對する尊信地を拂ふに至るは免れざる結果なり。然かも一方には此推定ありて此道德條規あるが故に、更に事實に適切なる道德を求むるの念なく、畢竟舊法は行はれず、新法は成らざる境遇に陷りて、社會は全く無道德の狀を呈するなり。

是に於て萬古易らざる國民性は、益々之を砥礪保存するの要あると同時に、社會の變遷に伴ふ道德條規の改善は、最も必要の事なるを首肯せざるべからず。唯立憲政治と物質的文明との先進たる諸國に於ても、國民思想は常に健全にして、其實踐道德は必らず穩健なりと云ふ能はざるは、此關係に於て第一に知らざるべからざる事にして、必然の結果として社會主義に至り、サンジカリズムに至る如き思想は、決して歡迎すべきにあらざるべし。余は有力なる少數者が國家を左右する制度を善良なるものと認めざると同樣に、無智なる勞働者、又は金錢を以て國家を左右するをも、良制と認むる能はず。此は制度論にして國民道德とは自から別問題の如くなれども、國民道德の一基礎は國家の制度なるを知らば、國民道德の根本は國家の制度と同時に論せざるべからざるを知るべし。故に勞働者政治、金錢政治を奬勵する如き思想は、余の勉めて排斥せんと欲する所にして、若し西洋の道德より之を除外すとすれば、其取るべきものは深酷なる吟味を經るの要あるなるべし。

更に此論點を强めんが爲に、西洋諸國も決して社會の現狀に滿足せざることを一言すべし。諸國は大勢上止むなしとし之に隨從し居れども、實は懷疑に滿つるもの多し。其は前に記したるエリオット博士の說にても其一端を徵すべき事なるが、余は玆に英國の軍政家イアン、ハミルトン氏の言を引くべし。氏は英國現時の敎育は私慾の追求に適する智識を授くれども、人の品性、共同の精神、體質の鍛錬を忽諸するものなりとして之を非とし、今までの『怜悧なれ、然らば汝は富むべし、富めよ、然らば汝は幸福ならん』との主義を排斥して、『國民の安寧と幸福とは國家の鞏固（ストレングス）より胚胎す』との格言を基礎とすべしと云へり。西洋の制度道德を說明するには數千萬言を要すべきも、其等の凝固したる西洋人の理想は、『怜悧なれ、然らば汝は富むべし、富めよ、然らば汝は幸福ならん』の數語に盡さん。而して其結果は百萬の石炭坑夫のストライキとなり、燃料の缺乏の爲に他の百萬の職工其常職を失ひて、鐵

道、船舶は殆んと活動をを止め、瓦斯、電氣は動もすれば原動力を缺きて、市街は暗黑に、人民は飢渇に陷らんとするに至りては、其慘禍往時の內亂に過ぐる遠きものありと云ふべく、サー、エドワード、グレイが陸より來るものは陸軍以て之を拒くべく、海より來るものは海軍以て之を拒くべきも、獨り資本主と勞働者との對戰に至つては、之に處する方法なきに苦むと歎せる如き、如何に國家の窮境に在るかを見るべし。

然らば『怜悧なれ、然らば汝は富むべし、富めよ、然らば汝は幸福ならん』主義は、他に如何なる美點如何なる長所ありとも、其全體を學ぶべからざるは明にして、憲法政治、物質的文明は、必然國民道德の變遷を伴ふものとしても、西洋にて此等に伴ひて行はれ居る思想は決して健全なるものと云ふを得ず、之を師とするに於て多大の取捨を加ふるの要あらん。

玆に東西思想の異同を辯析し、其取るべきもの捨つべきものを示さば、本論點は益々明瞭を加へんも、其は專門學の範圍に入り、冗長に渉るを恐れて之を省き、最後に更に一斷案を下すべし、曰く、極端は弊なりと是れなり。我國は沒我的道德の極端に苦むもの、之を矯むるに主我的道德を以てするは當然ならんも、其極端に走るに至りては、亦其弊に苦むこと現時に讓らさるものあらん。

觸らぬ神の祟り

丘淺次郎

（一）

昨年の一月號には、「人類の征服に對する自然の復讐」と題して、人類が自然を征服し得たりとて文明を勝ち誇つて居る間に、自然は日夜絶へず恐ろしい復讐

をして居ることを述べたが、斯樣なことは單に物質的、身體的の方面にのみ限られるものであらうか、精神的、思想的の方面にもこれと同樣なことが有るのではなからうか、次にこれ等の點に就て聊か論じて見やう、

假に此所に一つの國があると想像して、その國で最高の權力を握り得た少數の人等が、全國民に斯樣々々のことを信ぜしめるのが自分等のために都合が宜しいと考へたことを、有らゆる方法を用ゐて强制的に人民に信ぜしめ、少しても、これと異なつた考へを發表せんと試みる者があれば、直にこれを刑に處して、その思想を未發に防ぐことを務めたと假定したならば、其國は如何なる狀態に陷り、將來如何に成り行くてあらうか、兵權を有する者が兵力によつて壓さへ附ければ、思想の發表を防ぐことは實に容易てある故、權力者の註文と異なる考へは無論全く現はれなくなり、たゞ强制的の信仰個條のみが全國内に隅々まで行き渡つて、一人の不信者も無きかの如き盛況を呈すべきは言ふまてもない、斯樣な有樣を見ると、恰も知識の進步、腦髓の發達に伴ふて、常に新なる思想を生ぜしめんとする自然の働きを、人爲によりて有效に防ぎ止め、全く自然を征服し得た如くに感ぜられ、權力者及びこれに隷屬する手下の人々は、己が計畫の成就せるを悅び且誇るてあらう、然しながら自然は斯樣に征服せられても唯おとなしく從ふのみで、決してこれに對して復讐をせぬものてあらうか、

以上假定した如きことは素より今日の文明國に於ては決して有り得べからざることとて、實際に於ても亦決して無い、然しながら、未だ文明の十分に進まなかつた時代には、斯樣なことは敢へて珍らしくはなかつた、特に三四百年前の耶蘇敎諸國には幾らでも例のあることとて、彼の「ガリレイ」が時の權力者の信仰個條と異なつた地動說を唱へたために、耶蘇敎の本山から非常なる迫害を受け、「それても動く」と口の中て呟やきながら、地動說を撤回したと云ふ話のあるのも、僅にその一小例に過ぎぬ、今より述べんとすることは、別に其頃の事實を調べた譯でもなく、また現今の半開國の狀

態を基にしたのでもなく、全く机上の空論に過ぎぬが、昔のヨーロッパの一部には、或は實際その儘に當て嵌まるかも知れぬ、

さて、凡そ世の中の進步するのは、物質的の方面でも精神的の方面でも、總べて、自由研究の結果であつて、研究が自由に出來れば出來るほど、その成績も著しく、進步も速なる筈である、若し或る方面に關して、自由に研究することを禁じたならば、これと共にその方面の進步も全く止まることは云ふを待たぬ、時の權力者が自分等に都合の好い一定の信仰個條を製造して、これを全國民に强いる場合には、思想界に於ける自由の研究は全く出來なくなる故、この方面の進步は到底望むことは出來ず、自由研究の空氣が世の中から除き去らるれば、勢ひその影響が他の方面にも及んで、總べて研究といふことが十分に行はれず、隨つて國全體の進步が止まり、忽ち研究の自由な隣國とは、とても競爭の出來ぬやうな憐れな境遇に陷る虞がある、西洋歷史中の所謂暗黑時代とは、恐らく斯樣に思想界の自由研究を阻害した時代であつて、その間に世の中が少しも進步しなかつたのは、全く自然が復讐をしたのであると見做すことも出來やう、

(二)

「觸らぬ神に祟り無し」と云ふ諺が昔からあるが、この意味の文句が最も屢〻應用せられたのは、恐らく、權力者が暴威を以て或る信仰を强いた國の思想界に於てであらう、斯樣な國では、强制信條に對して聊かでも異存のあることをほのめかせば、忽ち禍が身に及ぶ故、心の中では各〻自分の眞なりと信ずる所を信じながら、公には決して口へ出さぬ、されば權力者の指揮に從ふて强制信條を傳へる僧侶、學者だけは、うるさく聲を發するが、眞の思想家は沈默を守るの外に途はない、發表を許された言論は、たゞ一種類に限られるから、思想界は極めて貧弱になつて、その進步は全く止んで仕舞ふ、この事は斯樣な時代の哲學、倫理學の狀況には著しく現はれて居る、即ち哲學に於ても、根柢から自由に考へて眞に眞理を探り求めんとすれば、時に權

力者の選定した强制信條と矛盾する議論をも出さざるを得ぬ故、斯様な時世に哲學で立つて行く利巧な學者等は、皆巧に人間の實際生活に直に觸れる如き問題を避け、深遠なとか玄幽なとか云ふ夢の如き理窟のみを微細に論じて居るか、左もなくば、論理法を曲げたり捩つたりして、當時の强制信條と一致するやうな結論に達する別誂への哲學系統を組み立てやうと努めた、倫理學の方では、この事は更に甚だしく、少しても强制信條と抵觸する議論は絶對に許されぬから、斯様な時代の倫理學者は成るべく理論を避け、實踐を重ずるといふ口實の下に、ひたすら强制信條を敷衍し註釋することにのみ力を盡して居た、されば哲學や倫理學に關して、如何に多くの著述が出來、如何に厚い書物が印刷せられ製本せられても、後世に遺るほどの價値あるものは素より一冊なりとも現はれる筈はなかつた、

斯様な時代にも、他の時代に於けると同じく、學者間には常に競爭があつて、誰々他を追ひ越して、早く出世しやうと骨を折つたてあらうが、その努力は總べて、一種特別の方面にのみ向けられた、自由に考へることは全く禁ぜられてある故、總べての努力は、如何にすれば强制信條と一致する結論に達し得べきかと云ふ問題に向ふて注がれ、この技術の巧な學者ほど權力者から無論重く用ゐられた、されば哲學ても、倫理學ても、この一方面のみには非常に發達して、殆ど一種の藝術と見做すべき程度に進んだが、これは、思想の自由な所ては到底見られぬことてある、三四百年前のヨーロッパには斯様な著書が澤山にあるが、今、名を暗記して居るものが無い故、此所に例を揭げることは略する、

斯様な國へ、他國から他の宗教を傳へ來つたときにも、また餘程奇態な有様が生じた、元來他國て起つた宗教は勿論此方の國の强制信條とは悉く一致する筈のものてない故、斯かる宗教を傳へる者は始めから大なる迫害を受け、如何に本國から補助せられても中々やつて行くことが六かしかつた、其間には内地人の賢い傳道者は種々考案を廻らして、終には、その國の强

制信條と兩立の出來るやうに繕ひ直し、本國のものとは大分異なつた鵺的のものとして傳へたが、かくては傳道者の口で說く所と、御經の文句に明記してあることとの間に矛盾が生じて、結局餘り盛にはならなかつた、

いづれにしても、一定の信仰を强いて思想の自由を束縛する所では、哲學でも、倫理でも 創作でも評論でも全く進步が止まつて仕舞ふ、祟りを恐れて人々が自己の思想を發表せねば、誰も特に罰を蒙むる者が無い代りに、何時まで過ぎても思想界が進步せず、忽ちにして世の大勢に後れて仕舞ひ、全國民が悉く自然の復讎を甘んじて受けねばならぬ時が來るのである、

（三）

權力者が强制信條を選定するに當つては、大抵國民が從來崇め來つた神を借りて、これに自分等に都合のよい種々の新意義を附け加へるが、これは恐らく、國民に馴染のない神を新規に製造するよりは、遙に便宜である故であらう、即ち耶蘇教國ならばエホバの神を持ち出し、神樣と此國との間には他に類のない深い關係があると說き、昔し我等の先祖が海を渡るに當つて船の無かつたときに、神樣が浪を左右に開いて海底を步かせて下さつたとか、暗夜には火の柱を立てゝ道案内をして下さつたとか、樣々な昔し話しを聽かせて有がたがらせ、かくして、何事をも神樣の仰として絕對に服從せしめんと企てる、然して、斯樣な昔話も、或る信仰を强制する方便として、權力者はこれを重大視する故、少しでもこれに對して疑を挿む如き言論は許されぬ、されば斯樣な國では、その國の歷史も、强制信條の敷衍に都合の好いやうに組み立てられ、これと抵觸する部分は悉く除き去られ、架空な傳說でも、これに利用の出來るものは適宜に脚色して編入せられる、眞面目な歷史の研究などは到底斯樣な國では行はれるものではない、

抑も自國の眞の歷史を知ることは、その國民が將來の發展を計畫するに當つて、極めて必要なことである、個人間の競爭に於ても敵を知り、己を知ることが大切

てある通り、他國民との競爭に當つても、先づ自國民の眞價を知らねばならぬ、若し自國民の眞價を知らず、慢に己惚れて、力に餘る不相當なことを行ふたならば、終には如何なる窮境に陷るやも知れぬ。かの自ら「選まれたる民」と稱して居た「ユデア」人が、遂に國を成さなかつたのも、或は斯樣な己惚の結果かも分らぬ、强制信條と、これに附隨する特製の歷史との行はれる國ては、その國民は自己の眞價を知ることが出來ず、常に大に己惚れる傾があるから、その將來には隨分危險が伴ふてあらう、然して、その原因は何かと云へば、矢張り、觸はれば祟る神を祭つて研究の自由を妨げ、思想界の自然の發達を止めたからてある、

(四)

また斯樣な時代には、敎育は如何なる有樣にあるかと考へるに、恐らくその內容には甚だしい矛盾があつて、恰も油と水とを一つの升に入れた如き體裁てあつたらうと思はれる、その譯は、凡そ强制信條なるものは元來、權力者が自分の都合から割り出して選定したものてある故、議論としては到底成り立つものてない、例へば、神樣は實に有がたいものてある、汝等はその御恩を忘れては相成らぬぞ、神樣の思し召によつて汝等を司配する法王殿の御命令には絕對に服從せねばならぬぞと云ふ如きことても、又は救世主が手て觸はつただけて盲人の眼が開き、跛者が走り出し、癩病患者が忽ち癒つたとか、今の法王殿は敬神博愛の德に富んて居られる有難い方てあると云ふが如きことても、議論をしては到底相手を心服せしめることは出來ぬ故、權力者は先づ議論などをせぬ幼年時代から斯樣な考へを頭の中へ注ぎ込んて、自然に全國民にかく信ぜしめやうと企てる、即ち子供の敎育に從事する者共に命じて、神壇の前に御辭儀をさせたり、讃美歌を謠はせたり、御經を誦む間謹んて立たせたりして、未だ何事をも辨へぬ頑是ない小供等に、始めから少しも疑ひを抱く餘地を與へぬやうにと盡力する。されば、斯樣な時代の學校て兒童に授けることは、無論主として、强制信條の敷衍てあるが、强制信條ても、これに附隨した

造り話しても皆眞實として敎へるのであるから、實は teach するのではなくて、cheat するのである、隨つて、これに從事する教員は teacher と云ふよりも寧ろ cheater と云ふ方が適當であらう、然し敎育がたゞ始終一貫して瞞すばかりならば、その內容には何も矛盾は起らぬが、隣國の進歩を見ては、瞞す外に、國民の知識を進めることをも務めねばならず、此所に於て敎育の仕事に互に調和の出來ぬ矛盾が生ずるのである、

四方の隣國が皆速に進歩するのに、自分の國だけが進歩に後れては、將來が極めて心細い、然して、四方の隣國が盛に進歩するのは、自然の物と自然の現象とを詳に研究して、その結果を知り得たことを人生に應用する故である、されば、權力者も國の維持、生存のためには、嫌でも、これ等の知識を進める樣に務めねばならず、そのためには學校の課目の中にも自然科學を組み入れて授けさせる、强制信條や特製の歷史話しなどとは違ふて、この方の學科は僞を教へることが出來ぬ、自然現象を目的物とする學科では、如何に敎師が瞞さうとしても、自然が承知せぬ故、決して瞞すことは出來ぬ、それ故斯樣な時代の學校では、二種の全く異なつたことを同時に行はねばならぬ、即ち一方に於ては强制信條を敷衍して授け、子供を瞞して、その思考力の發達を壓さへて置かねばならず、他の方に於ては自然現象を自由に研究せしめ、眞を採るやうに子供を導いて、その智識の進歩を促さねばならぬ、前に水と油とを同じ升に入れたやうな狀態とはこれを云ふたのである、斯樣に、相反して、到底融和することの出來ぬ二種の仕事を同時に爲やうとすれば、決して兩方ともに十分に行はれる筈がない、若し一方に重きを置けば、他方は是非とも閑却せられるに定まつて居る、權力者が强制信條の普及に重きを置くだけ、それだけ、自然現象の研究は敎育上輕んぜられ、從つてその方面の研究が進まず、終には、四方の隣國が盛に進歩するに反し、自己の國だけは、その足元にも寄れぬ程の遲れ方をして、生存が次第に困難になるを免れぬ、敎育は元來、他の民族の間に挾まつて、自己の民族が長く

立派に生存し續け得ることを目的とし、これに適するやうに子供を仕立てるべき筈のものであるのに、權力者が自分等だけに都合の好い信仰個條を人民に強制する所では、全く、その目的が變つて仕舞ひ、民族の將來の運命に向つては却て甚だ不利益なことを行ふに至り易い、教育に從事する者が皆それ〴〵相應に努力して居るに拘はらず、眞の効果が少しも擧がらず、國民の思想が却て退歩して、國運も追々下り坂に向ふたのは全く一定の信仰を強制して思想界の進歩を人爲的に止めたからである、

(五)

強制信條及びこれに附隨する種々の造り話しは、何れも證據を示して理論的に會得せしめ得べきことでない、それ故、子供等にこれを說き聞かせ、頭からたゞ信ぜしめやうとすれば、勢ひ、迷信を助勢することに當る、普通の考へを以ては到底信ずることの出來ぬことを猥りに信ずるのが即ち迷信であるが、強制信條は多くの場合には、健全な人間の考へを以ては信じ難い部分を含んで居る故、これを信ずるのは已に迷信の範圍に屬する、然して、力を盡して一種の迷信の普及を圖り、その盛なることを望む以上は他の迷信をも強ちに排斥する途はない、ハリストスの奇蹟を信ずるやうに養成せられた腦髓は、モハメットの不思議をも同じく信じ得る譯である故、斯樣な所では迷信を防ぐことは到底望まれぬ、キロマンシーでも、ホロロジーでも、ツィガンカのカルタ判斷でも、悉く盛に行はれ、世間一統に迷信の空氣が充ちても、これを破ることは出來ぬ、何故かと云へば、これ等の迷信を破るための論法は、若し強制信條の方に向けたならば、同じくそれをも破り得る論法である故、強制信條を尊重する以上は、容易に振り廻すことが出來ぬからである、斯樣な次第であるから一種の迷信を強制する國では他の迷信も隆盛を極めるであらうが、迷信と自由研究とは正反對のもの故、迷信の盛な國では研究は決して進まず、研究が進まねば忽ち隣國よりは著しく後れて仕舞ふ、昇天祭に詣らせられたり、一生に一度は是非エレサレムへ參れ

などと、敎へられても唯その儘に信じ從ふだけて、その理由を探り窮めたいと云ふ心が少しも起らぬやうに成つては已に研究心が痲痺して居るのてあるから、何れの方面に向ふても碌な發明も發見も出來る筈は無い、迷信の盛な國ては、年々迷信のために費す時間と、費用と、勞力とは實に莫大てある外に、各方面の進步が總べて妨げられるのてあるから、迷信の少ない國とは對等の競爭は六かしく、隣國との懸隔が益々甚だしくなるてあらうが、一定の迷信を强ひる以上は、斯樣な狀態に立ち至るのを避けることは出來ぬ、

（六）

迷信が盛に行はるれば、常識は衰へざるを得ない、常識とは經驗に基づいた實際的の判斷力を云ふのてあるから、常識と迷信とは到底一致せず、常識が增せば迷信は減じ常識が降れば、迷信は昇る、常識の發達した國民ならば何事も常識て適當に判斷することが出來る故、規則の如きも大要を定めて置くだけて宜しいが、常識の無い國民は何事も細かい詳しい末の末までも規則を定めて置かねと取扱ひが出來ぬ、常識の發達した國民と常識の無い國民とては、年々事務を取扱ふ間にどの位の時間と勞力との消費に相違があるか知れぬ、されば常識は成るべく發達させたいものてあるが、常識とは經驗に基づく獨立の判斷力てある故、これが發達すれば總べての迷信は破り去られ、隨つて强制信條もその根抵が危く成る、子供の中から迷信て固めて置けば、その迷信に向ふて疑を起さぬ代りに、常識が全く發達せず、隨つて國のために不利益てあり、常識の發達するやうな敎育法を施せば、迷信を破り去つて、强制信條までも批評眼を以て見るやうになるから、權力者には少し都合が惡い、若し權力者が斯樣な場合に迷信の方を强制すれば、これは次代の國民の常識を犧牲に供する仕業てあつて、國民はそのため、將來大なる損害を受けねばならぬ、

また斯樣な時代にはたとひ常識のある人ても、これを運用することは出來ぬ、他の迷信に對しては常識的の批評を下しても差支へは無いが、强制信條中の迷信

に對しては全く批評を許されない、死んだ者が三日目に蘇つて天に昇つたなどは到底信ぜられぬとか、亭主と同棲せぬ女が孕んだのは聖靈のためでなくて、大方情夫が有つたのであらうとか、法王とても同じ人間である以上は人間共通の弱點を具へて居るであらう、特に大寺院の奥で競爭を知らずに育てられたのであるから、普通の世間へ出したら、とても一人前には通用せぬ人間であらう、などとは、常識のある人ならば誰でも考へさうなことであるが、三四百年間のヨーロッパで此樣なことを口に出したら恐らく命は無かつたであらう、されば、常識で物事を判斷し處置すると、何所で強制信條と抵觸せぬとも限らず、頗る險呑である故、些細なことまでも本山に伺ふた上でなければ、言ふことも行ふことも出來ぬ、常識を働かせることを止められたために生ずる損失は、その源を糺せば、總て迷信の強制に基づくことである、

(七)

強制信條は、多くは神と自分の國との間には一種特別の關係があるが如くに說くを便利とする、即ち神は自分等のみの神であつて、他國にはこれに類するものは無いとか、神の特別の恩惠を受けるものは自分の國民のみであるとか、云ふて、自國を以て總べての他國に優つたものと信ぜしめ、隨つて、強制信條の如きも、自國民のみはその精神を解し得るが、他國人には到底解し得ざるものであると敎へ込み、これが即ち自分の國が他の國々に秀てる所以であるなどと己惚させる、これは權力者の選定した信仰個條を普及せしめるに當つて、愚な人間の弱點を捕へる巧妙な策ではあるが、そのため國民は他の國々から不思議な國民、解すべからざる國民として仲間以外のものと見做され、交際の上に非常な不利益を受けねばならぬ、子供の中から強制信條の下に敎育せられたものは、自分等の特殊の精神狀態は到底他の國民等の了解し得べき所でないなどと、敎へられた通りに得意になつて居るが、民族の發展の上にはこれが大なる障害となることがある、何所の人間でも己惚の無いものはないが、自分で、最も優

れたりと思ふて居るヨーロッパ諸國は最も己惚も烈しいから、互に他國民の文明の程度を測るには、自分が他國民を了解し得る程度を標準とし、了解の出來ぬ國民は、これを野蠻國と見做して、盛に輕蔑する、彼の國は不思議な國なり、不可解の國なり、彼の國民の心理狀態は到底自分等の了解し得ざる所であると評するのは、即ち彼の國民は野蠻である、到底自分等と伍すべきものでないと云ふのと同じ意味である、所て、他國民には不可解なる信仰個條を國內に强制し普及せしめると、その國民と他國民との間には思想上に非常な距りが生じて、他國民は總べて、その國を仲間以外のものと見做し、終にはこれを嫌ひ、その發展を壓さへ妨げやうと務めるに至る、斯樣に成つてはその國民の未來は、頗る苦しいことに成らざるを得ない、

一體何れの國民にも、國自慢はあるが、子供のときから、自分の國は特別の神樣と特別の關係のある、他に比類なき國であると教へ込まれた國民は、國自慢もその極度に達して、他國人に自國の缺點を列擧せられ、自己の思想の幼稚なことを嘲られても、その云ひ廻し方が婉曲であると、自國の長所を譽められて居る積りて喜んで居る、輕蔑せられながら、尊敬せられて居ると思ふ程に己惚が强いと、先方と此方との間に意志が疏通する譯がないから、他國人も終には遠廻しに當て擦ることを止めて、直接法て、明に短所を罵倒するやうになる、斯樣に成つては、外に向ふて民族の發展を圖ることは愈々六つかしい、然してこの源は何かと尋ねると、初めに、常識と掛け離れた强制信條を國內に施したからである、

（八）

以上述べた如く、權力者が自分に都合の好い一定の信仰個條を强制して、少してもこれと異なつた考へを發表した者を嚴罰に處した國ては、思想界の進歩は全く止まり、哲學でも倫理ても他國には通ぜぬ畸形なものとなり、歷史の自由研究は出得ぬ故、國民は自國の眞の歷史を知らず、矢鱈に己惚れて短所を却て長所と心得るに至り、教育は欺き瞞すことと、智力を啓發す

ることゝを同時に行はんとするために効果が全く現はれず、到底四方の隣國とは知力に基づく競爭が出來なくなり、强制信條で一種の迷信を保護奬勵する以上は他の種々雜多の迷信をも退けることは出來ず、また常識に依つて物事を論じ、事を行へば、何所で强制信條と抵觸せぬとも限らず頗る險呑である故、先づ常識を用ゐざる方が安全となり、その結果として他國からは全く不思議な不可解な精神的にはなほ未開の狀態にある國と見做され、仲間から外されて、四方の隣國を皆敵とせざるを得ぬやうな運命に陷る、

强制信條の定めてある國では、これに抵觸することを言へば忽に禍が身に及ぶ故、誰も沈默を守るの外はない、即ち祟りを恐れて神に觸らずに居るのであるが、神に觸る者が無ければ、無論罰を蒙る者も無く、神は全く祟らなかつた如くに見へるかも知れぬ、然しながら誰もが神の祟りを恐れて神に觸らずに居ると、その國民は終に此所に述べた如き極めて不利益な狀態に陷つて仕舞ふ、されば觸つた者に祟る神は實は觸らぬときにも潜に祟つて居るのである、觸つた者のあるときに、其一人に其時だけ祟る神は、誰も觸らぬときは全國民に永久に祟る、即ち一人に祟らぬ代りに頭割りに全體に祟り、一時に祟らぬ代りに、五十年か百年かの年賦で祟るのである、然してその祟りは長く續けば續くほど積もり重なつて、終には到底取り返しの附かぬやうなことに成るから、實に戰慄すべきほど恐ろしい祟りである。

自然は人類に征服せられて、決して復讐せずに居るものではない、物質的、身體的の方面ばかりでなく、思想的、精神的の方面に於ても、人爲で自然を壓迫すれば必ずそのために自然の復讐を受けねばならぬ。知力が進み、腦髓が發達すれば、それに伴ふて常に新しい思想の生じ出るのは自然の働きである、權力者が一定の信仰個條を造つて、これを强制し、思想の進歩を止めるのは、即ち人爲を以て自然の働きを壓し止めるのであるから、たとひ一時は自然を征服し得たる如き有樣を呈しても、忽ち自然の復讐の結果が現れて、早

曉自然の成り行きに從ふの外なき時代が到着する、

凡そ世の中は常に自分で自由に考へる力のある極めて少數の人々と、自分には考へる力が無くて、總べて他人に考へて貰ふ極めて多數の人々とから成り立つて居る、極めて多數の人々は常に他の人の考へたことを聞いてその通りに考へて居るだけ故、一定の信仰を強制せられても少しも、強制せられて居るとは感じない、されば強制信條の壓迫を感ずるのは極めて少數の人々のみである、數て云へば、強制信條のために束縛を受けるのは或は極めて少數の人々であるかも知れぬが、思想の發達の上から云へば、これ等の少數の人々が最も大切な人々であつて、これ等の人々が新な說を發表しなかつたならば、全國の思想界は少しも進歩せぬ、強制信條と云ふても極めて少數の人々さへ、我慢をして默して居れば、他は別に強制とも何とも感ぜぬ輩のみである故、無理に強いることが甚だ少ないやうにも見へるが、結果から云ふと頗る重大な事である、

嘗て或る僧侶が、獨逸國「ワイマール」の大公の所へ來て「ヘッケル」のことを訴へ、彼は斯樣々々の怪しからぬことを唱へて居る、耶蘇教國の體面にも關はること故、斯くの如き言論は宜しく嚴禁なさるが適當であらうと言ふた、大公はこれを聞いて、「御身は「ヘッケル」は自分の信ずる所を唱へて居ると考へるか」と問ひ返し、僧侶が「素よりのこと」と答へたので、「それでは、御身も彼も同一のことを爲て居るのではないか」と云ふて、僧侶の勸めを取り上げなかつた、眞に國民の進歩を圖るものは、斯くの如くに心を寬く持つて、如何なる言論をも自由に發表させ、相戰はせしめ、思想界の自然の發達を助勢し自由研究の空氣を國内に漲らせ總べての方面の進歩を促すべき筈である、獨逸國が近年非常な進歩を爲したのも、恐らく各方面の自由研究が盛に行はれたからであらう、

繰り返して云ふが、觸はつて祟る神が祭つてある間は誰も祟りを恐れて此神に觸らぬ、然し、誰も觸らなければ全く祟りは無いかと云ふと、決して、左樣な譯てはなく、前に述べた通り、全國民に長く祟り、然も

頗る恐ろしい結果を生ずるのである、然しながらこの祟りは、漸々現はれて來るだけて、一時に目立つて現はれぬ故、目前の事より分らぬ人間は、全くその祟りを知らずに居る。平凡な人々までが、祟りの結果に氣が付く頃は、病て云へば醫者が已に匙を投げる程に成つた頃であつて、最早回復の望みは無い、一定の信仰を強制することも、時と場合とによつて無論必要て、愚昧な人民を率ひて、國家の危難を切り拔けやうとするときの如きは、恐らくこれによるの外はなからうが時勢の進歩に構はず、何時までもその信仰を強制し續ければ、終には前に述べた如き苦しい狀態に陷つて次第に、滅亡せざるを得ない、

かく考へると、憲法によつて、信仰の自由を保證せられて居る文明時代に生れた我々は、何と幸福てはないか、

支那人に代りて日本人を嘲る文

永井柳太郎

一

後趙の石勒一日大に群臣を燕し、問ふて曰く、『朕、古への何れの主に比すべきぞ』と。人あり答ふらく、『陛下は之れ漢の高祖に過ぐ』と。石勒笑つて曰く、『人豈自ら知らざらんや、卿の言甚だ過ぎたり。朕若し高帝に遭はゞ當に北面して之れに仕ふべし、宜しく韓彭と比せんのみ、又若し光武に會はゞ當に中原に馳驅すべく、鹿未だ何人の手に落つるかを知らざる也』と。嗚呼石勒よく自己を知るの大丈夫と謂ふべく、彼れが此知己知敵の精神こそ實に彼れをして列強を平定し、天

王を稱するを得せしめたる也。然るに現時の日本人は僅かに二三回の戰爭に勝ちたりとて、忽ちに世界の大國民を以て自負し、自己を省みるを知らず、また敵を學ぶを知らず、支那革命の如きも、これを目して支那人の自力を辨別せざる冒險なるが如くに冷笑せり。されど支那人は果して日本人の思惟せるが如く革命を完成するの能力を缺けるや。請ふ彼の中米のメキシコ共和國を見よ、彼れや人口約一千五百萬、而も其中純粹の白人と稱すべきは僅かに一割九分、他は悉く有色人種にして、殊に亞米利加印度人其の三割八分を占む。メキシコより更に南方なるガテマラ、ハイテ、ホンドラス諸共和國の如き、何れも其住民の大部分は亞米利加印度人なり。若し夫れ阿弗利加西海岸に於けるライベリア共和國の如きに至りては、純然たる黒人のみを以て之を組織し、黒人に非ざれば選擧權を有するを得ずとせり。而も之等の共和國は何れも既に半世紀前後の歷史を有し、今日に於ては其發達に於て、將た其進歩に於て多く他の諸君主國に遜る所あるを見ざるに非ずや。知らず、日本人は、支那人を以て之等の亞米利加印度人若くは阿弗利加の黑人にも及ばざる人種なりとなすか。何ぞ其妄斷の甚しきや。彼等は支那の歷史を知らざる也。支那の文明を解せざる也。支那の文明たる、其淵源頗る遐く、寔に世界の進歩と離るべからざる關係を有す。彼の儒敎の如きは其哲學的思想に於ても、また道德的觀念に於ても、西洋諸國の道學に比して毫も遜色なきのみならず、現に日本人自ら千有餘年の間之に依りて其思想を練磨し、其道德を涵養し來れるに非ずや。且つ啻に如此き思想上の進歩のみならず、また物質上に於ても著しき發達を遂げたり。彼の火藥の發明の如き、羅針盤の發明の如き、印刷物の發明の如き、陶器の發明の如き、何れか支那人の事業にあらざる。

二

支那は以上述べたる如く世界の文明史上に於て偉大なる事蹟と勢力とを有するのみならず、其政治思想に於ても迥かに他の東洋諸國よりも民主的發達をなせ

り。蓋し支那の革命には三種の形式ありき。第一は之を禪讓と稱し、其源を堯舜に發す。則ち凡そ君主たることは私事に非ず、天命に從て其民を安んずべき公事なるが故、最も聰明にして能く萬民を信服せしめ得べき者が主權者たるべきなりとの思想に基く。茲を以て堯は其の子不肖にして位を繼ぐべき器に非ざるを察し聖人舜を得て之れに位を讓り、舜亦其子の不肖を捨てゝ禹に讓れり。是れ革命の第一種なりき、第二は則ち放伐なり、君主にして若し其德萬民を率ゆるに足らざるとき、之を放ち更に賢者を擧げて民を治めしむるもの則ち是れなり。殷の湯王、桀を放ふて自ら王となり、湯王の子孫暴政を逞ふするに至りて周の武王之を伐ち、代りて其位に即きたり。而も其之れを爲す、彼等は之を當然として毫も怪まず、孟子の如きも亦左の如く極言したり。人あり孟子に問ふて曰く、『湯、桀を放ち、武王紂を伐つ、是ありや』子曰く、『有り、傳に於て是あり』と。更に問ふて曰く、『凡そ臣にして君を弑す、可ならんや』と、答へて曰く、『仁を賊ふ者之れを賊と謂ひ、義を賊ふ者之れを殘と謂ふ、殘賊の人之れを一夫と謂ふ、一夫紂を誅するを聞く、未だ君を弑するを聞かざる也』と、以て其精神の存する所を窺知するに足る。若し夫れ、第三の方法に至りては、騷亂とにも稱すべきものにして、唯野心ある者起ちて、禪讓に依るに非ず、又放伐に依るに非ず、其の武力に依りて王位を簒奪する也。第三の方法は例外に屬すと雖も、其他の場合にありては彼等王者の天命を以て萬民の撫育に在りとなし、此天命を完ふせざる君主は之れを逐ふに躊躇せざりしは誤なき事實にして、其政治的思想の他の東洋諸國に比し遙かに民主的なりしは疑ふべからざる也。依是觀之、支那人は其思想に於て或る程度まで共和政治に對する訓練を受けたる者といふも可也。故に若し彼の亞米利加印度人、又は阿弗利加の黑人にして共和政治を建設し、之れを維持するの能力を有すとせば、支那人豈奚んぞ之れを能くせざるの理あらんや。日本人が支那の革命を見て其完成を危む如きは、是れ偶々日本人自らの支那文明史に關する無知と

世界の政治狀態に對する識見の缺乏とを表白するものに外ならざる也。

三

如斯き有樣なるが故、昔より支那の官吏間には英米の如き民主思想の發達せる國の官吏等と等しく、己れを處するにパブリック、サーヴァント則ち『公僕』なる觀念を以てするの思想大に發達せり、彼の孫逸仙が昨年二月十四日袁世凱を南京に招き、從來の臨時政府を中心として、民國の統一政府を組織するの急要なるを觀破するや、彼は參議院に對して自ら臨時政府の民國大總統たることを辭するの意を通じ、且つ曰く、『孫民國建設の初に方り、選ばれて公僕となり、宣言宣章を草し、專制政府既に倒れ、列國の民國を承認するに於て本總統は即ち辭職を行ふべきことを誓へり。現在民國の各國の爲め承認せらるゝこと將に旦夕を期すべし。本總統正に誓言を踏んで辭職し引退すべき也。玆に貴院に諮り告ぐ』と。何んぞ其言の堂々たるや。治者が自己を國家の公僕なりとする思想は。實に支那の歷史に一貫せる思想にして、吾人は支那官吏の文書を繙く毎に隨處に之れに似たる詞句を發見することを得。既に此の如き崇高なる殉公の精神あり、故に彼の禪讓の如き美風の起る亦宜ならずや。豐臣秀吉は日本の英雄也。而も彼れの天下に對する態度や如何。其疾を得て將に死せんとするや、秀賴歲甫めて七歲、以て群雄を率ゆるに足らず、天下に號令するの威なきを憂ひ、悶々の情禁ずる能はず、後事を家康、利家、景勝、秀家、輝元等に托すると共に、特に幼冲の秀賴に背くなからしめんとして彼等の血判を徵し、而も尙ほ安んずる能はずして苦悶の裡に絕命せり。其終焉の醜なる、寧ろ憫むに堪へたらずや。反之、彼の劉備を見よ、彼れ亦秀吉と同じく身を草莽より起し、百戰苦鬪、萬死を出でゝ纔かに天下を得たり。然るに彼れの命將に盡きんとして其子劉禪尙未だ齡十七、天下に主たるの材に非ざるを思ひ、言を其臣諸葛亮に遺して曰く、『嗣子助くべくんば之れを助けよ、若し夫れ不可ならば請ふ卿自ら之れを取れ』と。大丈夫當に此の氣魄なかるべから

ず。彼れが天下を以て天下の天下となし、毫も自己の天下となすの意なかりしや明也。玆に於てか孔明も亦大に其誠意に感激し、『臣豈敢て股肱の力を盡し、忠貞の節を致し、之れに次ぐに死を以てせざらんや』と誓へり。吾人固より現時の支那官吏が總て如其き高尙なる精神を以て政治に當れりと謂ふに非ず、彼等の間に賄賂公行せられ、黄金の爲めに公權を濫用するものゝ多きも之れを認めざるに非ず。されど共主腦たる人士が此の如き高尙なる政治思想を懷けるの一事、以て彼等の國家社會に對する觀念の甚だ高遠なるを證して餘あるを覺ゆ。さるにても彼の官尊民卑の弊風一代を蔽ひ、官吏に非ずんば殆んど人に非ず、田夫野人を見ること恰も牛馬の如き日本の官吏に對しては好箇他山の石たらずとせんや。日本人稍もすれば則ち支那人の收賄を難ず。言や甚だ可也。されど日本の現狀は如何。一國々民の選良と稱せらるゝ國會議員にして、收賄の罪に坐して縲紲の辱を受けたる者其數幾十なるを知らず、彼等の選擧に際しても亦、嘗て投票賣買の行はれざる地方ありや。投票する者も、また投票せらるゝ者も、共に滔々相率ひて賄賂の爲めに公權を濫用し、恬として愧づる所を知らざる也。甚しきに至りては一代の道德を指導し、身を以て新國民を率ゆべき敎育家輩、常に其口に正義公道を唱ふるに拘らず、收賄の爲めに獄に投ぜらる。それ社會を指導し、警醒すべき政治家、敎育家にして然り、況んや實業家、銀行家、軍人、新聞記者等の如きをや。英國に於ても彼のワルポール時代に於て賄賂公行せられ、爲めに議院の內外著しく腐敗せりと稱せられたることあり、而も其腐敗たる之れを日本現時の腐敗に比較せば、尙ほ迥かに及ばざりき。當時英國議會にはピットの如き偉人あり、少數の同志と共に力を極めて此賄賂政策を攻擊し、之れを撲滅せんと企圖せり、然るに日本に在りては曾てかゝる有力なる反對運動の起りしを聞かざるのみならず、一度日糖事件に坐して苦役に從事したる者も、其獄を出づるや洒然として政黨本部に出入し、議員の候補者たるを公認せらるゝが如きを以て見れば、吾人は日本人の良

心の存在を疑はざるを得ざる也。夫れ然り、而して此の如き自ら醜陋の極に達せる日本人が却て支那人の收賄を云々するが如きは、これ寧ろ百歩を以て五十歩を笑ふもの也。自らを知らざるも亦た甚しと謂ふ可し。

四

吾人の之れを拜誦する毎に未だ曾て感激措く能はざるものは、彼の　先帝陛下が明治元年三月五ヶ條の御誓文と共に下し賜ひたる御宸翰也。曰く、「私かに考ふるに中葉朝政衰へてより武臣權を專らにし、表はには朝廷を推尊せるも實は敬して之れを遠ざけ、億兆の父母として絕て赤子の情を知ること能はざらしめたり。」と。實に吾が皇室は臣民を見ること赤子の如く、天下に君臨し賜ふに父母の情を以てせらる。是れ寔に日本國民の等しく、感佩し奉る所也。然るに此間に立ちて國政を掌るべき有司の輩『公僕』の觀念に乏しく、稍もすれば人民の自由を束縛し、ために日本人は時として支那人よりも權勢の壓迫を感ずる也。日本人は常に支那人を目して時代後れと嗤笑す。而も彼の社會的運動の如きは日本に於けるよりも、寧ろ支那に於て其活動の盛んなるを見る。日本に在りては國民は總て均しく、陛下の赤子なるにも係らず其社會の下層に位せる者は其利益を代表し、其幸福を增進すべき唯一の機關たる政黨を有せず、また新聞紙を有せず、ために彼等は其訴へんと欲する所を訴ふるの機會だになき也。偶々彼等に同情する者其救濟方法を研究せんとするあらば、政府は直ちに之れを目して反賊と爲し、一時は社會なる言語を使用することをすら絕對に禁じたりき。之れに比すれば支那人の如きは日本人よりも遙かに言論の自由と活動の自由とを有するものと稱するを得べし。支那に在りては今日既に中國社會黨なるもの公然設立せらる。素よりこれが黨員と稱するもの丶中には眞に克く社會主義の意義を解するに非ず、唯奇を喜ぶの餘り、他の說に雷同して其運動に加はれるが如き者なしとせずと雖も、而も既に約五十の支部を有し、三萬の黨員を得機關新聞を發行する等着々として其步を進めつ丶あり。此他尙ほ自由黨及び同盟會と稱するものあ

り、等しく社會主義を奉じ其實施の爲めに相共に力を致しつゝあり。就中其中國社會黨と稱する一派に至ては滿十六歳以上にして精神に異狀なき限り、男女を問はず、總て之れが黨員たるを許し、且つ黨中に在りては男女平等の權利義務を有することゝせり。如斯きは今日の日本に於て、洵に想像だもなし難き所なり。頃日かのエリオット博士が日本の女子教育に對する保守的意見なるもの發表せられたるに對してさへ甲論乙駁、一波動いて萬波靜まらざるが如き觀あり。吾人は其所謂教育意見なるものが果してエ博士自からの所論なりや否やに關して先づ疑なき能はざるものなりと雖も、假りにエ博士が彼れが如き意見を發表したりとするも、之れに乘じて直ちに日本の女子に高等教育を施すことを有害なるが如くに喋々する、眼孔豆よりも小なる日本人の尠からざるを見て轉た支那人の思想の迥かに遠大にして進歩的なるに感ぜざる能はず。且つ之等の支那人の中には此主義を信ずるものゝ常として時として激越なる態度に出づる者も亦之れ無きに非ざるに係らず、而も支那政府が此の如き黨派の存在を公認し、其運動を默許しつゝある宏量に至りては吾人の更に敬服を禁ずる能はざる所也。

五

抑も日本人にして眞に能く今回の支那革命の眞意を解せる者果して幾何かある。日本人の多數は今回の革命を以て宛も三國誌中の事變と同一視し、或は其主腦者の評論を事とし、或は交戰の經過を云爲するに止まり、能く活眼を開いて革命の眞に因て來る所、其勢の趨く所を洞察する者なく、徒に群盲象を評するが如き愚を敢てしつゝあり。之れ豈寧ろ憫笑に値せざらんや。蓋し日本人の如きは桃源島裡に跼蹐すること年久しく、世界の大勢に無頓着なるが故、未だ之れを看取し得ざるならんも、各國民の自覺的運動が輓近極東及び近東に發現し來れること著しきは明なる事實にして、彼の一千九百七八年代よりして勃發せる各地の叛亂、革命の如きは即ち其結果に外ならず。印度に於ては内外到る處爆烈彈騷ぎを生じ、サド、カトズン、ワイリドは

遂に爲めに其毒手に斃れ、ロード、ミントー亦其狙撃を蒙るあり、一時國內の紛亂其極に達したりき。之れに續きて埃及に於ても亦同樣の運動起り、英國政府がスエズ運河の特權延期を提議するや、埃及人は一齊に起ちて猛烈に之れに反對せり。就中國民黨首領モハメッド、ファリッドの如きは其同胞に與へたる宣言書に特記して、吾等の主張は排英と立憲とに在りと公言して憚らざりしのみならず、親英派を以て目せられたる總理大臣ブートロス、パシャは遂に非命に死するに至りき。其他彼斯に於ても、土耳古に於ても亦等しく革命的動亂に遭逢せり。即ち彼斯にては前王モハメッド、アリ妄りに兵力を以て議會を壓迫せんとしたる結果、國民の大々的反抗を受け、遂に自ら敗れて國外に放逐せられ、土耳古に在りてもアブドゥール、ハミッド帝の專橫を憤りて起ちし革命派は軍隊と事を共にするに至りて、帝之れを制するを得ず、國政の改革は彼斯に於けるよりも尙ほ容易に行はれたりき。此等の騷亂は其形式一ならずと雖も而も其因總て國民の自主的精神の發達に歸すべく、一言以て之れを蔽へば國家を以て國民の國家なりとせんとする運動に外ならず。彼の支那の革命の如きも亦此の世界的思想の大潮流に勃發せるものなるを以て、之れに比するに過去の支那に於ける所謂代朝なるものを以てせんとするが如きは、是れ根本的謬想にして決して其眞相を得たる所以に非ざる也。蓋し支那の過去に於ける革命は其禪讓に依るものも、其放伐より來るものも、將た又其騷亂に發したるものも、總て其目的とする所單に主權者の變更に止まり、政治制度は依然面目を改むるなく、茫々數千載を經して同一の專制々度を繰返せるに過ぎざりし也。然るに今回の革命たるや其主眼とする所決して王朝の變更の如き小事に非ず、其政治制度を根本より改革して、彼の彼斯、土耳古等に於ける革命と同じく、支那を以て支那人の支那と爲さんとする運動也。少くとも國民的自覺より來れる思想上の一大產物也。嗚呼此世界的思潮、自主的精神、此高大なる思想を眞に了解し得たるもの日本人中果して幾人かある。請ふ之れを日本

の現狀に見よ　先帝が王政維新の大業を遂げ以て日本を統一せられたるのみならず、明治廿二年には曠古の大典憲法を賜ひ、日本をして日本人の日本たらしむとの御詞をさへ下し賜ひしにも係らず、其憲法實施後既に廿三年の星霜を經たる今日に至りても、尙ほ且つ政權は依然所謂藩閥なる一種の階級に壟斷せられ、國會は有れども無きが如く、毫も其本來の任務たる國民の利害を代表して政府を監督する如き意氣の現はるゝなく、却て藩閥者流に盲從して私利を圖り、便安を事とし、誠意なく、熱血なく、羞恥なく、活氣なし。此故に國民の權利毫も保護せらるゝに由なく、秕政毫も革むるに由なく、租稅愈よ重く、物價益々騰貴し、生活の困難日に劇甚を加え、飢へて食なく、病んて藥なく、路頭に彷徨せる可憫なる同胞の數幾十萬なるを知らざるに至れり。然るに政府は之れに對して何等救濟の策を講ぜんとせざるのみならず、彼の穀物輸入稅の如き明白なる惡稅の撤廢さへ斷行するの勇氣を缺けり。日本は今尙ほ藩閥の日本なり。何處にか日本人の日本あらんや。此の如くにして日本人は尙ほ能く厚顏にも他國の文明を嗤ふ事を爲すか。嗚呼是れをしも尙ほ自覺ある國民なりと謂ふを得べくんば天下何處にか自覺せざる國民あらん。支那の革命に際しては日本の志士倉皇として彼地に赴き、以て之れが應援を爲すべく奔馳せりと聞く。吾人はかゝる人士が支那の國民的運動を助くる以前、先づ其母國たる日本の國民的運動を喚起し、先帝の命じ賜へる如く日本を以て日本人の日本とすることに努力し、かの日本を以て閥族の手に獨占せんとせる輩を放逐せんことを希はざるを得ず。自己の家屋に泥水の浸入せるを知らずして隣家の急に赴く。これ或は日本人の所謂義俠ならんも、支那人は之れを宋襄の仁と嗤笑す。

六

日本に於ても王政維新の大業を遂げ、廢藩置縣の斷行を爲したる當時に在りては、進取の氣象國内に漲り、國民的自覺亦漸く潑溂たるものありしが如しと雖も、爾來未だ半世紀を出てざるに早く既に國民の元氣は消

蹐し、また當年の面影だになし。維新の當初　先帝の下し賜へる彼の五ヶ條の御誓文の如きは革新の意氣正に天を衝くの慨あり、進取の氣象言外に躍動し、今尙ほ之れを讀む者をして覺えず肉動き血湧くの感あらしむ。隨て當時に於ける志士の如きは卓犖俊逸私事を捨てゝ公事に竭す底の青年に富みき。然るに今や即ち然らず、青年はあれども無きが如く、國家の大事の如きさへ、稍もすれば元老の一言に依りて定まるが如き憫むべき狀態に在り。さるにても今日の日本人、殊に活氣正に横溢すべなるべき青年の意氣何ぞ甚だ振はざる。之れに比すれば支那の青年の思慮の遠大なる、意氣の壯烈なる、寧ろ欣仰すべからずや。今次の革命の如きは、正に黃興の如き、黎元洪の如き、近く來朝したる胡瑛の如き、其他數多の新教育を受けたる新進氣鋭の青年の手に依りて爲されたる事業に非ずや。夫れ支那は古來非軍國を主義とし兵士の如きは幾んど乞丐の徒と選ぶ所なきまでに卑められたり、諺あり曰く、『好鐵不打釘、好漢不當兵』と、以て如何に兵士の社會に容れられざりしかを窺ふに足る、隨て兵士の多くは、傭兵也、嗚呼此の如き劣弱なる兵士を率いて餘威尙ほ衰へず、餘勢尙ほ未だ熾なる滿州朝廷に向つて革命の軍を起す。誠に是れ生命を賭するに非ずんば能はざる藝當也、讀者はかの近頃に至るまで須磨浦に亡命しつゝありし清末の快男兒康有爲が清廷の宮中に演じたる一齣の悲劇を記憶せりや。彼は實に光緒皇帝と肝膽相照して世に所謂變法自强の策を行はんとせり。而も不幸にして西太后等保守派の妨ぐる所となりて果さず。玆に於て彼は皇帝を說得し、乞ふて天津に行幸せしめ新建陸軍の觀兵式を擧行し、其終るを俟ちて直ちに全軍を率いて北京に殺倒し、以て西太后等を斃たしめんと謀れる也。然るに事袁世凱の翻心に依りて洩れ遂に成らず爲めに皇帝は瀛臺に幽閉の身となり、康亦身を以て纔に日本に亡命し來れり。此の如く彼等支那改革家の間には眞に死を以て國運を挽回せんとする意氣の充實せるを見る也。

日本人稍もすれば曰く、「孫逸仙、袁世凱に賣らる、」

と。又曰く、「黎元洪は革命軍に裏切りせり」と。何ぞ其觀察の淺薄なる。此の如きは總てこれ小人の心事を以て君子の衷中を忖度するもの也。孫の如き、康の如き、黄の如き、將た黎の如き、皆これ清節幾十年、滿朝の權力に媚びず、王軍の誘惑に陷らず、偏に祖國の運命を挽回し万民を安んぜんが爲めに生命を捧げて奮鬪したる尊むべき勇將にして、其意氣寔に敬服に堪えず。何んぞ今俄かに黄金、權勢のために其節を賣らんや。これを彼の身自ら大政黨の首領として議會の大多數を擁し、内閣の首班として大政を掌れるに拘らず、常に元老の鼻息を窺ふにあらずんば國政を決し能はざりし西園寺侯や、身自ら國政を、補佐すべき重任を帶びながら、奸商と結托して私利を圖るに汲々たる日本の所謂政治家に對照し來れば、啻に霄壤の差のみに非ざるを覺ゆる也。今や孫は鐵路の經營に、黄は鑛山の採堀に共に其全身を委ねて其發達に貢獻し、支那の商工業を殷盛ならしめんと期しつゝありといふ。夫れ國家の大勢を察して其革命を必要とするあらば直ちに劍を拔いて起ち、一度び革命了らば武裝を解いて一個普通の公民と化して殖産興業に努むる彼等が落々たる風懷眞に景仰に値するものあり、宛も是れ北米の偉人ジョージ、ワシントンが出でゝは獨立の爲めに戰ひ、入つては田園に犂鋤を執りたるにも似たらずや。官吏たる事を以て無上の名譽となし、政權のために政權を奪ふに汲々たる日本の社會に在りては、此の如きはこれ或は敗北なるが如くに思惟せらるゝなきを保せざるも、而も後世活眼を以て史を編する者必ずや彼等の誠意を諒とせん。若し夫れ日本の新聞紙が孫が將來支那に六十億の借款を起して二十萬里の鐵道を布設せんと謂へるを以て空想なりとし、これを冷笑したる如きは、これ會々日本人の抱負の如何に狹少なるかを暴露せるものと云ふべし。由來支那人は日本人等の想像も及ばざる大事業を企つるを常とす。秦の始皇帝は匈奴を防がんとして兵三十萬を徵して臨洮より遼東に至る所謂萬里の長城を築き、隋の陽帝は長安より淮に達する一大運河を築き、長安より江東に至る間離宮を置くこと

四十四ヶ所、數萬隻の船を泛べて遊行に備へたりき。依之觀是、山岳重疊せる彼の巴奈馬の運河將に開通せんとし、露國に於てもバルチック海より黒海に通ぜんとする大運河の計畫せらるゝあり、浦鹽斯德より莫斯科に至るに僅かに二週間を要せざる今日の如き文明時代に於て、二十萬里の鐵道を布設せんとする如きは決して架空の臆説に非ず、吾人は孫の此言を聞いて寧ろ彼れが抱負の遠大なるを嘆賞すると同時に、顧みて日本國民が横濱、神戶の如き國家致富の要訣たる商港の築港にさへ幾十年を費して尙ほ未だ完成する能はず、僅に十里二十里に過ぎざる運河の開鑿をすら尙ほ且つ逡巡せる、その規模の極めて狹少なるを憫まざるを得ざる也。

七

日本人は革命後支那の國內到る處に尙ほ未だ騷亂の迹を絕たず、露國の手深く蒙古に入り、英國西藏を窺ひ、滿洲の運命亦日本人の爲めに危からんとするを見て、革命は失敗を意味するが如くに論じつゝあり。然れども是れ革命の過に非ずして、時代の罪也。日本人は稍もすれば維新當時の事情を引いて、當時日本の國步甚だ困難なりしにも係らず、能く列國との交渉を全ふし、以て今日の獨立を保證し得たるを誇り、今日支那の邊境に於て問題續出し、將に蒙、藏を失はんとせるを冷笑すと雖も、是れ亦會々日本人が時代の精神を解するに無智なるを表明するに過ぎず。何となれば日本が開國當時の國難を切拔け得たるは日本人の力量に依るにあらず、寧ろ國外に於ける種々の事情が相牽制して幸に日本の獨立を保證したるに過ぎざれば也。嘉永六年六月米國使節ペルリ初めて浦賀に來りて通商を求め、日本人をして長夜の眠より覺醒したるは宛も是れ西曆一八三五年にして、當時歐洲に在りては露土戰爭將に其端を開かんとし、列强の視線悉く此問題に集中せり、越て七月兩國遂に砲火相交ゆるに至り、轉じてクリミヤ戰爭となるや英佛二國亦相共に之れに加はれり。次て幾何ならず一八五七年に至りては英佛の聯合軍支那と干戈を交ゆるあり、越て二年、即ち一八五

九年にはサーヂニヤ王エンマヌエル大王佛國と相應じて墺地利と開戰し、獨逸に在りても人民の憲法を要求すること切にして爲めに内亂の危險切迫せるあり。更に米國に於ては一八六一年より四ケ年に亙りて南北戰爭の起れるを始めとし、歐洲に於ても一八六五年よりシユレスウヰヒ、ホルスタイン事件に關連して普墺聯合軍の丁抹に侵入して大戰を爲すあり、繼て一八七〇年普佛戰爭の起る等當時歐洲の天地は紛亂騷擾、正に鼎の沸くが如くなりき。是を以て列國共に日本の如き極東の一小國に對し、兵力を以て種々の要求を試むる如き餘裕なかりしのみならず、此時に當りて歐米を通じ重商主義を基礎とせる殖民政策の失敗に懲りて自由主義の政治思想著しく發達し、自ら殖民地に對する諸種の領土的野心の如きは各國とも殆んど消滅し去れる也。即ち英國に於ける帝國主義の先驅者を以て目せらるゝヂスライレー氏の如きさへ尙ほ當時殖民地を以て無用の長物と做し、之れを所有するはこれ宛も挽臼を首に掛けたる如しとまで絶叫したりき。從て當時の列國は唯通商貿易を盛んならしむるの他に何等の野心を包藏せざりし也。かゝる時代に當りて日本が初めて國を開いて外國の文明に接觸したるは寔にこれ天祐と謂ふべく、日本の爲めには固より祝すべしと雖も、而もかゝる時に在りて能く其獨立を保ち得たるの故を以て直ちに日本人は支那人に優れりと斷ずる能はざる也。之れに反して十九世紀末よりは帝國主義の思想大に勃興し、世は再び弱肉强食の修羅場と化し、列國今や尺寸の地をも爭ひ、大平洋中の零細なる珊瑚島に至るまで之れを爭奪しつゝあり。故に若し日本にして、此秋に當り初めて國を開きしならば、其運命や遂かに判斷し難かりし也。然るに支那は不幸にも此時代に至りて初めて其眠りより覺醒したり。是れ今日支那が危險に瀕せる所以にして亦寔に止むを得ざる也。支那人獨り自衞の力乏しきに非ず。若し支那と同一の境遇に遭はゞ其日本人たると、英人たると、將た獨人たるとを問はず、皆同一の運命に陷るなきを得んや。先哲曰く「全身を火に投ぜらるゝよりも、其手足を失ふものは幸な

り」と。支那にして若し不幸にして其邊境を失ふことありとするも、今次の革命に依りて支那人の國民的自覺が十分に發達し、支那本部のみにても善く之れを統一し民國政府の基礎をして鞏固ならしむるを得ば、異日國力充實し、國運振張し、捲土重來、覇を天下に稱すること決して至難の業に非ず。之れに反して日本の如き如何に戰爭に克ち、如何に領土を擴張したりと雖も、内には財政の困難愈々切なるものあり、公債を以てするに非ざれば公債の利息を仕拂ふこと能はず、兌換券徒らに膨脹して物價の奔騰其底止する所を知らず、生活愈々窮迫して國民の健康日に劣惡に赴き、小學兒童其營養の不足よりして運動場に斃るが如き狀態にては、名のみ一等國なりと謂ふと雖も決して羨むに足らず。日本人たるもの徒らに皮相の見解にのみ耽りて隣邦人の言動を指笑するに忙しく、省みて自己の短所缺點を改むるに努むるなくんば、他日臍を噬むも尚及ばざるの悔あらん。他を救ふよりも、先づ己れを救ふに意を用ゐざる可からざるなり。

トルストイの藝術

中澤臨川

(一)

森と高原の中央露西亞の胸に當つて、聖都キエフが在る。チユラから南へ十哩、その都へ通ずる舊街道に沿つて、緩やかな波の打つたやうな土地を劃して建てられたのがヤスナヤ、ポリヤナの莊園である。古い煉瓦塀の中には窪地もあり、池もあり、林も在て、菩提樹の並樹道が四方に通じてゐる。近頃はまたその靜かな森の一角を限つて「ヤスナヤ、ポリヤナの孤兒(みなしご)の百

姓』どもが寄進した一基の質素な十字架が樹てられた。

レオ、ニコライヴイッチ、トルストイは一八二八年、八月二十八日に此莊園で生れた。そして彼の八十年の長生涯の殆んど全部が其處で過ごされた。今はかの質素な一基の十字架が彼の死、その『祝福の死』を永久に紀念してゐる。

キエフは露西亞では一番に古い都である。その國民に取つては之は忘れることの能きない靈地である。その附近一帶は露西亞中の露西亞で、スラブ民族生粋の故鄕と謂はるべき所である。レロイ、ボリユーの說明に據ると『其處は恰度露西亞の二大地帶即ち森林帶と耕地帶のかち合ひ、溶け合つた場所で、その附近には韃靼人も、芬蘭人も、波蘭人も猶太人も、小露西亞人もゐない。チユラ縣は實際に露西亞の中心である。』と。漂泊好きの人民が高原の其處此處に宿を求めては目的のない旅を續けてゐるのもこの地方である。無智な然かし信仰深い百姓達が隊を組んでは幾千となく靈都への旅をするのも此地方である。ヤスナヤ、ボリヤナを通じてゐる舊街道に見られる人影とさへ言へば、僧侶、尼、巡禮、ジプシイなどの他はない。トルストイの幼年時代には能く斯うした旅の者が其古い莊園の家を見舞つては宿を求めたと云ふ。『斯樣な人達は數多、私の家を過ぎつた。私は非常に尊敬して是等ゆ人を待たなければならないことを敎へられた。例令彼等の中に僞善者がゐたにしても、またはその生涯の或る時期に薄志や不誠實のことがあつたにしても、實際的には背理とも見ゆる彼等の生活の目的は非常に高尙なものであつた。て、私は幼少の頃から知らず〳〵彼等の高遠な志望を尊敬するやうになつた。『卿の正しい生活に對する侮蔑を忍ぶより高い行はない』と言ふマルカス、オーレリアスの詞を彼等は實行してゐた。……て、左樣な人達の中に私の妹の敎母のマリア、ゲラシモブナや白痴のエブドシムシユカなどがゐた。』と、彼はその『回想錄』の中で談つてゐる。そのマリア、ゲラシモブナと云ふ尼は、若い頃は男の服裝をして諸方の靈場を巡

讓して歩いたほどの女で、トルストイの母が四人の男兒を擧げた後に、一人女兒を欲しがつてゐると聞いて、彼女の祈禱の力で若し女の兒が出來たら、彼女が敎母になると云ふ約束をして置いた所が、果して其豫言が的中した。トルストイが晩年に家を脫け出して、チヤモルデイノの尼寺まで賴つて行た妹のマリーが即ちその時生れた女兒であつた。トルストイはその老體を妹の腕に委せて、いかに彼女の靜かな隱遁生活を羨んだであろう。彼は自分も彼樣な修道院の中で其殘生を送りたいと云ふ希望を洩したと云ふ。その時、老いたる兄妹の胸には彼等の懷かしい幼年時代が浮ばなんだであろうか。マリア、ゲラシモブナの異樣な姿が貴く見えなんだであろうか。それからまた、今一人の白痴は彼の『幼年』の中にグリシヤと云ふ名で描かれてゐる。『グリシヤ、偉大な基督信者！お前は神の接近を感ずるほどにお前の信仰は偉きい。お前の口からは詞が迸り、その詞をお前の理性が制しきれないほどにお前の愛は熱してゐる。お前が常に神の榮光を讚美する時、お前は口がきけなくなり、淚を流して大地に跪く』と。

斯樣な周圍の境遇と人物とが、何れだけトルストイの幼年時代を感化したてあろう。際涯のない曠原の中に異香の花が人知られず咲いて、さ迷ふ者の心を奪ふと謂はれる邦には、信神深い民がゐて、その無智な頭の中には、幾千年來、神秘と盲信と犧牲の敎が深くまた深く榮えた。トルストイの敎義、殊にその最晩年の慈悲深い敎義を知る者は、彼の幼年時代の斯樣な感化を想はずにはゐられない。神秘的なマリア、ゲラシモブナの祈禱や、正直なグリシヤの智慧が幼年の彼の心に種を蒔いて、それが晩年の偉人の胸に實を結んだ。晩年になればなるほど其收獲が多くなつた。最期のトルストイは偉大にして正直なグリシヤのほか何物てあつたろう。

希臘正敎の傳說と習慣が斯樣に純撲な氣風を保つてゐた中央露西亞の片田舍にも、長い年月の間には非常な變遷が來た。一千八百六十年代に行はれた『農奴開放』はその邦の歷史で新古を大別する一大革命であつ

た。教育ある青年の思想にも、農村の氣風にも、前後に聯絡のない程の代謝が行はれた。有體に言へば、新時代――六十年代――の青年から見れば、トルストイ自身も一個の舊時代の遺産に過ぎなんだ。兩時代の間の感情意志には千里の差があつて、兎ても打壞すとの能きない障壁で距てられてゐた。彼は一生『若き露西亞』に對して敵意を挾んだ。この意味から言へば、彼はミヘーロフスキーの所謂"Repentant Nobleman"であつた。農村には更に大きな變遷が行はれた。幾百年來の美風であつた『自治區（ミール）』が全然破壞せられて、根蔕から其社界組織を代えた。トルストイは之に對しても何んなにか苦がい感情を持つてゐたてあろう。況（ま）して其晩年に、彼が唯一の味方と頼んでゐた其地方の百姓までが、革命の氣風に感染して、彼の靜かなヤスナヤ、ポリヤナの莊園の窓の下で、聲高く"Vengeance"を叫ぶやうになつたとき、彼は如何に生の孤獨と努力の徒浩を其胸深く刻んだとてあろう。

八十餘年間のヤスナヤ、ポリヤナは決して何時（いつ）も靜かな隱家ではなかつた。信神深い巡禮の安息所としては長く續かなんだ。柔順な農奴は不信な百姓と變つた。聖都への旅人の祈禱の聲は、暴徒の復讐の叫と成つた。『後悔したる貴族』のトルストイにはそれが何れだけ苦痛てあつたろう。彼は飽くまでも古い露西亞の最後の遺產てあつた。

『樂しい樂しい、過ぎこし幼年時代の幾年よ。なぜ私はその頃の記憶を愛し慈まずに措かれやう。その思ひ出は私の魂を淸め且つ揚げる。これこそ私の最大な悅樂の源である』と、彼は言つた。彼の『回想錄』の中でもこれほど情熱に富んだ詞は尠なかろう。それだけ、彼はその幼年時代に愛着してゐた。また古い露西亞を慕つてゐた。

トルストイの兩親、特にその母親は、舊い露西亞の名門の貴族であつた。彼の父ニコラス、トルストイは奈翁戰爭に携つてから、田舍へ引籠つて、親切な地主として一生を送つた人てある。彼はマリー、ボルコンスキーを娶つてから、急に分限者に成つて、ヤスナ

ヤ、ポリヤナの大きな莊園を手に入れることが能きた。

レオ、トルストイの母は容貌は寧ろ醜い方であつたが。心立ちの柔しい、賢明な婦人であつた。彼女はレオが僅か二歲の時に五人の小供を殘して亡くなつた。『私は母が大層私を可愛がつて「私の可愛いベンジヤミン」と呼んでゐたことを人から聞かされた。彼女は私の胸に何時々純潔な道女のやうに映つた。で、私は憂のあるたびに、常に彼女の靈に禱を上げて救を覓めた。その禱はいつも私を助けた』と、彼は言つてゐる。

四人の兄弟のうちでも長兄のニコラスが最も彼の生涯に影響が深かつた。その母から饒かな想像の天分を享けたニコラスは、神經的で優雅な性質の男だつた。彼は幼少時代には話上手で、能く弟のレオを喜ばした。『回想錄』の中でも、初めの方はニコラスの事が一番多く書かれてゐる。彼はその後陸軍士官に成つて高加索へ行つたが、泥酒の癖を作つて、その爲めに命を奪られた。到て好人物で、弟のレオにも増した敬神家であつた。自分でも豚小屋のやうな所に住つて、貧民と食を頒たつりした。彼に就てツルゲーネフが次のやうに言つてゐる。『彼は弟のレオが議論に捏ね上げて滿足してゐた人生に對する謙遜な態度を實踐躬行した』と。

彼の父も亦彼が極く幼少のうちに亡くなつた。丁度同時に彼等の祖母も亡くなり、子供の世話をしてゐた叔母のオステン、サーケン夫人も亡くなつたので、賴りのない小供達はカザンに住つてゐた叔母のユーシコフ夫人に引取られた。それは一八四一年でレオが十三歲の時であつた。

斯樣にして彼の幼年時代は過ごされた。

トルストイの生れた時代の露西亞では世界の文學史中でも類例のない奇蹟が演ぜられた。ゴーゴルが現て新文學の途を拓いてから、ビエリンスキーの提撕のもとに蔚然たる新氣運が芽ざした。一時に諸大家が輩出した。一八一八年にはツルゲーネフが、一八二一年にはドストエフスキーが、翌年にはグリゴロヴッチが、その翌年にはオストロブスキーとメーコフが、一八二六年にはザルチコフが、一八二八年にはチエルニシエブ

スキーとトルストイが生れた。斯樣に十年足らずの間に幾人かの大家が列んで輩出したと云ふとは遇然のやうには思はれない。丁度露西亞の肥沃な土地が、幾世紀間生へては枯れ、生へては枯れた曠野の草の腐り積つた爲めてあるやうに、彼等は幾百年かの文化の間に其の國民が作り上げた成果て、やがて『若い露西亞』の基礎を成したのてある。

(二)

彼には生活と勞作は一てあつた。彼の藝術や宗教なしには彼の生活はなかつた。彼は生の充實の爲めに勞作し信仰した。強烈な内心の要求に鞭たれて、彼は刻一刻に自己を創造し擴大した。彼は創造の『自由』を以て其藝術に生き信仰に生きた。彼は同時に實践し、客觀した。

彼の作物は皆な彼忠實な自叙傳てあつた。凡そ藝術家と其作物とが斯くまてに絡み合つてゐる例(ためし)は他(ほか)にはない。『私には何も隱さうと思ふ秘密がない。私は喜んて世間の人に自分の行爲を打明ける』と彼は言つてゐる。彼の記憶は遠く赤兒の時代まで溯つた。生れて未だ間もない赤兒は温い浴桶の湯に浸(つ)かりながら、糠の香を嗅いて『新しい感覺を覺え、同時に自分の胸のあたりに見える肋骨を眺めながら、生れて初めて其少さな身體(からだ)を自覺し且つ愛した』と。その赤兒はまた或時、人の胸に懷かれるか、搖籃に入れられるかして、手足の自由を縛られ苦悩した折の記憶を持つてゐる。彼はその時初めて『運命の不公平と殘忍を感じた。』彼は『自由を欲した』。

『最初の回想錄』の中てトルストイは更に次のやうに言つてゐる。

それは、思へば怪しくも畏ろしい思想だ。私は生れてから授乳房を啣へてゐた三年間に、這ひ、歩み、物言ふとをおぼへた。それにも關らず、その年月の間で私の記憶(おぼ)えてゐる事は、たゞ細衣(すきぎぬ)を被せられたとと、湯に入れられたとだけだ。私の生存はいつから始まつたのか。私は何時から生活し始めたのか。何故に人は生存の始めに於ける我を現はすとの愉快であるに反して、言ひ現はしうる記憶を有たないその以前の非實在を再び窺はうとする時に恐怖を感ずるのであろう。……五歲の小兒から現在の私までは只一歩てある。初生の

赤兒から五歳の小兒までの距離は莫大である。胎兒と赤兒との間は測りきれない。更に、非實在と胎兒の間の距離は測りきれないばかりでなく、想像だもつかない。

生存の前に非實在がある、それは未生である。生存の後にも非實在がある、それは死である。死に近よつた者でなければ、死の恐怖と神秘を解することが能きない。トルストイは天才の内的經驗に由て死と面接した。彼はアンドレーフが其の作中でラザルの復活を寫したと云ふ話を或人から聞いて『死を經驗するなんて奈何して想像が能きる。てんて不可能の事だ』と云つて笑つたと云ふ。然るにそれをまたアンドレーフが聞いて『復活したラザルが想像能きないとすれば「ホルストメール」(馬物語)の馬の皮は何うてあるか』と言つたと云ふ話がある。アンドレーフ自身は或はラザルの死を想像能きなんだか知らぬが、彼の反問だけは確かに正しい。なぜなら、アンナ、カレニナの最期を書いた人が死を經驗せなんだとは誰が言へやう。斯樣に彼は死に近づいたと同時に未生にも近いた。彼は靜寂に大膽に恐怖し且觀察した。彼の驚くべき記臆と觀察は赤兒の使ふ湯桶の中から始まつて、その時から既に新しい感覺を覺え、自己の生存を愛することを知つた。

彼は五六歳にして自然の親しむべきことを自覺した。

丁度私の五つの歳までは、自然は私に向つては存在せなんだ。私の記憶に殘つてゐたのは寢臺の上か室内での出來事に過ぎなんだ。草も葉も空も太陽もまだ私の生存に這入らなんだ。勿論、私が花や葉を持て遊んだり、草を見たり、太陽の蔭に行つたり爲なんだと云ふことはなかろう。然し私が五つか六つになる頃までは自然と呼ぶ物の何等の記憶も私に無い。恐らく、或る物を觀ると云ふことは、その人がその物から離れてゐなければならない。で、私もそれまでは自然であつたのだ。

トルストイの處女作『幼年』は斯樣な遠い時代の記錄として珍らしい價値のあるものだ。クロポトキンは斯う言つてゐる。『どの國語にもいろ〳〵と優れた小兒の物語がある。幼年時代は昔から幾人もの作家が物語の材料として成功してゐる人生の一時期だ。然かしまだ何人もトルストイのやうに、内部からその時代を描寫し、また小兒自身の立場から之を觀察した者はない。

彼の作物では、小兒自身が彼等の感情を現はしてゐる。從てまた讀者をして小兒の見地から大人を判斷させるやうに强ゆる。これが「幼年」や「少年」などの作に見ゆる寫實だ——即ち實人世から捉えて來た豐富な事實だ——批評家のピザレフがトルストイの之等の二つの物語から得た材料を主にして教育上の一新説を樹てた程に。」

『幼年』の主人公イルテネフは『淨い愛する心、他人の性質のうちから、常に一番優れた性質を發見する明るい光を有つた』小兒であつた。彼は自分の幸福の位置から、いつも不幸な者の上ばかり思遣る傾向を有してゐた。彼は他人の不幸に同情して、その人の爲めに善を謀さうと考へた。彼は虐げられた老馬の額に接吻して許を乞ふほどに情深かつた。彼は他人に愛せられずとも、他人を愛しやうと思つた。

この作には幼年の純白なトルストイが稍や感傷的の色を帶びて現はされてゐる。然かしその小兒の性格には既に後年のトルストイの天才が仄見えてゐる。自分の物語の上で自分から泣くほどの想像力、常に可愛い眼を瞬つて他人の思想を讀まうとする明敏な頭腦。殊に記憶と觀察の稀な力、悲みの中にも靜に自己を解剖する冷やかな理性。

幼年のイルテネフは早く懷疑に陷つた。彼は五歳のとき『この世は歡樂の街でなくて、寧ろ重い勞苦の時』であることを覺つたと。て、この幼兒は赤兒にして既に『運命の不公平と殘忍を感じた』トルストイであるのであるのだ。餘りに鋭い自己解剖の刄の爲めに、彼の生涯は幾度危險の位置に陷つたであらう。

然かし彼は幸にも何時も斯樣な懷疑と發見を忘れた。天才の內部に溢れた潑剌たる生の創造力はあらゆる方面にその活路を求めることが能きた。

(三)

トルストイは叔母に連れられてカザンへ移つてから、其土地の大學へ入つた。樂しい無邪氣な幼年時代が過ぎて、少青年の時代が來た。トルスーイ自身其時代を"Desert of Adolescence."と呼んでゐる。

それは十五六歳から二十二三歳にかけての頃で、人間の自己が眼を開る時である。同時にあらゆる人生の力が芽を萌き出す。彼の靈も肉も一時に醱酵する。その人の一生の總量を成すいろ〳〵の傾向が思ひ思ひに發達する。それは詩人が『青春の不安』と呼び、生物學者が『細胞の分化』と呼ぶ顯象で、トルストイは其時代の事を『少年』及び『青年』の中に書いた。

彼は孤獨であつた。恐ろしい倦怠と不安が彼を襲つた。彼は五感の麻痺を覺えた。彼の頭腦は斷えず嵐のやうに荒れすさんだ。『私は最早事物を考察することが能きなくなつた。私は唯だ自分の考へたことに就て考へ迷つた』と彼は言つてゐる。彼の靈魂の奥底からは抑へきれないほど強い、濁つた欲望の波が上り、彼の頭は常に陰鬱な自己解剖に閉された。彼は怠けられるだけ學校を怠けた。『私は獸のやうな生活をしてゐる。……私は殆んど一切の研究を棄てて了つた。私は精神的に墮落した』とも彼は言つた。

彼はその頃の日記の中で、自分の身體を蠶食する三つの惡魔が在ると言つて、次のものを擧げてゐる。

一、賭博慾……制服し易いもの。
二、色　慾……惡戰を要するもの。
三、虛榮心……最も怖るべきもの。

實際若いトルストイほどに五慾の強い、虛榮心の克つた生活は稀であつた。彼は陰鬱なエクセントリックな少年として屢々その周圍の人を驚した。彼の義弟のベースの『回想記』に由ると、或日一家の者が揃つて旅行に出掛けると云ふので、馬車の用意をしてゐる間に、若いレオの姿が見えなくなつた。そのうちに彼が出て來たのを見ると、頭髮を半分だけ剃落してゐたと云ふ話がある。ふとしたパッションに驅られて心にも無い奇行を演ずることは彼の少年時代には珍らしくなかつた。またその頃の彼は空中飛行をして見たいと云ふ熱心な考に捉へられてゐた。その熱が嵩ずると、それが如何にも易々と能きさうに思はれて來た。その爲め彼は一日、窓から飛び下りて氣絶したと云ふ話さへある。

或時は自分の顏の醜いのを苦にした餘り、その眉毛を半分だけ剃落した事もある。虛榮心の勝つたトルストイが自個を滿足させるのは容易な事てはなかつた。その爲め彼は奈何れだけ煩悶したてあらう。若いレオの神に對する切なる禱は、全能者の奇蹟に據て、自分の容貌をアドニスのやうな美しいものに變えて欲しいと云ふ事てあつた。『私は斯樣な事情のもとて、尋常一遍の慰藉を以て自分を慰める譯にいかなんだ』と彼は言つてゐる。『私は自分が賢しく崇高い容貌をしてゐるとは何うしても考へられない。私の顏には少しも際立つた所がない――たゞ平て、荒々しくて、よく〳〵醜いだけだ。私が鏡に對ふと、私の小さな灰色の眼は賢こいどころか寧ろ鈍つて見える。私には男らしい所がない。……私の顏には崇高い所がない。全く普通の百姓のやうな顏をしてゐる。加之に、私の大きな足や手までが彼等にそつくりだ』と。

斯樣な絕望が虛榮心と情熱の勝つた青年を導く先はおのづから決まつてゐる。――賭博、酒、漁色、借金。それはトルトイがコーカサスへ出發つ前に陷つた境遇だ。彼の生活の斯樣な半面には一方周圍からの影響もある。彼の叔母はカザンては一流の社交界に卓越した位置を占めてゐた人て、若いトルトイ兄弟の四圍には、何時も快樂の誘惑が滿ちてゐた。彼等は舞踏會や劇場や訪問やて、長い冬の期節を潰した。快活て世間的な叔母がその甥を育てる目的は Comme il faut てあつた。て、その爲めには、若い者は一度は必ず有夫の婦人と姦通しなければならないとさへ教えた。

彼の虛榮心の強かつたとは想像以上てある。彼が二十歲の時に書いた座右銘には斯う言つてある。『私は世の中のあらゆる事を研究し、どんな問題にも精通せなければならない――法律、醫學、語學、農學、歷史、地質學、數學。それから音樂と繪畫に於ても蘊奥の極まで窮めなければならない』と。然かし左樣な決心も努力も献身的のものてはなく、强い肉慾と自我とから起つたものて、彼の唯一の願望は世界を制服するとてあつた。彼は彼の痛罵した奈翁が物質的に企てた所の

ものを精神的に獲やうとした。『私は總ての人に知られ、總ての人から愛されたい。私は自分の名の單なる響だけでもが、全世界の人に驚嘆と感謝の意を起させるやうに成りたい』と言つてゐる。また斯うも言つてゐる。『私の一番の缺點は傲慢である。若しも私が榮華と德の二つのうち何れかを擇ばなければならないとすれば、私は必ず前者を採るであらう。それほど、私は虛榮に憧れてゐる』と。て、彼は獨創的であることを欲した。他人と異ることを欲した。他人を滿足させる奈何んな事でもが彼を滿足させなんだ。後年になつてからも、彼は自分の作が世の中に持囃されると云ふ單なる理由から、其作を嫌つたほどてあつた。叔母のユーシコフが斯う言つて彼を評したことがある。『お前にはいつも嶄新がる癖がある。然かしお前の嶄新は輕薄な利我心に過ぎない』と。

斯樣に荒んだ生活を送るやうになつたトルストイには、最早幼年時代の樂しい空想も純白な敬神の念も殘らなんだ。彼の自己解剖の癖は彼を驅つて劇しい懷疑に陷らしめた。やさしいセンチメンタルな『幼年』のイルテネフは、不安と陰鬱の『少年』に變つた。神祕的て信神深いグリシャは、近世的なボルテーアの姿を採つた。彼の頭腦は斷えざる熱病に惱まされてゐた。彼は疑惑の海に溺れた。彼は一つの哲學から他の哲學へ泳ぎ移つた。自分の肉を苦しめてさへ厭はないほどのストイック敎信者になつたかと思へば、一轉してエピキユリアンに化けて放埒の極を盡した。或時は輪廻說に歸依すると見ると、今度は狂暴な虛無主義に鞍換した。『少年』の主人公は次のやうに言つてゐる。

何んな哲學も懷疑說のやうに全く私の心を奪つたものはない。一時私はその爲めに狂氣じみた所まで行つた。私はこの世の中に自分自身の外には何人も何物も存在せぬと云ふことを想像した――事物は眞の事物でなくて、只私の注意する時にのみ現はれ、私の思索の己むと同時に消滅する映像に過ぎないと考へた。約言すれば、事物は存在せず、只之に對する私の關係のみが存在するのであると言ふシエリングの觀念に同意した。私はこの突きつめた考から、時々極端な背理に趨つた。

て、彼は斯んなとまで考へた。若しも彼が非常の迷

力で背後を振向くとが能きたならば、彼は『虚無』の影を捉へるとが能きたてあらうと。彼は十六歳にして禱るとを廢め、同時に教會へも足を入れなくなつた。

彼の少、青年時代は斯様にして過ごされた。それは『青春の曠野』てあつた。其處には劇しい欲望の嵐が吹き捲いて、不安と懷疑と淫樂と虚榮の塵を上げた。其嵐は彼の靈をも肉をも吹き虐むて何處まて彼を運び去らうとするのてあらう。彼は丁度幾度か極端まて曲げられて、やがてはまた朽さつた木片のやうに彈ね返される弓にも似てゐた。彼は全く打克たれた。彼の神も、意志も、傲慢な自尊心もその力の前には些の抵抗力なく屈服した。彼は何處まて其彈性を維持するとが能きたてあらうか。その弓は折れずに濟むだてあらうか。

彼の短篇に『計數者の思出』と云ふ一篇がある。それは玉突屋の給仕の口から、ある富有な貴族の一青年の末路を談らせたものてあつた。その青年は生來、眞面目な男てあつたが、次第に墮落して遂には本職の賭博者の群に交るやうになつた。さんざんな飲酒と放埓の果てにも彼には猶ほ多少の良心があつて、眞實涙を流して現在の自分を呪ふともあつた。それても彼は好きな賭博が已められない爲めに其社會から足を洗ふとが能きなんだ。彼がどん底まて落ちた曉は既う裸一貫に成つてゐた。彼は自分て自分を害ふよりほかには途がなかつた。

この青年は疑もなくトルストイ自身てあつた。その頃の彼は骨牌を弄び、ジプシイの歌妓に無中になつて、山なす負債に身を責められてゐた。それ而已ならず、彼の斷えざる自己解剖の癖は、彼を驅つて危險の地に置いた。彼は一屢々生死の別れ目に立つた。』

然かし實際のトルストイは斯の小說の主人公のやうにその儘欲望の誘惑にのみ身を任せて一生を謬るほどに弱い人間てはなかつた。彼には別に天才の身内に燃ゆる强烈な生の力があつた。彼はその爲めに一生中幾度か危機から免れた。『一つの天質がいつも彼の救生を齎した、それは彼の至上の誠實てある』と、ローマン、ローランは言つてゐる。

誠實はトルストイの一生を貫く偉大な力であつた。彼の生涯の幾多の矛盾もその爲めに鎔かされて光輝ある物となつた。青春の不安と罪惡に犯されたかの生涯の一時期に在つても、彼は『誠實』の寳をば忘れなんだ。『少年』のイルテネフは其友に向て言つた。『私が誰よりも貴方を好く理由がお解りになりますか。貴君には驚くべき貴い性質がある。それは正直といふ事です』と。

極端な懷疑說に囚はれながら、且つ彼は信じた。『それにも關らず私は信じた——何物かを。然かしそれが何であるか？私には明かな答が能きない。でも私は神を信じた。否や寧ろ神の存在を拒まなんだ。尤もそれが何んな神であるか私は知らなんだ』と。また彼は斯うも言つてゐる。『私は眞心から正直で善良な人間に自分を仕上げやうと願つてゐた。然かし私は若かつた。私はいろ〳〵な情熱を有つてゐた。私は孤獨だつた——德を求めるにも』と。

然り彼は孤獨であつた。彼は世間一般の人のやうに、安眠の床の樂しい夢を作る爲めの神を信ずるとが能きなんだ。彼は眞理の中からその神を造らなければならなんだ。彼の求めたものは抽象的なGodでなく、具體的なa Godであつた。彼は神を信じた、また信ぜなんだ。彼には不信神もまた信神と同じやうに一種の新しい光であり、恩寵であつた。彼の烈しい性質は頓着なしに極端から極端へ、熱心な信仰から狂暴な懷疑へ趨つた。さもあれ、彼は殊更に神を求める必要のないほど神の中に住つてゐた。その身内に太陽と生命を有つ者が何を外部から借りて來る必要があらう。

我等は『青年』の主人公の言葉を聽かう。

月は次第々々に高く昇り、より淸く蒼穹の上に照るにつれて、ぎら〳〵した池の閃煌は聲のやうに擴がりながら次第々々に明るくなつて來た。影は愈々濃くなり、光は愈々透き徹つた。……私はかの蒼空の滿月を眺めれば眺むるほど、眞の美と善は愈々高く、愈々淨く、愈々神に近いものだと云ふことを思つた。神こそは實にあらゆる美と善の源である。斯う思ひながら、私の眼には一種不滿な昂奮した喜の淚が浮んだ。然かし私はなほ孤獨であつた。私は考へた。あの神秘な嚴そかな自然、魂も浮かるゝやうなあの煌々たる月輪は、蒼

白い大空の不定の一點に動かぬやうに懸りながら、而もあらゆる物を照らし、無邊の空間に遍在するのに――我、一定の價無き蛆虫は、旣に卑しく淺間しい煩惱の鬼に汚されながらも、なほ無限の愛の力を持つて立つてゐる――と、思つたとき、私は――自然も月も我も――總てが同一であると感じた。

彼は美しい自然に對する時にも『一種不滿な、昂奮した喜の涙』を浮べた。彼は完全を欲した。彼はその頃から『人間の運命は斷えざる自己完成の徑路』であると感じた。彼は卑しく淺間しい煩惱の鬼に囚はれながらも、猶ほ自己の内部に溢るる『無限の愛の力』を自覺してゐた。

トルストイは大學へ入つて始めは東洋語を勉强したが、後は法律に轉じた。彼の性急で自主的な天性は、當時行はれてゐた教育の常規におとなしく服從するとを肯んぜなんだ。彼は大學敎育の無能を嘲り、歷史的研究の價値を否定した。その爲め彼は牢獄へ入れられたことさへある。唯だ彼がその學生時代にルッソーを知つたことは、彼の一生にとつて大なる發見であつた。

彼の生涯には先驅者もなければ、著しい影響をその上に及ぼした偉人もなかつた。彼の天才と生活は全く彼自身創造し開拓したものであつた。彼は沙翁を嘲り、プーシキンを笑つた。彼の敬愛したヂッケンスでも、僅かにその感化を處女作『幼年』の上に止めてゐるに過ぎない。基督の敎てさへトルストイの性格の上にはさほどの感化が無かつたものともみられる。唯だルッソーのみは彼の一生を通じて著しい影響を及ぼしてゐる。その發見は彼に取つては一種の雷鳴であり、電光であつた。ポール、ボイヤーとの會話の中で、トルストイは斯う話してゐる。『私はその頃ルッソーを全部讀んだ――「音樂字典」までも含む廿卷の著作を。私は彼に對して熱心以上であつた。私は彼を崇拜した。私は十五歲の時、正敎會の十字架の代りに彼の肖像を刻んだメダルを胸に懸けた。彼のページの多くの物は私自身で書いたとほか思はれないほど、私に親しいもので

あつた』と。

トルストイは中途で大學を廢めて、長兄と與にヤスナヤ、ポリヤナへ歸つた。其處は彼の幼年の想出多い所である。彼は再びその周圍に巡禮の群を見、信神深いグリシヤを見、純朴な百姓の姿を見たであろう。彼は是等の賤しい者の友となり、味方となり、教師ともなろうとした。その時代のことをば彼は『地主の朝』の中で書いた。『なぜ私は彼等の一人にならなんだか』と、主人公のネフルドフが言つてゐる。後年のトルストイの面影が始めて茲に現はれた。

然かし彼はまだ若かつた。衷心から農奴の味方となり、献身的な博愛家となることの能きる境遇には達せなんだ。彼は間もなく聖彼得堡へ去つた――『幸福を求める爲めに』。其處では彼はあらゆる放埒の極を盡した。彼は骨牌を弄び、女に戯れ、負債に苦しめられ、彼の生涯中でも一番慘めな荒んだ生活を送つた。

要するにトルストイは其少、青年期の數年間を懷疑と放埒の嵐の中に徒消した。然るに實際は其『青春の曠野』は彼の豐富な Lehrjahre であり、經驗の畑であつた。實世間の眼から見るとき、天才の生涯ほど不經濟で無駄なものはなからう。彼は自己の眞價を確める前に、セント、オーガスチンやルッソーのやうに、先づ『罪の人』でなければならなんだ。それは危險な時期であり、同時に希望の時期であつた。その危機は彼の後年の『轉機』のそれよりもより劇しく、功果に於てもより饒かなものであつたとも謂へる。

その時期に、天才の意識が其胎皮を脱いだ。それは陰欝な『死の苦』であり、また『生の苦』であつた。彼の全身は打摧かれた。彼は急に自分を呑下する荒涼無邊の宇宙を意識した。彼の身體には新しい皮膚が生じ、彼の内部には新らしい靈が生れかかつた。彼はたゞ驚きの餘り、舊い物の死ぬ苦みのみを覺えて、新しい物の生れる喜を知らなんだ。その間に潑剌たる生命の衝動は外部から、熾烈な意識の衝動は内部から、各々創造的進化を起した。肉と靈の戰が始まつた。『變形』は徐々として其歩を進めた。舊いものゝ全く死んだとき

に、其跡へ新しい生命が芽を萌いた。

その新生命は全トルストイであつた。

天才の行程には二様の努力を要する。第一は自己を意識することてある（何たる苦しい突きつめた努力てあらう）。第二は其信念を提げて世と戰ふことてある（何たる孤獨な、然かし崇高い努力てあらう）。トルストイは正に第一の努力を濟ませた。凡そ天才のいろ〳〵な美質のうちても、力強い『誠實』ほど賴母しいものはない。斯様な力を有つものは如何なる場合にも必ず勝利をうるてあらう。そは彼が世の中の虚僞に對する唯一の武器てある。我等はトルストイが生れながらにして斯の異常な美質を持つてゐたことを記憶せなければならない。

聖彼得堡に於ける放縱な生活は、彼を驅つて身動きの附かないどん底まで陥らしめた。て、一八五一年に彼は長兄ニコラスの跡を追つて高加索へ高飛びした。そこて彼は軍人生活を送つた。

（四）

Storm and Stress は過ぎた。

自由！遂に彼は自由をえた。彼は今までの自分からも、その卑俗な周圍からも離れることが能きた。數年來彼を苦しめた情慾の網は一時に取去られた。胎皮はおのづから脱げた。高加索への旅は彼の生涯に採つては實に意深き一時期てあつた。

出立のその日から、彼は最早昨日の彼てはなかつた。彼は久し振て自己を回復し、その神に歸ることを得た。彼は行く〳〵高加索の連山のその眼前に展けるのを觀た。地平線を限れる純白の大塊は、鋭く削られた頂の輪郭明かに、遥かなる大空に映えた。『彼はその山の偉大を會得し、その無限の美を感じた時、瞿然として怖れた。そは幻か――夢てはないか。彼は正氣に復ろうとして、自分て身を震はした。が、山は依然として同じ姿てゐた。』

平坦な途を馬車の急ぐに伴れて、山は宛がら地平線の上を飛ぶやうに見えた。其薔薇色の頂は朝日を受けて輝いた。最初その山は唯だオレニンを驚かすばかりてあつたが、暫くしてからは彼を喜ばすや

うになつた。……彼は次第々々に其美を解し味ふことが能きた。その瞬間から、彼の見るあらゆる物、彼の考へ、感ずるあらゆる事が、彼に取つて新しい性質を帶びるやうになつた。それは丁度その山のやうな嚴肅な感であつた。總ての莫斯科の記憶も、恥辱も悔恨も、高加索に就ての一切の野卑な夢想も、復たと回らぬべく消え失せた。(『哈薩克人』)

彼は遂に自由てあつた。再び獨立てあり、彼自身てある喜びよ。いかに、その煩はしい羈絆や苦々しい記憶から脱し得た喜びよ。遂に再び自己を得た喜びよ。

『是が始めだ』と言ふ嚴そかな聲が何處からとなく聞えた。遠くに見えるテレック河の流も、村も、人影も總て今は眞摯な光を帶びて彼に現はれるやうになつた。彼は空を仰いだ――で、また山に氣を取られた。彼は自分と其友のジョンを見廻してから――復た山を見た。彼方から馬に乘つた二人の哈薩克兵が來る。袋に納めた旋條銃は滑かに其背で搖き、馬はその栗毛の足と灰色の足を交互に動してゐた――また山が見える。テレック河の彼方から里の烟が昂つた――――山は?。太陽は次第に昇つて、蘆の間から見えるテレックの水に閃いてゐる――また山がある。哈薩克の村から百姓の荷車が來た。女――若い美しい女達――があちらこちらと動いてゐる――然かし山は何處へ行つた。……アブレック人が高原の中を探し廻つてゐる。でも、私は恐れずに旅をする。私には銃と力と青春と――それから山がある。(同上)

トルストイには何れだけ高加索の山が珍らしかつたとてあろう。中央露西亞の平地て育つた彼には、斯の山國の自然は一も二もなく驚きと喜びの種てあつた。遠い地平線に聳ゆる山ばかりてなく、勇敢にして純朴な民、テレック河畔の哈薩克兵、東洋流の衣物を着けた美しい土地の女、溫泉、森――何もかも彼には新しい世界てあつた。彼はその頃の印象を『哈薩克人』の中て書いた。

彼は慌てて自然に沒頭した。彼はその河の響も森の呼吸も渾な自分の血脈に通ふを覺えた。草にも蟲にも人間にも同じ生命の流を感じた。彼は今その大きな流に溺れて泳いだ。大自然の悲も喜びも彼の肉を透して吹いた。彼は最早露西亞の貴族てなくて、野性のエロシユカや蚊や牡鹿と同じ自然の親族てあつた。『彼等のやうに、私は生きてまた死ぬてあろう。て、私の上にも草が生えるてあろう。』

「私には銃と力と青春と、それから山がある」と言つた斯の自然兒は、ひたすら生き、愛し、信じ幸福てあるとの切なる要求を感じた。

「昨夜私は殆んど眠らなんだ。私は復た神を禱り始めた。私はその折の心好い感じを言ひ現はす言葉を持たない。私はたゞ普通の禱詞を繰返すに過ぎなんだ。それても私は長いと禱つてゐた。私の祈禱は嘆願や感謝の爲めてはない。私はある高い美しい物を求欲した。……何てあろう。私にも答が能きない。私は「無限の實在」と一つになり、神の中に溶け懷かれんとを望んだ。……私は私の罪を神に謝した。……否や私は決して「彼」に哀求したわけてはない。なぜなら、今私にこの驚くべき喜悦の瞬間を與えて下さるからには、神は既う夙うに私を宥して下さつたのだ。私はなほ禱つてゐた。然かし同時に私には禱る何物もないことを感じた。私は詞や思想て禱つたのてはない。私はたゞ一つの感情の中にあらゆる物を結び附けた――禱も感謝も。私にはもう何の恐怖もなかつた。この廣い感情の中から信仰だ愛だ希望だと云つて引離すとは能きなんだ。……すると、一時間過つか過たないうちに、今度は私は罪の聲に耳傾けてゐた。私は榮華や女を夢みて眠つた。その力は私よりも强かつた。が、心配するな！私はこの幸福の瞬間を神に謝するのほかはない。なぜなら、私の微些な點も偉大な點も明かに示して下さるのだから。私は禱ろうとして禱るにその詞を知らなんだ。また、私は敢て思想を以て其謎を解かうとも爲なんだ。私はこの身を神に任せた。」

神の深淵！光の海！實在の火！生の颶風！幸福の狂瀾！。彼は唯だ逆卷く『生命』の海に身を投じた。

健やかにして强く、自由な人性のほかに尊い何物があるか。『力と青春の山(自然)』のほかに賴るに値する何物があるか。彼にとつては神の存在の實否は深く尋るほどの價値の無いものてあつた。彼はたゞ信ずるが故に信じ、愛するが故に愛した。潑剌たる生命の前にはいかなる事も可能てあり、いかなる物も貴かつた――然り罪惡さへも。世の中の德のなかにも、青春の

德は喜悅でなければならない。汝は黎明の前に敬虔であれ。過去を忘れ未來を忘れて、今日ばかりを考へるが可い。汝の理屈を忘れよ。それがよし神に關はるとても善いものであるべき筈がない。世の中のあらゆる理屈は型であり桎梏であり、馬鹿げたもの有害のものである。たゞ今日に生きるがよい——自由と『創造』の今日に。そしてそれを愛し、尊び、慈んで、明日咲く花を待たなければならない。

是が高加索に於ける、トルストイの生活であつた。彼は自由な、放膽な、然かし豐富な日を送つた。彼は愛し、踊り、そしてよく眠つた。『正義は德のうちでも最小なものであり、且つ何人にも强壓的である。最高の德とは完全に向つての努力である。それより低いものは皆な罪惡である』と、彼は言つた。

高架索の自然はゆたかに彼を抱いて、『樂しい冥想の臥床を造つて呉れた。彼は空想し、回顧し、觀察した。彼はいろ〳〵に變る自分の思想を笑つた。『過ぎるが儘に美しい胸の幻は過ぎた。彼は別段それを捉へやうとも思はなんだ。たゞ幾千の麗しい夢を見た。强ひてその夢を擇ばずともよい。やがて時が熟すれば、一時に花咲く期節が來るであらう。

『私の內心の或物は私に斯う云ふ事を考へさせる。私は普通の人のやうには生れなんだと。』彼は自分の偉大な不可思議な力を意識し始めた。

それは地に布く春の喜である。天才の自覺の喜である。花咲く野の總て善く總て麗はしい喜である。太陽の下で、在るもの在るべきものゝ一時に照し出された喜である。狂はしい『創造』の喜びである。世の中には創造の喜のほかに眞の喜はない。それは『生命』そのものゝ喜である。なぜなら、創造のほかに生命はないからである。さればその喜は復た、同じ火の源から出た神の喜、愛の喜、天才の喜、行爲の喜—— Elan Vital の喜である。

一八五二年にトルストイは始めて其處女作『幼年』を書いた。それから同じ年に『地主の朝』、『侵掠』、『少年』などが出來上つた。『幼年』は匿名のもとに、雜誌『現

代」に寄稿せられた。その雜誌は詩人ネクラゾフが編輯してゐた有名なもので、彼の名は一時に世に弘まつた。

（五）

彼の高加索の滯在は短い間であつた。一八五三年の終りにクリミヤ戰爭が起つて、彼はルーマニア軍隊の一士官に任ぜられた。それからクリミヤ軍隊に移され、翌年の末にはセバストポールへ着いた。その時のトルストイは愛國の熱情に燃えてゐた。有名な籠城の間、彼は悲慘を極めたかの第四城砦附として屢々危險の地を踏んだ。それは彼の一生に取つては最も貴い經驗の一つであつた。彼は之を三篇の「セバストポール」の中に書いた。

高加索の高原で思ふ儘自然の呼吸を味ひ、樂しい夢に耽つてゐたトルストイは、急に人生の最悲慘な光景に接した。愛國の熱情に燃える醜はしい場景の裏には、死を前にして人間の曝露する卑劣、殘酷な幾多の醜い態があつた。

斯樣な血と死骸の騷擾の中で、彼は再び幼年の頃のミスチシズムに復つた。

「私は一の偉大な、驚くべき觀念に到達した。私は其の實現の爲めに私の一生を捧げやうと思つてゐる。その觀念とは人間の進歩に適應する新宗教の建設である。そは邪說と神秘から淨められた基督教、即ち未來に福祉を約せずして現世に幸福を與ふる實際敎である。……宗教の力に由て人類を結合する爲めに明瞭な意識を持つて活動すると――これが私の根本の思想である。」

昨日の藝術家のトルストイは、今日は突きつめた宗敎家に成つてゐた。彼の長い後半生の活動は既にその萠芽をこのうちに見ることが能きる。「理性」の克つたグリシヤの面影が明かに我等の眼に映つる。

然るに一八五五年の八月に、露兵の敗衄に由てセバストポールは開城した。「軍隊は散り〳〵にその町を去つた。何の兵士も荒れ果てたセバストポールを振返り乍ら嘆息した。言ふに言はれぬ悲痛を其の胸に懷いて

彼は敵の方向に對つて拳を振つた。」

トルストイは戰陣の中で『青年』の稿を起した。

彼はその後暫らく聖彼得堡で暮した。また歡樂の世界が現はれた。高加索の自然をもセバストポールの悲慘をも忘れたやうに、彼は首都の一年間を若い士官と、カフエーと、賭博と、競馬と、歌妓と、佛蘭西女の中で過ごした。文學者の群も亦彼を迎ふるに非常な歡待を以てした。彼は若き天才の作家として、同時に『セバストポールの英雄』として待遇られた。その中には雜誌『現代』を中心として、ネクラゾフ、ゴンチャロフ、グリゴロウッチ、チエルニシエフスキー、ドブロリユーボフ、ミヘーロフなどの大家がゐた。『セバストポール』の一節を讀んで『涕泣しつゝ「はらあ！」を叫んだ』と謂ふツルゲーネフは殊に親しい手を差出した。

然かしその人々との暱交は直ちに冷却まされて、却て嫌厭の情と變じた。それにはいろ〳〵の理由がある。第一にはトルストイの强い自我性である。ビルコフは其傳記の中で次のやうに言つてゐる。『トルストイは天性、團隊的の行動に不適當であつた。團隊的發議は如何なるものでも彼に於て常に强い反對者を見出した。さながら彼はその爲めに自分の獨立を失ひ、自分の方向と異つた方向に流るゝ一般的思想の爲めに押流されるのを恐れるやうに見えた。彼が文學者仲間との間に惹き起した總ての誤解、爭論はこの爲めである』と。彼自身もまた自分の强い性癖として、『何でも一般に承認された推理や結論には本能的に反對する』傾向のあることを意識してゐた。それには貴族的な彼の驕慢心が伴つた。ツルゲーネフは曾て彼を指して『この稚氣に滿ちた高慢ちきな貴族、自負强い Junkerdom』と言つて笑つた。

彼のこの性癖はメレジコーフスキーの著書(『人間及び藝術家としてのトルストイ』)の中で手痛く攻擊された。て、その性癖が彼に累を及ぼした最も重大な結果は、彼とその當時の革命家との關係であつた。彼はその爲めに、露西亞の上下を動かした眞摯な一大運動に風馬牛の態度を採つた。生れながらの民主々義者、

極左黨のドブロリーボフなどと、貴族的なエピクユリアン、革命的保守主義者のトルストイとの間に調和のとれやう筈がない。

今一つ、トルストイと其當時の文學社會と融和の能きなんだ原因がある。實際その頃の彼等の社界の過半數は一種の浮浪人(ジプシイ)であつた。心ばかり崇高(けだか)くて、みじめな生活をしてゐた。それは一つには社會の罪もあつた。彼等の中にはどん底まで貧乏して、毎日物臭い沈鬱な生活を送つてゐる者が多かつた。あの有名なウスペンスキーなども、平氣で金を借りたり貰つたりして歩いたものだ。それでも誰も彼等の不節操を咎める者もなかつた。で、是等の作家の社會は到て狹く、上流社會などには殆んど齒されなんだ。彼等自身も亦一種の猜疑心から自ら高く停まつてゐた。その中へトルストイのやうな傲慢な貴族が、然かも今までは側(はた)から彼等を罵つてゐた者が突然仲間入をしたのである。その結果は直ちに豫想される。彼は自分の口から斯う言つてゐる。『私は熟々(つくづく)考へた、彼等の大半は不道德な、不健全な、そして無性格な手合であると。彼等は私の自墮落な軍隊生活の間に逢つた連中よりも猶ほ劣つてゐる。でも彼等自身では、健全な人の爲るやうに、自ら信じ自ら滿足してゐるのだ。私はつく／″＼愛想を盡かした、』と。その頃彼がツルゲーネフ、ゴンチャロフ、オストロブスキー、グリゴロウッチ、ドルージニンの五人と一緒に寫した寫眞がある。その中で彼は軍服を着て、一番背後に直立(つゝ)つてゐる。佛蘭西のソーレが頗智的に此の寫眞を評した言葉が面白い。『彼は寧ろ是等の紳士の同輩と云ふよりは、彼等に跨つて指揮してゐるやうに見える。今將に彼はその人達を到着點(ゴール)まで退却させやうとしてゐる、』と。

でも、トルストイは自分の文學的生活を嫌つてゐたわけてはない。寧ろその名聲を樂しんで、非常な得意てゐた。加之(おまけ)に、それが彼に『女と金と名聲』を捧げたのだから。『この社會では私は一個の高僧であつた。』氣持の好いそして儲かる位置だ。』と彼は言つてゐる。

ツルゲーネフと彼との關係は興味のあるエピソード

のやうな事件(できごと)であつた。ツルゲーネフは彼の處女作の世に現はれた當時から彼に對する熱心な嘆美者の一人であつた。トルストイの方でも初めのうちは對手(あいて)を敬愛してゐた。それは彼が自分の作の『樵夫』をデヂケートしてゐるのを見ても解かる。彼がセバストポールから歸つて聖彼得堡へ這つて來た時、ツルゲーネフは泣かんばかりに彼を歡迎して、其家に同居せしめた。然かし二人の間には大變な氣質(きだて)の相違があつた。一方は專ろ諧謔的、情調的、慈愛的で、諦めの附いた人、純美に歸依した人であつたのに、他方は傲慢で、物に激し易い人、道德的理想に苦められてゐる人、見えない神を追ひ廻してゐると云つたやうな人であつた。兎てもその間に調和のとれやう筈がない。フェット――この人も矢張當時の文學者仲間で、たつた一人最後までトルストイと親交を續けた人である――の『備忘錄』に由ると、當時ツルゲーネフはすつかり自分の平素の生活狀態を改めて、その敬愛する客人に能(で)きるだけの愉快を與へやうと心懸けてゐた。その眠を驚かすことを恐れては、殊更聲を潜めて話をするやうなこともあつた。然かし間もなく、彼は自分の預つた赤兒が、とつくに其產衣(うぶぎ)を脫ぎ棄てて、自分の足で立上り、况さへ打つて懸るやうになつたのを見出した。そこで彼は自ら悔み乍ら、而かし親切に、或る遠慮した距離まで自分を引き下げて、その距離から終生トルストイの技倆を嘆賞し、また其奇癖を批評したと。ツルゲーネフのトルストイに對する態度は何時もこの遠慮した親切であつた。トルストイの外國漫遊中には彼は巴里にゐて、よく世話をした。彼の長兄ニコラスの死んだ折などは親身の者のやうに、自ら悲しみもしまた慰めもした。然るに一八六一年には偶然の事から彼等の間に激しい爭が起つた。丁度、フェットの家で二人が落合つたとき、何でもツルゲーネフの娘の教育問題か何かが原因(もと)で、長らく彼等の間に蟠つてゐた內心の不和が破裂した。挑戰狀まで書かれたが、幸に決闘は行はれなんだ。其時ツルゲーネフは斯う言ふ感想を洩してゐる。

『私は漸く彼が私を嫌つてゐるとに氣附いた。なぜ彼は

斯う私に喰つて懸るのであろう。私は以前のやうに控目にしてゐれば可かつた。然るに一歩踏出して剛々しくした爲めに、遂々決闘まで仕懸つた。私もあの男を好いてはゐないのに、なぜ前からそれが解らなかつたろう、」と。

それから十七年後で、今度はトルストイの方から進んで懇親を求めた。ツルゲーネフは喜んで再び其手を差出した。彼が死際にトルストイに宛てた手紙は赤心こめたものであつた。

「親愛なレオ、ニコライエヴヰッチ。私は長らく御無沙汰してゐた。それと言ふも、斯う私が死病に取附かれて寝て倒れてゐたからだ。私ももう駄目だ。然かしそんなとは奈何でも可い。唯だ私は卿に斯う云ふことを告げたいばかりにこの手紙を書く。私がどれだけ卿と同じ時代に生れたことを名譽としてゐるかと。それから今一つ私からの最後のお願がある。我友よ、今一度文學的事業に復つて呉れ。卿の天才は來るべき處から來たのだ。て、若しも私のこの嘆願が聴かれるとがあつたと想像する時に、私は何れだけ幸福であろう。我友よ、我等の偉大なる國民的作家よ、私の願を許せ。」

て、この手紙を讀んで考へると、その後年に『クロイツエル、ソナタ』や『復活』や『暗の力』が出たときに先づ喜んだ者は、地下のツルゲーネフであつたろうとよりほか思はれない。實際、トルストイの異常な天才を謳歌し嘆賞するに敏且切なると彼の如きは嘗てなかつたであろう。

首都に於けるトルストイの無意義な一年間の生活は了つた。私は敢て無意義だと云ふ。奥深い自然の中で、その青春の花が咲き、その天才の意識が萌え出した高加索の生活や、赤裸々な人生の悲慘と虚榮と死と血とを見たセバストポールの生活に較べるとき、聖彼堡の輕薄な、追隨に圍まれた幾ヶ月かは何を彼に與へたか。思へば、それは一種の過渡期であつた。然かし彼の少年期のそれのやうな未來のある、嵐を孕んだ時期ではなかつた。それは倦怠の一年間であつた。丁度彼の前半生に發揮した藝術的意識が圓熟して、而もまだその

後半生に現はれた宗教的意識が醱酵を始めない前てあつた。勿論その胎芽はあつても、それがまだ自覺的に分化の苦みを悶みするまでには達してゐなかつた。

然かし彼のやうな氣質の人は、長く同じ境遇に其眼を閉ぢて安居するわけにはいかなんだ。その頃の彼はまだ世界の文明と云ふものに多大の望を囑してゐた。て、それを觀る爲めに、一八五七年の正月に彼は歐州漫遊を思立つて、佛蘭西から瑞西、獨逸を訪つた。この旅行は全く彼の期待に反いた。彼は佛蘭西に着く早々、一の苦々しい經驗に接した。それは丁度、運命そのものが彼を誘つて、殊更に近代文明を罵らせるやうに、その一生を仕向けたかの觀がある。彼は巴里で斷頭臺上の處刑を見せつけられた。

「私はその頭を胴から切り離す所を見た時、そしてそれが音を立てて桶の中に落ちるのを見た時、私は私の全身のあらゆる隅々から斯う云ふことを感じた。現代文明及その制度の如何なる學說と雖も斯樣な行爲を是認すべき理由がないと。また假令世界のあらゆる人間が、世界創造の初めから、どんな理由に基いて、之を必要と認めたからとて、斯かる事は不必要であり、罪惡であると。私はまた悟つた、善惡の標準は人々の言ひしこと、行ひしことでなくて、たゞ自分自身にあり、自分の心一つにあると。」(「懺悔」)

彼はまたその折の日記にも斯う書き付けた。「私は朝七時に起きて死刑を見に往つた。一つの太く、色白い、强さうな頸と胸が見えた。彼は新約聖書に接吻した。そして殺された。何と云ふ無意味なことであろう。それは私に空虚てない强い印象を與へた。……斷頭臺は久しい間私の眠を妨げ、時々私を驚起せしめた、」と。

この偶然な旅行中の一事件が、何れだけ彼の生涯と其後年の敎義とに影響したかを注意せなければならない。

彼は巴里を去て瑞西に往つた。ゼネバ湖畔の風光は殊に彼を樂ました。青暗い水の上に浮んだ白帆、遙か遠くに見えるサボイの山々、麓の人家、巖――その巖の一つは宛がら古代の裝ひをした巨大な女のやうに見

えた。一方には褐色の葡萄畠があり、深緑の果樹園の中からモントローの町が現はれてゐる。さては、ローン河の奇しき溪々、冷かに白いチョンの城――彼は之等の風光に氣を取られて、暫く其處に滯在した。『人生が樂しく見え出した。私は永く〳〵生きたいと思つた。て、死と云ふものが小供らしい詩的な恐怖となつて現はれた。或時は私は湖水と其岸を見守り乍ら、自分の眼から靈魂へ流れ込む美的肉感を感じた、』と。

靈魂へ流れ込む美的肉感――彼の鋭い五感は、あらゆる事象を肉の儘、生きた其の儘で採込んだ。彼のリアリズムの奥義はこゝにある。

彼は暫くは高加索で見たやうな樂しい自然の夢に耽つた。然かしそれもほんの束の間であつた。やがてはそれが『ルセルネ』(鷗外漁史譯『瑞西館』)と成つて、歐洲文明に對する强い憤怒として現はれた。彼がこの旅行て贏ち得たものは反感のみであつた。かくて彼は獨逸を經てその年の八月にヤスナヤ、ポリヤナの故郷へ歸つた。

(六)

トルストイは十二歳の頃から日記を附け始て、殆んど死ぬまでそれを續けてゐた。彼の日記は僞らざる自己の告白であり、反省であり、同時に一種の創作てあつた。て、一方にはまた彼の創作はその告白てあり、日記てあつた。それほど彼の生涯と創作との間は離すとの能きない關係で結び付けられてゐた。『私は私自身に言ふさへ恥かしいやうな事まで人に話す。』と、『少年』の主人公は言つてゐる。

その日記の殆んど奈何のページにも見られる自己解剖の癖は、彼を驅つて生涯に幾度か危機に陷らしめた。然かし彼の創作はその爲めに益し、その貴い經驗から血と肉を得て來た。即ち彼はその創作の中にも活きた

彼の處女作『幼年』と『少年』は高加索の生活中に出來上り、暫く間を置いてから『青年』が現た。この三部小說は言ふまでもなく著者の經驗を寫したもので、忠實な自叙傳と謂つても差支のないほどである。彼自身の言葉を藉りて言へば『一個の人間の靈魂を示すいろい

ろの出來事に重きを措いて』書かれたものである。無邪氣な幼年のイルテネフの記臆はずつと赤兒の時代から辿られて、稍や感傷的に描き出されてゐる。トルストイは高加索の滯在中に一時病氣で臥せつてゐた。放將な都の生活から逃れて、高加索の自然の中に漸く新しい生命を與へられた彼は、遠い旅の病の床に暫くの閑を得て、何れだけ過ぎこし方を思つたてあろう。『無邪氣な、樂しい詩的時代』がまざ／＼と眼の前に浮んだ。彼はその心の中て『溫良な、感じの敏い、人なつこい小兒』を描き出して見た。その小兒を圍んて、夙く亡くなつた柔しい母の面影や、信神深いダリシャや、無智な百姓が現はれた。て、彼は初めて筆を執て『幼年』を書いた。イルテネフはやがて長じて『少年』となつた。彼は既う昔の罪のない小兒てはなかつた。心と肉の爭と迷ひが出て來た。著者の筆も早く感傷の分子を捨てて、深い心理的の洞察力、自然に對する銳い感覺を現はすやうになつた。

『青年』てはイルテネフはネフルドフと代つた。彼の自我的の性質はいよ／＼增長して、煩さいほど自分て自分を解剖したり、批評したりしてゐる。トルストイの作物のうちても、之は一番に讀者の反感を買ひ易い作てある。その理由は――私の思ふには――作者が後ろへ廻つて、窃かに主人公の行爲を辯護し是認しやうとする傾のある爲めてあろう。なほ、この作には著しく統一と調和を缺いてゐる。トルストイはセバストポールの籠城の間に、硝烟彈雨の中て少しの閑を偸んては稿を起した。それが其缺點の原因てはなかろうか。それにも關らず、何たる忠實の描寫てあろう。混沌として取りとめのない幾千の夢い醸さるゝ青年の發育心理が、斯くまでに好く描かれた例は稀てあろう。それから、所々に出てくる淸新な詩、生々した自然描寫……。

試みに春の夕を寫した一節を引く。

照り初むる新月の美しさ、輝く池、樺の古木。その廣く突出した枝の一面を月が照らし、他の一面は小徑と叢の上に掩ひ懸つて暗い影を投げた。池の彼方からは鶉の聲が聞える。二本の古木はその枝と

枝を擦り合つて微かな音を立ててゐる。蚊の呻り聲。枯葉の上に落ちる林檎の響。敷石の上に這ひ上つた蛙の背をば月の光が綠色に照してゐる。……月は次第々々に高く昇り、より淸く蒼空の上に照るにつれて、ぎら／＼した池の閃煌は響のやうに擴がり乍ら、次第々々に明るくなつて來た。影は愈々濃くなり、光は愈々透き徹つた。

『地主の朝』は矢張同じ時代の著者の經驗をその儘物語に綴つたものである。主人公のネフルドフ（トルストイの小說の主人公はよく此名で現はされた、最後で有名なのは、あの『復活』のネフルドフである）はまだ廿歲の靑年であつた。彼はある理想を抱いて、農民の間に一生を送るべく、大學の課程を捨てて故郷へ歸つた。然るに彼の夢みてゐた彼等の社會の間には、根强い冷淡と、不信と、猜疑と罪惡と忘恩のほか何物もなかつた。彼は野に出て幾度か是等のものと戰つた。そして戰ひ疲れて幾度か失望落膽しては自分の家へ閉籠るのであつた。彼は一年前に自分が懷いてゐた理想の如何に麗はしかつたかを思つた。之に反して現實のいかに苦いものであるかを覺つた。彼は、『愛と善はこの世に於ける唯一の幸福、唯一の眞理である』と云ふ自分の理想の痛ましくも摧かれたのを思つて恥辱を感じた。

彼は一夜樂器の前に立つた。そして無意義な一曲を奏した。それが圖らずも彼の倦怠を慰め、彼の摧けた志操を鼓舞した。

彼は其翌日から更に新しい精神を以て農民の間に這入つた。怠惰な、忘恩な奴隷は最早彼の眼に映らなんだ。却て彼は愛の直覺を以て彼等の心を透視した。運命の前に潔きその諦め、罪に對する寛大、家庭の融和、信神、倦まざる勞働――斯樣な美點を彼はその間に發見した。

『いかにも麗はしい有樣だ。』と、斯う彼は叫んだ。

『なぜ私ゃ是等の者の一人にならなんだか。』

全體のトルストイが旣にその中に含まれてゐる。鋭ひ觀察と、斷え間なき幻想と。一たび彼が眼を開けば、自然も人間も、男も女も淸透なリアリズムのもとに映し出され、一たび彼が眼を閉づれば、百千の夢一時に

歸る――神の夢、愛の夢。

　失望して野から歸つたネフルドフは倦んじ果てた身體を樂器の前に横えた。

　「ピアノの前に座つた彼の手は知らず〴〵樂鍵の上を動いた。一つの音が響いた。それから第二の音、第三の音と。……彼は奏し始めた。その音は必ずしも韻律に協つてはゐなんだ。時々馬鹿げた破調を起すともあつた。音樂の才が窺はれるわけでもなかつた。然かしそれが彼に何とも言はれぬ悲哀な、不可解な喜びを與へた。樂鍵の一つ一つ變る度毎に、媚びるやうな彼の心は、次の樂鍵の與へる音を待つた。』彼は朧氣な空想を以て、實際の調の足りない所を補つた。彼は合唱や合奏を聞いてゐるやうな氣がした。……するうちに彼の勢附けられた空想は、彼を强い悅樂の頂上まてはこんだ。何う云ふ理由があるでもなしに、彼の眼の前には過去と未來のいろ〴〵な光景が、手にとるやうに、驚くほど明らかに浮び上つた。』

　それは天才の音樂家が初めて自個の才能を意識する時に起る情態てはないか。才あり憂ある樂人が心行くばかりな一曲を奏したとき、自分の樂器の前て見る夢てはないか。モツアルトは斯樣な空想の世界の中て其不幸な晩年を慰めはせなんだか。ビートーベンは斯樣な强い悅樂に驅られて「月光の曲」を作つたのてはあるまいか。

　トルストイは斯樣に音樂の强い悅びと力を感ずるだけの素質を有つてゐた。

　然るに彼は後年にその『藝術論』を書いた中てはあらゆる音樂家を罵倒し、『クロイツェル、ソナタ』ては力を極めて、音樂の導く戀の誘惑を寫してゐる。彼は實際それ程までに音樂を嫌つてゐたのてあらうか。それとも彼は其强い感染力の爲めに、自分の理性も道德的意志も蹈み碎かれるのを恐れたのてあらうか。その齎す平等界ては彼の最も重んじた自我の獨立も吹き浚はれるのを忌んだ爲めてあらうか。或は、彼の内心深く潜んだ肉慾がその誘惑力の爲めに頭を擡げ出すを懸念したのてあらうか。

事實トルストイは音樂を嫌ふ所ではなかつた。彼の義弟バースの『備忘錄』に斯う云ふ事が言つてある。『彼は非常に音樂を好いてゐた。で、何時も好んで古い大家の物を奏べた。彼は著作に取懸る前にはよくピアノの前に座つた。恐らく彼は斯うしてインスピレーションを得たのであらう。彼はその爲め情が激して來ると、恐怖に打たれたやうに、稍や蒼白い色をして微かに顔を澁めた。』と。

彼は音樂の魔力を恐れてゐた。

米國のナディン、ヘルビッグ婦人が一八八七年の頃トルストイを訪問した折の話の中に面白い一節がある。

私はその晩の事を忘られない。例の若い波蘭のビオリン彈者が、私にビートーベンの『クロイツエル、ソナタ』をピアノで合せて呉れろと言つて頼んだ。それは彼の得意にしてゐた一曲であるが、上手なピアノ彈者がないために長らく彈かなんでゐたのだと。

その時トルストイは非常に熱心に聞いてゐた。彼はその第一折から繰返して彈かした。で、最後の絃の斷れるや否や、挨拶もせずに自分の部屋へ引込むで了つた。その晩に彼の猛烈な『クロイツエル、ソナタ』の作が出來上つたのだ。……私の聽衆のうちでもトルストイは最も著い一人だつた。彼は自分をも周圍をも忘れて、顔色を變えてゐた。好い曲節の所へくると、彼の涙が頬を傳はつて流れた。で、妻君の方へ振向いて、『ソニア、新しい手巾を呉れ、俺は今日風邪を引いたやうだ』などと言つた。

之を見ても解かるが、彼は晩年でも音樂の趣味を忘れてゐなんだ。『彼の聾のビートーベンの不健全な作物』などと云つて攻撃した人から泣かされてゐたのだ。たゞ彼は自分がその魔力の爲めに自己を征服せられ、自分の缺點を曝らけ出されるのを非常に恐れてゐたとが解かる。ゴルデンライゼルと云ふ音樂家は一と夏もヤスナヤで暮して、トルストイの最後の病氣の日まで毎日々々彼に彈いて聞かしてゐた。

開放的なトルストイにも斯樣に堅く守つてゐた秘密がある。彼の矛盾は斯う云ふ所から來てゐるので、世間の人が四角張つて詮索するやうな矛盾は、寧ろ矛盾ではなくて彼の美點であつた。生れながらの『人間』としてのトルストイの斯樣な秘密や弱點を最もよく知悉いてゐたのがツルゲーネフで、トルストイが彼を怖れ

てゐた理由も茲にある。彼が一生涯に唯二の恐いものがあつた——ツルゲーネフと音樂と。（ローランの『トルストイ』には、彼の作物と音樂とビートーベンとの關係が詳しく論じてある。『なぜ彼はあらゆる音樂家のうちから特に最純最潔なビートーベンを擇んだのか。なぜなら彼が最も力强かつたから。』と。）

前にも述べたやうに『計數者の思出』は矢張トルストイ自身の放蕩時代のことを書いたもので、賭博に身を持崩して自殺した青年を描いてある。匆卒に書き流したやうな極く短い物ではあるが、特色のある作だ。『彼には富もあり、名もあり、才もあり、功名心もあつて、何一つ缺けた物もなかつた。彼は罪を犯したわけでもない。が、彼はもつと惡いことを爲た。彼は彼の勇氣と其青春を殺した。彼は單に自分の意志の缺亡から身を誤つた。』

トルストイはこの作で初めて死を描いてゐる。賭博の爲めにさんざん擦つて、身動きの取れなくなつた主人公は、程過てから再びその倶樂部へ現はれた。て、筆と紙を命じて手紙を書いた。それから、玉突の給仕を呼んだ。『おい一番突かう』——彼の方が勝つた。『奈何だ、上手くなつたろう』——『實際ですなー』——『所で、ちよつと、俺の馬車を呼んで來てくれ』。

彼の人は部屋の中を彼方此方歩き始めた。私は何んにも疑はないで、馬車を呼びに行つたが何處にも見附からない。で、復た二階へ引返して來やうとすると、棒で物を擊つやうな微かな音がした。私が部室へ這入ると異樣な臭がした。四方を見廻すと、驚いた！。彼の人は血染になつて、其處へ倒れてゐた。……銃短がその側に在つた。私はたゞ膽を潰しただけで、聲も立てえずにゐた。すると、少しばかりぴく〳〵して、兩足を踏ん張つたかと思ふと、最後の呻きとともに息が切れて了つた。

その終の一節が、いかにも後年の『イワン、イリッチの死』を思出させるやうな書振てある。彼は同じ頃にまた『三つの死』を書いた。死の思想が旣にその頃から彼を惑はした。人はなぜ死ぬのか？。彼は赤兒と胎兒、胎兒と非實在との間の神秘な距離を窺はふとしたやうに、恐怖しながら而かも大膽に死と面接した。昔から彼ほど生きながらにして死を知り死を經驗した作

家はなかつた。他の人が不可能として單純に諦めを附けるか、麗はしい未來を想像して之を飾ろうとした人生の一大秘密の境へ、彼は飽くまでも濁らざる眼光を向けた。彼の死に對する懷疑を單に肉の執着から出た恐怖だとばかり解釋するのは當を得ない。彼は別に大膽なる Seer であつた。

「三つの死」は富有な貴女と、肺病やみの馬丁と切倒された樹の死とを書いたものである。いろ／＼の人物が判然と描き出されて、重味のある簡潔な作だ。「ゲーテの最も善い萬有神教的な詩と比べらるべき散文詩」だとクロポトキンは評してゐる。執着の強い死と、淋しい諦らめの附いた死と、無意識な死と、のおの／＼その態は幾はるが、全體の空氣が死の懷疑と與に、萬有に漲る「生命」と云ふやうなものの意味を深く考へさせる所のある作である。それでゐて著者に特有な具體的の議論は一つも出てゐない。特にその最後の一章を私は忘れることが能きない。

二人の人間が死んでから既う一と月經つた。例の貴女の墓の上には立派な大理石の碑が建てられた。然かし馬丁の墓にはたゞ綠な草が生茂るのみであつた。「お前はグラヴェルの石碑を買つて遣らないと罪だぞ：：：：せめて十字架でもよいから建ててやれ」。斯う言はれて一人の馬丁は、斧を持つて林へ出て行つた。それは靜かな夏の朝であつた。急に厚い森の中から異樣な響がし出した。

斧は深く這入つて、だん／＼重い響を立てた。汁の多い白い木片が露つぽい草の上へ彼方此方散つた。みし／＼と音がして樹は全身に震えた。少しばかり傾きかけたが、急ぎてよろめきながら其根の上に立直した。一時四方が靜まり反ると、また幹がよろめき出して、微かに再びみし／＼と鳴つた。で、其枝を潰し、小枝を散らし乍ら濕つた土の上へ倒れた。：：：他の樹はその靜かな枝を新しい空地へ自由に延ばして、前よりも美しく喜ばしさうに立つた。

朝日の第一線が透き徹つた雲を衝いて空を照し、見る間に一面に擴がつた。霧深い風が谷を吹いた。草木の葉の上ではぎら／＼した露が戯れた。薄い白い雲が急がしく青空を過ぎた。鳥は森の中に集つて囀つた。柔い水つぽい若葉が梢で靜かに喜ばしさうに私語いた。そして生きた樹の枝が倒れた樹の死骸の上で重々しく、嚴つく下つた。

「哈薩克」はトルストイの一生涯の作物のうちでも獨特の地歩を占めてゐる。若いトルストイのオレニンは暫く都の生活から逃れて高加索の奥深いテレック河の畔てある哈薩克人の村に住んでゐた。まだ人類の征服の遂かない雄大な自然——遙か彼方に雪を戴いて聳えてゐる連山、灰色の崖と、葦と、樫の深林を控えた河岸——が奈何だけ彼の眼に珍らしく映り、奈何だけそれが生々と描かれたてあろう。彼はその土地て野性な、元氣に富んだ高原の自然兒を相手に幾月か暮した。愛し、憎み、狩り、そして考へた。奇麗な黒い眼をして「薄いさやらこの襯衣」を着た少女のマリアンカ、背の高ひ體格の頑丈な眉毛の濃い鷲のやうな眼付のルカシュカ、「古い狼」のエロシュカなどが、斯様な自然を背景にして描き出されてゐる。

殊に年老つたエロシュカはトルストイが創造した人物のうちても、異數なほど完璧に近いものてある。彼には一生七十年の間「我儘勝手な自由と、怠けるとと、強奪と、戰爭」ほど好きなものはなかつた。彼の背中には彈丸のこまつた銃と血の着いた袋が懸つてゐる。て、何時も「葡萄酒と火酒と火藥と乾いた血との雜つたやうな強い心持のよい臭」をさせながら、彼方此方とうろつき廻つてゐる。彼は誰ても摑まえて昔の功名話を聞かせるのが好きだ。獲物の話や、勝ち戰爭の話や、馬を盗んだ話やらを。「俺もこれて善い男だ。酒飲みて、泥棒て、獵夫てさ。女には面白いし、女を可愛がるし」——斯んな事も言つてゐる。斯様に殺生の好きなエロシュカは、或時は蠟燭の周圍に集る蛾を追ひながら、斯う言つた。「馬鹿、馬鹿！何處へ飛んて行くのだ、馬鹿、馬鹿！」て、立上りながら大きな掌て其蛾を拂ひのけて遣つた。

「この時のエロシュカの溫和しい笑顔はアッシシのセント、フランシスを思ひ出させなんだか。彼の心の中にも矢張一滴の溫い血はあつた。その血は獸のそれてなくて人間の血てあつた。なぜなら、この年寄の「盜賊」の良心には全く殺戮と云ふものがなかつたから。自然のやうに、同時に彼は情深くありまた殘酷てあつ

た。彼は毫も自身でこの矛盾を覺らずにゐた。最終には善惡の差別がついて凝り固まるものも、彼の心の中ではまだ原始的な無意識の調和のままで混つてゐた。」とメレジコーフスキーは評してゐる。

無意義な幾年かを都の中で徒消したオレニンは、斯樣な自然の中へ這入つて、急に眼が醒め始めた。彼はその第一歩を高加索の地へ踏入れるや否や「總ての莫斯科の記臆も恥辱も悔恨も」忘れて了つた。同時に彼の青春のあらゆる力が一時に燃え出した。「哈薩克」は實にトルストイの天才の發育期の華である。

「青春よ、全能の神よ。再び歸らぬその悦樂よ。」

彼はたゞ愛し、唯だ信じ、そして幸福を感じた。彼は何を愛したのか、何を信じたのか。青春を、生命の力を、幸福の指さす方を。彼は同時に Paganism の信者であり、また Pantheism の信者であつた。

「私は愛する――斯くまで愛に滿ちてゐる。……如何に大膽なるかよ。如何に善良なるかよ」。斯う彼は繰返し繰返して、泣かんばかりの喜悅を感じた。なぜか？誰が大膽で、誰を彼は愛するのか。彼は自分でも明かにそれを意識せなんだ。」

青春の力は何處までも彼を搬んだ。オレニンは恁うして哈薩克をとめを愛し、ルカシュカを美み、エロシュカと與に「自然」を信じた。「奈何な事も皆な貴い。神は人間の喜びの爲めにあらゆる物を造つた。何事も罪ではない。美しい少女と戯れるとも罪ではない。」唯だ健康であれ、そして生きよ。人生は總て善であり、總て幸福である。生命は力であり神である。

强い自然主義が彼を醉はした。數多い獸と鳥とに取卷かれた山奥の小河の岸で道を失つたオレニンは、數の伏兵を數歩の前に置きながら、「急に理由もない幸福に囚へられた。で、彼は小供の時の習慣に從て、十字を切つて何物にか感謝した。」彼は茫然として自分を取卷く蚊の群を眺めてゐた　「私の周圍には數多の蚊が躍りながら呻つてゐた――一つ、二つ、三つ、四つ百、千、幾萬の蚊が。どれも是も私の身體に寄り附かうとしてゐる。その一つ々々が矢張このドミトリ、オ、

レニンのやうに獨立した生物なのだ。」て、斯う考へ乍ら、彼は自分が露西亞の貴族であり、莫斯科社交界の一員であり。何の人彼の人の親戚であることをも忘れて了つた。彼は自分も丁度この蚊や、雉や、牡鹿やと同じやうに生物であることを感じた。『彼等やエロシュカと同じやうに私は暫く生きて、それから死ねてあらう。草が私の上に生えるてあらう。』斯う考へながら彼は言ふに言はれぬ幸福を感じた。然かし彼は到底生れながらのエロシュカであることは能きなんだ。彼は却てこの境遇から反對の結論を產み出した。『幸福は他人の爲めに生きることてある』と。それは自然と青春に裏切する正教的グリシャの聲てある。オレニンは遂に後者に降伏した。

『嗚呼、若しも私がルカシュカのやうな哈薩克人に成りえたならば。自分の位置も生存の意義も考へずに、馬を盜んだり、酒を飮んだり、歌を謡つたり、人を撃つたりすることが能きたならば』と、彼は嘆息してゐる。斯うして彼はエロシェカに別れ、戀しいアリアンカに別れて、淋しく高架索を見捨てた。『年寄の泥棒』は熱い接吻を彼に與えながら、"Ever-wond ring fool"の語を以て彼を送つた。

オレニンはやがて『セバストポール』の城砦に立つた。何たる變化てあらう。トルストイは其籠城の中に急しい筆を採て三扁の見聞錄を綴つた。初めのページの愛國的な叫びは、次第々々に冷靜になり透明になつた。死を前にして人間の曝露する本性、その虛榮と恐怖と喜劇とが、恐ろしいほど直截に眞實に描き出された。殊に死の恐怖が暗く全篇の空氣に漲つてゐる。彼はその頃から、つとめて感傷の氣分を避けた。それは『ぼんやりした、女々しい、私語的な感情』だと言つてゐる。

彼は嫌つてゐた。著者の寫實は或場合彼自身をさへ恐れさせた。彼はその第二篇の中て次のやうに言つてゐる。

『ある苦痛な疑が私に起つた。恐らく此樣な事は筆にせない方が善いのてはないか。恐らく、私の今書いてゐることは有害な眞實てはあるまいか。それは丁度衞

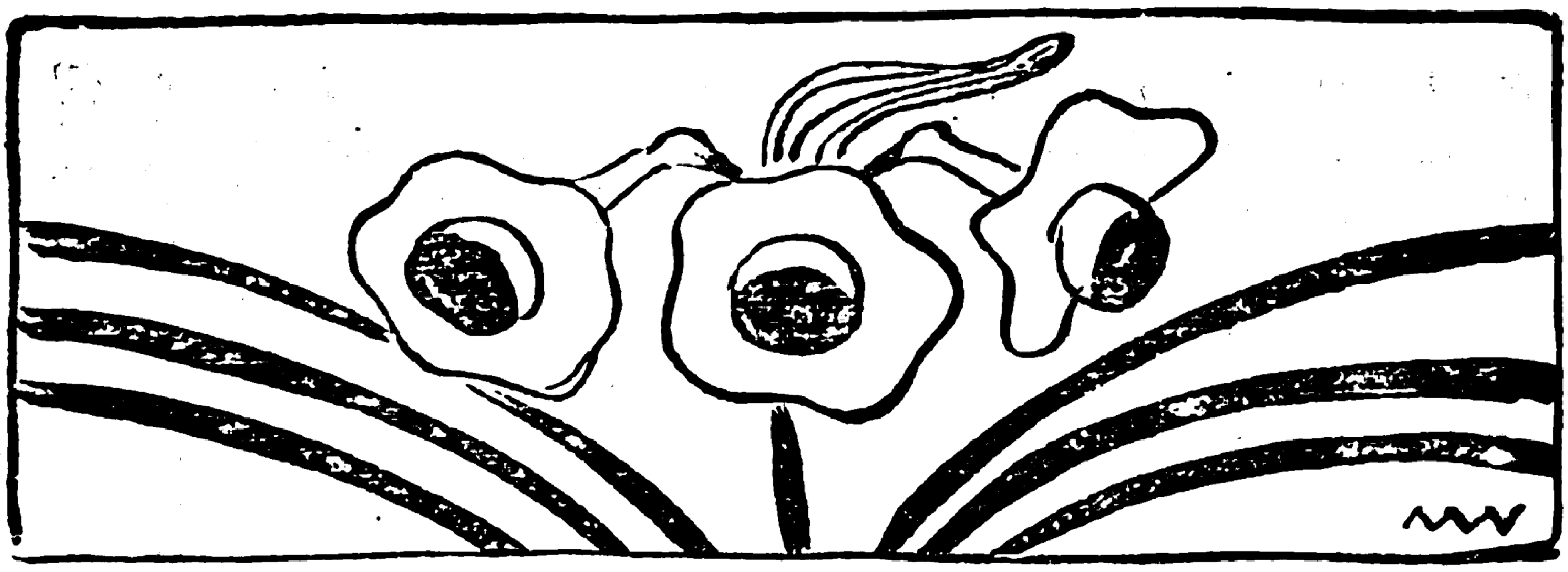
葡萄酒を濁らせない爲めに、地下室を靜かにして置くやうに、それが世の中に害を爲さないやうに、我等の心の中にばかり秘めて置かるべきものではあるまいか。果して左樣としたら、惡事の表現はいかなる場合に避くべきものであらうか。如何なる場合に善事の表現を學ぶべきものであらうか。誰を罪人にし、誰を英雄にすべきであるか。否や、總てが善であり總てが惡がある……』。恁う言つて彼は再び舊との沈着な態度に復つた。『私の全心の力を以て愛し、あらゆる彼の美を現はさうと私の努めてゐる――過去も現在も未來も最も美なるべき――この篇の主人公は「眞理て」ある、』と。

『セバストポール』を書いたときから、トルストイ一流の寫實主義は漸く圓熟の域に達した。

* * * * *

斯樣にして、高加索以來の變化の多い彼の Wander-jahre は終つた。

此篇に記する所は、主として高加索時代に至るまでの杜翁の藝術論にして、「戰爭と平和」「アンナ、カレニナ」の如き二大傑作を出せる杜翁の成熟期の藝術論は、引續き次號の本欄に掲げらるべし。昨年九月の本誌に出でたる晩年の杜翁論と併せ讀めば蓋し杜翁の全體を窺ふに足るべし。(編者しるす)



擬男爵

東京朝日新聞記者　楚人冠

一　望郷

クリスマスの前夜、例年の通り先生のお宅を尋ねた。

嗚呼先生逝いて此に八年。クリスマスの近づく毎に、しみ〴〵となつかしさが身に迫る。思へば初めて先生の門に入つた時、初めて先生から敎(をそ)はつたのが、アーピングの「乗合馬車(ステーヂ、コーチ)」であつた。之は英吉利でまだ鐵道の開けぬ頃にあつた古風な二階造り六頭立の乗合馬車のことで、之に乗つてアーピングが田舎の物日前(ものびまへ)の様を見物に出かけた顛末を叙したものであつた。文は短いが其の驛場(しゆくば)〴〵の雜沓や、車内の雜談や、御者の容子や、沿道の光景を細々(こま〴〵)に寫したところ、如何さま昔の英吉利の田舎のクリスマス前の陽氣な賑はしい趣が斯うもあつたらうかと眼の前に髣髴された。

其の乗合馬車の乗合の中に、日本なら先づ冬休みを幸ひ田舎へ歸つてお宅て年

を取らうといつたやうな子供が三人あつた。まだ小面倒な世の中のくさ〳〵した心遣ひを知らぬ身の、何よりも樂しい學校休みに、久々て兩親の許へ歸るのだといふので、包むに包み兼ねた嬉しさにそは〳〵して、車中は唯もう歸つたら何しやう斯しやうと言ふ談ばかり。妹には何をやる、――お母さんには何な話をする、――ベスと駈けッこをする、――鹿毛を乘り回す、――――いや伍作爺が迎に來るぜ、長七も屹度來るよ、などと話は夫から夫へとつゞく。頓て次の驛に近づくと目早くも窓から見つけて『ほら、伍作が見える』『長七が鹿毛を牽て來た』『やアい、後からベスが來たい』と迭みがはりに罵り交はして迚もじつとしては居れない。驛に着くと成程印袢纒を來た眞面目くさつた伍作爺なる者が犬や駒を連れて迎へに出てゐる。子供は飛び出すが早いか、爺のまはりに纒ひつく、犬に抱きつく、逸早く馬に乘らうとする、一通りの騷ぎてはない。辛と爺が制して一人が馬に乘つて出る、犬が其前に吠えながら駈け出す、後の二人は銘々に爺の兩手を取つて盛に何やらん二人一度に話しかけながら出かけた。兎角する中にアービングの方の馬車は用意が出來て此の一行を後に再び出發すると、兎ある曲角で、遠くに小奇麗な田舍家が一つ見えた。入口には母親らしい年配の婦人と、二人の若い娘が待つてゐる。其處へ犬と駒と爺とを連れて三人の子供が勢よくやつて來た。――夫から先何なることかとアービングは窓から首をつき出して見てゐたが、生憎と森に隱れて何もかも見えなくなつた。

夫から其の夕次の驛場て長くは會はなかつた舊い友だちとゆくりなく邂逅して之が勸に任せて、其の家てクリスマスの前夜を送ることになり、霜冴ゆる月明の夜二人は馬車を驅つて、ユールログゆかしく燃ゆる古めかしい田舍家の爐邊へ向ふといふのてある。之を先生が得意のエロキユーションて面白可笑しく講釋して聞かせたので、初めて斯な仔細な文を斯う仔細に聞かされた僕は、子供心にも感に入つてうつとりとした。殊に毎年學校休みとなれば逸早く國に歸つて、何時も母

と伯母さんとが波止場迄迎へに來て下さるのを何より樂みとしてゐた僕は、之を憶ひ出して、堪へ兼ぬるほどに故郷が戀しくなつた。其時は僕もまだ世の中を斯ほどまでに雜人原の跋扈する處とは知らなかつた無邪氣な十七八の少年であつた。

夫から後毎年此の日には先生のお宅へ出掛けて、クリスマス樹の飾附を手傳つたり、子供の靴足袋へ入れてやる贈物の品々を揃へたり、一所に骨牌を取つて罪をぬり合つたり、暖爐の側で香の高い紅茶を啜りながら雜談に耽つたりして夜を深うするのが常であつた。

憶ひ起す一年夜深くる迄語つてさて辭して出やうとすれば外面は白晝と紛ふ許りの月明であつた。月が宜いから私も出やうと言つて先生もぶら〳〵歩いて來た。招魂社の邊迄來ると遙か九段の方から朗らかにクリスマス、カロルを歌ひながら來る者がある。近づいて顏見合せば、知合の若い英吉利人が月に浮かれて、クリスマスの挨拶に先生の家を音づれる所であつた。先生も故國を思ひ出してか、ほろりとして其若人と相抱いて月明に立つたまゝ、暫し言葉もなかつた。遠く異境にさすらへて此の夜偶ま故國の歌に接した二人が胸の中はほゞ察するに難からぬ。僕は或一種の感に打たれて我知らず顏を背けた。

此の思出の多い〳〵クリスマスの前夜に僕は先生のお宅を尋ねたのである。

二 『椅子二つ』

道々神保町近くで、さう思つた。――昔は能く此の邊で先生に出會つたことがある。遠くから目ざとく僕の姿を見ておきながら、さてつい二三間先迄來て初めて氣がついたやうな顏をして、急に物におびえたやうにくるりと後ろ向になつて、又元の道へすた〳〵と引返して見せては、僕を笑はせた。大柄な先生が鍔の廣い濃鼠の古けた中折帽か何かを阿彌陀に被つて、兩臂を曲げて如何にも急いで逃げる樣な風をして、屁ッぴり腰で行く後姿が、嗚呼今も尙目の前にちらつく。日本人は兎角途中で會ふと、一町も手前から人の顏を見つけて、にた〳〵と馬鹿みたいな顏で笑ひながら近づ

いて來るので、誠にいけないと、先生は何時も笑つた。

之が先生の生きて居られる時であつたなら、僕が今日のやうに斯う衣物でも着かへて挨拶などに出かけると、人の惡い先生は必ず玄關迄迎へて、態々驚いたやうな顏をしながら、急に眼鏡を物々しく半巾で拭いて之を掛け直した後、ぢろり／＼人の身體を見上げ見下した揚句の果には、兩手を兩眼鏡のやうな恰好に眼に當て丶、又ぢろ／＼と見直すのが例であつた。吹出さずには居られなかつた。而して先生のすまして入つて行く後に尾いて座敷に通ると、先生は業々しく、居合せた女中に向つて『ギブ、ヒム、ツー、チエアズ』と言つて笑ふのが例であつた。えらい人が來たから一つの椅子で足るまい、二つやれといふ意で、亞米利加でよく冗談にいふことださうな。

全く先生は賑やかな人であつた。

三　「一寸お談」

尋ねて見ると、元より先生が生きて居られた頃ほどの賑はしさはないが、夫でも一年一度のお祭といふので、子供達孰も大喜びで、きやつきやと大騷ぎをしてゐた。知合の若い人や、近所の娘達も遊びに來てゐて、陽氣に見えた。クリスマス樹もちやんと用意が出來て、之を飾つた大床の間には、諸方から進物の菓子折や何かゞ堆くなつてゐた。

子煩惱の先生が、子供の敎育だけは頗る嚴重にしてやつたので、幸にして不出來な子は一人もなかつた。長男は長らく某地方の中學で英語の敎師をしてゐて、今は歸つてゐる。次男は今年遠く亞米利加へ遊學に出かけた。長女次女三女と近頃歸つた長男とで、小やかな私塾を宅に開いて一廉の收入がある。其の下の四女と三男とを相手に未亡人は樂々と世を送つてゐるのである。樂々とはいふもの丶、かよわい女の身で、夫に別れて七人の子を引受けた未亡人の身は中々一通りの苦勞であるまい。唯斯して親子睦じく格別の不自由もなしに暮して行くのを見る毎に、僕は一種の感謝を感ぜざるを得なかつた。

僕は例に依て未亡人に無沙汰のお詫をして暫く子供達と雑談を交はした。幼い時からの馴染ではあり、僕の母も妻も皆識り合つた間のことゝて、いつも僕が尋ねて行くと左ながら親類の小父さんでも來たものゝやうに、子供達は様々の冗談を言つて、ふざけるのであつた。

やゝ暫く話した後さて愈々歸らうとした時先の程から長男と時々ひそ〳〵と何事をか話し合つて居た未亡人が、何時になく急に僕の歸るのを止めて、一寸お話があるから、面倒ながら是非一度二階へ來て呉れぬかとの話であつた。

僕は別段何の氣もなしに二階へ上つた。上つて後、僕は驚くべき事實を未亡人から聞かせられたのである。

つゝましい未亡人が、左も言ひ出し惡くげに語り出づる所を聞くと、――

實は今年次男の洋行に就いて色々金の要ることがあつて、さんざ工面をした揚句、何しても二百圓許り足らぬことになつた。折角思ひ立つて九分通り迄出來た話を、此のまゝおじやんにするのも如何にも殘念なので、ない智慧を絞つてやつと考へついたのは、豫て先生在世の時道樂に集めてあつた古錢の事であつた。數は十四五にしか當らぬが、其の中には羅馬の共和時代の末に出來た金貨や、アッシリアの何がし王の頃に鑄た銀貨などがあつて、其の道の人に見せたら千金をも吝まぬ位の珍品がある。先生の生前にも、之ばかりは然るべき人が然るべき値段をつける迄決して手離すなと、堅く言ひ置かれてあつたが、背に腹はかへられぬ切迫詰つた折柄、兎に角之を賣拂つて旅費の不足を補はうといふことに決した。そこで先づ、豫て懇意な知名の某實業家の處へ持つて行つて相談したところが、何分品物が品物で、一寸自分には分り兼ねるから自分の方では何することも出來ないとのことであつた。併し、夫人が色々事情を訴へて何とか勘辨があるまいかと泣き付いたので、件の某氏も大に氣の毒がつて、夫て

は私の知つた實業家に古美術を愛玩する人があつて、家には立派な美術博物館みたいなものを持つてゐるし、旁々此種の骨董品にも存外に興味を持つて居ぬと限らぬから、何なら御都合で、夫へ紹介して上げても宜しいと言つて吳れた。御都合どころか、願つたり叶つたりである。早速然るべく賴んだ。斯くて此の人から紹介されたのは、豫てより其の名は聞き及んでゐる大山入太郎といふ物持であつた。紹介人が紹介人であるだけに、此の人なら無論何とかして吳れること、未亡人は喜び勇んで、其の足で直ぐ此の大山を尋ねた。

　年に似合はぬ若々しい樣子をした男であつた。髮の毛の黑さといひ、顏の色のつや〳〵しさと言ひ、之が八十近い人とは思はれぬ位であつた。蛤の剝身のやうな平べつたい顏に、にた〳〵と笑を含んで、逐一熱心に未亡人の談を聞いてゐたが、談がすむと、如何にも氣の毒さうな顏をして『實は之が日本の品なら、宅の方でも是非讓つて戴きたいのですが、何も斯う我々共にさつぱり分らぬ品ではネー』と先づ言葉を濁して穩かに斷りかけた。『さし當り、專門家の鑑定を求めるといつた所が、急の間には合ひますまいし、夫にお談を伺ひますと、取り急いて金子の御入用のやうにもあり困りましたなア』と、成程困つたやうな顏をした。

　夫人は、一寸立ち寄る樹影に雨の漏る心地がした。話が暫し途切れた。何なことを言つたら、此の老人の心が動かし得らるゝだらうかと一寸思案に餘つた。すると今度は大山の方から口を切つて、『一體どれほど御入用なのです』と言ひ出した。夫人が、二百圓もあれば誠に好都合であるが、百圓でも一時の急場には間に合ふ由を語ると、老人は俄に又にた〳〵と笑ひ出して、『ハヽアそれだけのことなら、兎も角も私がお間に合せませう』と心安げに言つて吳れた。其の口ぶりに依ると、今すぐ此の見當のつかぬ古金銀を買取る譯には行かぬが、之を抵當に百圓許り用立てることなら雜作もないといふやうに聞えた。夫人はやつと胸なで下した。百圓さへ出來ればあとは何にでもなると思つたのである。乃ち厚く禮を述べて、古錢を大山に渡して、

此處を引取つた。

現金は手元にないから、明日店の方へ取りに來て呉れとのことであつた。夫人は露疑ふ心なく、翌日銀座の店へ行つて見ると、前日ちやんと主人から申渡があつたとかで、直ぐ二階の一室へ通された。夫人は此處で百圓受取つて受取でも出せば夫で宜いことと許り思つて居た。今の自分等の身の上を憫れんで、好意で貸してくれる金とばかりと思つたから、利息などの勘定は無論しなかつた。無利息でも行くまいが相當の抵當品も入れてあることとて、太したことには及ぶまいと額を括つてゐた。况んや先方は名だゝる大金持であつて、此方は然るべき人の紹介を受けて、昨今の一切の窮状を打明けた上の頼てあるから、如何に兎角の評判のある大山だとて、まさか之を種に、貨殖の一端に供しやうとは、毛頭夫人の方でも思はなかつた。

所がやゝ暫く待たせられて後、やつと事務員が持つて來たものを見ると、驚くべし、一葉の活版刷りの金子借用證書に期限は一個年、利息は二割五分と書き入れたものであつた。此の證書がちやんと活版で印刷されたものである所から見ると、始終此の手で金を貸してゐるものらしい。夫人は何だか一杯食はされたやうな氣がして、あんまりなと思つた。が併し折角此處迄談が進んで、今更言ひ爭ふのも氣まづいと考へ直して、遂に此の證書に調印して約束の金壹百圓を借りて來た。「只でも貸してやるやうな調子で約束して、抵當品迄取つておきながら、二割以上の利息を取るとは、丸で高利貸ですねえ」と、夫人は溜息を吐いた。

此の貸借は去年の今頃にあつたこととて、今丁度期限に近づいてある。平生なら之ばかしの金に不自由する譯でもないが、今年は色々物入の事があつて、思ふやうに金の工面が出來ない。若し之が期限に返せなくて彼の先生遺愛の品が僅か百圓位の端金で抵當流れになるやうなことがあつたら、夫こそ我々母子は亡くなつた人に對して、何としても申譯がない。そこで甚申し兼ねたが、都合のつくものなら、金百二十五圓暫時貸して呉れぬかといふのが、夫人の所謂「一寸お談」の

要點であつた。

僕は右の一部始終を聞いて、哀しくもなれば腹も立つた。僕は三つの歳から只母一人の手に養はれて、具さに夫を亡くし父を失つた母子の身の果敢なさ心細さを心得てゐる上に件の古錢の事は先生から屢々講釋を承つて、古錢學の上では隨分喧しいものゝ由聞いてゐた。如何にも之を今僅の金の抵當に取られて流して了ふのは遺憾至極である。殊に其の又大山なる者のやり口が如何にも亡義道で、何だか惡く勘ぐれば、正面から買ひ取り得ぬ珍品と見て、態と之に僅かの金を貸附けて、結局己の物にしやうといふ意味でないかとも疑はれた。世間には此種の意味で小さな百姓に金を貸して、次第に土地を兼併して行く剽悍な地主がある。大山も亦其傳ではないかと思つた。夫なら夫で一擊を加へずんばあるべからずと僕は憤つたのである。

いづれにしても時機を失しては取返しがつかぬ、一時も早く金を返して抵當を取り戻すのが最上の策であると信じて、僕は快く百餘圓の金の調達を引受けた。

四　先生

此の夜臥床に入つても、變にむしやくしやして、僕は長い間眠れなかつた。凡そ人間は人によつて銘々其の神經を刺戟せられ易い事情が違ふ。僕に取つては、かよわい女や子供が何か強い者の爲に虐げられてゐるのを見るほど、僕の神經の刺戟せられ易いことはない。僕は此種の談を聞く毎に無暗に神經が亢奮して、叶はぬ迄も何とかして見たくなるのである。眠られぬまゝにうつら〳〵とのたうち回つてゐる中、思は自ら先生の事に及んで、次から次へと順序もなくさま〴〵の事が憶ひ出される、——

一體先生は金の始末の惡い人で、だらしなく下らぬことに金を使つては、何時も貧乏して居られた。時には、斯な碌でもない物を買込んでと、細君から大小言を食つて大に恐縮してゐることなどもあつた。氣のいゝ人の金の始末の惡いほど、世の中に始末の惡いものはないもので、先生も隨分色々のことで妙な相手に引

掛つては友人に義理も缺いたこともある。先生を善人てないとは誰も言はぬが、何だか頗る便りない人のやうに、或方面の人から解せられたのは、畢竟斯いふ事情から來たことが多い。

金の始末こそだらしがなかつたが、人柄は極々親切な、思ひやりのいゝ、あッさりとした、氣分のさッくりした人であつた。殊に其の敎場でも宅でも何時もふざけたことばかりしたり言つたりしては、人を笑はせた手際は正に天下一品、彼を知つた者の珍とする所であつた。

敎室内の先生は實に大變なものであつた。只管生徒を倦ませまいとする努力は實に大變なものであつた。沙翁の悲劇ジユリアス、シーザーの一幕目の第三場かに、大雷雨の最中、シセロとカスカとがばつたりと出會ふ段がある。シセロが皆學者めかしく〳〵雷雨の最中にすまし返つて歩いて來る所を、カスカがあわてゝ飛んで來て思はず之に打つかつて問答する件である。又同じ劇の三幕目の末にシーザー愈々殺されて後、羅馬の市民がアントニーの追悼演說に激して、叛徒の家へ押し寄せんとする途中、詩人のシナなるものを、刺客の一人なるシナと思ひ違へて誰何する一段がある。問答の末詩人のシナとは知れたが、激し切つた市民は、詩人だらうが何だらうがシナといふ名なら殺して了へとて、到頭之を殺して了ふのである。此處等の章を講釋する段になると、先生忽ちシセロに扮し、カスカに扮し、シナに扮し、又市民に扮して、澄し返つたシセロやら、せき込んだカスカやら、市民の前に小さくなつておど〳〵したシナなどの身ぶり聲いろを一々に使ひ分けて、丸で一人で芝居をしてゐるやうであつた。昔てロングフエローの喜劇「西班牙ノ學生」を敎へてゐる頃、或日荒々しく敎室の戸を叩いて、よろ〳〵になつた足元危く入つて來て、忽ち濁聲高く

His body is in Segovia
His soul is in Madrid
身はセゴビアに
心はマドリツドに

といふ句を節おかしく歌ひ出した。生徒一同呆氣に取られて、先生は醉つてるのだと許り思つてゐたら、焉んぞ知らん、之は篇中の醉拂ひチスパに似せて故さらに醉つた振で入つて來たのであつた。さうと知つた時の一同の笑ひどよめいた樣は非常なものであつた。

僕が脚氣で中野へ轉地してゐる時、先生は端書に僕と先生との比較表を書いて來た、一、お前は病氣、乃公は達者、二、お前は獨身、乃公は最愛の女房の側、三お前は……乃公は賢人などゝ列べ立てゝ最後に、お前は△乃公は□と書いて來た。又或年僕の友人で矢張先生の門下にゐた某君が、臺灣へ渡航の途中船の中で粗相して毛布一枚を海の中に棄てた。之を聞いた先生は、好材料御坐んなれと、忙しい〳〵と言つてる最中に、態々長篇の英詩一篇を作つて散々にひやかしたこともある。斯な無用の事に時を潰して、約束の原稿を後らせたりするから、貧乏したのも尤であつた。

時々雜誌の原稿を頼みに行つたことがある。今暫いてやるから少し待つて呉れとのことで、僕を自分の卓子の側へ坐らせて、原稿を書きながら盛に下らぬことを喋つた。喋りながら書くのである。何一つ參考書も見ずに、いろんな出來事の日附などを能く記えてゐたものであつた。斯いふ時には僕が定めて退屈するだらうとて、自分で茶を出して、菓子を摘んで、烟草を呉れて、奇麗な畫のついた雜誌など見せて呉れた。或時非常に旨いから食へとて、變な色の白い練藥みたいなものを呉れたので、恐る〳〵嘗めて見ると、原稿を書きながら横目で見てゐたいたづらな先生が、忽ちぷつと吹き出して『おい夫はワゼリンだよ』と言つて笑ひ轉げた。

先生は又妙なことに無暗に力瘤を入れた。僕が家內を貰はうとした時、先方の家の事情が分らなくて困つてゐると、先生大に飲み込んで、好矣乃公が行つて聞いて來るとて、態々細君と共に靜岡迄出かけて呉れたことがある。之が誤り傳へられて、僕の家內は西洋人の妻になるらしいと一時其の地方で取沙汰されたといふ。さうかと思ふと、自分の敎へることは隨分嚴酷で、

僕などは幾百回自分の書いたものを出しても、其の度毎に罵詈冷嘲、未だ曾て完膚なき迄に朱を加へられざることはなかつた。賞められたこととては憚ながら只の一度もない。僕は到底日本人に英文が作れるものてないと諦めてゐた位てあつたが、其の後三田の學校へ移つて、ロイド教授の所へ出して見ると、之は又殆ど筆を入れたことがない。句讀のつけ方綴りの間違ひ位しか直して呉れなかつた。餘りおかしいから、其の由先生の方へ談判に及んだら、先生例のいたづらな笑ひ方をして、『ロイドさんは氣が弱いのさ』と言つた切てあつた。僕は何やら悟る所あるもの丶やうてあつた。

兎角する中にやゝ曉近くなつて初めて睡に落ちた。能く〳〵頭を悩ましたものと見えて、此の夜はぐツちよりと盗汗をかいて、眼さめる迄變な夢の見どほしてあつた。

五　抵當の品

金は翌朝早く送り屆けたが、之に就て甚だ怪しからぬことが段々に起つた。前後の事情から考へ合すと、何うしても初から此の古金銀を體よくわが手に捲き上げる算段てあつたものとしか思はれぬ。折角自分の手に入れやうとした物が、殆ど其の手に入りかけた時、突然横合から思ひがけぬ故障が起つたので、失望し狼狽し、はては躍起となつて小細工を弄したやうな跡が歴々として見える。ちと氣の毒ながら、も少し書かう。

先づ金を送り屆けてから、初めての情報が、其の翌日僕の手に着いた。之は長男から寄越した書面て、初に金の禮を述べた後、金は直ぐ先方へ持たせてやつたが、宅へ持つて行けば店へ來いといふ、店へ行けば宅へ行けといふ、何だ彼だとて到頭拂渡が出來なかつたとあつた。之を見て、僕は聊か不安を感ぜざるを得なかつた。僕は初から大山の誠意を疑つてゐる。彼は常に此種の抵當を取つていつしか之を其蒐集に加ふるのが彼の手てあると聞いたことさへある。随つて若し之を疑の眼て解すれば、よもや返せまいと思つた金が返つて來たので、四の五の言つて此金を受取るまいとするのではないかとも思はれる。夫ほどまでに性根が曲

つてゐぬにしても、兎に角金を手渡せぬ内に期限が切れては、先方へ然るべき辭を藉すことゝなる。と思つて僕は何でも彼でも速に金を返してやるやうにと、未亡人の方へ注意を加へた。

次なる情報は其の年押し詰つてから出たもので、之は益々僕の不安を增させた。是に據ると、金はヤッと受取つて吳れたが、之に對しては只受取證を吳れたきりて、豫て入れおいた例の借用證書ゎ返して吳れず、抵當品もまだ其儘てあるとのことてあつた。併し兎に角金を受取らせたゞけても安心して吳れとあつた。僕は決して安心の出來るものてないと思つた。

兎角する中に年が明けて世は明治四十五年となつた。僕に取つて今日まて之ほど氣がゝりな、落ちつかぬ元日を迎へたことはなかつた。年を踰えてまだ例の問題は片づかなかつたのてある。

未亡人は歲暮やら年始やら子供の事やら、ごた〳〵した用事て忙しい中を無理に都合をつけて、再三大山の宅を音づれた。初め二三回は滑つたの轉んだのと言つて面會を斷つたが、何日の何時なら必ず會へるか都合の宜い時間を約束して吳れと迫つたので、やつと其の約束の日に、いはゞ、せうことなしに會つて吳れた。會つては吳れたが夫人の方から例の古金銀のことを切り出すと、例の平べつたい顏に氣味の惡い笑を含んて、如何にも思ひ出し兼ねたやうに『はアてね、そんなことがありましたッけかねえ』といふ挨拶てあつた。夫から「そんな白々しいことを今更言つて吳れては困る、一昨年の暮、而かも此の坐敷て確にお渡しゝたぢやありませんか」と詰め寄ると、『成程さうてしたなア』と我を折つて、『あれなら宅の博物館の出納係に預けてありますから、此次お出ての時迄にちやンと取り出して置いてあげませう』と來た。

其後兩三度は、何時もまだ件の出納係から受取つて居ないといふ返事許りて、尋ねる每に追ひ拂はれた。或日此の傳て追ひ拂はれて門を出やうとする時、不圖舊い知合の婦人に會つた。之は此の大山家へ始終出入して、内の樣子も能く心得た者てあつたが、未亡人が

之を提へて立ちながら此の年來の問題の顚末を語ると、件の婦人は大に同情して、一體此處の大旦那は、育ちが育ちだけに、斯なことにかけては、汚ないの何なのッて、平生見慣れてゐる自分達てさへ呆れる位、確かりしなくちやいけませんよと、勢をつけて呉れた。

此の婦人は甚だ痛快な人てあつた。分れ際になつて、未亡人に二個條の忠告をして呉れた。第一博物館の出納係に渡してあるなどゝは必ず噓てある。自分の手許においてあるに相違ない。博物館の方なら物品の出し入が嚴重だから、一々帳簿に照して見れば、何が何日出たか入つたか直ぐ知れる。今頃迄ぐづ〳〵される譯はない。此の方も少し手強く掛合はぬと、づる〳〵と胡魔化されて了ふのが定のものだといふ。第二に大山の宅の方許りに迫つても、中々埒が明かない。店の方には若手の元氣な事務員などて、平生主人の狡猾なやり口を呑込んて居る者があるから、其の方へ賴むと、存外思ひ切つて主人にぶつかつて呉れる。夫には斯う斯ういふ人が宜しいと、其の名前迄敎へて呉れた。

之に大に激勵せられて夫人も、今までのやうな手緩い方法てはいけぬと悟つた。念の爲に博物館の出納係の方へ聞き合せて見ると、果してそんな物は曾て預かつたことがないとの返事てあつた。

此の婦人も痛快だつたが、此の婦人の名ざして呉れた事務員の何がしといふは更に一層痛快てあつた。

彼が未亡人から話を聞いた時は『内の親父にも全く困る』と獨言のやうに言つたゞけて、一向手賴りないものゝやうてあつたが、彼はいつの間に何處てどう話を纒めたものか、間もなく受取證も取らずに預けておいた古貨幣は無事に未亡人の手に戻つた。之までに大分色々と揉め合つたらしいが、今は其顚末を叙すべき時機てない。兎に角年を跨いての問題が此に一先解決を告げたのてある。僕等一同ほッと胸を撫て下した。

抵當品の問題は目出度く解決されたが、麗々と年二割五分の利息を印刷した借用證書に至つては、今に至るまて返して寄越さぬ。之に對して幾度足を運んだか

知れぬが、探しておくとか、今見當らぬとか唱へて、今に渡さぬ。斯なものが、今言つて今見當らぬほど事務が不整頓なのであらうか、夫とも今更ちと人前に出し惡くなつた爲であらうか。

恐らくは、返せまい

六　天道

頼る邊なき寡婦と孤兒との窮乏に乗じて、其の珍藏する所の古金銀を抵當に、二割五分の利子で金壹百圓を貸しつけ、首尾よくば、此の抵當の流れ來らんことを望んだ所の彼れ大山は、嘗て某内閣の當時男爵に擬せられたことがある。天道は是か、彼は男爵になり損ねた。——男爵どころか、彼は一個の高利貸である。

（大正元年十二月四日稿）

附言

五年前此欄で御愛讀を賜はつた「時子」の主人公は暮に至つて、突然姿を隠した。

噂によれば、すばらしいよい所から後妻に貰はれて、近々夫へ嫁に行くのだといふ。子が二人とかあつて、亡くなつた先夫人は、何爵とか何將とかのお娘さんであつたなど、見て來たやうなことを傳へる者がある。

本人の直話といふものを聞くと、豫て心配してゐた弟の身も、今は相當の職に就いたので、自分も何時迄藝妓してゐるでもあるまいと思つて、遠からず長唄の師匠とやらになる積、縁談の方は誠に結構なお話ながら、釣合はぬは不縁の元といふこともあるし、お志は重々辱ないけれども之はきつぱりとお断り申して、自分は矢張り一本立で行く決心だと言つたさうな。

どちらが事實かは知らぬが、どちらにしてもお目出たい話と自分は心から祝した。（楚）

屠蘇

黒頭中

其一

●知人、菊花の盆栽を贈り來る。一夜、寒甚だし。乃ち、之を内椽の上に置く。夜深く、燈光に照らして、障子の硝子窓より透し見る。娉婷としたる姿の一輪の花、稍、盛りを過ぎて、寒を病める女の風情に似たる哉。

●櫻は少女を、菊花は、つねに年増女を聯想せずんばあらず。水仙花は、屢、オールド、ミスを聯想せしむるものありと雖も、其の、尚ほ未だ破蕾の初に當りては、或は、書家の女弟子にも譬ふべき氣品あるなり。

其二

●新年の夢は、さまざまなるべし。就中、新兵が新年第一の夢、如何に。

●吾輩、十餘年前、初めて東京に入るの冬、新兵の一群に、神田の街頭に相逢ふ。下士らしきが、前なる家を見上げ、指して、『これが中川といふ牛肉屋じやぞ』と嚴かめしく敎へ、新兵の恭しく點頭するを見たり。

●當時、中川といへば、牛肉の老舗を以て名あり。吾輩も、新兵の事に興味を催ふし、一夕、此の樓に登り、牛鍋に暖まる。吾輩を包圍するもの、すべて「ベランメイ」「おかみさん」の粹ならざるは無く、乳呑兒を懷ろにせるものゝ多かりしは、殊に興趣を動かすに足らずんばあらざりき。

●此の冬、吉岡將軍も亦た入營す。彼は、書生にして將軍を以て知られ、而して一兵卒となれり。彼は、男兒須らく騎兵たるべしと言ひしが、歩兵となれり。此の歩兵將軍も、下士殿より牛肉屋の案内を受けしや、如何に。

其三

●試みに、羽子板店に立ちて見るに、本郷も、銀座に於けるも、更に、懸隔あるを見ず。銀座には美しきもの多く、本郷には少きの別あるのみ。而して兩者共有のものに至つては、概ね同價なり。

●本郷と銀座とにては、地代に懸隔あり、而して羽子

板の價格に懸隔無しとすれば、銀座の羽子板店の利益は少からざるを得ず。實情此の如きを致すの原因は、市内交通の發達に歸せずんばあらず。交通の發達は、銀座の商人を苦しましむる也。知るべし、交通の發達は、一地方に利益し、一地方に損害することあるを。

◉然りと雖も、本郷と銀座と、物價の、すべて同格なるには非ず。特に、日常品に於ては、つねに懸隔あり。羽子板の如き、正月品に於て均一する所以のものは、偶、以て、此の冬の不景氣を象徴するに足らずんばあらず。

其 四

◉大將乃木の一事一行、亦た世人を動かす。近時、「朝日」の、頓に流行するも亦た其の一例なり。これ等は、流行の中の、善者のうちに算するを得べし。

◉葉卷の吸殘りを收容するケース獨逸にありといふ事は、吾輩、十數年前に聞きしも、現品を東京に見るは、輓近の事に屬す。獨逸は倹約の邦なり。勤倹の美風、漸く吾國に起りつゝある乎。或は世智辛くして、這般のケースを歡迎するに至れる乎。

◉耳に挾むものに、卷煙草と鉛筆とあり。鉛筆なれば、時ありて、事務家を象徴す。卷煙草を挾むは、田舍の青年會員に多し。

◉薄荷パイプは沒趣味の一なり。此の頃、此のもの漸く少し。吾輩、帝都人の面目の爲に、此の如き嗜好の地に落ちゆくを慶す。

其 五

◉趣味の墮落を象徴するものは、「セルの行燈袴」ならずんばあらず。希くは、此の袴をして、大正の新年に絶滅せしめよ。

◉「セルの行燈袴」の人には、所謂「彼是屋」多し。運動屋多し。如何樣屋多し。すべて、僅少の特例を除くの外は、「セルの行燈袴」は、一種の警戒色たらずんばあらず。

◉意外の人が、「セルの行燈袴」を穿てるを見る事あり。此の如きは、意外の例に屬し、袴の主も勘違ひせるものなるべし。

◉帶刀せば、竹光(タケミツ)を佩ふること莫かれ。袴を穿たば、行燈袴を穿つこと莫かれ。セル地は光榮を代表せず、而して行燈袴は、趣味の恥辱を代表す。

其・六

◉吾輩は、切に、口語文の發達を祈待す。現代、口語文の讀む可きものは、小說あるのみ。學問、研究の文

章に至つては、見る可きもの甚だ稀なり。內容あれば足る、文の巧拙は問ふところに非ずといふの理無し。

●吉岡向陽、對照語法一卷を著はす。口語、文語を對照して、口語の文法を說くもの、吾輩の如き、由來、文法に趣味を有せざる者と雖も、尙ほ之に由つて啓發せらるゝを覺ゆ。口語文發達の爲め、彼に感謝するところ無くんばあらず。

●吾輩の見るところを以てすれば、對照語法は、餘りに分解的也。且つ新定の術語、續々、紹介せられ、一々、これを記憶して讀むも亦た稍、煩雜なるを覺ゆ。術語の必要なるは論莫し、唯だ、口語文法の如き、新開の一科に、數多の新術語を、急に疊出せしむるは、恐らくは口語文法の普及に利あらず、尙ほ新開地に嚴密なる舊邦の法典を布くが如く、移住者少くして、土地の發達を遲延せしむべし。

●今日の際、口語文法の如きは、分解的に馳すること無く、これを綜合的、敎育的に解說し、以て、徐々に、口語文法の趣味を啓發するを必要とす。向陽の、口語文法に於ける既に研鑽の、他に、先鞭を著くるものあり。彼の篤學なるを以てして、吾輩の言を諒とするあらん。今、口語文法は、未だ開拓、普及の時に屬するなり。

其七

●去年、新春、吾輩、信州臼田町に滯在し、頗る炬燵の趣味を解するを得たり。炬燵の上に、讀み、書き、且つ食ひ、且つ飲む。炬燵酒に至つては、暖國人の、未だ解し得ざる妙味あり。今年、新春、去年を回想するに堪えず。

●臼田町は、鯉の名所也。筑摩川に沿ひ、甲州街道に當り、淺間山の噴煙、藹然として、天に沖するを望む。川原の寒冷、人を刺すような中にも、爆煙の騰上するを望むは、心目を壯快にし、寒威を忘れしむ。

●小諸にて汽車を下り、臼田町まで五里の間を、夜道を辿りたり。足は冷やかにして指を墜しつべし。而して明月、天に在り。處々、邱樹、趣を爲し、稀有の奇景あり。月の信州は、必ずしも秋に屬せず。月あれば則ち詩趣の國を映出せずんばあらざる也。

●日本の家は、冬、甚だ寒し。早起の書齋は、讀書、執筆、つねに設備の到り難きを覺ゆ。吾輩、臼田町の十日間は、稀有の適地を得たり。曉起、炬燵に入り、柱に倚りかゝり、燈を排げて書を讀む。屋內の手洗鉢も凍れるを、別に、一天地の、讀書生の開拓に任かす

ものあるなり、炬燵には、實益あり、趣味あり。

●信州の人、議論を好み、演說を好み、文藝を好む。有志者といふ者、詩歌俳句の一を能くせざるはあらず。彼等の、吾輩を訪ひ來るや、吟咏以て應酬を求む。吾輩をして、苦戰せしめたるものは、寒氣に非ず、吟咏也。

●炬燵時節、炬燵は應接室となる。主人、炬燵に任りて、「どうぞ御入り」といふ。客も亦た直ちに、「御免」といつて、炬燵に入りて、主客相對坐し、以て、口を開く也。

●吾輩は、五日を以て信州に往き、十日歸京し、十二日、老母を奉じて、關西に歸る。途中、詩あり、信州人の韻に次して却寄す。曰く、北馬南船閑日稀、春來未㆑暇㆑脫㆓征衣㆒。眼中歷々信州景、又向㆓關西㆒伴㆑母歸、また實境なり。

●信州の日本アルプスに馴れたる吾が眼は、山口に入るに及んで、滿眼靑山の悉く邱陵に等しきに驚く。紛々飛雪の中を出て、三日、煖かき瀨戶內の碧海、眼前に浮ぶ。

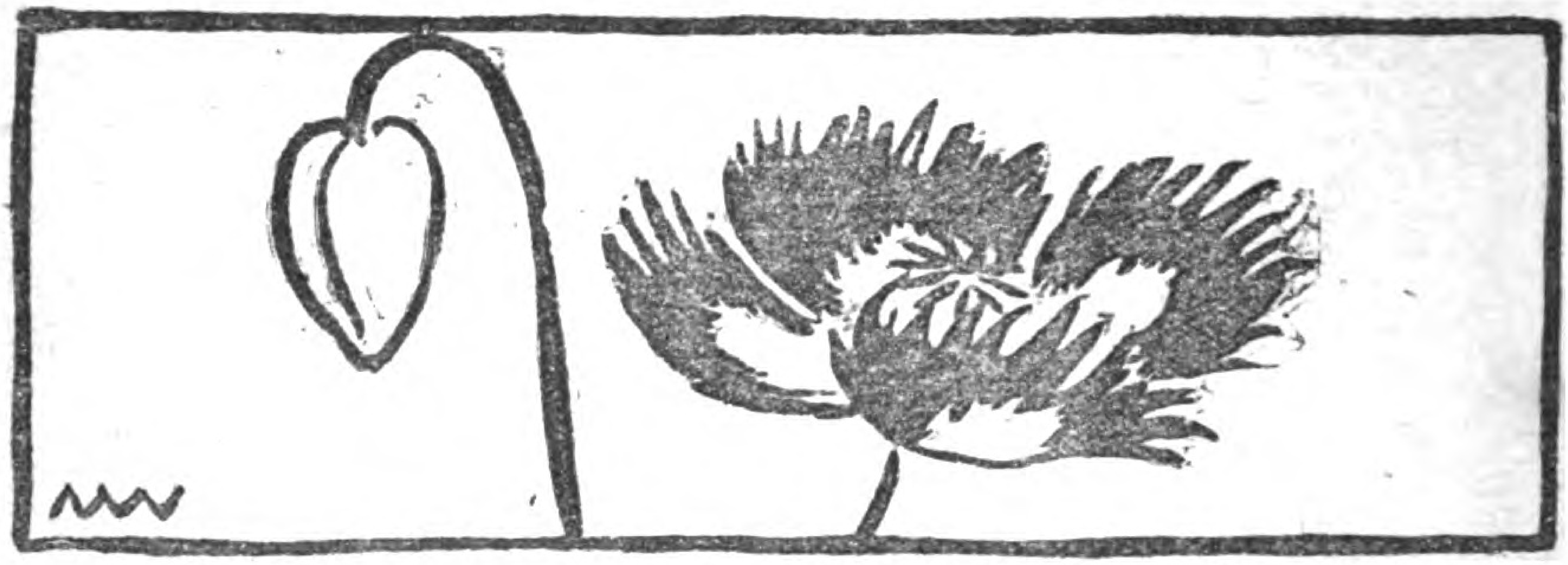
●今年、新春、吾輩、南航して琉球にあり。帝京の松飾と、日本アルプスの雪に孤負す。神話の國の書窓より、遙かに、北を望んて、帝國の盛運を祈り、母の壽を祈り、妻兒及び先輩知友の安全と幸福とを祈りつゝある也。

吾輩、十二月中旬、帝都を發し、那覇に來りて、伊波普猷の家を主とす。南國の風物、悉く、吾輩に新たらし。（黑頭巾記）

閨秀十五名家一人一題

△婦人參政權運動問題

鳩山春子



婦人參政權運動の問題に就ては、先づ何よりも先きに西洋と東洋とでは、其事情を異にしてゐるといふとを考へねばなりませぬ。かの亞米利加の殖民時代には、何しろ男の數に比較して女の數が非常に尠かつたものですから、男が女を引張り足りなかつたのと、一つは所謂弱者を援けるといふ意味からとで、自然非常に婦人を尊び、鄭重に取扱ふといふ風になつたのです。無論その時分に學問があつたわけではありませんが、段々學問も盛になり、御承知の通り日本と違つて、彼方(あちら)は個人制度でして、丸つきり日本(こちら)とは事情が違ふものですから。それに何ういふものですか――異性相引くとでも言ふのでせうか――彼方では概して父親が男の子よりは女の子を餘計に可愛がるのです。財産でも女の方に多分に遣るといふ具合で、男は大學を卒業しても職業と地位とを得るに汲々としてをるのに反して、女は獨りでゐても暮せるやうに親がして遣る者が隨分澤山あります。ですから日本と違つて、女の財産家が多い。地面を持つてゐる、ファームを有つてゐる、それらの女が學問をすると、自分の配偶を見付ける爲めに、男女交際をして騷ぎ廻るといふとは卑(さも)しいやうな氣がして、段々嫌ふやうになつて來た傾向があります。そこで男も女も當然獨身者(ひとりもの)が多くなつて來るわけです。其獨身者の中で、男の獨身者(ひとりもの)は一人前の人間として取扱れるのに、女の獨身者と言へば、何だか人間の失敗者みたやうで、オールドメードと言ふと誰でも厭がる。すると學問があればある程、それを遺憾に思ふのは當前で、私もそれは甚だ不公平な仕方だと思ひます。

それに彼方は普通選擧でして、女子に參政權を遣れば一人前になれるといふのですから、父母の情としても、それを望むやうな傾きになるものもあるやうに見へます、獨身者の女が使つてゐる男に選擧權が有つて、其主人に無いといふのは隨分可笑しな話でもあるし、私達にしても可哀想に思ひます。さうかと言つて今日英國にて行つてる示威運動みたやうなものは必ずしも正當とは思ひませんし、又餘り上手な遣り口とも思ひません。席と牢屋へぶち込まれて、食事もせず死んでもいゝなどといふ處を見せるのは過激すぎて同情はされません。兎に角米國では所謂普通選擧で、男にして米國市民となれば誰でも選擧權があり、英國に於ても極めて僅少なる制限あるのみにて男子は殆と普通選擧に近いのに女にはそれがないといふのが問題であります。又米國に於て日本人排斥なども、日本人に選擧權がないから起ることで、何百萬ドル稅を拂つても選擧權のないものは重ぜられないといふことになれば、そこは又財產の有る者にすると色々な要求も出て來ませうし、學問が進めば不服も伴つて來るでせうから無理とは思ひません。道德の點は別問題で、女の方に特に制裁が嚴しくても別に差支はないと私は思ひます。先天的生理的に女の方が動物性が少なく神經銳敏に出來て居り、容易に自制克己する能力を有つ居りますから女は社會道德の維持者を以て任じ此方面に於て同胞人類を益する事は女性の榮譽と思ひます。併し自己に財產學問を有しながら無能力者として人間としての幸福をまで犧牲に供することは餘り無理ではないでせうか。ですから亞米利加の女が初め歐羅巴の女が之を希望するのを私は決して無理とは思ひません。事情がさういふ風である以上、之を希望しても構はないと思います、尤も今の英國の方法は別で、過激な示威運動や、無理から當局者を罪に陷れやうとするなどは感心出來ませんが、主義としては歐米の女が參政權運動を興すに就て私は充分の同情を表します。

然し、さうかと言つて之を日本に持つて來ては何うかと言ふに、決して贊成は出來ません。日本は事情が違ひます。選擧權は男子にも制限が置かれてありますし、婦人には財產を所有して居る者がありません。未だ一般から申せば智識も伴はなければ、感情も冷靜でなし。判斷力も乏しい。從て西洋人の方が比較的に行き屆いて居ります。子を育てることも不充分、家を治めることも無方針、世間へ出せば話して良いことと不良(わる)いこととの區別さへ立たない。話をすれば人の噂をすることしか知らないと言ふのですから。外交官の夫人でも、領事や書記官の奧樣でも、イヤ某(たれそれ)は厭やな人だとか、某(なにがし)は好かぬとか言つて、陰口を利くものだから、そんな事は採上げまいと思つてゝも、聞くにつけてはつひ旦那樣も不愉快になるといふやうなことになると某紳士は申されました。

そんな風で婦人自らまだ參政權に就き要求さるゝでもないのに之に參政權を與へる與へないは問題じやありません。それよりは女の大切な務が有ります。結婚をすれば夫と子の爲めに盡すに急で、自分の權利を主張する餘暇も餘念もないものであります。選擧權などは女の獨身生活者が殖へた場合のことです。ですから差當り必要なことは獨身者の多くならな

いやうに豫防する外ありません。歐米のやうに獨身生活者が殖へた今日では仕方がないから、其運動も必ずしも無理とは言へず、同情する餘地が随分あると思ひますけれど、日本の今日では些しもそんな必要はない。今後も十分注意をして、そんな必要の起らないやうにすればよいと思ひます。それにはどうすればよいかと言ふに。

問題は結婚制度にあると私は思ひます。西洋のやうな自由結婚は不可ません。鳥渡見た時は武骨でも、交際つていゝ人もありますし、三日一所に居て厭やになる人もあれば、一年で厭やになる人もあり、又十年も住んで愈々頼母しい人もありますから、自分で見付けたのは當になりません。それに鳥渡見ていゝと思ふのは、十人好きのする、程のいゝ人が多くて、一生を偕にするに足る人か何うかは疑問です。ですから西洋には割り合に別居が多い。妻が姦通した證據がなければ離婚は法律が許さぬのみでなく、不道徳として人が排斥しますから、已むを得ず別居をすることになります。別居をすると男は其女を一生養ふだけの義務があつて、それに要するだけの金を送らねばならぬから、男子は段々結婚を嫌ふやうになつて來るのは當前です。女は女で、日本のやうに女が品定めをするといふやうなことはなく、結婚の申出では必ず男がするのですから、此人と思つてゐても果して理想の人が申込むか否かが判りません。決して自由結婚といふものが好ましい結果を齎すものじやないのは事實です。ですから日本の結婚制度を益々發達させてゆくのが一番いゝと私は思ひます。獨身者を減らすには、歐米の様な眞似をしないに限る。殊に日本は貧乏で、女が働いても追付かないのに、交際の何のツてさう遊んでゝは堪りません。交際するには中々金も時も要るもので、訪問をするとなると好い着物が欲しい、お互に御馳走し合つてゐては、随分お金の要るものでして、洋服も、交際をしない職工とか看護婦とかいふやうなものゝ服は廉價で丈夫に作つてあるが、交際界の流行に後れないやうにするには容易なことではありません。それに始終家を外にして澤山の時間を消費しますから、子供の教育が思ふ様に出來ません爲めに家庭教師も置かねばならぬことになります。さうかと言つて、家に計り引込んでゐては神經質になりますから、それも考へものです。私は倶樂部のやうなものへ行くのはいゝと思ひます。それも一人で彼方此方の倶樂部を驅廻つてゝは困りますが、一人で一つの倶樂部へ行つて、偶には他人様と交るのもよろしい。日本では家にばかり閉籠つてる女を温和しいなどと言ひますが、家にばかりゐるのが決して温和くはないのです。強いヒステリーになつたり。お家騒動を起したり、嫁と姑と喧嘩したり、親類爭ひをしたりするのは、餘り家に計り閉籠つてゐるからなのです。世間の人と會つて話をすると、世間といふものが判つて同時に家が判ります。從つて夫の難有さも自然に判る道理です。で、又本をばかり讀んでゐては神經質になりますから、見聞を弘くする爲めに他人と交際ひをするといふのは必要ですが、只之れが爲めに時と金を節儉して家政に影響を及ぼさないやうに注意することが必要であります。又青年男女交際は餘り自由にしては不可ないと思ひます。矢張り結婚は母親に見付けて貰つて、其上

半年位は約束をしただけで、何も約束したから直ぐと結婚せなけりやならぬ理由はないのですから、殊に其年頃は發育盛りで勇氣のある時ですから、結婚をしてからの心得やら、夫に對しての務やら、料理から、澤庵の漬け方までも稽古して、結婚の準備をしておく必要があると思ひます。妻とし母としての覺悟を定めておいて、そして可成皆さんに結婚して貰ふやうにする。各本分を知り、地位に安んじ、服從して女の務を果すといふとにすればよろしい。適當に子を育てるといふとは最も女の研究すべき事と思ひます。

それを西洋の交際界の女のやうでは困ります。今の西洋の女は共に遊ぶ伴侶にはよいが、妻としては不適當だと云はれた西洋紳士があります。私の知つてゐる或る金滿家の英國の若紳士は曾て日本へ漫遊の際に私に話しますには自分は四十歳以後になつてから若い女を貰つて、自分が教育するのだと云はれたのがありましたが、全く西洋の人は少々女を懼つてゐるやうです。ですから日本へ入らつして、日本の女は温和しくていゝといふので、始めの間は隨分身分のいゝ方でも、日本の女と結婚なさつたのですが、子を有つてから皆困つてお出でになるやうです。日本の女は子供の精神的教育を知らない。殊に西洋人の妻にでもならうといふ女は下流なのが多いからでもありませうが、子供には何誰も失敗してお出でのやうです。

それならば學問のある女は何うかといふに、俗に學者は馬鹿のやうだと申しますが、人間の能力には限りのあるものでして、藝とか學とかに熱心になると、自然家庭の小さき仕事はお留守になるやうです。藝妓に會ふと、私らでも欺されるかと思ふくらゐ巧いですものを。あの人達はそればかりを研究して、物の言ひやうから、笑ひやうまで、斯うすれば男に好かれるか、何うすればよいかと、寐ても醒めてもそればかり稽古してゐるのですから巧い筈です。妾どもはそんなとをするのを恥と思つて考へも致しませんでしたから自然氣がきゝません。尤も或る程度迄はすれば誰にでも出來ると思つてます。要するに一方に秀でると一方に欠ける所のあるのは仕方のないとと思ひますが、エリオット博士の教育意見に、女が學問をすると婚禮を厭やがるから不可いと言はれたそうだが、妾には絶對的贊成は出來ません。婚禮を厭がるに非ず、婚禮の爲めに交際するを厭ひます。良人を見附けに馳け廻る事を耻とするのであります。どうしても教育された人の方が自覺して、喜んで克己し忍耐してゆくやうですが、教育のない人は結婚してからが困る、遣り方が下手です、立派の後繼者を作るには母とし妻として適しません。ですから妾は今度去る四月以來私共の共立致して居ります女子職業學校中に家庭科といふのを置いて、高等女學校卒業後二年の課程で、母とし妻としての家庭の課業を教へつゝあります。妾は自分の母とし妻としての欠點をよく知つてゐますから、そこを充分に教へるつもりです。ですからエリオット博士の女子に教育させてわるいといふ意見は、彼方の結婚制度か交際制度がわるいからだらうと妾は思ひます。

彼地の富貴にして交際界の女のやうでも、往々困ると思ひます。元々

自由交際で結婚したのですから、結婚してからも自由に男女交際を繼續して怪しみません。が妾はよくあれで旦那様が默つて見てゐらつしる事だと思ひます。彼方の方は嫉妬といふ事は自分に對して可哀相だ、耻辱だと考へ自分の妻が、外の男と戯れてゐるのを見たからつて、自分の愛する女の心事を疑つたり、それを氣にしたりするのは、自分に對してつらいといふので、嫉妬するなどいふ事は謹みます。然しそれが爲めに毒を仰いで死んだ人が日本へ來てる西洋人の中にありました。それは帝國大學の教師の某米國紳士の夫人と海軍省雇某佛國人との間の事でしたが、それが爲めかあらぬか到頭其米國紳士が毒を飲て死んだのです。マサカ姦通をしてゐたわけでもなかつたでせうが、不思議なことには後でその夫人が三人の子供を連れて其佛國人と結婚しました。其後妾が其夫人に會つたら、色々悲しい話をしてゐました。何でも今の良人の佛國人が子供の姓を入れて呉れない、即お父さんにして呉れないとか、又其良人が肺病に惱み居るとか言つて隨分悲慘な境遇にあるやうな話でしたが、さうなるともう外の人が交際をして呉れません。妾もそんな話を聞いてゐたから、隨分男女交際の自由過ぎると申す事の弊害を悟りました。學問のある女なれば斯る弊害はありますまい。

其他、高等師範の教師をしてゐて、西洋へ日本畫を紹介した某米國人がありましたが、此夫人も或る獨逸人を特別に懇意に致して居りましたが夫れが爲めか夫婦は歸國して別居生活をして居りましたがやがて此人も何でも亞米利加の何處かの州へ行つて離婚をして他の婦人を妻にし再び日本へ還つて來ましたが――何でも亞米利加の何處かの州では離婚を許してある所がある相です――そこへ行つて離婚して來たのですが、もう外國人は此度連れて來た新しき婦人に交際つては呉れません。一度離別したやうな人は其理由の如何に關係せず交際界から排斥せられます。ですからどうしても自然結婚といふ事を躊躇することになります。從つて獨身者が殖える、そこで前言つたやうな選擧運動の必要も生じて來るわけです。そして一度生じた以上、男と女とは仕事が違ふ、任務が別だなどと言つてもそれは無理だと思ひます。獨身者ならば仕方がないじやありませんか。ですから出來てから之を無暗に責めるのは酷です、出來ないやうに用心するに若くはありません。何しろ共同生活といふ事は非常に困難なことですから、その邊の覺悟は十分必要と思ひます。さういふ風にして皆が皆進んで結婚するやうにしてゆけば、歐米の様な獨身者を殖さなくつて濟み、從つて選擧權運動などの忌まはしい狀態に陷らなくてすむと妾は信じてゐます。

△同性の戀

田村とし子

同性の戀と云ふものは誰でも一度は感じるものだらうと思ひます。つまり女が十五六才になつてその感情が眞つ赤にうみわれてくる頃になる

と、友達同士の間でも單純な友情くらゐなところでは追つ付かない事になつてくる。

何とかその間に特殊な味をもたせたくなつて來て、ある一人を於れ限つて自分の所有にして了ふとか、又はその一人に向つては手を引き合ふのにも不思議な力を感じるとか、毎日學校で逢つてゐながら毎日手紙の遣り取りをしなければ氣が濟まないとか云ふ樣な事になつてくる。さうしてその手紙の中には、何だか淋しくつて悲しいとか、あなたは昨日誰某と放課時間に親しさうにお話をしてゐてあんまりだつたとか、私はあなたの事を考へてゐて昨晩はいつまでも眠れなかつたと云ふ樣な事が書きたくなつてくる。何につけても放縱な空想を漲らす相手が欲しくなつてきて、ラブレターの出來損ひ見たいなものが無暗と書き散らしたくなつてくる。そこで平生親しくつきあつたり、又何となく自分の好きだと想ふやうな女生を引つ張つて來たりして、この相手にしやうとする。そうして相手が出來ると何事か唯二人の間だけの心と心の聯絡にとゞめておくと云ふ樣な事が無上に樂しい事に思はれてくる。あなたにだけお話するのだとかあなたにだけ云ふのだとか云ふやうな事が兎角云つて見たい。二人の間だけに限つたいろ〳〵な約束を結んで見たい。そんな事を他の友達に聞かれたり見出されたりするとそれが又悲しかつたりおもしろかつたり、運動場の隅に行つて二人ぎりでこそ〳〵話をしたかつたり、二人だけで泣いて見たかつたりする。それをみんなにわい〳〵云はれると何とも云へず羞耻を感ずるが、この羞耻の情が當人たちに取つては不思議な微妙なはたらきを示して戀と云ふものをます〳〵起させる。然うするとこの羞耻の情と誰某と云ふ感念とがごつちやになつて、自分の心の底からは消えてしまふ事の出來ないやうな懷しみやら戀ひしさやらを感じて來て、學校から二人が別々の自家へ歸つて離れてしまふと云ふ事さへ悲しいと云ふ樣な始末になつてくる。

けれども當人たちは決してこれを戀とは感じてゐない。また極く初心な可愛らしい純潔なその胸では、かうして忘れられない離れたくないと感ずる友達に對してはそれを何所までも眞面目なほんとうの親友と云ふものだと解してゐる。自分たちがこれ程信誼を感じ懷しさを思ふのは二人の間が交誼において相許し相結ばれたほんとうの親友だからだと解してゐる。

だからその間には虛僞と云ふ事はどこまでも斥けてゐる。眞實を云ひ會ふと云ふ事が當人たちの親交上の一とつの條件になつてゐる。「きつと」から云つて二人だけで堅く手を握り合ふと云ふ事は、神の前で二人の淸らかさを誓つたよりももつと愼重でもつと眞實なのである。

そうして二人の親交を誰にも傷づけられまいとするところにお互がお互に對する一生懸命な、徹底した一とつの節操がある。何と云ふ事もなく二人はたゞ「變らない」と云ふ事を約束する。それは單にあなたを思ふ情は變らないと云ふだけの意味かも知れないが、何にしてもお互がお互に對して自分の心と云ふものを變らせまい動かせまいと云ふ誓ひが自然と二人の心の底に流れ合つてゐて、そうして又堅くそれを信じ合つてゐ

る。

ところで、よく同性の戀は危險だとか云ふ事を聞きます。

この頃の女學生同士がおめとかと云つて互に戀をしあふ——こんな事は女の性情を淫靡にさせ墮落的の傾向をもたせて、やがては異性に對する大膽な戀になり、結局は飛んでもない事を仕出來すやうな事になる、恐るべきは同性の戀だとか云ふ樣な事を聞きますが、私の考へるところでは、この處女時代の同性の戀は(若しも今まで私のお話してきた同性間の一種の友情を指して同性の戀と云へるものならば)そうした淫奔的な感情から生じてくるものではないと想ふのです。女が十五六歳になつて生理上の變化が起つてくる頃には、丁度精神病患者のやうな狀態に陷つてくるのはこれは誰でも知つてる事ですが、この頃にはまだすつかり形づくらない肉體の中に一時に燃え上がつて來た感情の火のおさへ場所がなくなつてきて、つまらない事に强ねたり肝癪を起したり、些細な事が可笑しくつて〲堪らなくなつたり。悲しくつて〲仕方がなくなつたりします。所謂お箸が轉んでも可笑しい時分です。鮮かな血潮が身體ぢうを快くめぐり初めると全時に、その感情は焰のやうに唯ぱつ〲ぱつ〲と燃えあがつてゐる。そうすると平生何とも思つてゐなかつた自分の兩親に對しても、もつと可愛がつて欲しくなつたり、妹や弟は無暗と可愛ゆくなるし、兄や姉に對しては異常に懷しみを感じ初めてくる。そうして親であつても兄妹であつても、他人であつても特に自分だけを可愛がるとか慈しむとかといふ人に對して、何とも云へない喜びを感ずるのです。そうして又然う云ふ人を求める欲が盛になつてきます。この年頃になると、もう一と目逢つて相手の人が自分に好意を寄せたか寄せないかと云ふ事ん直覺する樣になつてゐます。この年頃に人を毛嫌ひする事が多くなつてくるのはこんな所から起るのでせう。それから又自分の手先を何にでも觸れたくなつてくる。何にでも手が出して見度くなるのです。この頃に友達同士が直きに手を引きあふのを見ても分ります。所謂接觸の快味を感じ初めてくる。そうして自分の感情を始終探つてゐて貰ひたいやうな欲求が起つてくる。この時代に悲しい本を讀みたがつたり悲しい話を聞きたがつたりするのも强ひて感情の刺戟を望むところからくるのです。この時期に、最初私が述べたやうに自分の友達に對して一層濃厚な一種の友情を感じたがるのは極めて自然的な話なのです。そうして誰にでも有り勝ちな事だと思ふのです。この一種の友情を危險の道に導く緒だと云ふ樣に考へるのは少し見當が違つた話だと思ふのです。この一種の友情がどこまで進んだところで、その間柄に決して危險性を帶びてくる筈はない。むしろ同性間にこの一種の友情を感じてる間は、妙齢の女が普通男性に對して感じる微妙な感覺を非常に遲鈍に疎くさせて了ふことさへあるのです。そうして男性に對してはすべて未知で過ごしてる處女の方が餘計にこの同性間の一種の友情を感じるものなのです。早くから男性の知り合ひがあつたり戀愛があつたりする女性には、決して同性間に一種の友情を感じると云ふ樣な事はありません。そうして又其の同性間の一種の友情が遂には異性に對する戀愛になると云

ふ事も全然ない筈なのです。第一性質が異ふばかりでなく、同性間の一種の友情の上には決して肉欲と云ふほしいまゝなものが伴はない。どこまでもその相互の愛が純潔に守られてゆく――とすると同性間の一種の友情だけでは滿足が出來なくなつてつまり異性に對する欲求になるのぢやないか、と云ふかも知れないが、然うではない。この時代には女子の方には異性に對して求むる肉そのものに就いては全く無知なのです。生理上肉の欲求が起ると云ふのはそれは中年までも獨身でゐた女にばかり限られた事でこの時代には然う云ふ欲求に對しては全く無知なものなのです。唯精神的の愛慕欲ばかりです（妙な言葉ですが）人形一とつに對しても異常に可愛いゝと云ふやうな愛慕欲です。それで同性間の一種の友情と云ふものもその愛慕欲から起つて來てゐるので、それが滿足されてゐる以上その他の欲求はこの處女たちにはないのです。だから單にこの愛慕欲だけを滿たす上では、あながち同性間にばかり感じる一種の友情でなくつても、時として異性に對して感じる事もあるに違ひないが、處女の方ではそこに男女の性の別を感じずに唯單に自分の愛慕欲から生じる一種の友情として扱つてゐるに過ぎない。けれどそれが異性に對した時ばかり妙な關係が生じてくるのは、それは異性が肉的に誘感するからなのです。いかなる男でも處女によつて誘感されたと云ふ話はまあありますまい。異性の手で肉的の誘惑を受けない以上、處女はある年齢までその欲求を知らずに過ごしてゐるものなのです。處女の方から能動的に感覺をもつて異性の方に接してゆくと云ふ事は決してある筈がないのです。處女がある一人の異性に親しむと云ふのも、同性の間に感じる一種の友情と同じ性質のものに違ひないのです。唯相手が異性であればいつかは誘惑される――と云ふよりは肉的の快味を覺えて了ふと云ふ様なそれこそ危險を生じてくる憂ひがあるけれども、同性であつたなら、決してどこまで行つても然う云ふ危險のある筈がありません。然し同性間の一種の友情と云つても、相手が一度異性に接した事のある女性であつたり又は異性に接した事のない老嬢などであつては、道德的に解釋してそれこそ危險です。私の云つてるのは兩方が處女同士である場合の事を云つてゐるのです。私は愛慕欲を滿足させる手段として、同性の間に一種の友情を感じてゐる事はその處女たちに取つては却つていゝ事だと思ひます。小供には誰でも玩具を與へる事を危險な事だとは云ひません。小供には玩具が必要なのも同じやうに、この生理上の變化の起つてきた年頃の娘たちには、やつぱりその愛慕欲を滿足させるだけの玩具をあてがつておいた方がいゝのです。同性間に感じる一種の友情もこの娘たちの感情のおもちやと云つていゝのです。肉的の誘惑のない危險のない結構なおもちやだと思ふのです。

△故乃木大將夫人の夫に殉死せられたる、女子教育に影響する所如何、といふ事に答へよとありけるに、

下田歌子

○たをやめのをしへの道の燈火の消えて光を添へし君はも

○かげ高き背山に双ぶ妹山の露さへ玉とくだけつるかな

○敷島のやまと姫松かゝる時、枯るゝをこそは道と聞きしか

△男に可愛く思はれた巴里の女

與謝野晶子

何處に住むんで居るかと尋ねられて、モンマルトルに居る事を云ひますと巴里人は眉を顰めました。モンマルトルの何處かと重ねて問はれる時にも私は憚らずにビクトルマツセ町だと云ひました。然し其事が巴里人に對して氣の毒な事であつたとは思はないでもありません。ビクトルマツセの通はアスペルトの道で、ぎゆつと音のする鐵の扉の中は石の廊で、奥には大きい木立のある庭や花園もある家が多いのです。けれどそんな所がますます悪いのかも知れません。よく知りません。表には生薬屋だのおしろい屋だの漬物屋だのが例の通りあります。畫家の住んで居る所も高い上にはあるやうです、とにかくそんな所で見る女を巴里の女として見て行かれては困ると十人が十人お云ひになるのを私はもつともな事であると飽く迄思つて居るので御座います。けれども見て見ぬ振りなどと云ふ水くさい事よりも東の離れ小島の旅人はもつと砕けた心を持つてあの人等を見て居ました。貴婦人の持つて居る善と、あの人等の悪とを比較して考へて見やうなどとは思ひませんけれど貞操と云ふ物の新しい見方を数へて呉れるのではあるまいか位の憧れは持つて見ない事もありませんでした。けれどそんな話はよしませう。美くしいモンマルトル女には巴里で三年居るうちになれるさうです。だから田舎の人の多い事は云ふ迄もない事なのでせう。あの人等には流行流行の帽子が着たい爲めに食べる物もろくに食べずに若死するのが多いさうです。それが何の悪でせう。いぢらしい可愛さではありませんか。もう一歩進んで云ふと日本でよく引き出されますあの虚榮などで其帽子を着たがるのではなくて、生きながら硝子に入れられて美術館に飾られても恥しくない自身にして置きたいと云ふ好い心掛けだともとれませう。あの人等はいかつい黒い皮の手提と自身の顔や姿がどんな好いとり合せであるかと云ふ事をよく知つて、男と抱き合つた時、上に上げる方の手にそれを提げたまゝ踊つて居る事もよくあります。踊場と云へば女共の一組が男客の前

で妙な身體つきをして見せるのなどは、犬より上な動物の所作として私も見て居るのではありませんでした。踊場や寄席の客は前を許り見て居るものでなくてたまには後向くものなので御座いませう。そつと男の傍へ持つて行く唇の優しさも、私は前の踊に飽いて傍見をした時に初めて知つたので御座います。鎖で提げた銀の一寸餘りの竪長な箱から嗅煙草を出して奥樣が鼻に塗るのを見ながら、

『私の家内は嗅煙草のせいで年々馬鹿になつて行きます、けれど年々美しくなつて行きますよ。』

と云ふ旦那樣もありましたが、これも然しモンマルトルの事です。あの人等は優しいロープの服を着るよりも、白い肌の刺靑と同じ嗜好から男の服の形に近いジヤケツを多く着て歩いて居ます。薄着の上に恐しい獸の皮の長いのを二卷半も捲いて、終ひを斜めに横にして手の裏を返して抱へて居るのも意氣な僞姿だと思つて居ました。また絹の外套の裾のつぼんたのは日本の女の小褄を取つた姿に似た好いものですがこれは中年の女の方がよくうつるでせう。若い盛りの人はやつぱり厚毛の長外套が心地よく象牙彫の額に合つて居る樣でした。あの人等は晝過迄、辨慶縞の木綿のタブレイを着て働いたり、寢間着のまま遊んで居たり太抵はして居るのです。夕飯、酒場、夜食の料理屋行き、こんな事でモンマルトル女の夜は暗くなつて明けて く樣で御座いました。賭事好もある樣ですけれどそれよりもそれよりもあの人 は男に可愛く思はれるのが一番好きな樣でした。

△未亡人生活

國木田治子

未亡人ほど世のなかに、張合の無い、寂びしい月日を送る者は無いと存じます。夫が在世の頃、二日三日旅行を致しましても、家庭は燈が消えたやうに、靜まりかへつて、それは〱寂びしく感じました。それでもやがて歸へつて參るといふ、望が御座いましたが、當時は幾月幾年、待ちましても、最早再び夫と逢見る事は出來ないので御座いますから、その寂びしさと申しましたら、温順で有つた奥樣が、未亡人になられてから、變にひねくれた方に成つてお了ひなさるのも、決して御無理では無いとしみ〲御同情致します。

私などは生活に追はれて居りますので、其日〱が無事に濟むで行きますれば、『マアよかつた』と言ふやうな心持が致しまして、がつかり致して了ひますので、其れ以上、何を考がへも、思ひもしよいやうに、致して居ります、自分は兎も角も。小供達の行末の事など考がへますと。頭が變に成つて、氣が狂ひそうに成つて參へりますので。『マア行く處まで、行つて見やう』と直ぐ思ひを返へして、成るべくむづかしい事などには。さわらぬやう。暢氣に笑つて、暮らしては居りますが、矢張りそれは自分で自分の心を僞はる。付け元氣で御座ますから、『さぞお寂びしいでしやうねエー、眞實に御察し致します』としみ〲優し〱慰さめて頂きますと。今更のやうに、何とも言へぬ寂びしい心持が致しまして、

澁いお難かしい泣顔なるへ、お目に掛けるやうに成るので御座います
が。もし左樣いふ御言葉を男の方から伺ひました時は、『有難う御座いま
す。でも小供が居りますから、そんなに寂びしいとも存じません』と矢
張り偏勢を張る氣に成るので御座います。

女の心は皆樣も御承知の通り、それは〳〵弱いもので御座いますから。一人で居りますと其弱い心を他人から、馬鹿にされたくないと、思ひますので、知らず〳〵の間に、それは〳〵敗け惜しみが强よく成つて了ふので御座います、毎日家に居りまして靜かに暮らす御婦人の方は知らず、私のやうに外にばかり居りますと、女らしい優しい態度なんて段々知らぬ間に無くなつて了ひまして。女とも男ともつかぬ、變な人間が出來上つて行くやうな心持が致しますが。他人の幸福を、羨やむだり、妬むだりして、自分で自分の心を苦るしませるやうな。情ない心には成りたくないと心掛けて居ります。

△西洋の女を觀た眼で觀た日本の女

花月女將

妾は佛蘭西獨逸、伊太利瑞西から英吉利、大抵歐州の方は參つたつもりで御座いますが、英語も佛蘭西語も獨逸語も露西亞語もそれこそ丸つきり知らないんで御座いますから、到底も彼方の眞個の事は判りや致しません。それに十日や二十日の滯在で、何が貴方分り相なことが御座いものか。

それでも兎に角觀て參つたので御座いますから、お話の出來ぬことも御座いませんが、……此間も新聞社の方が入らつしやいまして、折角入らつしやつて下さつたのですから、お斷りするのも失禮と存じまして、下らないことをお話し致しましたので御座いますよ。さうするとね、翌る日新聞を送つて下さつたのを見ますと、女將の氣焔がイヤ甚だ盛んだのつてね、何も咄せと仰しやるからお咄ししたのじや御座いませんか、ね貴方。それに與謝野晶子さんの事を妾が何う言つたの彼う言つたのつて、そりや外交官の夫人さんでもあれば知らぬこと、妾どものやうな者は勿論、晶子さんにしても彼方へ參れば見られは致しませんつてね、さうお話ししたんで御座いますよ。それをどうも眞個に困つて了ひます。妾ら風情が晶子さんのやうな方を彼此批評出來そうなとも御座いませんし、それに此樣家業をしてゐて、他人樣の惡口など申すやうなとは決して致度うは御座いませんから。

ま、眞面目にと仰しやるの御座いますか。眞面目に聽いて頂けば結構で御座んすけれど。それに妾のやうなものでも、些度は眞面目に感じたとも御座いますからね、ですけれども、何分這樣商賣でして、女將の僻に生意氣な、口幅ッたいことを申すやうで、誠に恐入るんで御座いますよ、萬望其邊は不惡……。

妾が彼方に參りまして、一番心から感じましたとは、我邦で思つてるやうなとは丸つきり違ふと言ふことで御座います。實は妾の娘も一人出來損なひまして——出來損なふッてチト可笑しう御座んすが、親類の娘に致しましても、小說やら色んな物を讀んでは、西洋のとを何んなにか結構な處のやうに想像致しまして、日本のやうな處に生れたのが不幸だの、日本の女は一生頭が上らないの、男の爲めに生涯犧牲にしなければならないのッて、西洋の御婦人は何んなにか幸福で、我國の女は何んなにか不幸のやうに考へてるのがあるんで御座んすよ。其樣人達に一度彼方の狀態を觀せて遣つたらなアと、さう思ふんで御座んす。其樣娘達をお貰ひになつた殿方こそ、お氣の毒ですわ。夫婦の間はお互に滿足し合つてるに越したことはないので御座んすよ、——又生意氣を言ふやうですが——それを夫人がそんな不服や不滿でなられたら、それこそ殿方は堪りません。ですから歸つて來て妾がさう申すんで御座いますよ。決してお前達の考へてるやうなのじや無い。又小說や何かで見るやうな、其樣好ましい、そんな結構な事が何處の世界に在るものかッてね。そりや中には牛乳のお湯に入つたり、シャンパンの行水を用つたりなさる方も御座いませうよ。ですけれども、それは一萬人に一人か、二萬人に一人の極く少數の方で、西洋の女でさへあれば、誰でも彼でもそんな眞似をしてるなぞと思つては途方もない間違ひで御座います。それは成程彼方の御夫婦がお出掛けになる時には、殿方が色々夫人の世話を燒いてお上げになりますけれど、それはほんの表面の儀式で、宅へ歸れば夫人が旦那樣のスリッパを暖めておいてあげたり、お出掛けにはネクタイの結びやうから、何から何まで夫人が氣を附けてなさるのですから、依然何處へ行つても殿方は殿方、女は女で、キチンと區別が立つてゐるので御座います。尤も日本で見るやうに、殿方が何んな無理を仰つても默つて通すといふやうなことは御座いませんけれどね、何と言つても敎育がおありなさるのですから。何しろ彼方は敎育と實地とが斯う並行してるやうに、妾は思ふんで御座います。それを現代の日本の女學生などは、何だか敎育だけが進んで、實地は全く零でないかと思はれます。妾が以前花月へ參らないうちで御座いました。一人緣先の女學生を預つたとが御座いましたが、尤も其娘は特別で、皆が皆さういふわけでは決して御座いますまいが、それは〳〵甚いの何のッて、お話しにも何もなつたもんじや御座いませんでした。

「姉さん、妾の足袋が大變汚れてよ、鳥渡貸して頂戴な。」

「さア〳〵履いてらつしやい。」

「帶も穢くなつたわ、羽織も序に貸して頂戴な。」

さうしてまア妾の羽織なり帶なりを附けて出て行くんで御座いますね、さうすると自分の足袋なり帶なりを何うするかと思ふと、足袋は部室の隅に脫ぎ離し、帶は丸めたまゝで疊まうともしないんですからね。歸つてからだつて、其足袋を洗ふではなし、帶を洗張りに遣るでもなし。妾は這樣女を奧樣になすつた方こそ、いゝ面の皮だと思ひましてね。又或時でした、妾がはたきを入れて居ますと、其娘が遣つて來て言ふには。

「あなた、何してらつしやるの？」突然斯うです。

「馬鹿々々しい、其様ことは女中のする仕事じやありませんか。三圓の月給取のする仕事です。何の爲めにお給金を拂つてるのです！」妾はもう驚いて了ひまして、

「あなたのやうに本を讀んでらつしやる方は、そんな事言つてられるか知りませんが、妾のやうに實地から仕上げて來たものにはさうはゆきません。女中の行届かない所は、口でばかり喧しく言つてないで、自分が實地に示すやうにせねと、巧く女中を使つてゆかれませんノ。それに、今でこそ幸にかうして奥様とか何とか言はれるやうになつてはゐるけれども、何も女中と變つた所は無し、妾は其様に女中より豪いとも何とも思つてはゐないのですから」と申しますと、

「一家の主婦ともあらうものが……」ッて。これですから堪りません。妾はもう默つて了ひまして、其娘は六ケ月程世話してお斷り致しましたが、そりや隨分酷う御座んしたよ。何しろ擦れて擦れて、擦れ枯らしてるんですから手に適ひません。それが男に擦れてるんじや無いんですよ。學校に擦れてるんです、女に擦れてるんです。何んな女だからつて、殿方の前へ行けば多少は色氣を有つて來るもんで御座んすから、殿方が御覧になつた女なんか當になつたものじや御座んせん。私方へ呼ばれて來る藝妓衆の中でも、妾どもの眼から見てあんな女と思ふやうなのを、大騒ぎして居らつしる方も有りますし。彼の女はと思ふやうなのも、それ程騒がれないのも御座んすからね。女の惚れる女でなけりや」と言ふとが御座んすわね、女は女が見なくツちや眞價は判りません。ですから外國へ參りましても、自慢じやありませんが殿方よりは、其點だけは妾の方が能く視て來たと思つてるんで御座んすよ。現今の女學生など、中へ入つて見ると見られたものじや御座いません、それは〳〵だらしのないッたら呆れ返つて了ひます。

經濟と言ふとになりましても、彼方の事情を觀て參りますと、我國の方は丸で經濟を御存じないと申して然りだと思ひます。彼方の方の約しいつたら、此方に居ては想像も及びません。全くお上手です。此方の方が箱入娘なら、彼方の方は世話女房でせう。此方の方はいくら儉約してらつしても無駄が御座いますが、彼方の方は拔目が御座いません。假令僅かでも無要の處にお費るにはなりません。貴方がまア此處へ入らつしやると致しますわね、夜の事で電氣が附いてゐると致しますと、貴方がお歸りになる時、そこの夫人が見送つて御出でになるとすると、屹度其電氣を消してお立ちになりますよ。それは感心なもので御座います。

お客さんがあつて御料理をなさるにも、夫人がチヤンと臺所を取締つて、彼の肉は彼ア用つて斯う用つた、まだ幾ら〳〵殘つてゐるから、明日彼れを何う使はうなどと見屆けて、女中には「之と之とをお上り」と悉皆片附けて了はねば、お客樣と御一緒にお茶一杯も召飲らないといふやうに、決して遊んでらつしやるやうなとは御座いません。

そりや成程皆さんが流行を競つてお追ひになるのは事實で御座います。然し決して新しいものをズン〳〵創へて、陳いものを捨てゝ、お了

ひになるのではなくツて、帽子の形や、服の格好が變つたら、古い形を色々にリボンを附變へたり、紐を附け直したりして、新しい流行に後れないやうになさるので、流行は追ひたし餘計なお金を遣ふのは惜しいといつたやうな風で御座います。

這様家業で御座いますけれど、妾の眞面目に觀て來たことは知つて斯ういふ風なことが多う御座いまして、妾が心から、もう今迄の經濟のやり方は實に拙かつたと思ひまして、三十五年間の生活がお恥しう御座んすと申上げると、『女將の口から經濟談を聞かうとは思はなかつた。貴樣、這樣商買をしてゐて、そんな馬鹿な事を言ふものじやない』などと仰しやるお客樣も御座いますが、妾自身に致しましても、箱根へも行きたい、鹽原へも行きたいと思ひましても、二度の所が一度になり、一度の所が廢しになる――と言ひますのは、餘計な所にお金が要るからなので御座いますよ。『何だ、花月の女將が』と言はれるのが厭やで、矢張り虚飾を張りたいもので御座いますから吝な眞似も出來ませず、思切つた御祝儀も奮發せねばならぬ始末で、それが又厭や〱なのですから、つひ出臆劫にもなつて了ふんです。廣い世界を態と狹く送つてるやうなものじやありませんか、ね、それを思ひますと、彼方の方は、餘計な金は遣ないとにして、行き度い處には御勝手にサツサと入らつしやるのですもの、その方が何んなに樂しいか知れません。

日本でも是れから先きはさうなるで御座いませうよ、又さうならねばならぬと思ひます。早い話が妾方へ入らつして下さるお客樣でも、自分の爲めに遊んでらつしやる方が、昔は十人の中に八人あつたとしますよと、今日では十人の中に二人しか、眞個に脱線して底脱け騷ぎをなさる方は御座いません。皆此會社を設立するに就て此重役を呼んで御馳走をしておかなくつちやならぬとか、何とか彼とかいふ用件を帶びて居らつしやるので御座いまして、中にはお酒を召上つて、大きな聲で『藝妓を呼んで來い』などと景氣よく仰しやる方が御座いますが、妾は女中共にさう命けてをるので御座いますよ。五人呼べと仰しやれば三人、三人呼べと仰しやれば二人といふ風に、先樣は御酒を召上つてらつしやるのだから、そこを見計らふのが女中の役目だと。でないと其場はそれで濟みましても、『お宅へお歸りになつて御酒が醒めたら、屹度苦い顏をなさるに違ひないのですから。現に帝國劇場が流行つて歌舞伎座が流行らないのでも、よく判るじやありませんか。簡單で、無駄のお金の要らない便利な處は、皆さんが望んでゐらつしやるので御座んすよ。只、今迄の習慣と虚飾とて、お互に馬鹿々々しい眞似をしてるのとも言へますアね。

妾が歸りまして申したことで御座んすが――御覽下さいましたかどうですか――英國へ參りますとお役所へ上つたやうな氣持で、獨逸は工場、佛蘭西は博覽會のやうだと。全く佛蘭西では大勢の旅人を、何うして面白く愉快に遊ばせやうかと、それのみを考へてるやうで御座んすよ。何の街路を通りましても、佛蘭西人は讀む程しか居りません、他は皆外國から遊覽に入込んでる人達計りで、どうせ遊覽に來る程の人ですから貧乏な者は御座いますまいが、其人達が、平均一月に二千圓宛のお金を落すと

しまして、大變なものじや御座いませんか。是れくらゐいゝ金儲けはないと思ひましてね、さうすると直ぐ此樣商買氣質が出て、日本でも何うかして外國の方を永く遊ばせる工夫をすればいゝと思ふんですよ。そりや彼方では政府から、劇場などへも此劇場へは何十萬圓、此劇場へはいくらいくらといふ保護が御座いますし、ミューヂアムは到る所に在り、レストランの設備は行屆いたもので、遊ばうと思へばいくらでも遊べるので御座んすからね。それに彼方の風俗と言へば、吉原が辷つたの轉んだのつて、吉原どころの話じや御座いますものか。帝割合に品が好くつて、表面は綺麗にやつてをりますから、早い話が

「モシ〳〵、貴方鳥渡お寄んなさいな」などゝ言つて、男の袂を引張るなどの不體裁は見られやせん。極く下等な處で、まア眼と眼でお約束する位な所ですけれど、何しろ賑かな所となると紳士と淫賣とでこんないゝ、いゝ、にこんなになつてゐるので御座んすからね。只彼方は表面錦を被せて中には襤褸が裹んであります。そんな事を思ふと日本などは中が割合と綺麗なので御座いますもの。餘り醬八風だの何だのをお吹かせにならないで、大抵のところは大眼に見て下すつたらいゝと妾は思ひます。外國から現金を持つて來て蒔き散らして下さる程、是れくらゐ割のいゝ商賣は御座んすまいよ。日本に觀光にお出でになる外國人が、帝國ホテルに泊つてゐらつしても、十日の豫定は一週間になり、一週間の豫定は五日にして引上げてお了ひになるといふじや御座んせんか。それもその筈、淺草と上野と三越とでは二日も要りませんからね。ですから妾永らく此方に居らつしやる西洋人の方に伺つてみたんですよ。「貴方が日本に居らつして何が一番御不自由にお感じで御座んすか」て、さうすると、「明るい處でカツフエーを飲んで音樂を聞くことが出來ないのが一番不自由だ」と仰しやいましてです。

彼方の方は全く音樂の素養がおありなさいます。其證據には、此方で申せば柴田環さんの歌劇が帝國劇場であると致しますと、中には帝國劇場の切符を買つて其歌劇を聞かれない方も御座いますわね。さういふ方は、其劇場とだけ連絡してゐる、環さんのお唄ひになるオペラを聞くことの出來る電話の店があるのですよ、そこへ行つて五十錢なり六十錢なり出して、一生懸命に聽いて居らつしやいますもの。此段になりますと、此方の方は音樂の趣味がおありなさらないやうですよ。私方へ參ります藝妓の中でも、あゝあの藝は十年や二十年の稽古で出來る藝ぢやない、巧いものだと感心するやうなのでも、お客樣は一向お構ひなしに、藝妓が一生懸命唄つてる最中だらうが何だらうが「君、何うとか彼うとか」ッて些度もお聞きなさらないので御座んすもの。

お料理は何方かと申せば日本の方が佳いと妾は思ひます。優美で風雅で趣味が有ります。それにお膳立に致しましても、彼方では丸いお皿に青い筋の入つたのに極まつてをりますけれど、日本では丸いのもあれば角のもある、お器だけでも九谷だの、伊萬里だのツて、それは色々に工夫を擬して、見ただけでも美味し相で御座いますわ。それにお料理の仕方だつて、一概には申されませんけれど、我邦の方が進んでるやうに思ひ

ます。尤も內の使ひ方などは、此方は全然成つてないんですから何ですけれど、野菜などの使ひ方になると、我邦の方が遙かに進んでゐます。味は別ですよ。いくら日本の方が美味しいと言つたからつて、西洋の方の口に適はなけや仕方がありませんからね。ですから味は別ですけれど、どうも日本の方が色々に使ひ分けることを知つてるやうですよ。第一箸からして上品で優美で、彼方のナイフやフオークよりは何んなに良う御座んすか。あちらで和田三造さんもさう仰しやつたのです。「女將、眞個に君の言ふ通りだ。フオークといふものは猛獸の爪を象つたものだ。日本の箸は鳥の嘴を象つたものだ」つて。

ですけれど玆に一つ外國と比較して、到底も日本の及ばないことが御座います。それは物價に比較して、どうも我邦のお料理が高くつくことです。彼方の方が安上りです。考へてみますと、是れには確に理屈があるので、日本のお料理は全く高くつく筈なんです。「何故といふのに、日本のお方は趣味がおありになり、贅澤でゐらつしやる。早い話が彼方でしたら、是れくらゐの場所でしたら、少くとも三組のお客さんは取れる。十人位入つたからつて不思議でも何でもありません。それを日本の方は二人か三人で占領してお了ひになるのですからね。此處へ假りに他のお客樣を御案內して來るとして御覽遊ばせ。「何だ、馬鹿にしてやがる」と貴方だつて屹度怒り出してお了ひになるに極つてますから。それに是れだけのお座敷ですと屹度三坪か四坪かのお庭を附けておかなくつちやお氣に入らないので御座います。でないと「何だ吝嗇臭い部屋だなあ」と仰しやる。それだけ此方の方は贅澤でゐらつしやるので御座んすれ。それに日本の方はお尻が長い。彼方では何んなに永くとも一時間か一時間半、二時間も三時間もといふやうなことは決してありは致しません。日本の方は何うでせう、六時頃から十二時まで。いくら忙しい時でも、此お座敷を精々使つて二度限り使へません。それを彼方のやうに、煉瓦で箱のやうなものを立てゝ、二階も三階も一室に幾組ものお客樣が、入換り立換りしてお出下さるのとは大分に譯が違ひます。二人か三人のお客樣に、六疊なり八疊なりの御座敷を當がつて、おまけに三坪なり四坪なりのお庭を附けて、四時間五時間の御對手をするのですから、何うしてもお料理が高くなる筈ですよ。それで花月は儲かつてるかといふと、些とも儲かつてはゐないのです。お料理の方で二割なり三割なりの儲をさして頂いても、一坪何百圓といふ地價なのですから協ひません。これで幸に皆樣のお蔭で、これつぱかりの處から大きくして來て、家なり地所なりが自分の物なればこそまだ遣つてゆけるので御座いますよ。今新たに是れだけの家を張つて料理屋を始めて御覽なさいまし、到底も立つてゆくものじや御座いませんから。花月が未だに借金を背負つて動きがとれないでゐるのでも別りませう。

どうぞ御免下さいませよ、生意氣な口幅つたいことをお饒舌り致しまして。(尾)

△舞と踊

長谷川時雨

舞と踊といふ事については、私が舞踊といふものをこのみ、そして舞踊研究會といふものを、おこがましくも催してゐる以上、強かりした事を申上げなくてはならないかと思ひます。そして其淵源を、明に知つてをかなくてはならない事も、よく承知いたしてゐます。

ところが自分の心では承知もし、また早くするようにと責めもしてゐながら、ついつい目前の事にばかり追はれてゐて、恥かしいほど知つてをりませぬ。そして自分の物知らずを、自白しなければならない事になりました。

舞――といふ方には、能樂や幸若なども籠つてゐるかと思ひます。其他にもあるかも知れませんが、目下では京都の井上流、または大阪の山村流などより外は、舞といつて立つてゐるのを聴きません、能の方から出た仕舞なども、まづ其方に組込んでもよいかと思ひますが、關西での舞といふのは、仕舞ひなどよりは踊に近く、踊に似てゐて仕舞ひの心のあるもの、まづ仕舞ひに、唄三味線の地を入れたといふようなのを舞といふかと思ひます。然もそれは重に、井上流の名手八千代――片山春子――一流のを見た觀察にすぎません。八千代は先代片山九郎三郎の夫人ですから、井上流の舞といふよりは、勢ひ能樂に近い舞になつてゐる事と思ひます。舞については、これから充分に見たうへ考へた上でなければ、どうといふ事はいへぬと思ひます。

舞には、眞に舞といへる京の舞と、歌舞伎風のものと、手踊りやうのものとの區別があります。歌舞伎風といふのを賤しみますが、何の考へもなく、たゞ習はうとするものには、歌舞伎風をよろこぶ方が多いと思はれます。京舞といふ方のが舞の眞髓でありませう、唄も地唄です。歌舞伎風になると、京唄といふ一種の調子にはめて、江戸唄の長唄も、常磐津も、清元も、都合よく打破してしまつたものです。舞として殘したいのは、範圍は狹からうとも、眞の京舞でありま[illegible]。歌舞伎風に、所作ものとして得意にしてゐる、東都の踊にはかないません。手踊ようのものを響に出して見せうならば、舞の方は、ずつと一型――體の――をきめてゐて、ひよいとチヨンチヨン、チヨンといふ工合に、手早く次の伎巧にうつるといつた處があつて、伸びりとしてゐるようで、氣忙しない個所が多くあります。そして顏の遣ひかたも、大まかな面づかひです。すました、まるで木彫の面のような、沈んだ美くしさを供へさせ、ゐて、そして動かせる時には、かなり激しく動かさせますが、それも沈んだまゝ、ぱつと面遣ひを代へさせます。靜動とでもいつたらはまりますかも知れません。それが舞にはしつくりと合ひますが、歌舞伎風、手踊りやうとなると、化粧が濃厚であつて、衣裳が非常に派びかものである好みだけに、奈良人形が機械體操をするような、感じを與へることがあります。

で踊はとなると、踊の缺點は締くくりのないことです、だらだらと流

水のようにいつて、高い波浪の趣や、または湧出る泉の趣や、嵐をふくんだ前の凪といつた情趣のない事です。そして京都の舞が靜的であるのと反對に、東都の踊はいかにも動きます、動きすぎて或人のなどは、輕業師と異はぬようになつてゐます。それを評して輕いと褒るものがあります。舞の方ではなる丈壯重に重々と見せ、踊の方では輕業のように輕く見せようとしてゐます。それは舞と違つて踊は、踊といふものの分子が、ユーモアに富んでゐるからなのでもありませうが、坪内先生さへ、踊は悅び、樂しみ、嬉しみ、をかしみは表出せるが、悲しみや淋しみ、または深みといつた方面は出しにくいと仰しやつた事があります。まつたくそれに違ひありません。然も名手が演じますと、その難關も、なんでもなく通られるといふことを感じました。

これからの時代に相當した、新らしいものを作らうといふには、それではとつちがよいかといふと、私は踊の方だと答へたく思ひます。それは作によりまして。舞の方をとらなければならない時もあります。また多く舞もとり入れたいとも思ひます。然も全體からいつては、踊といふものを土臺にしたいと考へます。何故ならば踊の方には、まだまだ考へていくらでも、領分を廣げてゆける處が多いと思はれるからです。何故新らしい作に、舞をすてて踊をとるかといふと、第一に表情が樂に出來る事、第二に彫刻的でない繪畫的である事が、なんでもつてゆける事であります。第三に形式の破しやすい事、歌舞伎劇の動搖とともに、何かしら變るだらうとの新機運の萌してゐる事などが重て、其他にも數へたなら種々ありませうが、それらを重と申ませう。

舞は佃女の命にはじまつたといふ事で、其後はどう傳はつてをりましたか、島のせんざい、若の前といふ二人の白柏子がつたへ、後に仕舞になり、幸若舞になり、田樂舞になり、下つて三味線と合ふものになつたのでありませう。

踊は舞から出たか、どうかといふ事はむづかしい問題になりませう。舞よりはもつと民俗的なもので、舞が上流からはじまつたとすれば、踊は平民の方からはじまつたのではありますまいか。お國歌舞伎が芝居の濫觴ならば、小野のお通が淨るりの元祖、ひいては此二つが踊の祖でありませうが、私はもつと古くから、平民が何かある場合に、手をたたき、かつ唄つて意味もなく踊つたものではなからうかと思ひます。それが室町朝の末に三味線が出來てから、德川時代になつて踊も現今の物のように發達したのでありませうと思ひます。舞より踊の紀元が古いとはまをされせんが、萬葉集の中に嬥歌の歌などのあるのを見ますと、あれはたしかに男女打寄つて、掛合ひに歌をうたつただけではない、踊り興じたものらしいと思ひます。

舞にせよ踊にせよ、その長所をとつて、日本のこれからのものにあふものが、どうか出來てほしいと思ひます。國粹保存者だといはれますが、ダンスやオペラにばかり心醉せずに、日本の着物をきて日本人が踊る立派なものが出來たらば、日本の誇りではございますまいか。

目下踊の流派は澤山に分れてゐます。ふと思ひ出しただけでも、藤間、

花柳、西川、坂東、中村、志賀山、若柳、藤柳、市川、瀬山、探茂登などです。

△花の品さだめ

日向きむ

櫻

櫻は八重もひとへもいと艶に美くしう、はなやかなる氣さへそひたる似るものなくめでたし。ひとへはいとをかしけれどあわたゞしければにや人の心にさばかりはとゞまらず、大方は八重にこゝろをつくすらむよ。うちあたす遠の高嶺に消え殘る雪とまがひ、立ちつゞく雲にかよひたるはいふべきにもあらず。さばかり濃からぬ色の何となくそゞろにをかしきを、ましてなつかしき香の風に匂ひたるいひしらずあはれなり。朧月夜のかげに香りあひたるはなか／＼にて、朝露のいといたく置きたるにすこし色まして俯俛たる花を辛じて支へがほなる細き莖の青やかなるがつきせずをかしきなり。まことにはなしろみたるをとめのうなじにも似たりけりな。

梅

梅ぞいとらうたげになまめかしき。艶なるかたこそ櫻にはいさゝおくれたる心地せらるれ。はづかしげなる花の姿の立ならぶ木やはある。ましてたぐひなき香のいとしるきが夕闇にふと匂ひ來たる何こゝちかはせむ。消殘る雪なほ深く、杣人の柴たく烟淡くなゝめに立のぼる山路に、紅梅の色こきがいたづらに咲き匂ひたる、いひしらずあはれなり。あやしき賤が破がきなどにたゞ枝に白き珠つけたらむやうにていみじう匂ひこぼれたる、あなこゝろにくしやとぞながめらるゝ。容姿(かたち)をかしくよしめきて、心はへなほたぐひなくなつかしき人のいかなるくまにありても世になべてのきはにはあらず。はかなきもてなしにも淺からぬ用意のほど見えて古への系もしぬばるゝこゝちす。

桃

桃こそいとをかしけれ。白きも赤きも梅にいさゝかよひて、さばかり世にふりがたきさまにはあらず、今すこし心安げなり。その枝のさまもすぐよかに、なべて思ふことなげなるに、ふくらかなる蒼の春風を宿したらむやうなるがつきせずらうたげにて、陽炎もゆる野邊ちかき家の門などにはげにつき／＼しき花の姿なりや。おもしろき片山里などにのどやかに住なして、やさしき父母のうしろみのもとにすぐ／＼とたゞ美くしう生ひたちて、こゝろばへなどもいとめやすくなつかしき處女のおもかげにもたちぬるかな。

椿

椿は紅うすくれなゐ眞白などとり／＼にゆかしけれど、なつかしきかたは乙女そすこし心とまることゝちする。青やかにつやめきたる葉のなべてならぬに、花もこと／＼しからで、曙の空の色に匂ひいでたる、さすがにあはれなり。さはれ重なるばかり咲きたるは中々に心淺し。いつしかなど思ひつゝわすれたるほどに、葉陰にふとみいでたる、忘れがたきまでぞをかしき。白玉はその名にも似てめでたけれど。そがまゝにても消えなましかば、日をふるまゝに花びらのはしのすこし黄ばみて萎えたるやうになりゆくさへくちをしきを、ともすればうてなの木よりはなれて地におちつ、いふかひなくぞなるめる。山椿といひて深山に咲きたる色を松杉などの見るかひなきひまより見いでたるはさすがにたゞなられど、なほいやしきさまのそふ心地してかざしになどもおもほえず。淺からぬ山路にて薪など背負ひたる賤の女の、さすがに捨がたき色したるに行ちがひたる心地ぞする。

海棠

海棠は艶に美し。貴なるかたは櫻にもまさりてなほ心にくき氣さへそひたるよ。さゝやかなる葉のなつかしきさへあるに、こまやかなる細き莖のいろことにをかしきが花重げにしてそよ風にゆら／＼とゆらめきたる、似るものなくらうたげにあはれなり。その雨に悩めるさまのうしろめたきまでやさしく美くしう、鳥虫などの雛ひよるだにねたしとおぼえて、えもめがれぬはこの花の盛りのほどなり。うら／＼と霞わたりたる春の日に、御簾なかばかゝげさせて箏の琴かいならしたる姫君のきはにあらでやは。

李

李ばかりあはれなる花やはある。白妙の底に含めるさあをの色の何となく悲げなるに、春雨の音なくふりかゝりたる夕暮こそあやしけれ。たわゝにおける露のさすがにおちもせず、三日月の影にそむけたる姿のおぼつかなげなる、見る人よりぞまづこぼるゝよ。さてもいかなる違ひめより春の物とはなりぬらむと思ふぞつきせずあはれにをかしき。限りなくかなしとおもひかしづきたるわすれがたみのひとり兒など先だゝせて、今は世にもいけらじとばかりおもへど命さへ心に叶はねばいみじう世をうきものに思ひわびて袖のひるまだにあらず、果はいたつきをさへ得て弱くなやみたる美しき人の横がほに二筋三筋わざとならずこぼれかゝりたる髪のいひしらずうらめしげなるがおもひ浮べらるゝぞわりなきや。

梨

梨の花は冷げに靜なり。悲げなる李の花よりは今すこしさとりがほに思ひのどめたり。松風のみおとづるゝ山陰の庵の軒端などに消殘る雪とばかり咲き匂ひたる、げに梅も櫻もあらじとぞおほゆる。あはれ此花の雨に悩めるさまのうるはしき、かの唐土の楊貴妃のたゞ人のめにみぬ山

にて王の御使ひに逢ひて泣きたる顔に似たりけりとかや。いまは何にかはたとへまし。

躑躅

しろきは時しらぬ雪に似て、紅なるは炎にかよふ。築山のふもと、やり水のほとりなどに、今を盛りと咲きいでたる色のとり〴〵なるを、すこし隔てゝながむるこそあはれにも美しけれ、近まさりする花の姿にはあらず、春の女神のくれがたき日の手すさびにつくりいでしにやあらむとをかし。若くみめうるはしきにふと心とまりてやう〳〵馴れむつみゆくほどに、折にふれてあはれなる物語などすれどをかしとも思ひ知らず、心ふかき歌などよみてつかはすもげにとだにえいはぬ趣なき女にやたとへまし。

木犀

木犀の香こそ似るものなくなつかしけれ、甘きなかに酸きをや含むむとおもふもをかし。花の姿木のふりのことにあはれとにもあられどさすがにめとまるふしのなきにしもあらず。いとさゝやかなる花のあつまりて咲けるが、盛りのほどはたゞ黄金の樹のたてるかとぞみゆる。光澤ありて色濃き葉も花のいろにやあつらへつけゝむとをかし。日を經て地に黄金の花むしろ敷たる、誰かはよしとたゝへざらむ。人の門など過るほどに、ふと風のたゞへ來たる香をいづくよりならむとおもふもをかし。はた花のありかもとめ出でたるもあはれなり。さあれ此花の香のいみしうこき、女ならば情こゝろ深きあまりに、思ふらむ人にもたえずまつはりきこえつゝときの間もかたそらはなれねば、風のつてにこそ心にくしともおもひつれなど中々にうとまれやせむとうしろめたからむよ。

瑞香

朝風のあやしく香るに端ちかういでゝみいたせば、沈丁花のいつしかも咲きそめたるいひしらずあはれなり。外國の古しへがたりを見るに、日の神にせちによばはれつ、青き葉のしげみの中にかくれ入りけむたをやめのやがてこの花になりぬとかや。白きはなのはしくれなゐなるは、なつかしき唇のなごりにやあらむとおもふに、おもむきもつきぬこゝちぞする。木犀の香を艶に裝ひこらしたる京女とめづれば、これは婀娜なるあづまをみなのびんの後れ毛二筋三筋を涼風にまかせたる浴の後の姿とやたゝへまし。

くちなし

巵子の花のおもむきこそ心ことにをかしけれ。人のこゝろに染むべき色もなければにやとりいでゝも愛でられねど、村雨はるゝゆふぐれなど、塵ひとつだにすゑじと咲ける白妙の花の清げなる、風に泄む香のなつかしき、みる人のえやは忘るゝ。かたちをかしき葉の深みどりの色ともに古への流れをくめるくらき端に似て、常にうるはひたる心地ぞする。日

の光うとく、氣冷かなる谷かげなどにはげにふさはしき花のすがたなりや。そのくちなしてふ名だにたゞならずをかしきを、こがるゝ色に萎えゆく、いよゝあはれなり。人ならば心きよき女の思ましきことをおもはむくるしさに、世をのがれて山里に月と共にすめどなほ思ふにはまけてあやなくながめくらしつゝ、おもふことといはでの山に年を經てなどはかなげにすんじて心やりけれど、忍びあへずして絶えにけりなど果敢なき物語などもいできなむかし。

桐

朝まだき露の白玉むすびとめたる草の上などにおちたる花をみいだして仰ぎみれば、ひろごりたる葉の中にゆかりの色に咲きたるがこゝにぞよといひがほにをかしき匂ひさへ送りたる、せめてあはれとにもあらねど、さすがに他木とはこゝろことになかし。梢にあるほど人の目にさばかりとまらぬもあやし。さてもいかなるあはれのあれば唐土にことくしき名とりたる美しき鳥のこれをしも愛でゝ住みけむ。琴にきり、調度に作ると思へばむつましきこゝちぞする。なべて實に用ひらるゝ物のはなやかにあはれならぬは、人の世にてもさぞあらむ。世にあるほどは折にもあはでありとだに知られざりし女詩人などの、はかなくなりて後その遺したる文章(ふみ)などのいみしう世にもてはやされたるにも似て、何となくそゞろになつかしき。

蓮

紅なるは艶に美くしう、白きは潔げに麗はし。月も宿らぬ濁江に生ひいでゝ、自からなるにほひのなまめかしき何にかはたとへまし。今ぞひくてふ月毛の駒の手綱とそめし曉の空をかしう一ツ星の影うすれゆくころ、打わたす池の面にひらく音きこゆるもにるものなくなつかし。花ばかりかは、浮きたる葉は凉しげにひらきたる、卷きたる破れたるともにをかし。さかゆる時、はしの一葉に風吹かばやがて池もせには傳はるらむをかし。宿れる露はたゞ銀のたまのまろぶとばかり見えて何處までも現し世のものとはみえず、御佛のこれをしも法の花と定めけむ理とあはれなり。蜂の巣なせるをかしき實の長き莖の先につきたることものにたぐひやはある。冬の來て雪霜などにあひて枯び黒み折れふしてみづきたる、ましてをかしういひつくすべきにもあらず。あやしうくちをしき家に生ひいでたる女の姿うるはしう、しかも心潔う、なべて世のうきにはたへて心ひとつに忍びつゝ、おほつかなきあけくれをすぐすに、自ら高き理想を知る人の知りてこよなくあはれと思ひかしづきたるには似たらずや。あはれ此花の水清きあたりにも咲きいでなましかばといふ人のあめれど、濁江に匂ふこそこの花のあはれにもなかしきふしなれ。清き瀬にいざといはゞ何とかはこたふらむ。げにきかまほしや。

ゆかしきもの

若く美くしき尼が來しかた、闇に香り來る花のありか、木がくれに水の音きゝつけたる、待ち得たる文のうちこそいふなかにもゆかしけれ。

みはたきゝさしたる物語の末、月あかき夜いつこよりともなくかよひ來る笛の音、きくほどにやう／＼遠くたえ／＼になりたるはましていかなる雅ひこのわざぞとおもふに、あらぬ俤のこゝろにたつもをかし。

にげなきもの

外國のことば聞わかずえいはぬ人のその國のよそひしたる、色黒き人の薄いろの衣きたる、わかやかに愛嬌づきたる女のものいふ聲ふとく枯ばみたる、はた髯など黑うたのもしげなる男のかんだちたる聲音してはやことに語りたる、額は白き女の手いみじう黑き、風にみだれたる髮の筋などあぐるとてふとあげたる手の色のあまりに額とかけたがひたるはいとほしくさへおぼえてめもそらさるゝよ。松ケ枝に鶯のなきたる、男の醉ひ泣きしてはな聲に繰りかへしごといひたる、女のあくびしたる。

姦ましきもの

下種女のうちつどひて笑ひくつかへりたる、ゆあみするほどに泣くちご、文月の蟬の聲、世の人ごと。

あなづらるゝもの

あやしき姿して市街などにさまよへる田舍びと、山田の案山子いとあまり久しきほどみゆるぎだにせず立てば烏などもやう／＼あなづりて笠の上弓のはしなどにもとまるよ。御用といふ二字の名のかしらにつく新聞記者。

心ゆくもの

つばくらめの飛びざま、髮の美くしうあがりたる、葉月なかばの夕立、いとあまり近からぬ雷の音、紫のすみれの花籠にみちてみだれたる、思ふ人のほめいはれたる、いみじう老さらばひてゆるぎありくかたゐなどに物多くとらせたる、さつきの鯉の風になびきてふくらかにあがりたる矢車のとくめぐるはためでたし。名かくしておほやけにしたる物語、歌など人のあはをかしそはあはれなれなどかたりかはしたるをかたはらにてきゝたる折こそげに心ゆくこゝちすれ。まのあたりいみじういふはいふかは、あまりことゝ／＼しうさへほめいひたるは中々にはらだゝしうこそ。誰かはうちむかひて、あはいとかたはらいたき事の多くぞ侍るしたりがほになどいはむ。春の霧、秋の霞などいひたるをだに中々になかしやなとぞほむべかめる。まことにその人のありとも知らでふといひいでたるぞつきせずをかしき。よし彼處のことばいとわろし、まことにあはいふものかなどあしざまにいひなさるゝもなほ嬉しうなむ。かくかいつくればげに物くるほしや。

△高座の上から観た東京と大阪

豊竹呂昇

ズット以前、妾らの聞いてをりましたには、大阪は浄瑠璃を語るのだけれど、東京では歌ふと言ふ方が受けが良いと言ふことで御座いましたが、只今ではそんなことは御座いません。妾が有楽座へ初めて参りました時でも矢張り左様で御座いましたが、近頃では殊に歌ふばかりではいきません、語るといふことに重きをおかなきゃならぬやうで御座います。さうして却つて大阪の方が歌ふのを歓びはしないかと思ひます。大阪は浄瑠璃の本場所では御座いますけれど、何うも東京の方が細い處までも聴いて下さいますやうで、それに眞面目に、熱心に聴いて下さりますので、張合が御座いまして妾どもも語り良う御座います。大阪は少し大ざつぱに聞いてお了いになるやうで御座います。

人情は何處へ参りましても餘り變りませんもので、語物では矢張り新口村とか、酒屋とか、先代萩とか、それに壺阪とか、さういふものは一般に何時でも受けるやうで御座います。さうしてさういふものになる程妾の方では語り惡いので御座います。もう皆さんがそれこそ何遍といふことなしに聞いてお出でになるのですから。ですから中には飽いて了うて、珍らしいのを聞いてみたいといふのでお出になる方も御座いますけれど、大概は矢張りさういふものをお好きになるものですから、入りは何時でも宜しう御座いますが、合邦といふやうな、少し堅いものになりますと、その時に限つて入りが薄う御座います。すると座の方では、あれは入りが惡いから、是れを出して呉れと言うて、同じ物を何遍でも出すといふことになりまして、これは致方が無いので御座います。

一座の中には澁いのを語るものも入れなければなりませんが、どうも今迄から、此切りを語りますものは――東京では看板と申しまして大阪ではびらを出すと申すので御座いますが――それはどうしても艶のある、何方かと言へば歌ふといふ方が皆さんの受けが宜しいやうで御座います。然し、三枚目四枚目はそれでも宜しう御座いますが、切りになりますと矢張り身のある、シッカリしたものを語らねばならぬと存じまして、妾も是れからは何とか工夫して、語るやうにしたいと思うてをります。さうかと言って、聞いて肩の凝るやうな、息の塞るやうなのでも困りますから、聞いて快い感情を起させるやうにするのが肝心かと存じます。中々六ケ敷しいもので御座います。

東京でも大阪でも、手を叩いて喝采して下さるやうな處は大抵極まつてをりまして、――尤も有楽座では餘りお叩きになりませんが――矢張りさわりとか、くどきとかいふやうな所で御座います。言葉の中では、假令可い所が御座いましても叩き難いからでも御座いませうが……。

昔は拍手をされたら自分の藝が未熟なからだと思つてモット勉強しろと教へられた相で御座いますけれど、今ではそんなことして語り口を變へた

りしやうものなら、聞いて下さる方が減つて了ふかも知れません。約り眞個に照じて了ふたら、手を叩いたりなどする餘裕がないといふので御座いませうが。さうですね、俗受けがしてるといふことにもなるかも知れませんが、矢張り皆さんに聞いて頂かねばならぬので御座いますから。何が好きとか、何が嫌ひとか、好き嫌ひは奕逸の申上げることでは御座いません。お客様のお好みを演つてればそれで宜しいので御座いますから。只妾は條理の通つたのが何よりも好きで御座います。新口村とか酒屋とか合邦とかは好きな方で、何といひますか、だらけたやうな、ヂヤラ〳〵したやうなのは餘り好きでは御座いません。條理の通つたのを語つてゐますと語る者までが氣持が宜しう御座います。

△女學生の今昔

棚橋絢子

隨分變りましたな。私らの子供の時分の小學校といふやうなものはまだ家塾の風が拔けませんでしたから、机なども矢張り昔の寺子屋風に大勢竝んで敎はつたものですから、生徒も可愛いものでしたなア。ほんとの世間知らずで温和しくて、シャンと眞面目に授業を受けたものです。

女學校が出來ても初めのうちはそれは温和しいものでした。白粉でも塗つて皆小倚麗な身姿をしてゐました。「先生」と言つて手を擧げたりなどする元氣はなかつた。「あなた遣つて御覽なさい」と指差しても、どれもこれも恥し相にしてゐたものです。

その時分の學生は一體に或部分の學課は特に能く出來たやうです。裁縫とか、花とか、讀本とか、珠算とかいふやうなものは割合に能く出來たものです。今のやうにどれもこれも圓滿に發達してるといふわけにはゆきませんでしたけれど……。

その後女學生の氣風が變つて來たのはかの師範學校が設立されてからでした。まるで男の生徒のやうになつて、中々氣焔もえらかつた。その代り極めて有りのまゝで、素朴な純粋な飾り氣のないものでして、表裏の別なども見られませんでした。

處がそんな風に女學生が大勢連れ立つてゾロ〳〵歩く姿を見て、「あれでは不可ん、あんな風な女が出來ては困る」と喧しく世間が言ふものじやで、今度は女らしくといふことを主眼において敎育するやうになりました。女らしい、優しい女を作ることにしたが、それは形式的表面的に流れてしまうて隨分自負心の強い、內心甚だ強情な、いやな風が生じて仕方がなかつたです。

その際に唱へられたのが例の良妻賢母論で、全く世に良妻賢母が缺けてゐたからでせう。良妻となり賢母となるのは大抵のことではないのです。女としてこれくらゐ立派な理想はありません。それを今度は又しても其良妻賢母に甘んじてゝは不可いと言ひ出した。女として缺點の無いのが即良妻賢母じやありませんか、それに甘んじては不可いなどと言ふ

のは、男はまるで女を弱り者にするものだと思つて私は情なかつたです。

今の女は覺悟が足らない、辛棒が足らない、女は斯うすべきものであるといふことを知らない。男が立派に奢らせて遊ばせて吳れるのでなくてはヘイコラで從つてるのは馬鹿げてゐるといふ考へがあるらしい。どうも一體が奢侈になつて來て困つたものです。私の方の學校では銘仙より可いものを着ることゝならぬと言つて、卒業生が會などに來るにも餘り可い着物を着て來て吳れては困るからと、可成質素の風を養ひたいと思つてをります。これは日露戰爭が終つて、出征してゐた軍人が凱旋する、今まで獨り寂しい家を守つてゐた夫人に樂しみをさせやうといふので、可い着物を着せて物見遊山にもやらせる。あちらでも歡迎會、こちらでも祝賀會と、盛に凱旋を祝して、永い間艱難をした軍人の勞を犒ふと同時に夫人も其宴席に呼ばれてゆくといふ風に、軍人社會が華美になつていつたのを、一般のものが見て眞似るといふことになり、到頭今日のやうになつたのだらうと思ひます。ですから昔は學者の處へ嫁にゆきたいといふ女もあつたが、今は大方會社員、銀行員、實業家といふやうな處を望んで、學者の處へなど行かうとする者は殆どありません。何と言つても金で、女學生も矢張り此風潮から免れんやうです。

△藝娼妓の群に對して

尾竹紅吉

人世を具體的に表現してゐる今日迄の歷史は男子の性格と天職を述べて來てゐるに過ぎぬ。

女と云ふ孤なる女優より數等以上の演技振りを表現してゐる。だから今日の文明は獨り男性の舞臺であつて、ひとり男性のみ好き勝手に樣々なる自己を巧に演技することが出來るのではあるまいか。換言すると今日の文明は男性的の文明にして女性の混入することの出來ない文明であると。

勢、そこには男性の目的をのみ表現する倫理の生れてゐるのは當然のことである。

その男性的文明のなかに生れた女性が全くとりえのないものとせられ人格あるものとして尊敬されないのは當然である。

尙又その男性的文明のなかから生れた樣々の宗敎、基督敎にしろ佛敎にしろ、その他儒敎にしても凡女性に對しては想像することの出來ない程虐遇して來てゐる。そしてそれら宗敎のなかに生れた女性觀の一端を見ても、如何に男子が歷史的の演技に依つて女性を蔑視してゐるかが透視されるようである。

單に女性と云ふものが佛敎の所謂外面如菩薩內心如夜叉であるかの樣

に、ただに自巳の肉體が男性に賞讃され慾望せられて一直線に性的興奮のみを有つものであるかの樣に、あたかも人間以外の獸の樣に罪惡視、敵視すると云ふことが實際私達個々の女性から見ると面白い程空論である。不明瞭な倫理である、人生觀である。

男女兩性が不可解な原質を有つてゐる以上斯る不明瞭な無責任な慘酷なことが如何に言論は自由なりと叫んでも通用しないのは當然のことでは有るまいか。空論と指示し壊碎を叫んでも無理なことではあるまい。

眞に女性の解釋の出來ない以上は如何にしても眞面目な人類の眞理想は完全に表現される道理がない。眞面なく歴史的の演技それのみによつて女性を論じた男性に對つて平安朝以來の女性は何事か答へたかつたのに違いない。單に女性が野獸性の男子の爲に尊敬される謂も自然ないものではあるまいか。

それから男子は單に女性を情慾の手段視したのに過ぎてゐない、一方公平な人世表現の歴史、少なくとも我國の歴史は有爲なる位置を女性の上に置いたのは明瞭なる事實である。上古より鎌倉以前、平安朝來の女性について之を調べんか單直に之を語るべきで有る。

だから如何に今日の文明が男性のものであつても兩性人格の尊敬、兩性人格の權威は入れる餘地が否等から見ただけでもある筈なのだ。

けれど女性巳（みづから）の内より生れた產物即ち彼等藝娼妓の存在は、女性の人格を重んずる、男女兩性の平等と云ふことを悲しいかな打破してしまつてゐる。女性そのものに無意識のうちに裏切をしてゐる、彼等藝娼妓はいつとはなく大きな群を作成してしまつた。何處からとはなく、どうして來たとはなく、然して男性は之に依つて無法な不明瞭な女性觀を覺得してそれをもつて一般女性の上に投げつけてゐるのだ、そして彼等をして女性の社會的勢力測量の標準に彫みつけてしまつたのだ、同時に男子の慾望が一層女卑の感念を增長せしめ情慾の一手段とより外觀なくなつたのではなかろうか。

自然彼等藝娼妓の存在は男子として誤つた感想を持たせた以上、最早や彼等の存在せざるに至らざる限り永遠に女性を眞に解釋することの出來ないことを證明する。彼等は歴史的平安朝來迄有爲なる位置にあつて活動に富だ女性として認識されてゐた女性が佛教の女性罪障觀によつて壓抑されて社會の表面より活動力、存在力を無視された結果裏面にむかつて作成された裏面に於ける新らしき女性の產物ではあるまいか、その後展々と擴現される男性的の文明に對つて彼等は甚だしく品格を墮落し增々その劣い個なる女子を產み無作法なる受動的服從により彼等の群を擴集し痛ましき風俗の發動力ともなつて來てゐる。

單に女性を獸視し、機械視し惡魔視してゐた男性が彼等の群に於ける體度である、彼等に示す男性である、彼等女性は完全なる受動的服從により男性を收得し男性をして沈醉せしめ男性をして男性自身の人格を破壊せしめてゐるではないか、しかるに男性は、否男子は受動的服從の許に身みづからを打算的に用ふる彼等の群のなかに、如何に男性みづからを示し、表露してゐるか、根本の曖昧は男性の歴史的演技を打破するに

單なる答への許に行ふ筈であろう。

女性を偏狹なる論議に蔑視する、即ち女性の人格をある程度迄尊敬することが出來ないで單に個なる男性の情慾手段視をして女性を眞に解釋出來ないと云ふことは男性自身をして完全に女性をして永遠に男性なるものの眞價を知得せしめ得ぬものではなかろらか。

彼等藝娼妓の群の存在、增加は男性の野獸的情慾の人類記錄に一層の光彩を放つものと見てもさしつかへはないと思ふ、それら男性の存在する限りそれら男性の要求の許に生れるのは彼等藝娼妓の群ではあるまいか、社會の表面より壓抑された女性は男性をして社會の裏面に壓抑し打壞せんとしてゐるものではあるまいか。

これらの群の存在は女性にとつて完全なる女性を男性にも又同じく知得さし得ぬことを悲しむのである。女性の解釋が眞實に出來ないことを悲しみたいのである。人格あるものとして尊重されないのを悲しむものである。

男性にして眞に女性を解釋し研究すると云ふことは今日目下の急務であつて男性的文明を男性は勿論女性をして尊重せしむべき急務ではあるまいか。

エルドマーンは女子は言葉を有つて世界に仕へるより一つの接吻を以つて世界を支配する方が勝つておるといつてゐる。勿論意味の解し方に依つて色々の方面にも話すことが出來ようが男性として此の言葉を只言葉として聞いて實行してゐるものと思ふ。エルドマーンは消極的の女性に對してこういつたものだろうと私は信じたい。ショッペンハワーは女があまると風俗壞亂になると迄いつておる。こんな言葉が兩性の間に挾まれたりすると兩性の人格尊重論の決論を狹隘な方面のみで早斷されてしまふのだろうと思ふ。

かのエリスや獨のロッチエなどがこれらの人の說を看過したことを悲しみたい。

女性は男性について人格の神聖なることを說きたい、女性みづからの產物たる彼の女子も又男性に對して披見するところが有るだろうと思ふ。今日の文明、即ち男性的の文明は何處迄女性を卑なるものとして取扱ふつもりでゐるかは知らないが人類中最も始に作上げられた兩性が原始を忘れて女性を卑なるものに置くと云ふことは絕對に間違つてはゐたいであろうか、男性は優劣と尊劣を少し間違つて解釋してゐるのではあるまいか。

倫理の上からも道德の上からも男性が女性に對してかゝる誤見を有つて處すると云ふ筈がないものではなかろうか。

威張りたがる男性の澤山出來ることは人類の上から見てもあまり望ましからぬものではなかろうか。前に述べた樣に彼藝娼妓の存在は女性の理解を眞面目的に男性に要求するには全く邪魔なものなのだ、その爲に女性と男性がいつ迄も人格を相互の上に尊重することが出來ないのだ何故なれば先きに述べた通り彼等藝娼妓を以て現在の女性凡ての社會的、生存的勢力の測量標準としてゐるからなのだ、吾人が藝娼妓の存在を非認

するのはここに云ふ女性のみではなく彼等の群も同じく共に女性としての理解、眞目的な解釋を男性に追求やうと云ふ意義なのだ。

男性に女性の所謂暗黒面のないと同じく女性みづからも暗黒面の女性な壊碎してしまいたいのである。決して吾人は彼等の群に男性の所謂女性慾の如き陰險な眞似はしないつもりなのだ、今日の文明から暗黒面の女性を消滅せしめたなら今日の男性は如何に表面の女性に男性自身を示すであろう。

暗黒面の女性と表面の女性とはただに性格的色彩と形式的禮式の相違を見出すのみにて決して個別さるべきものではない。

むしろ表面の女性より暗黒面の女性は女性特有の自己中心になれない、又女性に欠望の道德的羞恥心は彼等に於てあると信じておる。換言すると女性が自己の他人に評價されることを羞恥すると云ふ不道德な處がない、然しそれは表面女性によつて知得せしめ得ない一層の受動的服從が彼等をして斯くしたのである。

男性にして男性のなしえぬ處を女性にしてなしえぬ處を有つ以上は相互の尊敬を有つべき道理ではあるまいか、男性自身勝手な眞似で威張ると云ふことは男性だけの眞理であつて女性と共に解知する眞理ではあるまい。

暗黒面の女性は要するに藝娼妓をさすべきものである。曾て吾人は暗黒面の女性と表面の女性を單に女性として彼の奇婚に類する男尊女卑論から打破し相互の入格を尊重し尊卑を排し優劣を以つて女性の標準を定めたいと思ふ、即ち赤裸な原始に歸り作られたる性格の本質によつて[illegible]眞仕合いたいと考へる。本題の「藝娼妓の群に對して」とは可成緣遠くなつたようではあるが「人間」の間に男性から尊卑を論ずるのは暗黒面の女性に暗黒面の男性を作りつゝ有るからだと思つたから、我儘な言葉を幼稚な心で寫して見たまでのことなのだ。

△女優にならぬ昔となつた今

森律子

女優になつた動機と申しましても、別に大したものがあつたわけでは御座いません。それに大抵は當時の新聞なり雑誌なりに、お話し致しましたから、今更あらためて申上げる程のことも御座いません。一口に申せば好きだつたから、成りたかつたからと言ふに外ならないので御座います。それに一方では、妾は家庭の人となつて、良妻だの賢母だのになる資格が無いといふことを能く知つてゐたからなので御座います。勿論今でもですが、子供の時分から跳ね返りのお轉婆娘で、到底も他人様のやうに夫人になつてゆかれないと思ひまして、役者にでもなつたら妾のやうなものでも、又或ひは使ひ道があるかも知れないぐらゐに思つたの

て御座いますよ。

さう思つて、妾は決心致しましたもの丶、其當時のことで御座いますから、父や母を説付けるに、それは一通りや二通りのことでは御座いませんでした。母などは初め「お前まア何を言つてるの」と言つて取上げては吳れませんでした。それに妾の家は、チョイ〱歌舞伎座を覗きに參りましたくらゐのことで、藝人といふものとは全然り緣が遠う御座いまして、空氣がスッカリ違ふので御座いますから、初めの間は容易に許して吳れ相に御座いませんでした。それを漸つと說伏せたかと思ひますと、今度は親類の者から――妾どもの家は伊豫の松山から出たので御座いますか、田舍のことで御座いますから「イヤ何を好んで河原乞食の仲間入りをさせた」と言つて、到頭親類交際をして下さらなくなつた家が御座いました。妾は自分で決心したことで御座いますから何で御座いますけれど、何も知らない親にまで這麼氣の毒な目に遭はせてはと思いましたものですから、何でもシッカリ遣つてと、もうそればかり祈つてをりましたので御座います。決心したと申しましても、その當時一番心細かつたのは、お友達といふお友達は皆失くして了つたことで御座います。途で出會つてもスーッと外れてお了ひになるので御座んせう。まア何と思はれたつて、自分の精神さへ確であればそれで可いのだ、何も恥じることはないと思ひ返して見ましても、つひ獨り見離されたやうな氣持が致しまして、隨分その當時は悲しい悩しい思を致しました。幸に今では皆樣か舊のやうに御交際下さいますので喜んでをりますやうな次第で御座います。それにつけても、その當時味方について下すつた方には尚更、反對された方に對しても、何でも一生懸命に遣つてと、もう〱今でもそればかり思つてをるので御座います。

舞臺の人となりましてからも、別に變つた感想とては御座いません。只芝居を觀るに致しまして、昔のやうに面白いとばかり思つては觀てゐられません。中へ入つて見ますれば、畫中の一山一水でも夫々苦心の餘りに成つたものでありますやうに、妾どもでも拙いながらに夫々の苦心は致してをりますもので御座いますから。外から見ては到底も想像の及ばないくらゐで御座います。

妾が女優になりませぬ間に、一番心配してをりましたのは樂屋内のことで御座いました。全然り容子が解らないので御座いませう。何でも恐ろしいやうにばかり聞いてをりましたので御座いますが、入つて見ますと案ずるやうなことは御座いませんでしたが。特に妾方の劇場の設備が行屆いてゐるからかも知れませんが、新聞などで、兎や角う仰しやるやうな事は出來相な筈がないので御座いますよ。一度でも御覽下さつた方はお別りになるだらうと思ひます。それに近頃では皆さんが一生懸命御勉強でゐらつしやいまして、妾などが憖じ女學校を卒業したと言つても、もう悉皆お返しして了つて、今では全くお恥しい次第で御座います。

ですから、先刻申上げましたやうに、只もう何とかして物にしたいと思つてをりますのみで、外の事は考へたとも御座いません。寝ても醒めても芝居の事ばかり思つてをりますから、全く夢にまで言ふ相で御座い

まして、母がそれでは身體に障るだらうと言つて心配致しますので御座います。結婚ですか、妾は結婚は致しません。何の新聞てしたか、律子は成功したら結婚するなどゝ書いて御座いましたが、成功て一體何處までが成功なので御座いませう。そんなこと列るものじや御座いませんわれ。

藝術と實生活で御座いますつて、え、左樣で御座いますね、天秤に掛けて矢張り藝術の方が妾には頂う御座います。それで何等の不安も無いかと仰しやるのですか、今の場合、全然り芝居に打込んでゐるとでも言ふのでせうか、そんな不安は御座いません。眞個に御座いません。妾はこれで遣つてく心算で御座います。然し外のお方はそんなとなさらなくつてもいゝかと存じます。隨分妾のやうな者の處へでも、色んなことを言つてお出での方が御座いますけれど、大抵はお斷り致してをります。といふのは第一親御樣が御承知なさらなけりや不可ませんし、それに汚い話ですが、お金は幾何取れるのつて仰しやつてお出でになるのが多う御座いますが、到底もお金などを目的になれるものじや御座いません。妾家から補助をして貰はなくつちやならないくらゐで御座いますもの。妾などは、例の袋に入つたのを貰つて參りましても、其儘母に渡して了ふので御座いますよ。ですから外の方が女優になりたいと仰しやつても、妾は贊成致さないので御座います。充らないことをお饒舌り致しまして失禮致しました。どうせ妾どもの申すとは賢い方の笑を買ふばかりで御座いますから、何も申上げ度くはなかつてので御座いますが、此上は只柚子秋を知るの時を待つて又申上げることに致しませう。

△このごろの一日

池田蕉園

妾のこのごろの生活の一日だけをお話しいたすことに致します。結婚いたしましてからも何の變つたとゝては御座いません。矢張り頃日でも毎日繪は描いてをるので御座いますよ。

赤ン坊が生れるまでは、自分で育てるのはさぞ煩さいとと思ひまして、婆やを一人雇つておいたので御座いますが、牛乳では子供の身體に不良いそうで御座いますし、婆やの乳も婆やのお乳か牛乳ででも育てたらと、どんな遺傳の病があるかも判らないからと言ふので、折角出てゐたお乳をも上げて了ひまして、それからは妾の乳で育てるとにいたしましたのですが、さうすると今では妾か母てないと安心してられないやうになつて了ひまして御座います。

朝起きますと赤ン坊にお乳を飲ませまして、妾は繪を描くので御座いますが、四時間毎にお乳の時間がまゐりますと連れて來て含ませるだけで、あとは母や婆やが世話して呉れますから、それが爲めに累はされるやうなとも御座いません。飽きて來れば勝手に對手になるくらゐのとて、夜分だけは皆んなして赤ン坊と一所に遊ぶとに致してをります。繪を

描いてゐるのと赤ン坊と遊んでゐるのと、それは繪を描いてる方が面白う御座います。でも出來上つた繪と赤ン坊とでは、それは矢張り赤ン坊の方が可愛いやうで御座います。子供といふものは有つてみないとわからないもので御座いますのね……。

△家庭を圓滿和樂ならしむるには

江木欣々

私は近年心臟病を煩ひましてからは、ドチラの新聞雜誌の御依賴をもお斷りして居るのですから、實は御免を蒙りたいのですが……。

「家庭を圓滿和樂ならしむるには」といふ題ですか。六つかしうございますね。世間では私と衷とが大變に仲が善いとか何とか噂するものですから、貴社の方でもこういう題をお持ちになつたのでせうが、衷と私との例で、世間一般を律しては、それは間違だらうと思ひます。ナゼといつて御承知の通り、私と衷とでは大變年も違ひますし、又衷は酸いも辛いも嚙み分けた人で、私に行屆かぬ所があつても、氣に逆ふ事があつても、大抵は大目に見て叱言もいはずに居て呉れるのですし、私も亦、衷とは別々のものではなく、全く一體であると信じてゐるのですから、之を以て、世間一般の御夫婦の關係を論ずることは出來まいと思ひます。

然し私の考ふる所では、家庭に風波が絕えないとか、圓滿に治らぬとかといふのは、大抵其罪は男の方にあるやうです。私等も時々媒人をすることがありますが、新婚の間際には、花婿さんもよく花嫁さんを可愛がつたり、いたはつたりしますが、半年か一年か、甚しいのは二月か三月も經つと、花婿さんの態度がガラリと變つて、言葉遣ひでも何でも荒々しくなつて了ふ。子供などが出來ると猶更ら冷淡になつて夫らしい處などは微塵もなくなる。私は日本の多くの家庭を見ると、其夫人は細君にあらずして細奴だといふ考を起します。いかに女だつて、妻だつて、男から、亭主からそんな待遇をされて、愉快で居ることは六つかしい。反抗して見たり、フテヽ見たりするのは無理のない事と思ひます。男たるものが、自分の妻をして自分に服せしむるの手腕が無いなんて、私は男子の大恥辱だと考へます。男さへ、優しくして呉れて居れば、女は決して無暗に反抗したりするものではないのです。それで私は家庭の圓滿和樂ならざるは、其の罪多く男子にありと斷言するに憚らんのです。

尤も女子の方でも多少注意しなければならぬ點もあります。男の方は大抵外に出ていろ／＼な新らしい事物を見たり聞いたりして、其思想も絕えず進歩して居る。が妻君の方は内にばかり居つて五年經つても十年經つても何時も嫁入した時と同じ心持で居るなどは、夫婦の不和合を來たす基であるから、妻君たるものも家事の傍ら、矢張り世間一般の事にも注意して、自分の思想を夫の思想に伴はせて行くやうに努めなくてはなりません。

あの有名な卓文君の「白頭吟」といふ詩がありますね。「皚如山上雪、皎

若雲間月、聞君有兩意、故來相決絕、生平共城中、何嘗斗酒會、今日斗酒會、明旦溝水頭、蹀躞御溝上、溝水東西流、郭東亦有樵、郭西亦有樵、兩樵相推與、無親爲誰驕、淒々復淒々、嫁娶不須啼、願得一心人、白頭不相離」といふ詩。日本の奥さんも此位妬いて見せなくては駄目ぢやありませんか。妻君の方でも亭主の氣に入らうと努め、旦那の方でも妻君を怒らせないやうに心を用ふれば、家庭の圓滿和樂は疑ひなからうと存じます。雜誌にお出しになるんですか。困りますね。それぢやまアよいやうに書いて置いて下さい。

△新しい女

らいてう

自分は新しい女である。

少くとも眞に新しい女でありたいと日々に願ひ、日々に努めてゐる。

眞に、しかも永遠に新しいのは太陽である。

自分は太陽である。

少くとも太陽でありたいと日々に願ひ、日々に努めてゐる。

湯盤の銘に曰く「苟日新、日日新、又日新」と。大なるかな、日に日に新なる太陽の徳よ、明徳よ。

新しい女は「昨日」を呪つてゐる。

新しい女は最早しいたげられたる舊い女の歩んだ道を默々として、けた唯々として歩むに堪へない。

新しい女は男の利己心の爲めに無智にされ、奴隷にされ、肉塊にされた如き女の生活に滿足しない。

新しい女は男の便宜のために造られた舊き道德、法律を破壞しやうと願つてゐる。

けれど舊い女の頭に憑いた色々の幽靈は執拗に新しい女を追ひかけてくる。

「今日」が空虛であるとき、そこに「昨日」が侵入してくる。

新しい女は日々に色々な幽靈と、戰つてゐる。

油斷の刹那新しい女も舊い女である。

自分は新しい女である。太陽である。唯一人である。少くともさうありたいと日々に願ひ、日々に努めてゐる。

新しい女は啻に男の利己心の上に築かれた舊道德や法律を破壞するばかりでなく、日に日に新な太陽の明德を以て心靈の上に新宗敎、新道德、新法律の行はれる新王國を創造しやうとしてゐる。

實に新しい女の天職は新王國の創造にある。さらば新王國とは？新宗教とは？新道徳とは？新法律とは？

新しい女はいまだそれを知らない。

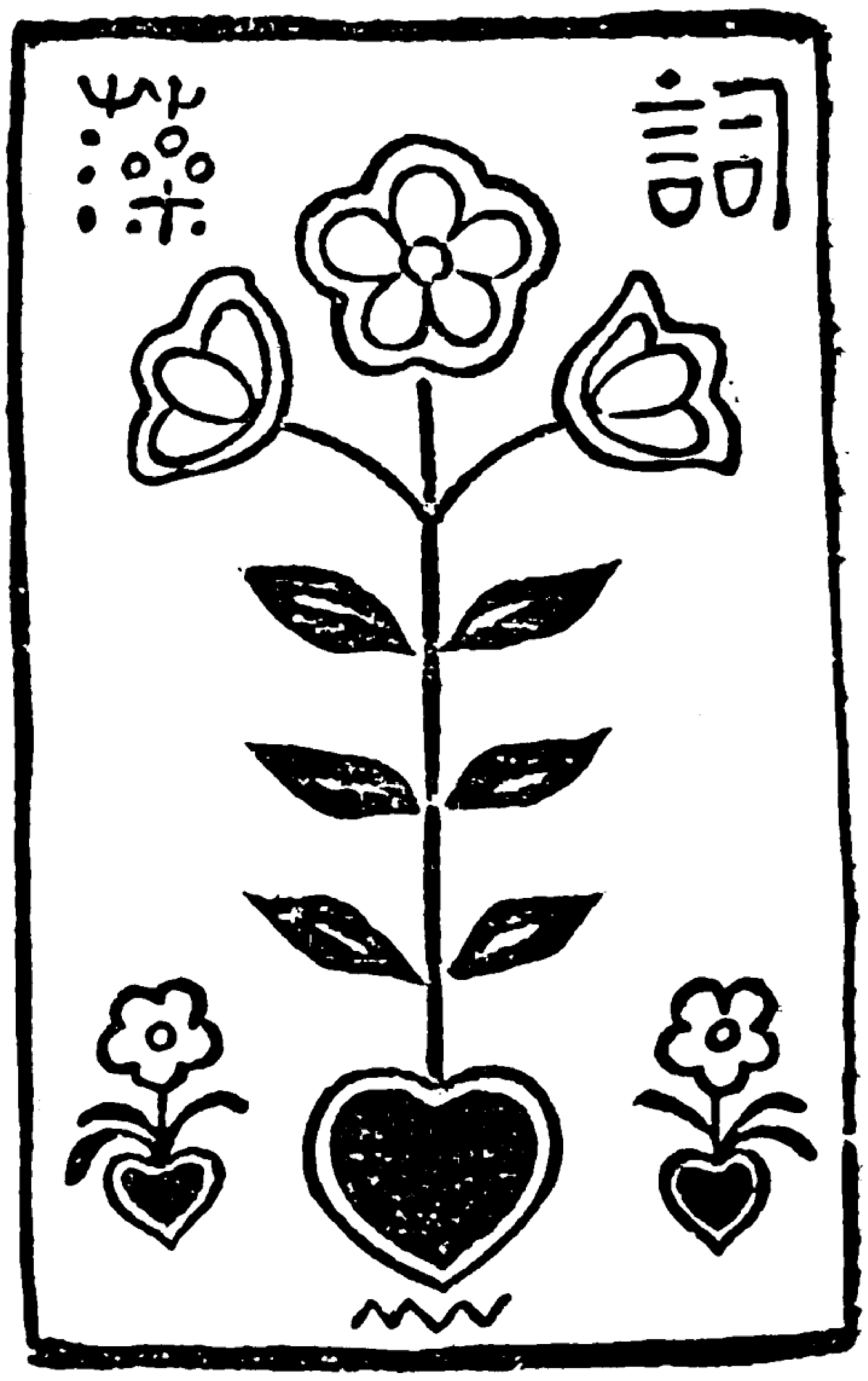
只新しい女はいまだ知られざるもののために、自巳の天職のために、研究し、修養し、努力し、苦悶する。

新しい女は今は只力を欲してゐる。

自己の天職を全うせむために、知られざるものの爲めに研究し、修養し、努力し、苦悶するに堪へる力を欲してゐる。

新しい女は今、美を願はない。善を願はない。只、いまだ知られざる王國を造らむがために、自己の尊き天職のために力を、力をと叫んでゐる。





高地

柴舟

今日もまたあまりよき日にあらざらむ高地の梢こまやかに見ゆ(ある朝)

殘されてなほ土に這ふ芋の蔓のうすら赤きも冬はいたまし

更けし夜のいらだち心殘りたる火鉢の火をばかきまはしつる

「命あらば來ん年あはむ」月並に云へるが悲し痛を病む姉

めづらしく心ゆるみぬ籠の中に鳥などあらば放つばかりに

はかなごと今日もするかな人の子をあやまらざるをとり處にて

かへり來ぬ事なき途をかへりきぬ思へば一つ犬にあひしよ

見まはせどわれを敎ふるものなきに鋭きことも云ひ散らすかな

襟にあご埋めて寢ればふうわりと夜著よりおほゆ冬のたのしさ

わけもなき夢を夜々みるおもしろさこの一事をぞ人にほこらふ

和歌

○　安井竹美

土ふめばうすらしめりて初冬の朝の心の靜かなるかな

あるきつかれわきかへる血のすみてゆくこの夕ぐれの小草のしめり

ひいやりと銀の鏡を肌にあてくれゆく枇杷の花を見つむる

○　捫垣青花

散る柳懷ろ手してゆくまへを犬が首たれあゆむゆふぐれ

日向ぼこ死にそこねたるこのからだ眼閉づればいつかうとうととする

さびしさに堪へて生きたるこの秋をたれかれ人の死にゆきしかな

○　大眉朝果

ふらふらと夜の列車に搖られつつかへるをとこの身のやるせなさ

かへり來しわれのおもわをぬすみ見ていもらひそかに何かたらふぞ

同胞のなかにまじりてまろび寢のこころはとほく君をしのべる

○　竹村天双

天地のなかにたゞよふもろ〳〵の悲み來り我にからかふ

腦痛し心の底にわだかまる物ある如し眼を閉ぢて見ぬ

心よき夕暮なりきうつゝなく語りて秋の街につれ立つ

○　内田月城

はつ秋や華奢にましろき指ならべ挨拶にくる十六の子よ

さようならとかたみに言ひてわかれける細き小路の秋をちる花

○　衣川秀美

默せるは悲しきならむ朝の汽車あまたの豚がかるく首ふる

名もしらぬ他郷（よそ）の小川の赤き砂に這ひまはる秋のしろきうたかた

○　唐澤章

袷など出してかろく着てみれば只なんとなく心笑まるゝ

地震して白き小草のはなのちる秋のまひるのかなしき插話

白色の船の上よりながめたる相模の灘に曳ける水脈

○　伊藤錄

友の行方われもさがしにゆかまほし秋風の町に灯のともりけり

泣きつかれし後の心のやはらかさぼんやりと窓に灯がつきしかな

○　高桑朝雨

秋よ秋ふとわが前に黄なる葉の落ちたるあとの靜かなる秋

そらごとを容易くかはす人々と悲しく歩む冬の夜の町

靜かなる夕並木にせまり來ぬ窓に行人みるは淋しや

○　小林芳郎

竹林海を見下す伊豆の國の小山のはてにゆれた

るはよし

風凪ぎぬ松の梢に音もなし今宵は海も玉をのべなむ

○　池山青穗

眼をとぢむ閉ぢてみゆるはたへがたしたゞ眼をあけむさびしき夜かも

眼をとぢてあればいつしかわが睫毛つめたくなりて深けし夜かな

○　柳よしを

淡紅色の大黒帽の鳥の羽をなよなよと吹く春の風かな

吾繁き悲しみの顏うつしたる水たまりさと蹴ちらしてゆく

○　佐久良草迷

つくづくと見つむれば涙うかび來ぬ夜の女のはげしお白粉

○　玉利美

はらり〳〵杵屋踊りの娘にかゝる雪よ緋裏よ紺の蛇の目よ

故障車のそげなく行くも悲しかり灯ともし前の街のたそがれ

○　高木曉星

わがなすこといち／＼君が見ゐるごと氣にかゝるかな人を戀ふとき

返しせぬ君を恨みてやけに飮むビールの味のほろにがさかな

○　白川茂吉

手をかざせばまだぬくもらぬ冷たさのなつかしさ夜の白磁の火鉢

すら／＼と萬年ペンの運ぶ間にふとかなしくもとぎれしインキ

○　井筒柾太郎

朝早く眼さめて幮の中に聞く厨の音も秋となりけり

手の相の行手を拒むものありと切つてすつるに容易きものを

○　渡邊紅影

女一人われにたよると云ふ事が秋のをはりの淋しさをます

冬の陽は笑ひもせずに我が顔をぢつと見守り物を思はす

○　宮内白涙

君とまた忍び來むなと思ひつゝ青湖岸の宿立ちにけり

筴豆の甘くにほはむふるさとの厨に遠く心ひかるる

○　和田信義

うらさみし車窓のはりにうつりゆくのべの千草のきばみたる色

ときいろの手紙の封皮思ひ出てゝコスモスの花を手折らんとしぬ

○　高添翠

ぽつねんと灯をみてあるが悲しさに吹き消してふいと出てゆくこゝろ

よりすがりよよと泣くべき人もなし空を仰げば鳶高く舞ふ

○　厨川蝶子

大理石の如く美し冷しと怨じ給ふをほゝゑみて聞く

足もとにひくく起き臥す山々の麓を走る少さき汽車よ

○　小笠原白洋

黄ばみたる乾草秋の日をうけてほのに匂へるう

ら畑かな

やう／＼にわが家の犬に馴れそめしとなりの家の女の子かな

○　叶　ちはる

いとせめて涙みせじとこのよわき心におもひ君まつ夜かな

いや青き蜜柑のしるが指先の小いさききずに泌みる夕ぐれ

○　鷲岡俊成

目閉づればかすかに秋の風渡る街を流しの三味のこゝろなし

○　前田黄昏

二十四の男つかれて砂にねる鯨の濱の海の輝き

君強ひて吾れをとがめず吾れも又君をとがめずへだてある日よ

○　丸山庄五郎

苦き薬飲むより外に苦痛てふことを知らざる我なりにしを

○　池田樟影

大根の甘き香たゞよふ南縁にお手玉の音聞きつゝ居眠る

○　田中かい子

百千々の眼のとりてよりのがれいて眼のなきくにへ行きたき心

○　茂野青峯

さかさまにつるされてある鶏のとさかの色の悲しき夕ぐれ

○　橋川流泉

桃色の吸取紙のしつとりと濡れたる如き朝のしづけさ

○　高橋紫石

コスモスの咲きみだれたる校庭に子等にまじりて鬼ごつこする

○　山下源吉

たまゆらもやすむひまなきわが生命ふとおくつきにおもひいたれる

○　往田湖村

きり／＼といためる胸をなでつゝもいとやすらかに死をおもふかな

○　石井保

夜の汽車の窓にもたれて見てとほる街あかりて

そわりなかりけれ

○　桐淵新十郎

年老いし踏切番の手に持てる白き旗にも秋は悲しき

○　木島双格

深川の米藏はよし懐かししかぼそき月にたそがるるとき

○　安江白雨

無花果のうすむらさきに夕べの日させるを見つゝ此のまゝに死にたき

○　緒田原雅夫

新築の西洋館にペンキ塗る足場の下のコスモスの花

まだみざる遠くのいとこ嫁ぐと云ふ知らせになぜか涙ながれぬ

○　南紅萍

からびにし木の葉三つ四つ迷ひくる空地の隅の冬の夕暮

○　山浦捨人

死すらむかものくるほしき亢奮につかれつかれて眼をとぢんとす

○　西野義雄

悲し子の骨を迎へて濱に立つ風と涙の冷たき初冬

○　岩倉雪城

傳へ聞く水草追うて移り住む民にさも似てまたも年越す

○　野村敏見

色白き女らの住む磯街を涙してゆくわれは悲しや

○　村上夕人

初冬の日影うれしや散りつもる櫻もみぢのうへに臥しなむ

○　越野花聲

小鳥今鳴けかし朝のあめつちはいとほがらかに紅をする

○　池尾紅花

眼のさめてあるに時計のめざましのオルゴールなればさびしまるゝ

○　山浦貫一

やゝなごめる心に酒をくまんとて涙ぐましく盃をとる

○ 石井保

雨すぎしゆふあかるみに電燈のほのにともれるほどの悲しみ

○ 入江曉花

たづね來て部屋のあちこちたふされしビール瓶など見るがかなしさ

○ 森蘇枋子

風なぎぬセコンド刻む針の音きゝつゝ味もなく吸ふ煙草

○ 武富荻花

靜かにも冬は來しかな故鄉の灰色の空の白き山脈

○ 三宅勇三郎

秋雨のそぼふる宵の街ゆけば瞳にうつる紅林檎など

○ 北里天街

屋敷町夕ざりくればちりゝんと護謨輪のベルが冷たくも澄む

○ 越野花聲

泣くにさへ絶えて久しくおもはざりし神を念ふをうら切る心

○ 宮本椎花

しつとりと夜露にぬれて歸り來し身をふくよかにつゝむ華瓦斯

○ 月岡ふみ子

我家より物運びさる人車あぢきなき日のつゞくこの頃

○ 鈴木すけみつ

大いなるうれしきことをうち忘れそのまゝあるが如き寂しさ

○ 村上泰陽

海よ嘲笑ふかわが戀人と手を把りて砂山のぼるよきしはざをば

○ 須賀米男

高原に牛追ふ人もしみ〳〵と冬てふものゝ重み知る朝

○ 村手晃陽

父の愛深きをさけていてゝゆく我れ現代の子故いたまし

○ 坂部弘吉

淋しさは人らとわれのなにげなく君の門邊を通り來しとき

應募和歌は東京小石川區原町十五番地
尾上柴舟宛の事

俳句

初空

高田蝶衣選

晏起廻ぐる池初空の雲と澄む　薫風
初空や大江を一の詣で舟　同
神狙鳴れば初空を靈鳥翔るかな　同
初空や旅窓の鳥語占問へり　雨露人
初空や鶴歳龜齡召す噂　同
初空や鳳凰堂の鳳も飛ばん　同
初空や芝生めでたき九の内　小籟
初空に一鶴のたつ埃かな　同
旭の色の眼に沁む雪やはつ御空　同
初空や宵の燃屑掃く仕丁　雲洞
初空や御炊舍の烟ほの白う　同
初空や寺鐘のこもる大銀杏　同
初空や女の君に飜意恥ぢ會はぬ　三光鳥
初空や罪に座しひそか妻訪へり　同
女夫松眼にしるき御山初空に　杜桑子

寐にもどる五位や城山初明り　同
女波男波のひた和らげり初御空　筑樓
初空や牛發うて今年芽出たかる　同
初空や供物終えて廻廊扉を押せる　哭悲哉
四門開く音に燭消せば初空や　同
初空の靑し禮衣の襟晴れて　萩泉
神降る思に仰ぐ初御空　同
滿珠干珠祭る御社初御空　明兮
初空や山巓に枯鵙潤せり　同
初空や丘寄りに澄む一點火　一箕
鶴の如し旭に初空の雲一朶　同
初空や何秘めて古塔すぐり立つ　黎白
初空に巨禽羽高をひそめけり　同
亂舞する如き山姿や初御空　銀杏座
初空やお練の波の九十九里　同
垢離をとる井戸初空に頭ふ星　芳葩
離れ松に禰宜か家や初空の潮　國郎
十字街の初御空時鐘鳴りはえて　小町草
初空や棕梠婆娑と書房燭殘る　蝸牛
四方の志蓋し初空見る心地　馬風
舟ゆらぐ初空そとろ淺黃かな　水響

灘も鳴らぬ初空や棕梠高う凪ぐ　青囀子
初空や湖ほとり森の譙樓見ゆ　草鳥
染め榮えを縫ひも劣りき初御空　更二
初空や珍ら北風(ならひ)と古老云ふ　楊杷子
初空や煕り榮えし峰の裾に住む　水鳴子
初空や鳥連鳴きにうねる波　峯水
初空や小やみの雪に森の星　九天
初空や雪の吉兆木々晴れて　石楠
初空の巨樹に灯見ゆ山羊飼へる家　蜉水
外出日和と仰ぐ嶺雲初空に　愛宕生

新題

○ 福籠(ふくごもり)　(新年)　元日は福來る時なれば萬事家より外に出す事を忌む或は箒を用ゐず或は戸を閉ぢて籠る

福岡市　福山三光馬

福籠かほど神符の揺ぐかも
福籠末座の猫の丸さかな
福籠寄食反つて着膨れる

婿鏡(むこかゞみ)　(新年)　結婚第一の正月婿の家より妻の實家に鏡餅を贈る其徑三尺に及ぶあり大なる程を悦ぶ

揉み巧者も借り來し隣婿鏡
古米飴に福入りし膨れ婿鏡

東京芝愛宕下町　久保田芳蘢

○ 觀世音巡る(くわんぜおんめぐる)　(新年)　正月十八日に行ふ事にして村の人々各飼馬にまたがり土地の唄など聲を揃へて吟じつゝ輪をなして觀音堂をめぐる事なりとか其様いと愉快なりとぞ埼玉縣人の言へるなり

夕となれば唄寂ぶ觀音堂めぐり

砂蠶浮く(ごかいうく)　(春)　春の始めに於ける辛汐數來の爲め海底の砂蠶悉く浮き上るといふ

島暖かに祭日和を砂蠶浮く
砂蠶浮く日か群鳥の鳴き渡る
舟子衆が廓見に砂蠶浮くを來て
船の喧嘩治まりて砂蠶浮く凪よ
よどむ江の砂蠶も浮くや流れ海苔

車下駄(くるまげた)　(冬)　氷りたる街などを小供等の滑るに用ふる遊戯下駄なり

○

車下駄氷りたる石白き朝

鹿児島市　古川水響

義士輪講(ぎしりんかう)　(冬)　例年十二月十三日宵より十四日曉まで舊藩士の青少年一團となりて四十七士傳の輪講を行ふ場處は夜學舍靑年會場にして輪講の際は羽織袴にて端座何ら怠慢の行爲を許さず栗なつと干餅せんべい落花生等を饗せらる酒類一切を禁ず

栗なつと啜る洟すゝる義士輪講

寒を叱す聲戰くや義士輪講

立木打（冬）　長一丈二尺許差廻り一尺位の松杉樫等の硬き材を一本之を土中に眞直に五六尺埋め堅固に地ならしゝて後三尺八寸許の長棒にて左右より撃ち下ろす而して之に一定の型ありて亂打を許さず之を立木打といふ寒に入りてより之を行ひ青少年心身の鍛錬に資す

立木打針さす寒ンを汗あらん

鬼火（新年）　正月三ヶ日濟めば少年等各戸に飾れる七五三繩門松などを貰ひ受け野邊河畔等に山の如く築上げ火を放つ炎々たる光景は新春勝頭の壯觀なり薩摩芋餅などを燒いて曉の空腹を滿し歸る

曉を鬼火焚いて星拂ひしと見し

○

三重縣桑名町　鈴木青嚀子

若網（冬）　新曆十一月初旬よりは火鉢が戀しうなる頃になると魚類は肉が締つて堅くなる此肉の締つた頃を漁師等は苦網と云ふ法を以て漁るのであるそれは重に夜の業であるが晝もせぬ事はない、二つの舟の一は只網の端を引張つて漕ぎ離れてゆき他の一舟は二三町もある重り付の網を只延ばすのみである、そして一ぱい延びた頃に舟各同一方向に漕ぎゆく、そして各舟じりじり網を手繰つては網目に懸りた魚を捕るのである。魚は肉の締る霜のふる頃よりは只網目に頭をつき込んだ儘苦んで居る苦網といふのも之から來たのである。又此舟は各自桶を水面に浮けて其中に昔の金屬製の鈴と貝とを吊して浪の搖るゝがまゝにチンチコ、チンチコと音をさせて居るのである、其音が皆同じでなく幾分か異つて居る夫れに依つて彼等は自分の連れが何處に居るか音繁き紛しき中にもそれを知り得るのである木曾河の河口や揖斐河の河口等には毎年盛にやつて居る冬の月澄める堤に上つて時々見る事だが廣々した水面の靄の中にチンチコチンチコの音もいゝ物で寂れた冬河を彩る樣だ之に依つて捕れる魚は網の日によつて異つて居るが重にイナ、ボラの類が多い然し餘り寒くなつては魚が皆海へ下つて仕舞ふので捕れなくなる先づ一ヶ月間許が好時期だ俗に此地方ではチンチコの音が蟲の啼く音によく似て居るからチンチロ（蟲の名）ともいふ

月に搖るゝ苦網の浮標か森の濃さ

雨しとゞ耳澄みぬ苦網見來し宿

渡し場の灯か淋し苦網雨となり

返り芽（冬）　小春の頃時ならぬ若芽の萌ゆる事がある返り花に對して之を返り芽と云ひたい

○

上總木更津町　地曳國郎

川浸（冬）　十二月一日此日船家業の者の祝日にして汁粉を製して親族顧客に分配す上總木更津在の慣習（選者曰、此れは乙子の朔日、川濱餅等として歳事記に見ゆるも何參考として此に揭ぐ）

川浸りの休む家毎網干凪

○

富山市梅澤町　篠原句瑠璃

黒作（冬）　越中名產の一にして烏賊の臍汁の所を細作りにして鹽漬となしたる物滑川魚津地方にて盛に作る卑下なるに似た

れ共季題として當地俳人等の頭腦を搾らすもの一種云ふべからざる風味ありて佳し

宿は黒作に塗り壁も干ず鳴く千鳥

三猿ノ銘日毎黒作召す師かな

課題（寒梅（十五句）冬雜吟（十五句限）……一月五日〆切
（竹秋（十五句）淡雪（十五句限）……二月五日〆切

注意（各題別紙。淡路國假屋在高田蝶衣宛
（用紙半紙。中央公論句稿と表記の事

評論

巴爾幹の難局

一

巴爾幹戰爭の勝敗、殆んど決定し、土耳其對勃牙利、塞爾比、希臘、黒山四國の講和會議、正さに倫敦に於て進行中なり、近來の地圖、遂に或は一大變改を見ざるを得ざらん乎、然かも聯合軍の勝利は偶然にあらず、勃牙利軍附タイムス通信員は語つて曰く

勃牙利人の義勇公に奉ずる至誠は驚く可きものあり彼等は唯た國家の大事あるを知る、私人の利害あるを知らず、本國に殘れる人民は戰地に近親、友人を有せざるものなきに係らず、其消息絶えたるを怨むもの無く、若くは消息を得んと欲するものも無し

同記者は又た勃國民が擧國一致、戰爭に從ひ、田園空虚となり、市驛虚空とあり、商店の半數以上閉鎖せる狀を說き、國民絕て悔ゆるの色無く、專一に中世紀時代領有せるマセドニヤの回復を熱望せるを傳へたりき、勃國民然り、希塞黑三國民も亦た然り、之を以て土耳其國民が大事に望んで黨爭を捨てず、內訌紛々、國運を誤らんとするに比すれば其差幾許ぞや。

斯くの如くにして土耳其の戰敗相繼ぎ、講和談判速かに來る、亦た止むを得ざる也

今讀者の參考の爲め下に巴爾幹戰爭史を略記せん

九月三十日勃塞希黑四國動員す△十月一日土耳其動員す△同六日聯合軍集中始まる△同七日墺露二國聯合諸國に通牒を送り之が慰撫を試む△同八日黑山（モンテネグロ）國宣戰布告をなす△同十三日希、勃、塞三國土耳其に最後通牒を送る△同十四日黑山軍ツジを占領す△同十七日土耳其勃牙利塞爾比二國に對し宣戰布告をなし二國之に應ず希臘又宣戰す△十八日マスタファパシャ（勃牙利より君斯丹丁堡に下る要路）勃牙利軍に占領せらる△同二十日。勃牙利軍アドリアノープル要塞に向け進軍す△同二十二日塞軍プリスチナを占領す△二十四日キルクキリセの役に土軍敗北す、塞軍クマノウオを占領す△二十六日塞軍その昔年の都たりしウスリブを占領す△二十九日スレシヤ州ルレブルガス（君府方面）の大戰役始まる△同三十一日土耳軍大敗し形勢決す△十一月四日土軍列國に對し居中調停を乞ふ△同八日希臘軍サロニカを占領す△同十三日土耳其休戰運動に着手す△十八日モナスチール陷落す△二十日戰爭中止△十二月四日休戰條約調印△十三日倫敦講和會議始まる

二

講和談判已に開始す、大體に於て土耳其の屈服を見るは論無しと雖も、其前路や坦々平道の如くなりと言ふ可からず、況んや交戰國以外列國關係の複雜を極むるものあるに於てをや、

短文到底委曲の情を盡す能はざるが故に、玆には唯だ巴爾幹處分に關する重要の點二三を指摘し置くに止めんとす、

第一の問題は土耳其が果して君斯丹丁堡府及附近の領有のみを以て滿足し、マセドニヤ、アルバニヤ及びスレシヤの大部の放棄を承諾すべき乎是也、今や小亞細亞の軍隊續々君斯丹丁堡に入り、兵勢稍振ふ、必らずやアドリアノープル附近始めスレシヤ州を固守せずんば止まざる可し、左ればとて土耳其の財政は償金を以て領地に代ゆるを許し難きの境に在り、是れ講和談判の難關たらん乎、然かも土耳其遂に屈服すと假定せよ、猶ほ三箇の重要問題あり、他無し塞爾比のアドリアチック海港獲得問題、羅馬尼亞報償問題、及び希臘對勃牙利衝突問題是也、

（一）塞爾比は四面海無きの邦國にして爲めに經濟的

發展を阻害せられしこと幾許なるを知らず、左れば今日の好機に乘しアルバニアに出で、一海港を占めんとするは自然なり、而かも之には墺太利、伊太利の激烈なる反對あるを奈何せん（墺國の反對は塞爾比若しアルバニヤに出ては自己の南下の前路を遮斷すと言ふ理由に在り、又伊太利はアルバニヤの對岸にて經濟的商業的關係深く自ら野心を有するに依る）、左らば轉つて東に向ひエジヤン海に出口を求めんか、是亦從來聯合し來れる勃牙利との軋轢を惹起する恐あるを奈何せん、然らば依然海無き國たるに滿足せん乎、塞爾比國民は遂に將來無き國民とならざるを得ざる可し、從つて塞爾比が如何なる決意を以て本問題に處するやは最も注目を値せずんばあらざる也

（二）羅馬尼亞は面積五萬方哩、人口六百餘萬、勃牙利と勢力伯仲す、然るに勃牙利にして戰勝の勢に依り多大の領土擴張をなさん乎、均勢一變、自ら劣位に落つるの憂ひあり、依つて同國先きに獨墺兩國の聲援を得て勃國に向け局外中立を守れるゝ代價とし領土的報償を要求せり、其部分は勃牙利の東北なるシリストリより黑海岸ヴアルナ港に達する地方なりと言ふ、知らず勃牙利は局外中立の代價として之丈けの割讓を敢てす可き乎、是必らずや一大難問たらむ

（三）希臘と勃牙利とは由來犬猿啻ならざりし邦國也最初マセドニヤは希臘人の勢力偉大なりしも、十九世紀後半に至り希臘人は郡村に於て勃牙利農民との競爭に耐えず、都市に驅逐せられ、今や勃牙利人の勢力に代るに至れり、今回の戰役、相一致せりと雖も、利害必らずしも一ならず、マセドニヤ分割問題起らん乎、二國は必らず分割爭ひを敢てせん、論より證據十一月八日希臘軍已にサロニカに入れるに係らず、二日の後勃牙利軍亦た同市に入り、勃帝に對し「サロニヤ占領」を奏上し、互ひに其支配を爭ひたるにあらざる乎、

以上は巴爾幹處分に關して注目する難問題を示せるのみ、其他露國がダーダルス海峽開放を迫り、墺國が南下鐵道布設權を要求す可きは言を俟たざる所、從つて講和會議に次ぎて列國會議の開催を見、茲に列國の敏腕なる外交家は其の妙手を現はす可きを疑はず、遮莫、之等は皆な我國民にとりて一の對岸火災也、些の懸念無く、唯だ面白味のみを以て之を注目し得るもの洵に日本人の一大幸運と言はざるべからず、

三國同盟繼續

十二月上旬、獨墺伊三國同盟條約の再締成る、一八八二年同條約始めて成りて以來、屢々同盟薄弱の聲を耳にしたるに係らず、又々今後十二箇年繼續に決す、是果して何故ぞや、

墺獨兩國の利害一致は萬人の論無き所、然かも獨り伊太利に至つては、通商上の利益、墺國と相背馳す、况んや「同盟國內の海軍競爭」の語に依りて證明せらるゝ如く伊國海軍擴張は常に墺國を目標とし、アドリヤチック海は則ち兩海軍の競爭場なるに於てをや、又况んや昔年伊國を獨墺に奔らしめたる所以の排佛感情——佛蘭のチユニス占領の爲めに生ぜるもの——は今や消えて跡無く、貿易的關係の如き寧ろ親佛を利益とするものあるに於てをや、

而して猶同盟繼續を見たるものは何ぞや、曰く差當り之以上の良策を發見せざりしが爲めならんのみ、蓋し伊國分離の氣運はありながら、機會は無かりき、然らば則ち『露國の輿論が同盟繼續を恐れず、却て其弱めるを認む』(露都電報)と言ふもの、亦た怪むに足らざる也、

西班牙內閣

十一月十二日西班牙の名首相カナレヤス氏、兇手に殪れ、一時行惱みたる新內閣組織は、自由黨名士ロマノナ卿を迎へて解決するを得き、

然かも新首相は果して能く圓滑に國政を按排するを得べき乎、頗る疑はし、何ぞや卿には共和黨の激烈なる反對あれば也、抑も方今西班牙の政黨中、保守、自由兩黨は活動無く精力無く、獨り有爲の風あり年々勢力を增加するは共和黨也、此故に一九〇九年十月モーラ氏の保守黨內閣仆れ、モーレット氏の自由黨內閣成るや、モ氏は共和黨と握手し、一九一〇年二月カナレヤス內閣成るや、カ氏も亦た前任者の懷柔策を繼續せりき、帝政國の內閣として共和黨と親む、何等の苦痛ぞや、然かも必要の前には叩頭せざるを得ざりしを奈何、

新首相は先きにモオレット氏が共和黨に接近せるを攻擊して其內閣を破壞したる張本人、固より共和黨と和し得可きにあらず、知らず如何なる妙言を運らして難局に處せんとする乎、

中米諸國の悲運

憐む可きは弱少なる中米の諸邦なるかな、昨年五月當ハナマ大統領アロセメナ氏長嘆して曰く我等は遂に自ら救ふ能はざる乎と、最近當選せるハナマ新大統領ポルラス氏も亦た就職演説に於て痛慨して曰く

我國に於て最も憂ふ可きは民主政治に不適當なるの一點に在り、過去二回の總選擧に於て我等は米國の監督を求めざる能はざりき、然かも米國必らずしも永遠に好意のみを有すと言ふことを得んや、若し米國の好意失はるゝとき來らば、そは吾人が理想に副はず、自治に不適當なるを證せるの時たる可き也

米國の併存を疑ふの意、自ら昭々たるにあらずや、又た曾つて米國の助勢に依りニカラグア國大統領となりたるフアン、エストラダ氏は宣明して曰く

中米諸國は米國の併呑政策を好まず、殊に國土併呑の野心あるを疑ふ

是何んぞ米國がニカラグアに三千萬圓を貸附け、以て先きにサンドミンゴ國に行へる財政的保護邦案を之に及ぼさんとせるを非難せるものにあらざらんや、而して二國マナダアの一新聞の如きは、數年來日本との同盟に依りて米國の南下を擊退す可しと主張せるにあらずや、

弱邦が自ら存立を危ぶむの煩悶に人をして斷腸の思ひに堪えざらしむ、然かも幸ひに米國大統領選擧、非帝國主義者たる民主黨の勝利に歸せり、ウヰルソン氏恐らくはタフト執政の膨脹政策を放棄す可き乎、是れ唯ハナマ、ニカラグア諸邦民に殘れる一縷の望のみ

米國共和黨調停

米國共和黨內進步派の代表者ハドレー（ミズリー州知事）カムミインス（上院議員）ケンヨン（同上）等はデモイン市に會合し、共和黨內の一致を謀り、黨內保守、進步兩派を握手せしめ、以て四年後大統領選擧に對する準備を定むるに決す、蓋し同黨として之無かる可かざる運動也

然かもローズエルト一派は巳に分離して進步黨を組織せり、覆水盆に返らず、落花枝に上らず、從つて三黨分立の勢に至つては、最早や如何ともする能はざる可き也、

加奈陀の排日計畫

加奈陀に於て一排日計畫起れり、曰く英領コムビア

檢事總長ボーサー氏は水産大臣ヘードゼン氏と協議の結果、日本漁民を排斥することに決定し、從來毎年日英民の區別無く平等に下附し居たる漁業免許を、今後は第一に加奈陀白人即ち英人に下附し、殘餘ある場合之を日本人に下附することと變更す可しと、

是れフレサ河地方日本漁夫三千の職業を奪はんとするものにあらずや、而して霞ヶ關の高襟者流は平然として曰ふ、我が關知すべき所にあらずと

新刊批評

▲大思想家の人生觀

安倍能成譯
東亞堂發行

獨逸エナ大學教授ルドルフ・オイケン博士は現代思想界の流行兒にして又大立物なり。此書は其著「大思想家の人生觀」一名「プラトーより現代に至る人生問題の發展史」を飜譯したるものにして、其主とする所固より博士獨創の哲理を說述するよりも、前哲の思想を闡明するにあれども、敍述の間に著者其人の意見を窺ふこと能はざるにあらず。吾人は菊版八百頁に近き此大著を飜譯したる安倍文學士の努力を多とし、併せて之を一般讀書界に推奬するに吝ならざるなり。(定價金參圓五十錢)

▲青年と修養

増田義一著
實業之日本社發行

實業之日本社長増田義一氏は其常識の發達せる點に於て當世稀に觀るの人物にして、氏がよく世事の萬般に亘つて、常識に基ける處世法を說述する所確かに傾聽に値するものあり。特に氏が青年學生、就中苦學生に向つて注ぐ同情の念は頗る濃やかなるものあり、手を執つて引くやうなる教訓振り、幾多青年を益するものあるべきを信ず(定價一圓五十錢)

▲佛教辭林

藤井宣正著
島地大等補
明治書院發行

國書を繙くに當つて、其意義の深遠にして其解釋の困難なる佛語に遭遇しては、深く其道に入れる專門家にあらざる限り、其通讀を妨げらるゝこと蓋し尠少ならざるべし。藤井宣正氏は島地大等師の義兄なり。今より十五年前氏は此困難を救はん爲めに、數十種の國文書を涉獵して廣く佛語を選蒐し、又大智度論法華新註等八種佛典の索引をも作り、只管此書の編纂を急ぎしも、不幸歐州遊學の途に客死するに及んで其業亦俱に今日まで中絶せらるゝの已むなきに至れり。今大等師其志を繼承し南條文雄師の校閲を經て遂に發行するの運びに至るれもの即本書となす。就いて見るに國書中に散見する佛語は悉く之を網羅し、一語の註解と共に其語原用途を審かにし、佛書の解題、佛蹟寺院の略叙、佛教界偉人の傳記等に加ふるに數葉の珍畫を挿入して殆ど千頁の大卷を爲せり。今の世のブックメーカーとは自ら選を異にし、篤學博識の士にあらずんば能はざる所、世を稗益する所の多きは玆に贅言を要せざるべし。一般宗教家は勿論苟も讀書に趣味を有するものは一本を必ず座右に備ふべきものとす。(定價四圓五十錢、特價三圓六十錢)

▲得意の人、失意の人

鵜崎鷺城著
東亞堂發行

鵜崎鷺城學人は、今の人物評論家中に於て最も異彩ある人物といふべく、終始民黨的見地よりして朝野の政治家を縱横談論する所、筆鋒犀利。

攻撃せられたる對手をして殆んど完膚なからしむるものあり。此篇に收むる所「選擧案に敗れし原内相」「寺内正毅論」「上原陸相論」以下廿餘篇、皆氏得意の評論にして、中にも皮肉や痛罵を浴せかけたるものに最も著者の面目を見得る心地す。(定價六十錢)

▲吾人は何ぞ基督教徒なり得る乎　額賀鹿之助譯　警醒社書店發行

オイケン博士が基督教に對する態度を表白したるものにして、博士が老來意氣益壯にして且つ其所信に忠なること嘆賞に値す。基督教徒には勿論一般思想界を益すること多し。(定價七十錢)

▲和譯山陽書後並題跋　自治館編輯局譯補　自治館發行

「日本外史」「日本政記」は固より山陽の二大著にして山陽の文名の據つて來る所此二大著にあることも固より論なきも、彼はいはゞ他所行きの文體にして、普通着の儘の山陽は、却て其斷簡零墨ー殊に其書簡及び書後並に題跋等にあらはる。此篇二百に近き書後並びに題跋を蒐めて和譯したるものにして、經史百家の書及び書畫等に對する彼の識見を最もよく知悉するに足れり。(定價九十錢)

▲現代戰爭論　安部磯雄譯　博文館發行

英國ノルマン・エンヂルの原著にして、主として國際政治經濟の近世的概念よりして、戰爭の害あつて、利なきを說述せるもの。假令戰爭に勝つも尙且つ不利なるの事實を例證したる所、識見甚だ見るべきものあり。此書が世界各國に飜譯せられ、戰爭に對する謬見を一掃すべしなど稱せらるゝも故なきにあらず。江湖の一讀を奬む。(定價八十五錢)

▲大正二年修養日記　加藤咄堂著　東亞堂發行

咄堂氏は本を作るに巧みなる人也。此日記も亦頗る咄堂式にして氣が利きたり。(定價中形五十錢)

▲自由劇場　左團次、薰共編　自由劇場事務所發行

主として自由劇場の事業を紀念する爲めに編せられたるものなれども、劇界の起れる此一新運動の記錄並びに之に對する諸名家の論評を見れば、從つて我劇壇の新氣運と將來とを推察するに難からざる心地す。(定價六十錢)

▲此筆二十年　鵜崎鷺城著　新聲社發行

「陸の海軍、丘の陸軍」以來俄然として讀書界の流行兒となれる鷺城學人が、操觚界に從遊せる廿年間の文章を拾集せるものにして、人物評論、戰記紀行、文藝漫筆等著者の趣味の比較的多方面なるを窺ふに足るべし。(定價一圓三十錢)

▲コサツク　矢口達譯　新陽堂發行

「コサツクス」は杜翁の傑作の一にして、その淸新にして暢達なる筆路は、晩年博大圓熟の描寫に對しても、確かに一特色を持するを疑はず、コーカサスの崇高なる自然を背景として、眞摯なる主人公の人生問題について煩悶する光景は、青年の胸に永く忘るべからざる印象を殘すの力あり。矢口氏の譯筆亦暢達也(定價金一圓)

▲土地增價稅論　神戸正雄著　京都法學會發行

法律學經濟學研究叢書第十冊として發行せられたるものにして、神戸

諸學博士の著也。土地增價稅論が、財政政策上又た社會政策上頗る重要の地位を占むべきは世人の熟知する所なるが、著者は又生產政策上にも大關係ありとなし、此等諸種の點よりして、此說の起源より現今に至るまでの諸學者の說を最も公平に叙述、批判し、且つ著者の穩健なる意見を發表せり。蓋し有益の書也（定價一圓廿錢）

▲自治制の活用と人　水野錬太郎述　實業之日本社發行

「地方自治の興新を圖るは國民の總てが能く自治の本義を了得して共同一致の實を擧げ當局者亦能く制度の運用に習熟し情弊を去り私心を棄て至誠以て公事に竭すに在り」「地方自治の開發は制度の末に在らずして之を活用するの人に存す」るの主旨を說述したるもの也。著者水野博士は內務省に奉職すること前後廿年、現に地方局長の職にあり、內務省の活字引の名あり。地方自治に關する書籍のオーソリチーたりと稱するも過賞にあらざる也（定價金一圓）

▲歌文新話　金子薰園著　敬成社發行

歌壇一方の旗頭たる薰園氏の著にして歌文に志ある人の一讀に値すべし（定價七十錢）

▲內觀的研究　玉利喜造著　實業之日本社發行

著者玉利農學博士が自身の病氣に罹れるを因緣として、病理の研究に從事し、數年間苦心の結果、病理學上一大發見をなしたりとて、之を公けにせるものにして、吾人體內には、邪氣靈氣の二氣の併存せる事實を明言し、病氣は要するに邪氣の發動にして、靈氣の涵養によつて之を全治し得べきを說述したるもの也。かゝる學說は果して前人未發の新發見なるか、又學術上充分の根據あるものなるか、吾人は專門醫學界の批判を聞かんことを希ふ。（定價八十錢）

▲現代的基督教　青木律彥譯　警醒社發行

エーフルスの原著を譯したるもの也。別に基督教の教義を現化的に引延したるにあらず。基督教は何時の世いかなる時にも時代と抵觸するものにあらずとて也。宗教界の出版盛々たる今日一般の歡迎を買ふべし（定價壹圓三十錢）

▲山鹿素行　碧瑠璃園著　東亞堂發行

乃木大將の死と共に彼が敎を受けたる山鹿素行は、何人も之を知らんと欲するなるべし。此書素行の一代を叙して面白し（定價八拾錢）

▲一葉歌集　樋口夏子著　博文館發行

一代の才媛樋口一葉女史の歌集也。時代の影に囚はれてその才想を充分發揮し得ざる憾みあれど、倘しかすがに凡庸作家の作とは自ら其選を異にす。小說家としての一葉、家庭の人としての一葉を知りたる者は此書を讀んで歌人としての一葉を知るべし（定價四十五錢）

▲修靈法　長谷川哲治講述　旭光社發行

例の流行の靜座法呼吸法の類也。方法よりは理論に重きをおき靈的心的力の偉大なる物的現象を支配し得ることを述べたり（定價六十錢）

▲現代八面鋒　久津見蕨村著　丙午出版社發行

現代社會の缺陷が著者の銳利なる神經に觸れて憤怒の聲を發す。是れ本書也。辛辣深刻、本書幸に禁止の厄に遭はず。讀んで痛快を覺ゆ。（定價八十錢）

▲面影　青山霞村著　梅竹書屋發行

名利の巷から脫れて草深き田舍に詩人らしき生活を送る人の勞作であるらしい。優しい情調が流してゐる（定價五十錢）

心中未遂

正宗白鳥

（一）

いよ〳〵今日となつた。

おすゑは最早うつかりしてはゐられない。昨日までは、何か急にいゝ事が湧いて來て、奉公話も自然立消えになりはしないかと當てにして、神や佛を一心に念じてゐたのであるが、それも空頼みになつてしまつた。いよ〳〵今日からは、子供の顏も見ないで日を送らなければならぬ。知らぬ人の間に交つて馴れない勤めをしなければならぬ。

おすゑは辨當を抱いて勸工場へ出掛けて行く妹を見送つてから、暫く火鉢の側に首垂れて鬱いてゐた。平生なら容易に行火を離れない母親も、今朝は早く起きて、何をするともなく、一室きりの家を彼方此方覺り廻つてゐる。

壁一重の隣りの家で子供の暴れてゐるのが、床に響いてゐる。

「長島町へは一寸顔出しゝといた方がいゝだらう。默つてゐて、後で知れると、彼處でも氣を惡くするだらうから」と、母親は勸めたが、おすゑは、

「私、もう彼處へは行きたくないよ」と、角立つた言葉で答へた。

「でも、隨分お世話になつたんだから‥‥」

おすゑは母親の言葉を煩がつて、返事をしないでゐた。長島町の旦那の世話でミシンの術を習つたのだけれど、今から思ふと、それが身の仇になつてゐるかも知れない、苦勞してあんな事を覺えなければよかつた。と、おすゑは今その旦那に對して恩を感ずるよりも、むしろ忌々しく思つた。「身に一つ藝があれば、一生喰外れはないものだと、旦那はよく云ひ〳〵してゐたけれど、當てになりやしない。いくら男に負けねやうに稼いだつて、こんな羽目になつちまつて」

おすゑはこれまでの自分の苦勞を顧みると、自分で自分が傷はしかつた。世間にこれほど苦勞した女が外にあらうかと思はれた。夫婦共稼ぎで身代を仕上げるつもりで、身粧も關はなければ、碌に物見遊山に行つたこともなかつた。寒くつても暑くつても、洋館へ生地を取りに行つたり、筒袖で夜業をしたりしてゐた。‥‥それが何になることか、夫が辨天町の女狐に誑かされに行く資本になつたばかり。喰べるものも喰べないで買つたミシンの機械さへ、何時の間にか無くされて。‥‥

おすゑは一年この方姿も見せない夫の事を思出してゐると、神經が高ぶつて、心が燃立つやうだつた。

て、ふと今日の場合を忘れて、恐しい夢を見ながら、齒軋りしてゐたが、その中隣の家の時計が九時か十時かを打つたので、夢から醒めたやうに周圍を見た。

「もう叔母さんが迎ひに來る時分ぢやないかね」と、母親が云つたが、その言葉はおすゑの胸には釘を打たれるやうに響いた。

「もう浮かりしてられない」と、おすゑは身を起して、「ぢや、私お湯に入つて來るよ」と、大人しく母親に告げた。

見ると、よく眠つてゐると思つてゐた朝吉は、パッチリ目を開けてゐる。「お母さん、朝は先つきから起きてるんぢやないの」と不平らしく云ひながら、急いで抱起して、乳を與へた。

そして「お前もお湯に連れてて上げやうね」と脊負うて出た。朝吉はウヽ／＼と喉を鳴らしながら、素直に母の脊に縋付いて、大きな澄んだ目を見張つてゐた。その目もその口も可愛らしくて、譯を知らぬ人には、人形のやうだと褒められることもあるが、さう云はれるたびに、おすゑは穴へでも這入りたいやうな氣になつた。

朝吉は人形のやうに魂がないのである。口一つ利けないのである。去年の春腦膜炎で死掛つたのを、注射の力でやう／＼命拾ひをしたものゝ、この先五六年の壽命も六ヶ敷いと、醫者から無慈悲な申渡しをされてゐる。どうせ人並になれぬ身體なら、强いて長生をさせたいとも望まない。たとひ五年が三年に縮まらうとも、それは諦めてゐる。殘惜しいとは思ひはしない。だけど、どうせ短い命なら、息のあ

る間は見窄らしい服裝をさせたくない。粗末な者を食べさせたくない。そして、母の懷で靜かに息を引取らるやうにしたいものだ。明日から預つて吳れる筈の里親が、いくら親切であらうとも、子煩惱であらうとも、他人の側で死なせたくはない。……

おすゑはさう思詰めると、いつそこのまゝ朝吉を連れて、人の氣づかぬ遠い所へ逃げて行つて、淵へでも海へでも飛込みたいやうな氣になつた。うか〳〵湯屋の前を通過ぎて、一二丁當てもなく步いた。そして、去年の夏の晚、ふとした事から變な氣になつて、子供を脊負つて、涙に萎れながら海岸通りを行きつ戾りつしてゐる中、巡査に見咎められ、驚いて家へ驅戾つたことなど思出してゐた。

ふと、目の前に始終病兒の藥を買ひに行く藥屋の看板が見えたので、おすゑは思はず足を留めた。何だか其處を通つて店の者に見られるのが厭だつた。それに、薄着の肌と素足とに觸れる風が急に寒く感ぜられて、頻りに嚏が出さうになつた。首を捻向けると、思ひなしか、朝吉の顏も寒さに慄えてゐるやうであつた。

と見ると、おすゑは急いで後戾りして湯屋へ這入つた。知人も來てゐないし、子供連れも來てゐないのに安心して、ゆる〳〵二人の身體を洗つた。朝吉が兩手て湯桶を叩きながら喉を鳴らしてゐる間に、おすゑは取留めのない考へに耽りながらも、身體中殘る隈なく磨上げた。頰は次第に紅味がさして、胸にも手にも暖かい血がめぐつた。鏡に映つた姿は自分の影ではないやうに見えた。

ふと、入口から母親が顏を出した。「先つきから叔母さんが來て待つてるよ。此處にゐるんならいゝけ

ど、外へ廻つてるんぢやないかと思つて」と身體に似合はぬ大きな聲を出した。何時にない長湯を怪んて迎へに來たのだつた。

「さう?。直ぐ歸るよ」

おすゑは歸つて叔母の顏を見るまでに、よく自分の量見を極めて置かねばならぬと思つたが、さて異つた考へも浮ばなかつた。只胸がわく〳〵するばかりだつた。

歸ると、口數の多い陽氣な叔母に急立てられて、化粧をして衣服を着替えた。里親の來るのを待つてとさへ許されないので、朝吉を母に渡して、後髮を牽れるやうな思ひをして汽車に乘つた。

「用事があつたら、何時でも私の家へ電話をお掛けな。今度のことは私が引受けたのだから、決して心配おしてないよ。この先決してお前さんを困らせるやうなことはしないんさ」と云つて、叔母は茶屋奉公の心得などを話した。

が、おすゑは身を入れて聞いてはゐなかつた。大森まで連れて行かれて、梅の花や南天の實で白く赤く色取られた繪のやうな高樓を仰いて「彼處だよ」と叔母に敎へられた時は、「まあ奇麗な家だわね」と、思はず云つて、夢見るやうにうつとりした。あんな家で自分のやうな者が勤まるだらうかと氣遅れもした。

（二）

おちしておすゑは、自分では確と覺悟をしたとも覺えぬのに、何時の間にか梅屋の女中の一人となつ

た。日當りの惡い陰氣臭い賑町の路次裏で、手足を黑くして根限り稼いでゐた先日までの事を思ふと、自分でも不思議であつた。見る者聞く者が珍らしくて、此處にゐる人や遊びに來る人の心の中が分らなかつた。皆な苦勞がなくつて、お金の自由になるのが不思議に思はれた。そして、おすゑはお祝儀を頂くたびに極りの惡い思ひをした。

廊下に立つと、遙かに海の方まで廣々と見下されて、煙を曳いて見えつ隱れつする汽車の響が强く聞えた。あの汽車に乘りさへすれば、間もなく濱へ歸れるけれどゝ、おすゑは屢々汽車の行衛を心で追つて、煙や音が消えると、淋しい思ひをしながら、騷々しい周圍を顧みた。庭の枝に釣した風鈴は微かに動いてゐて、快い匂ひは鼻を掠めた。美しい顏の男がしどけなく醉つて、藝者の肩に縋つて、笑話をしながら向ひの廊下を通つた。咲盛つた梅の花を隔てゝその樣を見てゐると、さながら芝居を見てゐるやうだつた。

「おすゑどん、新二號でお呼びですよ」と、下の廊下から、丸顏の女中が仰向いて、金切聲で叫んだので、おすゑはやうやく、我れに歸つた。小聲で返事をしてバタ〳〵と駈付けて、小高い新二號の障子を細めに開けて、御用を伺つた。

無骨な顏した若い男と、年增女と差向ひて澄してゐたが、女の方が輕く首を曲げて、「ちよいと橫になりますから、お床を伸べて下さいな」と、事もなげに云つた。

が、おすゑはその意を呑込みかねて、「お床を伸べるので御座いますか」と問返して、もじ〳〵してゐ

た。

「さうですよ」と、女は流し目に見て、険しい調子で簡単に命令した。

おすゑは思はず顔を赤らめた。そして、極りの悪い思ひをして、客から顔を背けて、恐る〳〵寝床を敷いて障子を締めた。逃けるやうに階段を下りて、何處へ行くともなく廊下を傳つてゐると、長逗留をしてゐた二人連れの支那人の一人を今送出して來たおのぶが、探遊ひさせ酒臭い息を苦しさうに吐きながら、「貴女に電話よ。牛込からだつて。早く行つてらしやい」と促した。

電話は牛込のさのやといふ待合にゐる叔母からであつた。自分の家に變事でもあつたのかと氣を廻して、胸騒ぎをしながら急いで聞いたが、叔母の聲とは思はれぬやうな聲で、不明瞭な話が繰返された。幾度聞直してもよく分らないので、側にゐた明聲に代つて聞いて貰ふと、その用向は何でもなかつた。……明日叔母の家のお客様が二三人連れで遊びに行くから、いゝ座敷へ御案内して大切に扱つてお呉れ。と云つて、「よく辛抱おしよ」と附足したさうである。

「承知しました」と、おすゑは自分で電話口へ出て答へて、「叔母さんもどうぞ來て下さいな」と懐かしさうに云つたが、その答へは聞えなくて電話は切れてしまつた。

明聲にはそれ〳〵懇意な客があるらしいのに、おすゑにはまだ一人として顔馴染がないのだから、叔母の話のお客でも自分の名を差して來るのが悦しいやうだつた。で、帳場へ通して、いゝ座敷を空けて置くことを頼んだ。

一つ用事が濟んでも、次の勤めには氣が付かないので、やゝもすれば廊下に立つて、ぼんやり何處ともなく見詰めてゐた。そして、朋輩に呼立てられては、俄かに慌て出した。まだ番號さへ覺え切れない座敷へ迷ひ〳〵顏出しては、不器用なお相手して、自分の持場を五六組を大方送出してしまう頃には、ランプが部屋々々に配られて、花の色も見分けがたくなつた。客を見送つて行く提灯が、後の薄暗い丘の方へ小さく動いた。晝間の混雜も大風の跡のやうに靜まつて、今朝から酒びたりて茶れてゐた梅の間の客も、ばた〳〵醉倒れて、鼾ばかりが洩れてゐる。

最初からひつそりしてゐて、あまり女中の手を煩はさなかつた新二號の二人連れも、そろ〳〵歸仕度をした。おすゑは賑かな座敷よりも、靜かなこの二人に一層心を惹かれて、近くの廊下を通る折には、わざと足音を忍ばせて、耳を澄ましてゐたのだつたが、今前後して廊下へ出て來る二人の樣子を、薄暗い蔭から見ぬ振りて見詰めてゐると、女の顏は初め見た時よりも、もつと醜くて厭味に思はれた。そして、男の顏は凛々しくて賴もしさうに見えて、今日此處へ來たどの客よりも、自分の心に適つたやうに思はれた。て、女の方が遠慮氣もなくて、何だか橫柄らしいのが小面憎かつたが、それよりも、何故この男がこんな厭な年上の女なんぞと一緒に來たのかと、歯掻くなつた。この男になら、どんないゝ女だつて思付くだらうに、何處がよくつて、この女なんぞに……と、おすゑはこれまでにない多額の祝儀を女の手から貰つて、石段の下まで見送つた後も、車の音の消えるまで、その方へ心を留めてゐた。

「あのお客樣は何てせう、變だわね」と、廊下の柱に凭れて小聲て何か唄ひながら醉ひを醒ましてゐる

おのぶに訊くと、

「先月の末だつたかね、雨の降る寒い日に一度來たことがあるの。その時は私の番だつたの。中々調子のいゝ人でせう」

「でも、随分氣六ヶ敷そうな人ね」

「そうでもないよ。顔は何だけど、薩張りした面白い人だよ。この前は私も暇だつたから、お酒のお相手なんぞして、いろんな話をして笑つて、随分面白かつたわ。」

おのぶはそう云ひながら、おすゑを相手にせぬやうに、脊を向けて歩出した。おすゑは立入つて二人の身の上を訊きたかつたけれど、輕く口を利きかねた。

（三）

雨戸は鎖されて夜は更けた。微かに震えてゐる木の葉の音や、風鈴の音が、おすゑの耳には淋しく浸入つて、便所へ行くのさへ恐かつた。寢床に就く前に、貰つた祝儀を勘定して、財布の中へ收めたが、思ひの外に金高は多かつた。これでは月五圓の里扶持や母と妹の暮しの足しぐらゐ、雜作なく仕送れるらしい。矢張叔母さんの云つた通り、割のいゝ稼業に違ひない。かうと知つたら、もつと早く奉公に出ればよかつた。あんな苦勞ばかりしないでも濟んだのに……と、獨り思耽つて元氣づいてゐたが、すると、母や妹にも此方の事情を知らせて、安心させたくなつた。

て、朋輩が梅の間の藝者の惡口や、明日の附込の噂などしながら、寢床へ這入つた後で、おすゑは一

人寢着のまゝ枕許て、眠い目を張つて、覺束ない筆を運んでゐたが、暫くして不意に手紙の上に打伏して、吃逆泣きをし出した。

「どうしたの、おすゑさん」と、直ぐ側に寢てゐるおきよが、頭を持上げて訊いた。「どうしたのさ。何處か加減が惡いの」

おすゑは胸を押えたまゝ、はつきりした返事をしなかつた。

おのぶもおとくも、眠入らうとした目を開けて、様子を見ると起上つた。そして左右から「どうしたの」〳〵と、次第に側へ擦寄つて、氣遣はしさうに柔しく訊いた。が、おすゑは極りが惡くて、容易に打明けないで、泣聲をも我慢してゐたが、涙のみ湧出て頬を傳つた。

「本當にどうしたのさ。云はなくちや分らないぢやないの。人にばかり氣を揉ませて」。おのぶはやがて慳貪な口を利いた。側を離れて寢衣の袖を掻合せ、首を縮め眉を蹙めて見下した。

「お腹が痛いんだらう」と、おとくは欠伸を嚙みながら云つた。

「濟みません〳〵。私、乳が張つて來て仕様がないんですの」

おすゑはかう言譯して、目を拭つて顏を上げた。目の縁は赤くなつて、萎れた顏は誰れの目にも痛々しく見えた。

「乳が張るつてどうなるの」と、おのぶは不思議さうに相手の胸のあたりに目をつけたが、年上のおとくは、自分でもそんな覺えがあつたやうに、乳の張つた時の氣持の惡さを言葉を强めて話して聞かせた。

そしておすゑに勧めて、茶碗の中へ絞り出させた。
「乳呑兒を他人に預けてゐちや、氣に掛るだらうね」
「でも、よく思切つて打遣つて來られたのね」
「おすゑさんの陰氣してるのも無理はないわね」
互ひにこんな事を言合つて、その兒の事やおすゑの身の上を、根掘り葉堀り訊出した。おすゑは自分の恥を隠すやうな氣がして當惑した。で、明ら樣に語るまいとしたけれど、親切づくで問はれるのに默つてもゐられなくて、止切れ〱に、目の惡い老母や人並でない朝吉や、ずぼらな前の夫の話をした。朝吉が啞が白痴であることだけは隠して、夫の病氣を受けて、生れながらに目を病んでゐると話した。
「いくらお錢が入つても、今の中にいゝお醫者に見せて、目だけは療治させやうと思つてゐます。若しか潰れてもしたら、一生難澁しますからね」と云ひながら、自分の話を憐れつぽく感じて、新たに涙を灑いだ。
その素振と話の事柄は、手易く女達の心を動かして、聴手は皆貰ひ泣きをした。おのぶは襦袢の袖を濡らすほど泣いた。同情の言葉は一時小止みなく皆んなの口に上つた。
「だから、私は一生結婚なんぞしないわ」とおのぶは深く感じたやうに云つた。「そんな目に會はされるよりや、一人でゐる方が幾らましだか知れないわね。」
「私も本當にさう思つてよ」と、おきよも相槌を打つた。

「私、朝ちやんとかに會つて見たいわ。も少しゝて暇になつたら、一日此家に連れて入らつしやいな。皆んなして大事にして可愛がつて上げるわ」

「おすゑさんのことを思ふと、私達は罰が當るわね。自分で稼いだゞけ自分の好きなことに遣つて。‥‥私、これからもう無駄なお錢は費はないよ」誰れかゞ殊勝らしく云つた。

「おすゑさんは大人し過ぎるからいけないんさ。御亭主がそんな不始末をするんなら、思切り仕返しをしてやればいゝのに。私だつたら默つて勝手な眞似をさせときやしないよ」誰れかゞつけ〳〵云つた。

一しきり、皆んながそれ〴〵に喋舌つてゐたかと思ふと、やがて、欠伸まじりて物云ふ力も衰えて、誰れからともなく、何時の間にか皆んな寢床へ這入つてしまつた。

おすゑも後から、冷たい夜具の中へ這入つて身を縮めた。暫く明瑩の寢言や齒軋りの音に累はされて、眠もやらず術なさうにしてゐたが、すると、浴室の後の篠の中に捨てられた犬の子が、コツ〳〵音をさせては、泣聲を立ててゐるのが、氣味惡く耳についた。

（四）

その翌日は穩かに冷たい春雨が降つた。折角の日曜も雨のために振りの客は少かつたが、廣間ては日本橋の銀行の連中六十人からの大宴會があるので、朝から可成り忙しかつた。義太夫の師匠まで襷掛けて膳立ての手傳ひをした。おすゑも氣を詰めて立働いた。そして、二時頃やうやく配膳の濟んだ時分、帳場から怪立たましい聲ておすゑの名が呼立てられた。昨日の電話の人達が俥を連らねて來てゐるので

ある。

今までの混雑に紛れて忘れてゐた叔母の知らせを思出して、慌てて玄關の方へ下りて行つた。洋服や和服の四人連れが賑かな話をしながら、其處に立つてゐて、皆んなの目がおすゑの顏に向けられた。

おすゑはこんな場合に相應しい言葉が口から出なくつて、ドキマギしてゐたが、折よく傍にゐたおきよに、「新五號へ御案內したらいゝでせう」と指圖をされたので、默つてその方へ導いた。

「一昨日君の叔母だといふ人から、君のことをよく聞いたよ。勤まるだらうかつて叔母さんは心配してたよ。……どんなだい」と、客の一人が、座るが早いか、顏を見詰めて訊いた。

「些とも馴れませんから」と、おすゑは低い聲で答へて、廊下へ出たが、今聞いた言葉は、この頃曾て聞いたことのない情愛のある懷しい調子を帶びて耳に殘つた。そして、姿形も四人の中でその男が際立つて勝れてゐるやうに思はれた。

て、叔母の様子をよく訊いたり、叔母への言傳てをしたり、この人になら打解けた話も出來さうだつたが、外の人達が憚られた。「あの人一人遊びに來たのならよかつたのに……」

二度目に、お誂えを伺ひに行くと、皆んなが恣まゝに打寛いで、高聲で議論めいたことを言合つてゐた。おすゑは自分が顏を出すと、皆んなが自分の方ばかりへ目を付けるやうな氣がして、窮屈だつた。そして、自分の目の向け所にも困つたが、かの柔しさうな男が乘出して、穩かに口を利いて呉れたので、その人に向つて、お好みを訊いた。特別の注文をする人は外になかつた。名前を三浦といふらしいこの

人が、一座の兄分で、何もかもこの人まかせといふ風に見えた。

「お酒は成べく早く」と、三浦は後から聲を掛けた。

おすゑは廣間の側を通りながら、そつと覘くと、其處には最早酒が廻つてゐて、座も入亂れ、騒がしい間に三味線の音もしてゐる。大勢の客の顔付や服裝が、それ〲に異つてゐるのを見比べてゐると、中々に面白いので、暫く立つて見てゐたが、すると、盃の取次をしてゐるおとくが、ふと振返つて、意地の惡い目付で此方を見た。

おすゑは慌てゝ行過ぎた。後で小言を云はれさうなのが氣になつた。「貴女は成べく廣間の方を手傳つてお呉れよ」と、おのぶに云はれても、「えゝ」と返事したばかりで、其處へは寄付かなかつた。自分の持場だけでも忙しくて暇がないやうな風をして、何處へ行くにも廣間の側は避けて遠廻りした。

酒が出て料理が揃つても、新五號の客は惡巫山戯もしないし、皆んな穩かだつた。客同士で議論めいたことを言合つたり、女話をしたりしても、女中に向つてはさして戯談を云はなかつた。

おすゑは勤めよかつた。そして、默つてお酌をしながら、客の話に耳を留めてゐた。三浦、倉賀、大井、田川、四人の名前も自から分つた。

「今だから話すけれど。それに違ひないんだ」と、口髯の濃い顔の角張つた大井が、紅くなつた目元に笑ひを含んで、勢ひのいゝ聲で云つた。「今あの女は庄司と一緒にゐるんだよ。先日庄司のお袋が來て、

譯を話して、貴下に申譯がないから別れさすやうにするつて云つてたけど、僕は初めから庄司に對して何とも思つてやしない。あんな奴に付纏はれて馬鹿な奴だと思つてる……」

「いくら君が呑氣だつて、まさかさうでもあるまい」と、三浦が話を遮つた。「そして、庄司の事件は何時頃のことなんだい。」

「一昨年の暮時分だよ。その時は彼奴が自分の給料ぢや、とても下宿屋の拂ひも出來ないから、おれの家に同居しとつたんだが、おれは富士見町へばかり行つてゝ、滅多に家にゐなかつたしね。庄司は只の一晩だつて遊びにや出ないて、家にばかり寢てるんだから。……どうも火事のあつた晩に出來たらしいよ。あれは十二月の五日だつたよ。おれは相變らず留守だつたが、夜中に近所に火事があつたんだ。あの時二人が目を醒して騷いだに違ひないが、屹度その時に關係が出來たんだ。」

「それはどうだか。君も中々空想を逞うするね」。

「あの妻君は廻覽文庫か何かに入つて、よく小説を讀んでたから、小説で感情を刺激されてたのかも知れない。僕等にも時々小説の批評を聞かせたりしてゐたよ。だけど庄司はよく平氣で君の家にゐられたね。」

「彼奴は愚圖だからさ」と、大井はさも卑むやうに云つて、「二人が續いて家を出て行つたからおれも氣が付いたのだがね。……最初に嚊が氣分が惡いから、大崎の姉の家で二三日保養して來ると云つて出て行つたきり、二三日立つても歸らなかつたが、さうすると、一週間ほどして、庄司の奴も荷物を持つて

芝の下宿屋へ引越して行つたんだよ。大晦日前だし、金に困つてることが分つてるに、變だなと、その時どきつと僕の胸に轟いたね。」

「で、君は庄司に向つて何とか云つてやつたかい。」

「いや、何も云やあしない。彼奴が出て行きや、話相手はないし、おれ一人家にゐたつて詰らないから、戸を締めて出ちやつたよ。そのまゝ拂ひも何も打やつて、三ヶ日が濟むまで方々うろついてゐたんだが、その時だよ、泥棒にやられたのは、……金目のある者は一つもなかつたけど、茶碗だの丼だの、臺所道具を一切毛布にくるんで持つて行きやがつた。……おれも一寸情ない氣がしたよ。女房はゐないし、飯を食はふにも茶碗はないし、どうしやうかと獨りで考へてたが、仕方がないから、思切つて、その日に空つぽの簞笥や火鉢や、ありつたけの者を捨賣りにして、表札ももぎ取つて、宿無しになつちやつた。……結句その方が氣樂だつたね。」

「どうだか」と、今まで口を噤んで、矢鱈に肴を突ついてゐた倉賀が首を上げて、「あの時は君も影が薄いやうだつたぜ。庄司の話は今初めて聞くんだが、その爲だね。」

「なあに」と、大井は力んで、相手の言葉を跳返して、「おれも持餘してゐたんだから、丁度よかつたのさ。……ところで、仲人が來て別れ話が極まると、おれは質に入れてゐた彼女の衣服をすかつり出して、姉の家へ送返してやつたからね。えらいだらう。」

「君にしちや感心だね。だけど、今一緒にゐる女よりや、前の妻君の方が戀しくはならんかね」と、三浦が

眞面目で訊いた。
「さうでもないさ」大井は事もなげに答へたが、ふと口を噤んで、飲みさしの盃を執つた。
「何でもあの頃、君が指ヶ谷町の結婚媒介所へ女房の候補者を捜しに行つたといふ噂がつたが、本當かい」。
「なあに、あれは惡戯さ。いろんな女が來てゐて面白いちうから、愚弄ひ半分で行つたんだよ」。
「ぢや、本當に行つたんだね。まさかさうぢやあるまいと思つてたのに」
……皆んなが冷かすやうに笑ふと、大井は消げて目を屢叩きながら、頻りに酒を飲出した。
おすゑは彼方此方と酌をしながら、一座の話に聞惚れて、大井といふ男の身の上を、さも珍らしいことのやうに興を覺えてゐたが、「おすゑさん、ちよいと」と、障子の蔭から呼立てられたので、詮方なく座を外して行つた。
「竹の間で先つきから呼んでるよ。もうお立ちになるんだらう」と云つて、おのぶは擦寄つて歩きながら、「忙しい日には、一つのお座敷へさう長く付いてゐなくたつていゝんだよ。構はないから打やつといて。外へもさよい〳〵廻つてお呉れよ。四人もゐるのなら、藝者でも呼んだらいゝだらうにね。……あの人達は何をする人?。見たところ皆んな頑固な人らしいわね」
「さうねえ」おすゑはかの四人の樣子が、家にゐた頃の知合ひの保險會社の社員に、何處か似てゐるや

うな氣がしてゐたのだが、若し見當違ひをしておのぶに笑はれはしないかと思つて、口に出しては云はなかつた。

竹の間の御用を濟まして、直ぐに龍の座敷へ行つて見ると、もつと續いて聞きたかつた太井の身の上話は止んでゐた。大井は手枕をして足を投出して寢入つてゐる。おすゑは枕を出して寬かに頭を安めさせた。足許へは搔卷を掛けてやつた。

「この男も顏に似合はん罪のない奴だよ」と、三浦は寢顏を見下してから、おすゑを見上げて、「一寸その男の首筋を見て御覽。今でも乾度痣がついてるよ。女に嚙付かれた太事な形見なんだよ」

「へえ」と、おすゑは呆れたやうに首の方を顧みたが、側へは近寄れなかつた。

すると、倉賀と田川とが左右から大井の襟を寬めて、首筋を覗いたが、痣の跡は最早見付からなかつた。

「色男の勳章もなくなつてるよ」

皆んなが笑ふのに誘はれて、おすゑも面白さうに笑つた。そして、ふと打解けた氣分になつて、

「貴下方はさのやへよく入らつしやるんですか」と訊いた。

「なに、よく行くつてこともないんだがね。少し譯があつて、僕はあの家とは懇意にしてゐるんだよ」と、三浦が答へた。「叔母さんには隨分世話になつたよ。一昨日の晩も氣晴しに、二三時間話しに行つたのだが、その折一日梅見にでも行きたいと云ふことから、つい君の話が出てね。是非この家へ遊びに行

けと云はれて、皆んなを誘つて來ることにしたのさ。」

「折角入らしやつたのに、雨天て生憎くてしたわね」と、おすゑは馴れ〴〵しく行つたが、氣の利いたお世辭は口から出なかつた。叔母に向つて、「自分の事をよく傳へて貰ひたい。待遇が惡かつたと云はれたくないと思ひながら、客を快く遊ばせる術は分らなかつた。

燈火のつく前に四人連れは俥にも乘らないで、冷たい雨の中を出て行つた。門の外で大井は「握手しよう」と云つておすゑの手を握締めた。

（五）

晝間は絶間なく動いてゐるのと、さま〴〵の客の話を聞いたり、樣子を見たりしてゐるのが珍らしいのとて、心が紛れてゐれど、夜になつて部屋々々が靜かになると、手頼りのない思ひに沈んだ。そして、賑かな朋輩同士の話の中へは這入れなくて、一人除物のやうになつてゐた。

足が棒のやうになつて、根の疲れた身體を溫泉に浸すのは、此處にゐる一つの役德で、外のお湯とは違つて、身體の心までも溫まるので、叔母の云つた通り、弱つてゐる身體には何よりも藥になるやうだが、朋輩と一緒に這入るのは氣が引れた。おきよなど口の端たない手合ひに愚弄はれるのが厭だつた。

母屋から隔たつた湯殿では、皆んなが遠慮氣もなく勝手な口を利き合つてゐるので、おすゑは一人暗い所へ寄つて、默つてそれを聞いてゐた。首を振つて小さい聲で義太夫を語る者もあつた。

「私、今年は夏まで此處にゐて、お師匠さんにみつしり復習つて貰はうか知ら。どうせ習ひかけたくら

ゐなら、人中へ出て語れるやうになりたいよ」と、おさだは語り止めてから云つた。

「お前さんは聲がいゝからね」と、酒臭い息を吐きながら、湯氣の中にだらしなく横はつてゐるおさよが冷かすやうに云つた「私なんぞ、今月一杯ぐらゐてこんな家は御免だよ。早く東京へ歸りたいよ。……どうせ奉公するにしたつて、東京の方がいくら勝しだか知りやしない。……今年こそ止さうと思つてたのに、花の間だけ助けて呉れつて、無理に連れて來やがつて。……思切つて赤阪へ行けばよかつたのに、お母さんが義理立てしたために、いゝ口をふいにしちやつたよ」と云つて「あゝ口惜しい」と、頓興な聲て叫んだ。

「誰れだよ。狂人のやうな聲を出してさ」と、新に這入つて來た一人が、湯氣の中を透かして見ながら嘘をした。

浴槽の中て眠さうに欠伸をしてゐる者もある。互ひに耳打ちしてクス／＼笑つてゐる者もある。皆んなの聲が止切れると、寂とした夜の空に、犬の聲が響渡つた。

「おや、おすゑさん其處にゐたの。ゐないのかと思つたら」と、ある一人が振向いて聲を掛けた。「そんな隅つこにゐなくつたつていゝだらうにね。默つてゝ人の内所話を聞いてるなんて、餘程人が惡いよ。……默つてる人が一人でもゐると、何だか氣が差して厭なものだよ。……さあ此方へ入らつしやい。お湯を汲んて上げるから」

「えゝ、有難う。……私、もう上がるんてす」おすゑは身體を縮めて、逃げるやうに明障の側を潜つて、

手早く着物を着けて、湯殿の外へ出た。
が、直ぐには女中部屋へ這入らないで、吹さらしの渡廊下に立つて、雨の霽れかけた暗い外を見てゐた。そして、皆んなが湯から出て、女中部屋へ這入るのを待つて、後から随ひて這入つた。
次の室の柱時計が一時を打つた。今まで喋舌つてゐたのが、早くも寝息を吐き出した。口の中で音をさせたり、聞取れぬ譫言を云つたりした。起きてゐるのは、昨夕書き残した手紙を書きつゞけてゐるおすゑと、他所行の羽織を縫つてゐるおよしとばかりであつた。おすゑは昨夕までは長く勤まるつもりで、母や妹へ安心させるやうな手紙を書かうとしてゐたのだが、今夜はどうしてもそんな氣になれなかつた。むしろ勤まりさうでない不安を訴へたくなつた。
「今時分東京へ電話が掛るでせうか」と、出抜けにおよしに訊くと、
「あゝ、掛けられるでせう」と云つて、およしは針を止めて、「何處へ掛けるの。叔母さんの家？」
「いゝえ、私、今何處へも掛けるんぢやないの。一寸訊いたゞけなの」
が、叔母とは何時でも電話で話が出來るといふことが、多少力になるやうに思はれた。東京は此處から近いんだから、その中一日暇を貰つて、叔母のゐるさのやといふ家へは遊びに行きたい。……どうせ他人の中で氣兼苦勢をするほどなら、東京へ行けばよかつた。
おすゑは叔母に相談して、朝吉を東京で里子にやつて、自分も東京で奉公したらと、これまでついぞ思付きもしなかつたことを考出した。で、さうなつた後を夢のやうに考へてゐると、氣が迷つて、今夜

も落付いて細い手紙は書けなかつた。

（六）

空が晴れると、目の届くかぎり最早春景色であつた。枝を渡つてゐる雀の聲も陽氣に響いた。雑巾掛けをしてゐる冷たい手も、冴えた日に柔しく温められた。穴のやうな路次裏に住んでゐたおすゑの目には、廣い畠の中に動いてゐる農夫の姿も非常に違つた生活をしてゐる人のやうに見えてゐたが、その農夫の野良仕事が晴れた日には羨ましいほど愉快げに見えた。「あんなにして誰れに氣兼ねもしないで働いてゐたら、氣が清々してゐゝだらう」と思つたりした。

空高く凧が舞つてゐて、子供が畦道を駈けてゐる。

おすゑは拭掃除を濟ませると、朋輩と代り合つて髪を結つて、身裝した。最早正午近くなつて、チラホラ客の姿も見えた。電話も東京から掛つてゐたが、暫くしてふとおすゑの名が呼ばれた。

「叔母さんか知ら」と云つて、急いで行つて見ると、「誰れだか男の人だよ」と、おさよは受話器を渡した。

おや、あのお客様だらうと、おすゑは三浦や大井の顔を思出しながら、受答えしたが、先方の聲を聞くと變な氣がした。二三度聞返して、それと知れると、おすゑは目が眩んで耳が鳴つた。

「ぢや、さうします。私の方から行きます」と、おど〳〵しながら、叮嚀な言葉で答へて、直ぐに電話の側を離れた。朋輩が此方を不審げに見てゐるのが面羞くて、遁場所を求めて便所へ這入つた。

「この頃おれも東京へ來て、いゝ仕事にありついてるんだ。お前の方で忙くて出られなければ、おれの方から其處へ訪ねて行かう。」

と、かう夫の聲がしてゐたのに異ひなかつた。穩かな調子だつたし、會つた上でよく譯を話すと、これまでの事を詫びるやうに云つてゐた。そして、四谷の何處とかの今の居所をも教へた。

おすゑは逆せた耳でぼんやり聞取つたことを、じつと思出してゐたが、夫に會ふにしても此處へ來させたくはなかつた。若しも今日か明日、不意に妙な服裝をして來られでもしたらどうしようと思つてゐると、落着いてはゐられない。

て、叔母に電話を掛けてよく相談したかつたけれど、さうすれば明ら樣に家の者に知られるのが恐ろしかつた。何とか用事を拵へて半日でも暇を貰ひたいと考へながら、とても主人の前に出て云ひ出せさうではなかつた。手紙で叔母に訴へるにしても、手紙を書く暇はないし、急の間には合はない。

おすゑはその日自分の名を呼立てられるたびに、夫が來たのではないかとビク／＼した。そして、客の前に出てゐても、客の話などに氣をつけてはゐられなかつた。どうかして、電話のあたりに人のゐない折に叔母と話をしたいと思つて、隙を見てゐたが、憎らしくもその側には乾度誰れかがゐた。おすゑはその人達を、自分の敵ででもあるやうに心の中で睨んだ。

その日の客の中には、若い書生さんがあつた。角帽を着て木綿袴を着けてゐる。一人で池上の方を散

歩して來たと云つて、座敷へ案内したおすゑに向つて、懐つこく本門寺の話などした。

「君はよく知つてるだらう、近くだから」

「いゝえ、まだ一度もお詣りをしないんで御座いますよ」。

「直ぐ其處に見えてるのに。……一日少し早く起きて行つて御覽よ。いゝお寺だよ」

書生は頻りに話の種を造らうとして、絶え間なくいろんなことを喋舌つた。女中の名を訊いたり、おすゑの身元調を始めたりした。去年此處で仲間の宴會をしたことがあると云つて、

「おきよさんといふ人はまだこの家にゐるかね」と、やうやく知合ひの女中の名を考出して訊いた。

「え、居りますです」

「おや、手が隙いたら一寸此處へ遊びに來るやうに云つとくれよ。僕は去年醉つぱらつて、大變あの人に迷惑を掛けたんだよ」

おすゑは座を立たうとしながら、口數の多いこの客の言葉の容易に切れないために、立つ機會がなくて、愚圖々々してゐたが、

「今おきよさんを寄越しますから」と云棄てて、やうやく出て行つた。そして、馬鹿正直にわざ／＼おきよを捜して、湯殿の側でお客の言葉を傳へた。

「へえ。私そんな人は知らないよ」と云つて、おきよは直ぐに行く風はなかつたが、暫くして、おすゑがお膳を持つて行くと、おきよは何時の間にか廊下に立つて、梅を見てゐる書生さんと、べちやくちや話

をしてゐた。
「御酒を召上がるんですつて」と、おきよは差圖した。
「僕は飲むといけないんだが、おきよさんが勸めて仕方がないんだよ」と、書生さんは此方を顧みた。
「持つてまゐりませうですか」と、おすゑは迷つて、生眞面目に訊いた。
「私に任せてお置きなさいな。いくら貴下が醉つたつて、私がちやんとお家へ送つて上げますよ」と、おきよは書生さんに向つて云つて、自分で階下へ下りて行つた。
おすゑも二三度お銚子の取次をしたが、おきよは屢々その座敷へ顔を出しては、酒の相手をしては長く側に座つてゐた。義太夫を唸つたり、戯談を云つたりしてゐた。
「この方は貴女を大變褒めて入らつしやつてよ。大人しくつて容色がいゝからつて。……その上にまだいゝ事があるんですつて」と、笑ひながらおすゑに向つて、「だから、私貴女に奢らせやうと思つてるの」
「本當にさう云つてゐたんだよ」と云つて、客は何を思つたのか、袂を探つて名刺を取出して、おすゑに渡した。
おすゑは恭しく頂いたが、名刺の表をばよく見もしないで、帯の間に挟んだ。そして、引留められるまゝにおきよの後の方に座つてゐたが、おきよは馴々しく客の煙草を取つて吸ひながら、微醉ひの上機嫌で、自分の惚氣話をしてゐるのだつた。小石川の華族様のお屋敷に奉公してゐた時分に、其處の若様に付纒はれて困つたといふ話をして、客は身を入れて聞いてゐる。

「君もその人が好きだつたのなら、い〻ぢやないか。何も逃げるには及ばないだらう」

「今になると、さう思ふんですけれどね。けれど、私その方が可哀相で、とても決心が出來なかつたんですの。いつそ私がお暇を貰つて姿をかくした方が、後々のお爲になるだらうと思つて、その方が學校へ行つて入つしやる留守に急にお屋敷を出たのですわ。それつきりお目にも掛れないし、手紙を差上げることも出來ないんですもの。情ないでせう。私、初めの間は人に隱れて泣いてばかりゐましたわ。泣いて〳〵泣飽いた揚句に、自棄になつて、どうでもなれつて勝手放題に日を暮らす氣になりましたの。お甘くもないお酒でも、その時分から無理に飮むやうになつたのですわ」

「目顏に感情を籠めてさう云つてから、おすゑを顧みて、「私が女の癖によく飮むからおすゑさんは呆れてるわね」

「そんなことはないわ。私もお酒が頂ければい〻と思ふわ」おすゑは幽かに答へた。そして、二人が面白さうに盃の取りやりをしてゐるのを見てゐた。書生さんの醉つた目元はます〳〵可愛らしくなつた。英語まぜりで何か分らぬことを云つては、獨りで快活に笑つたり、おきよと二人で唄を唄つたりもした。

「僕は今夜此處へ泊らうかね。さう極まれば安心して飮めるから」と、興に乘つて云つた。

「おすゑは二人で差圖されては、お銚子の通ひをしてゐたが、自分が座を外してゐる間には、話聲が靜かになつてゐるのに氣を留め出した。廊下に立つて、夕日が障子の裾を彩つてゐるその座敷を、遠く見詰めてゐると、いろ〳〵のことが空想されて、おきよの素振が忌はしくなつた。

暫くして燈火が點いてから行つて見ると、書生さんは一人醉倒れて眠つてゐた。おすゑは火鉢の火を直しながら、その寢顔を見守つてゐた。ふと思出して、貰つた名刺を出して見ると、入江といふ名前だつた。

入江さんと名を呼んで搖起したかつたけれど、それだけの砕けた氣持になるのさへ躊躇された。で、自から目醒めるのを待ちながら、膳を片付け酒の雫を拭ひ、座敷の中を奇麗にした。客はます〳〵心地よさゝうに深い寢息を吐いてゐる。

「泊るつもりか知らん」と思ふと、おきよの今までの様子が變に氣になつて厭だつた。で、階下へ下りがけにおきよの方に目を付けたが、おきよは謹深い顔をして、嚴しい新客を離れの方へ案内してゐた。

「おすゑさん、お話に入つしやい」と、ふと後から呼掛けられたので、振向くと、長逗留の支那人が褞袍を着て、手拭を持つて、湯殿へ行くところであつた。

「張さんはお一人でお退屈でせう」と云ふと、

「私明日東京へ遊びに行きます。貴女は行きませんか」

「一緒に連れてゝ下すつて。……本當に連れてゝ下さいな」おすゑは周圍に朋輩のゐないのを見て、甘へるやうな様子をした。

「私、二三日東京に泊つて來ます。貴女は泊ること出來ますか」と、支那人は微笑して側に寄つた。

「えゝ、泊つても關いませんとも。東京になら幾日でも行つてゐたいんですわ。だから連れてゝ下さい

な。張さんのやうな親切な方に連れて〻貰ひたいんですよ」

おすゑは例にない蓮葉な調子で云つたが、やがて自分が言過ぎたのに氣附いて、笑顏で支那人に挨拶して側を離れた。

慌だしく鳴る呼鈴に答へて、行つて見ると、書生さんは夢から醒めて欠伸をしてゐた。「遲くなつた。直ぐ歸るよ」と、懷の時計を出して見て云つた。

「お泊りぢやないんですか」と、おすゑは訝しげに訊いた。

「いや、泊らない方がいゝよ」と眞面目で云つて、「近かにも一度緩くり來るよ。今度來る時には何か土產を持つて來ようね。君は何が好き？」

おすゑは只笑ひに紛らせて答へなかつた。そして、帳場へ下りて、勘定書を持つて來ると、書生さんは衣服を締直して、袴を着けて待つてゐた。

「おきよさんは何をしてる？。一寸呼んで貰えないかね」と、拂ひを濟ませてから云つた。

おすゑは承知して座敷を出たが、おきよの居所を搜さうとはしなかつた。多分離れにゐるのだらうと思ひながら、それを幸ひに、會はさないで歸してやらうと思つた。そして、受取を持つて座敷へ出ると、

「何處にゐますのか、幾ら搜しても見付からないんですよ」と、誠しやかに云つた。

「變だね、外へは出りやしないだらうに」と、客は物足らなさゝうだつたが、押して會はうとも云ひかね

て歸りかけた。

おすゑは庚申樣の小祠の側まで見送つて別れを告げやうとしたが、書生さんは別れともなさゝうにして、

「せめて、その大通りまで送つてお呉れよ。急に淋しくなつていけないから」と、賴むやうに云つた。

おすゑは否みかねて、素直に並んで步いた。左右は畑で道は薄暗かつた。後を見上げると、小高い梅屋の部屋々々の燈火が闇の中に光つてゐる。おすゑはこのまゝ汽車まで行つてしまいたい氣がした。

路傍の小溝を緣取つた小笹が淋しさうに幽かな音を立てゝゐる。ふと二臺の俥が掛聲をして來て、二人の間を分けて梅屋の方へ進んだ。

「これから彼處へ泊りに行くんだね」と、書生さんは羨ましさうに云つて、「僕は其處から停車場まで駈足て行かう。寒くなつたから」

「でも汽車にお乘りになれば、お宅まで直ぐですわね」

「あゝ。新橋へ着いたら、また一杯やつて、銀座をうろついて家へ歸るんさ。東京はまだ宵の口で賑かだよ」

大通りへ出ると、活潑に別れを告げて、書生さんは足早に步出した。おすゑは暫く立留つてその足音を見送つてゐた。

上りか下りか、汽車の音が闇を破つて耳に響いた。おすゑは人氣のない路傍に一人で立つてゐると、

今に今濱へでも都へでも行きたかつた。馴染難い朋輩の中へ這入つて、寢苦しい夜を送るよりも、今夜一晩でも親しい身内の側で、氣樂に眠りたかつた。電話では嚇かされた夫に對する恐怖は次第に消えてゐて、今ひよつと此處へ會ひに來て呉れゝばいゝにと、知人の戀ひしさに堪へられなかつた。

二臺の俥は客を送込んで歸りかけた。おすゑはそれに乘つて停車場へ行かうかと幾度も心が迷つた。

（七）

翌日の正午近くなつて、かの支那人は東京行の支度をして、わざ〳〵おすゑを呼んで、「貴女は一緒に行きますか」と、眞面目に訊いた。

「行かれたら後から參りますわ」と、おすゑは小聲で答へて、相手の柔しい目付が自分の顏に注がれてゐるのを見てゐた。髮を奇麗に梳つて、顏もよく磨いて油臭くなくて、支那人らしい厭らしさは感ぜられない。外套を後から掛けてやると、支那人はポッケットから名刺入を取出して、名刺の裏に自分の泊る東京の旅館の名を書いて、おすゑに渡した。

おすゑはそれを昨日貰つた書生さんの名刺と一緒に大切に仕舞つた。そして、出た後の支那人の部屋の掃除に取掛つたが、ふと浮いた氣持になつて、聞覺えの壺坂のサワリを口の内で唄つた。

三浦だの入江だの、あの支那人だの、いろ〳〵の若い男に自分が柔くされることを思ふと、鬱陶しかつた心も一時晴々した。……縁のない人にでもあんなに親切にして貰へると、おすゑは今初めて自分の身に價値がついたやうに思つて、萎けてゐた身體も伸々した。

が、すると、自分を粗末にして酷い目に會はせた夫に對する怨みが、これまでに增して激しく胸に込上つた。身分のいゝ男前も立派な人にさへこんなに可愛がられる私を、今更取返しのつかない憐れな者にしやがつてと、口惜淚を浮べた。そして、會ひさへしたら、からもあゝも云つてやると、今までの自分の苦勞を心の中で數へ立てた。

さう思ひながら、再び紙帶を執つて、梅の枝の影の映つた障子を拂いてゐたが、やがて、差込む日を受けて燦めいてゐる机の上の鏡立に目がつくと、その前に屈んで、自分の顏を見詰めた。わざと笑つて見たり、乾いた下唇を反して見たりした。こんなに蕎麥滓が多かつたか知らんと、今初めて氣がついたやうに氣にかけた。

庭では離れの客が寫眞器械を持出して、彼方此方寫してゐた。女中や男衆を呼んでさまぐ〵の姿勢をさせて寫しなどしてゐて、おすゑが廊下へ出ると、手招をして、仲間に加はらせやうとした。が、一度も寫眞を撮つたことのないおすゑは、自分の姿がどんなに映るかと危まれて、いくら勸められても「思切つて前へ出て行くことが出來なかつた。そして朋輩の樣子を羨ましさうに見てゐた。

やがて、寫眞騷ぎが濟んで、庭に集つてゐた大勢もばらぐ〵に散つた。「貴女も寫しとけばいゝのに」と朋輩に云はれておすゑは後悔しながら、一人後から食事に行きかけると、飯炊きのおしまが側へ來て、「先つき貴女に電話が掛つたよ。寫眞を撮つてると云つたら、また後で掛けると云つてたよ」と知らせた。

「さう？」と輕く云つて、おすゑはおしまから顏を背けた。取次いで貰つた禮をも云はないで、無愛相な顏付をして行過ぎた。

待つてゐた電話は夕方まで掛つて來なかつたが、その間におすゑの心は絕間なく動揺した。どうしていゝのか、確かりした決心は何時までもつかなかつた。只此處で夫に會ふ氣にはどうしてもなれなかつた。ふと其處へ夫の姿が現はれて、主人や朋輩の目に觸れたらばと思ふと、思つたゞけでも耻しくて、じつとしてゐられなかつた。ともすれば、胸騷ぎがして身體が慄えた。

おすゑは夕方までに、何の考へもなしに屢々女中部屋へ這入つた。そして、行李を開けて自分の持物を改めた。財布を帶の間に挾んで座敷へ出たかと思ふと、また元の所へ仕舞つたりした。

日が暮れると、幾度も隙を見て裏門の坂道へ出てゐたが、おとくは「今日いやにぼんやりしてるのね。どうかしたの」と訊いた。

「いゝえ」と事もなげに答へたが、おすゑは惡い企てを見破られてもしたやうに相手の目が眩しかつた。

（八）

晚の混雜も一先づ片付いて、女中共も氣樂に息の吐ける時分、おすゑは夢中で裏門から大通りへ出た。逃出す決心をしたのではなかつたが、家の中に落着いてはゐられなかつた。そして、通りで俥を見つけると、考へる間もなくそれに乘つて、停車場へ向つた。時々後を顧みては俥を急かせた。

切符を買つて上り列車に乘込むまでは、大罪を犯したもののやうに恐ろしくて、行先も不安だつたが、列車が動き出すと、温い思ひが胸に湧いた。兎に角叔母にさへ會へば仕末は付けて吳れるだらうし、東京でなら誰れに遠慮もしないで、夫に會ふことが出來る。東京でなら明瞭を憚らないで朝吉に會ふことも出來る。東京には自分に柔しいあの支那人なども行つてゐる。……て、おすゑは手頼りになる人々の中へ這入つて行くやうな氣持て、東京の市街へ踏込んだ。牛込のさかやといふ家を尋ねて行く途々、叔母に告げるべき體裁のいゝ言譯を思案しながら歩いた。

「その石垣の横手を上つて行つた突當りの家です」と敎へられたので、指差された石垣に沿つて行くとさかやの軒燈は直ぐ目に映つた。

狹い道の左右には、同じやうな小さい家が並んで、梅屋のやうな構えの大きな家は一つもなかつた。おすゑは叔母のゐる家が思つたより見窄らしいのに驚いた。これなら、いくら田舍でも梅屋などに勤めてゐた方が幅が利くと思ひながら、暫く勝手口に立つて、家の樣子に耳を止めた後に、隙間から言葉を掛けた。

「何方?」と答へて、戸を開けて顏を出したのは叔母のおきくであつた。戸の蔭に身を寄せてゐるのを、軒燈の光て覺束なく見分けて、「まあ、お前どうしたのさ。どんなに心配してゐたか知れないよ。先つき梅屋から電話が掛つて、私吃驚しちやつたよ」と、聲に力を入れた。

先を越されたので、おすゑはおど／＼して、言譯も口から出なかつた。叔母は一足外へ出て來て、お

すゑの顔を見詰めたが、「兎に角家へお這入りよ。こんな所で立話も出來ないから」と、愚圖々々するおすゑを家へ引入れて、玄關脇の、子供が一人でゐる部屋へ連れて行つた。

「彼處に居づらければ、手紙で一應私に知らせて呉れゝばいゝのに。出拔けて吃驚しやつたよ。一體どうしたの?」

問詰められると、おすゑは涙ぐんだ。自分の淺墓な仕業が耻かしくなつたが、外に尤もらしい口實は思付かないので、夫の電話の事を、さも嚇文句を聞かされたかのやうに大袈裟に話した。……「勇吉があの家へ來て若しも無法なことでも云出したら、私は構はないけれど、主人にも濟まないし、叔母さんの御迷惑にもなりやしないかと思つて、私心配で仕方がなかつたんですの」

「何て氣が小さいんだらう、お前さんも」と叔母は笑つて、「それつぱかりのこと何でもないぢやないかね。あの男だつて、自分から勝手に別れてゝ、今更文句をつける譯もなからうしさ。此方からこそ話をつけて子供の養育料ぐらゐ取つてやつていゝんだもの。……居所が分つてれば、私が出掛けて、幾らでも出させるやうにして上げるよ……」

兎に角今から梅屋へ歸れもすまいから、今夜は此處へ泊つて、明日朝の内に歸ることにすればいゝ。一人で歸るのが厭なら、私が隨いて行つて言譯をして上げる。今先方へ電話で知らせとくから、安心して茶の間で家の老婆さんと話でもしといてと、叔母は獨合點で極めた。そして、茶の間へ誘つて行つて、主人の老婆に引合はせて、一夜の宿を頼んだ。僅か四五日の間にも汚れ目が脫けて、持前の容色が引立

つて來たおすゑを、自分の姪として人中へ出すのが悦しかつた。

が、おすゑは老婆に向つてはき〳〵口は利けなくて、容易に火鉢の側へも寄れなかつた。叔母が電話で梅屋の主人に叮嚀に言譯をしてゐるのを洩聞きしながら、最早再び彼處へ行けるものかと思つてゐた。たとへ、叔母が連れて行つて吳れるにしろ、そんなづう〳〵しい眞似は私には出來やしない。……と、自分の處置を案じて萎れてゐた。

「さう怒つてやしないよ。只ね、家が忙しいんだから、明日早く歸つて吳れつて」と、叔母は安心したやうに云つて、「お前も一言斷はつて來ればいゝのに。私はまた屹度濱が戀しくつて歸つたことゝ思つたから、電報を打たうかと思つてゐたんだよ」

「どうも濟みませんでした」と、おすゑは畏つて頭を下げた。その樣子が叔母の目には子供染みてゐて可笑かつた。

「でも居づらくはないんだらうね。濱にゐて、荒仕事をしてるよりや餘程氣樂だらう」と、力を付けたが、

「えゝ」。と、おすゑは曖昧に答へた。

「まあ二三ケ月辛抱しといて、その中には私にも考へがあるから」

叔母は家の者に少しも遠慮する風はなかつた。そして座敷はひつそりして、さして客が來てゐさうには思はれないのに、二階へ上つたり電話口に立つたり、緩くり話をしてはゐなかつた。「一寸手傳つて貰

はうかね」と云つて、持込まれた丼を膳に載せて、おすゑに渡した。

おすゑも窮屈に座つてゐるよりは、手助けでもする方が却つた氣樂だつた。差圖された通り階子段を上つて、話聲のしてゐる右手の部屋へ這入つた。瘠せこけた貧相な男と、鼻の低い藝者とが、不審さうに此方を見た。おすゑは顏に愛嬌を浮べて、恭しく膳を置いて、直ぐに引下つたが、襖の外へ出ると竊かに冷笑した。

よく見ると、まだ二つ三つ部屋があるらしいけれど、どれも狹い粗末な部屋としか思はれない。こんなだととても梅屋ほどのいゝ客は來ないだらうにと、叔母が何時までも此處に勤めてゐるのを怪んだ。そして、周圍の客の氣色に耳を留めながら、階下へ下りかけると、其處へ叔母が忙しさうに上つて來て、小聲で用事を言付けた。

おすゑは叔母の後に隨いて、奧の室へ入つて寢床を伸べたり、方々の戸締りをした。どの部屋にも一人の男と一人の女とがゐた。

「この近所の家は皆んなこんな稼業をしてゐるんでせうね」と、階子段を下りながら訊いた。

「あ、この通りは皆んな待合だよ」。

「隨分どつさりあるんだわね」。

茶の間には目の大きな小娘と若い女中とが、戸外から歸つてゐて、夜食の仕度をしてゐた。おすゑは食事の仲間入を勸められるのを斷つて、叔母の情けて、一人先きへ寢床に就いた。

夜は更けてゐるし、身體は疲れてゐるし、床に就くと、張詰めた氣が一時に弛んで深い睡りに陷つた。誰れかに呼起されたやうな氣がして目を醒ますと、最早薄明るくなつてゐた。側には叔母と、も一人の女中とが、正體なく眠つてゐる。おすゑは異つた所に異つた人と寢てゐるのを不思議さうに見廻して、昨夕梅屋を拔出てからの事を夢のやうに思出した。裏門を出て淋しい野徑を辿つて、ふと目に付いた俥に乘つたことを思ふと、自分が狐に抓まれてゐたやうな氣がした。

て、あれほどの家を譯もなく出て來た輕卒が後悔されたが、「……だけど、もう彼處へは行かれない」と溜息吐いて、叔母が何と云つて勸めやうとも、足を向けまいと覺悟をした。東京にゐたつて、五圓の月扶持ぐらゐ稼げないことはないと、自から恃む氣にもなつた。

戸外には物賣りの聲がし出した。次第に人通りも繁くなつた。冴えた朝日がいゝ氣持に隙間を洩れた。すると間もなく、次の間から老婆が聲を掛けて皆んなを呼起さうとした。おすゑはそれに答へて、叔母を搖起して、自分も起上つた。雨戸を繰開けると、顏に觸れる朝風は底冷たかつたが、空はよく晴れて、何方を見ても春めいてゐた。

おすゑは田舍の梅の散りかけてゐる話などしながら、甲斐々々しく朝の用事を手傳つた。客は皆歸つて、座敷の障子は開放された。夜具や座蒲團は縁側に持出されて日に干された。其處等が片付くと、叔母は、温かい窓際に寄つて息休めをしてゐるおすゑに向つて、今思出したやうに、

「さあ、これからお湯へ入つて、直ぐに出掛けることにしやうね。愚圖々々してるともう正午(おひる)だよ」と促した。

「さうねえ……」おすゑは浮かぬ顏をしてゐたが、やがて、「叔母さんにお氣の毒だから、私一人で行きますわ」

「一人で?」叔母は意外に感じた。「今日はお天氣がいゝし、私も梅見がてら一日遊んで來たいんだよ」

「でも、何だか濟みませんわね」

「何故?。……私は些つとも構はないよ。お前さんのことは私が引受けて來てるんだから、これからよくなつて呉れさへすれば、私は些とも骨惜みはしないよ。……せめて梅の間だけ彼處で辛抱しといてな。外へ行かうたつて、さう急にいゝ家があるもんぢやないからね。」

かう柔しく云はれると、おすゑはますます叔母に逆ひかねた。自分の望んでゐることは一言も口に出せなかつた。そして、叔母の手で引縋られて、梅屋の閾を跨ぐことを思浮べると心は滅入つてしまつた。

「來月になつたら、一日お暇を貰つて、一緒に濱へ行くことにするから、それまで我慢しといてな。朝吉のことは些とも心配することはありやしない」と、叔母は相手の滅入つた影を見つけたやうに云つた。

「……私ね。折角東京へ來たんですから、次手に買物をして行かうと思ふんですがね。……それに一二軒寄つて行きたい家もあるんですけど……」

「そんなことは今度にして、今日は早くお歸りよ」叔母は口早に打消して、急立てゝ湯屋へ連出した。

そして、途すがら、若し前の夫が會ひに來てどんな甘いことを云はうとも決してその言葉を眞に受けるな。浮かりして馬鹿な目を見ないやうに氣をつけよ。と、染々と說聞かせて、

「またあの人に掛り合つちや、これまでの苦勞が何にもなりやあしない。お前さんにもよく分つてるだらうね」と念を押した。

「えゝ」と、おすゑは肯付いた。

「お前さんは若いんだもの。販町の裏長屋で燻つてゐるには及ばないんさ」と、叔母は横濱へ來るたびに唆かすやうに云つてゐたことを繰返した。

湯屋には幾人も藝者が行つてゐたが、叔母の顏を見ると、左右から皆親しさうに言葉を掛けた。

（九）

叔母は身支度を濟ますと、一度梅屋へ電話を掛けて置いて出掛けた。通りへ出ると手土產の菓子折を調へた。おすゑは後に隨いて電車に乘ることは乘つたが、素直に向うへ行く氣にはなつてゐなかつた。そして、電車が意地惡く駛せるにつれて、心は目眩くしく焦立つた。

ふと思切つて、叔母に打明けやうとしたが、叔母の平氣な目顏を見ると、今更ら云出す沙はなかつた。新橋に着いて、切符を買つて、待合室に休んでゐる間も、さして口は利かないで、話をし向けられても卒氣ない返事をするばかりだつたが、不斷の氣性を知つてゐる叔母は、深く怪みもしなかつた。

發車時間も迫つて來た。おすゑは最早一刻も躊躇されなくなつた。自分の生死の別れる瀬戸際に立つ

てゐるやうに、只恐ろしさ厭はしさに戰いたが、すると、ふと智慧がついて、「私、一寸便所へ行つて來ますわ」と云つて、慌しく待合室を出た。叔母が何か云つたけれどそれは耳に入らなかつた。

混雜の中を分けて、後をも見ずに、ひた走りに走つた。息を切らし〱餘程の道を逃げ延びたと思ふ頃立留つた。そして周圍を見ると、幸ひに叔母の姿は見當らなかつた。が、往來の人は不思議さうに此方を見てゐた。おすゑは思はず首垂れて、胸を鎭めて當もない道を靜かに歩んだ。

方角も分らないし、これから自分が行くべき所も分らない。……おすゑは思ひあぐんだ果てに、電話で聞いた夫の居所を、唯一の手頼りにして、思出さうと一念を凝らしたが、あの時狼狽へてゐたので、四谷と覺えてゐるばかりで、詳しいことは記憶に殘つてゐない。訪ねるにも手蔓がない。

でも、差當つて身の置場はないので、おすゑは四谷を目當にして道を取つた。歩き疲れると電車に乘つた。此處が四谷だと敎へられて、見付で電車を下りて、あたりを見廻し〱歩き出した。すると、横顔や後姿の夫に似通つた男が頻りに目に付いたが、よく見ると、どれも赤の他人だつた。

ほか〱と溫かい日の中を、いろ〱の人間がごた〱通つてゐる。おすゑは若しも夫に行會はないかと當てもなく歩いてゐる中、身體は汗ばんで心はぼんやりして來た。そして、暫くの間は只機械のやうに足を動かしてゐた。

どの町を通つたのか氣付かぬ中に、再び堀端に出た。見覺えのある神樂坂の方が直ぐ目の前に見えた。

おすゑはわれとわが心を強いて落着けて、路傍に足を休めて、この後の處置をよく考へやうとしたが、何處も人目が繁くて、相應しい休み場所は見當らない。で、誰れかに急立(せきた)てられるやうな氣持で更に歩み出した。公園ぐらゐありさうなものと、目の届く限りを搜したが、そんな者は何方にもないらしくて、行つても行つても只電車や俥や雜多な人間が、絶え間なく通つてゐる。

おすゑは泣出したくなつた。……叔母には一生會はす顏はないし、外に知人のゐない東京では、差當つて奉公口の世話を頼む所もありはしない。……おすゑは朝吉の里扶持の出道も止切れてしまつて、最早浮ぶ瀬のない身になつたと思ひ詰めてゐたが、すると、この上一刻も東京などにゐる氣はしなくなつた。こんな土地に一人でゐるのが心細くなつて、「生きるも死ぬるも朝吉の側へ歸つてからのこと」と極めると、今までどうかして東京で手頼りを、求めやうとした幽かな心の力も弛んで、一圖に横濱の家へと急がれた。

新橋へ來て切符を買ふ前に、朝吉への土產に飴でも買つて行かうと思つて、金入の中を檢べると、中には名刺が二枚疊み込んであつた。入江といふ書生さんのと、張といふ支那人のと。

おすゑはふとこの二人の顏立や、柔しい言葉を思出して、廣い東京を顧みた。

(十)

汽車を下りた時は、長い日も暮れてゐたので、おすゑは家へ歸るのに都合がよかつた。路次近くなる

と、近所に氣を配つて、薄暗い所を擇んで通つた。足音さへも忍んだ。そして、自分の家の前まで來ると、戸の側に擦寄つて內の樣子を伺つた。母の聲も妹の聲もしてゐない。母に甘えてゐる子供の聲が隣の家から洩れて來るばかりである。

妹はまだ勸工場から歸つてゐないのか知らんと疑ひながら、結句妹のゐないのを喜んで、そつと戸を開けて這入ると、意外にも親子の姿が直ぐ目についた。

「あゝ、姉さんが」と、叫んで、妹は呆れた顔して立上つた。その聲に驚かされて、行火に頭を押付けてゐる母も顔を上げて、目を醒めて此方を見た。

「どうしたの、姉さん。さつき叔母さんが來て、そりや大變だつたよ。私達もどんなに心配したか知りやしない」と、妹は忙しく言葉を續けた。

おすゑは叔母といふ言葉を聞くとぎよつとした。「そして、叔母さんはどうして？」と、やうやく問返した。

「東京へ電話を掛けとくつて、今し方郵便局まで行つたところなの。……姉さんが今夜此方へ歸つて來なければ、警察へ願つて捜して貰ふなんて、叔母さんも大變心配してゐたよ。……でも、まあよかつたわね」

母親も行火から匍ひ出てて、娘の前に躙り寄つてくど〳〵譯を訊き出した。が、おすゑは自分の仕業について、母や妹を安心さすやうな詳しい話はしなかつた。

「叔母さんは怒つてゐるだらうね。」と、訊いて、最早何處へ行つても、叔母の手をのがれられぬのを覺悟した。

「いいえ、些とも怒つてやしないよ。只姉さんが無分別なことをしなければいゝがと、そればかり心配してゐたよ」

「私、叔母さんには本當に濟まないことをしちやつた」

おすゑは悲しさうな聲でかう云つたが、叔母がさして怒てはゐないのを知ると、心が稍々鎭まつた。で、火鉢の側へ寄つて、消えかゝつた火を熾して冷たい手を翳した。あたりをよく見ると、僅か四五日の間に家の中が一層汚れてゐるのが目に立つた。こんなだつたかと疑はれるほど、疊は赤茶けて、壁には罅隙が出來てゐる。そして物の饐えるやうな厭な臭いが鼻を襲つた。おすゑは夫に離れてから一年あまりこんな家で暮してゐたことを思ひ浮べ出したが、すると、

「そら、叔母さんだ」と、妹が悦しさうに叫んで、上り口へ駈けて行たので、おすゑも思はず振返つた。

叔母は些しも邪慳な顏付をしてゐなかつた。「お前さんも隨分人困らせをするぢやないかね。」と、一言怨みがましいことを云つただけだつた。

差向いて座つて、新橋で吃驚したことから、今までの道筋を口輕に話した。そして穩かにおすゑの腹の中を尋ねた。茶屋奉公が厭なら厭で、この先どうするつもりか、確かつりした量見がついてゐるのかと問詰めた。

「私、奉公が厭ぢやないんですけれどね」と、亦おすゑは涙ぐんで、「梅屋へだけはどうしても行く氣になれませんの。……」

「ぢや、早くさう云へばいゝのに。」と、叔母は事もなげに云つて、「外の家なら勤める氣はあるんだね。……お前さんは陰氣だから、あんな騷々しい家には性が合はないかも知れないよ。馴れてれば何でもないだけれどね」と、暫く考へてゐた。それを妙におすゑは、

「私、同じことなら東京で奉公したいと思ふんですがね」。と云つて、叔母に見棄てられまいとして、そのいゝ返事を待焦れた。

が、叔母はすぐに快く引受けては呉れなかつた。相手の心を危ぶむやうな口振であつた。どうせ今夜の終列車で歸ればいゝのだからと、緩くり話を極めることにした。そして、皆んなに蕎麥を奢つて、笑ひ興じながら箸を執つた。

「お前はあれから何處へ行つてたい。活動でも見てゐたの？」

叔母の言葉は冷語（ひやかし）のやうにおすゑの耳に響いた。で、「いくら私か馬鹿だつて、そんな氣樂な眞似が出來るものですか。どうして叔母さんにお侘びをしやうかと思つて、そればかりを考へてたんですわ」と、眞面目に言譯した。

「さうだらうね、お前のことだから。……だけど、今の若さでそんなに物を苦にしてゐちや、壽命が縮まつてしまうよ。あんまりずう／＼しい女になつても困るけれど、くよ／＼してゐたつて、何處からも

御褒美が出りやしないんだからね。若い内に些とは面白い目をしなきや詰らないと思ふよ。それも人によりけりだけど、お前なんぞ氣の持ちやう一つでこれからいくらもいゝ月日を送れるんさ。……梅屋へも彼處の主人と牛込の家とが懇意だから、私が無理に賴んで上げたのに、お前のやうだと私も張合が拔けちやつたよ」

叔母は調子に綾をつけてこんなに云つてゐたが、何となしに東京の戀しくなつてゐるおすゑの心には、それが一々力强く響いた。梅屋で默つて聞いてゐた朋輩の身の上話や、いろ〳〵の東京の客の浮いた話を思ひ出してゐると、その方へ心は惹寄せられた。何時までも此處に暮して、長島町の伊豆屋へ僅かの給金でその日稼に出て行くのは、甲斐性がなさ過ぎるやうに思はれた。それにこの前彼處の旦那に相談もしないで、梅屋へ行つたのだから、旦那も屹度氣を惡くしてゐるだらうと案ぜられた。

て、叔母の方から勸めるのを心待ちにしてゐたが、叔母は母や妹を相手にして、外の世間話をし出した。櫻が咲いたら一日花見に出掛けるやうにと、妹と約束したり、この秋の父親の法事には是非此方へ來て立派にしたいと云つたり、獨りで座を賑はせた。おすゑの顏にはちら〳〵目をつけながら、肝心な話は持出さないで、やがて時刻を見計つて、歸支度に取掛つた。

「梅屋へは私が二三日中に行つて、譯を云つて、荷物は直ぐに此方へ屆けることにしよう。おすゑさんもよく考へてお置き」と云置いて、煙草入を收めて立上つた。

おすゑは物足らぬ思ひをして、停車場まで見送つた。「今度東京へ來るやうだつたら、よく覺悟をして

お出てよ。迂潤に出て來ちや、お互ひに困るからね」と、別れ際に意味ありげに云つた。

(十一)

翌日朝早く、おすゑは土産物を持つて朝吉に會ひに行つて、久振りに乳を呑ませたり抱いてやつたりした。午后の半日は、隣近所の人から隠れるやうにして、陰氣な家の中で行火に當つて、寢てばかり暮した。母親に何か云はれても、つい角立つた返事をして、碌々食事をもしなかつた。そして、うと／＼しながら夢とも付かず、三浦だの入江だのゝ顏形を空に描いてゐた。すると、これまで覺えなかつた異様な快感が肉體にも傳はつた。最初夫に唆かされた折の有様さへまざ／＼と浮んで心に迫つた。……

目を瞑つてゐれば、果てもなく快い心持が續いて、いろ／＼の男に可愛がられ、いろ／＼の男と自由に好きな話をしてゐられるのであれば、目を開けて汚れた部屋で手足を動かす氣にはなれなかつた。

おすゑは假寢から昏睡に陷つた。そして無氣味な夢を見つづけてゐた。獸のやうな顏をした胸毛の濃い荒くれ男に追回はされ手籠にされさうになつて藻搔いてゐたが、母親に聲を掛けられて、ふと目を醒ました。

「やつぱり身體の加減が惡いのかね。大變魘されて」と、母親は行火越しに覗いた。

「うゝん。私何處も惡くないの」

「さうかい。……だけど、お茶屋奉公は隨分氣骨が折れることだらうな。おきくもいろ／＼と世話をして呉れるけれど、お前はもうそんな所は斷はつたらいゝだらう。長島町の旦那にお頼みすれば、生活は

立たんことはなからうから」

「私もう伊豆屋へ頼みに行かないよ」おすゑは拗ねたやうにさう云つて、母親から顔を背けて寢返りした。折々術なさゝうに溜息を吐いてゐた。

日が暮れて妹も歸つて來たが、おすゑは食事拵えをも母や妹に任せて、自分は手出しをしなかつた。そして、早く戸締りをして、三人枕を並べて寢床に就いた。妹は昨夕の夜更しと一日の疲れのために直ぐと眠入つたが、おすゑの目は却つて夜になつてから冴えてゐた。

と、ふと郵便の聲がして、戸の隙間から手紙が投込まれた。おすゑはランプを點けて枕許に蹲んで披いて見た。それは剛い男文字で書かれた叔母の手紙であつた。

「……梅屋の主人にはやうやく申譯相立ち候へば御安心なされたく候。さてお前樣の考へはいかが相成候や。若しも再び當地にて勤めたしと望み居り候はば、とくと決心して末永く勤めるつもりにてお出てあるやう呉々も注意申し候。さすれば荷物は當家にて預り置き申べく、若し何時までも御地にて暮らさるゝことに極り居らば、二三日中にお屆け申すべく候へば至急御返事下されたく候、尚只今よろしき勤め口は無之候へども、お前樣の覺悟次第にて、當分當家にて手助けをなし下さらば好都合と存じ候。主人も左樣申し居候。兎に角よく〳〵御考への上御返事相成たく待居候……」

おすゑはこれを讀むと俄かに浮立つた。母親を呼び起して、手紙の文句におまけをつけて話して、明

日の朝直ぐに出て行くことに決めた。そして、母親が氣遣はしがるのを頭から打消して、「私、これから氣を持直して、二三年せつせと稼いて、彼方で世帶を持つて、お母さんや朝吉を皆んな連れて行くことにしようと思ふよ」と、勢ひづいて云つた。

夜中に幾度もランプを點けては起上つて、する事もないのに家の中をまご〳〵してゐた。

（十二）

翌日さのやの閾を跨ぐと、叔母はあまりの早さに驚いた。「懲りもしないてまた來たんだね。もうとても來ないだらうと思つてゐたのに」と笑つて、機嫌よく迎へた。

「此方に置いて頂けるんでせうか」と云つて、おすゑは自分の堅い決心を徴見かした。

「當分手傳つてゐてお呉れな」と、叔母はおすゑに耳打ちして、も一人の女中は都合で暇を出すことになつてゐるから、當分その代りになつて勤めて呉れと云つた。

おすゑは叔母と二人て働くのが悅しかつた。て、見たところ人のよささうな老人の主婦に挨拶をして、事が極まると、直ぐに叔母の差圖を受けて甲斐々々しく立働いた。

此家の內輪の樣子も時々話して聞かされた。養子夫婦は此頃京橋て鳥屋を出してゐて、老婆は何もしなくつてもいゝのだけれど、住み馴れたこの土地を離れたくないと云つて、この稼業を續けてゐることや、今のところ殆んど叔母一人で切り廻してゐることなどが分つて來た。お光と云ふ小娘がよく京橋から遊びに來ては、金切聲を出して小間しやくれたことを喋舌つた。そして、老婆の前て常盤津を浚つた

り、女中を誘つてお汁粉を食べに行つたりした。おすゑも來た翌日お伴を云付けられて御馳走になつた。

梅屋のやうに座り込んで客のお相手をすることがないのは氣樂だつたが、その代り面白い浮いた話を聞くこともないし、朋輩のない代りに、老婆(おばあさん)やお光に一層餘計に氣兼ねをせねばならなかつた。實入りだつてとても梅屋と比べ者になりさうではなかつた。

「今階下(した)にゐた女中はこの頃此處へ來たのかい。一寸いゝ女だね。……あの女はどうかならんかい」と、ある老人の客が云つてゐるのが、おすゑの耳に這入つた。

「さうですねえ。貴下(あなた)ならいゝでせうよ。まあ當人に當つて御覧なさいな」と、叔母は笑ひながら答へてゐた。

「人を馬鹿にしてゐるよ。禿頭の癖に」と、おすゑは心で嘲つて、その座敷へ行くと、わざと無愛相にした。

二日三日と立つ間に、藝者に顔馴染も出來て、多少客の名前をも覺えた。一寸ぐらゐ叔母が家にゐなくてもさうまごつかなくなつた。

ある日、叔母が勘定の滯つてゐる客の家を二三軒催促に廻つてゐる留守の間、おすゑは老婆に灸を据ゑてやつてゐた。小さい艾では利かないと云はれて、思切つて大きくしたが、火が膚を灼くのを見てゐると、自分の方が却つて身體が慄えた。

「熱いでせうねえ」と、同情して訊くと、

「熱くなくつちや利かないよ。私の身體なぞは馬鹿になつてるから、灸が中々應へないんだよ。」と、云ひながら、老婆は齒を嚙締めて我慢してゐた。

身柱にも三里にも据ゑてしまうと、老婆はさも快ささうに息を吐いて、「お前も時々灸を据ゑるといゝよ。私が點を下して上げるから」と、今にもさうしさうだつたので、おすゑは恐れて逃げ出した。

と、そつと格子戸を開いて、靜かな聲がした。叔母の留守に變な客に來られてはと案じながら、出て見ると、客は梅屋で見たことのある人だつた。

「君は此方へ來てるんかね」と、客も氣がついた。

おすゑは二階へ案内して、奥の座敷へ通すまてに、やう／＼客の名前を思出した。「貴下は確か倉賀さんてしたわね」と馴々しく言葉を掛けた。

「君が此處にゐやうとは思はなかつた。三浦はこの頃此處へ來ないかい」

「どうてすか。私四五日前に來たばかりてすから、何方にもまだお目に掛りませんのてすよ」

おすゑは梅屋て會つた四人連れを思出した。一座の中て一番大人びて男前も立派だつた三浦や、皆んなに揶揄はれてゐた大井の顔付や話聲はよく心に殘つてゐれど、この人の事はぼんやり思出されるばかりだつた。ても、顔を知られてゐるだけに心が融けて、梅屋のあの日の話などしてゐると何となく懐かしかつた。「お馴染は？」と訊いて、藝者を呼ばうとしても、叔母さんが歸つてからていゝと云つて、倉賀は緣側近く寢そべつた。そして、座を立たうとするおすゑを引留めて、彼處を出て來た譯を訊いたり、

三浦や大井の身の上を話して聞かせたりした。

「叔母さんのコレは來るかい」と、ふと親指を突出したり、鼻を指差したりして變に笑ふので、

「コレつて何です」と、おすゑは怪んだ。

「何だ白ばくれて。……落語家(はなしか)の情夫(いろをとこ)さ。來るだらう」

「あんな事云つて入らつしやる」。

おすゑは戯談として聞流したが、倉賀は、「ぢや、君はまだ知らないんだね。よく氣をつけといて、今に遊びに來るから」と、誠しやかに云つた。

が、そんなことがあるものかと、おすゑは些しの疑ひをも起さなかつた。最早日影も縁側から退いて、そろ／＼晩の仕度をせねばならぬ頃となつたので、階下(した)へ下りて行つた。倉賀は緩くり遊んで行くつもりで、食べ物を誂えて酒をも言付けた。

叔母は丁度歸つて來たところで、衣服を着替えてゐた。倉賀の名を聞くと、「三浦さんの連中ではこの人が一番確かなんだよ」。と云つて、「とん子さんを掛けて？」と訊いた。そして、急しさうにおすゑに晩の差圖をしてから、二階へ上つて行つた。

お光は鳥を土産に持つて泊りがけて、遊びに來て、老婆の顔を見るや、「私、お腹が空いて／＼仕様がないの。紀の善のお壽司を御馳走して下さいな」と强請(せが)んだ。

おすゑは叔母の留守の間に樂をしたゞけ、何か知ら身體が忙しいのに、傍てお光がはしやぎ廻るので、

忌々しく思つた。少し窘めたらよさゝうに思ふのに、老婆は齒痒いほど甘かつた。

「こんなに我儘で贅澤で、末はどうするんだらう」と、自分がこのくらゐの年頃から、苦勞ばかりして誰れにも大事にされたことのないのを思合はせて、妬ましかつた。そして、壽司の殘りを小皿に取つて呉れても、心で逆ふつもりで、手を付けなかつた。

「遠慮深いわね。遠慮してちや人間は損よ……おすゑさんは叔母さんとは丸て性分が異はわね」と、お光は小間しやくれた口を利いた。それがおすゑの耳には痛く響いた。

灯が入ると、一度に三組も客が來て、座敷は塞がつてしまつた。おすゑは戸惑ひして、屢々叔母の小言を喰つた。倉賀は馴染のとん子を歸した後も、まだ愚圖々々してゐたが、おすゑの姿を見るたびに呼入れて、さも話したいことが溜つてゐるやうな口吻て話をした。

「まだ手が明かないんかね。何時もこんなに忙しんかい」

「いゝえ、さうてもないんですよ。今夜のやうなことは私が來て初めてすの」

「……僕は一つあの後の大井の話を緩くり君にして聞かせたいんだけど」と云掛けて、「も少し待つてるから、手が隙いたら僕を神樂坂まて送つてゝ呉れないか。今夜は緣日だから賑かだよ」

「中々遊びに出しては呉れないでせう。とん子さんを連れて入らつしやればいゝのに」

「いや、彼奴と歩くのは御免だよ。家鴨のやうな樣をして歩きやがるからね」と、倉賀はさも厭さうに眉を顰めて、「叔母さんに聞いて御覽。僕とならいゝつて云ふから」

「え、……」

おすゑは隣座敷で鳴つた手の音に答へて出て行つた。そしてその客を送出して、ふと外を見ると、淡い月が道を照らしてゐる。横町の抜道をぞろ〳〵通つてゐる人の姿は見えないで、足音や話聲のみ聞えた、おすゑも倉賀に付いて皆んなの行く方へ出て見たかつたので、邪氣ない氣持てそつと叔母に許しを乞ふたが、叔母は首を振つて「今夜はいけないよ」と、沒義道に斥けた。

意地惡く今夜は忙しかつた。倉賀の側へ行つて斷はつて、二言三言話をして來ると、帳場には坊主頭て顔のテカ〳〵光つた愛嬌のある男が、煙管を指先で器用に廻しながら、老婆を相手にべら〳〵喋舌つてゐる。

「一寸大急ぎて行つとくれ」と、叔母はおすゑに囁いた。

「あの人は誰れ？」と訊くと、

「幇間だよ」と答へて、叔母は考へ〳〵二三人藝者の名を差して、「あの人は決して同じ女を二度呼ばないんだから……」

「まあ厭だ」おすゑは呆れたやうに云つて、輕薄なその男を怖らしさうに見やつた。そんな男に買はれる藝者を憐んだり卑んだりしながら、二三軒廻つて歸ると、幇間はお光を前に置いて、爪彈きて「縁かいな」を唄つて聞かせてゐる。首て拍子を取り〳〵巫山戯て唄つてゐれど、その聲は震ひつきたいほどによかつた。

暫間は間もなく歸つた。おすゑは例にない氣忙しい思ひに疲れて、ガツカリした。夜食が濟むと、老婆もお光も寢床へ這入つた。叔母は手早く跡仕末をして、立膝で煙草を吸ひながら、眠たさうなおすゑを見詰めて、

「お前も何時までこんな事をしてもゐられまいね。もう厭になつたらう」と、相手の心を索るやうに云つた。

「私達とも厭だなんて思つてやしないわ。さう見えて？」

おすゑは强いて自分の辛抱氣を見せて喜ばせやうとしたが、叔母は意外にも、「こんな家に永くゐたつて仕方がないよ」と呟いた。そして、「一度よくお前に話したいことがあるんだね」と、意味ありげに云つた。

「話したいつてどんなこと？」

「さう急ぐこともないよ」

おすゑはそれを聞きたがつて焦れたが、叔母は進んで何も云はないで、話を客の噂に移しながら、寢仕度をした。

「でも、倉賀さんは隨分惡口言ひだわね。叔母さんには落語家の情夫があるんだなんて、酷いことを云ふのよ」と、おすゑは笑ひ〳〵何の氣なしに云つたが、すると、叔母は厭な顏をした。

「乞食にも私の情夫があるんだよ。どうだらうと大きなお世話さ」と、角立つた卑しい口調で云つて、枕に就いて脊を背けて口を噤んだ。

おすゑは嫌な氣がしたが、やがて、忌はしい疑ひが萌すと共に、云はてものことを口に出した自分の方が極りが惡くなつた。

叔母さへも倉賀さんの云つた通りなのだらうか。四十にもなつてゐるこの叔母でさへさうなのだらうか。……おすゑは只一人手頼りにしてゐる人が手頼りにならないやうに思はれた。

「皆んなさうなのだ……」おすゑは燈火を消して、叔母の側に敷かれた夜具の中へ息を殺して這入つた。更け行く夜に堪へがたい淋しさを覺えて獨り涙ぐんでゐた。

夜が明けると、叔母の樣子は不斷と少しも異つてはゐなかつたが、それでもおすゑの心には妙に隔てが出來た。以前よりも一層素直に差圖通りに働いてゐても、馴(なじ)んだ口は決して利かなかつた。

横濱からは妹が覺束ない筆で音信を寄越したので、皆んなが無事に暮してゐることは知れたが、此方から月末までにどれほどの金を送られるかと、自分ながら不安心だつた。里親へは成べく充分の心付けをして置きたいのだけれど、浮かりすると、極めただけの仕送りも危まれた。

三月も最早片手で數へられるほどの日數を殘してゐるばかり。おすゑは櫻の咲く町へ着て出られるやうな衣服一つ持つてゐなかつた。

叔母は一度云掛けて止めたことを、二三日立つてもハッキリ話さなかつた。只永くこの家に勤めてゐ

ても先の見込はないらしいことを、折に觸れては微めかした。だが、叔母が他所行の衣服を幾襲ねも持つてゐることはおすゑの目に留つてゐる。幾年も此處に勤めてゐるために、隨分お金も溜めてゐるらしいと、横濱の親類で噂してゐたのに。……

（十三）

二日置いて倉賀がまた遊びに來た。靜かに雨が降つて薄ら寒い晩であつた。おすゑはこの人になら氣兼をしないで、いろ〳〵の噂の聞かれるのを喜んだ。方々の土地を浮かれ歩いてゐるこの人達の氣樂な暮しは、言葉の端々から美しい夢のやうに描かれた。「今夜は暇らしいから、おれが叔母さんに斷つて、君を寄席へ連れて行かう」と、倉賀は云つた。

「私、東京の寄席へはまだ一度も行かないんですよ」

さう云つておすゑは、此方の寄席で今どんな事をしてゐるのかと、乘氣になつて訊いてゐたが、ふと叔母が小聲で呼んでゐるのに氣付いた。で、叔母が立つてゐる小暗い所へ出て行くと、「今勇吉さんが來てるから、お前さん階下へ下りちやいけないよ。――此處にはゐないことにしてるんだからね」と、顏を擦寄せて囁いた。

「さう？」と、おすゑは言葉は落着けたが、身體は顫へた。

「お前さんは會はない方がいゝの。私がよく話をしとくから」と、叔母は獨りで呑込んで、「私が呼ぶまで來ちやいけないよ。」と念を押して階下へ行つた。

おすゑはおど〳〵しながら、階子段の側へ來て。耳を澄ました。物音に紛れて話は少しも聞取れないけれど、折々男の聲が聞えた。何を云つてゐるのか、どんな風をして來てゐるのか、自分も其處へ出て行つて、長い間胸に溜つてゐる事を思ふさま云つてしまひたくなつたが、叔母に遮られてゐるので下りる譯に行かなかつた。叔母の上手な口先で夫が說伏せられれば、最早一生夫に會ふ道は絕えてしまひさうな氣がして、叔母の勝手な仕打が恨めしかつた。……

と、やがて襖が開いて、臺所の障子が開いて、男の出て行く氣色がした。おすゑは階子段の側の障子を細目に開けて、見えない夫の姿を雨の中に見送りながら、懷しい思ひを寄せてゐた。

「素直に歸つたよ」と、叔母は急いで上つて來て知らせた。「お前さんが見付からなくつてよかつたよ。幾度も來られちや煩いからね。」

「今何をしてゐるんてせう？」

「なんにもしてゐないらしいよ。此方にゐても思はしくないから、二三日中に濱に歸るんだつて。……私、うんと窘めてやりたかつたけど、汚い服裝をして萎れてるから可愛相てね、あんまり酷い口も利けなかつたよ。おすゑの居所を敎へて呉れつて云ふから、自分が棄てゝ出た女の居所を聞いてどうするんだと云つてやつたら、只一言おすゑに會つて謝りたいんだつて……」

叔母はさう云つて笑つた。おすゑはもつと立入つて訊かうとしたが、そこへ倉賀が出て來て、「何をこそ〳〵立話をしてるんだい」と近寄つたので、叔母一人を殘して、自分は階下へ下りた。玄關脇の自分

達の部屋には煙草盆と茶盆とが出してあつた。それを片付けながらふと見ると、字を書いた小さい紙片が落ちてゐる。「四谷左門町×番地久本たね方」勇吉の名がその下へ書かれてゐる。おすゑは拾上げて慌てゝ袂の中へ入れた。梅屋の電話口で聞いた住所が確かに此處だつたと、今やうやく思出された。

「寄席へ行きたきや行つといて、少し早目に歸りさへすればいゝから」と、叔母は二階から下りて來ると勸めた。

「私、さう行きたくはないの」と、おすゑは卒氣なく答へた。

「何故さ。今日のやうな暇な晩に行つといた方がいゝだらう。折角連れてゝやらうて人があるんだし……」叔母は頻く勸めて、「面白い話を聽いて少し笑つといて。氣が清々していゝ保養になるよ。今夜はお前さんによく話したいことがあるんだけど、それは歸つてからでいゝから」と口早に云つた。

おすゑは氣乘りがしなかつたが、皆んなに勸められるのを拒むことが出來なくて、倉賀に隨いて行くことにした。

倉賀は戸外へ出ると、「寄席も詰らないから、何か食べに行かうぢやないか」と、相手の氣を惹いたが、おすゑにはそんな後目たいことをする元氣はなつた。倉賀が傘を並べて歩きながら絶えず親しい話を仕掛けるのを聞外しては、空々しい返事をした。

「君はいやにぼんやりしてるね、どうかしたのかい」と、倉賀に怪まれた。

―ようでもないんですけど」と、おすゑは言淀んで、ふと目を上げて今通つてゐる途の左右に心を留めて、「私、近かにあの家を出やうと思つてますの」

「そして何處へ行くんだい。」

「……」

「外へ行つたら僕に知らしとくれよ。僕は其處へ遊びに行くから」と、倉賀は笑つて、「叔母さんに仕込まれると、おすゑさんも人間が異つて來るだらうね」

二人の姿は屢々往來の人に顧みられた。おすゑは若い男と連立つて歩くのは珍らしいので、人目が眩しかつた。寄席へ這入つても隅の方を擇んで座を占めたが、知合ひの藝者が此方を見て會釋した。

高座では上方辯の落語家が、不人情な女郎とのろい男の話をし出した。女の心を試さうとして死ぬる約束をして、橋の際まで連立したが、女は甘い言譯を考へた。……同じ場所から一緒に身投げしたらあの世で添へぬと聞いてゐる。同じ時刻に場所を違へて死なうではないか、南無阿彌陀佛の聲を合圖に、私はあちらの岸から身を投げますと。女は後をも見ずに驅出した。……そして、闇を隔てゝ男にこの世の別れを告げながら、念佛の聲と共に大きな石を自分の身代りに投込んだ。……

聽手は腹を抱へて笑つてゐたが、おすゑは可笑しいよりも、女が憎らしくて男が可愛さうに思はれた。落語家の巧みな言葉や身振で、夫が女郎に迷つて騙されてゐる樣子がまざ／＼と見せつけられた。そして、ふいと話が切れて、拍手の中に落語家が引下つてからも、その男と女との後日の成行が眞面目に考

へられた。

引讀いて支那人の曲藝や、白粉を塗立てた小娘の手踊りなどがあつたが、倉賀はさして興もないらしく、「もう歸らうか。君はまだ聽いてゐたいのかい」と訊いた。「私もう澤山。」と、おすゑは高座のお道化た身振に最後の目を向けて立上つた。

倉賀は直ぐにさのやへ歸らうとはしないで、勸工場へ這入つたり、ビヤホールへ這つたりした。おすゑは素直に引廻されてゐたが、やがて醉心地になつた倉賀は、手を執つて寄掛つて、さのや近くなると、「今夜僕は獨りて泊るから、夜中に僕の所へお出てよ。いゝかい待つてるよ」と囁いて、女の肩を搖つた。

おすゑは戯談としては聞けなくて、顏を赭くした。男の手をすり抜けて家へ掛込むと、叔母は機嫌のいゝ顏をして迎へて、

「面白かつたかい」

「えゝ」と、曖昧に答へて、おすゑは冷たい手を火鉢に翳した。倉賀の世話は叔母に任せて、自分は二階の座敷へ姿を見せなかつた。

倉賀は獨りて泊ることになつたらしい。とん子は貰ひが利かないし、外の女を呼ぶ樣子も見えなかつた。おすゑは外で囁かれた言葉を思出しては、胸を轟かせてゐた。叔母の命令で仕方なしに茶を持つて上つたが、相手の顏は見ないやうにして逃げて來た。

雨は降るし客は少いし、早目に寢ることにして、叔母と二人女中部屋へ這入つた。が、叔母は直ぐに寢ようとはしないで、おすゑを前に引据ゑて、「私はお前さんのためを思つて云ふんだから、そのつもりて聞いてお呉れよ」と、改まつた口吻で、かねて云はうとしてゐた話の糸口を披いた。

「勇吉さんはとても見込みはないんだし、若い女が一人ぢや世は渡れないんだからね。それにお前さんは厄介者を脊負つてるんだから、誰れか確かりした後立てがなくちや何かにつけて心細いよ」と云つて、暫く言葉を切つてから、「私が話したのぢやけれどね、老婆さんにても聞いたのだらうよ。お前さんの身の上をよく知つてゐる、そんな女なら世話をしてやらうつて云ふ人があるんだがね。……さうすればちやんとした家を一軒持たせて貰えて、お前さんの望み次第で朝吉を側に置きたければ連れて來たつて構はないんだよ。こんな家に奉公してるよりや、その方がどの位勝しだか知れないと思ふがね。私にしても時々遊びに行ける家が出來て樂みだし、お前さんも好きな所へ遊びに行かれるしさ。」

まあ緩くり考へて返事をせよと、叔母は口では云ひながら、座を動かないで、相手の顔を見詰めた。目付で返事を迫つてゐた。

が、おすゑはこの意外の話に驚いてゐて、どちらとも答へる力はなかつた。

「その人は田舍の人だから、年中此方にゐるんぢやないの。只ね、此方に來てゐる間宿屋暮しは窮屈だから、氣立てのいゝ女があつたら、一軒家を借りて置きたいつて、かねてさう云つてゐるの。」

叔母がかう話を續けたので、おすゑの心にもその男の姿形が浮んで來た。それは一度この家に泊つたことのある上州の商人で、大抵の藝者では納らないと叔母の零して居た五十近いお客であつた。すると、おすゑはこんな男の世話になれよと、本氣で勸めてゐる叔母の顔が怖く見えた。で、手を合せて許しを乞はぬばかりに、

「私はとても人樣の御機嫌は取れないんですから」と哀れげな聲を出すと、

「お前さんも男で苦勞してゐる癖に、何時までも子供のやうだね」と、叔母は微笑して、「機嫌を取るも取らぬも、その人は滅多に此方にやゐないんだよ。不斷はお前さん一人で、好きなやうにして暮されるぢやないかね。これで朝吉でもなければ、また相當な所へ片付いて。共稼ぎで世帶を持たうつて事もあらうけれど、あの子があつちや一寸六ケ敷からうよ。それに、もう生娘ぢやなし、地道に世を渡つて苦勞してゐたつて詰らないぢやないかね。」

生娘ぢやなしと云つた叔母の言葉は、おすゑの耳に鋭い錐のやうに應へた。「私なんぞ生きてゐたつて仕方がないんだわ」と、ホロ〱落ちる涙を袂で蔽ふた。

「何だよ、氣の弱い」と、叔母は笑ひ〱叱つて、「面白い日を送るのも、厭な思ひをして日を暮すのも、人間は氣の持ちやう一つだよ。……お前さんのやうに何時も引込思案をして、いゝ運が向いて來かけても取逃がしてばかりゐちや、後で後悔しても追付かないよ。」

「……ですけど、世間の人の眞似は私には出來ないの。こんな性分ですから」

「損な性分だね」と、叔母は、嘲けるやうに云つたが、直ぐに柔しい調子で、「そんな事はどちらでもいゝとして、二三日中には彼方へお金を送らなくちやなるまいよ。朝吉の方へもお母さんの方へも……」

「私此間からその事ばかり考へてゐるの」と云ひかけて、おすゑはふと叔母に助けを乞ふのが厭な氣がしたので、「だけど、私一人でどうかしやうと思つてるわ」と、言葉強く云ひ切つた。

話はそれで止絶えた。叔母は明日の日もあればと、おすゑを促して寢床に就いた。

おすゑの高ぶつた神經には、いた〳〵しい朝吉の姿や、田舍の商人や、夫の姿が今其處にゐるやうにまざ〳〵と思出されてゐた。「もうかうしてはゐられない」と、ふと首を持上げては、きよろ〳〵闇の中を見廻した。

帳場の柱時計は一時を打つた。便所へ行くのか、階子段に客の足音が響いた。その音を聞くと共に、おすゑの心に薄らいてゐた倉賀の言葉が、再び生々と浮上つた。力強く胸迫つて來た。……あの足音は倉賀の足音で、一度云つた言葉を戯談にしないで、宵から眠らずに待つてゐるのではなからうか。……自分に思ひを寄せてゐる男に待呆けさせて夜を明かさせては濟まない。……と、おすゑは溜息吐いた。

正體なく眠つてゐる叔母の側を拔出て、階子段を傳つて、廊下の電燈を消して、奥の座敷へ這入つて行く。……おすゑはその有樣を空に描き〳〵して、快い胸の鼓動を覺えてゐた。倉賀の手に縋りさへすれば何でも聞いて貰へる。皆んなに意地められて術ない思ひをしてゐる私を庇つて貰へる。……

おすゑは眠苦しいこの暗い部屋を出やうとして、ふら〳〵と身を持上げたが、足は進まなかつた。そして、暫くして、薄明るい燈火の側で膝と膝とを擦寄せて、倉賀の顔を仰ぎ見ながら、身を震はせて何か訴へてゐたが、氣がつくと、それはふと目蕩んだ間の夢であつた。夜は容易に明けさうてはない。氣立ましい音をさせて猫は鼠を追掛けてゐる。

おすゑは氣が疲れ果てゝ、最早物を考込んで苦しんだり樂んだりする力は失せた。今は只夜の明けるのを待遠しがつて、いら〳〵するばかりだつた。

牛乳配達の俥の音が通つて、老婆の咳拂ひが聞え出すと、おすゑは早くも雨戸を開けて、雨雲の消えた朗かな朝景色に面を觸れてゐた。薄目を開けて此方を見た叔母は、何かブツ〳〵云つてゐたが、再び枕を仕直して眠つた。おすゑは叔母の寢顔を顧みて、世にも忌はしい小憎らしい人であるやうに蔑視んだ。

雀は庭先に囀つて、朝日は障子に冴えた光を投げた。おすゑは叔母の手助けなぞして働く氣はなかつたが、老婆に聲を掛けられると、不斷の通り襷掛けて、甲斐々々しく身體を動かした。

と、そこへ倉賀が二階から顔を洗ひに下りて來た。氣持よげにニコ〳〵して、「一人の方が却つてよく眠れるよ」と、誰れに云ふともなく云つた。そして、おすゑが後で茶を入れて二階へ持つて行つても、昨夕の事は忘れたやうに何とも云出さなかつた。

おすゑには倉賀の心の底が分りかねた。いろ〳〵に考へ直してゐたが、さうする中に、倉賀は色も香

もなく歸つてしまつた。頼みになる言葉一つ後へ殘さなかつた。

（十四）

朝の用事が片付くと、叔母は一人で湯屋へ行つた。おすゑは叔母の留守の間にこそ、自分の量見を極めねばならぬやうに心が急かれた。で、前後をとくと考へる暇もなく、「一寸其處まで買物に行つてまゐります」と老婆に斷はつて、羽織を引掛けて出た。夢中で坂下まで歩いて、其處から電車に乘つた。夫の居所は書殘して呉れた紙切れを出して見なくても、空でよく覺えてゐる。

車掌に訊いて下りた所は、先日歩き廻つた所だつた。幾度も人に訊いてその家を搜してゐる中にも、若しや叔母が後から追駈けて來はしないかと氣が氣でなかつた。分り難い路次裏をまご／＼して、やうやく「久本」といふ表札を見當てた時には、悦しさに聲が震えた。何となしに安心して、夫に會つた後のことなど碌に心に浮ばなかつた。

「二階にゐますよ」と、子供に添乳をしてゐる主婦が存在な聲を出して顧みた。

垢の付いた古い書物や、さま／＼の古道具が上り口を塞いでゐる。おすゑはそれを避けて通つて、階子段に足を掛けたが、上り切るまでには可成りの時がかゝつた。隅へ身を寄せて、そつと覗くと、毛布にくるまつて寢ころんでゐた男は、窶れた顏を持上げて此方に目を据ゑてゐた。

目と目とを見合はすと、おすゑは思はず顏を背けて、上り口に座つた。

「お前も大層變つたぢやないか。今は何處にゐるんだい」暫くしてから云つた男の聲は哀れつぽく響い

た。

おすゑは直ぐには答へないで、顔を背けたまゝ涙ぐんでゐた。

「東京へ出て來てからは、お前も些とは氣樂になつたらう」と、男は續いて云つたが、それが皮肉に聞えたので、おすゑは顏を上げて正面に男を見て、

「何が氣樂なの。……氣樂だなんて、私一日だつて氣樂な思ひしたことはありやしない」と、涙聲で云つた。そして、かねて胸にまつはつてゐた恨み言が一時に込上つて來たが、氣强かつたあの頃の影もない弱々しい男の有樣を見てゐると、つけ〳〵と云ひたい事も云へなかつた。自分の所行を佗びてゐるやうに男の目はしほ〳〵してゐる。

「私、東京へ來たくつて來たんぢやないわ。一日もこんな所にゐたいとは思つてやしないわ。」

「それはさうだらうが、今は何處に奉公してるんだい。おれはお前が梅屋に奉公してるつて、此間伊勢崎町の彙公に聞いたから、電話を掛けたんだぜ。その時來ると云つときながら、何時まで待つてゝも來ないから、わざ〳〵訪ねて行くと、もうゐないんだもの。」

「だつて、私、不意だから吃驚しちやつて、電話の話がよく聞えないだもの。……だけど、四谷と云ふことだけはうろ覺えに覺えたから、東京へ來ると、幾度この邊を搜したか知りやしないわ」

「おれはまたお前がおれを怖がつて會はないんだらうと思つてた」男は淋しい笑ひを浮べてさう云つて、毛布と枕とを隅の方へ投げやつた。

おすゑは箒を入れたこともなさゝうに埃の積つた部屋を見廻して、こんな所にごろ〳〵してゐて何をしてゐるんだらうと怪みながら、別れて後の話が男の口から出るのを待つてゐた。この人にしてもあれからいゝ事はなかつたのに違ひない。自分達を困らせた報いがない筈はない。「この頃になつて私の有難味が分つたらう」と思ふと、いくらか胸が透くやうだつた。

男は押入から煙草の袋を捜出して、粉煙草を煙管に詰めながら、「お前は、さゝのやにゐるんぢやないんか。叔母さんの話だと、お前は東京にはゐないつて云ふことだつたが、屹度あの人の指金で、身體の極りを付けやうとしてるんだなと、おれは勘付いたよ。……どうせおれは自分の勝手な事ばかりしといて、今になつてお前と元のやうにならうなんて、そんな圖々しい事は云へた義理ぢやないんだからね。云つたからつて誰れも信用すりやすまいしさ。だから、何處かいゝ所があつて、お前が仕合せな身になるやうなら、それに越したことはないと思つてるんだ。……叔母さんの口振が何だかそんな風に取れたが、さうぢやないんかい」と、落着いて、ボツリ〳〵云つた。

「あんな人の云ふ事が何で當てになるものかね。私あの人のためにどれほど迷惑したか知れないわ。騙して東京へ連れて來といて、私些ともいゝ事はないの」

おすゑはさう云ひながら、ふと叔母が今にも跡を追つて來るかも知れぬと案ぜられ出した。「私、今日も叔母さんが行つちやいけないと云ふのに、隠れて來たんだから、此處て緩くりしちやゐられないよ。屹度捜しに來るから」

「なに、構はないさ。おれの所へ來たつて叔母が愚圖々々云ふ譯がないぢやないか。おれの方でこそ文句を云つてやらあ」

さつきとは打つて變つて、男の聲には力が籠つてゐて、おすゑも氣丈夫に感じたが、叔母を離れたその後の身の仕末を思ふと、流石に心細かつた。

「私ね、自分は死なうと生きやうと、どうなつても構はないけど、朝吉だけは饑じい思ひをさせたくないの。滿足な身體はしてゐないし、長くつて二年か三年の壽命だと云ふから、その代り生きてゐる間心殘りのないやうに大切に育てゝやりたいと思つてるの。あの子を打遣らかしとくやうな不人情な心になれたら、私東京なんぞへ來てまごまごしてゐやしないよ」

「さう云はれると、おれも面目ないが、しかし、おれも遠方へ行つてさんざん苦勞して來たんだぜ。この一月に東京へ來てからは、性根を入れて眞面目に稼いて、先の見込が立ち次第、ちやんとした服裝でもして、久振りに波へ歸らうと思つてゐたのさ。一年の餘も立つてるんだから、お前達の身もどうなつてることやら分らないし、浮かり手紙をやつても吃驚させるばかりだと思つて、おれが自分で會ひに行くまで居所も知らさないつもりだつたよ。……ミシンの方ぢや仕事の口が目付からなくつて、當座の口過ぎに、此處の主人の手助けをして古道具の賣買をやつてゐたんだが、運が惡くなつちや仕方がないもんだ。上方で病付いた脚氣がこの頃またぶり返して、毎日ごろごろしてるんだ。……久振りでお前に會ふのにこんな樣て會ひたかあなかつた」

「おや、今は丸つきり遊んでるんだわね。病氣は醫者に診て貰つてるの」おすゑは次第に他人の事として平氣ではゐられなくなつた。

「さう心配するほどでもないんだ」と男は云紛らせたが、「しかし、働かないで他人の家にゐるのはつらいものだぜ。厭な顏もされんけれど氣が引けて、病氣よりもその方が餘程つらいよ。」

そこへ、主婦が上り口から顏を出して、茶盆を置いて、女の後姿を竊見した。勇吉は主婦を呼んで、馴々しい口調でおすゑに引合せた後、階子段の側へ出て、誰れか來ても留守を使はせるやうに主婦に耳打した。そして女下駄をも隱させた。主婦は首付きながら勇吉と顏を見合せて微笑した。

最早飯時になつてゐるので、勇吉は何か御馳走をしやうと云出したが、おすゑはそれを遮つて、自分て使ひに立つた。手近の蕎麥屋へ行つて、主婦の分をも誂えて、代は拂つて來た。次手に敷島を一つ買つて來て男に與へた。亂れた部屋を片付けて、一年あまり手一つで暮して來た自分の苦勞話をしながら、久振りで差向ひの食事をした。男が一々身を入れて聞いて呉れるので、おすゑは話しても〱倦まなかつた。

「だけど、お前も此方へ來てから磨いたと見えて、見違えるほど奇麗になつたぜ」と、男はふと話を遮つて、眞顏で云つた。

「厭だよ、冷かしたりして、私本氣で話をしてゐるのに」と、おすゑは目を峙てたが、口元には微かな

笑ひを洩らした。

男は肱枕て横になつて、息の通ふほどに膝を進めてゐる女の顔を見詰めて、おれだつて本氣だね。……て、何かい。もうあの家へ歸らないつもりなのかい」

「歸らうたつて歸れりしやしないよ。二度と叔母さんの顔は見ないつもりで出て來たのだもの。私何だかあの人が恐いよ」

「ぢや、これからお前はどうしやうと云ふんだい。」

「だから相談しやうと思つてるんだわ。……どうしたらいゝと思つて？。今日にも横濱の方へ幾らか送らなきやならんのだし」

さう云つておすゑは、男の口から洩れる答へて、自分の運が極まるやうに、只管待構えてゐたが、男は「さうだなあ」と空々しく云つたゞけて、さして考へてゐる風もなく、一圖に烟草の煙を吐いてゐた。

「私、濱へ歸つても、また伊豆屋の仕事をさして貰えるかどうだか分らないのよ」と、おすゑは心細げに云つたが、男は

「さうか。彼處の老爺も口先ばかり甘いけど、腹は剛慾だからね」と、だるい聲て答へたゞけて、口を噤んだ。

おすゑは張合ひがなかつた。男の樣子が如何にも氣力が盡きてゐるやうに思はれたが、すると自分の心も滅入り込んだ。思ひの外に男の方から折れて出て、昔の邪慳な影もないのに、長い間の恨みも忘れ

て、我れから懐つこい話に耽つてゐたけれど、よく思ひ直すと、話した甲斐はなかつた。……て、おすゑも口を噤んだ。

部屋の中は寂とした。日當りは惡いが、顔に觸れる風は溫くて柔かい。直ぐ窓の下でザブ〳〵洗濯をしてゐる主婦が、隣の家へ向つて高聲で話を仕掛けてゐるのがはつきり聞えた。他所の猫に魚を取られた話だつた。おすゑはその話を聞くともなく聞いてゐたが、すると、男は不意に身を起した。

「ぢや、叔母の世話にならないで、も一度奉公に出たらどうだい。」男の見据えた目にも聲にも力が入つてゐた。「譯を云つて賴めば此處の主婦がいい奉公口を見つけて吳れるよ。お前もわざ〳〵思立つて東京へ來たほどなら、一つ辛抱する氣になつたらどうだい。お前も運が惡くて、おれのためには隨分苦勞をさゝれたのだが、いつそ苦勞の爲次手に、朝吉やお袋のために、もう一苦勞する氣にやなれないかい。おれも何時までこんなぢやないよ。身體の加減が少しよくなりさへすれば、今度こそ死に身になつて稼いて、お前達にも樂をさせたいと思つてるんだ。今まで困らせた埋合せをしなけれりやおれも寢醒めが惡いやな。……だから、もう少しいの間だから、お前は目を瞑つて、他所で勤めるといふ氣になつて吳れんかね」

情愛を含んだ口調で說かれると、おすゑの心には悲しいやうな悅しいやうな感情が波打つた。皆んなを助けるためになら、自分の手足を捥がれたつて厭はないと、夢心地で思ひながら、「そりや身內の者のためになれば、私どんな辛抱でもするよ。梅屋だつて何處だつて、私決して我儘で逃出したんぢや

ないの」。

「お前にその決心がありさへすりや、主婦にも相談して見るがね」。と云つて、男は何か考へながらも、女から目を放さないで、「しかし、今月も後二三日だからね。奉公の口があつたつて、當前ぢや前借りは出來ないしね。……お前いくらか持つてるんかい」

「持つてる譯がないわ。彼處から貰える者も叔母さんが預つてるんだし」。と云つて、おすゑは「矢張り駄目だわね。……せめて今月一杯梅屋にゐればよかつたけど」と、溜息吐いた。

「さう氣を落さなくつてもいゝよ。おれがよく主婦に相談して見らあ。……兎に角話が極まるまでは此處へ泊つてゐればいゝんだから、自分の家へ歸つたつもりでゐるがいゝ」

「……この家で變に思ふだらうね」

「何故？。他人を引張り込んだのぢやあるまいし」

「だけど……」おすゑは自分で變な氣がした。夫と二人で東京の他人の二階で、かうして打明け話をしてゐるのは夢のやうだつた。夢にも見なかつた事だつた。

（十五）

おすゑは此處へ泊ることに極めると、押入れを開けて、汚れたシャツや股引を出して洗濯したり、階子段にまで雑布を掛けたりして。馴々しい話を仕掛ける主婦に答へながら、目を醒ました赤ん坊を抱いて綾したりした。「赤ちやんに何を買つて上げてもよう御座んすか」と云つて、表へ出て、朝吉に食べさ

せるやうな白い飴を買つて、自分の齒で嚙碎いて與へた。

　勇吉はおすゑが側を離れてゐる間に、主婦に向つて女の身の振方をひそ〳〵相談してゐた。

來るかと氣にしてゐた叔母は、長い日が暮れるまでつひに姿を見せなかつた。「今度は弱身があるから、叔母さんも諦めてるんだわね」と、おすゑは男に云つた。

　晩餐も階下で家の者と一緒に食べるのをおすゑは厭がつたので、二人だけ二階で別に食べることにした。

「お前さんは食料を拂つてるの」と、おすゑは箸を執つてから訊いた。

「そんな心配をしなくてもいゝよ」

「でも、私まで御馳走になつて濟まないわね。かうしてお膳立をして貰つて食べるのは勿體ないわね」

　おすゑは鹽辛い燒魚をも快く味つた。成らう事なら、何處へも行かないで、こんな家にでも何時までも住んでゐたいと思ひながら、「あゝ甘しかつた。私ね、この頃は御飯炊きが上手になつてよ。明日の朝私が炊いて上げちやどう？」と、媚びるやうに云つた。

　そして、ランプの側でシヤツのボタンをつけたり、綻びを縫つたりしてゐると、男は壁に凭れて足を投出して、暫く行つてゐた上方の話を面白さうにして聞かせた。巧みに訛を眞似ては笑はせた。おすゑも世智辛い話から心を遠さけて、何か男を笑はせるやうな面白い話をと考へたが、自分の橫濱での暮しには何も話の種がないので、僅かな間梅屋やさのやで見た客の遊び振りを大袈裟に話出した。が、話し

てゐる中に、倉賀や入江や、自分に親切だつた客の顔付が名殘惜く浮んで、ともすれば心が沈み勝ちになつた。

階下(した)では寢靜まつて夜は更けた。おすゑは夫の言付けるまゝに寢床を延べた。自分の枕には夫が出して與れた古道具入れの小さい箱を手拭を掛けて用ひた。そして、窮屈な寢床の中にゐても、夫の息の音を聞いてゐると、何となく心が安まつて、この頃に珍らしくすや〳〵と無邪氣な眠りに陷つた。

翌朝誰れかに呼起されたやうな氣がして、目を醒ましたが、夫はまだ眠入つてゐる。おすゑは半ば夢心地で男の寢顔を見ながら、今日からの身の上を考へ出した。此處にゐたいにはゐたいけれども、食料をも收めないで二人が厄介になつてゐると思ふと、今朝の朝餐さへ平氣で食べられさうではなかつた。室代も食料もちやんと拂つて、心置きなくしたいにも、自分の財布には横濱までの汽車賃ぐらゐしか殘つてゐない。……濱へ歸つたところでいゝ當てもなければ、幾度も逃げて歸つては母親の手前が耻しい。

おすゑは獨りでそんな事を考へてゐるのが堪へがたくなつて、男を揺起した。

「私ぼんやりしちやゐられないわ。どうしたらいゝだらうね」と、何かに脅かされてゐるやうに云つて、男の憐みを求めた。そして、當てになりさうでない昨夕の話を賴む氣になつた。「此處の主婦(おかみさん)が世話をして與れるつてどんな所？」

「一寸相談はして見たがね。おれはあまり望ましくもないんだ。五十や六十の金は直ぐ貸して與れると

いふんだけど……」と、男はさも氣乘りのしないやうに云つた。
「そんなに貸して與れて？」おすゑは信じかねて、「ぢや、厭な商賣をするんぢやないの？」
「なにさうぢやない」と、男は力強く打消して、「そんな心配はないが、何しろ田舍へ行くんだからね。……實は主婦の從弟が上州の何處かで料理屋を出してるんでね、其處なら、主婦が口を利けば、少しの無理は聞いて貰へるんだ。幸ひその從弟といふのが今東京へ奉公人を捜しに來てるさうだから、話を付けやうと思へば、今日に今日でも事が運ばないことはないんだがね。……しかし、お前も田舍へ行く氣にはなれないだらう。上州なら汽車で僅か二三時間で行かれるんだけど」
男は遠慮勝ちに、勸めるやうな勸めないやうな口吻でから云ひながら、物思はしげな女の素振から目を放さないで、「念のために、お前が直かに主婦からよく聞いて見るといゝよ」
「だつて、私そんな事を訊きたくないわ」と、おすゑは萎れて、「あゝ厭だ」と溜息を吐いた。知人のゐない心細い田舍へ行く氣にはとてもなれなかつた。
「おれも無理に勸めたかないよ。しかし、今の場合だから、お前が我慢して行く氣になつたら、おれも早く身體をよくして、都合の付次第迎ひに行つてやるぜ。田舍だと不自由な事のある代り、東京から行きや幅が利くし、それにお前は只の一月でも此方のお茶屋に奉公して手心を知つてるんだから、さう勤めづらくはないだらう。兎に角主婦によく聞いて御覽」
さう云つて、男は今直ぐにも主婦を呼んで來やうとして立上つたが、おすゑは慌てて引留めた。「まあ

待つて頂戴。私もつとよく考へて見たいから……」

目を潤ませて首垂れた女と、座り直して腕組みして乾いた唇を舐めずつてゐる男との間には暫く言葉が止切れてゐた。が、やがて、男の方から口を開いた。

「おれも久振りで會ってこんな話はしたかあないよ」

歎息して云つた男の言葉が柔く耳に響くと、おすゑは追ひ詰められてゐた物思ひから放れた。「お前さんが其處へ行けつて云ふのなら、私行つてよ。だけど……」と、言淀んで、「私ね、から思ふの。どうせ私達は運が惡いんだから、この先だつてとても樂な思ひは出來やしないよ。二人が久振りで會つたつて、朝吉やお母さんの側へ行つて皆んな揃つて暮らす譯には行かないし、……また別れ〳〵になるんなら、私生きてゝも詰まらないと思つてよ」

袂を顔に當てゝ吃逆上げながら「お前さんさう思はないの？」と、男に迫つた。

男は相應しい返事の爲樣もなくつて、輕く女の脊を撫でゝ顔を上げさせた。「ぢや、今の話を止めにすればいゝぢやないか。おれが何とか考へて、朝吉の世話をすることにしよう」と宥めると、

「そんなことが出來て？。氣安めを云つたつて駄目よ」と、おすゑは甘へるやうに云つた。

「しかし今のおれの身になつて見て呉れ。お前はまだ心の持ちやう一つで稼げんこともないが、おれは今に今稼がうたつて稼ぎやうはないし、一人ぼつちでこんな所に居候になつてるんぢやないか。どうかしてお前達に安心させる身分になつて、これまでの罪ほろぼしをしやうと思へばこそ。そんな氣もなけ

れば、おれはとつくに首てもくゝつて死んぢまつてらあ」
「お前さんも死にたい氣になることがあつて?」と、おすゑは、男の言葉に縋りついた。…「死ぬる氣があるんなら、一緒に死んで吳れなくつて」と落着いた調子で云つた。
「おれこそ皆んなに迷惑ばかり掛けて來たんだから、何時死んだつていゝけれど、お前は苦勞ばかりして、今死んぢや詰らないぢやないか。」
「いゝえ、私死ぬるのを厭とは思はないの。田舍へ行つて奉公したり、知らない人の中へ出て意地められてるよりや、死ぬる方が餘程氣樂だと思つてゐてよ。お前さんが一緒に死んで吳れるんなら、今直ぐにても死んでよ。些とも怖かあないの」
「乾度だね。その時になつて氣憶れはしないだらうね。」
おすゑは男の膝の上に顏を伏せたまゝ首付いた。そして、このまゝぐつと刀を突刺されても構はないと覺悟をしてゐた。息が絶えたなら、何處か奇麗な所へ飛んで行けさうな氣になつて、うつとり夢見心地になつてゐた。
「おい、こんな所を主婦に見られたら變に思はれるぜ」と、男は階子段の方に氣をつけながら、おすゑを抱起して囁いた。「死ぬるにしても、今此處で死ぬりやしないさ。晩まで待つて居れ。おれが藥を買つて來るから。…いよ〳〵死ぬと極まれば、おれもこの世に心殘りのないやうに仕末をつけときたいし、お前だつて家の者に書置きくらゐはしなきやなるまい」。

おすゑは默つてゐたが、得心したやうな顔付て男を見た。「ぢや、今日一日だわね」と、やがて涙聲で云つて、今まで忘れてゐた部屋のまはりに心を向けた。煤けた低い天井も赤茶けた疊も、見馴れない不思議な者のやうに見えた。二人が此處に向合つて座つてゐるのも不思議に思はれた。そして、子供の泣聲や賑かな物音を聞くにつけても、世間に變つた事が出來てゐるやうに感ぜられた。

階子段からは煙が舞上つて、部屋の中に淡く渦卷いた。男は吸ひかけの煙草を置いて、帶を締直して階下へ行きかけたが、すると其處へ主婦が手紙を投込んだ。見ると、牛込の叔母からおすゑに宛てた手紙だつたので、男は後戻りして、

「何を云つて來たんだらう、おれが讀んでもいゝかい」と訊いて、女の答へをも待たずに、封を切つた。

「訪ねて來ても會へないだらうと思つて、手紙て呼寄せやうと思つてるんだ」と鼻て笑つて、手紙を投出して階下へ下りた。

おすゑはそれを拾つて目をつけた。「……兎に角この手紙着次第一度お出て下さるたく呉々も賴み上げ候。決してお前樣の爲にならぬことは申し上げず候間、安心してお出て下されたく候。お前樣の望み通りのよろしき話も數々これあり候へば、至急お目にかゝりたく待居り候……」と書いてあつた。

「だけど、もうあの人には會ひたくない」と、おすゑは最早知人の誰れにも會ふまいと思つた。主婦にも顔を見られないやうに言葉を掛けられぬやうにと避けて、階下へ下りるにも拔足した。

財布をそのまゝ男の手に渡して、食事は外から取寄せることにした。一刻も男の側を離れるのが心細くて、男が立上るたびに慌てゝ縋付きさうにしたが、男は毒藥を買つて來ると云つて出て行つた。

おすゑは母親や叔母に宛てた遺書をつくらうとして、紙片を前に置いた。が、どう書かうかと思つてゐる間に、心は外へ逸れて、書馴れぬ六ヶ敷文字などとても書けなかつた。只誰れにも會はないで、今夜死に果てる自分の身の上を思詰めてはうつとりしてゐた。

男は容易に歸つて來なかつた。おすゑは待ちあぐんで居ても立つてもゐられない氣がした。賑かな窓の外へ顔を出すのが怖いやうなので、そつと障子を細目に開けて覘いたが、見ても／＼夫の姿は現はれなかつた。打ちやつて逃げたのかとも疑はれたが、夫の窶れた顔付や元氣のない言葉を思浮べると、疑ひは直ぐに打消された。「あの人にしても、生きてゐたつて仕方がないのだ。死にたいのに違ひない」と、男の心も自分と同じやうにのみ思はれた。

一刻々々時の立つほど今夜の迫つてゐるのが身に染みて、外から聞える物音も次第に凄いやうに耳に響いた。

午砲が鳴つて間もなく男は歸つて來た。手には小さい藥罎を持つてゐた。「何處の藥屋でも變に思つて賣つて呉れないから、懇意な醫學書生の所へ行つて、騙して貰つて來た」と云つて、女の前に置いた。

「これで死なれて？」と、女は怖々藥罎を手に取つて、水のやうに透通つた藥を不思議さうに見詰めた。これを口に入れゝば直ぐに舌が爛れさうに思はれて、見てゐても口の内が痺れるやうだつた。が、

「私、ぐつと呑むよ」と、强い決心を見せて、「これで二人分だわね」

「さうだとも。半分づゝ呑むんだ。……覺悟してるんだらうな」男は藥罎に目をつけながら、底氣味惡い聲で念を押した。

「何故そんなことを訊くの」と、おすゑは責めるやうに云つた。が、ふと恐ろしい者に襲はれたやうな氣がしたので、縋い付かねばかりに男の方を見据ゑて、心に力を付けた。

「おれは結句死んだ方が氣樂だけれど、お前は奉公しやうと思へば、前借もどつさり出來るし、身内の者を安心させて自分もいゝ月日が送れないことはないんだから。……」と、男が云掛けると、

「私もうそんな事は聞きたくないの」と、おすゑは耳を蔽うて首(かより)を振つた。そして、男の口から、絶え間なく情愛の籠つた哀れな話を聞かされて、日の暮れるまで泣きつゞけてゐたかつた。

溫かい靜かな春の日は容易に暮れさうではない。おすゑは意地惡く目につく藥罎を見まい〳〵とつとめた。

男は寢そべつて、呑氣らしく煙草を吸ひながら、默つて何か考へてゐた。（をはり）



阿部一族

鷗外

從四位下左近衛少將兼越中守細川忠利は、寛永十八年辛巳の春、餘所よりは早く咲く領地肥後國の花を見棄てて、五十四萬石の大名の晴々しい行列に前後を圍ませ、南より北へ歩みを運ぶ春と倶に、江戸を志して參勤の途に上らうとしてゐるうち、圖らず病に罹つて、典醫の方劑も功を奏せず、日に增し重くなるばかりなので、江戸へは出發日延の飛脚が立つ。德川將軍は名君の譽の高い三代目の家光で、島原一揆の時賊將天草四郎時貞を討ち取つて大功を立てた忠利の身の上を氣遣ひ、三月二十日には松平伊豆守、阿部豐後守、阿部對馬守の連名の沙汰書を作らせ、針醫以策と云ふものを、京都から下向させる。續いて二十二日には同じく執政三人の署名した沙汰書を持たせて、

曾我又左衞門と云ふ侍を上使に遣す。大名に對する將軍家の取扱としては、鄭重を極めたものであつた。嶋原征伐が此年から三年前、寛永十五年の春平定してから後、江戸の邸に添地を賜はつたり、鷹狩の鶴を下されたり、不斷慇懃を盡してゐた將軍家の事であるから、此度の大病を聞いて、先例の許す限の慰問をさせたのも尤である。

將軍家がかう云ふ手續をする前に、熊本の館では忠利の病が革かになつて、とう〳〵三月十七日に五十六歳で亡くなつた。奥方は小笠原兵部大輔秀政の娘を將軍が養女にして妻せた人で、今年四十五歳になつてゐる。名をお千の方と云ふ。嫡子六丸は六年前に江戸で元服して將軍家から光の字を賜はり、光尙と名告つて、從四位下侍從兼肥後守にせられてゐる。今年十七歳である。二男鶴千代は小さい時から立田山の泰勝寺に遣つてある。京都妙心寺出身の大淵和尙の弟子になつて、宗玄と云つてゐる。三男松之助は細川家に舊縁のある長岡氏に養はれてゐる。四男勝千代は家臣南條大膳の養子になつてゐる。女子は二人ある。長女藤姬は松平周防守忠弘の奥方になつてゐる。二女竹姬は後に有吉頼母英長の妻になる人である。弟には忠利が三齋の三男に生れたので、四男中務大輔立孝、五男刑部興孝、六男長岡式部寄之の三人がある。妹には稻葉一通に嫁した多羅姬、烏丸中納言光賢に嫁した萬姬がある。此萬姬の腹に生れた禰々姬が忠利の嫡子光尙の奥方になつて來るのである。目上には長岡氏を名告る兄が二人、前野長岡兩家に嫁した姉が二人ある。隱居三齋宗立もまだ存命で、七十九歳になつてゐる。此中には江戸、京都、其外遠國にゐる人達もあるが、それが後に知らせを受けて歎いたのと違つて、熊本の館にゐた限の

人達の歎きは。分けて痛切なものであつた。

三月二十四日には初七日の營みがあつた。遺骸は春日村岫雲院の境内で茶毗になつて、高麗門の外の山に葬られた。此靈屋の下に、翌年の冬になつて、護國山妙解寺が建立せられて、江戸品川東海寺から澤庵和尚の同門の啓室和尚が來て住持になり、それが寺内の臨流庵に隱居してから、忠利の二男で出家してゐた宗玄が、天岸和尚と號して跡續になるのである。忠利の法號は妙解院殿臺雲宗伍大居士と附けられた。

岫雲院で茶毗になつたのは、忠利の遺言によつたのである。いつの事であつたか、忠利が方目狩に出て、此岫雲院で休んで茶を飮んだことがある。その時忠利はふと腮鬚の伸びてゐるのに氣が附いて、住持に剃刀は無いかと云つた。住持が盥に水を取つて、剃刀を添へて出した。忠利は機嫌好く兒小姓に鬚を剃らせながら、住持に云つた。「どうぢやな。此剃刀では亡者の頭を澤山剃つたであらうな」と云つた。住持はなんと返事をして好いか分からぬので、ひどく困つた。此時から忠利は岫雲院の住持と心安くなつてゐたので、茶毗所を此寺に極めたのである。丁度茶毗の最中であつた。柩の供をして來てゐた家臣達の群に、「あれ、お鷹がお鷹が」と云ふ聲がした。境内の杉の木立に限られて、鈍い青色をしてゐる空の下、圓形の石の井筒の上に垂れ掛かつて笠のやうに咲いた花が、折々一片二片づつ靜かに散つてゐる八重櫻の古木の上の方に、二羽の鷹が輪をかいて飛んでゐたのである。人々が不思議がつて見てゐるうちに、二羽が尾と嘴と觸れるやうに跡先に續いて、さつと落して來て、櫻の下の井の中に這入つた。寺

の門前で暫く何か言ひ爭つてゐた五六人の中から、二人の男が駈け出して、井の端に來て、石の井筒に手を掛けて中を覗いた。その時鷹は水底深く沈んでしまつて、齒朶の茂みの中に鏡のやうに光つてゐる水面は、もう元の通りに平らになつてゐた。二人の男は鷹匠衆であつた。井の底にくぐり入つて死んだのは、忠利が愛してゐた有明、明石と云ふ二羽の鷹であつた。その事が分かつた時、人々の間に、「それてはお鷹が殉死したのか」と呟く聲が聞えた。それは殿樣の御病氣が重くなつてからは、家臣一同の心を動かす事は殉死の外には無いので、譬へば或る事を切に考へてゐる人が、起つにも据わるにも、物を食ふにも寢るにも、その事を忘れずにゐるやうに、細川家の家臣は殿樣の御病氣がいよ〳〵旦夕に迫つたさうだとか、御典醫がどう云つたさうだとか、江戶へ何度目の御使者が立つとか、殿樣がとう〳〵お隱れになつたとか、お葬式の行列がどう極められたとか、江戶から來る御上使はどこにお泊りなさるのだとか云ふとり〴〵の噂に忙しい中にも、誰一人心の底に殉死の事を忘れてゐるものは無かつたからである。二羽の鷹はどう云ふ手ぬかりで鷹匠衆の手を離れたか、どうして目に見えぬ獲物を追ふやうに、井戶の中に飛び込んだか知らぬが、それを穿鑿しようなどと思ふものは一人も無い、鷹は殿樣の御寵愛なされたもので、それが茶毗の當日に、しかもお茶毗所の岫雲院の井戶に這入つて死んだと云ふ丈の事實を見て、鷹が殉死したのだと云ふ判斷をするには十分であつた。それを疑つて別に原因を尋ねようとする餘地は無かつたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

中陰の四十九日の果の日が五月六日である。それが殉死をする人達の冥途に旅立つ當日である。殉死するに極まつた本人や親兄弟妻子は言ふまでもなく、なんの由緣も無いものでも、京都から來るお針醫と江戸から下る御上使との接待の用意なんぞはうはの空でしてゐて、只殉死の事ばかり思つてゐる。例年簷に葺く端午の菖蒲も摘まず、ましてや初幟の祝をする子のある家も、その子の生れたことを忘れたやうにして、靜まり返つてゐる。

殉死にはいつどうして極まつたともなく、自然に掟が出來てゐる。どれ程殿樣を大切に思へばと云つて、誰でも勝手に殉死が出來るものでは無い。泰平の世の江戸參勤のお供、いざ戰爭と云ふ時の陣中へのお供と同じ事で、死天の山三途の川のお供をするにも、是非殿樣のお許を得なくてはならない。その許もないのに死んでは、それは犬死である。武士は名聞が大切だから、犬死はしない。敵陣に飛び込んで討死をするのは立派ではあるが、軍令に背いて拔駈をして死んでは功にはならない。それが犬死であると同じ事で、お許の無いに殉死しては、これも犬死である。偶にさう云ふ人で犬死にならないのは、値遇を得た君臣の間に默契があつて、お許はなくてもお許があつたのと變らぬのである。佛涅槃の後に起つた大乘の敎は、佛のお許はなかつたが、過現未を通じて知らぬ事の無い佛は、さう云ふ敎が出て來るものだと知つて懸許して置いたものだとしてある。お許が無いのに殉死の出來るのは、金口で說かれると同じやうに、大乘の敎を說くやうなものであらう。

そんならどうしてお許を得るかと云ふと、此度殉死に極まつてゐる內藤長十郎元續が願つた手段など

が好い例てある。長十郎は格別の御懇意を蒙つたものて、忠利の病牀を離れずに介抱をしてゐた。容態が次第に重くなつて、もう重湯の外召し上がらぬと云ふ時の事てあつた。忠利が「足がだるい」と云つた。長十郎は搔卷の裾を徐かにまくつて、忠利の足をさすりながら、忠利の顏をぢつと見ると、忠利もぢつと見返した。

「長十郎お願がござりまする。」

「なんぢや。」

「此度の御病氣は大ぶ御重體のやうにお見受申しまするが、神佛の加護良藥の功驗て、一日も早う御全快遊ばすやうにと、御隱居樣、お奧樣は申すまでもなく、家中一心を籠めて祈願いたしてをりますには相違ござりません。それても萬一と申すことがござります。若しもの事がござりましたら、どうぞ長十郎奴にお供を仰せ附けられますやうに。」

かう云ひながら長十郎は忠利の足をそつと持ち上げて、自分の額に押し當てて戴いた。目には涙が一ぱい浮かんてゐた。

「それはいかんぞよ。」かう云つて忠利は今まで長十郎と顏を見合せてゐたのに、半分寢返りをするやうに脇を向いた。

「どうぞさう仰やらずに。」長十郎は又忠利の足を戴いた。

「いかん〳〵。」顏を背向けた儘て云つた。

「どうぞ。」咽に支へたやうな聲で云つて、三度目に戴いた足をいつまでも額に當てて放さずにゐた。

「情の剛い奴ぢやな。そんなら許すぞ。」忠利の聲はおこつて叱るやうであつた。

長十郎は「はつ」と云つて、兩手で忠利の足を抱へた儘、牀の背後へ俯伏して、暫く動かずにゐた。その時長十郎が心の中には、非常な難所を通つて往き着かなくてはならぬ所へ往き着いたやうな、力の弛みと心の落着きとが滿ち溢れて、その外の事は何も意識に上らず、備後疊の上に涙の零れるのも知らなかつた。

長十郎は正直一遍の男で、これ迄何一つ際立つた功績もなかつたが、忠利は始終目を掛けて側近く使つてゐた。酒が好きで、別人なら無禮のお咎もありさうな失錯をしたことがあるのに、忠利は「あれは長十郎がしたのでは無い、酒がしたのぢや」と云つて笑つてゐた。それでその恩に報いなくてはならぬ、その過を償はなくてはならぬと思ひ込んでゐた長十郎は、忠利の病氣が重つてからは、その報謝と賠償との道は殉死の外無いと牢く信ずるやうになつた。併し細かに此男の心中に立ち入つて見ると、自分の發意で殉死しなくてはならぬと云ふ心持の旁、人が自分を殉死する筈のものだと思つてゐるに違ひないから、自分は殉死を餘儀なくせられてゐると、人にすがつて死の方向へ進んで行くやうな心持が、殆んど同じ强さに存在してゐた。反面から云ふと、若し自分が殉死せずにゐたら、恐ろしい屈辱を受けるに違ひないと心配してゐたのである。かう云ふ弱みのある長十郎ではあるが、死を怖れる念は微塵も無い。それだからどうぞ殿樣に殉死を許して戴かうと云ふ願望は、何物の障礙をも被らずに此男の意志の

全幅を領してゐたのである。

暫くして長十郎は兩手で持つてゐる殿樣の足に力が這入つて、少し踏み伸ばされるやうに感じた。これは又だるくおなりになつたのだと思つたので、又最初のやうに徐かにさすり始めた。此時長十郎の心頭には老母と妻との事が浮かんだ。そして殉死者の遺族が主家の優待を受けると云ふことを考へて、それで己は家族を安穩な地位に置いて、安んじて死ぬることが出來ると思つた。それと同時に長十郎の顏は晴々した氣色になつた。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊　　＊　　＊

中陰の果の日の朝、長十郎は衣服を改めて母の前に出て、始て殉死の事を明かして暇乞をした。母は少しも驚かなかつた。それは互に口に出しては言はぬが、けふは倅が切腹する日だと、母も疾うから思つてゐたからである。若し切腹しないとでも云つたら、母はさぞ驚いたことであらう。

母は勝手にゐたよめを其席へ呼んで、只支度が出來たかと問うた。よめはすぐに起つて、勝手から兼ねて用意してあつた杯盤を自身に運んで出た。よめも母と同じやうに、夫がけふ切腹すると云ふことを疾うから知つてゐた。髮を綺麗に撫で附けて、好い分の不斷着に着換へてゐる。母もよめも改まつた、眞面目な顏をしてゐるのは同じ事であるが、只よめの目の緣が赤くなつてゐるので、勝手にゐた時泣いたことが分かる。

三人は默つて杯を取り交した。杯が一順した時母が云つた。

「長十郎や。お前の好きな酒ぢや。少し過してはどうぢやな。」

「ほんにさうでござりまするな」と云つて、長十郎は微笑を含んで、心地好げに杯を重ねた。

暫くして長十郎が母に言つた。「好い心持に醉ひました。先日から彼此と心遣を致しましたせいか、いつもより酒が利いたやうでござります。御免を蒙つてちよつと一休みいたしませう。」

かう云つて長十郎は起つて居間に這入つたが、すぐに部屋の眞ん中に轉がつて、鼾をかき出した。女房が跡からそつと這入つて枕を出して當てさせた時、長十郎は「うゝん」とうなつて寢返りをした丈で、又鼾をかき續けてゐる。女房はぢつと夫の顏を見てゐたが、忽ち慌てたやうに起つて部屋へ往つた。泣いてはならぬと思つたのである。

家はひつそりとしてゐる。丁度主人の決心を母と妻とが言はずに知つてゐたやうに、家來も女中も知つてゐたので、勝手からも厩の方からも笑聲などは聞えない。

母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、ぢつと物を思つてゐる。主人は居間で鼾をかいて寢てゐる。開け放つてある居間の窓には、下に風鈴を附けた吊葱が吊つてある。その風鈴が折々思ひ出したやうに微かに鳴る。その下には丈の高い石の頂を掘り窪めた手水鉢がある。その上に伏せてある捲物の柄杓に、やんまが一疋止まつて、羽を山形に垂れて動かずにゐる。

一時立つ。二時立つ。もう午を過ぎた。食事の支度は女中に言ひ附けてあるが、姑が食べると云はれるか、どうだか分からぬと思つて、よめは聞きに行かうと思ひながらためらつてゐた。若し自分丈が食

事の事なぞを思ふやうに取られはすまいかとためらつてゐたのである。

その時よめは姑に呼ばれた。よめが默つて手を衝いて機嫌を伺つてゐると、姑が云つた。

「長十郎はちよつと一休みすると云うたが、いかい時が立つたやうな。もう起して遣つてはどうぢやらうの。」

「ほんにさやうでござります。餘り遲くなりません方が。」よめはかう云つて、すぐに起つて夫を起しに往つた。そして心の中には食事の事なぞを先へ言ひ出さないで好かつたと思つた。

夫の居間に來た女房は、先に枕をさせた時と同じやうに、又ぢつと夫の顏を見てゐた。死なせに起すのだと思ふので、暫くは詞を掛け兼ねてゐたのである。

熟睡してゐても、庭からさす晝の明りがまばゆかつたと見えて、夫は窓の方を背にして、顏をこつちへ向けてゐる。

「もし、あなた」と女房は呼んだ。

長十郎は目を醒まさない。

女房がすり寄つて、聳えてゐる肩に手を掛けると、長十郎は「あ、あゝ」と云つて臂を伸ばして、兩眼を開いて、むつくり起きた。

「大そう好くお休みになりました。お袋樣が餘り遲くなりはせぬかと仰やりますから、お起し申しました。もうお午になります。」

「さうか。少しの間だと思つたが、酔つたのと疲れがあつたのとて、時の立つのを知らずにゐた。その代りひどく氣分が好うなつた。午になつたら、茶漬でも食べて、そろ〳〵支度をせねばなるまい。お母あ様にも申し上げてくれ。」

武士はいざと云ふ時には飽食はしない。併し又空腹で大切な事に取り掛かることも無い。長十郎は實際ちよつと寐ようと思つたのだが、覺えず氣持好く寐過して、午になつたと聞いたので、食事をしようと云つたのである。これから形ばかりではあるが、一家三人のものが不斷のやうに膳に向かつて、午の食事をした。

長十郎が心靜かに支度をして切腹したのは申の刻であつた。眞實を明かして介錯を頼んで置いた親友の某は、此日他出をせずに待つてゐて、使と一しよに來て世話をした。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊　　＊　　＊

長十郎が忠利の足を戴いて願つたやうに、平生恩顧を受けてゐた家臣の中で、これと前後して思ひ思ひに殉死の願をして許されたものが、長十郎を加へて十八人あつた。いづれも忠利の深く信頼してゐた侍共である。だから忠利の心では、此人々を子息光尙の保護のために殘して置きたいこと山々であつた又此人々を自分と一しよに死なせるのが殘刻だとは十分感じてゐた。併し彼等一人々々に「許す」と云ふ一言を、身を割くやうに思ひながら與へたのは、勢已むことを得なかつたのである。

自分の親しく使つてゐた彼等が、命を惜まぬものであるとは、忠利は信じてゐる。隨つて殉死を苦痛

とせぬことも知つてゐる。これに反して若し自分が殉死を許さずに置いて、彼等が生きながらへてゐたら、どうであらうか。家中一同は彼等を死ぬべき時に死なぬものとし、恩知らずとし、卑怯者として并に歯せぬであらう。それ丈ならば、彼等も或は忍んで命を光尙に捧げる時の來るのを待つかも知れない併しその恩知らず、その卑怯者をそれと知らずに、先代の主人が使つてゐたのだと云ふものがあつたら、それは彼等の忍び得ぬ事であらう。彼等はどんなにか口惜しい思をするであらう。かう思つて見ると、忠利は「許す」と云はずにはゐられない。そこで病苦にも增したせつない思をしながら、忠利は「許す」と云つたのである。

殉死を許した家臣の數が十八人になつた時、五十餘年の久しい間治亂の中に身を處して、人情世故に飽くまで通じてゐた忠利は、病苦の薄らいだ暫くの暇に、つく〴〵自分の死と十八人の侍の死とに就いて考へて見た。生あるものは必ず滅する。老木の朽ち枯れる傍で、若木は茂り榮えて行く。嫡子光尙の周圍にゐる少壯者共から見れば、自分の任用してゐる老成人等は、もうゐなくて好いのである。邪魔にもなるのである。自分は彼等を生きながらへさせて、自分にしたと同じ奉公を光尙にさせたいと思ふが、其奉公を光尙にするものは、もう幾人も出來てゐて、手ぐすね引いて待つてゐるかも知れない。自分の任用したものは、年來それ〴〵の職分を盡して來るうちに、人の怨をも買つてゐよう。少くも娼嫉の的になつてゐるには違ひない。さうして見れば、强いて彼等にながらへてゐろと云ふのは、通達した考では無いかも知れない。殉死を許して遣つたのは慈悲であつたかも知れない。かう思つて忠利は多少の慰

籍を得たやうな心持になつた。

殉死を願つて許された十八人は寺本八左衞門有次、大塚喜兵衞種次、內藤長十郎元續、太田小十郎正信、原田十郎之直、宗像加兵衞景貞、同吉太夫景好、橋谷市藏重次、井原十三郎吉正、田中意德、本庄喜助重正、伊藤作左衞門方高、右田因幡統安、野田喜兵衞重綱、津崎五助長季、小林理右衞門行季、林與左衞門正貞、宮永庄左衞門宗祐の人々である。此人々はそれ〴〵親戚や入懇の朋友に暇乞をして、同じ五月六日に潔く殉死して、高麗門外の山中にある靈屋の側に葬られた。

殉死の人々は多くは自邸で切腹したが、中には菩提所に往つて死んだのもある。津崎五助は其一人で、追廻田畑にある淨土宗の寺千日庵に往つて死んだ。

* * * * * * *

五助は身分の輕いもので、忠利の犬牽である。いつも鷹狩の供をして野方で忠利の氣に入つてゐた。主君にねだるやうにして、殉死のお許は受けたが、家老達は皆云つた。「外の方々は高祿を賜はつて、榮耀をしたのに、そちは殿樣のお犬牽ではないか。そちが志は殊勝で、殿樣のお許が出たのは、此上も無い譽ぢや。もうそれて好い。どうぞ死ぬること丈は思ひ止まつて、御當主に御奉公してくれい」と云つた。

五助はどうしても聽かずに、五月六日になると、いつも牽いてお供をした犬を連れて、千日庵へ出掛けた。女房は戶口迄見送りに出て、「お前も男ぢや、お歷々の衆に負けぬ樣におしなされい」と云つた。

千日庵には國換の時小倉から來て、土地で亡くなつた父の墓がある。五助は寺の門前で線香と樒とを買つて、墓の前に供へてある、朽ち掛かつた竹の花立の水を換へて、それに樒を挿し、腰の火打袋を出して火を切つて、線香に移して立てた。それから肩に掛けた淺葱の嚢を卸して、その中から飯行李を出した。蓋を開けると握飯が二つ這入つてゐる。それを犬の前に置いた。犬はすぐに食はうともせず、尾を掉つて五助の顏を見てゐた。五助は人間に言ふやうに犬に言つた。

「おぬしは畜生ぢやから、知らずにをるかも知れんが、おぬしの頭をさすつて下されたことのある殿様は、もうお亡くなり遊ばされた。それで御恩になつてゐなされたお歴々は皆けふ腹を切つてお供をなさる。己は下司ではあるが、御扶持を戴いて繋いだ命はお歴々と變つたことは無い。殿様に可哀がつて戴いた有難さも同じ事ぢや。それで己は今腹を切つて死ぬるのぢや。己が死んでしまうたら、おぬしは今から野ら犬になるのぢや。己はそれが可哀さうでならん。殿様のお供をした鷹は岫雲院で井戸に飛び込んで死んだ。どうぢや。おぬしも己と一しよに死なうとは思はんかい。若し野ら犬になつても、生きてゐたいと思ふだら、此の握飯を食つてくれい。死にたいと思ふなら、食ふなよ。」

かう云つて犬の顏を見てゐたが、犬は五助の顏ばかりを見てゐて、握飯を食はうとはしない。

「それならおぬしも死ぬるか」と云つて、五助は犬をきつと見詰めた。

犬は一聲鳴いて尾を掉つた。

「好い。そんなら不便ぢやが死んでくれい。」かう云つて五助は犬を抱き寄せて、脇差を拔いて一刀に刺

した。

五助は犬の死骸を傍へ置いた。そして懐中から一枚の書き物を出して、それを墓の前にひろげて、小石を重りにして置いた。誰やらの邸で歌の會のあつた時見覺えた通りに、半紙を横に二つに折つて、「家老衆はとまれ〳〵と仰あれどとめてとまらぬ此五助哉」と、常の詠草のやうに書いてある。署名はして無い。歌の中に五助としてあるから、二重に名を書かなくても好いと、すなほに考へたのが、自然に故實に愜つてゐた。

もうこれで何も手落は無いと思つた五助は、父の墓を拜んで、安坐して肌をくつろげた。そして犬の血の附いた儘の脇差を逆手に持つて、「お鷹匠衆はどうなさりましたな、お犬牽は只今參りますぞ」と高聲に云つて、一聲快よげに笑つて、腹を十文字に切つた。次に切先を深く頸に刺し貫いて、俯伏になつて死んだ。

五助は身分の輕いものではあるが、後に殉死者の遺族の受けた程の手當は、跡に殘つた後家が受けた。男子一人は小さい時出家してゐたからである。後家は五人扶持を貰ひ、新に家屋敷を貰つて、忠利の三十三回忌の時まで存命してゐた。五助の甥の子が二代の五助になつて、それからは代々觸組で奉公してゐた。

* * * * * * *

忠利の許を得て殉死した十八人の外に、阿部彌一右衛門通信と云ふものがあつた。幼名猪之助を名告

つてゐた時から忠利の側近く仕へて、千百石餘の身分になつてゐる。島原征伐の時、子供五人の内三人まで軍功によつて新知二百石づゝを貰つた。この彌一右衞門は家中でも殉死する筈のやうに思ひ、當人も亦忠利の夜伽に出る順番が來る度に、殉死したいと云つて願つた。併しどうしても忠利が許さない。「そちが志は滿足に思ふが、それよりは生きてゐて光尙に奉公してくれい」と、何度願つても、同じ事を繰り返して云ふのである。

一體忠利は彌一右衞門の言ふことを聽かぬ癖が附いてゐる。これは餘程古くからの事で、まだ猪之助と云つて小姓を勤めてゐた頃も、猪之助が「御膳を差し上げませうか」と伺ふと、「まだ空腹にはならぬ」と云ふ。外の小姓が申し上げると、「好い、出させい」と云ふ。忠利は此男の顏を見ると、反對したくなるのである。そんなら叱られるかと云ふと、さうでも無い。此男程精勤をするものは無く、萬事に氣が附いて、手ぬかりが無いから、叱らうと云つても叱りやうが無い。

彌一右衞門は外の人の言ひ附けられてする事を、言ひ附けられずにする。外の人の申し上げてする事を、申し上げずにする。併しする事はいつも肯綮に中つてゐて、間然すべき所が無い。彌一右衞門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。忠利は初めなんとも思はずに、只此の男の顏を見ると、反對したくなつたのだが、後には此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。憎いと思ひながら、聰明な忠利はなぜ彌一右衞門がさうなつたかと回想して見て、それは自分が爲向けたのだと云ふことに氣が附いた。そして自分の反對する癖を改めようと思つてゐながら、月が累り年が累るに從つて、それが次

第に改めにくくなつた。

人には誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある。そしてなぜ好きだか、厭だかと穿鑿して見ると、どうかすると捕捉する程の據りどころが無い。忠利が彌一右衞門を好かぬのも、そんなわけである。併し彌一右衞門と云ふ男はどこかに人と親み難い處を持つてゐるに違ひ無い。それは親しい友達の少いので分かる。誰でも立派な侍として尊敬はする。併し容易く近づかうと試みるものが無い。稀に物數奇に近づかうと試みるものがあつても、暫くするうちに根氣が續かなくなつて遠ざかつてしまふ。まだ猶之助と云つて、前髮のあつた時、度々話をし掛けたり、何かに手を借して遣つたりしてゐた年上の男が、「どうも阿部には附け入る隙が無い」と云つて我を折つた。そこらを考へて見ると、忠利が自分の癖を改めたく思ひながら改めることの出來なかつたのも怪むに足りない。

兎に角彌一右衞門は何度願つても殉死の許を得ないでゐるうちに、忠利は亡くなつた。亡くなる少し前に、「彌一右門奴はお願と申すことを申したことはござりません、これが生涯唯一つのお願でござります」と云つて、ぢつと忠利の顏を見てゐたが、忠利もぢつと顏を見返して、「いや、どうぞ光尙に奉公してくれい」と言ひ放つた。

彌一右衞門はつくづく考へて決心した。自分の身分で、此場合に殉死せずに生き殘つて、家中のものに顏を合せてゐると云ふことは、百人が百人所詮出來ぬ事と思ふだらう。犬死と知つて切腹するか、浪人して熊本を去るかの外、爲方があるまい。だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入ら

ぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い。かう思つて一日一日と例の如くに勤めてゐた。
そのうちに五月六日が來て、十八人のものが皆殉死した。熊本中只その噂ばかりである。誰はなんと云つて死んだ、誰の死樣が誰よりも見事であつたと云ふ話の外には、なんの話も無い。彌一右衞門は以前から人に用事の外の話をし掛けられたことは少なかつたが、五月七日からこつちは、御殿の詰所に出てゐて見ても、一層寂しい。それに相役が自分の顏を見ぬやうにして見るのが分かる。そつと横から見たり、背後から見たりするのが分かる。不快で溜らない。それでも己は命が惜しくて生きてゐるのでは無い、己をどれ程惡く思ふ人でも、命を惜む男だとはまさかに云ふことが出來まい、たつた今でも死んで好いのなら死んで見せると思ふので、昂然と項を反らして詰所へ出て、昂然と項を反らして詰所から引いてゐた。
二三日立つと、彌一右衞門が耳に怪しからん噂が聞え出して來た。誰が言ひ出した事か知らぬが、「阿部はお許の無いを幸に生きてゐると見える、お許は無うても追腹は切られぬ筈が無い、阿部の腹の皮は人とは違ふと見える、瓢簞に油でも塗つて切れば好いに」と云ふのである。彌一右衞門は聞いて思ひの外の事に思つた。惡口が言ひたくはなんとも云ふが好い。併し此彌一右衞門を竪から見ても横から見ても、命の惜しい男とは、どうして見えようぞ。げに言へば言はれたものかな。好いわ。そんなら此腹の皮を瓢簞に油を塗つて切つて見せう。
彌一右衞門は其日詰所を引くと、急使を以て別家してゐる弟二人を山崎の邸に呼び寄せた。居間と客

間との間の建具を外させ、嫡子權兵衞、二男彌五右衞門、次にまだ前髮のある五男七之丞の三人を傍に居らせて、主人は威儀を正して待ち受けてゐる。權兵衞は幼名權十郎と云つて、島原征伐に立派な働きをして、新知二百石を貰つてゐる。父に劣らぬ若者である。此度の事に就いては、只一度父に「お許は出ませなんだか」と問うた。父は「うん、出んぞ」と言つた。その外二人の間にはなんの詞も交されなかつた。親子は心の底まで知り拔いてゐるので、何も言ふには及ばぬのであつた。

間もなく二張の提燈が門の内に這入つた。三男市太夫、四男五太夫の二人が殆ど同時に玄關に來て、雨具を脫いで座敷に通つた。中陰の翌日からじめ〳〵とした雨になつて、五月闇の空が晴れずにゐるのである。

障子は開け放してあつても、蒸し暑くて風がない。その癖燭臺の火はゆらめいてゐる。螢が一匹庭の木立を縫つて通り過ぎた。

一座を見渡した主人が口を開いた。「夜陰に呼びに遣つたのに、皆好う來て來れた。家中一般の噂ぢやと云ふから、おぬし達も聞いたに違ひない。此彌一右衞門が腹は瓢簞に油を塗つて切る腹ぢやさうな。それぢやによつて、己は今瓢簞に油を塗つて切らうと思ふ。どうぞ皆で見屆けてくれい。」

市太夫も五太夫も島原の軍功で、新知二百石を貰つて別家してゐるが、中にも市太夫は早くから若殿附になつてゐたので、御代替りになつて人に羨まれる一人である。市太夫が膝を進めた。「なる程。好う分かりました。實は傍輩が云ふには、彌一右衞門殿は御先代の御遺言で續いて御奉公なさるさうな、親

子兄弟相變らず揃うてお勤めなさる、めてたい事ぢやと云ふのでござります。其詞が何か意味ありげて歯痒うござりました。」

父彌一右衞門は笑つた。「さうであらう。目の先ばかり見える近眼共を相手にするな。そこでその死なぬ筈の己が死んだら、お許の無かつた己の子ぢやと云うて、おぬし達を侮るものもあらう。己の子に生れたのは運ぢや。せう事が無い。恥を受ける時は一しよに受けい。兄弟喧嘩をするなよ。さあ、瓢簞で腹を切るのを好う見て置け。」

かう言つて置いて、彌一右衞門は子供等の面前で切腹して、自分で首筋を左から右へ刺し貫いて死んだ。父の心を測り兼ねてゐた五人の子供等は、此時悲しくはあつたが、それと同時にこれまでの不安心な境界を一歩離れて、重荷の一つを卸したやうに感じた。

「兄き」と二男彌五兵衞が嫡子に言つた。「兄弟喧嘩をするなと、お父つさんは言ひ置いた。それには誰も異存はあるまい。己は島原で持場が惡うて、知行も貰はずにゐるから、これからはおぬしが厄介になるぢやらう。ぢやが何事があつても、おぬしが手に慥かな槍一本はあると云ふものぢや。さう思うてゐてくれい。」

「知れた事ぢや。どうなる事か知れぬが、己が貰ふ知行はおぬしが貰ふも同じぢや。」かう云つた切り權兵衞は腕組をして顏を蹙めた。

「さうぢや。どうなる事か知れぬ。追腹はお許の出た殉死とは違ふなぞと云ふ奴があらうて。」かう云

つたのは四男の五太夫である。

「それは目に見えてをる。どう云ふ目に逢うても。」から言ひさして三男市太夫は權兵衞の顏を見た。

「どう云ふ目に逢うても、兄弟離れ〴〵に相手にならずに、固まつて行かうぜ。」

「うん」と權兵衞は云つたが、打ち解けた樣子も無い。權兵衞は弟共を心にいたはつてはゐるが、やさしく物を言はれぬ男である。それに何事も一人で考へて、一人でしたがる。相談と云ふものをめつたにしない。それで彌五右衞門も市太夫も念を押したのである。

「兄い樣方が揃うてお出なさるから、お父つさんの惡口は、うかと言はれますまい。」これは前髮の七之丞が口から出た、女のやうな聲ではあつたが、それに強い信念が籠つてゐたので、一座のものの胸を、暗黑な前途を照らす光明のやうに照らした。

「どりや。おつ母さんに言うて、女子達に暇乞をさせうか。」から云つて權兵衞が席を起つた。

* * * * * * *

從四位下侍從兼肥後守光尙の家督相續が濟んだ。家臣にはそれ〴〵新知、加增、役替などがあつた。中にも殉死の侍十八人の家々は、嫡子にその儘父の跡を繼がせられた。嫡子のある限りは、いかに幼少でもその數には漏れない。未亡人、老父母には扶持が與へられる。家屋敷を拜領して、作事までも上から爲向けられる。先代が格別入懇にせられた家柄で、死天の旅の御供にさへ立つたのだから、家中のものが羨みはしても妬みはしない。

然るに一種變つた跡目の處分を受けたのは、阿部彌一右衛門の遺族である。嫡子權兵衛は父の跡をその儘繼ぐことが出來ずに、彌一右衛門が千五百石の知行は細かに割いて弟達へも配分せられた。一族の知行を合せて見れば、前に變つたことは無いが、本家を繼いだ權兵衛は、小身ものになつたのである。權兵衛の肩幅の狹くなつたことは言ふまでも無い。弟共も一人一人の知行は殖えながら、これまで千石以上の本家にたよつて、大木の蔭に立つてゐるやうに思つてゐたのが、今は團栗の背競になつて、有難いやうで迷惑な思をした。

政道は地道である限は、咎の歸する所を問ふものは無い。一旦常に變つた處置があると、誰の捌きかと云ふ詮議が起る。當主の御覺めでたく、御側去らずに勤めて居る大目附役に、林外記と云ふものがある。小才覺のあるので、若殿樣時代のお伽には相應してゐたが、物の大體を見ることに於いては及ばぬ所があつて、兎角苛察に傾きたがる男であつた。阿部彌一右衛門は故殿樣のお許を得ずに死んだのだから、眞の殉死者と彌一右衛門との間には境界を附けなくてはならぬと考へた。そこで阿部家の俸祿分割の策を獻じた。光尚も思慮ある大名ではあつたが、まだ物馴れぬ時の事で、彌一右衛門や嫡子權兵衛と懇意でないために、思遣が無く、自分の手元に使つて馴染のある市太夫がために加增になると云ふ處に目を附けた。外記の言を用ゐたのである。

十八人の侍が殉死した時には、彌一右衛門は御側に奉公してゐたのに殉死しないと云つて、家中のものが卑んだ。さて僅かに二三日を隔てて彌一右衛門は立派に切腹したが、事の當否は措いて、一旦受け

た侮辱は容易に消え難く、誰も彌一右衞門を褒めるものが無い。上では彌一右衞門の遺骸を靈屋の側に葬ることを許したのであるから、跡目相續の上にも强いて境界を立てずに置いて、殉死者一同と同じ扱をして好かつたのである。さうしたなら阿部一族は面目を施して、擧つて忠勤を勵んだのであらう。然るに上で一段下つた扱をしたので、家中のものの阿部家侮蔑の念が公に認められた形になつた。權兵衞兄弟は次第に傍輩に疎んぜられて、怏々として日を送つた。

寛永十九年三月十七日になつた。先代の殿樣の一週忌である。靈屋の傍にはまだ妙解寺は出來てゐぬが、向陽院と云ふ堂宇が立つて、そこに妙解院殿の位牌が安置せられ、鏡首座と云ふ僧が住持してゐる。忌日に先だつて、紫野大德寺の天祐和尙が京都から下向する。年忌の營みは晴々しいものになるらしく、一箇月ばかり前から、熊本の城下は準備に忙しかつた。

いよいよ當日になつた。麗かな日和で、靈屋の傍は櫻の盛りである。向陽院の周圍には幕を引き廻して、步卒が警護して居る。當主が自ら臨場して、先づ先代の位牌に燒香し、次いで殉死者十九人の位牌に燒香する。それから殉死者遺族が許されて燒香する。同時に御紋附上下、同時服を拜領する。馬廻以上は長上下、徒士は半上下である。下々の者は御香奠を拜領する。

儀式は滯なく濟んだが、その間に只一つの珍事が出來した。それは阿部權兵衞が殉死者遺族の一人として、席順によつて妙解院殿の位牌の前に進んだ時、燒香をして退きしなに、脇差の小柄を拔き取つて髻を押し切つて、位牌の前に供へたことである。その場に詰めてゐた侍共も、不意の出來事に驚き呆れ

て、茫然として見てゐたが、權兵衞が何事も無いやうに、自若として五六歩退いた時、一人の侍がやうく我に返つて、「阿部殿、お待なされい」と呼び掛けながら、追ひ縋つて押し止めた。續いて二三人立ち掛つて、權兵衞を別間に連れて這入つた。

權兵衞が詰衆に尋ねられて答へた所はかうである。貴殿等は某を亂心者のやうに思はれるであらうが、全くさやうなわけでは無い。父彌一右衞門は一生瑕瑾の無い御奉公をいたしたればこそ、故殿樣のお許を得ずに切腹しても、殉死者の列に加へられ、遺族たる某さへ他人に先だつて御位牌に御燒香いたすことが出來たのである。併し某は不肖にして父同樣の御奉公が成り難いのを、上にも御承知と見えて、知行を割いて弟共に御遣なされた。某は故殿樣にも御當主にも亡き父にも一族の者共にも傍輩にも面目が無い。かやうに存じてゐるうち、今日御位牌に御燒香いたす場合になり、咄嗟の間、感慨胸に迫り、いつその事武士を棄てようと決心いたした。お場所柄を顧みざるお咎は甘んじて受ける。亂心などはいたさぬと云ふのである。

權兵衞の答を光尙は聞いて、不快に思つた。第一に權兵衞が自分に面當がましい所行をしたのが不快である。次に自分が外記の策を納れて、しなくても好い事をしたのが不快である。まだ二十四歳の血氣の殿樣で、情を抑へ欲を制することが足りない。恩を以て怨に報いる寛大の心持に乏しい。即座に權兵衞をおし籠めさせた。それを聞いて彌五兵衞以下一族のものは門を閉ぢて上の御沙汰を待つことにして、夜陰に一同寄り合つては、窃に一族の前途のために評議を凝らした。

阿部一族は評議の末、此度先代一週忌の法會のために下向して、まだ逗留してゐる天祐和尚に縋がることにした。市太夫は和尚の旅館に往つて一部始終を話して、權兵衞に對する上の處置を輕減して貰ふやうに頼んだ。和尚はつく〴〵聞いて云つた。承れば御一家のお成行氣の毒千萬である。併し上の御政道に對して彼此云ふことは出來ない。只權兵衞殿に死を賜はるとなつたら、きつと御助命を願つて進ぜよう。殊に權兵衞殿は既に髻を拂はれて見れば、桑門同樣の身の上である。御助命丈はいかやうにも申して見ようと云つた。市太夫は頼もしく思つて歸つた。一族のものは市太夫の復命を聞いて、一條の活路を得たやうな氣がした。そのうち日が立つて、天祐和尚の歸京の時が次第に近づいて來た。和尚は殿樣に逢つて話をする度に、阿部權兵衞が助命の事を、折があつたら言上しようと思つたが、どうしても折が無い。それは其筈である。光尚はかう思つたのである。天祐和尚の逗留中に權兵衞の事を沙汰したらきつと助命を請はれるに違ひ無い。大寺の和尚の詞て見れば、等閑に聞き棄てることはなるまい。和尚の立つのを待つて處置しようと思つたのである。とう〳〵和尚は空しく熊本を立つてしまつた。

* * * * * *

天祐和尚が熊本を立つや否や、光尚はすぐに阿部權兵衞を井手の口に引き出して縛首にさせた。先代の御位牌に對して不敬な事を敢てした、上を恐れぬ所行として處置せられたのである。

彌五兵衞以下一同のものは寄り集つて評議した。權兵衞の所行は不埒には違ひ無い。併し亡父彌一右衞門は兎に角殉死者の中に數へられてゐる。その相續人たる權兵衞て見れば、死を賜ふことは是非が無

い。武士らしく切腹仰せ付けられれば異存はない。それに何事ぞ、奸盗かなんぞのやうに、白晝に縛首にせられた。此の樣子で推すれば、一族のものも安穩には差し置かれまい。縱ひ別に御沙汰が無いにしても、縛首にせられたものゝ一族が、何の面目あつて、傍輩に立ち交つて御奉公をしよう。此上は是非に及ばない。何事があらうとも、兄弟分かれ〳〵になるなと、彌一右衞門殿の言ひ置かれたのは此時の事である。一族討手を引き受けて、共に死ぬる外は無いと、一人の異議を稱へるものも無く決した。

阿部一族は妻子を引き纏めて、權兵衞が山崎の屋敷に立て籠つた。

穩ならぬ一族の樣子が上に聞えた。横目が偵察に出て來た。山崎の屋敷では門を嚴重に鎖して、靜まり返つてゐた。市太夫や五太夫の宅は空屋になつてゐた。

討手の手配が定められた。表門は側者頭竹内數馬長政が指揮役をして、それに小頭添島九兵衞、同野村庄兵衞が隨つてゐる。數馬は千百五十石で鐵砲組三十挺の頭である。譜第の乙名島徳右衞門が供をする。添島、野村は當時百石のものである。裏門の指揮役は知行五百石の側者頭高見權右衞門重政で、これも鐵砲組三十挺の頭である。それに目附畑十太夫と竹内數馬の小頭で當時百石の千場作兵衞とが隨つてゐる。

討手は四月二十一日に差し向けられることになつた。前晩に山崎の屋敷の周圍には夜廻が附けられた。夜が更けてから侍分のものが一人覆面して、塀を内から乘り越えて出たが、廻役の佐分利嘉左衞門が組の足輕丸山三之丞が討ち取つた。その後夜明まで何事もなかつた。

兼ねて近隣のものには沙汰があつた。縦ひ當番たりとも在宿して火の用心を怠らぬやうにいたせといふのが一つ。討手でないのに、阿部が屋敷に入り込んで手出しをすることは嚴禁であるが、落人は勝手に討ち取れと云ふのが二つであつた。

阿部一族は討手の向ふ日を其前日に聞き知つて、先づ邸内を隈なく掃除し、見苦しい物は悉く焼き棄てた。それから老若打寄つて酒宴をした。それから老人や女は自殺し、幼いものは手ん手に刺し殺した。それから庭に大きい穴を堀つて死骸を埋めた。跡に殘つたのは究竟の若者ばかりである。彌五兵衞、市太夫、五太夫、七之丞の四人が指圖して、障子襖を取り拂つた廣間に家來を集めて、鉦太鼓を鳴らさせ、高聲に念佛をさせて夜の明けるのを待つた。これは老人や妻子を弔ふためだとは云つたが、實は下人共に臆病の念を起させぬ用心であつた。

* * * * * *

阿部一族の立て籠つた山崎の屋敷は、後に齋藤勘助の住んだ所で、向ひは山中又左衞門、左右兩隣は柄本又七郎、平山三郎の住ひであつた。

此中で柄本が家は、もと天草郡を三分して領してゐた柄本、天草、志岐の三家の一つである。小西行長が肥後半國を治めてゐた時、天草、志岐は罪を犯して誅せられ、柄本丈が殘つてゐて、細川家に仕へた。

又七郎は平生阿部彌一右衞門が一家と心安くして、主人同志は固より、妻女までも互に往來してゐた。

中にも彌一右衞門の二男彌五兵衞は鎗が得意で、又七郎も同じ技を嗜む所から、親しい中で廣言をし合つて、「お手前が上手でも某には叶ふまい」、「いや某がなんでお手前に負けよう」などと云つてゐた。

そこで先代の殿樣の病中に、彌一右衞門が殉死を願つて許されぬと聞いた時から、又七郎は彌一右衞門の胸中を察して氣の毒がつた。それから彌一右衞門の追腹、家督相續人權兵衞の向陽院での振舞、それが基になつての刑死、彌五兵衞以下一族の立籠と云ふ順序に、阿部家が段々否運に傾いて來たので、又七郎は親身のものにも劣らぬ心痛をした。

或る日又七郎が女房に言ひ附けて、夜更けてから阿部の屋敷へ見舞に遣つた。阿部一族は上に叛いて籠城めいた事をしてゐるから、男同士は交通することが出來ない。然るに最初からの行掛かりを知つてゐて見れば、一族のものを惡人として憎むことは出來ない。ましてや年來懇意にした間柄である。婦女の身として密かに見舞ふのは、よしや後日に發覺したとて、申譯の立たぬ事でもあるまいと云ふ考で、見舞には遣つたのである。女房は夫の詞を聞いて、喜んで心盡しの品を取揃へて、夜更けて隣へおとづれた。これもなか／＼氣丈な女で、若し後日に發覺したら、罪を自身に引き受けて、夫に迷惑は掛けまいと思つたのである。

阿部一族の喜は非常であつた。世間は花咲き鳥歌ふ春であるのに、不幸にして神佛にも人間にも見放されて、かく籠居してゐる我々である。それを見舞うて遣れと云ふ夫も夫、その言附けを守つて來てくれる妻も妻、實に難有い心掛だと、心から感じた。女達は涙を流して、かうなり果てて死ぬるから

は、世の中に誰一人菩提を弔うてくれるものもあるまい、どうぞ思ひ出したら、一遍の回向をして貰ひたいと頼んだ。子供達は門外へ一足も出されぬので、不斷優しくしてくれた柄本の女房を見て、右左から取り縋つて、容易く放して歸さなかつた。

阿部の屋敷へ討手の向ふ前晩になつた。柄本又七郎はつく〴〵考へた。阿部一家は自分とは親しい間柄である。それて後日の咎もあらうかとは思ひながら、女房を見舞ひにまて遣つた。併しいよ〳〵明朝は上の討手が阿部家へ來る。これは逆賊を征伐せられるお上の軍も同じ事である。御沙汰には火の用心をせい、手出しをするなと云つてあるが、武士たるものが此場合に懷手をして見てゐられたものでは無い。情は情、義は義である。己にはせんやうが有ると考へた。そこて更闌けて抜足をして、後口から薄暗い庭へ出て、阿部家との境の竹垣の結繩を悉く切つて置いた。それから歸つて身支度をして、長押に懸けた手槍を卸し、鷹の羽の紋の附いた鞘を拂つて、夜の明けるのを待つてゐた。

* * * * * * *

討手として阿部の屋敷の表門に向ふことになつた竹内數馬は、武道の譽ある家に生れたものである。先祖は細川高國の手に屬して、强弓の名を得た島村彈正貴則である。享祿四年に高國が攝津國尼崎に敗れた時、彈正は敵二人を兩腋に挾んで海に飛び込んで死んだ。彈正の子市兵衛は河内の八隅家に仕へて一時八隅と稱したが、竹内越を領することになつて、竹内と改めた。竹内市兵衛の子吉兵衛は小西行長に仕へて、紀伊國太田の城を水攻にした時の功て、豊臣太閤に白練に朱の日の丸の陣羽織を貰つた。朝

鮮征伐の時には小西家の人質として、李王宮に三年押し籠められてゐた。小西家が滅びてから、加藤清正に千石で召し出されてゐたが、主君と物爭をして白晝に熊本城下を立ち退いた。加藤家の討手に備へるために、鐵砲に玉を籠め、火縄に火を附けて持たせて退いた。それを三齋が豐前で千石に召し抱へた。此吉兵衞に五人の男子があつた。長男は矢張吉兵衞と名告つたが、後剃髪して八隅見山と云つた。二男は七郎右衞門、三男は次郎太夫、四男は八兵衞、五男が即ち數馬である。

數馬は忠利の兒小姓を勤めて、島原征伐の時殿様の側にゐた。寛永十五年二月二十五日細川の手のものが城を乘り取らうとした時、數馬が「どうぞお先手へお遣し下されい」と忠利に願つた。忠利は聽かなかつた。押し返してねだるやうに願ふと、忠利が立腹して、「小倅、勝手にうせをれ」と叫んだ。數馬は其時十六歳である。「あつ」と云ひさま駈け出すのを見送つて、忠利が「怪我をするなよ」と聲を掛けた。乙名島徳右衞門、草履取一人、槍持一人が跡から續いた。主從四人である。城から打ち出す鐵砲が烈しいので、島が數馬の着てゐた猩々緋の陣羽織の裾を摑んで跡へ引いた。數馬は振り切つて城の石垣に攀ぢ登る。島も是非なく附いて登る。とう〳〵城内に這入つて働いて、數馬は手を負つた。同じ場所から攻め入つた柳川の立花飛彈守宗茂は七十二歳の古武者で、此時の働振を見てゐたが、渡邊新彌、仲光内膳と數馬との三人が天晴であつたと云つて、三人へ連名の感狀を遣つた。落城の後、忠利は數馬に關兼光の脇差を遣つて、祿を千百五十石に加増した。脇差は一尺八寸、直燒無銘、横鑢、銀の九曜の三並の目貫、赤銅縁、金拵である。目貫の穴は二つあつて、一つは鉛で塡めてあつた。忠利は此脇差を秘藏し

てゐたので、數馬に遣つてからも、登城の時などには、「數馬、あの脇差を貸せ」と云つて、借りて差したことも度々てある。

光尙に阿部の討手を言ひ附けられて、數馬が喜んで詰所へ下がると、傍輩の一人が囁いた。「好物にも取柄はある。おぬしに表門の采配を振らせるとは、林殿にしては好く出來た。」

數馬は耳を欹てた。「なに。此度のお役目は外記が申し上げて仰せ附けられたのか。」

「さうぢや。外記殿が殿樣に言はれた。數馬は御先代が出格のお取立をなされたものぢや。御恩報じにあれをお遣りなされいと云はれた。物怪の幸ではないか。」

「ふん」と云つた數馬の眉間には深い皺が刻まれた。「好いわ。討死するまでの事ぢや。」かう言ひ放つて、數馬はついと起つて館を下がつた。

此時の數馬の樣子を忠利が聞いて、竹内の屋敷へ使を遣つて、「怪我をせぬやうに、首尾好くいたして參れ」と云はせた。數馬は「難有いお詞を慥かに承つたと申し上げて下されい」と云つた。

數馬は傍輩の口から、外記が自分を推して此度の役に當らせたのだと聞くや否や、即時に討死をしようと決心した。それがどうしても動かすことの出來ぬ程堅固な決心てあつた。外記は御恩報じをさせると云つたと云ふことてある。此詞は圖らず聞いたのてあるが、實は聞くまても無い、外記が薦めるには、さう云つて薦めるに極まつてゐる。かう思ふと、數馬は立つてもゐられぬやうな氣がする。自分は御先代の引立を蒙つたには違ひない。併し元服をしてから後の自分は、謂はば大勢の近習の中の

一人で、別に出色のお扱を受けてはゐない。御恩には誰も浴してゐる。御恩報じを自分に限つてしなくてはならぬと言ふのは、どう云ふ意味か。言ふまでも無い、自分は殉死する筈であつたのに、殉死しなかつたから、命掛の場所に遣ると云ふのである。命は何時でも喜んで棄てるが、前にしおくれた殉死の代りに死なうとは思はない。今命を惜まぬ自分が、なんで御先代の中陰の果の日に命を惜んだであらう。謂はれの無い事である。畢竟どれ丈の御入懇になつた人が殉死すると云ふ、はつきりした境は無い。同じやうに勤めてゐた御近習の若侍の中に殉死の沙汰が無いので、自分もながらへてゐた。殉死して好い事なら、自分は誰よりも先にする。それ程の事は誰の目にも見えてゐるやうに思つてゐた。それに疾うにする筈の殉死をせずにゐた人間として極印を打たれたのは、かへすがへすも口惜しい。自分は雪ぐことの出來ぬ汚れを身を受けた。それ程の辱を人に加へることは、あの外記でなくては出來まい。外記としてはさもあるべき事である。併し殿樣がなぜそれをお聽納になつたか。外記に傷けられたのは忍ぶことも出來よう。殿樣に棄てられたのは忍ぶことが出來ない。島原で城に乘り入らうとした時、御先代がお呼止なされた。それはお馬廻りのものがわざと先手に加はるのをお止めなされたのである。此度御當主の怪我をするなと仰やるのは、それとは違ふ。惜しい命をいたはれと仰やるのである。それがなんの難有からう。古い創の上を新に鞭うたれるやうなものである。只一刻も早く死にたい。死んで雪がれる汚れではないが、死にたい。犬死でも好いから、死にたい。

數馬はかう思ふと、矢も楯も溜まらない。そこで妻子には阿部の討手を仰せ附けられたと丈、手短に

言ひ聞せて、一人ひたすら支度を急いだ。殉死した人達は皆安堵して死に就くと云ふ心持でゐたのに、數馬が心持は苦痛を逃れるために死を急ぐのである。乙名徳右衛門が事情を察して、主人と同じ決心をした外には、一家のうちに數馬の心底を汲み知つたものが無い。今年二十一歳になる數馬の所へ、去年來たばかりのまだ娘らしい女房は、當歳の女の子を抱いてうろ〳〵してゐるばかりである。

あすは討入と云ふ四月二十日の夜、數馬は行水を使つて、月題を剃つて、髮には忠利に拜領した名香初音を焚き込めた。白無垢に白襷、白鉢巻をして、肩に合印の角取紙を附けた。腰に帶びた刀は二尺四寸五分の正盛で、先祖島村彈正が尼崎で討死した時、故郷に送つた記念である。それに初陣の時拜領した兼光を差し添へた。門口には馬が嘶いてゐる。

手槍を取つて庭に降り立つ時、數馬は草鞋の緒を男結にして、餘つた緒を小刀で切つて捨てた。

* * * * * * *

阿部の屋敷の裏門に向ふことになつた高見權右衛門は本と和田氏で、近江國和田に住んだ和田但馬守の裔である。初蒲生賢秀に隨つてゐたが、和田庄五郎の代に細川家に仕へた。庄五郎は岐阜、關原の戰に功のあつたものである。忠利の兄與一郎忠隆の下に附いてゐたので、忠隆が慶長五年大阪で妻前田氏の早く落ち延びたために父の勘氣を受け、入道休無となつて流浪した時、高野山や京都まで供をした。それを三齋が小倉へ呼び寄せて、高見氏を名告らせ、番頭にした。知行五百石であつた。庄五郎の子が權右衛門である。島原の戰に功があつたが、軍令に背いた廉で、一旦役を召し上げられた。それが暫く

してから歸參して側者頭になつてゐたのである。權右衛門は討入の支度の時黑羽二重の紋附を着て、兼て秘藏してゐた備前長船の刀を取り出して帶びた。そして十文字の槍を持つて出た。

竹内數馬の手に島德右衛門がゐるやうに、高見權右衛門は一人の小姓を連れてゐる。阿部一族の事のあつた二三年前の夏の日に、此小姓は非番で部屋に晝寢をしてゐた。そこへ相役の一人が供先から歸つて眞裸になつて、手桶を提げて井戸へ水を汲みに行き掛けたが、ふと此小姓の寢てゐるのを見て、「己がお供から歸つたに、水も汲んでくれずに、寢てをるかい」と云ひざまに枕を蹴た。小姓は跳ね起きた。「なる程。目が醒めてをつたら、水も汲んで遣らう。ぢやが枕を足蹴にすると云ふことがあるか。此儘には濟まんぞ。」から云つて拔打に相役を大袈裟に切つた。

小姓は靜かに相役の胸の上に跨がつて止めを刺して、乙名の小屋へ往つて仔細を話した。「即座に死ぬる筈でござりましたが、御不審もあらうかと存じまして」と、肌を脱いで切腹しようとした。乙名が「先づ待て」と云つて權右衛門に告げた。權右衛門はまだ役所から下がつて、衣服も改めずにゐたので、其儘館へ出て忠利に申し上げた。忠利は「尤の事ぢや、切腹には及ばぬ」と云つた。此時から小姓は權右衛門に命を捧げて奉公してゐるのである。

小姓は箙を負ひ半弓を取つて、主の傍に引き添つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

寛文十九年四月二十一日は麥秋に好くある薄曇の日であつた。

阿部一族の立て籠つてゐる山崎の屋敷に討ち入らうとして、竹内數馬の手のものは挑曉に表門の前に來た。夜通し鉦太鼓を鳴らしてゐた屋敷の內が、今はひつそりとして空屋かと思はれる程である。門の扉は鎖してある。板塀の上に二三尺伸びてゐる夾竹桃の木末には、蜘のいが掛かつてゐて、それに夜露が眞珠のやうに光つてゐる。燕が一羽どこからか飛んで來て、つと塀の內に入つた。

數馬は馬を乘り放つて降り立つて、暫く様子を見てゐたが、「門を開けい」と云つた。足輕が二人塀を乘り越して內に這入つた。門の廻りには敵は一人もゐないので、錠前を打ちこはして貫の木を拔いた。

隣家の柄本又七郎は數馬の手のものが門を開ける物音を聞いて、前夜結繩を切つて置いた竹垣を踏み破つて、駈け込んだ。每日のやうに往來して、隅々まで案內を知つてゐる家である。手槍を構へて臺所の口から、つと這入つた。座敷の戶を締め切つて、籠み入る討手のものを一人々々討ち取らうとして控へてゐた一族の中で、裏口に人のけはひのするのに、先づ氣の附いたのは彌五兵衞である。これも手槍を提げて臺所へ見に出た。

二人は槍の穗先と穗先とが觸れ合ふ程に相對した。「や、又七郎か」と、彌五兵衞が聲を掛けた。

「おう。兼ての廣言がある。おぬしが槍の手並を見に來た。」

「好うわせた。さあ。」

二人は一歩しざつて槍を交へた。暫く戰つたが、槍術は又七郎の方が優れてゐたので、彌五兵衞の胸板をしたたかに衝き拔いた。彌五兵衞は槍をからりと棄てて、座敷の方へ引かうとした。

「卑怯ぢや。引くな。」又七郎が叫んだ。

「いや逃げはせぬ。腹を切るのぢや。」言ひ棄てて座敷に這入つた。

その刹那に「をぢ様、お相手」と叫んで、前髮の七之丞が電光の如くに飛んで出て、又七郎の太股を衝いた。入懇の彌五兵衞に深手を負はせて、覺えず氣が弛んでゐたので、手錬の又七郎も少年の手に掛かつたのである。又七郎は槍を棄てて其場に倒れた。

數馬は門内に入つて、人數を屋敷の隅々に配つた。さて眞つ先に玄關に進んで見ると、正面の板戸が細目に開けてある。數馬が其戸に手を掛けようとすると、嶋徳右衞門が押し隔てて、詞せはしく呼いた。

「お待なさりませ。殿は今日の總大將ぢや。某がお先をいたします。」

徳右衞門は戸をがらりと開けて飛び込んだ。待ち構へてゐた市太夫の槍に、徳右衞門は右の目を衝かれてよろ〳〵と數馬に倒れ掛かつた。

「邪魔ぢや。」數馬は徳右衞門を押し退けて進んだ。市太夫、五太夫の槍が左右のひはらを衝き拔いた。

添嶋九兵衞、野村庄兵衞が續いて驅け込んだ。徳右衞門も痛手に屈せず、取つて返した。

此時裏門を押し破つて這入つた高見權右衞門は十文字槍を揮つて、阿部の家來共を衝きまくつて座敷に來た。千場作兵衞も續いて籠み入つた。

裏表二手のもの共が入り違へて、をめき叫んで衝いて來る。障子襖は取り拂つてあつても、三十疊には足らぬ座敷である。市街戰の慘状が野戰より甚だしいと同じ道理で、皿に盛られた百蟲の相咬ふにも

醫へつべく、目も當てられぬ有様である。

市太夫、五太夫は相手嫌はず槍を交へてゐるうち、全身に數へられぬ程の創を受けた。それでも屈せずに、槍を棄てて刀を拔いて切り廻つてゐる。七之丞はいつの間にか倒れてゐる。

太股を衝かれた柄本又七郎が臺所に伏してゐると、高見の手のものが見て、「手をお負なされたな、お見事ぢや、早うお引なされい」と云つて、奧へ通り拔けた。

「引く足があれば、わしも奧へ這入るが」と、又七郎は苦々しげに云つて齒咬をした。そこへ主の跡を慕つて入り込んだ家來の一人が駈け附けて、肩に掛けて退いた。

今一人の柄本家の被官天草平九郎と云ふものは、主の退口を守つて、半弓を以て目に掛かる敵を射てゐたが、其場で討死した。

竹內數馬の手では嶋德右衞門が先づ死んで、次いで小頭添嶋九兵衞が死んだ。

高見權右衞門が十文字槍を揮つて働く間、半弓を持つた小姓はいつも槍脇を詰めて敵を射てゐたが、後には刀を拔いて切つて廻つた。ふと見れば鐵砲で權右衞門をねらつてゐるものがある。「あの丸はわたくしが受け止めます」と云つて、小姓が權右衞門の前に立つと、丸が來て中つた。小姓は即死した。竹內の組から拔いて高見に附けられた小頭千場作兵衞は重手を負つて臺所に出て、水瓶の水を呑んだが、其儘そこにへたばつてゐた。

阿部一族は最初に彌五兵衞が切腹して、市太夫、五太夫、七之丞はとう〳〵皆深手に息が切れた。家

來も多くは討死した。

高見權右衞門は裏表の人數を集めて、阿部が屋敷の裏手にあつた物置小屋を崩させて、それに火を掛けた。風のない日の薄曇の空に、烟が眞つ直に升つて、遠方から見えた。それから火を踏み消して、跡を水でしめして引き上げた。臺所にゐた千場作兵衞、其外重手を負つたものは家來や傍輩が肩に掛けて續いた。時刻は丁度未の刻であつた。

*　*　*　*　*　*　*

光尙は度々家中の主立つたものの家へ遊びに往くことがあつたが、阿部一族を討ちに遣つた二十一日の日には、松野左京の屋敷へ拂曉から出掛けた。

館のあるお花畠からは、山崎はすぐ向うになつてゐるので、光尙が館を出る時、阿部の屋敷の方角に人聲物音がするのが聞えた。

「今討入つたな」と云つて、光尙は駕籠に乘つた。

駕籠がやう〳〵一町ばかり行つた時、注進があつた。竹内數馬が討死をしたことは、此時分かつた。

高見權右衞門は討手の總勢を率ゐて、光尙のゐる松野の屋敷の前まで引き上げて、阿部の一族を殘らず討ち取つたことを執奏して貰つた。光尙はぢきに逢はうと云つて、權右衞門を書院の庭に廻らせた。

丁度卯の花の眞つ白に咲いてゐる垣の間に、小さい枝折戸のあるのを開けて這入つて、權右衞門は芝生の上に突居た。光尙が見て、「手を負つたな、一段骨折であつた」と聲を掛けた。黑羽二重の衣服が血

みどれになつて、それに引上の時小屋の火を踏み消した時飛び散つた炭や灰がまだらに附いてゐたのである。

「いゝえ。かすり創でござります。」權右衞門は何者かに水落をしたたか衝かれたが、懐中してゐた鏡に中つて穗先がそれた。創は僅かに血を鼻紙ににじませた丈である。

權右衞門は討入の時の銘々の働きを精しく言上して、第一の功を單身で彌五兵衞に深手を負はせた隣家の柄本又七郎に讓つた。

「數馬はどうぢやつた。」

「表門から一足先に駈け込みましたので、見屆けません。」

「さやうか。皆のものに庭へ這入れと云へ。」

權右門か一同を呼び入れた。重手で自宅へ舁いて行かれた人達の外は、皆芝生に平伏した。働いたものは血によごれてゐる。小屋を燒く手傳ばかりしたものは、灰ばかりあびてゐる。その灰ばかりあびた中に、畑十太夫がゐた。光尙が聲を掛けた。

「十太夫。そちの働きはどうぢやつた。」

「はつ」と云つた切り默つて伏してゐた。十太夫は大兵の臆病者で、阿部が屋敷の外をうろついてゐて、引上の前に小屋に火を掛けた時、やつとおづ／＼這入つたのである。最初討手を仰せ附けられた時に、お次へ出る所を劒術者新免武藏が見て、「冥加至極の事ぢや、隨分お手柄をなされい」と云つて背中をぽ

んと打つた。十太夫は色を失つて、弛んでゐた袴の紐を締め直さうとしたが、手が震えて締まらなかつたさうである。

光尙は座を起つ時云つた。「皆出精であつたぞ。歸つて休息いたせ。」

* * * * * *

竹内數馬の幼い娘には養子をさせて家督相續を許されたが、此家は後に絕えた。高見權右衞門は三百石、千場作兵衞、野村庄兵衞は各五十石の加增を受けた。柄本又七郎へは米田監物が承つて、組頭谷内藏之允を使者に遣つて、賞詞があつた。親戚朋友がよろこびを言ひに來ると、又七郎は笑つて、「元龜天正の頃は、城攻野合せが朝夕の飯同樣であつた、阿部一族討取りなぞは茶の子の茶の子の朝茶の子ぢや」と云つた。二年立つて、正保元年の夏、又七郎は創が癒えて光尙に拜謁した。光尙は鐵砲十挺を預けて、「創が根治するやうに湯治がしたくばいたせ、又府外に別莊地を遣すから、場所を望め」と云つた。又七郎は益城小池村に屋敷地を貰つた。その背後が藪山である。「藪山も遣さうか」と、光尙が云はせた。又七郎はそれを辭退した。竹は平日も御用に立つ。戰爭でもあると、竹束が澤山いる。それを私に拜領しては氣が濟まぬと云ふのである。そこで藪山は永代御預けと云ふことになつた。

畑十太夫は追放せられた。竹内數馬の兄八兵衞は私に討手に加はりながら、弟の討死の場所に居合せなかつたので、閉門を仰せ附けられた。又馬廻の子で近習を勤めて居た某は、阿部の屋敷に近く住まつてゐたので、「火の用心をいたせ」と云つて、當番を免され、父と一しよに屋根に上つて火の子を消して

ゐた。後に切角當番を免された思召に背いたと心附いてお暇を願つたが、光尙は「そりや臆病では無い、以後はも少し氣を附けるが好いぞ」と云つて、其儘勤めさせた。此近習は光尙の亡くなつた時殉死した。

阿部一族の死骸は井出の口に引き出して、吟味せられた。白川で一人一人の創を洗つて見た時、柄本又七郞の槍に胸板を衝き抜かれた彌五兵衛の創は、誰の受けた創よりも立派であつたので、又七郞はいよ〳〵面目を施した。

「惡魔」前篇を讀まざる讀者に

現代の進歩した小說には、趣向や結構を拔きにして、一節〳〵として讀んで見ても面白いのが多い。谷崎氏の「惡魔」の如きも、氏獨得の官能を働かして氏一流の描寫法を試みたのに面白味があるので、趣向や結構は左程の重きをなさぬ。で次に掲ぐる續篇も固より獨立しても充分の興味があるので、强いて前篇について彼此云ふ必要もないが、編者の老婆心から一言大體の前筋丈けを書きつけて置く。

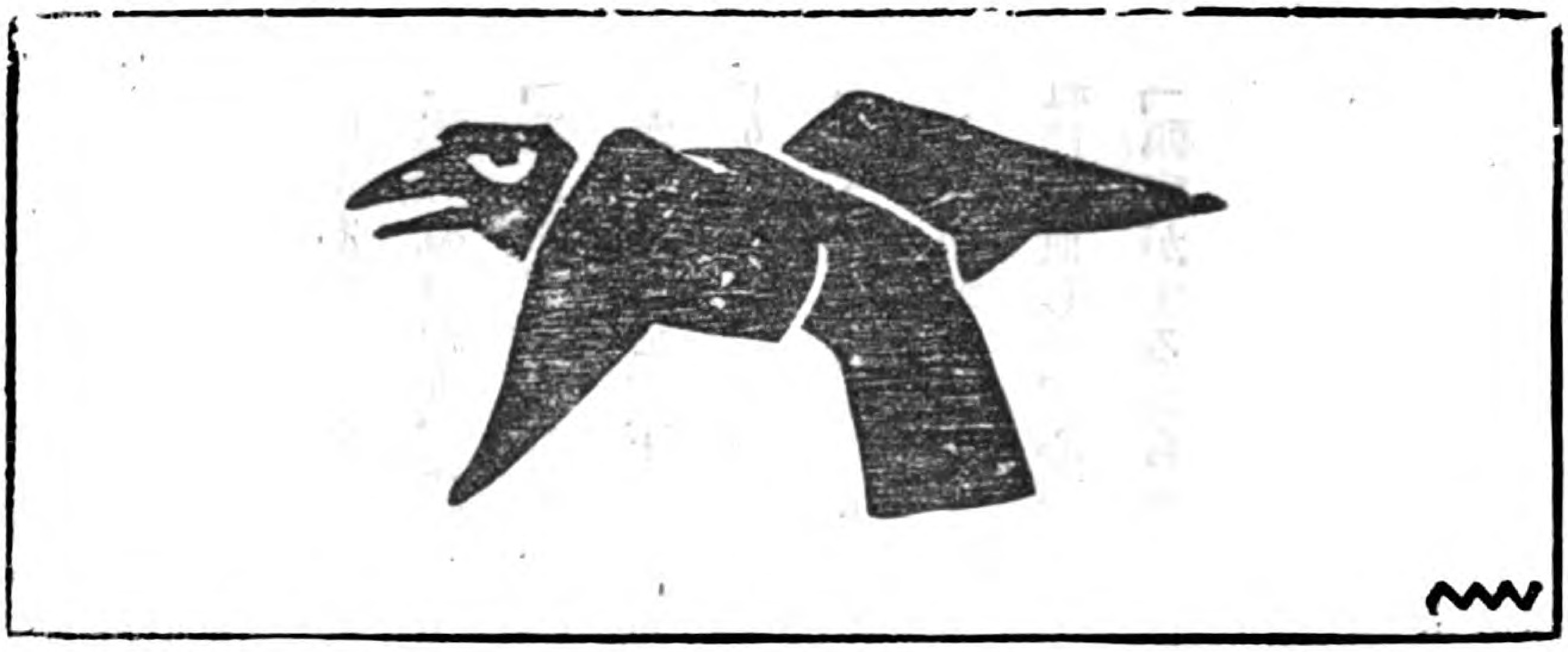
佐伯――岡山の六高を卒へて東京の帝大に入り、本鄕の叔母の家に寄宿して居る。「永らくの放蕩で、腦や體に滲み込んでゐるいろ〳〵の惡い病氣」を持てゐる外に、大酒を呷るので極端な神經衰弱に罹つてゐる。そして祖母が腦溢血で頓死してから自分も何時同じ病氣でやられるか、心臟麻痺を起すか、發狂するか分らないといふ强迫起念に襲はれ通して、始終物にオド〳〵してゐる。

照子――佐伯の從妹。年廿四。肉附のよい、體の作りの全體に大柄な、男好きのする女。未婚なれどもいろ〳〵の學生と關係ありなどいはる。男を弄ぶを好むやうな女。母をも馬鹿にしてゐる。

鈴木――照子の家の書生にして、神田邊の私立大學に通ふ。照子の父が生前に見込をつけて將來立派になれば「照子の婿にもしてやるとウツカリほのめかしたのを執念深く根に持つて」餘り勉强し過ぎたので頭腦をわるくし、他人よりは馬鹿といはれて居る。「眉の迫つた、暗い顏をいつもむつつりさせて」ゐる。今でも照子の爲めには生命も要らぬといひ、照子の方では馬鹿にし切つて居るのに、他の男が照子と口を利いてもヤキモキしてゐる。

伯母――「五十近い、小太りに太つた、いつ見ても氣の若い女」。照子を甘やかして、自分も暢氣に暮らして居るが、鈴木をば魔者のやうに怖れてゐる。

照子が二階にある佐伯の室へ度々入り込んで、長い間話し込んで來るのを、鈴木は不快に思つてゐる。が照子や伯母には何事も言ひかねて居るので、佐伯に向つて自分と照子との關係を話して、照子と近かぬやうに願つて見たが、他人の干涉などは受けぬと佐伯にハネツケられ、其上口止めしたにも拘らず其事を伯母に洩らされたので、鈴木もプリ〳〵怒つて、佐伯には口も利かぬといつてる。佐伯は何となく鈴木に殺されさうに思はれてならぬ。



惡魔（續篇）

谷崎潤一郎

昨年二月號の本誌に掲載した「惡魔」は、當時瀧田君の激しい督促に遇つて、少なくもあの倍以上になるべき長さを、無理に短くつゞめて了つた。元來「惡魔」はあのやうな結末を告げる筈ではなかつた。それが不本意でもあり、殘念でもあるから、玆に後篇を書く。前篇の最後の數節、「間もなく女中のお雪が云々」以下は、全くないものと思つて、讀んで貰ひたい。

佐伯は、頭の工合が日に増し惡くなつて行くやうな心地がした。癲癇、頓死、發狂などに對する恐怖が、始終胸に蟠つて、其れでも足らずに、いやが上にも我から心配の種を撒き散らし、愚にもつかない事ばかり驚き戰きつゝ生をつゞけて居た。伯母が或る晩、安政の地震の話をして、もう近いうちに、再び大地震の起る時分だと、仔細らしく豫言したのをちらりと小耳に挾んでから、ひどく神經に病み始め、微かな家鳴震動に遇つてさへ、忽ちどきん、どきん、と動悸が轟いて、體中の血が一擧に腦天へ逆上した。震動が止むと

彼は一刻の猶豫もなく、轉げ落ちるやうに梯子段を駈け下りて湯殿へ飛び込み、水道の栓を捻つて熱した頭から水をシヤアシヤア注ぎかけながら、卒倒せんばかりに興奮した心氣を辛くも押し靜める。だんだん恐怖が募つて來るに隨ひ、端か騷がないでも、自分には何だか地面の搖れて居るやうな氣のする事が度々あつた。そら地震だ！　かう思ふと矢も楯も溜らず、ひよろ／＼しながら立ち上つて、無我夢中に襖を蹴つたり、床柱にぶつかつたり、散々藻かされた揚句の果てが、

「謙さん、お前さん二階で何をして居るんだい。」

かう云つて、下から伯母に怒鳴り付けられる。すると佐伯はワクワク膝頭をふるはせながら梯子段を下りて來て、例の如く冷水を浴び、

「どうも頭痛がして困るんです。」

と、何氣ない體で答へる。其の瞬間の恐ろしさと云つたら、本當の地震の時と少しも變らず、顏は眞紅に充血して、心臟が面白いやうにドキドキ鳴つて居る。

「頭痛がするからッて、あんなにどたばた暴れないでも好いぢやないか。何かお前さん此の頃氣がゝりな事でもあるんぢやないか。」

「いゝえ」

と云つて、彼は伯母の追究を避けるが如く、こそこそと二階へ上つて了ふ。

本郷は地盤が堅固だと云ふけれど、伯母の家なんか坂道に建つて居るから、いざとなつたら險難なも

のだ。此處の二階に住んで居た日には、如何に考へても、大地震の場合に助りやうがない。割合にシッカリした普請ではあるが、體の偉大な照子が上つて來てさへ、ばたりばたり地響きがする程だから、地震の偉大な奴に出會したら一と溜りもないだらう。「あれエ」とか何とか、伯母が土藏の鉢卷に押し潰されて悲鳴を擧げて居る間に、親不孝の照子はさッさと逃げ出す。のろまな鈴木は逃げ損つて梁の下に挾まれるかも知れぬが、なか／＼其れくらゐの事で死ぬやうな男ではない。どうしても自分一人が、伯母と運命を共にしさうである。……さう思ふと、危險極まる二階の座敷が牢獄のやうに感じられる。

一體大地震と云ふものは、略何年目頃に起るのだらう。其れに就いてオーソリチーのある説明を聞いた上、間違ひのない所を確かめたくなつたので、或る時彼はめッたに入つた事のない大學の圖書館へ駈け着け、カード、キヤタローグの抽き出しをガチガチと彼方此方引張り出した揚句、斯學に關する書籍を山のやうに借り受けて、一日讀み耽つたが遂に要領を得なかつた。何でも大森博士の説に依ると、大地震はいつ何處に生ずるか豫め知る事が出來ない。古來東京には數回の大地震があつたが、將來も必ずあるとは明言されぬ。必ずないとも明言されぬ。甚だ曖昧である。今年は大地震があるだらうなど〻、妄りに危惧の念に駈らる〻は愚昧な話だと云ふけれど、いつ起るか判らなければ心配するのは當り前だらうぢやないか。

どうも佐伯には、大森博士がうす／＼大地震の起る時期を知つて居ながら、其れを隱して居るやうな氣がしてならなかつた。博士の事だから、大體の見當は付いて居ても、何日の何時何分と云ふ明瞭な豫

測が出來ない爲め、乃至いまだ根據のある科學的說明が出來ない爲め、徒らに天下の人心を騷がす事を憂へて發表を遠慮して居るのではあるまいか。何となく其れらしい口うらが講義の中に仄かしてあるやうだ。若しひよッとしてさうだとすれば大變である。天下の人心を騷がせても構はないから、學理上の根底がなくても差支へないから、つまらぬ遠慮なんかしないて、大凡その所を早く敎へて貰ひたいものだ。……から云ふ邪推をすればする程、佐伯はます〳〵薄氣味惡くなつて、知識の無い人間の情けなさを、今更の如く悲しんだ。さうして、單身博士の私邸を訪問しようかと迄思ひ煩つた。

「こんな下らない事ばかり苦に病み續けて居て、己はいつ迄世の中に生きて居られるのだらう。」——

彼は到底今年の暮れが安穩に越せないやうな心地がした。每日々々、朝夕に五六度も胸をドキ付かせ、渾身の神經をビクビク戰かせて、一つ間違へば狂ひになりさうな危かしい輕業を演じながら、どれだけ命が保つて行くだらう。手を換へ品を換へて、執拗に襲ひ來る恐怖の大波を搔い潛りつゝ、盲目滅法に悶え廻り、次第次第に精根が盡き果てゝ行く無慙な姿を、佐伯は自ら顧みてハラハラするやうな折もあつた。呪ふべき運命が、もうつひ近所まで迫つて來て、刻一刻に彼を待ち構へて居た。

天長節も過ぎて、十一月の晩秋の空が爽やかに冴え返り、上野の森の木々の梢の黃ばむだ色が、二階の窓から眺められる時分まで、それでも彼はどうにかして生きて居た。相變らず學校は缺席だらけ、いつも坐敷の壁の腰張りに頭を擦り附けて、枷を篏められた罪人のやうに窮屈らしく臥轉びながら、キスキーを飮んだり、煙草を吹かしたり、やッとこさと落ち着かぬ神經を痲痺させて、石塊のやうな頭を抱

へて居る。さうして、時々文藝倶樂部や講釋本の古いのを引き擦り出して、可なり熱心に讀み耽つたが、たま〳〵照子でも二階へ上つて來ると、慌てゝ其れを蒲團の下へ押し隱した。

「兄さん、今何を讀んで居らしつたの。……そんなに隱したつて、妾ちやあんと知つて居るわ。」

かう云ひながら、照子は或る時二階の窓に腰を掛けて、長い兩脚を臥て居る佐伯の眼の前に放り出した。さうして、

「ふゝん」

と鼻の先で輕く笑つた。照子がこんな笑ひ方をするのは、母親や鈴木を對手にする時にのみ限られて居たものだが、此の頃は佐伯に向つてもちよい〳〵用ゐるやうになつた。

「そんなに見らゝるのが恥かしくつて?」

と、兩手を窓の鴨居に伸ばして、房々とした庇髮の頭をがつくり俯向かせ、足許の犬をからかふやうに佐伯の姿を見下ろして居る。汚れッぽい顏が今日は見事に澄んで透き徹つて、旨味のある軟い造作が、蠟しんこのやうな物質を聯想させた。大方體の加減でも惡いのであらう、肉附きの好い鼻や頰ッぺたまで西洋菓子のマシマローのやうに白々と艶氣を失ひ、唇ばかりが眞紅に嫌らしく潤んで居る。大島の猫甲絣の綿入の裾から、十文に近い大足が疊の上へのさばつて、少し垢の着いた、彈ち切れんばかりに踝へ喰ひ込んだ白足袋の、鞐が一枚壞れかゝつて居るのを見ると、佐伯は餌を投げられた獸のやうな眼つきをして、

「畜生！　又己の頭を引ッ掻き廻しに來やがつた。折角人が面白さうに本を讀んで居るのに餘計なことだ。」

かう腹の中で叫んだ。さうして讀みさしの「高橋お傳」の講釋本を、シッカリ臀の下に敷いて、わざと落ち着き拂ひながら、

「此の本を見せたら、僕よりも君の方が耻かしいだらう。」

と、胡散臭いことを云つた。

「一體どんな本なの。」

「obscene picture だよ。」

かう云つて、彼はさも意地が惡るさうににやにや笑つた。

「いゝわ、構はないから、いくらでも出して御覽なさいな。そんな物を耻かしいとも珍らしいと思やしませんから。……」

ふと、佐伯は照子の顏が恐ろしく obscene な表情に變つて居るのに氣が附いた。いつぞや鈴木が、

「實は以前私とも關係があつたんです。」

と云つた言葉を想ひ出して、此の女の面魂(つらだましひ)では滿更無根の事實でもあるまいと思つた。なか／＼氣の利いた口をきいて居ながら、一遍でも書生の鈴木に玩具(おもちや)にされた事があるとすれば甚だ痛快である。

「成る程、今時(いまどき)の女學生はえらいものだね。君のやうな女が藝者になつたら、嘸繁昌するだらうよ」

ポント投げるやうに云ひ捨てゝ、一と息深く煙草を吸つて、彼は臥ながら自分の胸の邊をうつむいて眺めた。大いに罵つたやうな體裁であるが、其の實こんな言葉を聞くと、照子はいよ〳〵増長して、得意の鼻を蠢かすのは判り切つて居る。ほんたうに嘲る積りて云つたのか、乃至はお世辭を云つたのか、我ながら明瞭てなかつた。さうして、俯向いたまゝ、女の視線が痛い程自分の額を射て居るのを感じた。いつの間にか、「高橋お傳」は臀の下から背筋の方へ辷り込み、肩のあたりてゴロゴロして居るので、佐伯は縛り付けられた人間のやうに身動きが出來ず、嚙みつくやうな眦て女を睨んだ。

「兄さんは正直な癖に嘘ッつきね。ちよいと鈴木に似て居るわ。」

と、照子は口元に微笑を泛べ、眼球をごろりと轉がして、男の頭を凝視して居る。其れが佐伯には、丁度鎌倉の大佛を下から覗いた時のやうな、馬鹿氣て大きな、威力のある顏に見えて、モウ何も彼も洞察されて了ひさうに、ドギマギしながら、

「へーエ、己はそんなに嘘ッつきか知らん。」

かう云つて、力一杯うんと氣張つて空嘯いた。

「Obscene picture だなんて、誤魔化したつて駄目よ。あたしちやあんと知つて居るわ。」

「知つて居るなら、いゝぢやないか。」

彼は不覺にも微かな顫へ聲を出して、臆病らしく眼を光らせたが、

「人の目を窃んて、留守の間に部屋の中を搔き廻して見れば、誰にだッて判るさ。女の利巧と云ふ奴は、

みんな其れなんだ。」

と、叩き付けるやうに云つたと思ふと、體中がわなゝいて、耳の着け根まで眞紅になり、どうしたはずみか、涙が泛かんで來る。

「人の目を竊んで居るのはお互ひ樣だわ。兄さんだツて、こツそり可笑しな本を讀んで居らツしやるぢやありませんか。」

照子は佐伯の泣きツ面を見てから、急に元氣が出たらしく、殊更勞るやうな優しい調子で、根性の惡い事を云つた。

「實はあたし此の間兄さんの本箱を調べて見たの。參考書なんて物は一つもなくツて、妙な講釋本が五六冊入つて居るきりなのね。どうしてあなた方に彼んな本が面白いんだか、私には解らないわ。近代人にも似合はないと思ふわ。餘計なお世話かも知れないけれど、兄さんは餘程此の頃どうかして居らツしやるんぢやなくツて? 端から見て居ても、ほんたうに案じられてよ。」

いやに落ち着き拂つて、憎らしい程心配さうな表情を裝つて、すらすらと喋舌り出す照子の言葉を、半分まで聞くと、もう佐伯は居たゝまれなくなり、耳の穴へ手を挿し込んで、聽覺を攪亂させたくなつた。照子が語り終ると、漸う雷鳴が濟んだ後のやうに、ホツと一と息ついて、

「講釋本が面白ければ、近代人になれないのかい。全體近代人なんてものが、女に解るもんぢやないんだ。」

「そんなら、何だッて、そんなに骨を折つて嘘をついたり、隱したりなさるの。」
「君はなか〳〵えらいよ。……」
何か辛辣に毒ついて、一擧に笑殺してやるつもりのところ、こんな平凡な文句より外見付からないで、彼の調子はだんだん哀願的に變つて行く。――
「えらいと云つたら、もう好い加減にしたらどうだ。君のやうな女が得手勝手に僕等の中へ割り込んで來て、邪魔をしたり、心配をしたりする權利はないんだ。一體誰が許して、いつ頃から君はそんな權利を持ち始めたんだい」
佐伯は兩手に頸筋を押さへて、呻吟するやうな言葉遣ひをしながら、
「君に附き合つてると、鈴木でも僕でも、だんだん頭が馬鹿になるんだ。お蔭で僕の神經衰弱は、東京へ來てからズットひどくなつたよ。近代的であらうが、なからうが、僕はもう講談本以上の込み入つた本なんか、とても讀み續ける根氣がないんだ。」
「そんなに私の事がお氣に觸つて、……」
「何でもいゝから、もうあんまり二階へ來ないやうにして貰はうぢやないか。」
云ひ終ると、彼は齒を喰ひ縛つたまゝ眼を閉ぢて、死んだやうに靜かになつた。其の癖例の動悸はひどく昂ぶつて、激しい息づかひが相手にもハッキリ聞えた。照子は暫く默つて腰かけて居たが、やがて、
「あたしが惡かつたんなら、勘忍して頂戴な。けれども、あたしには、兄さんの氣持がようく解つて居

てよ。」

こんな捨て臺辭を殘して、悠々と下りて行つた。

もう佐伯は、再び臀の下から「高橋お傳」を取り出して見る勇氣がなかつた。妙に卑しく、穢らしく腐れ切つた自分の腦味噌を、慘酷に明るみへ曝し出されて、散々輕蔑された事を思ふと、立つても居ても堪へ切れない程極りが惡かつた。

其の極り惡さを紛らす爲めに、布團の中から机の抽き出しへ手を伸ばして、ビユーカナン、ヰスキーのポツケツト入りの罎を搜つて、枕に顋を押しつけながら、アルミニユームのコツプでちびりちびり飮み始める。俯向きになると、寢勝手の惡いせゐか、方々の節々が痛む。……暫く肘を衝いて、上半身を支へて居れば、直ぐと腕が疲れて了ふ。さうかと云つて、兩肩を落せば、胸板がぺつたりと布團へくつ附き、喉笛が枕に緊められて、酒を飮むことは愚ろか、呼吸さへ苦しくなる。背筋を少しでも擡げると、下腹が切なく壓迫され、腰の骨の蝶番ひが窮屈さうに撓つて來る。どうかして、五體を樂に置かうと鹽梅して見るが、力の權衡上、何處かに錘を下げたやうな、苦しい點を生ずる。

一滴も殘らず飮み干して、空罎を投げ出すと同時に、げえつと大きな噯をしながら、彼は體を裏返しにして仰向きになつた。近來になく、ボウツと快く醉つて居る。「快く」と云ふのは勿論程度問題て、蒲團の汚れて居る事や、手足が發汗してぬらぬらして居る事や、寢間着が脂だらけに垢染みて居る事や、二三日續けざまに照子の Dream に依つて惱まされて居る事や、凡べてさう云ふ忌まはしい所へは、成る

可く聯想を及ぼさないやうにして、ホンの上ッ面の醉心地を祝福したのである。

三十分ばかりの間、彼はいろ〳〵の奇怪な夢を、見ては覺め見ては覺めして、とうたうしまひに、ぐつすりと眠る事に成功した。それでも時々、靜かな寢顏に不安の影が押し寄せて、眼瞼をピリピリさせたり、睫毛を戰がせたりした。夕方、電燈がついて間もなく、晩飯の知らせにお雪が上つて來て呼び起したのを、彼は微かに覺えて居る。

「うん、解つたよ、解つたよ。――己は今日工合が惡いんだから、飯は喰はないんだ。お粥かい? お粥もいらない。」

すつぽり被つた夜具の中から、モグモグとこんな問答をして、再び眠り續けた。

けれども、それから後はあんまり眠られなかつた。まだ何處か知らに、充分睡氣が殘つて居さうであるのに、物の二三時間も彼方此方寢返りを打つた揚句、遂にパッチリと眼を覺ました。頭の上の硝子窓から、星が幾粒もきれいに輝いて居る。押入れの蔭で鼠らしいものが、コッコッ音をさせて居る。彼は又臀の下から「高橋お傳」を取り出したが、直きに其れを讀んで了つて、今度は「佐竹騷動妲妃のお百」と云ふのを、本箱の底から引き拔いた。

此れも「高橋お傳」と同じやうな講釋本である。表紙には、妲妃のお百が髮を振り亂し、短刀を口に咬へて、白い脛、紅い蹴出しを露はに、舷から海中へざんぶと飛び込まうとして居る石版書が刷つてある。藝術として三文の價値もないか知れぬが、此の頃の佐伯は、かう云ふ繪に一番興味を惹かれる。毒々し

い程青い波の色に取り卷かれて、今や將に水面へ觸れんとする女の足の裏の曲線、妖婦らしい眼の表情、手頸襟頸など、大した不自然もなく描かれて居る。其れを見て居ると、此の本の内容――さま〴〵の組み入つた、殘酷な話の筋が想像されて、自然と魂をそゝられる。

卷を開いて、讀むに隨つて、だんだんと面白くなつて來る。

これより小さんのお百がおひ〳〵毒婦の本性を現はし、無殘にも桑名屋德兵衞を十萬坪に於いて殺害致しまするといふ條りは次回に……

などゝ云ふ調子に釣られ、彼は好奇心を煽られながら、愚鈍な眸をして、一氣に讀み續ける。

十萬坪の德兵衞殺しの場は、なか〳〵名文である。

……名にし負ふ其の頃の十萬坪の事でございますから、まことに淋しいもの、あたりには人ッ子一人居りません。折柄ポッーリポッーリと雨さへ降り出して參つた樣子。時分はよしとお百は德兵衞の隙を見すまし、兼ねて帶の間に隱し持つたる短刀を拔くより早く、男の脇腹へダサとばかりに突き徹しました。「アッ」と云つて、德兵衞が逃げようと致しましたが、重い荷物を背負されて居りますので、身動きもなりません。「う、う、うぬ、さては己れを殺すのだな。」「德兵衞さん、お前の生きて居るうちは、わたしの出世の妨げ故、お氣の毒だが殺してやる。此れと云ふのもみんなお前が馬鹿だからさ。グヅグヅ云はずに早く往生しておしまひよ。」と、襟髮取つて引き廻し、所嫌はず滅度斬り、……プッーリ喉笛を搔き切つて、充分に止めを刺し、死骸は河へ投げ込んでしまひました。……

佐伯はふと、自分の喉笛のところへ手をあてゝ、軽く押して見た。丁度古い椅子のスプリングのやうに、皮の下からぽッこりと突起して居るグリグリした骨を、薄い、冷たい、ピカピカした刃物で抉られた時は、どんなだらう。此の突起物を英語て Adam's apple と云ふのだと、彼は中學時代に教はつた事がある。教師の話ては、昔アダムが林檎を喰べて、其れが喉へ塞へて以來、こんな突起が人間に出來たと云ふ傳説から、斯く稱するのださうてある。――妙な事を記憶して居たものだと思ひながら、彼は猶もページを追つて行く。

それから二三枚の間は息もつかずに惹き入れられて、お百がとうとう佐竹候のお部屋様となり濟まし、惡家老の那川釆女と密通の結果、お家騒動を起す段取りまで進んだ時、突然二階がみしみしと揺れた。そら地震だ！　暫く忘れて居た恐怖が度胸を衝いて、彼は夢中て蒲團の上に撥ね返つた。

見ると照子が、梯子段を上り切つたところに、いつの間にか突ッ立つて笑つて居る。米琉の絣の寢間着に、伊達巻をぐるぐると巻き着け、なまめかしく襟をはだけさせて、素足のまゝ、電燈の傘の影の暗がりへ、おいらんのやうにだらりと佇んで居る。

「もうちつと靜かに上り下りしたらいいぢやないか。まるて地震のやうだ。」

欺かれた恨みと驚きとを一緒くたにして、彼は突慳貪に浴びせかけたが、何か知ら容易ならぬ事件が、後に胚胎して居るやうな氣持がした。

「だつて、内證て上つて來たら、却つて兄さんは都合が悪かなくつて。」

いきなり照子はつかつかと枕許へ探り寄つて、
「ほら御覽なさい。――此の本はなあに。」
と、据わる柏子に夜具の片袖を膝の下に敷いて、佐伯を押へ付けるやうにしながら、講釋本を奪ひ取つた。
大盤石の如き重味にのしかゝられて、彼の頭にウヨウヨと發生して居た女に對する些細な負け惜しみだの、面憎さだの、極り惡さだの、そんなものは一度に滅茶滅茶に蹈み躪られ、誘惑の網を藻掻き出たい一心の恐ろしさが、意氣地のない愁訴の聲となつて、女の足許に戰き響く。
「照ちやん、君は何故さうなんだらう。もう、後生だから彼方へ行つてくれないか。」
佐伯は兩手を顏へあてゝ、下を向いて云つた。
「君は惡魔だ。……人が折角面白さうに本を讀んで居るところを、邪魔しなくつてもいゝぢやないか。己は此れ以上の强い刺戟に堪へられなくなつたんだから、もう直き死ぬ迄、ソウツとして放つて置いて貰ひたい。」
「そんなに興奮なさらなくつてもいゝわ。今夜はおつ母さんも鈴木も留守だから、ゆつくりお話ししようと思つてやつて來たの。――あたしに二階へ來るなとか、傍へ寄るなとか云つたつて、そりやあ駄目よ。」
照子は兩方の握り拳を乳房の上へ重ね、ふところをふつくら脹らがして、其の中へ頤の先を突つ込ん

だまゝ、いかにも横着さうに、「兄さんは、お腹の中の事を、正直に外へ出しちまつたらいゝぢやありませんか。隱したつて、隱し終せもしない癖に、隨分おかしいわ。——ねえ、兄さんにはそんなに鈴木の事が氣になつて！」

から云ふと、今度は片手を袂から出して、背中をさすつてやりながら、息がかゝる位、頰を擦り寄せた。

「鈴木の事なんどどうでもいゝんだ。——己は嘘を吐いてゞも何でも、一時逃れに安穩に生きて行くよりほか、命が續かないんだ。衰弱した體や神經を疲らすやうな事は、絶體に勘忍してくれ給へ。」

眼を閉ぢて、こんな事を云つて居るうちに、佐伯の鼻先でぱつと女の着物のはだける臭がした。さうして、枕許の疊がもくもくと持ち上るやうな氣持がした。疑もなく、照子が彼の眞正面へ來て、どつかと据わり直したらしい。

「解つてよ、解つてよ。——兄さんは、いくらあたしを馬鹿にしたつて、あたしの方から敵蓋せて出れば、どうする事も出來ないんでせう。」

女は咒文を唱へるやうにくどくどと云つて、片手で佐伯の手頸を摑み、片手で顔へあてがつて十本の指を解き始める。瘦せた手頸を樂に一と廻りした掌は、柔かく冷え冷えとして、指先などは金屬製の腕輪のやうに、痛い程凍え切つて居る。指を解いて居る方の手は、今迄懷にあつたせゐか、いやににちやにちやに脂が湧いて、生暖く粘つて居る。

男の指には、可なり力が入つて居ながら、強ひて抵抗するやうな様子もなく、針線を撓めるやうにして、一本一本解かれて了つた。

「惡魔！惡魔！」

と、彼は物狂はしく連呼したが、やがてぱつちり眼を開くと、女の顔は思つたよりも、もつと間近く、自分の顔の直ぐ前に殺到して居る。彼は明るみで、人間の面をこんなにまざまざ見たことはない。唯でさへひろ〳〵と餘裕のある顔が、瞳へ入り切れない程擴大されて、白つぽく、壁のやうに塞がつて居る。其の壁のおもては、一體に青ざめて、肌理が非常に粗く、一と通りの氣味惡さではないが、不思議に妙な誘惑力を藏して居るらしい。殊に、怪物のやうな眼の球が、ぎろり、ぎろり光つて、佐伯の魂を追ひ驅ける。——動物電氣と云ふのは、大方かう云ふ作用を云ふのだらう。彼は其の場で即座に氣死するやうな神心の打撃を、辛うじて持ち堪へるより外、逃げる事も、どうする事も出來なかつた。さうして、泣き伏すやうに女の膝へ倒れて云つた。「照ちやん、君は物好きに己を殺すんだ。己を氣狂ひにさせるんだ。……女と云ふ奴は、みんなかう云ふ風にして、男を片端から腐らせるんだ。」

それから二三日過ぎた。鈴木が居ても、伯母が居ても、照子は構はず二階へ來て、一日遊んで居る。

「照ちやん、ちよいと下へ來て、手を借しておくれてないか。お前此の頃は、しッきり無しに二階へ上り込んで居るが、謙さんと仲直りをしたのかい。」

伯母が梯子段の下から、こんな事を云ふ。「えゝ、すつかり仲直りをしたのよ。」

と云つて、照子は眼を細くして、狡猾さうに笑ひながら、ちッと男を見入る。

「おい、もう大概にして下へ行つてくれ。己は昨今こんな強い刺戟を受けて、どうして生きて居られるのか、不思議でならないんだ。お前が居ると、不安で溜らないから、トットと下りてくれ給へ。」

佐伯は破裂しさうな心臟を、後生大事にシッカリ押へて、深い深い谷底へ昏々と沈んで行くやうな眩暈と失神とを感じつゝ、女に訴へる。どうかすると、手足の先が、水に浸されて行くやうに痺れかゝつたり、頭の片側が急に羅をかけたやうにもやもやとする。彼の肉體は屍骸の如く疲れて居ながら、神經ばかりが、びくびくと鋭敏に焦ら立ち、夜も晝も眠られないで、血色はいよ〳〵惡くなるのみであつた。

丁度四日目の晩、伯母が照子を無理やりに引張つて、何處ぞへ外出した留守に、梯子段をみしり、…………みしり、……と、相變らず陰鬱な音をさせて、鈴木がむつゝりした容貌を二階へ運んだ。いつぞや喧嘩をして此のかた、全く佐伯は言葉を交はさなかつたが、以前より一層、人相が險惡になつて居る。銘仙の綿入にけんどんの兵兒帶を締め、洗ひ晒した紺足袋の上て、白い綿ネルの股引の紐を、子供のやうに結んで居る。

「いや、どうもお邪魔を致して相濟みません。……」

と、云ふかと思ふと、氣むづかしさうな顏の構造を俄に建て直して、にたにたと笑つた。まるで寄席藝人が、百面相をするやうな早變りである。

「……此の頃は、體のお加減は如何です。」

柄にもないお世辭を振り撒いて、鈴木は枕許へ畏まつて、兩手を行儀よく膝頭へ置いた。何にしても、あまり意外な、底知れぬ態度である。事に依つたら、懷に匕首でも忍ばせてあるかも知れん。

「やつぱり、工合が惡くて困ります。――失敬ですが、御免を蒙むつて、此の儘にさせて置いて頂きます。」

佐伯は横倒しに臥ころび、脇の下まで夜具をかけて、片手を其の外へ出した。「人を馬鹿にして居やがる。」と思ひながら、成る可く落ち着いて、平靜を裝つて、物を言はうと努めて見る。

「さあ、どうぞお樂に居らつして下さい。……實は何んです。また照子の事に就いて、お伺ひ致したいと存じまして、……」

「はあ、何ですか、」

と、佐伯の受け答へをしたのが、あまり早すぎたので、鈴木は頓着なく話を進める。

「此の頃照子が、ちよいちよい二階へお邪魔に伺ふやうですが、あれはどう云ふ譯でございませう。」

全然監督者の口吻である。「一體貴樣は婉曲に云つて居る積りなのか、皮肉を云つて居る積りなのか。」と、怒鳴り付けたいところを、佐伯はヂッと辛抱して居る。

「いつぞや、お願ひした事を、あなたはお忘れになりはしないてすか。」

「あなたは僕にどんな事をお頼みなすつたか知れませんが、僕は何も承諾した覺えはありませんよ。——照ちやんの事は兎に角として、其れだけは明かにして置いて下さい。」

「いや、承諾なさらなかつたと仰しやるなら、仕方ないてす。そんなら、其れは別として、照子の事を今少しお尋ねしませう。……」

かう云つて、鈴木は左の手て一方の袂を捲くつて、右の手の二の腕の邊を頻りに撫てゝ居る。手頸の眞黒なのに引き換へて、筋肉の頑丈に發達した、太い血管の蚯蚓のやうに走つて居る腕の色の白いのが、いかにも不愉快な、不調和な感じを與へる。馬鹿な奴は、手つきから指の恰好まて馬鹿に見えると、佐伯は思つた。

「私には此の二三日、どうも照子のあなたに對する素振が可笑しいと思はれるんてす。——またあなたにしてもさうてせう。何も私から頼まれないと仰つしやつたところて、苟且にも私と結婚の約束をした女にてすな、それに一日戯れて居らつしやると云ふのは、穏當ぢやございますまい。——一體あなたはどう云ふお考へなんてせうか。此れに就いて要領を得た御返事を願ひたいんてす。」

「はゝあ」

と云つて、佐伯は敷島を一服吸つて、鼻の穴から立ち昇る烟の痕を眺めた。極めて取り濟ました挨拶振りてあるが、此れは相手を輕蔑する爲めよりも、寧ろ相手の恐るゝに足らざる事を、自分の神經に納

得させる爲めに云つたのである。煙草を一寸ばかり吹かすと、直ぐに吸ひ殼を煙草盆の中へ投げ込んで、今度は硝子窓の方を向いた。……空が眞黑で、星が一つも見えない。……神經は充分納得が出來ないかして、未だイライラと騷いで居る。恰も胸の中に、無數の一寸法師が、蛆の如くに湧いて、戰をして居るやうである。

　鈴木は始終の樣子をヂロヂロと眺め、佐伯の手の働く所、首の赴く所を、瞳で追ひ駈けて居たが、遂に返答がないので、暫くもぢもぢ躊躇つた後、再び口邊へ薄笑ひを洩らしつゝ喋舌り出す。此の男はどんなに激情の沸騰した場合でも、話をする前に先づ薄笑ひをするのが常癖となつたらしい。

「さう云ふやうに默つて居らしつても、御返事がない間は、一ト晩でもかうやつて居りますから、斷乎とした、男らしい御返事をなすつた方がいゝでせう。それに、あなたの其の御樣子を見ても、もう大概は私に解つて居ります。人間と云ふ者は、みんな不思議に正直なもんですからな。」

　いくら平靜を裝はうとしたつて、鈴木に口を利かせて置けば置くほど、怒らずには居られない。彼の口先でチクチク突ッつかれると、どんな頑丈な勘忍袋の緒でも、殆んど先天的の不可抗力を以て、叩き破られて了ふ。況んや佐伯に於いてをやだ。馬鹿と神經衰弱の應對だから、第三者が見物したら餘程面白い光景だらうと思ひながらも、佐伯はムカムカと腹が立つ。

「僕の考へを云へと云つたつて、考へなんかないんだから、御返事する必要はありませんよ。君の方で大概解つたのなら、それでいゝぢやありませんか。」

窓外の桐の葉に、バラバラと音がして雨が降り出した。早く照子が歸つて來ればいゝが、……

「フン、何かと思つたら、さう云ふ事を仰つしやる。——あなたが、さう云ふ卑屈な態度をお取りなるのは、結局御損ですよ。」急に此處から殺氣を含んだ調子に變つて、「決して私は此の儘に濟ませやしないのです。私には充分な覺悟があつて、已むを得なければ最後の手段を取る決心ですから、言を左右に托して逃れようとなさると、却つてアテが外れます。」

とうたう來たな、と、佐伯は腹の底で呟いた。斯う威嚇されて見ると、成程凄いものだ、現にたつた今、「最後の手段」と云はれた瞬間に、心臟がヒヤリとして、口から半分出かゝつて居た負け惜しみの文句が、忽ち引き込んで了つた事は確かである。其れで居て、いつものやうな切迫した、あはや卒倒しさうな恐怖が襲撃して來ないのは、どう云ふ譯だらう。彼は反對に其の物凄さを、適當な刺戟を持つ興奮劑として、味ふやうな氣分になつて居る。

「君の方に決心があるなら、何とでもいゝやうにし給へ。——もと／＼僕は、君からそんな故障を申し込まれる理由はないんだ。照ちやんが自分で勝手に二階へやつて來て、遊んでるんだから、僕の知つた事ぢやありませんよ。故障を云ふなら照ちやんに云ひ給へ。」

「いや、女などに理屈を云つたて解るものぢやないです。それよりか、あなたは照子に代つて、辯解なさるだけの責任がおありでせう。……ないと云ふ筈はございますまい。」

「僕に責任が？」

「はゝ」

と、鈴木はさも憎體に鼻先であしらつて、

「どうせ、そんな事を仰つやるでせうと思つて居ました。しかし私は昨日、照子の秘密にして居る日記を見て了つたのです。あなたは既に、姦通をして居らつしやるぢやありませんか。」

かう云つて、せゝら笑つて居る。笑ふ拍子に厚い唇の奥で、亂杭齒が刃物のやうにピカリと光つた。

「おい君、ちつと氣を附けて物を云ひ給へ。……」

何とか後を誤魔化さうとしたが、モウ到底隱し切れないやうになつたので、

「姦通と云ふのはおかしいぢやないか。よしんば僕と照ちやんと關係があつたとしたところで、姦通呼ばゝりをする法はないだらう。」

「『關係があつたところで』ですか、……さう曖昧に仰つしやらずと、實際關係があつたと仰つしやつたら如何です。」

「そりや、關係はあつたさ。」

今迄の言動とは甚しく矛盾した事を、彼は苦もなく是認して、冷然と云ひ放つた。言下に鈴木の懷から匕首が閃くのかと思つたら、そんな形勢はない。それでも佐伯は、もう半分ばかり命がなくなつたやうな心地になつて居る。

「そら御覽なさい。」

鈴木は、討論會で相手を凹ませた時のやうに、得々然として、

「關係がある以上は、姦通でございませう。——いつぞやお話しました通り、私と照子とは許婚になつて居るんですから。」

「君は其の積りかも知れないが、照ちやんの方ぢや、約束をした覺えがないと云つてるぜ。自分で獨り極めにして、姦通呼ばりをするなんて非常識極まる。——君はそんな理窟が、世間に通ると思つてるのか。」

「照子が何と云つたつて、彼奴の云ふ事なんぞ、信用は出來ませんよ。——照子の父がちやあんと、其のやうに約束したんです。親の意志に從つて、娘に結婚を強ひるのが非常識ですか知らん。」

「だからさ、だからさ、そんな苦情は僕の知つた事ぢやないんだから、照子の方へ持つて行つたらどうだ。照子で解らなければ母親も居るぜ。」

から罵つて居るうちに癇癪玉が破裂して、佐伯の顏は見る見る眞赤に充血した。もうかうなつたら、何でも彼でも怒鳴り續ける積りで、口の中に劍突の彈丸を頰張りながら、相手の一言一句を待ち構へて狙つて居る。

「いや、今日になつて母親の意見を聞く必要もないです。母親や照子がたとへ何と云つたところで、一度約束した以上は、私は其れを認めて居るんです。許婚と云ふ事は、立派な既成の事實なんですから、私は唯、あなたの姦通の罪を責めればいゝのです。——此の事件に就いて、あなたはどう云ふ處置をお

取り下さるか。……」

「君、面倒だから、いつそ二人で決鬪しようか。ねえ、それが一番きまりが着いていゝ。」

突然、佐伯はこんな事を云つた。さうして、さもさも勇氣凛々たる調子で、キッと相手を睨み付けたが、いつの間にか極度の憤激と恐怖とが、氣狂ひじみた瞳の中に漲り彌つた居た。

「まゝ、さう仰つしやらずと、穩やかに解決する方法がございませう……」

意外にも、鈴木は少し面喰らつて、殊更柔和な顏を拵へながら、

「お互ひに高等教育を受けた人間ですから、そんな野蠻な行爲はしたくないです。私はあなたが謝罪の誠意さへ示して下されば、それで滿足しちまふんですよ。なあにあなた、決鬪だの何だのと、そんな馬鹿らしい眞似をするには及ぶもんですか。」

「僕は君に對して、何の罪も犯して居ないんだから、謝罪なんか出來ないぜ。――決鬪しようよ君、其れが一番いゝつてば。」

「ふん、まださう云ふ事を仰つしやる。――立派に姦通をして居らつしやりながら、謝罪が出來ないと云ふのは可笑しいですな。」

「君は馬鹿だな、よつぽとひどい馬鹿だな。かりに照子が許嫁だつたつて、現在同棲して居ないものを、何處が姦通なんだ。」

佐伯は咆へるやうにガミガミと此れだけ喋舌つたが、中途で舌が跌いて、とてもすらすら口が利かれ

ない。手足が顫へつく程腹が立つて、痩せた體へ入り切れないくらゐ怒が充滿した。あまり激しく亂つたせゐか、呼吸が忙しなく彈んで、唇が頻死の病人の如く青褪めて居る。肩から頸のまはりの動脈をづきんづきんと響かせて、多量の血が頭へ上つて行く。此の二三日、照子に接近して以來、神經が夥しく衰弱して、チョイとした刺戟に遇つてさへビクビク反撥するのに、此の上感情を煽られたら、彼は一擧に憤死して了ひさうだ。

「はゝ、女の事では誰でも馬鹿になりますよ。――私なども、隨分照子には馬鹿にされましたからな……」

かう云つた時、鈴木の愚鈍な容貌は一層暗くなつて、淋しい笑ひと一緒に、悲しげな表情が泛かんだ。

「しかし、あまり馬鹿にし過ぎると、私も默つて居ないです。――そりや成る程、法律上から云へば、姦通ではないでせう。けれども、あなたに良心がおありになるなら、そんな理屈は仰つしやれない筈ですがな。――ま、明日まで御返事をお待ち申しても宜しうございますから、今夜ゆつくりとお考へなすつて下さい。私の方が正しいか、あなたの方が正しいか、落ち着いてお考へになつたら、そりやキットお解りになるでしよ。…」

出來るだけ相手の話が聞えないやうに、佐伯は心を餘所へ外らして、一生懸命興奮を押し鎭める事に努めた。其の恰好は、丁度五段目の勘平が切腹して今にも落ち入らうとする斷末魔に、片手を急所の傷口にあてながら、息をせいせい云はせる姿によく似て居た。

「兎に角、御參考までに申し上げて置きますが、つまり私は此れだけの處置を付けて頂きたいんです。――先づ第一に姦通の事實を認めて、謝罪狀を書いて頂く事。それからですな、謝罪の條件として、將來斷然照子と手をお切り下さること、……」

と、鈴木は、爪の先が悉く短く喰ひ切られた右の手の指を折り數へて、

「手をお切り下さる證據に、此處の家を立ち退いて頂く事、……尤も此れは何ですよ、下宿をお尋ねなさる御都合もございませうから、五日以內に實行して下されば宜しいんですよ。あなたが照子に野心を持つておいでにならなければ、以上の條件を承諾なさるのは、そんなにむづかしい事ではございますまい。どうか一つ、明日のうちに御挨拶が願ひたいのです。私の方もいろいろ都合がございまして、……」

云ふだけの事を云つたら、好い加減にして引き退つたらよささうだが、殆んど際限なくブツブツと口を動かす。相手がどんなそつけない素振を見せようと、耳があつたら聞えるだらうと云はんばかり、石に向つて念佛を唱へるやうな態度に出て居る。――

「……お互ひにつまらぬ女の事なぞで、爭論をしたかないですよ。此れを御緣に御交際を願つて、又何かの時には私のやうな者でも、及ばずながらお力添へにならない事もないでせう。此れが男と女ぢや仕方がありませんけれど、男同士の喧嘩なんですから、濟んで了へば却つてサッパリして好い心持ちです。はゝ。」

佐伯は頭から蒲團を被つて、寢た振りをして了つたが、いつまで立つても愚劣な獨語が止みさうもな

い。折々ぽつり、ぽつりと途切れるから、今度は下へ行くかと思ふと、又續きが始まる。——そのうちに、佐伯はふと、或る身の毛のよだつやうな、物凄い事を考へ出した。鈴木がかうやつて、大人しく喋舌つて居るのは、其の實張ち切れさうな癇癪を堪へつゝ、此方の樣子を窺つて居るのか知れない。此方の仕業があまり冷淡なのに、いつ何時癇癪玉を破裂させて、

「やい、もう勘忍ならねえぞ!」

と、云ふより早く懷の匕首を拔き放ち、夜具の上からズバリとやられるかも知れない。伊勢音頭の貢が萬野を殺すやうに、散々無禮をさせ、增長をさせた場句、いきなり不意討ちを喰はせないとも限らぬ。さうだとすれば、蒲團を被つて知らん顏をして居るのは、危險千萬である。敵の動作がまるきり見えないから、いざと云ふ場合に逃げる事は愚か、聲一つ立てる譯に行かない。それでも、何か知ら敵の喋舌つて居る間は安心だが、言葉の途切れた時が、最も氣懸りである。其の隙に、そつと短刀の鞘を拂ふとか、蒲團の方へにじり寄るとか、いかなる用意をして居ないとも限らない。……

ちりん、と階下の格子を開ける音がして、伯母と照子が歸つて來た。

「おゝ寒かつた。おッ母さんあたし風を引いちやつたわ。——さつきの駱駝の襟卷を買つてくれないからよ。」

などゝ云ふ照子の無遠慮な聲が二階へ響くと、佐伯のみぞおちの邊にこびり着いて居た不安の塊は、だんだんに弛んで、溶けて了つた。同時に鈴木は、

「や、どうもお邪魔致しました。」

と、やをら身を起したが、

「また彼奴等に知れると面倒ですから、萬事あなたのお考へから出たやうにして、先程申し上げた通りの御處置を願ひたいんです。――明日一杯お待ち申しますから、照子などに御相談なさらんて、秘密に御回答をなすつて頂きたい。」

こんな事を云つて、成る可く愴てた態を見せないやうに、悠々と引き拂つて行つた。すると、

「照ちやん、まあ着物だけでも着換へてからにおしなね。」

かう云ふ伯母の言葉が遠くに聞えて、

「いゝえ、ちよいといま直ぐ下りるわ。」

と云ひながら、照子が入れ違ひに梯子段を上つて來た。さうして、男の傍へどたんと据わつて、

「鈴木が何しにやつて來たの。」

と、消えかゝつた火鉢の炭をいぢり始めた。

何でも、大分夜が更けたのだらう。電燈のあかりが一時ぼんやり暗くなつて、再びパッと明るく照つた。ばらばらばらと桐の葉に、思ひ出したやうな雨の雫があたるけれど、格別の降りではないらしい。

「ねえ兄さん。……何しに來たの。」

かう催促されたが、佐伯はやつぱり蒲團の中へ首を埋めて、微塵も動かないで居る。長く伸びた、蓬

のやうな髪の毛ばかりが、夜具の縁から少し出て居る。

「お前、何處へ行つて來たんだ。」

暫く立つと、彼は寢言のやうな調子で云つて、たつた今眼が覺めたやうに、眼瞼をぱちぱちやらせながら、途方もない横ッちよの方から顔を露した。

「何處へ行つたつて、そんな事は構はないわ。――それよりか、鈴木が何て此處へ來たのよ。あたしに云ふなッて、威嚇かされたんでせう。」

「馬鹿を云へ。」

佐伯は出來るだけ瞳を額の方へ吊り上げ、殆んど窪んだ眼球が眉毛へ着くくらゐにして、仰向きに、女の膝頭から腹、胸、襟のあたりをつくづくと眺めた。凡そ此の女の血色程、毎日のやうに變化するものはあるまい。今日はおもての寒氣に觸れたせゐか、頬ッぺたと鼻の先に赤味を帶び、肌が瀬戸物の如く冷めたさうにピカピカ光つて、顔の感じが全く異なつて居る。

「照ちやん、お前鈴木と何か關係した事があるのかい。」

いつか一度は尋ねよう尋ねようと企らんで居た質問を、彼は此の機會に乘じて提出した。

「つまらない事を訊くのね。あるかないか、考へて見たら解るでせう。」

怫然として色を作す模樣もなく、平氣でこんな答へをするだけ、女の云ふ事が嘘だか本當だか、ちよいと佐伯には判らなかつた。尤も照子は、どんな場合にも、高聲で笑つたり喚いたりしない人間である。

多分感情の動搖を有りのまゝに發表する事が、女の威嚴を損ずるとても思つて居るのだらう。
「だつて鈴木は、立派に關係があると云つたぜ。」
「誰があんな奴と……」
「あんな奴でも、昔は秀才だつたさうだから、何ともわからないな。」
「解らなければ解らなくつてもいゝわ。そんなに辯解したかないくてよ。――若し關係があつたとしたら、それがどうなの。」
「己達のした事は姦通だの何だのッて、あんまり彼奴の鼻息がえらいからさ。」
「それぢや兄さんは、すつかり鈴木に白狀しちやつたの。」
「うん、お前の日記を内證で見たんださうだ。もう隱したつて仕樣がないよ。」
佐伯は「どうでもなれ」と云ふ心になつて、投げ出すやうな物慵い言葉遣ひをした。
「そりや鈴木が鎌を掛けたんだわ。あたし内證にも何にも日記なんか書きはしませんもの。――兄さんは欺されたのよ。」
「馬鹿の癖に、いやに小刀細工をする奴だな。……」
かう嘲けつては見たものゝ、ウマウマ一杯喰はされたかと思ふと、彼はいよ〳〵鈴木が憎らしくつて、業が煮えて溜らない。……いまいましさに腹の蟲がムヅムヅして、あたりの物を手あたり次第に打ッつけてやりたくなつた。

「……知れたら知れたて構はないぢやないか。どうせ判るにきまつて居るんだ。」

「兄さんも隨分人が好いのね。自然と知れたのなら好いけれど、鎌を掛けられて白狀するなんて、まるでお話しにならないわ。欺されたり威嚇かされたりして、いゝ加減馬鹿にされたんぢやなくつて。――ほんたうに仕樣がないわね。」

かう云つて、照子は襟にかけたヹールを外づして、ふわッと男の夜具の上へ放り出すと、今度は大儀らしく横倒しに寢ころび、佐伯の頭の方へ自分の顏を持つて行つて頰杖をついた。長い體が恰も蒲團と丁字形に、男の枕許を弓なりに包圍して丘の如く蔽うて居る。戶外より少しは暖かい室內の空氣にぬくめられて、血色はいつの間にか眞白に生き生きとして來た。

「鎌を掛けても掛けないでも、あんな奴には、どんどん本當の事を云つちまふ方がいゝんだ。なまじつか細工をするだけ、此方の沽券が下るやうな氣がする。」

佐伯は兩手を頭の下に敷いて、天井を睨みながら、さも齒牙にかけるに足らんと云ふやうに空嘯いたが、やつぱりいまいましさが胸の何處かに殘つて居て、どうも溜飮が下らなかつた。

「それで鈴木は、姦通したからどうしろッて？」

「己に謝罪狀を書いて、此處を出てくれッて云ふから、頭からドヤしつけて追つ拂つたんだ。――あの馬鹿野郎！」

鈴木に威嚇かされたのでない事を女に頷かせる爲め、殊更强さうな文句を並べて見る。

「若しかすると、兄さんは鈴木に殺されてよ。……」

半分は冷やかすやうに、半分は心配するやうに云つて、照子は唇にむづ痒さうな笑を泛べたが、それは仰向いて居る男の眼へは入らなかつた。

「殺すなら、殺すがいゝ。彼奴は始めッから己を目の敵にして狙つてるんだから、關係しようと、しなからうと、どうせかうなるにきまつてるんだ。」

「ふゝ、大丈夫よ。」

横倒しのまゝ、腰の骨を使つて、疊の上を游ぎながら、女は自分の顔が男の内ぶところへ入るくらゐ擦り寄つた。二人の體は丁度二つ巴のやうに首を中心として、右と左に弧を畫いて居る。

「恐がらなくつてもいゝぢやありませんか、彼奴は人を殺せるやうな、そんなテキパキした人間ぢやないんですもの。あたしなんか、散々馬鹿にし抜いてやるけれど、怒つた顔一つしやしないわ。ほんとに大丈夫よ。さつきのは冗談に威赫かして見たの、ほんとに安心よ。だから此れからいくらだつて……」

話の間に佐伯は、ぐるりと首を相手の方へ曲げて面と向かつた。男の前に頬杖を突張つて居る照子の顔は、柔かい大福餅を押しつけたやうに、皺が寄つたりたるんだりして、分厚な唇や、眼瞼や、鼻柱や、頤の肉や、方々の皮膚がいろ／＼に弄ばれ、殘酷な歪みなりの嬌態を呈して、媚びるが如く躍つて居る。肉が何かの歡喜に充たされて、踊りをおどつて居るやうである。

「殺されない、殺されないと思つて居ると大違ひだ。己達は殺されるより外、別に方法がないやうには

かりし向けてるぢやないか。彼奴はお前を殺さなくつても、己を殺すにきまつて居る。——恐い恐くないは別として、己は唯預言をして置くんだ。」

「そんな預言は神經衰弱の結果だわ。」

「神經が衰弱すると、却つて或る方面には鋭敏に働くから、普通の人間の判らない事まで感じるんだよ。」

「鈴木に殺されるくらゐなら、あたしに殺された方がよかなくつて？」

かう云つて女は、頰にあてがつた肘を外づして、十本の左右の指を組み合はせ、掌を外側にして兩手を棒のやうにグッと男の方へ伸ばした。丁度二つの掌の、網代に組み合はされた部分が、さながら蟹腹のやうに思はれた。

あくる日の朝、鈴木はいつものやうに庭を掃除すると、包をかゝへて、神田の私立大學へ出かけてつたが、夕方になつても歸つて來なかつた。三時半に電燈がついて、四時半ごろからそろ〳〵暗くなつて、追ひ追ひ風呂を沸かす刻限の近づくに隨ひ、佐伯と照子は何となく其れが氣がゝりになり出した。

「鈴木はどうしたんだらうね。大變歸りが遲いやうぢやないか。」

晩飯が出來上りかけた時、とうたう伯母がこんな不審を打ち始めた。しかし、飯が濟んで臺所が片附いて了つても、鈴木はなかなか戻つて來ない。

「ほんとにどうしたんだらう。おかしいぢやないか。――雪や、お前御苦勞だが、鈴木が居ないから、湯殿を焚きつけておくれ。」

伯母の不審は夜の更けると共に次第に強くなつて、口叱言がだんだん激しくなる。

「ま、もう八時だよ。冗談ぢやないどうしたつてんだらう。」――最初は叱言のやうに口を尖らして、ブツブツやかましく呟いて居たのが、やがて泣き出すやうな、恐怖に襲はれたやうな調子と變じ、

「雪や、鈴木は今朝何時ごろに出て行つたのだい。」

風呂から上つて來て、柱時計を眺めながら、から尋ねた時の伯母の顏つきと云つたら、まるでべそをかいて居た。

「左樣でございますね。たしか七時半ごろでございましたらうよ。先の時分は、いつでもおかみさんの御寢間の廊下へ手をついて、『行つて參ります。』つて聲をかけたのに、此の頃は掃除をすますと、默つて出て行くんでございますよ。そりや、おかしいやうにムッツリして居りますの。」

お雪は人の心配なんぞ少しも氣に留めないで、至極無邪氣に、こんな事を訴へる。

「今朝は別段、いつもと變つたやうな樣子はなかつたかい。」

「さあ、……尤も此の二三日は大分不機嫌で、あたしと喧嘩ばかりして居りましたつけ。」

「内々て荷物でも運んで居るらしい風は、見えなかつたか知ら。」

「いゝえ、そんな樣子は……」

皆まで云はせず、伯母はもどかしさうにつかつかと玄關横の書生部屋へ駈け込み、戸棚から、押し入れから、本箱の蓋まで開けッぴろげて、血走つた瞳を据ゑつけて、一々中を檢べて見たが、

「おかしいねえ、……着物もそつくりして居るし……」

と、云つたまゝ、忙然と彳んで了つた。

「さう云へば此處に、法律の本らしいものが、五六冊立てゝございましたのに、其れが見えないやうでございますよ。」

アッケに取られたお雪は、伯母のうしろから附いて來て、暫くぼかんとした後、やうやう氣が附いたのか、かう云つて剝げかゝつた一閑張の机の上を指差した。

此の騷動の最中、照子は二階へ上つたきり姿を見せなかつた。實は伯母も、とうから照子に相談して、憂を共にしたかつたのだが、鈴木の事と云ふと、「あんな奴に何が出來るもんですか。」とか、「恐がればいゝ氣になつて增長するばかりです」とか、てんで馬鹿にし切つて相手にならないので、遠慮して居るのであつた。けれどもかうなると、伯母も到底一了見で疊んで置く譯に行かないから、冷やかされるとは知りつゝ、

「照ちやん、照ちやん」

と、今にも大變事が起りさうな惶てかたをして、けたゝましく梯子段を駈け上つた。

「お前、鈴木がいまだに歸つて來ないんだよ。」

「そんなら屹度、内を逃げ出したんてせう。」

男の枕許の火鉢にあたりながら、照子は雜作もなく斷言して、母の方を振り向いても見ない。

「さうかねえ、……また例の癖が始まつたんぢやないか知らん。お前何か、鈴木を怒らせるやうな事てもしたのかい。」

女房が亭主に寄り添ふ如く、母は娘の傍へぺつたり据わつて、救を求むるやうに膝をつけた。するとお雪が、

「おかみさん、おかみさん……」

と、階下から喉笛の吹き裂けさうな、甲走つた聲をあげて、

「硯箱の中に、何だか置き手紙が入れてございますよ。」

「さうかい。ちよいと二階へ持つて來ておくれ。」

續いて、再びばた〳〵と梯子段を駈け昇る音がして、お雪が爆裂彈でも運ぶやうに、氣味わる〳〵い封筒の書面を持つて來る。

「いゝから、お前は下へ行つておいて。」

受け取ると等しく、伯母は狀袋の頭を引きちぎりながら、お雪を追ひ返して、勸進帳を讀むやうに、手紙を兩手て胸のあたりに支へ持つた。

斷つて置くが、狀袋の表には、「御主人樣」とでもあるべき處を、わざわざ「林久子殿」と伯母の本名を

麗々しく楷書で認めてある。本文の方は半紙二枚へ、大小不揃ひの拙劣な文字が、穗の擦り切れた筆で、而も墨黑々と走り書きしてある。

讀んで行くうちに、伯母の眼つきは胡散らしく光つて、自然と眉を顰め唇を結び、憎らしさうな恐ろしさうな、いろいろな表情を湛へたが、最後まで讀み終ると、全く顏が土氣色になつて、

「まあ、お前さん達此れを見て御覽。」

と、二人の前へ投げ出した。人相見の所謂「死相」とは、蓋し此の時の伯母の容貌などを云ふのだらう。まるで魂飛び神失して、ろくろく舌の根も動かせないらしい。

果して、どんな凄い文句が列べてあるのか知らん。――佐伯は眩暈を堪へつゝ深い谷底を瞰下ろすやうに、蒲團から乘り出して、手紙の方へ上體を匍匐させた。もう讀まない先から、例の動悸が、心臟を破れんばかりに叩いて居る。照子は火鉢の緣へ頤を載せて、對角線の方角から、斜めに覗き込んで居る。

予は今夜を限りとして、二度と再び此の家に戾らぬ決心ナリ、最早や此の家の飯を喰ふも家族の顏を見るも不愉快となりたり、其の理由原因ハ、各自の胸にきいて見れば直ちに了解する筈なれど、就中照子と佐伯とは、必ず思ひあたる節アラン。しかし、今一應此處に宣言すべければ、よく熟慮反省して過を改めよ。然らば或は、予も其の罪を赦しやる可し。

予ハ第一に照子の母たる久子の罪を鳴らさゞる可からず。汝は夫欽造氏の死後、果してよく未亡人

たるの勤めを完ふセシヤ。敏造氏生前の遺訓に背き、夫が唯一の忘れ記念なる娘の教育法を誤解して照子をして今日の如く墮落せしめたるは汝の罪にあらずして何ぞや。敏造氏の生前に比べて林家の家風の頽廢せる事殆んど言語に絶エタリ、予の如きは之を憂へて幾度か忠告したるも、汝は更に耳を傾けず、却つて予をうるさがり、甚しきは予を嘲笑して毫も反省する所アラズ。實に家名を傾くるものと云ふべし。

殊に敏造氏が娘照子を予に娶ハセンとの遺志ありし事は明白なるに不拘、今に至つて言を左右に托し、其の婚約を破棄せんとするのみか、嘗て婚約したりし事さへも頻りに打ち消さんとするは、亡夫を欺き予を欺くの罪極めて大なり。地下の敏造氏若し靈あらば、必ズヤ泣かん。

アヽ予は汝等母子の爲めに實に半生を誤まられたり矣、サレド記憶せよ、予ハ汝等に對して復讐せずんば已マズ。予が敏造氏ヨリ受ケタル恩恵ヤ甚大なりと雖、汝等は予の敵ナルと同時に敏造氏の敵なるを以て、毫も假借スル理由ナシ。而も事茲に至る迄、予ハ幾回カ敏造氏の値遇を思ひ、汝等の墮落を憐みて、忍び得るだけは忍びたるなるをや。

終りニ臨みて、尙佐伯に一言せん。もはや此の場合となりては最後の手段を下すに一刻の猶豫もなり難けれど、汝にして直ちに悔ひ改め、予が昨夜提出シタル條件を即時實行して、林の家を立ちのかば、或は許容の道ナキニ非ズ。予ハたとへ家にあらずとも、汝等の行動ハ常に怠リナク監視しつゝあり。若し飽く迄も予に反抗するならば、それだけの用心が肝要なり。少くとも闇夜に外出する時は注

意すべし。

これて手紙は終つて居る。脅迫狀を投げ込まれたら、嘸かし恐ろしいだらうと想像して居たのが、實際にぶつかると案外恐ろしいものではない。多少薄氣味惡いだけの話てある。

「はゝ、とうたう奴さん、癇癪玉を破裂させましたね。」

から云つて、佐伯は伯母の方を向いた。ところが、手紙よりも伯母の顏を見て居ると、却つて恐ろしさを感じさせられる。

「何を云つたつて、ウッチャラかして置けば、又直ぐ戻つて來るわ。」

照子はスッカリ手紙を讀んだ癖に、ろくろく眼を通さないやうな風をして云つた。

「ほんとに戻つて來るか知ら、あたしや今度はどうかと思ふよ……」

伯母は胴ぶるひをしながら、及び腰になつて火鉢へ摑まり、再び疊の上の書面を視詰めて居る。

「……內に居れば居るて、始終ブツブツ云つてるし、逃げ出せば逃げ出すて心配だし、あたしや彼奴にはもうもう困り切つちまふよ。それてもまあ內に居る間は斬るの突くのッて心配がないからいゝが、外へ出た日にや、何を企らんてるか判りやしないもの。ヒョットしたら今夜あたりだつて、內の廻りをうろついて居るかも知れない。」

三人は暫く默つて、聞くともなしに戶外の物音に耳を澄ました。晝間てもあまり人通りの繁からぬ往來の夜は眞暗て、板塀にぴッたり體を着けて居たら、二三尺離れるとなかなか見付かりさうもない。其

の外路次の芥溜めの蔭でも、裏の庭木戸の片隅でも、身を隱すには究竟の場所柄である。

すると、ぱた、ぱた、と遠くの方から、人の忍び寄るやうな足音が、三人の耳へ響き始めた。草履穿きか乃至は跣足で、極めて靜かに歩くものがあるらしい。ぱた、ぱた、ぱた、と、音は一定の間隔を置いて幽かながらも、次第次第に内の前へ近づいて來る。やがて其の音は、ハッキリと、確實に聞き取れるやうになつて、ゴム底の足袋を穿いた車夫が、メリケンの俥を挽いて走つて居るのだと判ると同時に、家の前をどんどん素通りして行つて了つた。

「何かい、……近頃になつてお前さん達は、鈴木に腹でも立たせるやうな事をしたのかい。」

「さうね、」……と、照子はわざと仔細らしく考へて見て、「あたしなんか、てんで鈴木の方から口を利かない位なんだから、別段怒らせるやうな眞似をした覺えがないわ。」

「しかし、お前この頃二階へ上り詰めぢやないか。――もうかうなれば、内輪同士で隱し立てをしたつて詰まらないから、本當の事を云つておくれよ。謙さんにしても、お前にしても、何か鈴木の氣に觸るやうな事があつたのぢやないかい。」

「氣に觸るやうな事ッて、どんなことよ?」

「どんな事にも、こんな事にも、此の頃のやうに一日二階へ上つたきりぢや、誰だつて變に取らうぢやないか。わたしは親の慾目から、まさかそんな不行蹟はあるまいと思ふけれど、鈴木の疑ふのは、そりや尤もだよ。――だから、お前さん達から、正直なところを聞かして貰ひたいのさ。」

「疑ふ人にはいくらでも疑はせてお置きなさいな。世間が何と云つたつて、おつ母さんさへ、信じて居て下されば有難いわ。」

「それ、さう云ふ言ひ草がお前、親を馬鹿にすると云ふものだよ。折角お前の肩を持たうと思つたつて、傍から親を馬鹿にするやうな素振りがあつちや、わたしに腹を立たせるばかりぢやないか。」

かう云つて、伯母は佐伯を振り返つて、半分は贊成を求めるやうな、半分は賛否を糺問するやうな句調で、

「ねえ謙さん、照子が萬事あれだから、わたしやほんとに手が付けられないんだよ。いくら親の眼が愚つて居たつて、お前さん達が何をして居るかぐらゐ、大凡見當はついて居ますよ。いろ〳〵と若い時分から苦勞をした年寄が見れば、とやかう隱し立てをしたところで、直ぐ判るんだからね。今となつて別に叱言を云ふんぢやないから、お前さんから正直な話を聞かして貰ひませう。」

「はあ、僕も大變伯母さんに御心配を掛けちまつて、申譯がありませんが、そりや實際のところ、……」

咄嗟の場合、噓を云はうか、本當を云はうか、自分でも充分に決しかねて、佐伯は夜具の襟から首を出したが、照子が頻りと眼くばせをするので、忽ち膽玉を太くした。

「……僕等は何の秘密もないんです。全く照ちやんの云ふ通りなんです。」

「ふうん」と、伯母は不服らしく頷いて、よく中年の男がするやうに、小紋縮緬の羽織の袖の中で、片方の肘を突つ張つた。此の際事實の眞相を捕捉しようとする慾望よりも、二人に輕蔑されまいとする

努力の方が、伯母の頭を占領して居るらしい。

「そりやお母さんの方が無理だわ。昔の人は、男と女が仲好くしてさへ居れば、直ぐと疑をかけるけれど、つまり此の頃の若い人間の氣持が解らないんだわ。年寄と云ふものは、酸いも甘いも嚙み分けた苦勞人になればなる程、變な方へばかり氣を廻すのね。兄さんだつて、あたしだつて、立派に教育を受けさせて貰ひながら、いまだに親の監督がなければ間違ひがあると思はれて居ちや、ほんとにやり切れないわ。男だらうと、女だらうと、趣味が一致すれば、自然と話が合ふのは當り前ぢやありませんか。誰がそんな嫌らしい事をするもんですか。」

「いゝえね、何も嫌らしい事があつたと云ふんぢやないから……」

今更伯母はアタフタして、眞赤になつて喰つてかゝる照子を制しながら、

「そんな高い聲を出さずと、もつと穩かに話をしたら判るぢやないか。――まあ、お前達に詰まらない疑を掛けたのは、私が惡かつたから勘忍しておくれ、ね。しかし、二人がさう云ふきれいな間柄なら尚更痛くもない腹を探られるのは嫌だし、馬鹿を相手に喧嘩するのも下らないから、一層素直に先方の言ひ分を立てゝ、お氣の毒だが謙さんに内を出て貰つたらどうだらう。」

「そんな事をするには當らないわ。」

照子は怒りに乘じて、一氣に母の提案を揉み消しにかゝる。

「お母さんがソレだから、彼奴はますます増長するのよ。兄さんが餘所へ越したつて、私が毎日のや

うに遊びに行くから、やつぱり同じ事だわ。鈴木の威嚇(おど)かしぐらゐて、兄さんを追ひ出したら、それこそ世間の物笑ひだわ。第一、嫌な噂が、いよ〳〵本物らしく取られちまふぢやありませんか。」

「けれどお前、命には換へられませんよ……」

こわい物が直ぐ眼の前に在るやうな顔をして、とうたう伯母は本音を吐いた。

「謙さんが出てさへ呉れゝば、それで納得すると云ふのだから、强ひてあぶない眞似をするには及ばないぢやないか。」

「それがおッ母さん感違ひをして居るのよ。兄さんが出れば出るて、今度は私に遊びに行くなとか、許婚の約束を履行しろとか、一々言ふ事を聽いて居た日にや、際限がないわ。」

それから凡そ小一時間も、親子は盛んに言ひ爭つたが、結局埒が明かなかつた。

「兄さん、おッ母さんが何と云つたつて、遠慮しなくつていゝ事よ。おッ母さんはいつも泥坊を恐がる癖に、内の中に男が一人も居なかつたら、却つて無用心て仕樣がないわ。」

照子にかう云はれると、佐伯も自ら進んで處決する覺悟にはなれなかつた。自分も照子も、こんなに荒んで了ひながら、まだ何處か知らに戀らしい感情の殘つて居るのが、非常に不調和な、理解し難い心理狀態のやうに思はれた。

「そんならお前達のいゝやうにおし、私やどうなつたつて知らないから。」

伯母は不平たらたら二階を退却したが、照子の下りて來るまではお雪を寢かさず、自分も長火鉢へ倚

りかゝつてまんじりともしなかつた。

「照ちやん、何だか氣懸りになるから、今夜からお前も此の坐敷へ寢ておくれな。」

先刻あれ程口論した事を忘れて、意地も張りもなく、オメオメと嘆願すると、照子は意地の惡い笑ひ方をして、

「だつて、あたしの傍に寢て居ればおッ母さんも捲き添へを喰ふわ。」

などゝ云つた。

其の晩は殊に戶締りを嚴重にし、便所の電燈をつけ放しにして寢て了つたが、明くる日の晝間になつても、伯母の不安は容易に治まらない。戶外の格子が開く度每に、ギクリとして浮き足になり、襖の蔭からおづおづ玄關を窺つて居る。

「雪や、お前使ひに出る時にはよウく內の近所を氣を付けておくれ。」

「はい、別段だアれも居りませんやうでございますよ。」

こんな問答が、ひそひそと交換される。

日が暮れて夕飯が濟むと、宵のうちから雨戶を立て切つて、伯母はつくねんと居間に据わつて居た。長火鉢には炭火がパチパチ鳴りながら眞赤に燃え上り、鐵瓶〻〻ゝ、さも心丈夫に、賴もしさうに沸つて居る。

照子は相變らず二階へ行つて下りて來ない。

「ちよツ」

と、伯母は舌打ちをして、心の中で「ほんとに彼の娘は仕様がない。人の心配も知らないで、好い氣になつて佐伯にへたばり着いて居る。……また佐伯にしたつてさうだ。どのくらゐ私が苦勞をして居るか判つたら、さツさと內を立ち退いて了ふのが當り前ぢやないか。もう一度二階へ行つて、賴んで見ようか知らんなどと呟いて居る。

バタリ、と、緣側の戶が風を孕んで、內の方へめりこんだかと思ふと、今度は外の方へ吸ひつけられるやうにぎいと動く。不意に凩が吹き起つたのらしい。こんな晩に火事でもあつたら……萬一彼の馬鹿が附け火でもしたら大變である。

ぼん、ぼん、ぼん……と柱時計が八時を打つ。とたんに伯母は立ち上つて、恨めしさうに二階を仰ぎながら、階子段を上りかけると、「おかみさん、ちよいと」と雪が眞靑な顏をして手水場から飛び出して來た。

「あの、氣のせゐか、何だか變でございますよ。ちよいと入らしつて下さいまし。」

「變だつて、何が變なの。」

「はゞかりの窓の外で、人の足音が聞えるんでございます。」

「きつと風の音だらう。」

二人は一寸も傍を離れないやうにして便所の奥へ忍び込み、暫く息を凝らして見たが、足音らしいもの

は更に聞えない。唯時々、非常にかすかに、人間の呼吸をするのが、すう、すう、と響いて來るやうてある。それだつて、果して呼吸の響きかどうか、昂奮した神經には判別がつかないが、たしかに本當だとすれば、何者かがこつそり便所の羽目へ體をつけて、室内の様子を搜つてゐるのだと推定される。

「嘘をおつきな、なんにも變なことはないぢやないか。」

「左様でございましたねえ。さツきはどうもおかしいと存じましたけれど、やツぱり氣のせゐでございましたよ。」

互ひに慰めるが如く、囁いて、坐敷へ戻らうとしたが、大便所と小便所との境の所まで來ると、忽ち二人は凍り着いたやうにぴたりと立ち止まり、默つて顏を見合せて了つた。丁度彼等の囁きが終るか終らないうちに、「えへん」と云ふ咳拂ひが外に聞えたのである。何か人間以外にあんな聲を出すものがあるか知らん……。

二三分の後、伯母は齒の根と膝頭をワクワクさせて、二階へ這ひ上つた。

「いゝえ、あたしもさう思つたんだけれど、風の音ぢやないらしいんだよ。どうしよう謙さん、お前さん一ッ走り交番まで行つて來てくれないか。」

「よく確かめても見ないで、交番へ驅けつけるなんて馬鹿氣てるわ。よしんば本當だつて、泥棒なら嫌だけれど、鈴木だつたら構はないから放つてお置きなさいよ。」

「まあ、下へ行つてよく檢べて見ませう。」

から云つた佐伯は、多少眼の色を光らせて居たが、兎に角勇氣凜々たるものであつた。大方照子に臂を押されて、否應なしに奮發したのだらう。「人殺し」――言葉だけでも物凄いのに、不思議な事には、自分ながらおかしい程落ち着き拂つて二人の先へ立ちながら、便所へ下りた。

「どうも、僕にはそんな音が聞えませんな。一つ緣側の戸を外して、庭へ出て見ませう。」

「謙さん何をお云ひだい。戸なんぞ明けたら、尙あぶないぢやないか。――わたしは戸外(おもて)へ逃げて行くよ。」

「なあに、大丈夫です。」

高い橋の欄干から身投げをするやうな、ひやッとした心地を壓へ付けて、戸袋に近い雨戸を一二枚繰り明ける。と、眞暗な庭から、素晴らしい勢で寒風がひゆうッと舞ひ込んだ。

照子は電燈の綱を延ばして、佐伯の後から庭の木の間の彼方此方へ光線を振り向け始た。最初に左の塀の隅の、桐の木の周圍がまざまざと明るみへ浮んで、春日燈籠の靑苔まで、鮮やかに照される。同時に佐伯の總身を襟元から爪先へかけて、薄荷のやうなものが一遍スウッと流れて通つた。自分ではまだ落ち着いて居る積りなのに、知らず識らず動悸が裏切りをして居る。

左の端から右へ右へと、電燈は隈なく植込みの隙を發いて、次第に便所の方へ肉薄した。夕方、二階の窓から棄てた敷島の吸ひ殼が、飛び石の御影(みかげ)の上に落ちて居る所まで、佐伯の眼にありあり映つて居る。

「照ちやん、もつとあかりを前へ出して御覧。」

から云つて、彼は庭下駄を穿いて、便所の蔭へ歩いて行つたが、中途で蜘蛛の巣に襟を掠められた。見ると鈴木は、じめじめした掃除口の闇にうづくまつて、羽目へぺつたり背中を押しつけ、雨蛙のやうにどんよりと、眠るが如く控へて居る。此の場になつて、別段逃げようとも、飛びかゝらうともしない。

「君はこんな所へ何しに來たんだ。……」

と、佐伯が威丈高に立ちはだかつた所は、巡査が乞食を取り調べる光景によく似て居た。

「……さつさと出て行き給へ。」

、ばさ、ばさ、と八つ手の葉が何處かで鳴つて居る。餘程地面が濕氣て居ると見え、庭下駄が赤土へ粘り着いて、いざと云ふ時に佐伯は素早く退げさうもない。

「いや、」

と云つた鈴木の聲は、心に重いこだはりがあるらしく皺嗄れて居た。唇の動くのが全く分らないで、唯黑い影が物を云ふやうである。

「出て行からと行くまいと、私の勝手だ。君が干渉せんでもいゝてせう。」

「馬鹿を云ひ給へ。人の内へ入り込んで、自分の勝手だと云ふ奴があるか。用があるなら、表から尋ねて來給へ。一體何だつてそんな所にしやがんで居るんだ。」

「何でもいゝぢやありませんか、私に私の考があるんですから。」

事に依つたら、此の男は氣が違つたのぢやあるまいか。自分より先に、此の男が發狂したとすれば痛快である。大いにいたはつて、親切にしてやらうかな――こんな事を佐伯はちらりと考へた。しかし、發狂したのなら、尚更刃物を振り廻しかねない筈だが、相變らずムッツリして、ジッと蹲踞まつて居る。

「下らない事を云つて居ないで、サッさと出給へ出給へ。」

いきなり彼は鈴木の襟首を摑んで引つ張つた。

「そんなになさらんでも、お邪魔ならば出ますよ。……」

鈴木は少しも抵抗せずに、素直に起き上つて、

「出てもよござんすが、實は鼻緒を切つちやつたんです。ちよいと、其處へ腰をかけさせてくれませんか。」

かう云つて、跛足を曳き曳き、緣側の方へ歩いて行つた。

戸袋の傍にはまだ照子が電燈を持つて立つて居た。

「鼻緒を直すなら、早くし玉へ。」

こんな叱言を浴せられつゝ、鈴木はぢろりと照子を睨んで、廊下へ腰を下ろし、レザーの鼻緒のついた、ぴたんこな山桐の下駄を、片一方の足から外づした。此處に居た時分には持つて居なかつた古い茶色の二重廻しを、何處から工面して來たのか、ぼてぼてと着込んで、鳥打帽を眼深に冠り、頻りと前壺

を懺悔して居る。

「あゝあ、私は不仕合はせな人間ですな。惚れた女は人に取られるし、……」

不意と嘆息を洩らして、照子にあてつけて見たが、一向手ごたへがないらしいので、

「ねえ、照ちゃん。」

と、今度は正面から切り出した。但し、やっぱり女の方へは背中を向けて、上體を下駄の處へ踞ませながら……

「ねえ、照ちゃん」

と再び畳みかけた時、照子はキッ、とした調子で、後ろからどやしつけるやうに云った。

「照ちゃんなんて云はないでおくれ。あたしやお前に名前を呼ばれるやうな弱味はないんだから。」

「はゝゝゝ、お孃さんと云ったのは昔の事です。もう私はこちらの書生ではないのですからな。今ぢや縁もゆかりもありませんよ。」

「縁もゆかりもなけりや、さつさと出て行つたらいゝぢやないか。」

「さう急き立てないでも、直きに出て行きますよ。……だが、照ちゃん、あなたは佐伯に欺されて居るんですぜ。こんな男が、何て便りになるもんですか。」

「餘計な世話を燒かなくつてもいゝ事よ。うるさいから早くしておくれな。」

かう云ふと、照子は電燈の綱を鴨居へ懸けて、すたすた奥へ引込んだが、八疊の居間から、玄關まで

打つ通しに襖が明け放されて、門口の格子ががらんと開いたまゝ、伯母もお雪も姿を見せなかつた。

「さあ出來ました、……」

ぺちやりと下駄を緣先へ放り出して、鈴木は漸く身を起す拍子に、

「佐伯さん、君はどうしても改心しませんか、」

と、目の前に彳んで居る相手を覗詰めた。

「君、そんな女々しい事をいつ迄も云つてるもんぢやないよ。僕に恨みがあるなら、男らしくテキパキした方法を取るがいゝぢやないか。最後の手段だなんて、口でおどかしたつて、何になるもんか。」

「いや、しかし……」

「馬鹿！」

大喝するや否や、彼は渾身の力を拳に籠めて、耳朶の邊をいやと云ふ程擲りつけた。擲つて了つたら、自分の體が消えてなくなるかと思ふくらゐ、懸命に擲りつけた。此の間から、腹の中でばかり企(たくら)んでゐた事を到頭實行して、せいせいしたものの、急に胸のつかへが輕くなつた結果、彼はふら〳〵と昏倒しさうになつた。

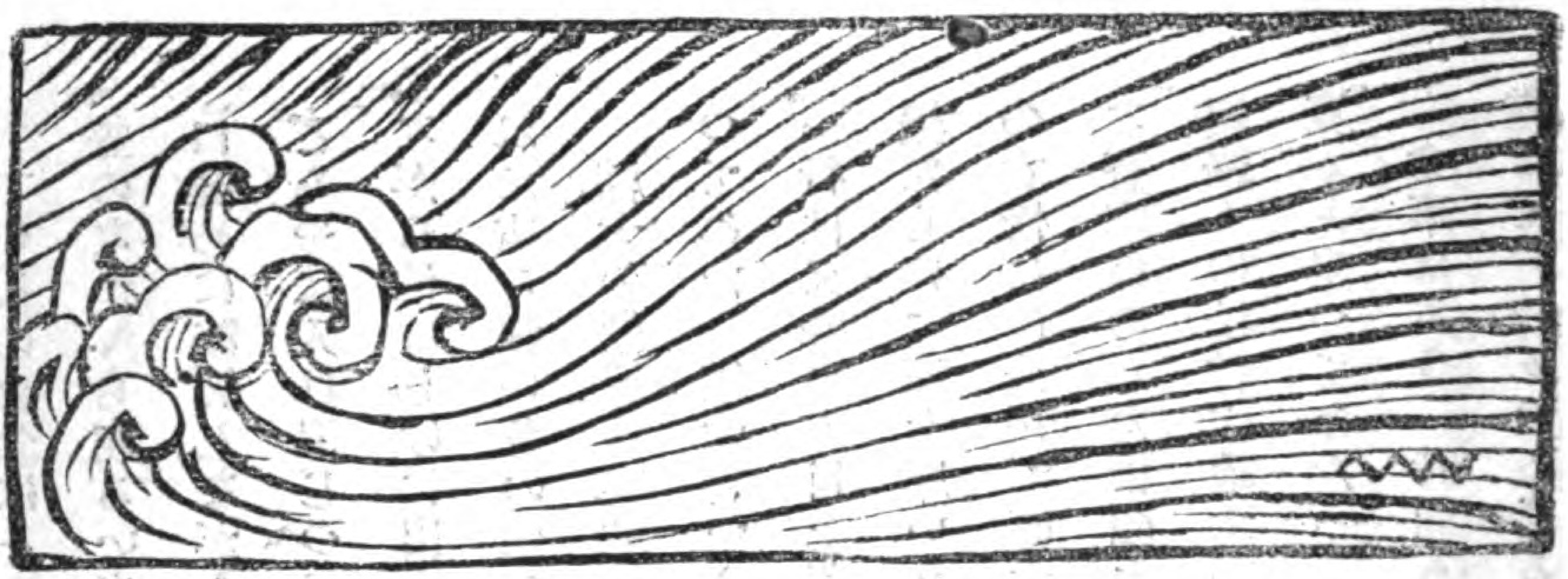
「たんとお擲りなさい、女はとられるし、男には擲られるし、私も散々ですな。」

「口惜しければ、僕を殺したらいゝだろう。何か刄物を持つて來てやらうか。」

「なに其れには及びませんよ、……」にやにやと笑つて、懐へ手を入れて、「困りましたな。それでは、

どうしても改心なさらないんですな。」
「だから殺せと云ふんだ。……」
其の瞬間、ぴかりと光つたものが、鈴木の右の手に閃めいて、又外套の蔭に隠れた。
「いくらおどかしたつて駄目だぞ、殺すなら早く殺せ。」
佐伯は、新派の俳優が見えをするやうに、胸を突き出し、両手を背後に組んで空を仰いだ。星がきらきらと綺麗に輝いて居る。
それでも鈴木は、まだにやにや笑ひ續けて、容易に斷行するやうな形勢もない。
「ほんとに男らしくない奴だな。殺せないならグヅグヅして居ないで此處を出ろ。」
いゝ氣になつて胸倉を押さへつゝ、裏木戸の方へ引き擦り出さうとした刹那、
「そらそら御覧なさい。此れでも男らしくありませんかな。」
から云ふ言葉と共に、佐伯は頤の下をピシリと鞭で打たれたやうに感じたが、忽ちたらたら血が流れ出した。
「ふん、とうたう斷つたな。感心だよ。男らしいよ。」
よろめきながら、傷口へ手をあてゝ、こんな負け惜しみを云ふ間もなく、鈴木は彼の體を板塀の傍へ蹈み潰す如く壓し倒た。さうして、やつぱりにやにやと笑つて居るらしかつた。
喉笛を抉られる時、佐伯は最後の息を振り絞つて不思議な聲を發したが、それは負け惜しみてはなく痛苦のあまり悲鳴を擧げたのだつたらう。瘦せて居る割合に、多量の血液が景氣よく迸つて、手足の指が蜈蚣のやうに戰いて居た。

（をはり）



船客

長田幹彦

正午に樺太の大泊港を出帆した敦賀丸は暮れかゝる夜とゝもにひたすら航程を急いで、漸次と宗谷海峽の方へ近づいてゆく。銀灰色の密雲に閉ざゝれてゐた空は限りもなく蒼茫とかきくれて、それでなくてさへ日脚の短かい北方の海上のことゝて、大洋の面から一面に湧き上つてくる黑燿石のやうな濃い夜の闇は忽ちにして右舷にのびた雪斑らな樺太の岬端を押し包んでしまつた。そして稚内の沖合に差し懸らうとする頃から俄かに舷を打つ波浪の響が高くなつて、船體は氣味の惡いほどゆるやかに動搖しはじめる。それと同時に骨を刺すやうな寒風が吹き添つて、いつともなく粉雪がさらさらと落として來た。

下甲板の食堂はその頃が一番賑やかだつた。滑かな曲線を描いたニス塗りの天井には數多い電燈が花笠のなかゝら明るい光を投げて、白布に掩はれた食卓の周圍には二十四五人の船客が彼方でも此方でも口鍵めに談笑しながら食事をとつてゐる。フォークや、ナイフを使ふ音や、皿の觸れ合ふ音などがごちごちやに入れ混じつて、調理室へ通ふ通路には白の制服を着た給仕が皿を持つたり、酒罎を持つたりしながら忙はしげに出入してゐる。そして室內の空氣はスティームの溫氣に蒸されて、調理室の方から流れて來る強い葱の匂ひと一緒に重く澱んでゐる。

樺太の豐原の支廳長の一行は左舷寄りの食卓に集まつて、罎詰めの正宗を汲み交はしながら食事をやつてゐた。樺太といふその名が示すやうに、この航路の船客は他と自ら類を異にしてゐるなかに、この一行は又殊更人目を惹くやうな不思議な集團をなしてゐた。鳥のやうな鋭い眼眸をした瘦軀の支廳長は鬚だらけな顋を厚いロングコートの襟に埋めて、舷窓を背にしながら氣むづかしさうに坐つてゐた。その右傍には公用で樺太へ渡つた小樽警察の署長がゐて、左傍には少し離れて支廳の屬吏の淸田が貧血性な蒼膨れのした横顏をみせながら俯向き加減に腰を落として坐を占めてゐた。そしてその向ふ側には視察歸りの松村代議士が、御用商人の服部と、船の事務長との間に夾まれながら厚毛の背廣の胸を披げて寛々と坐つてゐた。

食事はもう一時間も前から續いてゐる。最後に坐に加はつた松村代議士の頰にももう充分醉ひが紅く燃えて、時々まるまると肥え太つた手で少し禿げ上つた額口の邊を撫でながら頻りに座談の中心を作つ

てゐる。そしていつまでも酒を愛するといふ風に幾つとなく盃の數を重ねてゐたが、やがて三皿目の料理を食べおはると今度は息苦しさうに鼻を鳴らしながら首に喰ひ込んでゐるカラーのボタンをはづして、急に口調を改めながら、

「すると、今度の內地ゆきの御用向きは何ですな。」

「いや、別に用向きと云ふのではないのですが……」と、支廳長は不器用な手つきで小鳥の骨を撰り分けながら、「實は私は神經痛の痼疾を持つとるもんですから、今度は暫らく暇を貰つて何處か暖い溫泉へでも行つて養生をして來うと思つとるんです。」

「はゝあ。そりや結構です。樺太のやうな土地ぢやさうした御病氣にや宜しくないでせうなあ。それに善い醫者も居らんでせうし……」と、又盃を口へ持つてゆきながら、「併しさうやつて自由に溫泉療法などがお出來になるんだから結構です。」

「いや、平常でしたらとてもこんな贅澤は出來んのですが、今年は幸ひ經費の都合で大體の事業が越年前に形づいてしまつたもんですから、玆一箇月ばかりは至極暇で。それに札幌で馬匹の入札もやらなくちやならんので到頭思ひきつて出て來ました。」と、衣囊から雨ぎりの安卷煙草を取り出して、節太な木製のパイプにさして、神經的にすぱすぱ燻らしながら云つた。そして偸むやうな眼眸で代議士の顏をみながら口だけで笑つて、「いや、どうも併し、我々俗吏の生涯ほど詰まらんものはありませんなあ。貴方がたと違つて、任地のほかには世界がないのですからなあ。何をするにしてもあゝす可し、かうす可して。

はは〻〻。」と、傍の署長を顧みながらとつてつけたやうな皮肉な調子でつけ加へた。

「そりや誰しも同じことでせう。私達だつて選擧區民へ精々頭を下げて、借金を殖やした結果が吝臭い歳費位ひなもので體を縛られることになるんですからなあ。それにこの頃のやうに政黨の內部で仲間割れがしはじめちや危くつて耐らんです。先づ城廓を構へる前に紙幣束で地固めをしてかゝらなくつちやならんのですからなあ。」と、腹を押し出して寬達さうに聲高く笑つた。その度々大きな金緣の眼鏡が少しづゝ鼻梁の上をずり落ちて來た。

詰まらなさうな顏をして手酌でちびちびやつてゐた御用商人の服部は頻りにナップキンで口を拭ひながら考へてゐたが、やがて代議士の肩越しに事務長と石炭の話をしはじめた。夕張炭と、樺太炭との優劣論から漸次と一噸一圓高とか、一圓二十錢高とかいふやうな專門的な話しに落ちて行つた。

屬吏の淸田は殆んど談論の圈外へ突き出された形で、腕ぐみをしたまゝ片手で鼻をせゝりながらぼんやり双方の話に聞き入つてゐた。

署長はやがてフライの皿を押しやると、たつぷり飮み食ひしたと云ふやうに延びをしながらはじめて口をきつて、

「併し今度の御旅行ぢや隨分御參考になるやうなことが多う御坐んしたらうなあ。北は何處邊までおいでになりました?」

「海馬島まで行きました。何にしろ交通が不便なんて、これにや酷く弱らせられましたよ。」

「さうて御坐いませうとも。冬期の旅行は全く難儀てすからなあ。殊に越年すぎてしたらとても動けやしません。交通機關の設備が可けないの何のと新聞記者なんか喧ましく云ひ立てますけど、御覽のとほりこの氣候ぢや叶ひませんや。」と、署長は可笑しくもなささうに愛想笑ひをして、「何か御視察をなすつた上て御意見てもあれば是非拜聽したいものてすが。」

「いや、大分忙がしい旅行だつたんて、これといふ纏まつた材料がありませんが、併し新領土だけに充分研究してみなければならぬ問題は澤山あると思ひましたな。」

「なるほど。貴方がたの御觀察から見れば無論さういふ問題がなくちやならん筈てすが……。」と、署長は稍や衒學的な態度になりながら、「遠い處といふ點もありませうが、一體内地人は樺太とか北海道とか云ふ問題に關しては甚だ冷淡てすからなあ。警察制度の如きもあんな遣りかたては到底駄目だと思ひますが。」

「さやう、全く御說のとほりてす。樺太といへば戰勝の結果が生んだ副産物のやうなものてすが、事實上日本とは切つても切れぬ利害關係を持つとるんてすからなあ。これから開發のしやうに依つちやどんな富源になるかも知れんてすよ。」と、代議士は更らに盃を重ねながら談論の熱を得たといふやうに滔々と話を續けた。

「一體私の考へては、樺太に對する一般の根本政策が既に間違つてゐると思ふんてす。富源開發とか、移民奬勵とか机の上ぢや立派な口をきいてゐるが、いざ實地に見聞して見ると政府の遣り口は一つとし

て當を得てゐるものはありやしません。第一漁業と農業とをまるで別な位置に置いて考へてゐるやうぢや何が出來るもんですか。この二つが密接な姉妹關係をもつて發達して來るやうな方針を執らないうちは、經營の施設のと徒らに騷ぎたてたところで到底ものになる氣遣ひはありやしない。……」

「いや、それに就いちや私共も平常から多少意見を持つてゐるのですが、何といつても政府の方針が既に曖昧なんですから……。」今迄默つてゐた支廳長は煙草を置いて、眞顏で口を入れた。

「兎に角てすな。」代議士はそれを眼て抑へて、「私はこの漁業と、農業とに對する政府の方針が全然主客顚倒してゐると思ふんです。政府は餘り漁業の方へ重きを置過ぎてゐるんだ。」

「成程。御尤もてす。」署長はいかにも勿體らしく肩を張りながら議論の筋道を了解しやうとするやうに首を傾ける。

「實際もう少し金をかけて、農業の方面の富源を開くやうにせんけりやとても駄目です。山林でも、炭坑でも、それから一般の農事經營でも事實上小資本をもつて流れ込んて來た移住民の手に任してあるばかりて、政府の施設としては殆んど見るべきものがないんだから心細いぢやないですか。そりや固より政府だつて無い袖は振れんのだから已むを得んかもしれんけど、あれだけの土地を開拓して行かうといふのに小規模の民間事業から利用してかゝらうと云ふその了簡が既に愚劣極まる。」と、手酌てなみなみと注ぎながら、彼は更らに語を續けた。

「一體漁業者といふ奴は私に云はせると樺太に對して何等の利益をも與へない、いや、寧ろ時に依ると

却つて弊害を與へるもんだと思ふんです。から云へばひどく極端な議論のやうに見えますが、全く事實がそれを證明してゐる。彼奴等は自分達の巣を出る時に米から味噌、醬油のやうな食料品を全部船に積んでやつて來て、それを食べながら漁をして、金になる漁獲物はそのまゝ又船に積んで持つて歸つてしまう。さうして小樽なり、函館なりへ行つてそこで卸ろして市場へ出してしまうんだから直接旨い汁を吸ふのは皆内地の商人なんだ。樺太へ落ちる金と云つては全く漁場の附近にある達磨屋の收入位なもんなんだから酷いぢやありませんか。」

「全くさうですなあ。それに反して農業の方と來たら土地そのものが産む金で、當然樺太の血や肉になるのですからなあ。」支廳長は稍生氣を帶びて云つた。

「私は豊原で聞いた話なんですが、日本人の畑を拓く方法にはロスケも驚いてゐるさうですなあ。」署長は何んと思つたか急に居坐ひをなほして、「なんでも沼を埋て、田畑にしていく方法なんかは實に巧妙なもんだとかいふ話で。……」

「さうですとも。日本人には兎に角實際的の能力は充分備はつてゐるんです。灌漑の道をつけることは お手のもんだし、殊に畑を作る手際などに至つちや露西亞人なんかの遠く及ぶ處ぢやないんです。だからこの上政府で農村の經營を充分補助してやつて、どしどし交通の便宜を開いてやりさへすりやいくらでも發達するんだ。山林はあの通りだし、石炭は豊富だしなあ、私は全くかうしてゐても齒掻くて耐らんのです。」と、言葉をきつて、四邊をひとわたり見まわしながら、更らに激つた語調で、

「全く現狀のまゝ捨てゝ置いたら樺太の將來はどうなるか分らんですよ。もう現に各府縣の移民團のなかにもひどく疲弊した奴が出來て、續々歸國する。まあ歸國の出來る奴はいゝが、出來ないものになると實に悲慘を極めてゐますからなあ。生產物は上つても運びだして生活資力に代へる便宜はなし、それで冬期に入りや餓死するのを待つてゐなくちやならん始末ですからなあ。青森縣の移民團を見に行つた時なんぞは全く泣かされましたよ。飢饉よりもみじめな慘狀を呈してゐましたからなあ。現に大泊てみてゐるとこの船にもさう云ふ所謂政府の施政方針の犧牲になつた手合がいくらも乘つてゐるんだ。」

「全く御說のとほりです。私共のやうに現在その土地に住んでゐるものは充分その缺點を承知してゐるのですが、……」と、支廳長は又疼痛でも覺えるのか慘ましい顏容をしながらふと言葉をきつた。

署長は謹聽してゐるやうに首は傾けてゐるが、その話が終ると急に欠伸を押し隱すやうに鼻の穴を大きく膨らしながら深い嘆息をついた。

「いや、この事に關しては眞岡で逢つた新聞記者團とも話してみたのですが、今期の議會では充分辯じてみるつもりです。內地へ歸つたら匆々材料を整理して、うんと政府委員に肉迫してくれます。」と代議士はボーイが運んで來たビフテキにフォークをつけながら昂然と云ひ放つた。

その時、代議士の肩越しに事務長と服部との話は大分熱して來た。話題はいつか露西亞人の娼賣婦のうへに落ちてゐるらしく、服部は椅子の腕木から乘り出すやうな格好をして、醉つた眼を輝やかしながら頻りに饒舌つてゐる。署長も威嚴を示すやうに鬚をひねりながら、時々代議士と服部との顏を交互に

偸みゝて、漸次とその話の方へ興味を惹かれて來るらしかつた。

「……そりや日本人のゴケなんぞ買ふ口にしたらお話にならねえ程安値なもんでがすよ。土地馴れねえもんだと隨分ボラれることも御坐んすが、まあ大概が內地並みです。流刑人だとか云ふんて、なかにや隨分人相のよくねえ女も居りますが、まあ概して金にさへなりやいゝつてな拾ッ鉢なのが多う御坐んすなあ。その道の人に聞くてえと、露西亞の內地の女よりも他國ものが多いつて話ですが、貴方がたは世界を跨にかけてお歩きになる御商買ですからよう御存知でせうが、彼地の女は一體が日本の女よりも阿婆摺れに出來上つてるやうでがすな。」

「さあ。さうでせうかなあ。私は餘り歐洲航路の方の經驗がありませんから知りませんが、……」と、事務長は腹を抱へて笑ひながら、答へて、「それてなんてすか、さういふ女達は矢張り普通の魔窟式な家に置いてあるんてすか？」

「いゝえ。それが面白いんてす。署長さんの前て露西亞ゴケの話も異なもんてすが、どうぞ惡しからずお目こぼしを。はははゝゝゝ。」

「こりや面白い。却つて御參考になつていゝかも知れんなあ。」と、代議士は一杯頰張つた口をもぐもぐさせながら大聲を出して笑つた。

「いや、おほきにさうてすな。」と、署長も苦笑して、「刑事の苦心談でも聞くつもりで聞きませう。」

「ははゝゝ。お許るしが出たからにや公然て一席辯じますかな。」と、服部は體の格好をかへながら卓

のトへ兩肱をついて得意さうに語り出した。

「私の行つたのは丁度麥粉の買出しにいつた歸りでしたが、外からみちや一向普通のロスケ街の百姓家と變らない構へなんです。矢張り國旗を軒へ出しましてな、壁にや變挺な繪ェ描いたビラが張りつけてあるんです。丁度玄關のやうになつてる土間から上ると中は十五六疊も敷からうつてえ天井の低い室でしてな、例のペエチカにや薪がかつかと燃えてゐるんです。よく覺えちやゐませんが何でも隣りにや玉場かなんか附いてゐるやうで、かちかち球の衝突かるやうな音がしてゐました。そうして西洋の胡弓を彈いたり、唄をうたつたりする聲が騷々しく聞えて、毛唐の騷ぎやえら御坐んすから、一人で三人前も喋いてゐやがるんです。私は初めてのことですからさつぱり容子が分りませんからな、一緒に連れて行つて貰つた伴れの男—此奴あ浦鹽に長くゐやがつた奴で、その道にかけちや黑人なんです。そいつにすつかり任せて、お大盡面をして椅子に腰をかけてゐますと、やがて出て來ました。更紗形の挑色の布のくつゝいた洋服を着やがつて、白粉をべつたりくつゝけてな。そして敵方ばつかりかと思つてやすと、そんな女が三人も四人も出て來やがるんです。そしてちつとも分らねえことをべちやくちや饒舌りながら矢鱈に嬌態をしやがるです。何でもその時にその見立をするんださうで……。」

その言葉が終るか、終らない途端にすぐ頭上の甲板の方で時ならぬ靴音が聞えた。何でも五六人の人の群れが急ぎ足に艫尾の方へ驅けてゆくやうな足音で、それが通り過ぎたかと思ふと今度は何處かで鎖の擦れるやうな異樣な物音がする。

一同はぴたりと話聲を抑へられて、互に顔を見合はせた。誰ひとり口を切るものもない瞬間に、今度は突然、消魂しい非常汽笛が食堂のなかの靜かな空氣を劈いて響き渡つた。續いて嗄びれたやうなサイレンが壁にぶるぶるつと顫動を與へながら二聲、三聲。それと同時にどうしたものか船は俄かに船脚を落として、甲板では更らに新らしい動擾が聞えはじめた。

「どうしたんだ！」服部の話にうつかり氣をとられてゐた事務長は先づ色をなして立ち上つた。

「どうしたてす。衝突ですかッ！」と、署長は蒼くなつて彈ねとばされたやうに椅子を離れた。それとともに食堂の隅の何處かて、息づまつたやうな慄えを帶びた聲が、

「暗礁だッ 暗礁だッ」と、叫ぶのを聞くと、ぼんやり呆氣にとられてゐた服部も、代議士も支配長も一齊にフツと立ち上つて、度を失つたやうに眼を据ゑながらどやどやと食堂の出口の方へ驅け出した。皿やコツプの落ちる音が消魂しく響き渡つて、もう一室の十五六人の人は出口の處へ押し重なつてゐた。慌てゝフオークを持つたまゝうろうろしてゐるものもあれば、なかには又笑ひながら落着いてその騷ぎを眺してゐるものもゐた。

眞先に戸口を出た事務長は折よく甲板の方から驅け降りて來る船員を捕へて、

「どうしたんだ？」と、言葉鋭く訊いた。

「あッ そこにおいでゝしたか。いや、今ケートブルクラツカアの處から投身したものがありまして……。」

「えッ 投身？」と、事務長は安堵の色を現はして、「さうか、そんならいゝが、餘り騷ぎがひどいから

ボイラアにても故障が出來たんかと思つた。航路には異狀はないんだな?」

「はい今梶田運轉士が報告に參ります。」と、云ひ捨てゝその船員は忙はしげに機關室の方へ駈けぬけて行つた。

「皆さん、御心配にや及びません。今お聞きのとほり投身者があつたんださうて、もう程なく動きますからどうぞお靜かにお食事をなすつて下さい。」と、事務長は落着いた微笑みをみせながら群衆を顧みて云つた。そして支廳長や、代議士の方を向いて、

「私ちよつと行つて見て來ますから。」と、云ひ殘して、これも大跨に甲板の方へ出て行つた。

「や、どうも實に膽を潰ぶしましたよ。暗礁だのなんの仰有るもんですから、私はもうすつかり死んだ氣になつちやつて、これ御覽下さい、まだ手がぶるぶる慄るへてゐますぜ。」と、服部は代議士の前へ小刻みに慄へる指の股を出してみせながら笑聲て云つた。「私と來ちやあから意氣地がねえんて御坐んすから、こんな大海の眞中て嚇かされちや全く助かりませんや。」

周圍にゐた人々は安堵の歡びとゝもにその滑稽けた語調を聞いて高く笑つた。

「いや、どうもあの汽笛を聞かされちや誰れしも膽を潰すよ。どうして又投身位にあんな非常汽笛を鳴らすだんだらう。人騷がせにも程があるぢやないか。」と、代議士はさも不服らしく云つた。署長は鐵柱につかまりながらその顏をみて白らけた笑ひを浮べたが、胸はまだ靜まらぬとみえて、一言も口をきかなかつた。

一同はまださわついてゐる他の船客の間をぬけて、考へ深い眼眸をした支廳長を最先に一人づゝ再びもとの席に就いた。そこらではボーイ達が薄笑ひをみせながら床に落ち散つた皿や、硝子の破片を拾ひ集めてゐたが、それをバケツの中へ擲り込む度に神經に針を打つやうな鋭い音が響いた。折角熱しきつてゐた食堂の内の柔らかな氣持は全く崩れて、何處か落着かぬ不安の影が壓しかゝつてゐるやうに、四邊はひどく騷然としてゐた。

「あゝ、折角いゝ氣持ちに話が彈づんでゐたのに、すつかり腰を折られてしまつた。」と、代議士は眞先に盃をとり上げながら「一體この寒中に投身をやるなどはちつと御念がいり過ぎてゐますなあ。死ぬ當人も難儀だらうが、第一同じ船に乘合はせたものが迷惑だ。」

「さやうさ。どうせ死ぬんならなにもそんな寒い思ひをしなくても、別にいくらもお手輕な方法があるんですからなあ。」と、服部は面白さうに相槌を打ちながら、飲み度くもなさゝうに盃をとりあげたが、

「一體何者でがせう、男でせうか、女でせうか。」

「さあ、そりや無論船客でせうが。冬の航海にやどうも事件が多くつて困る。」と、署長は重々しく首を振りながら獨語のやうに呟いた。

そのうち船は全く進航を止めて、今度は反對に少しづゝ逆航しはじめた。そしてゆるく横波に乘りながら漸次と速力を早めてゆく。服部はそわそわしながら四邊をみまわして、取留めもなく語られる室内の話聲に聞き入つてゐたが、やがて二三人の客が立上つて出口の方へ出てゆくのをみると、急に堪らな

くなつたやうに自分も立上つて、

「何だかかうしてもゐられませんなあ。ひとつ見物して來やせう。」と、好奇心に充ちた眼で代議士を促して、披げた外套の胸をつくろひながら出口の方へ歩いて行つた。後に殘つた人々は室外の寒氣に恐れをなして暫らくの間躊躇してゐたが、端に坐つた船客達が一人づゝ漸次と濃綠色のカーテンの外へ出てゆくのをみると急に衝動を感じたやうに立上つて、がやがやいひながら到頭その跡を逐つた。火の消えたやうな顏容をして押默つてゐた淸田まで何處か生々とした表情をみせながら跡から隨いて行つた。そしてがらんとした卓子の前には支廳長ひとり意地の惡さうな眼つきをしながら殘つた。

一同はほの暗い廊下の行詰まりのところで落ち合つて、急に溫い食堂から出た寒さに慄へながら甲板へ上る階段をのぼつて行つた。そこの扉をあけて檣の傍へ出ると、吹きさらしの舷を越えて吹き寄せてくる氷のやうな寒風に突如さつと裾をあほられて、殆んど云ひあはせたやうに立止まつたまゝ、歯を喰ひしばりながら慴えたやうな唸めき聲をたてた。

甲板は雪明りで何處となくぼうつと明るかつた。方々の船具の陰や、艙口の陰にはほの白い吹き溜まりが出來て、通風機や、ボートの姿が薄明りのなかに異樣な巨怪のやうな黑影をみせてゐた。そして檣の中程に懸つた燈火の光の圈内には檣綱から垂れ下つた氷柱が朧ろげにきらきら光つて、粉雪は烟のやう渦卷きながら降りしきつてゐた。一同は吹き込んで來る雪のなかを小走りに驅けぬけてぞろぞろ船尾の方へ行つた。ボートの上へ凍結した雪片や、波のしぶきでともすると脚をとられさうなのを强ゐて踏

みしめながら、錨機の傍へ出ると、そこにはもう二十人ばかりの船員や、船客が薄暗い手提燈の光のなかに寄集まつて、何やら心配さうにごとごと呟きながら暗い海の面を見降ろしてゐた。

左舷の方からは既に二艘の救命艇が卸されてゐた。大きな曲波が舷を撫でゝゆく毎に、艇燈の光が波に走つて、狭い胴の間で押し合ひながら立働いてゐる水夫達の姿が朦朧とみえてゐる。そして本船の舷へごとりごとりと打當る鈍い響きと一緒に物臭さゝうな呼び聲も聞えて來る。

「おい、フックは入つたか？」年老つた艇長らしいしやがれ聲が叫ぶ。

「へえ、入りました。舳の方へ置いときましたが……。」

「氣の利かねえ野郎だな。こんなこつてブウイが使へるかい。ロップは左へ巻いとかなくつちや可けねえぢやねえか。」などゝ年老つた聲は頻りにぶつぶつ口小言を云つてゐたが、そのうちにやつと準備が整つたと見えて、救命艇は二艘とも舳の方からちついと本船の舷を離れた。そして歔欷するやうな鋭い滑車の音がきれると同時に少しづゝ遠のいて、艇燈を粉雪の靄のなかへ光らせながら大廻はりに船尾の方へ漕いで行つた。

一同はそこらに立つた人々の間に立交つて默つて艇の行衛を見送つた。やがて二艘とも漸次と闇のなかへ姿を隠してしまうと、遠くの方で波の音の合間あいまに、

「おうい。おうい。」と、いふ譯も分らぬ深沈とした叫び聲たげが幽かに聞えて、二艘は別れ別れになつて大きな曲波に弄ばれながら、附近の海上を捜索しはじめたらしかつた。

服部は極度の好奇心と、不安とに惱まれてゐるやうな調子で、到頭すぐ前に立つた船員へ話しかけた
「一體投身したのは矢張り船客なんてがすかな？」
「え、三等船客ださうてす。」その男は若い顏容の割りに落着いた聲で答へて、隣りにゐる運轉士らしい男に、「なあ、君、女だとか云つてゐたが、さうかい？」
「うん。まだ若い女ださうだ。何でも夫婦連れで情死をしやうとして、男の方だけ助かつたんださうだ。」
「へえ、夫婦でなあ。」服部はすぐその話の跡をひきとつてさも感に打たれたやうな調子で、「まあどんな深い譯があるのか知れねえが、こんな處で身を果たすなんてよくよくの事ですなあ。」
「さうですとも。」署長は煙草の火を暗に瞬かせながら興味のなさゝうな聲で云つて、ふと思ひついたやうに、代議士の方を向いて、「これも先刻お話しの施政方針の犧牲かも知れませんな。」
「さつとさうでせう。彼地で越年が出來なくつて歸國してゆく途中、絶望して投身でも企てたのかも知れませんな。果たしてさうとすれば實に悲慘な話だ。」と、代議士も署長の火をかりて煙草を吸いながら、「全くさう云ふ例はいくらもあるのですからなあ。殊にこんな晩、こんな外海で死なゝければならない二人の心事はどんなでせう。」と、妙に今迄とは違つた低く沈んだ聲で云つた。
すぐ傍に寄集まつた三等船客らしい一團のなかでもまた寒さうな慄へ聲がひそひそと囁いてゐる。
「助かるでせうかなあ。」

「さあ、どうですか知ら。なにしろこのお天氣ですからなあ。」
「もう七分間も前に飛び込んだちう話してすが……」九州人らしい濁つた聲が口を挿む。
「さうですか。」と、又別な聲が、「それぢやあまづ死體も上らんてせうな。」
「なんても隅の方の棚に居つた男と女ださうぢやありませんか。隣て見とつた人の話しに宵から二人て何かごとごと云ひ合ひをしとつて、いんまさき女の方がさきへ外へ出て行つたんださうですな。」
「ふむ。それぢや野田寒から來た連中だな。」
「野田寒?　一體何者てす?」
「私もよくは知りませんが、人の話では木材會社の職工だとか云ふんてす。十五六人の團隊てな。話の容子てはどうも秋田縣人のやうてすが、もう船に乘る時からごたごたひどく紛紜とつたんださうてす。」
一人、二人づゝ後から後から船客が殖えて來て、やがて其處邊には四五十の群衆が集まつた。しまいには火夫のやうな油臭い服を着た男や、給仕まて出て來た。後から來たものは種々な期待や疑問をもつてさまざまの問ひを發する。知る人も、知らぬ人もいつの間にか親しげに口をきゝあつて、一樣に暗い海を凝視しながら身を投じた女の評定に耽つた。そして暗い海からは針のやうな鋭い寒氣を含んだ風が時折さつと吹き上げて來て、人々の肩と云はず胸と云はずほの白い粉雪をさらさらと吹きつけた。そして捜索に出て行つた救命艇もゝう遠く漕ぎ去つたのか、そこらと思ふ海上からは何の消息も聞えて來なかつた。

そこへ突然、中甲板の方から騷々しい五六人の靴音が走つて來て、
「兎に角一應その男を室へ連れて來い。」と、事々しい聲が叫ぶ。
「いや、どう云つても、死體のあがるまでは動かないと云つて聞きませんのです。」と、息を切らしながら他の聲が答へる。
「そんな馬鹿なことを云つたつて可かん。無理にでも引張つて來い。そして怪我人の手當も早くせんと、……」
と、同時に、眞黑な一團の人影は通風機の陰へ立止まつて、そのなかゝら二人の船員がついと別れて三等室の降り口の方へかたかたと驅けてゆく。
その騷ぎに驚ろかされて群衆は一齊に聲のする方へ振顧つた。そしてぞろぞろ浮足だつて、知らず知らずの間にそつちへ寄つて行つた。
暫らくすると三等室の降り口からは人々の立騷ぐ恐ろしい動擾が聞えて來た。五六人の疳走つた人聲が騷々しく縺れて、戸を叩くやうな音が聞えたかと思ふと、そこからは一團の人の群がどやどやと溢れ出て來た。
眞先には船員に取圍まれて一人の男が狂ひながら蹌ろめき出て來た。鳥打帽をかぶつた、背の圖ぬけて高い男で、紅い燈火の光のなかなので無論面貌も、風體も分らないが、恐ろしく興奮した顔へ聲で頻りに船員を罵りながら引張られてゆく。その後からは船客がこれもひどく疳高な聲で譯も分らぬことを

云ひ屆りながらぞろぞろ隨いてゆく。そしてさつき通風機の陰へ立つた人影と一緒になるとそのまゝ一塊りになつて、がやがやと云ひながら中甲板の方へ姿を隱してしまつた。

群衆は又その騷ぎでひどくざわめき出した。彼方でも、此方でも投身女のことは打忘れて口々に引張られて行つた男のことを評定しはじめた。そしていろいろな取留めのない想像を逞ましくしながら中甲板の方へ歩いて行つた。

代議士も署長も、服部もその群にまじつて歩いて行つた。なかでも服部はひどく興奮した口調で、「怪我人があるつてえぢやありませんか。この騷ぎのなかに喧嘩でもおつぱじまつちや事ですなあ。」

「こりや無論さつきの投身者に關係した事件でせうが、」と、署長は醉ひざめの生欠伸をしながら、「併し、刀傷沙汰でもあつたとすれば容易ならん事件です。」

「いや、これには何か深い事情があるでせう。この事件の裏にはきつと何か私の持論に裏書きをして呉れるやうな事實が潜んでゐるにきまつてゐる。」と、代議士は寒さうに肩をふるはしながら調子のはづれた聲で云つた。

さつきの階段のところへ來ると、そこには二人の船員がゐて、騷ぎながら廊下の方をさし覗かうとする船客の群を制してゐた。代議士達はその間を摺りぬけて、二等船室の側の細い階段から廊下へ降りたそして外套に降りかゝつた雪を拂ひ落としながら食堂の方へ歩いて來ると、そこで忙はしげに驅けて來る事務長にはたと行逢つた。

「やあ、お寒いのにお揃ひで。私ももうぢきに責任を終りますから。」と、事務長は笑ひながら云つた。

「どうも御苦勞ですなあ。ときに怪我人があるとか云ふ話ですが、何か別な事件でも起つたんですか。」

署長は訊いた。

「いや、それで實に混雜を極めて居るのです。投身者の夫と云ふのが、連れの男と爭論をして怪我をさせたものですから。」

「怪我と云ふと、切れもの細工でもやらかしたんですか？」と、服部は好奇心を頻に輝かしながら差出がましく訊いた。

「いや、正宗の鰡で頭を五針ばかり縫ふほど怪我をさせたのです。」

「それで投身者の身許は分つたのですか？」署長はいかにも場馴れた專門家らしい威嚴を示しながら訊いた。

「え、まあ一應は。なにしろその男の方がまるで狂人のやうになつてゐるもんですからまだ事情はさつぱり分りませんが、或は取調べてみた結果で意外な事件になるかも分りませんのです。いづれ後程ゆつくりお話し申しますが……。」

「と云ふと何か別な犯罪でも……。」

「何分當人の興奮が激しいので、云ふことが支離滅裂でまるで要領を得ませんが、なんでも投身したのではなくて、故意に船から突き落したやうな形跡があるんです。いづれあとで今一應調べてみた上で貴

方にも御檢證を願はなければなりませんか。」

「さうですか、さうなると面倒ですなあ。困つたことを始めたもんだ。」と、署長はひどく落着いた態度で、「死體、……いやまあ助かるかも知れんが、投身者の方はどうなるんでせう。」

「もうありやとても駄目です。唯義務として一應捜索船を下ろしてみたゞけのことで、なにしろ投身した場所から二哩半も進航して後のことですからなあ。どんなことをしたつて死體の見附かる筈はありません。いづれ又あとでお目にかゝります。」と、事務長はあとから出て來た船員と一緒にそゝくさ船尾の方へ驅けて行つた。

「どうもえらい事になつたもんですなあ。思ひがけない時に思ひがけない事に出遇はしたもんだ。」と、服部は呆れたやうな顔容をして云つた。

「どうも困つたもんで。署へ歸つても明日は又これで潰されますな。」

「いゝ三面種が出來ましたな。併し私にとつてもいゝ材料で。」と、今迄感慨に充ちたやうな沈默を守つてゐた代議士は溫い廊下へ入つたので急に景氣づきながら、「兎に角もう一度食堂へ歸つて飲みなほさうぢやありませんか。こんなことをしてゐたら體ごと凍つちまいますぜ。」

「さうですな。もうひと溫まり溫まりますかな。」署長も笑ひながら云つて、「服部さんは如何です。」

「へえ、難有う御座んす。私は後程參りませう。折角今まで寒い思ひをして待つてたんですから、私はもう一度甲板へ出てみて來やせう。ボートが死骸でも乘つけて歸つて來りやみものですからなあ。」

「投身者に醜婦なしさ。一應檢分して置く必要がありますかな。はゝゝ。」と、代議士は快活に笑つて、「併し今の男の嬶とすりや寒い思ひをしてみる程の價値もなさゝうですなあ。」

「そう仰有つたもんでもありますまい。かう見えてもまだ色氣がありますからな、女となると死んでもみてえんて。はゝゝ。併しこんなことはとても陸にゐちや見れませんからなあ。何も學問てがさあ。」

と、服部は妙にいこぢな顏容をしながら又もと來た道を甲板の方へ引返へして行つた。

代議士と署長はそのまゝ食堂へ歸つた。もう船室へでも引上げたのか、食卓には支廳長の姿はみえなかつた。煙草の吸ひ殼ばかりが灰皿の上へ堆く殘つて、食器もあらかたかたづけてあつた。そして人氣の薄くなつた室內には何處からともなく寒い風が吹き込んで來るやうな氣がして、調理室の方で脂汁のいりつく音さへ何となく寂しかつた。

二人は新たに料理を命じて、又盃をあげだした。そして投身女と、殺傷の出來事とを樺太といふ背景にすつかり結びつけて論じてゐると、間もなく服部が寒さに蒼ざめた頰に失望の色を浮べながらぼんやり歸つて來た。殆んどそれと同時に船は又長い汽笛を殘して進航しはじめた。

もう十二時を過ぎて後のことてある。四人の寐た二等室の入口の戶をことことゝ靜かに叩くものがあつた。

まだ眠られずに種畜場の成蹟表を讀み耽つてゐた支廳長はふとそれを聞き咎めて、痛む肩を抑へながら起き上つて鍵を外した。

「やあ、これはどうも恐れ入ります。もうお寐みだつたんぢや御座いませんか。」と、云ひながら開けきるのも待たず室のなかへ首だけ差し入れたのは思ひもかけぬ事務長だつた。

「貴方てしたか。いや、まだ眠つちやゐませんてした。」と、ベッドから厚い毛布をとつて被りながら、「寒いてすなあ。」

「どうも今夜はまた格別てす。」と、事務長は愛想よく笑ひながら、「お妨げして濟みませんが、實は先刻の件て署長さんに是非お立會ひを願ひ度いと存じまして。」

「あゝさうてすか。ぢやお起こしなすつたらいゝてせう。」と、支廳長は自分への所用てないのを見屆けるとその儘ベッドへもぐり込んだ。

事務長は室へ入つて來て、上の棚に寐た署長のベッドのカーテンを細めにひいた。そして小聲て幾度も呼び起こした。と、署長は熟睡して夢てもみてゐたと見えて、取留めのない譫語のやうなことをぶつぶつ呟いてゐたが、やがてやつと正氣づいて、さも吃驚したやうにむくむくと起き上つた。

「折角お寐みのところを甚だ御迷惑てすけど、あの件て一寸御檢證を願ひたいのてすが……。」と、事務長は更らにカーテンを擴げて云つた。

「あゝさうてすか。何か又新らしい確證ても上りましたか？」

「えゝ。今もう一度當人の精神の靜まつたところで調べてみましたが、どうも故意にやつたことらしいので。それに怪我をさせられた方の男も會社かなにかの金を拐帶して樺太を遁げて來たらしい形跡があるんで、事件が大分錯雜して居るのです。」

「さうですか。兎に角行つてみませう。」と、署長はその儘低い梯子を下りて床へ立つと突如顏を顰めて大きく伸びをした。そして眠むさうに幾度かつゞけさまに欠伸をしながら靴をはいたり、上着を着たりした。

その物音で眼をさましたのか、支廳長の上の棚に寐てゐた代議士はカーテンの陰からぬつと大きな顏だけだして、ものも云はずに血ばんだ眼でキヨロキヨロ四邊をみまわした。

「どうもお騷がせして濟みませんな。」と、事務長は代議士にも笑顏をみせて、署長が服を着てしまうと今度は、「お寒う御座んすからどうぞ外套を着て被來つて下さい。」と、外套の世話までして、やがて二人はそこそこ室を出て行つた。

その樣をみると代議士はやつと我に返つて下の支廳長の方へ首を延ばしながら、

「どうしたんです。こんなに遲く。」

「なんだか先刻の投身のことがむづかしくなつたとかで、署長さんをよびに來たんです。」

「ぢや愈々事情が判明したんですかな。」

「さうも云つてゐませんでしたけど、……」と、支廳長は馬の寫眞のついてゐる丁を繰りながら興味

もなさゝうに欠伸をした。

代議士はその儘口を噤んでしまつた。と、今度は向側のカーテンが開いて、そこから服部が首を出した。先刻から眼をさまして話を聞いてゐたものと見えて、彼は好奇心に充ちた口調で代議士に話しかけた。

「矢張り投身ぢやなくて、わざとやつたんださうです。そしてな、怪我をさせられた男の方も拐帶かなんかしたのがバレたらしい話てしたぜ。」

「さうですか。何だか薩張り譯が分らなくなつて來たな。第一情死だと云つてゐたのが故意に殺ろしたといふのも變だし、一體その怪我をさせられた男と云ふのはどう云ふんです。」

「さつき事務長さんのお話ぢや同じ連れのなかの一人だつてえぢや御座んせんか。」

「すると金錢上の遺恨でもあつたんですかなあ。拐帶でもする程の奴なら隨分ひどいこともするだらうし。……」

「さあ、そこがどんなもんすか、私もさつきからかうやつて寢ながら考へてみたんですが。」服部は益々興味をもつて來たらしく、ベッドから少しづゝ乘り出して、煙草に火をつけながら、「併しかうなると愈々面白くなりますなあ。なにしろ續きものでも讀んでるやうて、先がどうなるか譯が分らねえんですからなあ。滅多に出遇はさねえ出來事ですよ。」

代議士は再び口を噤んで眼を据ゑてゐたがやがて沈んだ聲て、

「しかし可愛相なのはその殺ろされた女だなあ。どう云ふ事情があるのか知らないが、こんな海へ乘り出して投げ込まれちやさぞ死際が惡かつたらう。」

「さやうさなあ。今頃はあの眞暗なかをブカリブカリ流れてゐるでせうか……。」

二人は互に別な考へに落ちてゆくやうにそれなり押默つてしまつた。と、舷を打つ波の音が急に思ひ出したやうにざあッざあッと物凄く響いて、その絶え間にはひそやかな風の音に紛れて、呟やくやうな小刻みな機關の音が船室の壁を傳つてかすかに聞えて來る。

やがて服部は何と思つたかむつくりベッドから起きあがつて、外套をはおつた上から毛布を引被ぶつて、スリッパアの足音を忍びながらそつと室を出てゆかうとした。

「はゞかりですか。」と、代議士がそつちを振り顧へりながら怪訝さうに訊くのを彼は耳にもかけず、

「いや、ちよつと。」と、それなりこつそり戸をしめて室を出て行つた。

跡に殘つた代議士は急に靜けさのなかへ取のこされた寂しさを味はふやうに仰向けに寢て、眼ばかりぱちぱちさせながらぼんやりしてゐた。下では支廳長がかさこそと頻りに頁を繰る音をさせてゐたが、それもいつの間にかやんで、ゆるく上下する船體の動搖とゝもに明るい寂寥が漸次と凝つて來た。

暫らくすると代議士は到頭もぢもぢしながら起上つた。そして床へ降りて隅の方に置いてあつたトランクのなかゝらウヰスキイの角罎をとり出した。そしてアルミニウムの盃をだして、

「如何てす、一盃。莫迦に寒いぢやないてすか。」と、支廳長の方へ差出した。と、彼はベッドのなか

て物臭さうに寢返へりを打ちながら、

「え丶、私はもう結構です。どうも睡眠が出來んので。」

代議士もその上すゝめもせず、その儘それを持つて又ベッドへ上つた。そして毛布のなかへ丸く躰をべつて、旨さうに口をひきゆがめながらちびちびやり出した。

十分經つても、二十分たつても服部は歸つて來なかつた。そのうちに時は容赦もなく過ぎて、深夜の交代を報ずる時鐘が甲板の方でかすかに鳴つた。と、間もなく入口の戸が開いて、頭から丸々と毛布を被ぶつた服部がぶるぶる慄へながらやつと歸つて來た。顏の色は寒さに蒼ざめて、脣のいろまでなくなつてゐる。

代議士が起きてゐるのをみると、彼は水鼻汁を啜りながら、

「いや、面白い事になりましたぜ。今事務室の戸の陰からすつかり立聞きをして來ましたが。……。」慄へ聲ながら興味に充ちた調子で云つた。

「外はさぞ寒いでせう。」代議士は盃を置いてカーテンの陰から又首だけ突き出しながら云つた。

「や、寒いのなんのつて、まるで氷のなかへ入つてゐるやうです。」と、服部は首をかゞめてベッドの端へ坐つて、「なにしろ廊下にゐて、息が凍りさうなんてがすからなあ。」

「御執心なこつてすなあ。」と、代議士はクスクス笑つて、「どうです、寒さしのぎに此れでも一杯やつたら。」と、片手でウヰスキイの罎と盃とをカーテンの外へ出す。

「やあ、こりや結構なものがありますな。有難う御座んす。」と、服部は嬉れしさうに受取つて、早速なみなみと注ぎながら、「併し全く世間のことゝ云ふものは面白いもんですなあ。女が敵とはよく云つたもんだ。」と、先の好奇心を唆るやうな調子で云つた。

「で、あの一件は一體どう云ふんです？」

「それがですね、今向ふでお白洲がはじまつてるんですが……。」と、一息にぐつと飲み干して、「何にしろ鍵の穴へ耳をおつゝけて聞いてるんですからよくは分りませんが、事情がひどくこんぐらかつてゐるんです。今すつかりお話しやすが、矢張りあの投げ込まれた女が一番よくねえらしんで。」

彼はちびちび盃を甜めながら身振り手ぶりで講談でもやるやうに調子づいて語りはじめた。……

この犯罪に關與した者共は皆森の木材會社の歸國團だつた。それは丁度國境の劃定がはじまると同時に拂ひ下げられた森林の一部を基礎として起つた小會社で、多くは秋田縣人の手によつて經營されてゐた。初めの間こそ多少の利益をあげてゐたが、土地に便宜は少なし、固より遣り繰りで持つてゐた所謂泡沫會社のことであるから二年も經たないうちに漸次帳尻が割れて社運は日に日に傾いて來た。

彼等は丁度社運が下降しかけた頃、新聞廣告の堂々さと、募集人の甘言とに僞かれて、住み馴れた郷土を捨てゝ、樺太へ押渡つた輩の一部である。或者は早く見切りをつけて他に生活の道を求めてしまつたが、最後迄踏み止まつた彼等は到頭その日の衣食の途にも窮するやうな羽目に陥つて、越年に入るとすぐ堪り兼ねて九死一生の思ひをしながら漸う會社の工場のある山地から出奔した。そして今その歸

圖の途中にあるのであつた。

海へ投げ込まれた女の夫と云ふのは會社の測量夫であつた。初めは僅かな日給のなかゝら貯金をするやうな實直な男であつたが、眞岡あたりを流浪して歩いてゐた酌婦上りの今の女に引懸つてからは、到頭散々に身を持ち崩して、博奕はうつ、酒は飲む、終には勞働のもとでになる體まで毀して、重い肺病に罹つてしまつた。

女はそれをいゝしほに男を捨てた。同じ小舍に寐起きしてゐながら、病みほうけた彼をまるて犬猫のやうに虐待した。そして同じ人夫仲間の誰彼と公然で情を通じた。そしていろいろな出來事のあつた末到頭最後に今夜負傷した男を自分のものにした。

彼は會社の帳方だつた。帳面をもつて伐り出した材木の〆高を巡視して歩くうちにふと彼女に馴染んだ。そしてしまいには工場の誰彼からも爪彈きされるやうになつたので、到頭會社の金を拐帶して二人て眞岡の方へ夜逃げをしてしまつたが、その後は何處をどう隱れて歩いてゐたのか薩張り行衞が分らなかつた。

そのうちに工場の運命は日々に迫つて、越年後には米や鹽を得る手段さへなくなつたので彼等は愈々一團になつて山を下ることに決した。重い肺病で苦しんでゐた測量夫も同郷のものゝ情けに縋つて矢張りその群にまじつた。そして一同揃つて乘船した時には函館までゆく旅費のほかには殆んど食事の金すら殘つてはゐなかつた。

船が大泊へ着くと。彼等は思ひがけもなく先に出奔した帳方と、その女が相當な身裝をして乘つて來るのにはたと出遇はした。激しい爭論は端なくもそれから起つた。そして揩つた揉んだの末、前非は一切秘密にするから窮迫した彼等の爲めに幾らかの金を出せと云ふことになつた。それを素氣なく拒絶したために到頭絶望した測量夫は女を海へ突き落し、その上帳方だつた男にまで淺からぬ怪我をさせたのだと云ふ、……

「何しろ事務室はえらい騷ぎなんです。あの狹いなかへその測量夫つてえ男と、帳方の男とそれに人夫仲間の世話方らしい男が三人も入つて、あゝでもねえ、かうでもねえてひどく紛紜てるんです　そして秋田の言葉と來たら他國のより一倍騷々しく聞えますからなあ。」と、服部は盃をとりあげながら猶はも語りつゝげた。「そしてその論判のなかで、測量夫てえ男は泣き聲を振り絞りながらどうて私あ先のない體だからどうしてもこの男を殺ろす。殺ろして私も立派に死んで見せるつて怒鳴り散らしてゐるんです。全く無理のねえ話で御座んさあなあ。」

「さうさ。可愛相なものさなあ。そんな酷い目に逢はされりや誰だつて殺ろす氣になる。殊に先のない命だつたらなあ、……」と、代議士は起きなほつて、しみじみ云ひかけると、丁度その時、外の廊下でがやがや人聲が聞えた。そして澤山の人の靴音がマットの上を靜かに近づいて來る。

服部は何かの衝動を感じたやうにベッドから飛び出して、突如室の戶を開けた。と、その途端に、鳥打帽を被つた見すぼらしい洋服着のさつきの男が兩方から荒くれた水夫に腕を執られて、その後から襟

の開いた外套や、同じやうな垢じみた風姿をした男に護られながら通り過ぎて行つた。

「お、あの男ですよ。」と服部は我を忘れて小聲で叫んだ。代議士もむつくり起き上つて、床へとび降りて、戸口から顏を出してその後姿を見送つた。

そこへ年老つた船長を先に、事務長や署長がやつて來た。署長は室の前で立止つて、

「おや私はもう御免蒙ります。兎に角すべてはお任せして置きますから。」

「いや、どうもいろいろ御面倒をかけまして、……」と、船長は帽子の庇へ手を當て丶挨拶した。

「ほんとにお氣の毒でした。」と、事務長はその後に語をついて、「何かは明日のことにしまして、確かに今夜中はお預りして置きますから。」

「どうぞ宜ろしく。どうもあの容子ぢや自殺などをやらんとも限りませんから、さうなると又事が面倒になりますから、どうぞ充分御監視をなすつて下さい。」

「は、それは充分。船艙にや二人ばかり番をさせて置きますから。ではお寐み。」と、云ひ殘こして二人は汽鑵室の方へ足早に歩いて行つた。

署長は室の戸を閉ぢると笑ひながら、「まだ起きてお出でゝしたか。どうも面倒なことが出來て、到頭睡りそこないました。」

「どうも御苦勞さまでしたなあ。廻り合はせの惡い時にや惡いもんで、……」と、服部は慰め顏で云つて、「一體あんな男はどんな罪になるんでがせうな。」と、物知り顏に云つた。

「さあ、まあ豫審へかけて見んと判明しませんが。……兎も角明朝は私の署へ引取らなければならんのですから、旅疲れを休めることも何も出來ますまい。」

「全く御迷惑ですなあ。今服部さんの話ぢや大分事情が纏綿してゐるやうですなあ。」と、代議士も支廳長の眠つたベッドの足の方へ腰かけながら云つた。

「一寸立聞きしたばかりなんですから分りませんが、なんでも怪我をさせられた男が間男して、逼げたんぢやがあせんか。」

「えゝ。そんな事ださうですが。……」と署長は話を避けるやうな口調で、そろそろ寐仕度をしはじめた。

「樺太にやそんな悲慘な事件は澤山あるんでせうからなあ。私もいゝ經驗をしました。」と、代議士も立上つて云つた。

「えゝ。餘り珍らしい事でもありませんな。……兎に角私は明日もありますから、失禮ですがお先に。」と、署長はその儘、機械體操でもするやうにベッドの端へ手をかけてついと上つた。そしてするすると毛布のなかへもぐり込むと、大きな嚔めをひとつして、すつとカーテンを引いてしまつた。

代議士も、服部もそれをみると興ざめた顏をして間もなく各自のベットへ入つた。

翌朝十時を打つと間もなく、敦賀丸は靜かな底力のある汽笛を長々と吹き鳴らしながら小樽港の防波堤のなかへ入つて行つた。滑らかな水の面に白い澪を殘しながら漸次と船脚を落として、船首を高島の方へ向けていつもの錨地へ就いた。

もう雪はすつかり降りやんでゐた。灰色の白けた雲は低く山々の中腹まで垂れ下つて、その雲際から海岸までなだらかな傾斜のなりで廣がつた港の街々は幾何學的な線を殘したまゝ一帶に深い雪に埋もれてゐた。ところどころに紅い煉瓦の壁や、どす黑い崖の腹をみせてゐるぎりで、すべては空の灰色を反映させて極めて透明な白色を呈してゐた。そして高い煙突や、停車場と思ふ邊からもくもく吐き出される煙は銀色に薄れた大氣のなかに定かならぬ縞を描きながら凍えついたやうに漂つて、鐵板を打つ音や車の轍の音や、汽笛の響などが雜然としたどよみをつくつて幽かに水を渡つて聞えて來る。蒼ざめた海の面には海の鳥が四五羽づゝ群をなして高く、低く飛びちがつてゐた。

船室では皆荷物をかたづけるのに忙がはしかつた。毛布を折疊んだりトランクの鍵をおろしたり、がやがや騷ぎながら立働いてゐた。代議士は朝酒のきいて頰を眞紅に火照らしながら例の快活な調子で、

「さあ、これでひとわたり用意も濟んだと。まあ幸ひ荒れなくつて仕合はせてしたなあ。曉方にやきつとひと暴れ來ると思つてゐましたが。」

「いや、私などはもうあれで澤山で御座んすよ。船にや餘り強い方ぢやないもんで御座んすから、かうしてベッドへかじりついたまんまで一時はどうなることかと思つてゐましたよ。」と、服部は船醉ひて蒼

い顔をしながら云つた。

「はゝゝ。ひとしきりはひどく弱つてゐたやうでしたな。しかし冬の航海ぢやこんな靜かなのは珍らしいでせう。」

「さうですとも。それにガスと云ふ奴が來ませんでしたからなあ。」支廳長はベットのなかへ腰を入れて、古びた折鞄のなかの書類を整理しながら、「ガスでも來て、その上流氷でもあつて、四時間も五時間も海の中へ立往生させられる時は全く酷ひですからなあ。」

「さうでがせうとも。併し立往生ならまだ我慢も出來ますが、こいつがぶりがぶりと揺れて來て、船が奈落へでも沈んでゆくやうにすうと下つたり、上つたりしはじめちや全く叶ひませんな。正直なところ錢金にや換へられなくなりますからなあ。」

そこへ一番遲くまで寢てゐた署長が楊子を使ひながら食堂から歸つて來た。

「やあ、皆さん、もうお仕度が出來ましたな。」頻りに吃逆をしながら煙草に火をつける。

「昨夜は隨分御迷惑のやうでしたな。」と、支廳長は整理に氣を取られて顔も上げずに云つた。

「えゝ。あのために到頭夜つぴて安眠が出來ませんでした。職務とは云ひながら、勝手を云へば私には直接責任はないのですからな。」

「さうでがせうとも。海の上のことですからな。」と、服部は横合から口を入れて、「あの犯人にやあの後別に變つたことも御座んせんですか。」

「えゝゝゆうべ夜どうし寒いどつたさうですが。……

そこへ又ボーイが荷物の手配りをしに入つて來た。そして一々鞄をまみあげながら甲斐々々しく廊下へ運び出した。

代議士は陶然としたやうな眼つきをしながら船窓から海をみてゐたが、

「どうもいゝ景色ですな。小樽まで來ると內地へ歸つたやうな氣がしてすつかり安心しましたよ。」と、ゆつたり煙草の烟を吐きながら、「如何です。艀舟の來るまでには未だ間がありませうから其處邊がかたづいたらひとつ甲板へ出てみやうぢやありませんか。」

やがて彼等は寒むがりな支廳長まで誘ひ出して甲板へ出た。階段のところで下から支廳長の用をききに上つて來た清田に出逢つたが、彼も誰彼に丁寧な挨拶を述べながら皆の後から隨いて來た。

甲板はいつの間にかすつかり雪の掃除がすんでゐた。ところどころの板の凹みには滑らかな氷がはつて、綱具や、通風機の口や、上甲板の欄干には小さな、牙のやうな氷柱が美しく垂れ下つてゐた。そして頭から毛布を引被ぶつたり、毛絲の襟卷きで顏を包んだり異様な風體をした船客が、忙はしげに行き通ふ船員の間にまじつて、白い息を吐きながらぶらぶら步いてゐた。

彼等は取留めもないことを語り合ひながら漸次と船尾の方へ步いて行つた。そして錨を降ろす機械の前へ立つて、ピストンが白い蒸氣を吐きながら動くさまを面白さうに見てゐたが、その時、突然代議士は、

「此處邊でしたな、昨夜の悲劇のあつたのは。」

「さやう、さやう。此處でした。えらい騷ぎでしたなあ。」と、服部は今更のやうに驚いた調子で云つて、つかづか欄干の方へ歩み寄つて、「こゝからざんぶり投げ込んだんですな。投げ込む時の氣持ちはどんなでしたらう。」

「無論夢中でしたらう。さう云ふ場合にや大方殺さうと云ふ意志よりも、手の方が先に働くものですからなあ。」と、署長は拱手しながら答へた。

代議士も欄干の方へ寄つて、服部と並んで立ちながら、

「こりや隨分高い欄干だが、こゝから突き落すとしたら可成り力が入りますな。肺病で死にかゝつてゐる奴にしてはよくやつたもんだ。」

「そこが一念でがせう。うぬッてえ氣で一息にやつちやつたんですな。」と、服部は芝居でもするやうな滑稽けた身振りをしながら云つて、「これが大刀が何かですぱりとやつたんですと、今朝あたり此處邊にやまだ血の痕が方々に殘つてゐて、一寸面白ことなんですがなあ。」

「笑談云つちやいけない。さう誂へ向きに出來てゐりや文句はないが、……」

一同は聲を揃へて笑つた。

その聲が餘り高かつたのでそこらに歩いてゐた他の船客達は怪訝な顏をしながら周圍に寄り集まつて來た。なかでも無智な顏容をした四五人連れの農夫らしい男達は東北訛りのある聲で吃驚したやうに饒

舌りあひながら態々近寄つて彼等の顏をしげじけと見入つた。

やがて直ぐ眞下の海の上で鈍い鈴の音とゝもに激しく水を掻き亂す噪音が聞えた。と、見ると會社と水上警察の小蒸氣船が船尾から眞白な泡をたてながら、もう本船の舷へきてぴたりと橫づけになつてゐた。そしてすぐ近くに列を亂して紅い腹を浸した泊り船の蔭からは艀舟や、達麻船が幾艘となくこつちへ漕ぎ寄せて來た。

それを見ると彼等は下船の準備をするために急いで船室の方へ歸つて行つた。橋の側まで來かかると向ふから事務長が二人の巡査を連れて四邊に眼を配りながら急ぎ足にやつて來た。そして彼等の姿をみつけると、遠くから聲をかけて、

「や、方々探し廻つて居たところです。今署の方からお迎へにみえまして、……」と、巡査を署長の前へ導きながら云つた。

「や、そりやどうも御面倒をかけました。」と、署長はすぐさま巡査の方を向いて、威嚴を示しながら

「お前達も寒いのに御苦勞だつた。」

「いゝえ。どう致しまして。御無事で結構で御座いました。」と、年老つた方の巡査は丁寧に敬禮をしながら答へた。

そこへ又代議士を出迎へに政黨の支部員らしい男や、新聞記者らしい男が六七人ぞろぞろと群をなして集まつて來た。

各自ばらばらに群をつくつて話し出すのを見ると事務長は署長と巡査とを船橋の下へ連れて行つてごとごと何事か打合はせをはじめた。

「兎に角それでは水上警察の船で棧橋まで乗せて行つて、彼處で署の方へ引取ることにしませう。」と、やがて署長は高聲で云つた。

「さう願へると私の方は非常に好都合で御座いますが。それからあの方の書類は認めさして置きましたから後程お屆け致します。」

「よう御座んす。」署長は輕くうなづいて、今度は巡査達の方を振顧へりながら、「肺病患者ださうだからお前達も充分注意して連れて行け。」

二人の巡査は兵士のやうな姿勢を執りながら低く頭を下げた。そしてその儘事務長に伴はれて下へ降りて行つた。

署長は暫らくの間そこに佇んで何事か思案してゐるらしかつたが、やがてしまんぼりしてゐる御用商人の方へ歩み寄つた。

「まだ降りませんか？」

「さあ。早く陸へ上つて一休みしたいんでがすが、この混雜ぢやとても駄目でがせう。」

「貴方は今晩小樽へお泊りですか？」

「いゝえ、用が捗りましたら夜行でゞも函館まで出てゐたいと思ふんでがすが　それでないと明日の

朝の連絡船にや間に合ひませんからなあ。」

そこへ今度は支廳長が濟田を連れて歩み寄つて來た。そして當惑したやうな顏容をしながら、

「いや、汽車は駄目ださうですよ。今聞かせにやりましたら、昨夜の雪で倶知安から先は今朝から全然不通になつてしまつたさうです。」

「え、不通？」服部は眼を丸くして訊いた。

「明日迄は開通の見込みが立たんとか云ふことですが……」

「そりや困りましたなあ。どうもあんなことがあつて幸先が惡いと思つたら。……併し私は明後日はどうしても東京へ行つて居りませんと商買の方の埒が開きませんから。」ひどく困つたらしく云つて頻りに頭を振り出した。

檣の側に立つた代議士は六七人の人々に取圍まれながら又樺太の施政方針でも論じてゐるのか、「我輩は、」「我輩は、」といふ言葉が頻りに寒い風につれて聞えて來る。側に佇んだ新聞記者らしい男は人の影で手帳を出してそれを筆記してゐるらしかつた。

その時、右舷の方で突然人々の騷ぐ聲が聞えた。其處邊にぶらぶらしてゐた船客達は急ぎ足に右舷の方へ驅け寄つた。それと見た彼等もつい心を惹かされてひとかたまりになりながらそつちへ歩み寄つた。

舷門からは丁度昨夜の慘劇を演じた男達が巡査に護衛されながら降りやうとしてゐるところであつ

た。鳥打帽の男を眞先に醜い風體をした彼等は舷から釣つた小橋を渡つて水上警察の小旗を飜へした小蒸汽へ乘り移つた。そして最後に頭から繃帶をした商人體の男が水夫に助けられながら危げに乘つた。それと同時に魚油の樽や、薦包みを積んだ達磨船の上へは三等船客の群が押し合ひながらばらばらとこぼれ出た。そして船の中でも各自の風呂敷包みや、古行李をもてあつかひながら、我勝ちに席を得やうとして火事場のやうに激しく揉み合つた。

「どうもえらい騷ぎですな。あんなに急いで乘らなくてもよさゝうなもんですがなあ。」と、服部は傍の署長を顧みて、汽車の不通も何も忘れてしまつたやうな呑氣な顏をしながら云つた。

「どうも無教育なものには困りますなあ。あれで後へ廻りでもすりや自分達の命にかゝはるのですがなあ。」と、署長も苦笑しながら答へた。

やがて警察の小蒸汽は鈴の音を響かせながら推進器で水を蹴りはじめた。そして船首を斜に向けると今迄舳のところへ後向きに坐つてゐた犯罪者の一連ははじめて本船の方へ横顏をみせた。鳥打帽の男は油じみた襤褸のやうな詰め襟の洋服を着て、散々に擂り切れたシャツをその袖口から長く垂らしてゐた。蒼ざめた髑髏のやうな長い顏に鬚を蓬々と延ばして、眼深かに被ぶつた帽子の庇の下からは異樣な輝きをもつた小さな眼が時々三等客の乘つた艀舟の方をじろじろ凝視してゐた。

その隣に坐つた二人の男は昨夜の話しの世話方と見えて、二人とも丈けの合はないやうな垢染みた着物を丸々と着て、毛糸の襟卷を首へ卷いて、腐つたやうな中折帽を被ぶつてゐた。そしてその次には繃

帶の男がゐた。打ち踰められたやうに低く腰を落として、腕組みをしながら顏を伏せてゐた。艀舟からも、舷門からも、甲板からも總ての眼が一齊に彼等の上に注がれた。そして小蒸汽はその儘鉛のやうに靜まり返へつた海の面に長い波紋を曳きながら漸次と雪に包まれた棧橋の方へ遠のいてゆく。……

代議士は感慨に堪えないやうな顏容をしてその後を見送つてゐたが。やがて呟やくやうに、

「彼奴等をみて見給へ。一人だつて人間らしい風をした奴はありやしない。みんな樺太の惡政が生んだ犧牲なんだ。」

その瞬間、其處邊に集まつた群衆の間には感激に似た瞬時の沈默がすうつと走つた。誰ひとり口をきくものもなく、咳をするものさへなかつた。そしてその次の瞬間には中甲板の方から小さなボーイが、

「三番船の艀舟にお乘りの方は下へお降りになつて下さあい。」と、聲高に叫びながら走つて來た。

（をはり）



ふしぎな小包

田山花袋

作者の机の上に油紙で包んだ小さな包が置いてあつて、『ふしぎな小包』としてある。細い綺麗な女の手蹟で。

作者は譯があつてその女を知つてゐた。それは五年間もある男にラブして、そして漸く近頃になつて結婚することが出來た女だ。其女はその時懷姙して五月ぐらゐになつてゐた。

娘の時分から人目を忍んて續けて來た長い間の樂しい媾曳――それも姙娠さへしなかつたら、まだまだ長く續いて行つたに相違なかつた。闇の細い道、人氣のない林の中、靜かな世離れた一間の方が、舅姑がゐたり、小姑がゐたり、赤兒が泣いたりする家庭よりはいくら好いか知れなかつた。で、女からは今日の境遇を語つたやうな手紙が度々作者の許に來た。『かねて、先生よりうかゞひしこと、一々胸に思ひ當り、身搖きの出來ぬ罠の中に入り候身の上を果敢なみ申候。て

んなことゝは思ひもかけす候ひし」などを書いてあるかと思ふた、時にはまた男を罵つた烈しい調子て、「此頃、漸く男の心持といふことが解り申候、犬か猫か、それにも劣るやうなのが男の心と存候。今更ながら、女と申すものゝ可哀相なのに涙こぼれ申候」などゝ書いてあることもあつた。「思つたつて、仕方がありません。世の中がかうしたものなんてす。かうしたけだ物のやうなのが人間なんてす」こんなことも書いた。

「先生お一人に是非お目にかけたいものがあります。先生に是非靜かに讀んていたゞきたいものがあります。奥さんにも誰にて見せて下すつてはいけません。ごくごく内所てお送しますから」

ある日の手紙の中に、かういふ一節があつた。秘密て！内所て！何だらうと作者は思つた。好奇心も起つて來た。まさかと思ふやうな疑惑も起つた。「こんなことを言つて來たよ。己の處に何か内所て送つて來るツて言ふんだが、まさかラブ・レターてもありやしまいね。お前にも内所だツて言ふんだぜ！」かう笑つて妻に話すと、「何てせう私、秀子さん、此頃餘程變てすね」

妻も笑つて、不思議さうな顔をしてゐた。それから十日ほど經つて、その「ふしぎな小包」が來た。

包を解くと、中から手紙が澤山に出て來た。少くとも七八十通はある。そして、それが皆な女から男に遣つた手紙である。澤山な女から水島武といふ一人の男に……。

水島武といふのは、「ふしぎな小包」を送つて來た女の今の亭主の名だ。

作者の眼の前には、いろいろな女の名前がチラチラした。よし子、定子、照子、貞子――濃い紫のすみれを刷つた小さな封筒だの、ノートの紙に鉛筆で走り書きに書いた手紙だの、名刺だの、小さい女の寫眞だのが際限なく其處から出て來た。

あこがれたり悶えたり泣いたり笑つたりする不思議な世界が作者の前にひろげて見せられた。

黄ろい紙の切れ端に、

露やどる目にもうれしさあふる也
相見る時の明日を思へば……

かういふ歌が走り書にしてあつて、隅に、武様、武様、Takeshisama などて書いてある。そしてその紙は半分ちぎれてゐる。

あら武さん、御大切に待つて頂戴。御風邪を召さぬやうにね……御心配は無用よ。歸りは晝の中か好いの……夜がいゝの？夜が夜いわね、餘り遲くならない夜が。ぢや夜に……………

こんなことが書いてある。それは端書を半分に裂いたものであつた。

封筒ばかり殘つてゐるものもあつた。封といふ字がはつきり殘つてゐて、名宛も宛名も殘つてゐないものなどもあつた。男の手から此の手紙を奪ふには、餘程、女が苦心したと思はれるやうなのもあつた。女は屹度泣いたり笑つたり怒つたり威嚇したりしたに相違ないと思はれた。

…………武さん……先生……　私の心は亂れさうです。先生、亂れさうでも亂しはしませんよ。飽まで貴方はしつかりして頂戴よ。貴方に逢つたうれしいうれしいあの時のことは死んだッて忘れられやしません。何うしたら私は好いでせう。今度の話は大變むづかしさうですの。私は何でも彼でも向ふに遣られて了はなければならないんですッて……。私はあなたのことばかり氣になつて、氣になつて。私は何うかしてゐるんぢやないでせうか。向ふに遣られる位なら死ぬ方が好いわ。だけど、私には貴方があるから死ねないわ。貴方、何うか方法はないものでせうか。貴方から匿名か何かで、私がやられる家に、私のわる口を言つて、あの女は節操がない女だとか、男があつたとか言つて遣つて下さいませんか。さうすると、先でも吃驚して、破談にして呉れるでせうから。……早く早く樂しい時が來て欲しいわ。私待遠しくつて待遠しくつて、それまで私の體が生きてゐるでせうか、死んで了ふやうなことはないでせうか。そんなことがあつては私ほんとにつまらないわ。イヤだイヤだ、あれや是や考へると、今にも死んで了ひさうに苦しくなるわ。しかし、死なないわ。私、先生のこと思つて、つらい辛いことも我慢してるわ。先生も時々お手紙を下さいね、うれしい〳〵しいのを。私、此間の手紙嬉しくつて何遍も何遍も讀みかへしましたよ。それから指環ね。山本さんの名でも何でも好いからよこして頂戴な、私、内へさう言つてあるんだから、成だけ早く御願ひしてよ。此間のかまぼこもうすこし澤山差上げるとよかつたんですけれど、ほんの少して、もう召上つて了つたでせう。でも旨かつたッて仰しやつて下すつたから、私嬉しかつたわ。先生、先生と一緒になつて、早く樂し

い思ひをしたいわえ。先生も一生懸命になつて下さい……もうあまり長くなるから、これてよすわ。お寒いから、御體を大切に遊ばせ。ほんとうよ。さようら。

二月廿七日

妻　よし子より

戀しい戀しい武樣へまゐらす

誰にも見られないやうになさいよね。

……指環とバイオリンの絲と確かに受取りました。本當に難有う御座いました。すぐ指環をはめて見て、うれしくつてうれしくつて皆なに見せたわ。それにつけても、あなたが戀しくつてなつかしくつて堪らないの。今朝も姉に見せて考へ込むと、姉が氣が附いて、何うしてそんなに考へるの?ッて色々のこと言はれたわ。これが本當にあなたのお手から指環が出來ましたッて下さるのだッたら、何んなにうれしからうと思ふと、涙が出てよ。昨日から伯母が來てるのよ。兄が二三日後から病氣なので、内は何だかごたついてゐるの。……私、何んなことがあつても動かないつもりですから、それだけは安心して下さい。それから、此間、頼んだこと早く實行して下さいな。私は何んな濡衣を着たつて、どんな惡名をつけられたッて構はないから……。でもね、内では、何んの彼のッて言つて、私を其處にやらうとしてゐるのよ。私、東京にゐる時には、よく笑つたわね。先生の家などでもよく笑つたわね。歸つてから、笑ふやうな氣になれないのよ。私はいつても決つて朝の三時頃に眼が覺める

のよ。さうすると、貴方のことが考へられて、考へられて、何うしても眠られないの。私ね、こんなことを言ふと耻かしいけれど、寝着の襟に顔を押つけて、そしてあの耻かしかつた時のことをいつも考へるのよ。……そしてくたぶれて、朝までまたぐつすり寝込んで了ふね。日の高くなる頃まで！……戀しい戀しい〳〵

よし子より

三月卅日

戀しい兄上武樣おもと

この手紙と同封て、小林繁子といふ女から、その田舍にゐる吉田よし子に宛てた手紙が一通出て來た。

……繰返し拜見いたしました。實に實に思ひの外の御苦心御察しいたします。ほんとに何んなてゐらつしやるでせうかと、私、貴方の御身になつて、毎日毎日胸をいためてをります。それから御相談のこと、私のやうな者にも御相談下さいましたことは、私ほんとに嬉しく存じます。が、何しろ一大事なことゝて御座いますので、今日まで私一人て苦心して考ましたが、駄目ですの。お姉さんの身の上を考へたり、私の身を考へたり、先生のことを考へたりして、何うしてもきまりがつきませんの。……お家をお出になるとの話、さうでもしなければ嫁に行かなければならないとの話、まことにお尤なれど萬一御家出など遊ばしましたら、御父上樣、お祖母樣、お兄上樣の御病氣の上の御心配は一しほて御座います。それに、お姉さまが御姿をお隱しになれば、おさがしにならずにはいらせらるまじく、それに御道中のこと、先から、先へと考へますと胸もさけさうて御座います。さうかと申して、田舍

ていやが上にも御苦心をおすゝめ申す譯ても御座いませんげれど、何うかその事は思ひ止まつては下さいませんか。何うか何うかお願ひいたします。お寫眞はやはり机の上に置いて拜見してをりますんてずが、何うしても私の顏を見て下さいませんの……

四月十日　　　　しげより

お姉上様

おなじやうなことを書いた四五通の手紙を見て、段々二人の、寧ろ三人の戀の經過を知らうとした作者は、突然、次の手紙(それは二年ほど後の日附だ)に邂逅して、崖から突落されたやうな氣がした。それは短かい手紙だ。

……先生、しげは先生に欺かれました。先生はしげを公然の細君にはなすつて下さらないお積りてしたのね。そしてかよわい女の魂をお弄びになりましたのね。よう御座んす。しげと先生とよし子さんと。今、考へるとよし子さんは可哀相てした。先生…何うかして下さい……

三月二十五日　　　　しげより

先生おもと

作者はこの手紙に一方ならぬ興味を感じて、三人の間をもう少し知りたいと思つて、多い手紙の中を彼方此方と探して見たが、さういふ複雑した時代のものは、つひに一通も見當らなかつた。唯、小さな

寫眞が一枚あつて、裏に明治四十三年吉田よし子二十歳としてある。ひさし髪に結つた、何方かと言へば、少し肥つた、眼の綺麗なハイカラな娘で、手にダリヤを持つてゐた。

しげといふ娘の手紙は二三通あつたが、何れも是も別に、ラブ・レターといふやうなものではなかつた。寫眞が一枚、裏に、名も何も書いてないが、或はそれがしげ子かも知れないと思はれた。よし子に比べると、餘程東京風て、顏の輪廓も正しく、姿もすつきりして、好いたらしい風をしてゐた。少しこごみ加減にして笑を口の邊に漂はせてゐた。

…………ふと、一枚の名刺が出て來た。男の名刺である。裏を見ると、鉛筆の走書で『明日午後六時頃いつもの處に行つてゐて下さい。いろいろ積る話がしたいし。それに越後の方のこともあるし、是非逢ひたいから……』かう書いてある。何年の何月何日であるか解らないが、この名刺を受取つた人はしげ子に相違ないといふ理由があつた。越後の方のこととはよし子のことだ……。

と、この名刺がかうして緣もゆかりもない人の机の上にあるといふことが作者には不思議に思はれて來た。男の手から先づその女にこの名刺は渡つて、そこで役目を果して、それから男の袂に戻つて、秘密の手箱の中に長い間入つてゐて、そして今の妻になつた女の目に觸れた……。

男から女に遣つた手紙が二三通交つてゐた。本郷區西片町十春田靜子様としてある。

…………御稽古申上候ふてより未だ幾日もこれなく、日毎に厚き御心身に餘る御心づくしのほど難有

奉感謝候、然るに本日申上候通りの次第ゆゑ、最早御目にかゝるの勇氣も無之、當分御遠慮申上べく候間、何卒惡からず御許し下され度、後任者として至急人物を取調べ、差上可申候間、何卒御變りなくこの道を御研究あらんことを切に希望仕候、これ小生が貴孃に對する最後のお願に有之候、くれ〳〵も御身大切に祈り上申候、右お別れまで草々敬具

五月十日　　　　　　　　　　武

靜子樣

……なつかしや今宵の月、目には冴ゆれど心は曇り、影は見ゆれども姿は見えず、何故に戀しきや箱根の谷は……あはれ悲しさ、今日のはかなさ、この世は夢とや、うき世とや申す、今日は禮も忘れ、耻もわすれ、心のまゝ書きつらねて御話しますから、何卒あきらかな心の奥をお讀下さいまし。今はいかにいはれ候ふとも、心に苦しむところはありません——何うぞ許して下さいませ……あゝ私は罪人〳〵、私以上の罪人は又とこの世にあるまいと思ひました。定めて御身——

……謹啓今般小生都合有之、御國の音樂教授受持の儀御斷り申上候間、宜しく御願申上候、折角のお思召、お情のほども相分り候へども……今更お互に顔を合はせることも氣まづく候まゝ、不惡御察しのほど願上候敬具

三月十日　　　　　　　　　　　　　　　　　武

松田園子様

男から女に遣つた手紙は、この二三通より外はなかつた。しかし此手紙がかうして此處に殘つてゐるのを見ると、或は女にやらうとして、書いて見て、そして中途で思ひとゞまつたものかも知れない。或は下書きに書いて見て、女に遣つたのは、別に綺麗に書いたのかも知れない。

……御なつかしき水莖の跡いと〳〵うれしく拜見いたしました。先生も淋しいと思召しますの。世の中つて、こんなさびしいつまらないもので御座いませうか。うれしいのは一週に一時間、これから金曜日まで待つことが出來ませうか。一日の長さ淋しさ、何を見ても涙の種、つく〴〵生きてゐるのはいやになりました。大好きな琴も何もいやで御座います。一番死といふことが樂しみで御座いますの。先生、何うぞ何うぞいつまでもお忘れ下さいますな。それでも私は何うかして〳〵先生をお忘れ申上げなければなりませんの。世の中には義理といふことが御座いますものね。先生も妾をお忘れ下さいまし。あゝもう皆ないやになりました。何を申上げてよいかわかりませんの、何より何より死が一番で御座います。先生、時には思ひ出して下さいまし。

かよひ路の舟はなくともなみだ川
　かちわたりても君にまみえん

いとゞなほ思ひば胸にますかゞみ

、ぬくへと消えぬ君がおもかげ

何をかいたかわかりませんの、私の頭は亂れた麻て御座いますもの、もし失禮なことが御座いました

ら、いくへにもお叱り下さいまし。

せい子

これには日附も宛名も何もなかつた。水色の式紙形の紙に、鉛筆て達者に書いてあつた、菫のついた

小さな封筒に入れてあつた。

……中へ手紙入れて置いて頂戴ね、ほんとに無理ばかり申上げてすまないわね。私が惡いのね、ほ

んとに惡いのね。西洋人形を見て樂しむは。貴方の寫眞の小さい方から代紙を取つて、始終中肌につ

けてゐるわ。あゝ戀しい戀しい戀しい……。

私、何うしてもお嫁にやられることになりました。悲しい、辛い、情けない。何故、貴方は遁げて來

いと仰しやらないかと腹が立つことさへあります。しかし、私のやうなものは、貴方の奥さんには、

何うしつたてなれやしないんてすから。私、肌へ貴方の寫眞をつけてお嫁に行きますわ。貴方と思つ

て、さんど行く人にも逢ふから好いわ。

貴方、私、他の男と一緒に歩いたり、話したり、お飯を一緒に食べたり、………たりしても腹た

ない？…………

七月十日　　　　　　　　勇子

水島武様

……何うしませうね。苦しくつて苦しくつて！本當にもうイヤだ、この苦しい思ひを誰に話しませう。精神の苦みなら、何んなことでも打明けて、少しは慰めて貰へられるかも知れないけれど、精神ではない、體がくるしいのですから。さうかと言つて、人に言ふことは出來ず。學校をやすめば、體がわるけりや醫者に見てもらへつて母さんに言はれるし、學校に行かうとすれば、苦しくつて思ふやうに歩くことも出來ません。けども母さんの前で泣くことも出來ない。何うして好いやら。キット〳〵みんなに知れないやうに、何んなにしてもわからぬやうに死なうと定めたの！てね、もう兄様に逢はずにと思ひ定めたけど、何うしても引つけられて顔見れば！何うしてこんなに意氣地がないんでせう。兄様、私、私、死ねなくなつたのよ。よ、何んて決心の鈍い女だらうと思つて。また先を考へるの？思ふやうには家では泣けない、體を自由にすることも出來ない。何故、かうなつた體を兄様は殺して下さらないの。何故、一言でも、夢でも好いから、私に死ねと言つては下されぬのか。兄様、兄様、何故です、こんなにお中が苦しいのに、一晩殆ど苦しんで眠ることも出來ないのに、死ぬのを待つのか、夜明を待つのか何んだか解らないけれど、早く早く何うにかなつて呉れれば好いにと思つて

一晩明したことは四五日前からなの！其後はね、夜も晝もね、ぼんやりして夢ても見てゐるやうなの。なぜかうぼんやりしてゐるのでせう。今夜母さん、ゐないのよ。多分遲くなるてせうと思ふの。だからこれ書いたの、少し頭を落付けて見ませう。

もう今から何んなにしたつてだめとあきらめてるわ。お中は冷えるし、何せ滿足な子てはない。かたわになつて生れて來るなら死んで來た方が好い。おゝかわいさらにね。かわいさうにね。赤と見たら食へるなと言つてる親がほんとなんだけれど、死んだ方が――。

あゝかわいさうにね。何んて鬼見たいな母親だらう。けど死んだ方が好いと言ふのは、義理て言ふのてはない。ほんとに心の底から死んで生れた方が好いのです。あゝかわいさうにね。ほんとなら、大事に育てなければならないのにね。隱さうとしてゐた心が、今更に自分ながらうらめしい。自分が苦しい時には、必ずおなかの中ても同じやうに苦しいのてせう。おなかの中て苦しむから、私までが苦しむのてせう。つまり自分一人の苦みをのがれる爲めに、子にまて苦しみをわけてやつたのよ。あゝかわいさうにね。かわいさうに。かにしてよ！鬼見たいな母親！けど、鬼見たいな母親がついてゆかう。何處までもこの母親がついて行く。あゝきつとね。

兄樣、もう書けないわ。苦しくつて、又痛くなつて來るやうてすから――ね、兄樣、母さんの居ない時、氣をおちつけて見ませう！

三日夜

この手紙は横筋の入つたノートの紙に、紫インキで細かく書いてあつた。宛名もなければ、これを書いた女の名もない。唯、その中から、小さな女の寫眞が出て來た。庇髪を大きく出して、白襟紋附の衣物を着て、椅子に手をかけて、此方を見てゐる容色の好い女だ。眼の綺麗な、眉の間の遠い、怜悧さうな女だ。その女とこの手紙とは何う考へても關係がありさうには思はれないといふやうなやさしい女だ。作者は不思議な思に撲れて、長い間じつとその寫眞に見入つてゐた。

それに一種の匂ひが――香水の匂ひがその手紙に附いて殘つてゐた。

その他にも斷片的な手紙が多かつた。一通見ただけでは、戀の後前も十分に解らなさうなのが多かつた。作者は二つ三つその斷片的なのを擧げて見やうと思ふ。

……あゝうれしい何て幸福な。死より生きかへりたる心持が致します。もう安心ね。思ひ通りになつて是からは樂しい時を迎へる爲めに苦しむのですよ。つらい悲しいこともこらへて頂戴ね。……私、何も知らない積て、手紙差上げますけれど、通常のことばかり書いて、差支のないやうにして置きますから、誰が見ても差支はありません……

……先日、御註文の品がありますが、何だか、私、危險のやうに思ひましたの。成るべく今の内は誰にも二人の間をさとられぬ方が先へ行つて都合が好いと思ひますから成るべく今の中は空々しく

してゐませうね。然し其内リボンは好い流行物を見附けて、何とか口實を設けて母から送らせませう。いゝでせう、あゝ早く早く先日のやうに　。――樂しい――面白い――早く〳〵公然と樂しい家庭が造りたいのね……。

……私、兄樣から絶交するとの仰せを母から聞きましてからは、まだお家へ出入することをお許していたゞきませんから、何んとなしに氣まりがわるう御座います。尤も始めて、私が御たづね致す前、姉樣から二三度御手紙を頂きまして、幾分か氣を强くして上りましたのですが……何うぞ兄樣、先達てのこと、私のわるい處は一生かゝつても改めますから、何故お交際下されなかつたかを何卒一口おつしやつて下さい。そして御家への出入を許して下さい……

……先生、私はこれまで先生の許に嫁げる身ではないながらも、唯何となく先生を一氣に思つてをりました。十七の春から今年まで殆ど六年の間……あゝもかうも思ひました……。

……前略御ゆるし下されたく候。

四月以來一方ならぬ御親切もて御導びき下され、お禮の申上げやうも御座なく候、殊に御大切なるお

品なが〳〵拜借いたし忝う存上候。實は歸宅前一度御伺ひ申上べきのところ、つれの都合にて、急に明日出立いたすやう相成候よし、不本意ながら使を以て御返却申上候。月謝封入仕候まゝ失禮ながら御納め下されたく願上候。九月より又々御願申上候。先づは一筆御禮までに。

六月廿八日　　野中貞子

水島先生

……先生、非常に御無沙汰申上げました。御變りもなう御暮らし遊ばしますか、お伺ひ致します。あのお宅教授遊ばしててせうか。私、また御教を御願致したいのですが、誠に御手數ながら、御規則書御送り下さいまし。それに、もし樂器を拜借することが出來ませうか。遠方ですから借して頂ければ何より幸てす。お伺ひまて、かしこ。

十一月廿九日　　貞子

水島先生お前へ

……先日は早速御返事下され、難有存じ上け候。お手紙にはあの日のことと有之候へども、いかなる故にや、御手紙はやつと夜分に落手いたし候。水曜には是非ともお伺ひをと存じをり候處、止むを

得ざる用事のために失禮いたし候。

兎角當月はせわしく、外出も容易に出來ぬことと存ぜられ候間、來月より（多分十日頃より御稽古遊ばすことと存候）御願申上度候、御稽古初めの前に、一度御目にかゝりいろ／＼御伺ひ申上べく存じをり候。かしこ。

十二月九日　　　　　　　　貞子

水島先生御前に

かうした穩かな手紙が翌年の二月五日の日附になると、いつの間にさうなつたかと思はれるやうな急轉直下をしてゐる。同じ人の名で、しかも走り書で、かう書いてある――

……先日は我儘を申しましてすみません。何うか許して下さい。あれから、貴郎のことを考へて何うしても眠られないで困りました。……先日うれしい話をした室には、今、夕日がさして、遠くから敎會の讃美歌が聞えて來てゐます。靜かないろいろなことを考へられる日です。御存じでせうが、私はこれまで隨分變化の多い生活を經て來ました。詳しくお話したら、それは何んなに小說に似てるでせう……不仕合な身、それでも貴郎があるのが嬉しい……

四十四年二月五日……作者はこの手紙を繙きながら、其日附の頃の出來事を頭にうかべてゐた。この「ふしぎの小包」を机の上に置いて行つた女は、丁度其頃熱い、烈しい戀をその男に濺いでゐた。それにも拘らず、女の家では、漸々それを嗅付いて、つとめて其處から女を離さうとしてゐた。

二月から四五月まで、女は田舍に遣られてゐた。淋しい蒼白い顏をして、田舍の畑道などを歩いてゐた。作者は丁度用事があつて四五日其處に行くと、女は喜んで、何彼と東京のことを聞いた。梅がもう散る頃であつた。芹だの、なづなだのが靑々としてゐた。凧のうなりなどが空に聞えてゐた。

「何故、女ッて言ふものは、さう熱心になるんだね？」

作者が言ふと、女は、『だッて、仕方がないんですもの』などと言つてゐた。

「本當よ、先生、離れたいたッて、離れられやしませんねえ……。解つてゐても、駄目なんですからねえ。』女はさびしい顏をして作者の方を見た。

男が其處に女を訪ねて行つた話なども後で聞いた。田舍の停車場から、丘を越えて行くと、近在に行く馬車の通る路があつて、其處まで出て、女は男を迎へた……。

その時、既にさういふ女が別に男に出來てゐたのだ。作者は、多い手紙の中から、野中貞子といふ名てある手紙だけを選び出して、そして、それを日わけにして見た。

二月からずつと手紙がない。無ければならん筈の手紙がない。『ふしぎな小包』を送つてよこした女が何うもかうもならなくなつてその男と結婚したのは、七月過ぎてあつたが、其間も無論その貞子と關係がついてゐたに相違ない……。十月になつてから始めて次のやうな手紙がある。

……前略、如何なる御都合にてやわかり兼候へども、御約束いかゞなし給ひしや。おんうらめしく存じ上候。先に申上げし如きかなたなれば、他人の噂に上り批評されゐるほどの私、御記憶なきは申迄

もなく、定めしをかしう御覧遊ばしをらせられ候ことと存候。これも私の運命かはしらねど、餘りに社會は私に殘酷に候。罪は私一人にてなせしにもあらぬを、あなたまで他人と共にも責め遊ばさるゝにや。罪の結果とは申しながら面白からぬ世にながらふ身をも少しはお察し下されずば、あまりに罪深きおん業かと存候。最早お出下されぬほどならば、なぜに變心せぬなどと仰しやると貞はとても今承知出來かね候。

あなたがおよろしくとも、御都合がよろしくても私はいや、私の言ふ通りに遊ばさなくっては。左樣御思召被下度候。匇々

廿二日　　貞子

武　樣

いやですから番地は書きませんから、ぜひ御出下さいまし。お出あそばさぬときゝませんよ。

……只今の御手紙はまあ何うい言葉でせう。貞はあなたから何もあんなこと言はれることなんかありません。御自分から仰しやつたんですもの。火曜日には通知するつて……そしてそれが又うそでせう。誰でも、多分あなたでもおいやなのはあたり前だと存じます。それをあなだはまァ御勝手ばかり、私は悲しくなります。貞だッて、貴方の今の御位置をお察し申さないことはありませんから……それだのに、貴方には、私の目下の境遇を少しも思ふては下さらんのですもの……あ

なたは、もう貞にお同情なさることは出來なくなつたのです。あゝ私は愛のない人の犧牲になつたのです——あなたの爲めに犧牲にされたのが悲しい。私は四月廿一日に何故死ななかつてせうか！あなたはそれも私にさせなかつた。あなたのお言葉、今から見ればすべてがうそです。私はお言葉を信じて、それでは貴方が立つ瀨がないと存じ、言ふことを聞いた私は馬鹿、今は死ぬところも何もありません。武さま、私は只今は親兄弟もないさびしい體て、生きてゐたいなどとは少しも存じてをりませんのですから、死ぬ場所さへあれば、何んなに嬉しいてせう。あなたのお室は貞の死の晴れの場所と存じますから、許して下さるてせう。御返事下さい。あなたもさぞうるさくなくておよろしいてせう。私、國から出ます時に、ちやんともう決心して來たのですから、少しもわるびれは致しやしません。明後日電話をかけて頂かなくとも、お出下さらなくとも、御返事さへして下さればよろしう御座います。

貞

十二月五日夜一時半

武さま

あなたの御迷惑は御察し致しますけれど今の境遇上致し方ありません。一番近い私の取る道は死より外にありません。のですから、何うぞそれを許して下さい。私此頃は四方八方困ることばかり。

……あの何う遊ばしたの？御返事も何もありませんね。もう御願ひ申さなくともよろしう御座い

ますから御安心あそばせ、貞は愈々内地を去らなければならなくなりました。ほんとはね、先日お出遊ばしたあくる日に、ある事件が私の身に起りました。それですのに、あなたは、私に勝手なことばかり仰しやるのでせう。私はどうすることも出來ません故、御部屋拜借を御願ひしました。そしたら、それも御許し下さいませんでした。私は決心しました、カラフト行きを。當月はまだ立ちませんでせうけれど、御目にかゝることも口をきくことも出來ぬ身となつて了ふのですの。私は悲しいけれど仕方がありません。最後のお願ひは、今一度自由のからだの中にお逢ひ申したいのですが、然し御都合がわるいのならよろしう御座いますよ。あのね、事が急なのですから明日の午后二時頃までに、はがきでよろしいのですからお逢ひ下さるのか、それともおいやか、御返事下さいまし。それからあの私の手紙、あなたに今まで上げたのが御座いますなら皆破つて下さい。お目ざはりになるといけませんから。それからおからだ大切になさいまして下さいまし。何も彼も私は運命とあきらめました。さよなら。

十二月十一日　貞

武さま御前へ

……只今の御仕打は私決して忘れませんよ。急用があればこそこわいのも構はずゆきましたのに、使が歸つて來ましたから大急ぎで行けばあのやうなこと遊ばすのですもの。私は泣きながら歸りまし

た。然し、何うしてもお話し致さなければならぬことが御座いますのですから、何うして下さいますのか。御返事にキッテ封入致しておきます。此手紙のつき次第お願ひいたします。私のお願ひ申すことなどはおイヤなのは知つてをりますけれど、何うか救けると思つて御きゝずみ下さいまし。

十九日夜　貞

武さま

……過日キッテ封入の手紙さし上げ候へども御返事下されず、鳥渡御返事書くひまもおわさぬにや。私は先日ある人から武さまがお綺麗な方と活動寫眞へ御出かけ遊ばされしよし承り候。然し、これはある人がわざと私に申せしことと存候。武さま、私はいかに女子でも、あなたはあまりあまりに踏つけにしては御出なさらぬか。私は、今內地にゐることも出來ぬほどになつてゐるのです。それも皆なあなたの遊ばしたことです。兄や母が私を見棄てたのも、皆なその爲めです。私は路頭に迷うて迷うて、ある人につれられて行かなければなりません。さうして、もう一度、ぜひともぜひとも〳〵お話し申さねばならぬことがあります。あなたがおせわしいことと存じまして、私が私が使をやれば先日のやうなこと遊ばすし、ほんとに致し方のない方、私、何うすればよろしいのでせうか。あなたも兄同樣に私を見すてたのでせうか。それなら、手紙て、私の氣のすむやうに、二度と私が手紙書がないやうな御返事を下さい。私はその手紙を見て、そして立ちませう。どうぞ〳〵〳〵なんぼなん

食のやうになつたつても、あなたの遊ばしたことてせう。見さげずに、そしてせめてね、かわいさうと思つて下さい。

廿六日夜　　てい

武さま

どうぞ御返事下さいまし。一生のおねがひて御ねかひて御座います。

これて手紙が暫く絕えてゐる。そして、翌年三月になつて、今度は水島武の妻、『ふしぎな小包』を作者に送つて來た女に其女から宛てた手紙が二通ある。

……あの何事も承知の上てと仰しやるの？私は千里眼てはないのてすもの、六年も逢はなかつた人が、その間に何をしてゐるか知らう筈はありません。私、人を欺いたことなどありませんから、自からの欺れてゐることは少しも存じませんてした。あゝ私がある人から自分の知らぬ秘密をきゝ出した時には、もう遲う御座いました。如何に泣いても悲しんでも、取りかへしのつくことてはなかつたのてす。然し、私は誰も恨みません。そんな自分が不仕合に生れて來た爲なのだと思つてゐます。此世に於ける私の命は早くもすてに亡びて了つてゐる筈なんてす。唯、年老いし母の悲みを思うて、今も猶冷めたい世の中に生きてゐるばかりてす。あなたの此間のお話とそれからお手紙とてすが、私の出京したのは、武さまに言ひかゝりして、無理にても御助力を仰ぐつもりだと仰しやるのてすか？そ

れては餘りお口が過ぎますでせう。只今の私の境遇を見下げてのお言葉と存しますが、私はお宅の御都合のわるいことをよく知つてをります。私は前に武さまのお困りの時に、御間に合はしてあるものをすら、頂きたいと申したことはありませんよ。それを言ひかゝりしたとやら、世話を受けるつもりで來たと仰しやるのは、惡口にも程のあつたものと存じます。貞は心外でたまりません……。

とにかく武さまにもお談じ申上ぐるつもり、それから貴女にもお目にかゝり、お話致したいと存じますが、御思召はいかゞです。手紙ではとても御返事を思ふ通りに書くことが出來かねますから、あの色々な事情がありますもんですから。私のやうなみぶんはもういたし方ありません。

十四日　　　　貞

水島ひて子さま

それから六月になつて、かういふのが一本ある。女は國(羽前)からよこしてゐる。矢張細君に宛てゝある。

……よくまアお世話しい中から、お手まめに度々お手紙下さいますわね。

あら、ま、左樣で入らッしやいますの？下等動物にされたのですッて、御氣の毒ですことね。然し奥さん、世間では皆ながあなたの御發明なお生れを感心してるのでせうに。私のやうな、人に横戀慕するやうな阿呆が、奥さんに對し、敎訓の何のッて途方もない、そんな物體もない心は微塵も持つちやを

りませんのよ。おほゝゝ。

お言葉ですけれど、御良人が私を御心中に恨んでゐられるとやら、禮を言ふてゐられるとやら、私、他の人からなら苦しいのですが、あの人の恨なら何でもないの。あなたのお胸は廣くつてゐらつしやることね。お良人にのしつけて、丁度品物見たやうにおつかはしなさるッて、ほ、ほ、てこそお目がねにかなつたよい處がおありですの……。

無教育な私は、あなたが御親切氣におかき下さることを、いつも取り違つてばかり解釋いたしますのね。此の度のお手紙にも御良人がなんてすッて、私が正道をふまないて、勝手なことばかり言うッて……ほゝほゝ何方(どっち)がてせうかね。盗人にも三つの理由があるとやら申すこと、あなたになら、正道だなんて、人間の使ふ言葉が出ますのでせうが、私にたいしてなら、そんな生意氣な言葉はとてもだめ、顔でも洗つてお出ッてのてせう。然し、ミロクボサッの世とやらが來ましたら、其時には言はれるか知れませんね。

武がこりきつてゐると仰しやるの？何がてせう。力のない弱い女を踏みつぶして出る血潮を吸ひ取ることてすか。それならあの人も、幸ひそれに連れ添ふあなたもさぞ御安心なさつたてせう。お目出たいことてすね。呵々。

これはあの人のこと、あなたのお存じのことてはなかつたつけ。あなた樣は私に御親切にお出て遊ばす方、御良人の借りた金子を返させてやると仰しやる方、何うも難有う。折角の思召を無にするも失

禮、ぜひとも御助力を願ひませう。御親切に、中にお入り下さるのに、本當のことを御存じないと馬鹿氣てゐますから、お話いたしますがね。十五圓だなんてうそです。遊んでゐる金があると私が言うたといふのも、みんなうそ、私、あの時には病氣てしたから、御宅の親樣が郵便局から引出して下さつたのてすよ。二十五圓てした、その前のが七十五圓、皆な局から引出したのてすから、通帳さへ見れば、日を忘れたなんてにごさんてもよろしいのてす。然し、あなたも御氣の毒てすから、皆な一時に歸して頂きたいなんて申しません。あなたの御都合も御座いませうから。それから金さへ返せば、何も言ふことはないかとのおたづね、ないどころか澤山御座いますけれども、今の處あなただつて御心配の事情もおありのやうに思はれますから、大きな御世話かも知りませんが何も申しませんよ。御發明なあなたの御助力なら、めんどうもなさ相てすけれど、もしかくずくが出ましたら、其時には何うぞ私共から御身を引き下さるやうねがひます。私も運命と思うて、最後の決心をして、ガリガリ亡者になりませう。いはゆるあの人のいふ正道を踏まん勝手者に……。もしお手紙を下さるならば、當月の十五日までに願ひますよ。其後は當地にはをりませんから。

六月三日　　　　　　　　　　　　　貞

奧樣お前

これだけしか手紙がない。

作者はあたりに散ばつた手紙を一まとめして、そして、それを元のやうに糸て束ねて、油紙に包んだ。

油紙に書いた「ふしぎな小包」といふ字はくつきりとあたりに見えてゐた。不思議でも何でもなくつて、そして不思議な世界が、新しい形式を取つて更に作者の前に無限に展げられて來たやうな氣がした。

「ふしぎな小包」を送つてよこした女から、二三日してから、次のやうな手紙が作者の手元に屆いた。

…………先生、「ふしぎの小包」を御覧下さいましたか。今更、何も申すことも御座いません。自分の愚かと盲目と無識とが過ぎ去つた昔の記臆の中から蘇つて來るばかりです。先生、私は何んて愚かな、何んて世間見ずな女でせう。私は子供を負つて、臺所のことをしたり、舅姑の世話をしたり、家計の心配をしたり、普通の細君以下のつまらぬ生活をして一日一日を送つてをります。何といふ相違でせう、何といふ生活でせう。先生の許におたづねして、いろいろお話をうかがつた時分と今とては――。

先生には、こんな手紙――女から男にやつたこんな手紙なんか、めつらしくもないでせうふしぎでも何でもないでせうけれど――私が始めて、こんな手紙が一かためにまとめてある手箱を見附けた時には、それは吃驚致しましたね。男つて、こんなものかしらと思つて、身の毛もよだつやうな氣がして、かうしてはゐらないやうな、誰かに頭をグワンと打たれやうな氣が致しました。モウパツサンの「女の一

生」にも書いてありますね。さういふ心持が致しました。そして、その大勢の女の手紙の中に、私の遣つた手紙が一緒になつて交つて入つてゐるのを見た時には、自分ながらく、わつとなつて、自分の此身が非常に侮辱されたやうな氣がして、思はずその手紙を取つてビリ〳〵破いて了ひました。愚かな私ぢやありませんか。

先生、男ッて言ふものは、皆なさういふものでせうか。さういふ不節操な水くさい卑しむべきものでせうか。動物のやうなものでせうか……。私は、漸く、此頃男の心が少しばかり分つたやうな心持が致して來ました。私達はうぶな、何もしらない、純粋な心て、生命がけか何かて男をラブしてをりますのに、男は燒石か何かのやうな心て、それを自由にしやうとしてゐるのです。女が可哀相てす。女ッて言ふものは、つく〴〵可哀相なものだと思ひました。

先生、あんな手紙をお目にかけてすみません。あんな手紙をお目にかけるのは、よさうかと一時は思ひました。夫の耻辱、家の耻辱、ついては私の耻辱だと思つて、破つて棄てゝ了はうかと思ひました。しかし、私に取つては捨てゝ忘れて了ふやうなことの出來るものではなかつたのです。私に取つては、一面自然の酬ひてすけけど、一面そのまゝにしては置けないやうなものでした。――私はそんな男の爲めに泣いたり叫んだりしたのです。親をも捨てたのです。親類をも捨てたのです。先生の御意見をも用ゐなかつたのです。男に一緒になりさへすれば好いと思つてゐたのです。

しかし、先生、私は後悔は致しません。唯、さういふ不思議な、さういふ恐ろしい、ある時を經なけ

れば知られて來ないやうな世の中だといふことが段々解つて來たのを力強く思つてをります。子供さへ――この可愛い子供さへ居なければと、日に幾度思ふか知れません。先生、私は、この間さし上げた手紙の女の他に、まだ、最近に苦勞してゐる女が一人あるんです。しかしこれは申しません。夜も更けましたから――これで。

十二月日　ひてより

――様

それから十日ほど經つて、女の伯母に當る家に作者が寄つて見ると、丁度好い鹽梅に其處に女が來てゐた。男の兒を肥つた下女が負つてゐた。

「まア、先生」

かう言つて、女は莞爾笑つてゐた。

伯母が居るので、女は話したいことも十分に話せないといふ風をしてゐた。

鳥渡、伯母が立つたあとで、

「此間は變なものをさし上げて」

「イヤ」

作者は思はず笑つた。

「面白いでせう？」

「何うも仕方がないね」

「男ッて面白いもんだと思つてゐますわ、此頃は――」

「さういふ男ばかりでもないだらうけれどね」作者は笑つて、「でも、段々世の中に出て行くと、不思議なことがあるよ。思ひもかけないやうなことがあるからね。泣いて好いか笑つて好いかわからないやうなことが澤山出て來るからね。」

「さうでせうね。」

「そんなことが出來るか知らん、動物でもしやしないと思ふやうなことを平氣でしてゐるやうな人があるからね。………どうも、この道ばかりは底が知れない。それに、道德不道德などゝ言ふやうなもんでないんだから困る。貴方だッて、子供があるばかりで、夫に別れられないッて言ふんではないだらうから……」

「それはさうでせうけれどね……私など何も言はれた義理ぢやないんですけどもね。でも、過去は過去、今は今よ、先生」かう言つて女は笑つた。

その他に別に細い話もしなかつた。生れてから百五十日位經つた男の兒は、若い母親の膝の上で、にこにこ笑つたり何かしてゐた。若い母親は、時々胸をひろげて、大きな張つた乳房を含ませた。

娘でゐた頃の快活な頰の色は見られなかつたが、それでも表情に富んだ眼はいつものやうに元氣に輝

いてゐた。
『また、今度、ゆつくり話しに入らつしやい！ひまの時に――』
作者はかう言つて別れた。

ある日のこと、作者はいつもの出勤時間より二時間ほどおくれて停留場へ行つて電車に乘つた。もう歲の暮に近く、市中は何となく忙しさうにそはそはしてゐた。停留場の下の處には、門松、注連、橙などを並べて、印絆纏を着た若い男が、膀ぐら火鉢をして、相手の男と何か話してゐた。
市谷の停留場に來ると、バイオリンを抱へてフロックコオトに山高帽といふ扮裝で、スッと入つて來た男がある。一目で『ふしぎの小包』を送つて來た女の亭主だと解つた。
『オヤ、』
かう言つて、向ふから丁寧に頭を下げて、莞爾とやさしさうな笑を顏に湛えて、そして馴々しく作者の傍に腰をかけた。作者も一二度逢つて顏を知つてゐた。
『いつも今頃、お出かけですか。』
『いゝえ、今日は少し遲いんです。』
『結構ですね、しかし……』

暫く默つてゐた。

「段々、押詰りまして、お忙しう御座いませう？」

「イヤ――」

「今年はそれでも、好い鹽梅に天氣都合が好いので結構て御座いますな。押しつまつてから、雨にでも降られると慘めなもので御座いますから」

相手の顏を見ながら、男はいろいろなことを馴々しく話しかけた。アメリキャンといふ髮の刈方をして、おしろい下位つけたかと思はれるやうな綺麗な顏の皮膚をしてゐた。細い、黑い、やさしい處のある眼は絕えず敏捷に動いてゐた。

「いつも御無沙汰ばかり致させて置きまして……いづれ、近い中には、御機嫌うかゞひに上げたいと存してをりますから。」

かう男が言つた時には、電車はもう牛込に來てゐた。男は急いで立上つて、もう一度丁寧に挨拶をして、そして電車から下りて行つた。――背の高い、横顏の色の白い、それでゐて男らしいフロック姿は、猶暫らくの間、丸髷の意氣な細君や庇髮の女學生や紳士や驛夫の間にチラチラと見えてゐた。電車はすぐ動き出した。

犬

島崎藤村

此節私はよく行く小さな洋食屋がある。あそこの鯛ちり、こゝの蜆汁、といふ風によく漁つて歩いた私は大きな飲食店などにも飽き果てゝ、その薄汚い町中の洋食屋に我儘の言へる隠れ家を見つけて置いた。青く塗つた窓際には夏からあるレエスの色の褪めたのが掛つて居る。十二月らしい光線は溝板の外の方から射し入つて、汚點の着いた白い布の掛つた食卓の上を照して居る。そこに私は下駄穿きのまゝ腰掛けた。

一生のさかりといふべき私の三十代は數日のうちに盡きやうとして居る。何となく靜止して居られないやうな氣がする。私は厭はしい日のみ續いた斯の一年を忘れるといふよりも、三十歳の終りのしかも誕生にあたる日に、用事あり

げな人達が窓の外を往つたり來たりする寒い年の暮の空氣の中で、獨り半生の悔恨に耽らうとした。私は今日まで逢ひ過ぎるほど逢つたいろ〳〵な男や女の顏を見るにも堪えない。さうかと言つて、斯の洋食屋から半町とない大川の水が鐵橋の下にある石の柱の方へ渦卷き流れて行くその岸の引き入れられるやうな眺めを見るにも堪えない。眼前にあるソースや辛の入物だの、ごちや〳〵置べた洋酒の瓶だの、壁紙で貼りつめた壁だの、その壁にかゝる粗末な額、ビイルの廣告なぞは、反つて私の身を置く場所に適しかつた。

私は人並に賢い人間のつもりで居た。けれども今といふ今になつて、つく〴〵自分の愚劣なことを知つた。私には何卒して一生のうちに自傳を書いて見たいといふ心があつた。恐らく斯の心は私ばかりではあるまいと思ふ。丁度私のやうにして半生を費して來たものは、自傳の到るところに得々として女の名を書きつけ容貌の好し惡し、氣立、年齡、觸れた肌のかず〳〵、其他愚かしいことの多ければ多いほど寧ろそれを誇りとしたてあらうと思ふ。そして、讀返して見て、斯の通り自分が愚かしい、しかしこれより愚かでないと言へる人間があるか、と問ひ返すであらうと思ふ。世にこれほど自分の愚劣を表白することはあるまい。私は今に成つて、見物の喝采の前に自分の爲したことを舞臺の上で繰返して見せる年老いた毒婦の心を讀むことが出來る。

私には人に愛せらるゝ性質があつた。人の心を引くに足るだけの容貌もあつた。自分で言ふも異なものではあるが、私はよく手入れをした髮と、隆い筋の通つた鼻と、淺黑くはあるがしかしきめの細い光

澤のある皮膚とを持つて居た。のみならず、いかにせば斯の容貌を用ふべきかといふことをも知つて居た。私には又、若々しさがあつた。力があつた。殊に私は婦人の前で自分を大きくして見せ得る不思議な力と、慇懃を失はない程度で大膽に勝手に振舞ひ得る快活さとをも持つて居た。斯うして私は何事も自分等の爲ることを考へて見たことも無いやうな、慣れて知らずに居る人達に取卷かれて、唯青春の血潮の湧き立つまゝに快樂を追ひ求めた。私は求めたものが與へらるゝばかりでなく、求めないものまでも與へらるゝのを知つて、人知れず自分の幸福を思つて見た。私は自分の精力も根氣もすべて空しく費し盡すまゝに任せた。今のやうな悔恨、悲痛が、しかも斯の年頃に自分を待つとは知らずに。そのことに私が氣がついた時は、私は自分で自分を深く咒ふより外に仕方の無いやうなものと成つた。私は今、漸く三十代を終つたばかりの人間だ。それだのに、私の身體は最早老人のやうに變つて震へて來た。

白い汚れた前垂を掛けたボーイは私の前に肉差や匙を置いて、暗い暖簾の掛つた方から牡蠣のスウプを運んで來た。私は酒はあまり遣らない方だから、すこし甘口ではあるが白葡萄酒の玻璃盃に一ぱい注いてあるのを前に置いて、それをすこしづゝ遣つたり、乳色のした牡蠣の汁を啜つたり、それから暖簾の奥の方でコックのさせる物音や脂肪のヂリ／＼煮える音を聞いたりしながら、夢のやうに過ぎ去つた年月のことを胸に浮べて見た。

ボーイが汁の皿と入れ替えてメンチ物を一皿持つて來た。私の心はずつと少年の昔に歸つて行つた。漸く物心のついた、まだ／＼無邪氣な、幼い、物に驚き易い日のことに歸つて行つた。平素めつたに思

出した例も無いやうなことが、しかも昨日あつたことゝ言ふよりも今日あつたことのやうに、生々と浮んで來た。

何事も知らずに世の中へ出て來た私を假りに生徒とすれば、その少年の生徒の前へ來て種々なことを敎へて呉れた敎師が誰だつたか、私は肉差の音をカチャ〳〵させながら皿の上の料理を味ひ〳〵其様なことを考へた。そして、その敎師が嚴格な目上の人達でなくて、つぎ〳〵に變つて行つた下婢であることを思出した。ある下婢は私の前に立つて、私が學校なぞで見たことも無いやうな本を懷から取出して見せたことも有つた。そして、これは女の持つものだといふことを私に話して聞かせて呉れた。ある下婢はまことに人の好いものでは有つたが、しかし心の浮々として女で、長く奉公する間には幾度となく失策をして、その度に詫を入れて來た。私はその女のかんざしを挿した髮の上から鼠色の頭巾を冠つた形が端の尖つた凝寳珠によく似て居たことを覺えて居る。『あれがお由の色男だ』とその女の名を言つて、家の人が私にある時計屋の職人を指して見せたことが有つた。私は初めて『色男』といふ言葉を覺えた。ある下婢はまた、奉公するものに似合はないほどの器量好して、髮なども黑く房々として居たが、時とすると私の見て居る前で主人に調戯はれて、『あれ、御新造さん、いけません』と叫ぶやうに言つたことがあつた。女は僅かの間しか奉公して居なかつたが、それと入れ替りに色の黑い、言葉に訛りのある、私の一番嫌ひであつた下婢が來た。田舍から奉公に來て居るとかで、時々亭主らしい百姓風の若い男がそつと訪ねて來た。そのことは家中の誰よりも一番よく私が知つて居た。といふは、下婢が私を前に置

いて、半分述懐するやうな調子で、種々と男のことを私に話して聞かせたから。

私は愚かしいものでだが、正直な人間ではあるつもりだ。しかし私の記憶は私以上に正直だ。いろ〳〵な大人の爲ることを見たり聞いたりしても、其頃の私は直にそれを見傚はうとはしないで、唯自分で自分に知れる程度に止めて置いた。私の知らないやうなことを一番多く私に注ぎ込んで呉れたのは、一番私の嫌ひな下婢だつた。ある晩、私は女に呼び起されて、默つて寢た振をしながら獨りで可恐しく震へて居たことも有つた。女は間もなく暇を取つて男と一緒に國の方へ歸つて行つた。

その後へ頰の紅い、まる〳〵と肥つた、辛棒強く働く下婢が雇はれて來た。誰にでも好かれて、少年の私も一番よく馴染んだことを覺えて居る。斯の下婢は私のところへ來て、すこし皺枯れたやうな、女らしい聲で、みだらな流行唄をよく私に唄つて聞かせた。どうかすると女自身ですら自分の聲に聞き恍れるほど巧みに唄つた。私も耳を傾けて、知らない世界の方へ連れられて行くやうな氣がした。

ボーイが別の皿を運んで來た。丁度そこへ表口の溝板の方から犬が二匹ばかり電話口の前を廻つて私の腰掛けて居る側へ來た。皿の上のものを欲しさうな顏付をして、側に附いて居られるのもうるさく、すこし追つて見た位で屋外へ出て行く様子も無い。私は犬の方へ關はずにナイフを取上げた。二匹とも の白いやつて、客のない食卓の下の方を嗅ぎ尋ねるやうに歩き廻つて、復た私の物を食ふ側へ來た。

「まさか、犬から物を習つた覺えは無いよ。」

と私はそこに誰か話相手でもあるやうに、自分で自分に獨語を言つて見た。私が「まさか」と言つて見た

のは、あの下婢ばかりでなくて、犬もまた自分の教師であつたことを心の底に否むことが出來なかつたからで。

頭から目の上あたりまで白い毛の長く垂下さかつた狆のすがたがはつきり胸に浮んで來た。屋の内で飼はれて居た獸は、ある時は少年時代の友達のやうに、ある時は極く無氣味なもの丶やうに、私の眼前をよく往つたり來たりした。私は今でもあの小柄な、性質の賢い狆が、頭の毛を振つたり尻毛を振つたりしながら疊の上を歩き廻つたその足音を聞くことが出來るやうな氣がする。

『斯の犬には人間の言葉が解る。』

と言つて家のものは笑つたことすらある。それほどよく人に慣れて居た。あの首をすこし傾げて私達の前にかしこまつた樣子は、人の表情を讀むことを知つて居るとしか思はれなかつた。私はあの長い房々とした毛のかげにある怜悧さうな眼からよく涙の流れたことを覺えて居る。それから毛が汚れて穢くなつたと言つて、嫌がるやつを無理に盥に入れて、石鹼をつけてごし／＼洗つて遣ると、鼻をクン／＼言はせながら鳴き騷いだことを覺えて居る。濡れた時はずつと小さく見えた。その時ばかりは眼もあらはれた。毛の乾くのを待つて居られないといふ風に、家中馳けずり廻つて、小さな體を到るところに擦りつけて、ごろ／＼部屋の内を轉がつて歩いた。どうかすると、その濡れた毛を人の前でブル／＼させて、無遠慮な雫を飛ばしてよこした。表の方に人でもあると、それが客であるか、家のものであるかは足音で聞き知つて居て、眞先に飛出して行くのもあの狆だつた。

呼ぶと、嬉しさうな聲で鳴いて、よく私の方へ來た。狆は私の手に抱かれながら、鼻と言はず、口と言はず、長い舌で私の顔中ペロ／＼舐め廻さなければ承知しなかつた。それが私に對する親愛の表情だつた。私はそれには閉口して、いつでも顔だけ除けては膝の上に乘せた。

斯の狆の種を得たいと言いて、同じやうな美しい毛並の牝を引連れて來る人もあつた。時とすると狆は人の習慣を無視する動物の本性に反つて、殆んど本能的に私のまわりを狂つて歩いた。私が人であるか犬であるかの見さかへすらも忘れて了つたかのやうに。

「お後は何にいたしませう。何かサッパリとしたものでも。」

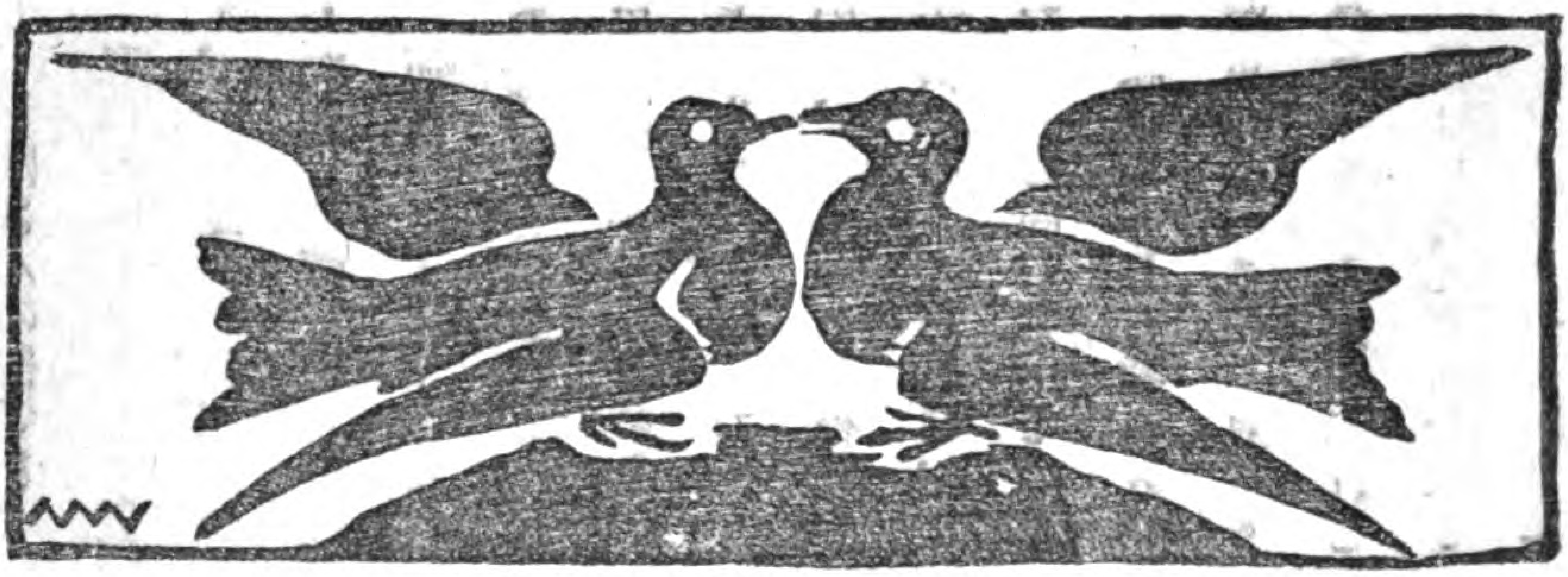
とボーイは私の傍へ來て手をもみながら言つた。

急に日が濃く窓から射して來た。何となく部屋の板敷の日蔭に成つたところは寒く感ぜられた。私は耳が鳴つたり腰が痛んだりする自分に返つて、それが身に附き纏ふ持病のやうに離れないことを思つて見た時は、一種の惡寒を覺えた。洋食の出前持は堅い靴の音をさせながら溝板のところを出たり入つたりして居た。私は食卓の布の上に爪の延びた手を置いて、あの前垂掛で雑巾を手にしたやうな無智な下婢達と犬とから、斯うした自分を先づ教育されたことを考へて、思はず微笑まずには居られなかつた。

ボーイは熱くした紅茶をこぼさないやうにと用心しながら私の前へ持ち運んで來た。うるさい二匹の犬は私がそれを飲み終るまでも側に附いて眺めて居た。

別れる日

鈴木三重吉



一

あの時私は午後一人でそく／＼と、すつくりの物を行李に入れて、綱さへかければいゝやうにして、押入の下へ片づけた。

もういよ／＼これでこゝを出て行くといふのも、一つには自分が最早いつまでもかういふ村にこんなにしてゐるのにも飽きたからであるといふ事が、何だかあれまでにしてくれてゐたをばさんやおちいさんに對して、得手勝手なやうな氣がして、こんなに荷物を纏めたりするのも、竊かに隱れ／＼にする事のやうにそわ／＼された。

ちいさんは私がさつきからやはりあそこの炬燵でうたゝ寝をしてゐる積り

て、をばさんの留守を、一人表の間で仕事をしてゐるやうである。

私は行李をさうして置いたあとに、まだ掃きだしたりするものがそこらに束ねてあるのをその儘にして、一寸足先をあぶるつもりで次の間の炬燵へ行つたのをそれなりに、またそこへ居坐つたまゝ、いつしか矢倉に顔を押しつけて、一人とりとめもない事ばかりを茫んやりと考へ入つてゐた。

何だかいよ／＼となれば、まだもつと此家にかうしてゐたいやうな氣もして、出て行くのが惜しくもある。さき程つれ／＼に裏の畠へ出て行つて、午後の日向のもく／＼と張つた石がけの下で、下女が田鼠の罠をかけてるのを、しまいまで手傳つてゐたりした、いつものやうな何んでもない事でも、明日からはもう取り返したくも返らぬ或物のやうに戀いられるだらうといふ氣がする。こゝへ來て母といふものと、ホームとを得たやうに、何の不足もなく、何をも考へないで、いつも、乳をでも吸い入つてゐる子供のやうな心持に、十月ばかりといふものを、同じもく／＼しい日向の一とつゞきのやうに送つて來た、その間のすべての記憶が、やがては、黒い毎日の間に戀い返られるに極つてゐる。

私はさうして考へ入つてゐる目の前に、をばさんの着換へて行つた不斷の帶や、ちいさんの赤い小帶が束ねてあるのを見ても、それが何とはなく、私がこゝを出たあとの悔を暗示する、黒と赤との、物の色のやうに心が引かれるのであつた。

私はいろんな事を取りとめもなく考へた。

と、もういつしか日足が陰んだのか、どんよりした、冷たい色になつた障子の外から、下女のおとし

が私を呼んでゐる。
「何かい？」と鈍く聞くと、
「飼をこゝへ出して置きましたい。」といふ。
「もうすつくりかへつたい？」
「えゝ、ちやんとして巣の下に集つてゐやんさ。」と言つてあちらへ行く。
私は立つて障子の外の土間へ下りた。もうそこの倉の屋根だけに弱い日ざしが僅かに黄ばんでゐるだけて、土の上は蔭ばんでゐる。低い竿にかけ干した黒米の束の影も、もう土の上は亡くなつてどんよりとしてゐる。
おとしが出して置いた粉米の入つた入れものを手にして裏へ出て行くと、外を飛び飽きてかへつて來た鳩の群は、倉の後ろに庇をした物置の坂屋根の上に白く集つて飼を待つてゐる。壁にたてかけた梯子の中程にも二三羽下りて、背中の毛並を揃へたりしてゐる。その下に、おとしがさつき掘つてゐた馬鈴薯が固めてあるのへ、拔け毛が一つ落ちてゐる。
それ等の鳩は私の姿を見ると同時に、ばさ〳〵と一度に私の足もとへ下りて來る。或ものはつと、私の手に持つてゐる入れものに棲つて、もう嘴を突つ込みかける。
「まあ待てよ。氣の早い奴。」
私は心にかう言つて土の上に飼を撒いた。

いつもかうして朝と夕方とにこゝへ來て此茶色の交じつた白い生き物の群に飼をくれてやるのが、私の一つの課業になつてゐたのである。彼等は、もう疾くから私に馴れて、來いといへば私の手に來て棲りてもする。すべてゞ十一羽ゐるのである。

私はそれがせぎ〳〵に入り亂れて小米を食べてゐる中から、頸へ赤い糸を卷かれてゐる一匹を捉へて膝に上げた。

これは今年孵つた子鳩の中でのたゞ一羽の女鳩であるが、此間、みんなが立つて出たあとの屋根裏の巣にたつた一匹仄暗くこゞまつて、肩で息をしてゐるのを私がふと見出して、梯子をかけて取り出して見ると、腹のところに血が附いてゐるので、よく見てやると、足の距に傷我をして赤身を出してゐた。下へ下ろして歩かせると痛さうに跛を引く、どこかで小兒に石でも投げられたのではないだらうかと、をばさんたちも出て來て日向に集つてさういつた。私はすぐに傷口を水で洗つてやつて、それから薬を叩いてふは〳〵に敷いた笊の中へ入れて、家の中へつれて來た。さうして表の間の、みんなが手仕事をする障子の外の日向に置いて水や飼やをくれて面倒を見てやつた。

二日の間女鳩はその笊の中にじつとしてゐた。夜は内に入れて、風呂敷をかぶせて、光りの及ばない棚の上に寢かせた。すると三日目の朝外の日向に出すと、ついと立つて土の上に下りて、しばらくきよと〳〵してゐたが、その内にばた〳〵と裏口の方へ立つてつて了つた。すぐ裏の巣のところへ行つて見たが、女鳩は仲間を求めて外へ飛んで行つたのだと見えて、その儘午後になつてもかへらなかつた。

「もう何の事もないのでしやうぞのい。まあ平氣な子供と同じ事ですわのい。」とちいさんは笑つて旅を物置きへ入れた。すると夕方になつて、だれも忘れてゐたさつきの障子の外に、いつの間にかかへつて、ひとり悄んぼりとたそがれに踞つてゐるのを、下女がつらまへて私を呼んだ。その晩私はちいさんと二人でいたづらに赤糸で頸飾りをつけてやつたのが、その次の日から、もうこちらへは來なくなつた後(のち)には、私が傷の經過を見てやるために捉へるのに、丁度よい目印になつてゐるのである。

もう、傷口だけはすつくりよくなつて、黑い色にかち〱になつてゐるけれど、下ろしてやつて歩くのを見るとまだ少し足附が變なやうである。せか〱とみんなの中をくゞり歩いて餌を食ふにも氣のせいか何だかその一匹だけは後ろ姿に力がないやうで小さびしい氣持がされる。頸の糸は此間の雨の日に色が流れたのだと見えて、そこのところの毛が薄つすら滲んで色づいてゐる。

私は此等の鳩を見るのも、もう今日きりだと思つた。あすはお前たちが、まだ小暗く巣に籠つてぼう〱と蔭のやうに啼いてゐる内に、馬子が私を乘せに來る。赤いものゝついた鬣の長い、鈴の下つたあの馬に乘つて、たゞ一本の電線の引かれた淋しい海べの村々を私は一人とぼ〱と引行かれるのだ。

私はかう思ひつゝ見守つてゐるのだけれど、鳩はたゞ何の氣もなげに、いつものやうに食べつくすと、まだほしさうに私のぐるりに集つてじつと待つてゐる。赤い糸をつけた女鳩も、中に交じつてけろんとしてゐる。私が入れものを取つて巣の下に行けば、ぞろ〱とついて來る。丸い穴の並んで開いてゐる巣の口には、私が此間から夜々おとしに手つだはせて柔らかい上皮ばかりにたゝいた藁を、やがて黑い

寒い日が來る用意に入れてやつたのが、ふわ〳〵と見えてゐる。その巣にかゝつた生毛も見える。

「もう巣へ入れよ。」

私が手を動かして促すと、鳩はぱた〳〵と板屋根にかけ上つた。二三羽また梯子の段に棲るのもある。一匹下にのこつて、裸になつた無花果の木のところにかけはなれて、背中を突つついてゐるのがある。例の女鳩は屋根の上で、女らしい赤い飾りを見せてゐる。

私はその出口へ行つて、もう日足のない外を見た。

おとしがたつた一人でまだ仕事をしてゐる。

笊をかゝへて、少しばかり作つた葱の根へ籾殻を入れてゐる。出口に立つてゐる裸になつた栗の木の叉に、剝げた小さい鏡と、たゞ黒くなつた櫛とがのつけてある。おとしはこんなところに立つて髪をすいたりするのである。かういふ女たちはいつもくるりと束ねたまゝの頭を棄てくゝつて後ろへ下げてゐる。

私はそこへ出て、いろ〳〵少しづゝ作つてあるものを見納めに見て歩いた。私が自分で種を買つて來てまいたふだん草は葉の間から針のやうな青い芽を出してゐる。

私はこゝに植えられてゐるものについておとしに口をきゝながら、石がけのところに佇んで向ふの丘や、下の麥の畠を見た。

黑い土の上に麥は低い青い筋目になつて、夕方の色となつてゐる。段々になつた丘の畠にはところど

ころにごみを燒く烟が廣がつてゐる。私がよく行つて子供のやうに鳥の巣を探して歩いたりした丘の上の櫟の林は、もう、赤枯れた葉もいよ〳〵疎らになつて、箒の筋のやうになつた枝の間から、どんよりした灰色の空が見すかされる。右手の方に固まつた低い藁屋根の色もすつくり冬ざれてゐる。すべてが剝げたやうな淋しい灰色になつて見える。

「まだおかみさんはお歸りなされんのでがいすかのい？」と、籾殼を入れて了つたおとしは私の側へ來て、私の見てゐる方を見入つて小休みをしつゝ私が所在ながつてゐるやうに聞くのである。

「あそこの山際のあたりのものが二三人、さつきとぼ〳〵この前を歸つて行きましたけ、もう濟んだんでがいしやうがのい。

「女等かい？」

「えゝ、みんなこゝへ十字架をかけて。――あなたも附いて行つて來なせばよかつた。」

「でも馬が一匹もゐなかつたら歩くのが厭だもんだから。」

かう言つて私は下のがけに沿うて向うの山合へうね〳〵と上つて行く淋しい往來を見入つた。あそこの山の先きの村の女が死んだので、町の禮拜堂で祈りの集りがあつたのである。

をばさんはキリスト教の教徒ではないけれど、その死んだ女と心安くしてゐたので、女のために詣つてやつたのである。貧しい家のものであつたが素直ないゝ人間だつたさうである。もとは此村のをばさんの田地を耕してゐた小作人の娘であそこの村へ嫁入りしたのだが、二十六とかの年から、昨日亡くな

るまで十年ばかりの間リウマチて足が立たないて、汚ない一間に麻糸をつないて生きてゐた。その間に女はいつしか熱心なキリスト信徒になつて、平和な心て、與へられた宿命に安んじてゐた。

私はをばさんから昨日の此女の葬式の話を聞いた。夕方に町から長老の老人が來て、冷やかに眠つてゐた女の枕元に座つて目を閉ぢてゐた。そこには一本の蠟燭が黄色く瞬いてゐて、黒い着物を着た五六人の敎徒が膝に手を置いて同じやうに默して目を閉つてうつ伏してゐた。女の顏には白い布がかけてあつた。

をばさんはさういふところへ行つて、人々の後ろに坐つた。小屋の外には子供や女だちがぞろぞろと立つて、だまつて覗き込んでゐる。死人を取卷いてゐる黑い着物を着た人々はしばらくさうしたまゝ動かない。彼等はその間、自分自分の知つてゐるだけのキリストの敎への言葉を人に話して聞かすやうに、心に考へ廻るのださうてある。いづれも膝の上に聖經を持つてゐるけれど、長老の外には字の讀める程若い年輩のものはゐなかつた。

「わしらがして貰ひたい通りの事を、わしわし等も人にしてやらねばならぬ間ちがひてある。」

彼等はかういふ風に經文の意味を自分自身の言葉て記臆へて守つてゐるのださうてある。一人の目の赤くたゞれた婆さんが、さうしてゐる間を、頻りに涙を拭きつゝおろおろと泣いてゐた。それは此の女の母てあつた。外て時々一人の女が、背中の赤ん坊が啼くのを、だましだまし搖つた。その二つの泣き聲の外にはだれ一人私語くものもない。壁の黑ずんだその一間には、何ともいへ難い物哀れな、さうして尊

いやうな心持が溢つてゐた。をばさんも自然と目を閉つて手を合してゐた。

やがて長老は、

「これで此子は安らかに神さまの側へ行きましたぞ。」といひつゝ涙を拭いた。みんなは顔を上げて目を拭いた。いづれも銀色の小さい十字架を紐で頸にかけてゐる。と長老は、女の顔の白い布を取つて、別れのために來てくれたをばさんに、冷やかな寢顔を見せた。人々も差し覗いた。

人々は間もなく粗末な白木の寢棺を抱へて來て女を納めた。それを綱で紮げて捧が通された。

「だれか擔いで下さらうか。」と一人の四十ばかりの教徒が外に立つた人々の間に求めると、

「わし等でもよいけれや。」と畠から來たばかりの二人の若ものと、一人の頭を藁で束ねた女が近づいた。

棺の前には此あたりの子供が二人、一人は跣足で蠟燭を持つてそろり／＼行く。女も一人交じつて四人のものが棺を擔いでそのあとに續く。後ろには金色の十字架を手にした長老をはじめて四五人の教徒がつゞく。かうして淋しい行列は丘をさして行つた。丘の草原には女の伴合が一人で土を堀つて、すぐに棺を納められるやうにしてゐた。

をばさんは、それだけを私に話した。私はいつかも教徒の一人が死んだときに、禮拜堂へ行つて見たことがあるから、その方の祈りの光景はよく目に浮べ得られる。

彼等の禮拜堂はこれから海邊に沿うて二里ばかりはなれた漁村の町にある。低い藁屋根の家々の續い

た一筋町の中程に、黒い垣のある、板屋根の灰色に寂びた質素な平屋建ての建物て、もしその屋根の上に金色の十字架の附いた小さい尖塔がなかつたら、たゞ並の漁師たちの家と少しも變らない。この建物の外觀だけても、此處のキリスト教といふものが、人々の間に少しも異樣な宗門と見られてゐないのを示してゐる。彼等の信仰の容子は、全く外來の宗教といふ形を少しも帶びてはゐない。十字架をつけてゐない、無宗教の年寄りたちも子供等も、說教のある日には教徒と同じやうに集つて、神壇に向つて手を合せてゐるのださうてある。

建物の入口の障子を開けると、そこが疊二十枚ばかりの一間になつてゐて、正面の壁に黑い布をかけて、マリヤの畫像の、赤い着物を着たのが、白木の臺の上に點つた黃色い蠟燭の火影に照らされて、浮き出たやうにかゝつてゐた。私が行つたのは五月の月てあつたが、その灯りの側には黑い壺に、そこらの草原に咲く白い野薔の花が上げてある。臺の右手に疊半枚ばかりの高坐が三尺ばかりの高さに設けてあつて、長老がそこへ坐つて、說教をするのてあつた。その長老なる人は、も早七十の上を出たフランス人て、二十代の時に一人て支那の方から來て、それからずつと此處の村人になつて說教をしてゐるのださうてあつた。村に小學校なぞの出來てゐない前には、子供たちはこゝへ來ていろはや算盤や日本の歷史の話を敎はつてゐたものだといふ。生れて以來、何一つ罪と悔との影を見た事のないやうな、氣高い溫和な人である。此年までいつも、たゞ水と生の靑菜と麵と麥粉とだけによつて生きてゐるのださうてあつた。寢るのにもたゞ一枚の蒲團にくるまつて、いつも裏手の小さい板の間に寢てるのだといふ、

冬でも火鉢といふものを用いないで、寒いと日向に出てゐるさうである。教徒がいづれも紺の木綿の着物を着てゐるのも此人が驕をしないといふ心の印に極めたのださうで、彼等は何物を飾るよりも輝ける飾りは胸にかけた小さい銀色の十字架であると思つてゐる。

此の長老に率ゐられて、此あたりの村々に七八十人の信徒がばら〳〵に住まつてゐる。信徒が死ぬると、それ等の人々は五里も六里もあるところからでもこゝに集つて祈りをする。彼等の間にはこれまで何十年の間、たゞの一人とて、人から非難を受けるやうな行をしたものはないさうで、私が見ても十字架を胸にかけたものは、他の人々から、罪のない清い人間として敬はれてゐるやうであつた。

長老はみんなからおしさまと呼ばれてゐる。和尚さまといふ意味である。よく一人で杖を突いて、草履をはいて、とぼ〳〵と此邊の道筋を行くのを見受けられた。病人があると聞くと、どこへでもはるばる慰めに出かけるのだと聞いた。

いつか此下の石垣の根で、小供が指に刺を立てゝゐたのを拔いてやつてゐた事があつて、丁度私が畠から歸りかけてお辭儀をすると、

「あなたには初めてお目にかゝるやうに思いますが、どこにお出でになりますのか。」とつくづくと私の顔を見て、

「さうですか、よいお方ですから何よりお仕合せです。」と言つた。

「亡くなられたこの家の御主人も情ぶかいお醫者さまでした。あなたはこゝのおちいさんのお婿さまに

來なしたのか。」

「いゝえ、たゞ旅のものてす。」

「ふん〳〵。だが、ちとお體がお弱さうぢやのい、何よりのんきにして運動をなさいよのい。」と祖父いやうに私の手を取つて搖ぶつた。

私は麥畠が段々と蔭ばむのを見入りながらいつしかこのやうな事を思ひ返してゐた。おとしはどこかへ行つてあたりにゐない。いつの間にか、今日掘つた馬鈴薯の莖を乾かしたのへ火がつけられてぼろ〳〵と燃えてゐる。栗の木の叉には鋸や櫛がまだその儘になつてゐる。私は再び家へ這入つた。

「あなたは此家の婿に來た人か。」

長老がさう言つたやうに、私はもし私さへ承知すれば、をばさんは喜んでちいさんを私にくれるのは目に見えてゐる。おちいさんだつてあんなに私をよく了解してゐる。私はまだこれから學校を出なければならないのだから、そんな事はまだ〳〵後の事だけれど、もし私が一人女を選ばなければならなくなつた日には、あのちいさんが誰よりも私の心に上りはしないだらうか。その時にはちいさんは最早人のものになつてゐて、どうする事も出來ないてあらうと思ふ。

私は鳩のみんな入つて了つた巣を見上げつゝ、何て一人こんな事を考へるのであらう。私は譯もなく物さびしい心持になつた。何だか私になくてはならない或物を失ひつゝあるやうな、後の悔を暗示され

るやうな心持がする、もつとこゝにゐやうか。學校へ歸つてごつ〳〵やつたところで面倒くさいばかりて何んにもならないやうな氣持もする。またからだを壞して了ひはせぬかとも案じられる。

私はこんな不安な、物悲しい心持になつて上へ上つた。何がかうして薄ら悲しい私を見せるのだらう?

二

私は落ちつく處もないやうに、おちいさんの表の間へ行つて見た。そこの、椽側のある六疊はおちいさんが好いてゐる一と間である。もとは診察室だつた處ださうだけれど、今ては、壁の柱に、竹へ青い字で聯句を刻んだのが一枚かゝつてゐる外に何一つ置いてはない。ちいさんはそこに縫物の疊紙を披げたまゝ、どんよりした夕方の障子を見つめて、一人で悄んぼりしたやうにして坐つてゐる。

「どうかしたの。」と私は唐紙を開けて、その小寂しさうな後ろ姿を見つゝさういふと、振り返つて、

「お入りなさいませ。」といひつゝ、氣がついたやうに、二筋三筋ほつれて襟元にかゝる髮をかき上げながら、

「どこへ行つてゐなしたのですの。」と私を見上げる。

私はそのまゝそこの小さい火鉢の處へ行つてこゞまつた。

「まあ、うつかりしてゐて火がぼつちりしかなくなりましたぞのい。待つてゝ下さい。あちらから炭を取つて來ますけ。」

「もういゝ、そんなに冷たくもないから。」といへど、

「でも――。」と立つて行つた。

私は間もなく炭取を持つて來て炭を繼ぐちいさんの、睫の長い目もとを、それとはなく仄暗く目つめながら、何か言ひたい事があるやうにもぢ〱された。何を言はうといふのかは自分にも解らないけれど、何かあすはもう別れて出る此夕方に似合はしいやうな何事かゞ私語きたい。

「ねー、今一人で何を考へてゐたの?」と私は取つてつけたやうにかう言つた。

「私?何んにも考へてゐやしませんなんだのに。少し頭が痛かつたもんですけ。」と火を吹いてゐたが、

「私が熾さう。」といふと、

「ぢやたんとおこして下さいませや。」と私に任せて、こそ〱と、しかけてゐた縫物を片附ける。炭を積みかへてゐる私は、ちいさんが使ひさした糸巻に糸を卷いたりするのを耳にしつゝ、何だか、ちいさんの容子が、私の別れて行く事とはかけはなれた、別の事を思ひづゝけてゐた後のやうに思はれて物足りない。私は私の好いてゐる女が、自分の前に見せる自己の外に、まだ自分とは別々の或サイドを持つてゐるといふ事を考へさせられるのは物寂しい。それでは自分を了解してゐてくれるのぢやない。何だか私の心の通じない冷たい女のやうにもどかしい。

ちいさんはそこらの物を片寄せて、膝頭なぞに喰つ附いた糸屑を拾つて前齒にかみながら、いつもの此女のやうにもなく、何か氣になるやうにしてこそ〱と上り口の方へ出て行つた。私はわざと默つて

ゐた。

「考へて見れば此女が私には何てあらう。私が此女に取つて何てあらう。私は此女を好いてゐるけれど、まだ戀してはゐない。此やうなのはまだ戀とはいはれない。自分は何んにも此女に言はないてゐて、何が此女から得られやう。自分がこんなに此女の冷たい素振りを不滿にするのは、たゞ自分がさもしいからだ。自分が物欲しいからだ。」

かう言つたやうな、薄らかな自嘲の心持が蔭のやうに私の胸を蔽いかける。

「ちいさん――もうすぐ暗くなるのにどうしてお母さんはいつまでも歸られないだらうね。あんまり遲いね。」

私は、自分のさうした心持がちいさんに見透かされてもするのを隱さうとするやうに、さつきからをばさんの事を考へてゐた續きのやうにかう言つて、火の燻りかけた火鉢の灰を掻き均した。

「でも、さう言つてる内に歸つて來ましやうけれど。」と向ふの方でさう言つたちいさんはやがてまたこちらへ來て、

「どこかへ寄つてるのでしやうぞのい。」といひつゝ、火鉢へ來て手をかざした。

私はそれぎりて少らく言葉を繼がないて、所在なげに疊の上に斜ひに目を落してゐた。

「のい？」

「え？」

「なぜそんなに氣に入らぬやうな顏をしておゐなすの？」
「私？」
「えゝ」
「ちいさんこそ何だかそは〳〵してゐるやうぢやないの？」
「だつても私はあなたが荷物をちやんと片附けてゐなすのを見たら、變に寂しくなりましたけ。——さつき、あなたを探してあそこの部屋へ行つて見たら、物が散らかつてゐましたけ、それを片づけて、何の氣もなく押入れを開けたら、そこのものがすつくり行李に入れて了つてあるのでしやうがのい。」
「——」
「どうしても明日お立ちなすお積りのい？」、
「だつてもう馬方にもさう言つて置いたんだから。」
「私はお冗談だとばかり思つてゐましたのに。」かう言つてちいさんは目を落したまゝ、火箸の頭を持つて灰に字をかくやうな形をする。
「私だつて本當はまだ歸りたくはないのだけれどね。」
「それぢやもうちつとおゐなせや。」
「しかし最ういつまでもかうしてはゐられないから——その内また來年の夏休みに來ますよ。」
「さうお言ひなしても、歸つてお了ひなしたら、もう二度とこんな邊鄙なところへお出なす事は出來ま

せんわ。——」

「どうして？」

「私はもうこれでいつまでもお目にかゝれないものと思つてゐますのい。」

「だつてまた來ればいゝもの。——私には自分の家（うち）といふものはないし、立つて出たあとは直ぐにまたこゝが戀しくなるのは極つてゐる。——隨分こゝでは我儘をさせてもらひましたね。私はたつた一人て寂しい知らないところに行つてゐたいつもりで、かうしたはる〴〵しいところに來たのだけれど、をばさんとあなたとがゐたものだから、一寸も寂しいといふ事を思はないて、いつまでもこゝから得出なかつたんてした。」

「本當に何んにもないところによくこんなにしてゐられなした事てすぞない。かういふ母や私のやうなものにどうしてこんなに打解けなしたんてしやう？」

「はじめは一寸も知らない他人だつたのだけれどね。——あてどもなくこゝへ彷徨うて來て、此家へ一晩の宿の御無心を言つたのがはじまりだつたのだものね。」

「あの時はまだ二月て、毎日海が眞つ白に荒れてゐましたぞのい。——さういふ海のごう〴〵鳴つてゐる夕方に、私がそこの表戸の障子の穴を塞いてゐたら、あなたが門の外て馬から下りなして、そこのところまで這入つて來なして、ためらひながら立つてゐなした。」

「考へると十月の間にいろんな事があつたな。——このちいさんの好きな一と間の前を、芥子の花で眞

つ赤にするんだと言つて、そこのところを掘り返して種を蒔いて花を咲かせたりしたし……」

「五六匹の鳩の子を二人で箱に入れて大きくしたりのい。」

私はいつしか子供のやうに少らくこんな事を話し合つた。

「まあ冷たい手をしてるね、ちいさんは。」

「さうですか。——あなたのお手はお奇麗なお手です事のい。私はどうしてこんなに手が冷たいのでしやうぞ。」

私はそんな事よりももつと心の中にそわ〱してゐる何事かを言ひ現はしたいやうな氣になつてもじ〱される。私は少らく、その儘うつ向いて白い前垂の端を弄つて默してゐる女の、後ろに束ねた黒いふさ〱しい髮を結んでゐる、赤い縮緬の片を見守つてゐた。

「ね、お母さんが歸られて當るのにあれだから、炬燵の火をちやんとしてお置きよ。——さつきからあれきりになつてゐるのでしやう?」

「午前に炭をついだきりでしたかいのい?」

私は何だかいつまでもかうして二人で坐つてゐるのが氣咎めるやうな心持がして、ちいさんをあちらへ立たせやうとてもする自分のやうにかう言つた。

「もう母も歸るでしやうぞのい。今夜は遲くまで起きてゐて色んなお話しをしましやうぞ。まあ。そろ〱暗くなりかけましたぞのい。」

かう言つてちいさんは立つて、そこの障子を開けて一寸外の方を見た。

「來てお見なせ。もう、小さい三日月さまが出てゐますけ。——倉の方の空は曇つてゐるやうでしたのに、海の方の雲は青い事。」と一人ごとのやうにいふ。私も立つてそこに覗いた。

「どこに月があるの？」

「そちらをお覽なせ。その椋の木の上の方に。」

「爪を切つたやうな細い月だ。」

私は並んで立つたちいさんの、肩にかゝる髮の匂いを求めるやうに近づきつゝ、目を上げて、今宵の門の内に淡くさすべき月を見た。

すると、

「おさいさま。〳〵。」と裏手の方でおとしが呼ぶ。

「あい。」と答へてちいさんは向ふへ行く。

やがて私は暮れて行く海をても見やうと思つて、上り口の間から下駄の上に下りて、戸口のくゞり戸を開けて門内へ出た。

すぐ外の土の上には、おとしがたつた今掃いて行つたばかりのやうに、箒の目がついてゐるのに、またそのあとに門の脇の椋の木の枯葉が、ばら〳〵と落ちてゐる。此家の古い以前の事を何んでも知つてゐるやうに、大きく高く枝を張つた三抱も四抱へもある程のその大木は、下の町から見ても、此小高

い高みの飾りてあつた。强烈な日影のぎら／＼した、黄色い暑い日にも、此木の下は小暗い涼しい陰になつてゐたものである。私はよく、けたるい日盛り時のからだを此木の下に運んで、そこの物置きから出して來た蓆の上に寢そべつてここの家のお祖父さんの遺書の中の萬葉集代匠記を、一人うつら／＼した心に讀み耽つた。そこへ、どこかへ出て來た歸りに、そのあたりの家で貰つたのだとて、早い、桔梗の花を二三本もつて私の蓆ろへ來たちいさんが、日傘をそこに置いたまゝ、家へはいつて硝子の壜に水を入れて持つて來て、その花を活けて蓆のはしの土の上に置いてくれた事もあつた。私は、古い代の戀の歌を我がために歌はれた情緒のやうに讀み返しつゝ、いつしかそこに午寢をして、目がさめれば、もう土の上に自分の影と重なつてとまつた蜻蛉の羽根に赤ばんだ日影も、そろ／＼夕方にならうとしてゐる。壜の桔梗は水を上げないでぐつたりと萎れてゐる。裏の方の物陰の木立にはきり／＼／＼と蜩が鳴いた。

それも、いつしかすべてが移り變つて、大木の屑も此やうにうす寒く冬ざれて了つた。

私はさうした若い日の事を思ひ返したりしつゝ、戸口に立つて、その木の高い梢を仰いだ。

すると、その頂上に鳥が一匹とまつてゐる。どんよりした陰りの中にひとり置き忘られたやうに悄んぼりと止つて、嘴を枝にこすつてゐる。私はしばらくその鳥の黒い影を見つめてゐた。

何だか萬葉の冬の歌が思はれる。いろ／＼の戀の別れの文句が思ひ浮べられる。

「きみならば、など身裝はん櫛函なる、黄楊の小櫛も揷さんと思はす。」といふ私の最もすきな歌の一つ

を、私は此あたりの女が織つた、色の黒い素朴な厚い木綿に書いて、その上をちいさんに赤い糸てかゞらせて拵へた机かけは、さつき疊んで行李に納めたけれど、あれはいつまでも、こゝにゐた頃の眞夏を忍ぶ種となるてあらう。ちいさんはあそこの物置の蔭なぞへ來て立つたりして、ぽつり〳〵それを糸て刺した。そこには種に取る小豆が箕に入れて石の上に出し〳〵してあつた。

私はいろ〳〵の事を思ひ返しつゝ物置の方へ行つた。と、烏が「かあ」と大きく啼いた。仰げば、間もなくばた〳〵と羽ばたいて山の方へ向けて飛んで行く。どこの林の塒にかへる夕烏てあらう。

物置には、天井裏に昔の網代の早駕や、黒塗の長い棒のついた、金具のはまつた大きな駕なぞがつり下げてあるのてある。この物置はいつも錆びた錠前が下りてゐて、駕の形なぞは私がたゞ一度見た記憶の中から取り出すばかりてある。

私はそこの後ろへ行つて、ぼろ〳〵に崩れかけた、赤土の土塀の際に立つて、小暗く暮れて行く海の面を見た。

下に續いてゐる漁師町の、古い藁屋根の間から、もう小早に、ちら〳〵と赤くついてゐる灯影が見える。いつも網を干してゐる直ぐ近くの廣場の片隅には、水を汲みに集つた女たちが、大きな、四角な石の井戸を圍んて、三つ四つ括り附けてある繩釣瓶て代り〳〵水を引き上げてゐる。いづれも小帶一つの黒ずんだ着物の肩に、藁て束ねた髮を被つてゐる、汲んだ女は水桶を頭にかづけて思ひ〳〵の方角へ歸つて行く。網が堆く砂地の上に積み上げてある。

その屋根のつゞきの上に、淋しい濱の漁船の柱が疎らに固つてゐる。浪のひた〳〵といふ音が幽かに耳に這入る。いつも向うに淡く見える島影は、も早夕靄に隱されて、遠くの灰色の空と薄ぐろい、地のやうに澄んだ海の色とを塗り別けたやうに、一筋くつきりと線を劃した水平線が、夕方は、遙ながらに近づいて見える。海の上には一つの船の影も見えない。空は西の方の、丘の上から薄青く私の頭上のあたりまで明るみを持つてゐて、爪を切つたやうなさゝやきの三日月は、段々に柔らかい白い光りとなつて來た。

左手の向ふの小暗い崖際には、浪が寄せ返ると見えて、そこが一筋白つぽく續いてゐる。あそこの山を越えて一里ばかり行くと、例の禮拜堂のある町なのである。いつか夕方あの山の上まで歩いて行つて、あそこから、こちらの村の倉や家居を、玩具を並べたやうに見入つてゐた時、町の方から、遙かに寺の鐘が聞えて來た。それは禮拜堂の裏の丘の鐘を、あたりの信徒が行つて、靜かに暮れる夜の幸福を祈つて突くのが、風に運ばれて微かに傳はつて來るのだと後に聞いた。

をばさんは、もうあの山は越えてとぼ〳〵どのあたりを歩いて歸りつゝあるだらう。私もそこらの家筋や、あちらの濱邊を見收めに、をばさんに會ふまでてく〳〵出て行つて見やうか。

かう思ひつゝ、尚少らくそこに佇んで、海の色を見つめてゐた。

さういふ間にも、私はいろ〳〵と取りとめもない考を辿つてゐるのであつた。私の心の底には、さつきからこゝを立つて出たあとに思ひ返されるちいさんの面影が――あの赤い布て髮を束ねた、睫の長い

面影が、黄楊の小櫛の歌の中なる女のやうに、物哀れになつかしく浮んでゐる。此やうな心持を戀といふのではあるまいか。私はちいさんを戀ひてゐるのではあるまいか。

十月の間、互に隔てもなく、たゞ年下の素直な女として何とはなく好いてゐたといふより外に此女に向つてこれとて異性に對する心のどよめきも感じなかつたのに、もうこれて別れるからなのか、何だか、いつもにはなくいらだゝしく、もどかしいやうな思ひが引かれる。

さつきは女が私の心を解してゐてはくれないかのやうに、恨みがましくも思つたりしたけれど、あの女には何とてそのやうな裏と表とがあらう。一寸の間あゝして二人て顔を合せてゐれば分るやうに、素直な心にわたしを守つてゐてくれるのである。あの女が長い間同じやさしい心てわたしにつくしてくれてゐたあれこれを考へ返せば、譯もなくたゞいぢらしいやうな濟まないやうな心持がする。

あの女は今もし私がお前を戀するといつたら何といふだらうか。女はさめざめと涙を流して、默つて私が手を取るまゝに、私の膝に腑つ伏すてあらうか。

私はやつぱり何だか、このまゝには別れたくない。私はお前を戀してゐる。私はいつまでもわが淸く戀ひる女としてお前を忘れないといふ事を、一こと言つて別れたい。私があの女を思ひ浮べて戀ひる日には、あの女も、此はるかな海の果てゞ私の事を思つてゐてくれると考へ得るやうに、あの女にかうした私の心持をしみじみと話して置きたい。私は自分の女と別れて行くのだといふ甘いうら悲しい心持て、この十月ゐなれたところを立つのてなければ、――たゞ來てゐたものが立つて行くといふばかりの意味

てゝを立つのでは物足りない。

私は此やうな事を考へつゝ、もとの方へ出て、恰もかうした小暗いたそがれを、戀の女を求め寄つて窃かに彳む戸口のやうに、格子戸の外の夕闇に立つて丁度私を探してこゝへ出て來るかもわからぬちいさんの足音を待つた。

けれども、それは私が自分一人で思ふ事である。家の中にはまだ灯もつけないで、何をちいさんはあちらでこそ〳〵してゐるのであらう。中には人の氣色もないやうにひつそりしてゐる。

私は一人そのやうな事を思ひつゞける私自身を嘲るやうな心持になつた。

何といふ寂しく暮れる今宵であらう。私は何だかいつまでもこゝを立ちたくない。立つたあとは、またこれまでのやうな、かうした譯もなく一人寂しい毎日が續くであらう。

「私は弱いのだ。意志が弱いのだ。」

かう思ひつゝ、何だか家へ這入るのがきまりがわるいやうに、そのまゝそこに立つてゐた。うちへ這入れば、ちいさんが、私が今考へてゐた事を見拔きてもしやしまいかといふ氣がして極りが惡い。

さうしてゐると、門の外の橙の畠の先きの小路に、鈴の音がして、荷馬が一匹とろ〳〵下りを下りて行く。見ると馬の背中には、いづれも黑ずんだやうな家財道具を積んでゐる。まだあとにも鈴の音が續いてゐる。

「また立ち退きの人たちが行く。」

私はかう思ひつゝ、橙の畠の方へ出て行つてそれらの人々の通るのを立つて見た。

それは、こゝから何里も北の方の山村の人たちが家財を疊んで、山を越えて下りて來て、こゝから海ばたを三四里行つたところにある開墾地へ移住して行くのである。一生、人の小作人となつて、食ふや食はずに生きてゐる貧しい人々が、野原を切り開いて自分のための土地を得べく、あゝして、乏しいありたけの物を馬に積んで、ぽつ〳〵と出て來るのである。此前にも此やうなのが一組二組通つて行つた。よくさういふのが此村で行き暮れて、此家の門口の物置きを借りて夜を明して、また立つて行つたりしたさうである。

今先に行つた一匹の馬の後から、よぼ〳〵したぼろ〳〵の山袴をはいた爺さんが、何かの這入つた袋を背中に負ぶつて疲れ切つたやうに歩いて行く。

と次にまた一匹の馬が來た。先に立つて引いて行くのが、その一家の父親らしい。鬚や髮のもぢや〳〵に延びた貧しい山人である。背中に手拭で頰冠りをさせて、赤ん坊を負ぶつてゐる。馬には、鍬や、馬の引く鋤や、さういふいろんな古けた畑の道具や運び得られるだけのすべての見すぼらしい家具が、ごちや〳〵と繩で紮げて積まれてゐる。ぼろ〳〵になつた、煤けた障子のやうなものも一二枚上に乘つてゐる。繩の網の袋に黑い鷄が二匹荷附けられたのが、赤い頭を出してきよと〳〵してゐる。馬の後ろからは、ぼろ着物を着た女が、十ばかりの男の子の手を引いて、十三四の汚い憐れな女の子とあと先になつて附いて行く。子供も母もみんな山袴の裾を土塵埃で眞つ白にして、疲れた足を痛さうに引きづつてゐ

る。此邊のものは、かういふ移住者を、立退のものたちと呼んでゐる。もう日が昏れたのにどこで今夜は寢るのであらう。何だか敗亡そのものを形にして見るやうに、慘目な心持がする。あちらへ移つて石の多い草地を開くのだから、當分五六年の間は芋位しか出來はしないのださうである。彼等はさういふ野原の處々に水の出るところを擇んで井戸を掘り、古木や竹で小屋がけをして哀れな生活をするのだといふ。

私はそれ等の人たちが通つた後から、一人とぼ〳〵と漁師の家の方へ下りて行つて見た。さつきの馬はいづれも右手の方へ曲つて、低ひ藁屋の續く間を、鈴の音を立てゝ行く。私は彼等の影が見えなくなるまで往來の角に立つてゐた。

そこの角の小店には、いろ〳〵のものが下つてゐる中に、昨日今日仕入の荷に交じつて着いたらしい奴凧や、紫色で白字を拔いた安い四角な凧が僅ばかり下つてゐる。私は此乏しい小賣店で、下駄や紙や、こゝに得られるだけの日用品を買つてゐたのであつた。いつもそこの戸棚の蔭で網をすいてゐる聾の親爺さんは今は奥へ引込んでゐて店にはだれもゐない。まだ灯もつけないでゐる。店先に洋燈のホヤや燐寸などの並んでゐるのが淋しい色にたそがれてゐる。低い屋根の上に生へた草は、もうから〳〵に枯れ朽ちて、淋しく黑くなつてゐる。

私はこゝを立つて行つたら、此店先の印象も、ぢいさんの家にゐた間のすべての事を思ひ返す序には必ず私の思ひ出に浮ぶだらうと思ひつゝ、そこらの小家の續きを見た。私の目に入る何物も、もうやが

てはたゞ記憶の中のものになるのだと思ふと、いつもは何の意味もなく見てゐたものも、何だか此夕方は一つ〳〵私の最後の心持の中に彫まれるやうな氣がする。

戸口の雨落溝に、貝の食殼などの捨てられた、がた〳〵した板戸などが半分下ろされて、ぼろ〳〵の小供の着物がかゝつてゐたりする、此等の低き藁家の灰色の續きよ。私はかうした淋しいところに十月もとゞまつてゐたのである。

小さな欠け徳利に繩をつけて、石油を買ひに行つたらしい子供の、ちやん〳〵を着て、素足に赤緒草履を履いたのが、かうして悄んぼりと、往來に立つてゐる私を、不思議さうに見て通る。

私はその子の後ろから、おばさんの歸つて來る方角へ向けて、あてもなく歩いた。兩側の家には、ぽつ〳〵、油烟の立つカンテラの灯をともしたのが見られる。

私はこの家つゞきの詰頭まで行かぬ内に、うちのをばさんが、黑い着物に十字架をかけた女たちの一人二人と伴らつて歸つて來るのに出會ひさうな氣がした。何だかをばさんの歸らない間に、ちいさんに何事をか言つて置きたいやうな心持がする。ちいさんは私が今何を思ひつゝ、どこをぶらついてゐると思つてゐるだらう。

もう自分で自分の手も薄ぐらい迄に夕方もいよ〳〵黑ずんで了つた。この邊で引き返して歸らうか知ら。

かう思ひつゝ私はそこの濱へ出る小路の入口のところに立つて、すぐその石がけにぴた〳〵と騷いで

ゐる波の音を耳にしつゝ佇んだ。漁師の家のはづれに見える黒ずんだ海に、小さい漁船が五六艘、人もなく繋がれてある。あそこの家の前には、夏ごろ、澤山の月夜草が咲いてゐた。浴衣に青く月のさす盆の宵には、あそこの砂濱で踊りがあつて、この入口は人通りがならぬ程に込み合つてゐた。その中に赤い行燈を出した甘酒屋や、西瓜の店が並んだ。私はカンテラのかゞりの立つ店臺に肉桂を買つて家へ歸つて、それをしやぶりながら、表の間で蚊やりをしつゝ、いつまでも踊りのはづむらしい太鼓の音を聞いて、ちいさんと二人で留守番をしてゐた事が思ひ出される。ちいさんは夏痩せをして、力なげな肩のあたりに、髮のほつれを掻き上げつゝ私のそばに坐つて團扇を使つた。その時の、あの雨の糸のやうな紫の筋のついた縮みの浴衣に結んだ帯の下の、赤い小帯の色も目に殘つてゐる。——

私はまたいつしか、それからそれへと、過ぎた日の記憶を辿つて、黒い海の色を見て佇んだ。

と、

「あれ、こんなところにゐやした。」とおとしがやつて來た。

「早くお歸りなさんし。お主婦さまは、もう疾つくに歸つておゐなんすい。」といふ。

「さうかい？ぢやあつちの舊道から歸つたのだんだな。」

「どうしてござんしたか。——あなたは何をしてゐなしたのこゝて。」

「向ふを見てゐたんさ。」

「ふゝゝ、こんなところに悄(しょん)ぼりして。」

「己を探しに來たのかい。」

「えゝ、それから一寸そこまでお使ひに。」といひつゝおとしは急がしさうにあちらへ行く。

私はもとの方へ引き返した。もうおばさんが歸つてゐては私はちいさんに何んにも言ふ事は出來ないやうな氣がする。私はやつぱりとうとうこれなりで立つて行くのだ。何だか私かに言ひたいことがあるやうな氣がするのに。

私はもの惜しいやうな心持をして、さつき來た通りに、家の前へとぼ〳〵歸つた。

門の外の橙の畠は、いつしか薄淡い月夜となつてゐる。何十本となく列をなしてゐる橙は、最早いづれも半色づいてゐる。その畠の中へ入ると繁つた葉の匂ひがなつかしい。私は葉の敷かれた、畠の間の、道でもないところをとぼ〳〵と通つて、實つてゐる橙を摘まんで見たりしつゝ門の方へ這入らうとした。

と、ちいさんがそこに立つてゐる。

「まあこんなところにゐなすのぢやけ別らない筈ですわ。」と待つてゐたやうにいふのであつた。

「まあ久しぶりのお月夜ですぞのい。」とぶら〳〵と二た足三足私の方へ近づいて來る。

「もう御飯でしやう？」と私はたゞのやうにかう言つたが、胸にはそは〳〵しい戀の思ひがもう堅へ切れないやうに湧き立つた、二人が互に側へ近づいた時、

「ちいさん」と私は、自分で自分のいつてゐる事を知らぬやうに、かう言ひかけた。

ちいさんは上目に私の顔を見上げるやうにしてゐたが、私がさういふと目元を反して、

「あなたどうしても明日はお立ちなさるのですの」と言いつゝ、橙の葉を弄くりつゝ、物悲しさうにいふのである。

私は女がそれから何をいふかを見計らはうとするやうに、默つて、淡く地上に寫つた女の影を見てゐたが、女はいつしか、袂を顏にあてゝ、橙の木にすがり寄るやうに、そちらを向いて、しく〳〵と泣いてゐた。

「女は私のものだ。」

かういふ思ひが閃くと共に、私は燃え立つやうに女の肩に手をかけた。

「泣くなよちいさん。――私はこゝを出たつて、どうしてもまたちいさんを見に來るよ。ちいさんはいつまでも此心持が變りはしないだらうね。――さ。口をお貸しよ。――しばらくこれて會はれんのぞい。」

女の涙は私の頰に傳はつた。二人はじつと一つになつて立つてゐた。――

「だれかそこにゐるやうぢやないか。」と私は手を放した。

「だれも來やしません。――あれは立ち退きの衆。」

「物置を貸してやつたのか。」

「今あそこへ馬をつないて、荷物を下ろしかけてゐるのですの。」

さつき通つたやうな移住者の一團てある。人の近づく氣色がする。

「ぢや、醬油だけぞのい。」
とこんなことをいひつゝ、その中の女が何か買ひに行くやうに下りて來る。ちいさんは、橙の木の茂みに這入つた。
「焚火をしてゐら。――もう今の女は通つて行つたからお出よ。――あちらへ歸らう。見られてはいけない。」
私はかう言つて熱ぽつたい心持にしかと女の手を取つた。(終)

二月號豫告

圓熟期に於ける杜翁の藝術……………中澤臨川

『女八人』その一　板新道の一隅……………松崎天民

長編小說　沈默……………島崎藤村

小說　暗夜……………小川未明

頁數預定より超過せる爲め、本號に掲載する能はざりし右四篇の大作は、新たに精選せられたる幾多興味ある讀物と共に二月號の誌上にあらはるべし。

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

中央公論第二十八年第二號